

この素晴らしい浮世で刃金を振るう

足洗

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

なんか侍っぽい喋り方するやや記憶喪失気味のおっさん（外見年齢17歳）がまるで駄目な女神と爆裂狂いとDMの変態を連れた哀れな少年（ゲス、鬼畜、パンツ・ステイラー）と関わったり他人のふりしたり時々人情味に絆されたりしながら、この素晴らしい浮世で再生する。そんなお話。

九度目の転生へてんしょう。終わらない命。名はシノギ・ジン九口ウ。生きること疲れた亡霊のような男。

男はある時、騒がしい、騒がし過ぎる四人と出会った。そのクソ喧しい出会いが——少しだけ、男を変えた。

目次

1話	あんた優しい娘だねえ	1
2話	おめえさん運が悪かったのよ	7
3話	まったくもって造作を掛ける	13
4話	酒は飲んでも	22
5話	仕事は選ばず。なれど	32
6話	待ち焦がれた出会いとはまさにこの事	40
7話	地獄の沙汰もなんとやら	50
8話	一太刀馳走	62
9話	捨て猫のようなもんだ	74
10話	傾いた娘つ子だなあおい	85
11話	宜しくしてやってくれ	96
12話	ああ上出来だ	105
13話	小童め	117
14話	優しい娘の知り合いによく似ておるのさ	132
15話	いつもの管巻き	141
16話	めぐ坊は見んでいい	151
17話	野菜が城を落とす時代か	162
18話	女の甲斐性つてもんだ	176
19話	通しておらん筋がある	184
20話	理に合わぬ	196
21話	その知恵に期待している	204
22話	我が「いくさ」	220
23話	そして彼の「いくさ」	232
24話	袖振り合うも他生の縁	248

25話	酒飲みやどうにかなるもんさ	260
26話	命あつての物種だわさ	271
27話	人聞きの悪い話	279
28話	傾奇な娘に合縁奇縁	286
29話	魂老いても未熟を知る。それは果たして幸か不幸か	292
30話	首無しのモノノフ	317
31話	所詮、刃金狂い	330
32話	武人落伍	356
33話	殺人刀	363
34話	青い鳥の行方とは得てして	379
35話	千客万来。馬は帰れ	390
36話	おいでませ化物屋敷	400
37話	冬の夜長	411
38話	償い	419
39話	久方の管巻きと相成りて	429
40話	太刀打ち仕るは冬の猛将	438
41話	独り身の気儘な侘びの住まいよ……ん?	454
42話	独り住まいがなんだって?	460
43話	短え独り身だったな	466
44話	看板裏から熱い視線が突き刺さる	476
45話	冬の子と夏の子ら	486
46話	嘘も方便と申しますれば	494
47話	女神も十色	501
48話	教えることが山とある	509
49話	娘のご機嫌取りも楽じゃあない	515

50話	ふりいたあ家を買った	529
51話	幽霊屋敷にて	538
52話	悪意は頓に臭い立つ	555
53話	化けの皮の厚化粧	565
54話	人の情事、サキュバスの事情	575
55話	命懸けの気組	586
56話	抜き打ちの	595
57話	間の悪い娘よな	612
58話	穏やかな晴れの日	619
59話	悪魔の囁き	627
60話	鋼の蜘蛛	634
61話	裏切り	641
62話	引き摺ってでも	648
63話	怪物退治、一騎	655
64話	牙城を落とせ	662
65話	落城	670
66話	子の心知らぬ愚か者	679
67話	戦を終えて、それが蠢動する	687

1話 あんた優しい娘だねえ

これは夢か。

臆げな意識と視界の中、そんなことを思う。

「いいえ」

柔らかな声が己の考えを否定した。鈴を転がすかのような美しい音ねであった。

そしてそれを発した者もまた、大層美しい容かたちをしていた。

「はじめまして、そしてお悔やみを。貴方の生涯は先程終わりを迎えました」

穏やかに、その美しい娘は言った。白銀糸の髪、黒い頭巾に白い袴(?)ともかくも見慣れぬ洋装の少女。ふと、南蛮の宣教師が似たような格好をしていたことを思い出した。

そこまで考え、堪らず苦笑が漏れる。『南蛮』という言葉の響き。その時代錯誤な感に。

こちらの奇態を見て取って、対面する娘が戸惑うのが分かった。

「いや、こりやあすまん。くっく、思い出し笑いというやつだ」

「は、はあ」

「それでえ、ああ、続きをよろしいか。己の生涯が終わったと?」

「あ、はいー」

水を向けるや、娘は慌てて手元の紙束を捲り始めた。

ふと見れば奇妙な空間である。

石か鉄かも知れん材質の床は見渡す限り市松模様。白と黒の色を目で追っていくと、程なく霞の中へ消えている。周囲を覆う霞み。天上までも隠す黒い靄。だというのに己と少女の佇む空間だけがぽっかりと明るい。光源らしきものも見当たらずに。不可思議である。

「あれ? あ、ごめんなさい。ちょっとお待ちください」

「おう、いいとも」

小首を傾げる様子がなんとも愛らしい。じろじろと眺めるのも不躰であろうが、それほどに娘の美貌は常軌を逸している。

まるでそう、人ではないかのようだ。

「な、無い!? この辺? ああ戻り過ぎちゃった……つてやっぱり無い!? でもそんな……誕生と死は例外なくコードに書き記される筈なのになんで……!?」

「ん?」

娘は慌てふためいた様子から一変なにやら思い悩んでおる。言葉の意味は理解できないが不都合が生じたのだろうことは察しが付いた。

「己の処遇に、なんぞ宜しからぬことでもありましたかな?」

「………はい、すみません。どうやらそのようでした。本来であれば、死した人の生涯の軌跡が記録として発行される筈なのですが……」

「なるほど、どうしてか手前のそれが今は見付からぬと」

「うう、そうなんです……」

心底肩身を縮めて少女は肯いた。

「ははは! そうお気を落とされるな。ま、そんなことも時折はありましようや」

「い、いいえ! あつてはならないことです! 死者の魂を導くという使命を帯びた私達は」

「ほう、魂を。とするとお前さん、神様かい」

「あ、はい。その通りです。そういうえば自己紹介がまだでしたね。私の名はエリス。この世界の神の座を戴く者です……その、自分で言うておいてなんですが、驚かれないんですか?」

不思議そうにその大きな目を丸めて、エリスという娘はこちらを見た。

「なあに。無駄に長く生きておると、氣勢の移り変わりが鈍うなってくるもんさ。それよりも今は、あんたのような別嬪と差し向かいでいることに舞い上がってなあ。驚いてる余裕がないだけよ。はははは!」

「まあ」

口元を手で隠し、エリスは実に上品に笑う。

己の方も一頻り笑った後、どつかりとその場に腰を下ろした。

「さて、己はこれからどう処されるのかな」

「そう、ですね……」

頬に指を触れながら少女が思索する。

「死後の処遇。特にこれは常道、正規のルートの話になりますが。一つは『天国へ送る』こと」

「ほほう、天国。実在するのかい」

「といつても、おそらく人間の方々が想像しているような楽園ではないかもしれませんが。穏やかで静かな時を永遠に近く送ることができる。そこには争いも、苦しみもありません……退屈だと仰る方も少なくありませんが」

「かには、そうさな。楽隠居には違えねえが」

死んでもなお娯楽を欲するは人の業であろう。

「もう一つは『赤子から人生をやりなおす』こと。その世界で今一度別人として生まれ変わるのです」

「輪廻の道を踏むか」

「そういった概念も存じています。けれどももう少し、即物的かもしれない」

「それはまた可笑しな」

死んで生まれ変わることが即物的か。

「しかし、どうにも己はそのどちらにも適さんようだ」

「ええ……死者の魂は神の許へ誘われ、その人物に見合った逝く末を与えられる。それは真理であり、機構なのです。ですから神がその出自を知らぬ靈魂などある筈が……ああ！ すみません！ 貴方の存在を否定している訳では」

「かまやしねえよ。なるほどなあ。そりゃ扱いに困る訳だ」

「……貴方は一体どこからいらしたのですか？」

会話は多少の回り道を経て要に着地した。問題はその一点に尽きよう。己はどこの誰なのだ、と。

「神妙な顔つきで返答を待つ娘に、心中申し訳なく思う。」

「俺にもわからねえ」

「ええ!？」

「ははは」

あまりに素直なその反応に思わず笑声が出る。

「すまねえなあ。どうにも薄ぼんやりしててよ。ここへ来る前の出来事がとんと思いいせねえ」

「どこに住まわれていたとか、ご家族は」

「さてねえ。いたような、いなかったような」

「どうして、死んでしまわれたかを、覚えておられませんか……？」

殊更遠慮がちにエリスは問いを重ねた。それが途方も無く残酷な問いであるかのように。

心根の優しい娘だ。

「そりゃあ、分かりきった話だあな」

「え」

「刃金を振り回すしか能がねえ、そんな男の末路は、たったの一つよ」
不遜な笑みを口の端に浮かべ、煌く女神を仰ぎ見る。

「それは、どうして」

「いや分かん。だが妙に信じられる。己はおそらくそんな切った張ったの末、どこぞで野垂れ死んだのだろう」

誰かの恨みを買ったやもしれん。あるいは利を得んが為、始末されただけか。

天寿を全うしたなどと欠片も思えはしない。そういうどうしようもない畜生輩であったのだろう。

——ただ一つ、刃金を握る感触だけは確りとこの手に残っていた。

「……私には、そうは思えません」

「おいおい、女神様ともあろう方が所感でものを言っちゃあいけねえ。俺の言えた義理じゃねえが」

「ですが私には、貴方はとても優しい方のように感じます。多くの人間と見え、言葉を交えてきた女神たる私の所感です。そう的外れではないと思いますよっ。」

「……確かに、この上なく霊験あらたかだな」

他ならぬ神が言うのだから。

ぱん、とエリスは両手を打った。

「決めました。貴方を私の管轄世界にお送りします」

「あん？ いいのかい」

「本当はあまり……しかし故郷に帰れない彷徨える魂に道を示すもまた神の使命。天界規定特例第七項を適用し、貴方を我が世界へ転生させます。転移、といった方が近いですが」

微笑を湛えて女神は頷く。それは慈悲か愛か。なんにせよお節介なこと。

「優しい娘だなあ、あんた」

「ふふふ、こんな外見でも貴方より長く生きていますよ」

「さて、どうかな」

肩を竦めれば曖昧な笑みが浮かぶ。

エリスはそれを軽口のご続きとでも受け取ったようだ。微笑を返すと、娘はすぐに表情を引き締める。

「その世界は、正直に申しまして平穩無事という訳ではありません。人々は今、魔王と呼ばれる脅威と戦いながら生きています」

「ほっ、魔王たあ大仰だな」

「大袈裟ではなく事実なんです……それに日々の糧を得る為には人里の外に生息するモンスター、危険な生物を相手取らなければいけません」

「つまり否が応にも頼むは」

「はい。剣を、魔法を、武力を以て」

「己にはまさにお誂えだ」

愉快な心地だった。

しかし対する少女の目はひどく悲しげだった。

「……ごめんなさい」

「へへ、なんだい藪から棒に」

「他の、もっと安全な世界に送って差し上げられれば」

「言つたらう。一刀を頼みにしか生きて行けぬ、己はそういう阿呆よ。おめえさんの申し出を聞いてむしろ喜んじまってるくらいだ。何も

気にすることあねえよお」

複雑なものがその顔かんはせを彩った。そうして両の手を握り合わせ、女神は憂いと共に祈りを捧げる。

「どうか、貴方のこれよりの生に幸多からん事を願っております」

「ありがとうございます」

礼を聞き終えるや、エリスは指を鳴らす。

途端、己の足下には幾何学の模様が蠢く円陣が現れた。発散される光が柱となり己を取り囲む。

「おお、そうだそうだ。忘れるところであつた」

「はいっ。」

光が肉体に触れる度、己というものの実在が怪しくなっていく。この場より消え去る前に返礼をせねばなるまい。

「ご都合だがなあ。どうも俺あ自分の名だけは憶えていたらしい」

「！ では」

「ああ……シノギ・ジンクロウ。それが俺の名だ。多分な！」

これほど薄ぼんやりとした自己紹介も嘗てなからう。意味があつたかも怪しげであつたが。

少女の華やぐような笑顔。それを拝めただけでも価値はあつたのやもしれない。

「ジンクロウさん、またいつか——」

2話 おめえさん運が悪かったのよ

青みを帯びた臭いが鼻を突く。

気が付けば深緑に我が身は取り囲まれていた。鬱蒼とした森の只中、風が吹き抜け枝葉を揺らす。紙を擦る様な音色を聞きながら息を吸えば、己が生きているという事実に疑いようもない。

「ううむ、これは困った」

草を踏みながらゆうつくりと歩を進める。歩くという行為さえどこか懐かしさを覚える自身に呆れ笑う。

せせらぎの音。林が拓けたかと思えば、そこには小川が横たわっている。陽光に煌く流水は透き通り、ひどく清い。

片手で掬い、僅かに口に含む。

「うん、うめえ」

外観と相違なく、水は飲料として何一つ問題のない質であった。

喉を潤すこと暫し、起き抜けのように薄ぼやけていた頭が覚醒していく。

同時に、先程から浮上している現状の問題に向き直る心の準備のようなものも整った。

「かはは、ここは何処かねえ。エリス嬢よ、できれば人里の見える場所にでも送ってもらいたかったんだがなあ」

存外に慌てん坊なのか、人目に付かぬ場所をあえて選んでのことか。いずれにせよ贅沢な物言いだろう。生き返らせてもらっておいでこれ以上何を望むという。

森を抜ければ行き先もあるろう。川沿いに下流へ進路を取った。

革靴が草を踏む。枝を手摺に道とも言えぬ道をどうにか歩む。

しかし、己はいつから革靴など履いていたか。身形もそうだ。綿の袴……ではなくズボンに白い開襟シャツ。洋装を纏う自身に違和感を催す。

「山歩きには無用心この上ねえな………あ?」

独り言にも拍車が掛かり始めた頃、感じ取るものがあつた。

心配。

音が、臭いか、雑多な情報から組み上がる洞察、予測。勘働きではなくそういつた「感」が何かを捉えた。

足音を殺す術は心得がある。草に乗りながらそそと気配を発する元へ近寄った。

視界を阻む枝葉を退けた先には大樹が鎮座していた。一際太く、長く、見事な枝ぶりで空を隠す。

気配の主はその大樹の根元にいた。濃茶色の髪を一房に結び、青い外套を羽織った女。しかし面立ちを見るに随分と年若い。

娘はまるで木陰に身を隠すかのように縮こまり、忙しなく周囲を見回している。

「ひっ!?!」

「ああ、すまんすまん。驚かせたな」

己自身殺していた気配を隠さず草叢から這い出ると娘は見るからに怯え竦んだが、こちらの姿を認め僅かに安堵したようだ。

思い違いではないらしい。娘の有様は正しく追われる者のそれ。

「あ、あなたは……」

「うん? おめえさん怪我してんのかい」

見れば娘は足から血を流している。ここまで寄ればなるほど、鼻は血の香を嗅いだ。

「すまねえなあ、着の身着のままだよ。手当てできるようなもんがねえんだ。立てるか? 近くに街はねえか。己でよけりやあ送ってって」

「ダメ! 今この近くには初心者殺しが——危ない!!」

背後。至近。

やや下方から。

軸足を組み変える。反転。

回転運動、遠心、中段へ蹴り足を——放つ。

「!」

「ギャオツ!?!」

足甲は過たずソレの左頬を蹴り抜いた。重い足応え。しかし、不十分。

ソレは怯み、痛がる素振りを見せはしたが、その殺気に何程の衰えもない。

黒い。滑らかな黒い短毛が全身を覆っている。獣。猫科の特色を窺える。似た何か。

四つ脚。太く強靱。ぎちぎちと極限に圧縮された発条パネのようだ。

上顎から二本の牙が突き出ている。尋常な大きさではない。その刃渡り、短刀ほどもあろうか。

「なあるほど、こいつが」

異形もんすたー。エリス嬢の言う危険な生き物。

大いに納得である。野生の獣が、ここまで禍々しく殺意を剥き出すなどありえん。

「あつ……ああ……」

「おめえさんの傷はこいつにやられた訳だな」

爪か、牙か。いずれも人間一個を殺すに全く不足は無い。

その意味で、背後の娘は運が良い。一撃の下に食い殺されることなく、ここまでこうして逃げ果せたのだから。

「リーン!!」

不意に声上がる。一瞥すれば、林の向こうから青年が駆け寄ってきた。一人、二人、三人。弓を背負った者、大剣を背負った者、小剣を佩いた者。

彼らは娘の仲間であるらしい。この窮地に救援が来るとは。

「うむ、つくづく強運」

胸中で感心などしておると、眼前で黒い獣が瞬発した。猫科の動物の敏捷性は語るに及ばぬ。油断など、元より在り得ぬこと。

獣は左斜めに進むや跳ねるゴム鞠のように一瞬で間合を詰めてきた。た。

上段。ひり出た鋭利な爪が振り下ろされる。

しかし、既にこちらも前進している。獣の爪による斬撃、もはやその最適距離ではない。近過ぎる。

我が方は無手。つまりここは、己の間合。

腹と肋骨の合間へ掌底を叩き込んだ。対する獣の突撃力、それを正

面から利する。なればその威力たるや。

「ギイイイ?!」

「なかなか骨身に応えよう?」

再度、獣を退ける。七尺余りある黒い巨体が飛び、草叢に沈んだ。

手応え、良し。

「うっそだろ」

「す、素手であの、初心者殺しを……!」

「なにしてやがる。早う逃げんか」

彼らは未だ後ろに居座って何やらぶつくさくつ喋っている。

「その娘の傷も浅くはあるまい。直近の街か、あく集落か、あるのか」

「え、あ、ああ。アクセルの街が一番近いけど」

「そんならさつさと連れて行け。あれの脚から逃げ切るは至難ぞ」

「いや、でも今、あいつはあんたが」

「ギヤアオ!!」

金髪の男が言い終わるを待たず、草叢から黒い影が飛び出してくる。

跳び退り、牙を躲す。

「ひいひいひい!」

「まだ生きてる!?!」

「当たりめえだ。分かったら腰上げろ。娘っ子一人守る為にこうして戻って来たのだろうが」

金髪男は悲鳴を上げて転んだ。弓手の男は急いで弓を首に掛け、立ち上がれぬ娘を背負う。

「ま、待って! あなたは!?!」

「心配無用。おめえらが行った後、早々にケツ捲くらあ。だからさつさと逃げねえか」

ひらひらと手で追い払う仕草を見せて、ようやく彼らは動き出した。

「おい! これっ、これ使え!」

「あん?」

放られた何か風を切ってこちらへ飛んでくる。はっしと掴んで

みれば、それは鞘に納まった小剣であった。

「かはつ、こりやありがてえ」

「てめえ絶対死ぬなよ！ この借りは必ず返すからな！ 絶対だぞ！」

「ははは！ 肝に命じよう」

足音が遠ざかっていく。人一人を背負った上、複数人での行軍。稼ぐ時は多いに越したことはなからう。

「しっかし、おめえさん随分と賢いな」

「グルルルルウウ……！」

獣はこちらを睨み付けながら、しかし間合を取ってゆっくりとこちらの周囲を旋回する。

二度に亘って防がれた奇襲。獲物たる人間が、思った以上に厄介であるのだとこいつは理解したのだ。

「あの娘に手傷を負わせながら止めを刺さず放置したのは、他の仲間が助けに来ることを見越したからか」

そうして雁首揃えたところを一人ずつ掻き獲ってゆく。

「狡猾とは正にこのことだなあ、ええ？ だが、おめえはあの娘の強運に負けた」

剣を鞘から抜き放つ。諸刃。刃渡りは二尺弱。鏢も小振り。それ故取り回すも容易でありなかなか悪くない。

同時に、その意匠が己の慣れ親しむものではないのだと気付く。ああ、異文化の地へ来たのだな。

こんな刃金ものを握ってそんな実感を抱くのだから、己はつくづく救いようがない。

切先を獣へ差し向ける。

「……」

「ツツツ!!」

声ならぬ威嚇の氣息。次こそは殺す、その意志を固め吐き出したかのような。

口端が歪む。

「来い」

「シィィアアアツツツ!!」

真つ直ぐ突っ込んでくる。像が霞むほどの速度。

獣が躍り掛かる。

二振りの牙が今度こそ己という肉を食む為、突き下ろされた。

遅い。

対手がどれほどに速かろうと、こちらの方が早い。既に、刃圈だ。

ぎん、硬い手応えが刃から柄へ浸透する。二本牙の一本を断った。

「ギャン!?!」

「仕舞いだ」

返す刀、踏み込んだ右脚を軸に、横合いを過ぎ去った黒い巨体を追撃する。

左脚を踏み込む。全体重を余さず込めた運剣の行く先。

後ろ首から。

両断した。

水気を帯びた肉塊が草地に落ちる。物言わぬ骸を一つ創った。勢い、首を失った身体が地に転がる。

風が草を撫で、骸を洗った。

「…………ん」

ふと見れば、地面に白い棒切れが刺さっている。

引き抜いてみると片手に余るほどの長さ。硬く鋭すぎる牙。迂闊に触れば容易く皮膚を裂くだろう。

「見事なもんだ。首級しゅきゅうに一本貰ってくぜ。化猫殿よ」

刃先を上に向け尻の衣ボケットに仕舞いこみ、骸を後にする。

差し当たり、彼女らが逃げ去った方角に歩けばいつか街にも辿り着こう。日が暮れるまでにそうなれば御の字。でなくとも構わぬ。

「急ぐ道行きでもなし。拾いものの余生ってやつあ、なんとも気楽なもんだ」

3話 まったくもって造作を掛ける

巨大な外壁だった。

煉瓦造りの、高さ三間にも届こうか。それが街の外縁をぐるりと余さず囲んでいる。異形に対する防御の為であろうが、それはもはや壯観を越して過剰にも思える。

いや、これほどの防備でなくば対抗できぬ魔王なる存在こそ驚嘆すべきか。

何はともあれ己は無事森を抜け山を越え、アクセルなる街に辿り着くことができた。

入り口と思しき門は行商の馬車、旅装束の集団等が列を作っている。関所のようなものだろう。

大した時間も掛からず行列は捌け、己もさっさと做うことにした。守衛なのだろう数人、皆鈍い鉄色の甲冑を着込んでいる。やはり馴染みの薄い意匠であった。

「うん？ あんた随分と軽装だね」

己の身形を見るや羽筆を握った兵士が怪訝そうに言った。まともな装備と言えば、腰に括った小剣が一振り。仰る通り、反論の余地もない。

「いやあなに、道中で物盗りに遭ってな。有り金から手荷物から綺麗えに持っていかれちゃったのよ」

「ははは、そりゃあ気の毒に」

「よくここまで無事に来られたな。街の周辺はともかく、山林はモンスターも出ただろう」

「そこはほれ、我が自慢の逃げ足が最高の働きを見せてくれたお陰よ」
ぱちりと己の足を叩いて見せると、兵士達は揃って笑声を上げた。

軽口もそこそこに、兵士は何やら手元の紙に書き込んだ。

「男一人入街だ。開門頼む！」

「通行料みてえなのは取らねえのかい」

「ああないない。前線近い王都ならともかくこんな駆け出しの街じゃね。人相と数を記録するだけだよ」

あつけらかんと兵士は手を振った。重厚な守護を謳っているのか
と思いきやなんとも気安い警備である。身元の確認すらせんとは。
いや、身元どころか記憶すらあやふやな己にすれば好都合この上ない
が。

門を潜ると背後から声が掛かった。

「ギルドは街の中心にある！ 目抜き通りを歩いていけば道にも迷わ
ないよー！」

「ぎるど？」

「ああ、あんた冒険者になりに来たんだろ？」

「……かははは！ おう、そうとも。ありがとうよ！」

親切な兵士に手を上げて応え、門を後にする。

さてはて、冒険者とはなんぞや。

様々な商店や飯店は勿論、広場では多くの露天商によって市場いちが開
かれている。

街中を流れる川の畔で子供らが水遊びをしていた。釣り糸を川面
に垂らした老人はそのまま船を漕いでいる。

「平和なこった」

兵士に緊張感がないのも頷ける。結構なことだ。

賑やかな通りの景色を楽しみながら悠々歩を進めていると、程なく
目的地と思しき建物が見えた。

冒険者ギルド。表札の文字は、何故かそのように読めてしまった。

一度として目にした事のない文字である。しかし読める。意味も
理解できる。不可思議である。

「まあいいか」

不可思議など今更。この場に己が立って存在することの方がおか
しいのだから。

あるいはこれもエリス嬢の計らいなのやもしれぬ。

両開きの大扉を開く。昼間ということもあり灯りは点っておらず、やや薄暗い。窓からの陽光が一際強く感じられた。

入り口の両隣には巨大な騎士甲冑の彫像が置かれ、入り込んだ者を歓迎、ないし威圧した。

「いらつしやーい！ お食事は空いているお席にどうぞー！ お仕事の案内は奥のカウンターへー！」

扉を潜った己を見付け、女給が大量の酒杯を両手に抱えながら言った。

食堂、酒場であろうか。真昼間だというのに其処彼処の席で多くの者が飲んだくれている。しかし、この活気は嫌いではない。昼酒のなんとも言えぬその旨さもまたよおく解る。

「かははは」

酒宴に興じる道楽者共を羨みつつ、まず先に冒険者とやらについて知るとしよう。

石床を蹴って進めば程なく受付と思しきものが見えてきた。硝子を取り払った窓枠のような番台の奥に勤め人が座っている。

丁度人の捌けた場所へ足を向けた。出迎えたのは、金糸の髪を緩く巻いた妙齡の女である。その女の装束がこれまた、肩から胸元まで露になった妙ちきなもので。まるで着物を着崩した女郎である。

女はその端正な顔に愛想の良い笑みを浮かべた。

「こんにちは、ギルドへようこそ。本日はどのようなご用件でしょうか？」

「ああ。俺あ冒険者とやらになりてきたそうだ」

「はあ？」

職員の女は頓狂な声を上げた。

からかう心算でもなかったが、先程の兵士とのやりとりの可笑しみがまだ残っていたらしい。

「や、すまねえ。教えてもらいてえんだが、冒険者ってえのは一体なんなんだい。田舎から出てきたばかりでなあ、どうも今一つ解らなくてよ」

「冒険者を知らない、ですか？ ……あ、コホン。承りました。ではご

説明致しますね」

戸惑った様子も束の間、女はすぐに営業用なのだろう微笑を顔に張り直した。なるほど、客商売というものをよく心得ている。

「冒険者とは、一般市民、団体、商会、果ては王国と、様々な方面から寄せられる依頼を、それに見合った報酬と引き換えに受託、遂行する者のことです」

「代行請負人ってことかい？」

「そういった一面もありますね。ですが、冒険者の方々が本分とするのはその名が示す通り冒険です。前人未到のダンジョンに隠された宝を手に入れ富を得たい。あるいは強大なモンスターを討伐することで武勲を立て輝かしい栄誉をほしまま恣にした^{ほしまま}い。あるいは魔道の粹を極め歴史に自分の名を刻みたい。そんな夢を追い掛けて、日夜危険に飛び込んでいく究極の自由業。それこそが冒険者なのです！」

身振り手振り、臨場感に富んだ説明であった。言葉を尽くしてくれるのは大変助かる。内容の大仰さは兎も角。

「補足致しますと、私共ギルドは依頼の募集とその仲介。素材の回収、買取。金品の預け払い等。冒険者の方々を多方面からサポートしております」

「へえ、預かり処でもあんのかい」

「勿論、幾らかの手数料は発生しますが……どうですか？ 冒険者について多少なりとご理解いただけでしょうか？」

「おう、そりやあもう確りと。いやいや実に解り易くて助かったぜ」「なによりですわ」

夢を追える仕事——と言えば聞こえは良いが、代償が己の一命であるならば然もあろうよ。そして仮令、命を賭したとしても得られるものが死一つ、などという始末も考えられる。

つまるところ冒険者とは「受け皿」なのだろう。

真つ当な職にあり付けぬ者、世間に馴染めぬ逸れ者、食うにも困る貧しき者。そういった者らが浮浪者や犯罪者となって野に捨て置かれれば、治安は乱れ国も廢れる。そして政に信を置けぬならば民心は離れ、国家は遂に立ち行かなくなる。

だからこそ冒険者なる身分を与え、型に嵌めるのだ。国家の一員として、如何様にでも使い潰しの利く人足として……これは流石に捻くれが過ぎるか。

どちらにせよ。

「己にやびつたりのお勤めだ。ようし冒険者とやら、なってみようじゃねえか」

元より見知らぬ土地で手に職もなく、ほんの一食分の金子も持ち合わせがない。

棒振り芸しか取り得のない阿呆には打って付けである。

「はい、冒険者登録をご希望ですね。ではまず登録手数料として千エリスお支払い願います」

「なに？」

と思つたのも束の間、問題は即座立ち上がった。

「ま、まさか……あなたもですか」

「も？」

「あつ、いいえ、こちらのことです。申し訳ありません。手数料をお支払いいただけない場合、残念ながら登録はお手続きできません」

ぴしゃりと言ひ放たれてしまえばこちらはぐうの音も出ない。しかし当然と言えば当然。タダで職と身分を得ようなどという考えがそもそも烏滸がましかりうな。

さてはて困つた。こうなれば別の働き口を探さねばなるまい。

そうして思案に暮れかけた時だ。受付嬢は「あー」と声を上げた。

「あの、ポケットのそれ、見せていただいてよろしいですか!？」

「あん？　これかい？」

受付嬢は己の尻を指差している。尻の衣囊ポケットからはみ出している“それ”を。

ズボンからそつと取り出すと、合わせて女も手を出してくるが。

「おつとと、待ちな。無用心に触ると指を切るぞ」

「あ、す、すみません。今革手袋を」

欲しい物を目の前にした童のような様である。少し気恥ずかしそうに受付嬢は奥へ引つ込んで行き、手袋をして戻ってきた。

白くざらついた手触りが女の手に渡る。

「やつぱりそう……キヤスパリーグの牙!」

「きやす、なんだい?」

「キヤスパリーグ。巨大な猫に似たモンスターで、冒険者の皆様の間では『初心者殺し』と呼ばれてますね」

その呼び名は聞き覚えがある。森で行き会った娘がああ化猫を確かかのように呼んでいた筈だ。

受付嬢はなにやら興奮した様子で続けた。

「キヤスパリーグは大変狡猾で警戒心が非常に強く、害意を持った者が縄張りに入っただけで逃げてしまいます。運良く見付けたとしても、強靱な四肢から生まれる筋力と俊敏さ、何よりその爪と牙は薄い板金装甲程度なら切り裂いてしまおうとか。新米の冒険者では手も足も出ない相手でしょうね」

番台に載せられた白い牙を見る。鎧すら食い破るとは大した切れ味だ。

「それだけにキヤスパリーグの素材は稀少なんです! 特に上顎の二本牙は、数の少なさもあってかなりの高額で取引されます! これ、一体どこで手に入れたんです!?!」

「街の外の林でな、拾った」

「ひ、拾った?」

「不味かったか」

「い、いえ、盗品でないなら特には。被害届が出されていれば調査もされますし」

己の返答に、受付嬢は呆れたか肩透かしを食ったか。小さく溜息など零している。

「と、とにかく、これを売却いただけるなら登録手数料分を差し引いた金額をギルドよりお支払いします。どうなさいますか?」

言外に、売る以外に選択肢など無いだろうこの無一文め、というよきな主張が女の目に見え隠れしていた。

一言一句その通り。

「ああ、頼む」

「承りました！ 鑑定を致しますので、しばらくお待ちください」

「お待たせしました。こちらがお見積もりと鑑定証、そして金額証明書です。切断されている為、相場よりやや買取価格が下がりましたが、状態が良く『まるで生きた個体から直接切り取ったかのよう』と鑑定士からのお墨付きもありましたので、締めて四十万エリス。そこから登録手数料の千エリスを差し引きして、三十九万九千エリスになります。ご確認の上、どうぞお納めください。あ、ちなみに革財布はサービスです」

「これはこれがあります」

三枚の書類。そして盆に載った金銀銅貨十数枚と紙幣数十枚。枚数を鑑みるに紙幣一枚が一万エリスであるらしい。

書類の文面を調べ、紙幣と貨幣の枚数をざっと確認し、さびすび貫った革の袋へじやらじやらと流し入れた。

「確かに、頂戴した」

「はい、では登録手続きへ移ります。こちらのカードに触れてください。それで貴方の潜在能力が数値として表示されます」

そうやって差し出されたのは掌に収まるほどの四角い薄板。素材は紙ではなく、石や金属に近い。

なんのことやら分からず、言われるままそれに触れた。

触れた瞬間に変化は起こった。

カードの表面に文字列が浮かび始めたのだ。それらは暫時統一性無く蠢いていたが、少しずつ整然と規則的に、遂には文章、あるいは図形として完成してゆく。

「結構です。では確認を……」

出来上がったカードを女が見る。見て。見たまま、暫時受付嬢は沈黙した。

「？ どうかしたか？」

「な、ななな、なんですかこのステータス!? 昨日に続いてこんな、とんでもないことになってますよ! 魔力値を除いたほとんどの値が超——」

彼女の声は実によく通る。日々人との対話を仕事とするからこそその音量、発音、かつぜつ。どれ一つとっても申し分ない。

そして今はどれ一つとて過剰であった。

故に、その口に指先を押し当てる。

途端、受付嬢殿は声の出所を失い「はぶん」だか「わぷぷ」だかよく分からん頓狂な音を出した。

「まあまあまあまあそう大きな声を出しなさんな。他の客がびっくりしちまうだろう? な?」

「ふ、ふあい。しゅみません」

落ち着きを取り戻した受付嬢はまた咳払いを一つ打った。

「えー、ステータスとクラスについては……」

「からつつきしだあな」

「あつはい、そうですね……ステータスはその人間の各能力の数値。クラスは職業とも呼び、ステータスに応じた専門技能者のことを指します」

「へえ。なら俺もその、職業つつうものを割り振られんのかい」

「ええそうですね。そして、貴方のステータスなら物理戦闘系であればどんな職業にも適正が!!」

「嬢ちゃん、静かに頼まあ」

「あつはい、すみません。クラスにも種々ありますが、貴方は魔法適正が無いようですね。逆に言えば、それ以外のほとんどのクラスを選択可能です!」

満面笑顔でそう言われれば、まあ悪い気はしない。相応に期待を持たれているのだ。応えられるかどうかはまた別問題だが。

職業。自己の代名詞である。つまるところ、己を指して何と呼ぶのか。

お前は一体何者なのか、と。

そんなものは端から決まっている。

「剣を扱う職業はやっぱり剣士かね」

「ええ。ソードマンです。でも貴方のステータスなら余裕でソードマスターになれますよ！ 上級職は初期スキルポイントも多く、固有スキル習得に必要なポイントにも補正が掛かりレベルアップすればさらに高効率の成長が——」

「そうかい。なら剣士でお願いできますかな」

「可能で……………へ？」

「剣士で頼むよ」

木魚が拍子を刻むような間が暫時。程なく脳内で御鈴が鳴った。その音が聞こえた訳でもなからうが、受付嬢もはっと目を覚ます。そうして身を乗り出してこちらに迫ってきた。

「いやいやいやいや!? どう考えてもソードマスター一択でしょう!? 上級職ですよ!? そうそうなるものじゃないんですよ!? 私の話聞いてました!?!」

「ああ聞いたとも。なればよ。すぎるだのぽいんとだのややこしくてなあ。今までの話に続いてこりやもう爺の脳味噌にや些かならず荷が重てえ。だもんで、剣士で十分となる訳よ。うん」

「ええええええ……………」

「かつはははは!」

女は腹の底より声を絞り出して番台に脱力した。豊満の過ぎる柔肉が台の表面でぐにやりと形を潰す。まるでその疲労感を表すように。

「造作を掛けた。いろいろありがとうよ」

投げ出された掌に折り畳んだ何枚かの紙幣を置き、その場を後にする。

こうして、受付嬢殿の懇切丁寧な説明と説得を大いに無碍にして、ここに冒険者剣士シノギ・ジंकクローウが誕生したのだった。

4話 酒は飲んで

日も暮れ、酒場がいよいよ賑やかさを増していく時刻。だのにそのテーブルだけは、ひどく静かだった。いや、打ち沈んでいる。そう表現してもいい。

「……なあ」

「……………」

「なあ、おいリーン。いい加減元気出せよ」

ダストは酒盃を対面に座る少女に勧めた。

少女は何も答えない。礼を言うでもなく、さりとして拒むでもなく、ただじつと俯き、膝の上で握り合わせた自分の手を見詰めていた。

ギルド併設のこの酒場に着てからかれこれ一時間にもなる。その間、リーンは一言も発することはなかった。

なおも何か言いたげなダストを隣からキースが諫めた

「ダスト、そつとしといてやれよ」

「いやだって……」

「無理もない。実際、俺も暫く引き摺りそうだ……」

そう言つてテイラーは酒盃を呷ると、その苦味に顔を顰めた。

ゴブリン退治。経験の浅い新米冒険者でもこなせる、言ってみればちよろい依頼の筈だった。アクセルから程近い山林、土地勘もある。パーティの平均レベルも上がり、実力だつて着いてきた。順風満帆。何もかも上手く行く。どこか浮付いた心地。

きっとそれを世間では油断と呼ぶのだろう。

そして、丁度このレベル帯のパーティなのだそうだ。初心者殺しという憂き目に遭うのは。

ゴブリン、コボルドといった低級モンスターを追い立て、それを狙つてやってきたやや位階の高いモンスターや冒険者を待ち伏せ捕食する狡猾極まるモンスター。

弱い餌で弱い獲物を釣る。故に着いた渾名が『初心者殺し』。

今日、テイラー達は正にこのモンスターと行き遭つた。彼らの力量

では、正面から戦えばまず勝ち目のない相手だ。一も二もなく彼らは逃走とクエストリタイアを選んだ。

「あたしの所為だよ……」

「リーン……」

しかし運悪く、逃げ遅れたリーンが手傷を負わされ、さらにパーティからも逸れてしまった。その時点で既に生存は絶望的。パーティとしての生還を第一とするなら、諦めるより他に道はない。

——彼らは、諦められなかった。短くない時間を共にした仲間を見捨てる、その合理性を受け入れられなかった。

たとえそこにあるのが仲間の無惨な亡骸でも絶対に連れて帰る。そう覚悟して、山道を再び戻り。

そこには、果たしてリーンがいた。傷を負いながら、それでも彼女は生きてそこにいたのだ。すぐ目の前には初心者殺し。今まさに襲い掛かるうかという氣勢。

そしてそれを阻む一人の青年。

「あたし、あの人に助けられた。命を救われたのに……なのに、それを見捨てて逃げるなんて……!」

「あの時はそれしか方法がなかった。俺達全員で掛かって行っても……」

「下手すりゃ全滅だろうな」

「……」

だから納得しろ、などとこの場の誰も口にはしなかった。

偶然に出会ったというその青年は、一切の逡巡もなくリーン達を逃がす為に一人その場に残り、初心者殺しの足止めをしてくれた。

その後どうなったかは分からない。現場を確かめようにも、迂闊に近寄って同じ轍を踏まぬとも限らないからだ。所詮冒険者稼業は自己責任。モンスター討伐に出掛けたきり二度と戻らなかったなんて話は日常茶飯事である。

頭では解っている。解っているのだ。

「お礼だと言ってない。名前すら、聞けなかったっ……っ……」

リーンはとうとう堪え切れず、わっと両手で顔を覆った。低くくぐ

もった嗚咽が、酒場の喧騒に溶けて消える。

誰も何も言えない。普段は五月蠅すぎるくらいのダストでさえ、押し黙ってテーブルに視線を落としている。

自分達は、名も知らぬあの青年を犠牲にして生き残ったのだ。

その事実が重く、背中に圧しかかってくる。痛みが胸を衝く。拭えぬ罪悪感がタールのように溜まり凝り固まっていった。

暗澹たる心地でダストが酒盃を傾け、既に中身がなかったことに気付く。舌打ちし、給仕を呼ぼうとして。

す、と正面から酒瓶が差し出された。

「おいおい、どうしたこったその暗あい面あ。まるで誰かの通夜みてえじゃねえか」

「え」

そう言つて、リーンの傍らに立つその青年はダストの酒盃になみなみ酒を注いだ。

酒場に入つてすぐ、見覚えのある顔を見付けた。昼間に山の林で会つた者達である。

初対面はほとほと急場で、話をする暇もなかった。丁度良い。改めて挨拶の一つでも。

そのように思い近付いて行つて見れば、その卓だけがすっかりと打ち沈んでいる。周りでは酒精の入ったむさい男達が肩を組んで歌いかと思えば少女が水芸などやり始めたではないか。

乱痴気の中で、暗鬱な彼らはひどく浮いていた。

だから、という訳でもないが。

「おいおい——」

こちらの軽口に対して、彼らの反応は劇的であった。

傍らの娘など、自身を見上げてぽかんと口を開けたまま停止してし

まった。まあ男共の様も、大なり小なり似たようなものだが。

「かつは、なんだなんだ。今度あ幽霊でも見ちまったって面だな」

「……生きて、るの?」

「死んでるように見えるか? 足だつてこの通り、ちやあんとあるぜ」
信じられない。娘の顔にはそのように書いてある。

しかしその不信も、程なく氷解した。目に見える事実ならば受け入れる他あるまい。

そしてその事實は幸いにして、この娘にとって悪い報せではなかつたらしい。

つつ、と一筋零れ出た涙は、その後はもう一気呵成。ぼろぼろと溢れ、同時に娘の顔がくしゃりと拉ひげる。

「う、つ、ああ、あああああ! よ、がっだあ……! いぎでだあああ……!」

「おおうとと。ははっ! なあんだい。何故泣く」なにゆえ

「だつて、わ、だじのせいであぶないめにつ、あつで、ずごくごわいおもいして。でもあなだが、だずげでくれで、なのに、あな、たがしんじやつたかとおも、つて……!」

「ははあ、そうかい。うん、うん」

半分ばかり何を言っているのか分からないが、何を言いたいかはなんととはなしに伝わってくる。背中を擦つてやると、嗚咽も少しはマシになった。ただでさえ年若く見えた者が、もはや童女の有様である。すると、呆気に取られていた男共もようやく正気を取り戻し始めた。

「あ、あんた無事だったんだな!」

「おうとも、お蔭さんでな。おうそうだ坊主、返すぜ」

腰に佩いていた小剣をひよいと放る。対面の金髪男は慌ててそれを抱え込んだ。

「あつぶね!! いや、つてかなんで生きてんだよ!! あの状況から生還できるもんか普通!!」
ぶっちやけよ、俺もう絶対死んだもんとばかり……」

「びええええん!!」

耳を高音が貫いた。娘っ子がまたぞろ泣きじやくり始めてしまった。

弓手の男と大剣の男が耳を塞ぎながらに金髪を睨む。

「馬っ鹿ダスト！ 余計なこと言うからリーンがまた泣き出しちまつたろうが！」

「こんのボケ！」

咽び泣く少女の声は無論、酒場に響き渡っている。周囲の客が何事かとこちらを見た。

「おおなんだ。またダストがリーンにセクハラでもしたか」

「ダストよお、いい加減リーンにちよっかい掛けんの止めてやれよ。好きな女子に悪戯する糞ガキのレベルだぞ」

「マイクロだって脈がねえのそろそろ気付けって」

「正直見てて滑稽っていうか……哀れ？」

「ダスト死ね!!!」

「うるせえよ!! つつうか今死ねつたの誰だコラア!!!」

乱痴氣が戻ってきた。

暗鬱な空気はもはや見る影もない。

しかし、娘の背中を幾ら擦ってやっても、今度は泣き止む気配が見えない。どうして泣く。

その理由は別段、おかしなことではない。ただその相手が、親しき友人でもなく、気心知った仲間でもなく、愛する想い人でもないことが不可思議なのだ。

他人を慮って、こんなにも咽ぶ少女が、己は不可思議なのだ。

「さあさあ、それ以上はもったいねえよ。こいつを飲んでな、おめえさんの笑った顔を見せてくれい」

「ひっく……あり、つがとう……」

杯を手に、少女は泣き笑いを浮かべた。

「今日は本当にありがとう！」

「あんたは俺達の命の恩人だ」

「ああわかったわかった。執けえなあおめえらも」

酒場を出てすぐ、キースとテイラーは深々とこちらに向かって腰を折った。

飯を食い酒を酌み交わしながらずっとこの調子なのである。

「礼ならな、この通り十う分に頂戴した」

人差し指と親指で輪を作り、顔の前に傾ける。人様の奢りにかこつけてたつぷりと？んだくれたばかりだ。これ以上は釣り銭を払わねばなるまい。

「ジンクロウ……」

「ん、なんだ」

泣き腫らしたリーンの赤い目がこちらを見る。

思えば要らぬ心労を掛けたものだ。近頃はなにかと心優しい娘っ子に縁があるらしい。

リーンはなにやらもじもじと躊躇った後、不意にこちらの右手を取った。それが両手で包み込まれる。酒精が回ったのか、あるいは未だ幼い故か、娘の手はひどく熱っぽい。

「また、ね」

「おまつっ!?!」

「黙れダスト」

「空気を読もうダスト」

その手と同じか、それ以上に熱の籠った目と視線が交わる。娘は気恥ずかしげに微笑んだ。

なんとまあ急転直下なこと。

「ああ、またな」

「うん」

笑みを返し、踵も返す。

快い者達との親交を得、年若い娘から憎からず想われる。なんともはや出来すぎた夜だった。

目の端で地面に崩れ落ちる金髪が映る。

「元氣出せよ。元から可能性ゼロだったんだ。何も悲しむことねえつて」

「そうだぞ。俺らには例の店がある。ほら優待券やるから立ち上がれっっているんな意味で」

「ちくしよおおおおお優待券ありがとう!!」

「かつははははははー!」

ああ、本当に良い夜だ。

ああ、本当に最悪の夜だ。

「どうか最悪の光景だ……」

「おぼろろろろろ……」

酒場を出てすぐ、連れの少女が催した。下ではなく上に。

なにせようやく土木作業にも慣れてきて、日当にも色が付くようになったのだ。少しばかり羽目を外してどんちゃん騒ぐのは解る。酒場で親方と先輩大工達と鉢合わせ、意気投合してどんちゃん騒ぐのも解る。実際楽しかった。

だからって毎回吐くまで飲むなや。

毎回だぞ。異世界^{こっち}来て土方やり始めてからこっち毎日だぞ。お前その日食ったもの口からひり出さなきや気が済まないの？

「ううああ……ああうんぜんぶ出た、もう大丈夫ろろろろ……!」

「うわあ……」

「カジユマぶろろろろもうちよろろろ上の方ぼろろろ擦ってべろろろろ」

「汚ねえ!? こっち向くな! 吐きながら喋んな器用か!」

そして何が一番最悪って、仕事終わりの飯と酒が何よりの楽しみとか言う丸きりおっさんの如き糞泥酔者であるこいつが、実は女神だという現実である。

「俺、ファンタジー世界でなにやってんだろ……」

真夜中の空に向かってこうして黄昏てしまうのは、一体何度目だったろうか。

いや、生活費の為に毎日働くのに必死で考える余裕がないのだ。そんなでようやく現実に立ち返るのがこの駄女神の駄目っぷりを目の当たりにした時だけという。

……無性に悲しくなってきた。これ以上考えるのは止そう。

「ほらアクア、もう帰るぞ。明日も仕事なんだから」

「ういゝ……」

なんだか今夜の酔い方はいつもにも増して厄介だ。脱力したアクアを肩に担ぎ、よたよたと歩き出す。

足取りも危うく、すつ転びそうになった。

「うげ」

「おっと」

二人仲良く地面にキス——とは、ならなかった。

「え?」

いつからそこにいたのか。この狭い路地には、自分とアクアの二人だけだと思っていた。反対側から何者かがアクアを支えている。

年齢は自分と同じか少し上程度。黒髪で開襟シャツにズボンという普通の格好の青年。

何故か。その普通に、ひどい違和感を覚える。

「大丈夫か」

「あ、うん。ありがとう。助かった」

「かまわねえが、この嬢ちゃんこの有様……」

「ああ、まあいつもの事なんで……」

呆れた口調の青年に曖昧な笑みで答える。恥ずかしいやら情けないやら。

すると、青年は少し思案してからアクアを手近な木箱に座らせた。
「ちよいと待ってな」

言うやこちらの返事は聞かず、足早にどこかへ行ってしまった。
待てと言われて待つのも間の抜けた話だが、なんとなく動く気は起きなかった。

大した時間も掛からぬ内に青年は帰ってきた。その手には二つ、コップが握られている。

「ほれ、水だ。嬢ちゃんに飲ませてやんな。こっちはおめえさんの分だ」

「おお、ありがとう！」

差し出されたコップを受け取る。氷水を注いだのか、そう所謂キンツキンに冷えてやがるツ！ 状態だ。

座りながらもふらふら安定しないアクアを捕まえてコップを無理矢理口に押し付けた。それでも意外に飲んでくれるものだ。こくこくと喉を鳴らし、結局全部飲み干してしまった。

ようやく自分も水にありつく。

火照った身体にお冷が沁みる。美味しい。

「かはは、気持ちのいい？ みつぶりだがな。いつかな百薬の長とて過ぎれば毒だぜ」

「うん、まったくその通り……」

飲み終えたコップを返し、アクアをまた担ぎ直す。すると当然のようにもう片方の肩を青年も担ぎ上げていた。

「手伝ってくれんのか？」

「お節介の押し売りだ。安くしとくぜ」

「金取んのかよ！」

「かはっ、ただの軽口よ。本気にすんない」

また、違和感。

悪戯っぽく笑う青年の様は年相応のような、不相応に老獪なような、奇妙な印象を齎した。

ところで、よくよく考えると転生以来こんなに親切にされたの初めてかもしれない。

あ、ちよつと泣けてきた……。

「おおい、いきなりどうした」

「うん、ごめん。こっちのことだから気にせんといてっ……ゴホン、ああなんかいろいろありがとうな。ってさっきからありがとうばかり言ってる気がする。俺は冒険者のカズマ。あんたは？」

「俺かい？ 俺あジंकクロウってもんだ。冒険者にや今日なった」

「今日!?!」

「おうとも。なりたてほやほやよ。ははは」

「……ま、俺だつて似たようなもんか。新米同士よろしくな、ジंकクロウ」

こうして俺は、シノギ・ジंकクロウという男と出会った。

異世界に来てから初めての男友達つてやつだった。

「うぶれろろろ」

びっちゃびちゃびちゃと、最後っ屁とばかりに汚女神様はゲ○をぶちまけやがった。

俺とジंकクロウの靴の上に。

盛大に、歓迎などしていないのに。

「……」

「……」

「………酒は飲んでも飲まれるな」

「すんまっせんホントすんまっせん」

5話 仕事は選ばず。なれど

依頼達成の報告の為にギルドへ戻ると、そこには見知った顔があった。

声を掛けるより早く娘がこちらを見付ける。平素は大人びて見えるその面立ちも、華やぐように笑えばすっかりと年相応の少女である。

「ジンクロウ！」

「ようリン。今帰りかい」

小走りにこちらへ寄って来る。後頭に結った栗色の髪が犬の尻尾のようにはらりと揺れた。いや、どころかこの娘、本当に尾ていからふさふさとした尻尾を生やしているのだ。それが何なのか今のところ聞けず仕舞いではあるが、いずれ教えてもらおうとしよう。

そんなこともあってか、うっかり頭でも撫でちまいそうになる。

ふと、娘は何ぞ可笑しいのかくすくすと忍び笑いを始めた。

「またリンって呼んだ」

「おおっとこいつぁ失敬。どうもリンってな響きの方が舌に馴染んでなあ。いやいや今度からは改める。すまん、許せ」

「えっ、ううん!! 別に嫌な訳じゃないから! ジンクロウがそう呼びたいなら、ぜんぜん大丈夫だから……む、むしろ嬉しいっていうか……ジンクロウだけ特別に、その……呼んでほしい……かな……」

リンはぱたぱたと両手を振り首を振り、最後には下を向いてしまった。語気もまた尻すぼみに弱まり、言を聞かせたいのか聞かせたくないのか。

羞恥に赤くなる様子はなんとも微笑ましいが。

「うむ、心得たぞ。リン」

「……えへへ」

望み通り名を呼べば、娘の顔はだらしなく綻んだ。

「かあああ……ぺっつ」

「うおきったね!」

「馬っ鹿本当に唾吐くやつがあるか!!」

騒がしい方に目をやれば、ダスト、キース、テイラーの三人が遅れてやってくる所であった。達成報酬の受領を終えたのだろう。

言わずもがな唾を吐いたのはダストだ。間違いはない。

一週間も経とうか。冒険者ギルドに来れば、この男共は大概酒場で管を巻いている。必然顔を合わせる機会も多く、今やすっかり顔馴染みと言っている。

如何にも柄悪く、大股で歩み寄って来たダストは己の顔を下方から睨め上げた。というのも、己は無駄に上背がある。ダストの身の高さではどうあつても見上げられるこの形は変わらん。

「おうおう毎回イチャイチャイチャイチャ見せ付けてくれやがるなあ
ジंकクロウさんよ」

「おめえさんも毎回飽きねえなあ。おう、絡み方がすっかり堂に入ってきたんじゃねえか?」

「まるつきりチンピラじゃん、それ。まあ元からだけど……あと、い、イチャイチャとか、そんなことしてないしっ……」

「うるせえ! そんなメスの顔で何言つても説得力ねえんだよ!!」

「メスっ……こんの馬鹿ダスト!! いっぺん死ね!!」

「ちよつ?、待て。杖はやめよう。股間を杖はやめ——ぎゃああああああああ?!?!」

何事も限度というものがある。からかうにせよ、退き際を誤ればこのようなことにもなるう。

断続的な打撃音から視線を外し、キースらに向き直る。二人は股間を抑え、痛烈な顔で呻いていた。

「どうだ順調かい。今日も討伐であろう?」

「お、おう。まあ、俺らみたいな中級パーティがやる討伐なんて、気を付けてこなせばなんてことはないんだけどさ」

「初心者殺しみたいな奴、あれは相当稀なケースだからな……あ! いや、だからって油断はしない! 出来る限り注意を払って臨んでる」

「へっ、なんだいなんだい。俺に説教されるとでも思ったのか」

「いやー……」

「あはははは……」

視線を逸らし、曖昧な笑声を吐く。事程左様に見え透いておるわ。無論説教を垂れるような筋合いはない。この場合、こいつらの警戒感がより引き上がっていることをこそ褒めるべきだろう。

——死にたくねえならそのままでいな。

言葉には乗せず、無責任にただそう念じる。

「そ、そそうだよ。討伐、だ、よ」

「大丈夫かあダスト。そのまんま跳んで跳ねな。埋ま……るもんが戻る」

「うつつどうも……じゃ、なくて！ お前だよ！ お前のこと！ だよー！」

言われたとおり飛び跳ねながらダストは鼻っ柱に指をさして来た。それはともかく実に痛そうである。

そんなダストに、リーンは思い知れとばかりそっぽを向いた。

「だあからなんだ。今日はやけに執こく絡むじゃねえか」

「お前いつまで『溝さらい』なんてやってんだって話だよ!？」

確かにダストの言の通り、己の今日の勤めは街の目抜き通りに走る側溝と住宅地域の下水道の清掃だった。ヘドロと汚物を回収し、街の外の廃棄場へ運搬する。日当七千エリス也。

それを聞き、キースが腕組みしながらこくりと頷く。

「ああ、それは俺も思ってた。簡単な依頼なら他にいくらでもあるだろ」

「というか強い、よな？ ジンクロウって」

「初心者殺し素手でぶっ飛ばしてたし……」

三人がダストに賛同しおった。珍しいこともあるもんだ。

「いいじゃねえか。立派な仕事だぜえ溝さらいもよ。綺麗にしてりや街もより住み易くなるつてもんだろう？ 違うかい？」

「いやまあそうっっちゃそうだけど」

「キツイ汚い臭いの三拍子。おまけに日当も安い。新米が最初にやって後悔する依頼ダントツ一位だぜ？ ゴ布林殴りに行く方がまだ楽だし、何より冒険者っばい！」

「やってらんねえよ普通。それをこの野郎この一週間毎日受けてやがる」

「討伐やろうよ。あたし……あたし達と一緒に！　もし、ジंकロウがよかつたらだけど……」

なんとも遠慮がちに、リーンはそう締め括った。

有り難い話だ。馴染んだとはいえ、出会ってまだ日も浅いこんな野郎に。

心根の優しいガキ共だ。

「ありがとうよ」

そして小僧つ子共に心配されていれば世話もねえ。

「だがすまん。またの機会に、な？」

街の清掃が有意義であることに否やはない。しかし、己がまったく純粹に公共利益を目指してその勤めに励んでいたかと言えば、それはそれは真つ赤な嘘となろう。

エリス嬢に吐いた大言壮語に嘘はない。己が刃金を握ってしか生きて行けぬ畜生輩であることも疑いの余地はない。

ただ、偏執しているのだ。

兇器の形に。刃の有様に。

握り、振るうべき刃金が、今の我が手には無かった。

「やっぱりねえかい」

「ああ、悪いがあんたのご希望の品はないね」

目抜き通りから一本道に入り、川沿いを歩けば一軒の鍛冶屋が店を構えている。

店の中は兎角、武器と防具の巢窟と言って差し支えない。抜き身の剣が其処彼処の壁に張り付けられ、鎧は骨組みを入れて整列させられ

ている。陳列にはほとんど余念がないらしい。

「片刃で棟に反りのある刃長二フィート以上の細身の剣……サーベルと何が違うんだ？」

「そも製法からしてな。部位によって金属の粘りが違うのよ。外は硬く、中は柔く。芯鉄、そして棟鉄、刃鉄と分けて造り込む。すると高硬度と切断力を保持したまま、衝撃を殺す緩衝作用も併せ持つ。故に『折れず、曲がらず、よく斬れる』とこうなる訳だ」

「少なくとも、こんな駆け出しの街の鍛冶屋で、そんなご大層な剣扱ってる奴はいないよ」

番台にどっさり腰を落ち着けながら、鍛冶の男は呆れたように手をひらひらと振った。

思わず呻き声が漏れる。覚悟はしていたことだが、どうやらこの地には刀の製法はおろか、その存在自体が伝わっておらぬようだ。

贅沢をほざいている自覚はある。選り好みした結果望むものを得られず、まるでその当て付けの如く泥臭い仕事に身を置いている。

ああ、思いの外、鬱憤が溜まっていたのだな。

「さても、どおおするかねえ」

腕を組み、天井を仰ぐ。煤と滲みが多い。室内の掃除が行き届いていないな。

「拘るなああんた。うちの剣じゃ不服かよ？」

「いやいや、ただ単に偏屈なだけよ。拘りなんて粹なもんじゃねえ。

これはそうさなあ……妄執と言っている」

「モウシユウねえ」

「ほれ、赤子はいつまでも気に入った毛布を手放せぬだろう。丁度あんな感じだあな」

「おい途端に物すげえ下らないことになったぞ」

下らない。まったくその通りだ。

これはほとほと、下らぬ話なのだ。

下らぬからこそいつまでも頭の隅に付いて回る。

「……」つ当てがない訳じゃない」

「あん？」

出し抜けに男は言った。

もつたいぶつた、というより凄まじい躊躇と逡巡の末、搾り出したかのような声音である。

「この街に刀匠がいるのかい？」

「そんな奴はいねえよ。ただ持つてるかもしれないねえ奴に心当たりが……ある」

「ほう！ 本当か。そいつあ何処の誰だい？ 職人か」

「いいや、商人だ。魔道具屋の店主なだけだよ……ただなあ……」

「ええいそうもつたいぶるんじゃねえよ。そのなんとか屋は異国からも武器を仕入れてるのか」

「本つ当に期待するんじゃねえぞ？」

結局、最後まで勿体つけた言い回しの鍛冶屋からどうにかこうにかその魔道具屋とやらの場所を聞き出した。

「じいさん、ちよいと跨ぐぜ」

「ん(づ)……」

狭い道で寝こける酔っ払いの老人を跨ぎ越える。

裏路地のさらに裏へ裏へ。ただでさえ暗い裏通りの一際暗がりにその店は居を構えていた。

店、なのだろう。外観はそう悪くない。店先の小路や階段、煉瓦の壁まできつちり掃除が行き届いている。小さな看板が扉に掛けられ、最低限何かしらの店舗であるという自己主張はあるのだが。

物を売る気が本当にあるのか、店主の心算を疑う立地だった。

いや、あるいはこれは店ではなく事務所であり、実態は卸問屋なのかもしれない。小売商に対しての販売なら、運搬者と保管倉庫さえ用意できれば確かに店舗の立地など考慮することもあるまい。

はて、己は一体誰に対して何の言い訳を模索しているのだろう。

「さあ鬼が出るか蛇が出るか」

嵌め殺しの硝子窓から中を覗くが、灯りはなく薄暗い。

留守か。そのように懸念しながら扉の取っ手を引く。何程の抵抗もなくそれは開いた。

無用心な。

「免。誰ぞ居らぬか——おおう？」

誰何もそこそこに屋内へ踏み入ろうとした足を、ぴたりと静止する。

床に何かが転がっていたのだ。大きさは見当では五尺と少し。薄暗い店の中にまるで溶け込むかのような漆黒色の布で包まれている。危うく踏み付けるところであった。

「！」

僅かに息を呑み込む。よくよく見ればそれは——人だ。

手足が二本ずつに頭が一つ。その人型は胎児のように身体を丸め、床に横たわっていた。

跪き、抱き起こす。しかしどうだ。その人物はぴくりとも動かない。

「おい！ しつかりしろ！」

強く揺すするような真似は抑えたが、こちらの大声にも反応はない。

口元に耳をそばだてる。息をしていない。いや、そも心の臓が動いていない。

死んでいる。

「……」

身体に触れて解ったことだが、どうやら女のようだ。頭巾の下から覗く面立ちを見るにまだ随分と若い。それがまたどうしてこのようなことになったのか見当も付かぬが。

——この浮世でもまた、人死に行き会ってしまった

不意にそのような考えが脳裏を過ぎる。

妄念である。人の死に目に会わぬなどあり得ぬこと。それでも見たくないなら、生きるのを止めることだ……万に一つ叶うなら、の話だが。

頭を振る。今はそのような世迷言を垂れ腐っている時ではない。

通報先はギルドか。それとも町奉行所のようなところかあくせらるがこの街に

もあるのだろうか。

遺体を床に安置し、暫時思案に暮れ。

ぐぎゆるるるるる

「……………あ？」

暮れようとしたその時だ。

その間の抜けた音が店先に響き渡ったのは。

「……………」

「！おい！女！」

思わず耳を疑う。足元の女が一声呻いたのだ。

生き返ったとでも言うかよ。

再び抱き起こし、声を掛け続ける。僅かだが反応があった。

「……………あ……………」

「おお、なんだ!? 何が言いてえんだ!？」

「……………お、お腹……………」

「腹? 腹が痛むのか? ええおい!？」

「……………お腹、空いた」

「……………」

……………。

ぐぎゆるるる、女の腹の虫がまた、鳴いた。

6話 待ち焦がれた出会いとはまさにこの事

「するつてえと、おめえさん人じゃあねえのか」

「リッチーという、不死の王とかやらせていただいでまして……あ！
で、でも心はまだ人間のつもりですよ！」

時刻はそろりと正午を回ろうとしている。仄暗いと見えた裏通りにも燦々と日が照り、店内の様子も幾分見通しが利くようになった。道具屋との事である。

質は無論門外漢ゆえ理解など出来ぬが、この店の品揃えは相当なものだろう。壁という壁に天井まで届く陳列棚があり、そこには所狭しと様々な物品が並んでいた。

宝石、薬品はもとより、一見して用途不明の風変わりな器物が種々数多。なるほどあれが『魔道具』か。

「かつはは、道理でなあ。息もなく心の臓も動いておらんだったので、つつきり死んでいるものとはかり。いやあ無遠慮にべたべたと手を触れてしまった。誠、失礼をした」

「い、いいえー！ お気になさらず。介抱して下さったのに、そんな……」

下げた頭上であせあせと手を振るその娘、名をウイズというそうな。誰であろうこの魔道具屋の店主である。

上から下まで真黒の装束と外套を着込み、まるで黒子のようだ。その所為もあろう。黒の装いは娘の肌の白さ、病的なまでのそれをより一層際立たせていた。

病的？ 否、それは死人しびとの青白み。

そしてこの無礼なる印象が、なんと真実であった。

ウイズは人としての生を既に超え、生きた屍、不死になったと言う。何を世迷言を。頭の固い御武家にでも言おうものならその場で無礼討ちに遭うだろう。それ程の妄言である。

実際に目の当たりにし、この手で触れてしまえばもはや信じるより外ないが。

——くきゆるる

不意に、またそのような音色を耳にする。窓際の丸机を挟み、対面で椅子に座ったその娘、娘の腹からはつきりと聞こえてきた。

かつと火を入れたかのようにウイズの顔が朱に染まる。

なんとも可愛らしい音だ。羞恥する娘の姿と相まって。

喉奥に感じる笑声をくつと抑えた。

「りっちーとやらも飯は食えるのかい」

「た、食べなくても死にはしませんが、死にはしないんですが、辛いのが据え置きというか。人間としての習慣はしつかり残っていて、食べない日が続くと肉体的にも精神的にも寂しくなるというか。先程は思った以上にクラクラつと来たもので、ああこれはちよつとダメだなあと少しだけ店先で横に……うう、お恥ずかしいですつ！」

「かつはははは！ 何を言うか。どこも恥じるこたあねえよ。身体が元氣な証拠じゃねえかい」

顔を覆って早口に言い訳を捲くす娘に、堪え切れずとうとう笑声を上げる。

その侘びという意味でもないが、床に置いていた紙袋を机に載せる。

「己も丁度腹が空いていたところよ。よけりやあ食いな」

「え」

紙袋を漁る。やはり作りたてとあって温かい。

「なんでもどねるけばぶとか言う異国料理だそうだが」

「ケバブ？ ……ああ！ そういえば近所に屋台が出たとか」

「おうそれよその屋台。肉の焼き方があんまりにも豪快でな。かはつ、思わず買っちゃった」

娘を介抱した後ひとつ走り、中央通に行くまでもなく近場から漂う良い匂いを辿ると、すぐにその店を見付けることができた。

包みを開くと、中から湯気立つけばぶさんが顔を出す。

薄く焼かれたパオンで、葉物野菜、細切りにした赤茄子、葱頭、そして中央に薄く削いだ炙り肉をたっぷり包んである。

それを一つ差し出すが、しかし娘は受け取ろうとしない。

「どうした。要らねえのかい？」

「い、いえそういう訳ではなく。私その、今持ち合わせがなくて……」
「何を阿呆臭え……ああああ、んなもん要らね要らね。早く取らねえか！ 冷めつちまうぞ、ほれ！」

「あう」

半ば無理矢理押し付けると、観念したように娘はそれを受け取った。

だが、一向食べ始める様子もない。この期に及んでまだ躊躇してやる。面倒な。

なれば一計を案じねばなるまい。

「……………肉の豪快さも然ることながらな、このけばぶの肝要はやはり、漬ダレよ」

「ツケダレ、ですか？」

「おうよ。串に刺した一抱えほどもある肉をな、こう寸胴鍋になみなみ満たしたタレに一日漬け込むそうさ。そうすと肉にしつかり味が付く。ちよいと味見したが、あのタレの甘あい塩味は癖になるぜえ」

様々な香辛料、酒、各種調味料に、葉物に根菜や香味野菜と骨から取った出汁を加えて長時間煮込むことで作るそうさ。無論、料理人が味の決め手をほいほい口にする筈もない。

「俺の見立てじゃ魚醤も少し……この香ばしさにや馴染みがあらあ」
「な、なるほど……」

「でだ、いざ肉を丸焼きにする訳だが。その肉焼き器つてのが面白くてな。下ではなく、横、まるで肉を取り囲むようにして炙る。均一に焼けるのは勿論、味が中へ中へと向かっていくんだそうさ。代わりに肉の表面にやじわありと脂が滲み出て、件のタレと溶け合うのよ」
「じ、じわりと……」

ごくぐりと、喉が鳴った。無論それは己ではない。

「その様、じゅうじゅう焼き立つ音、鼻を満たす香りがなんとも堪らねえ。我慢が利かねえってんで店主に肉だけちよいと摘ませてもらったが、これがまた応えられねえ……噛めば噛むほど味が滲み出や

がる。赤身肉の歯応えのまあ心地良きこと」

「ひぐう……！」

対面で、腹を強打されたかのような呻きが上がる。娘はもはやこちらを見ておらず、手にしたけばぶさんを睨み据えていた。

口の端に煌くものが一筋。垂れた涎が陽光を照り返していた。

「くくつ、どうした。食わんのか？」

「い……………」

「ううむ、おめえさんが食わねえんなら、捨てつちまうしかねえなあ……………ああもつたいねえ」

「!？」

決め言葉は、どうやらそれであった。娘の持つもつたいない精神が彼女の忍耐に止めを刺したのだ。

「いただきまふう……………」

言い終わる前に娘はけばぶを頬張った。噛んだ瞬間、しゃきり、と野菜の瑞々しい音が響く。

口に含んだけばぶを噛む。噛む。噛む。次いで煌いたのは、頬に流れる涙であった。

「お、おいひいい……………おいひいよう……………」

「かつは」

落ちた。他愛なし。

「さあ食え。どんどん食え。買い過ぎちまってな。まだまだあるぞお」

「うううういただきますうう……………」

買ってきたけばぶさんを平らげ、ウイズが淹れた紅茶を口に含む。馴染みのない味と香りだが、なかなか悪くはなかった。

いかにも一心地着いた様子で、ウイズは溜息を零す。

「ごちそうさまでした……本当にすみません、お気を遣わせてしまつて」

「はん、単に俺が食いたかつただけよ」

紅茶をまた口にする。独特の渋みと甘み。妙味である。尚且つこれは、おそらく淹れ方が良いのだろう。

まだ何か言いたげな娘を片目に捉えた。

「洋菓子に合いそうな茶だ。また飲ませてくれねえかい？」

「！ は、はい。勿論です」

娘の微笑に笑みを返しながら杯を空にする。

これでようやっと、本題に移れるというもの。

「早速だがなウイズ。俺あ刀つて武器を探してる。どうだい。何か心当たりはねえか」

「カタナ……片刃の、細い剣のことですか？」

「！ そうよその通り。もしや」

「ええ、確かにそういう名前の剣を、以前に一振り入荷した筈……」

そう言つてウイズは顎に指を添える。記憶を手繰るような所作。

暫時そのようにしていた娘は、ぱんと一度手を打つや立ち上がった。

「倉庫！ 倉庫ですよ！ あまりにも危ないのでそこに仕舞い込んだんです」

「あるのか！」

鍛冶屋、お前さんの見立ては正しかった——危ない？

確かに、刀剣は扱いを誤れば危険には違いあるまい。しかし、何故であろうな。その言の響きは、もつと別の意味合いを含んでいるように思えてならぬ。

「少し待っていてください。今取つてきますから」

こちらの疑問符には答えてくれず、ウイズはそのまま店の奥へ引つ込んで行つてしまった。

待つこと暫し、奥の扉から最初に顔を出したのは、娘の尻であった。

「っ……んっしょー！」

床に何かを引き摺っている。

程なく見えてきたのは鋼鉄製の箱だ。錠前を掛けられ、且つ鎖を巻かれていた。こうも頑強、嚴重な箱ならばなるほどさぞ重かろう。

「はあ、ふう、こ、こちらになります」

「……この中に、それがあんのかい」

箱の大きさは縦に一尺、横に三尺ほど、大刀が納まるには確かに丁度良いが。

よく見れば錠前、鎖ばかりではない。箱の閉口部、上蓋と本体の合間に何枚もの札が貼られている。そしてその白地の紙面、そこには幾何学の模様や円陣、判読不能の文言等がびっしりと描き込まれていた。

魔法など知る由もないが、これが何であるのかは理解に難くない。封印である。中のモノを断じて外へ出してなるものかという気迫すら滲む。封印である。

しかし、その封を掛けた張本人である筈のウイズは、さっさと鎖を外し、錠前を開け、貼られた札を遠慮もなくびりびりと破り捨てていく。

いいのか。本当にそれでいいのか。

ぎぎぎ、と油の足りぬ蝶番が悲鳴を上げる。遂に、その箱は開かれた。

「どうでしょう。お探しのものはこれで間違いありませんか？」

布張りされた綿に包まれ、それは鎮座している。

滑らかな黒漆の鞘。隈なく黒錆に覆われた鍔。柄糸は青みを帯びた鉄色が経年の末変色したのだろう、やはり黒。煮えた泥のような黒さだ。

しかし委細問題ない。

刀。紛うこと無き。拵えを見るに打刀である。

それを目にした瞬間、名状し難いものが胸に湧いた。郷愁、懐古、喪失、憎悪。

逃れ難い、執着。

「物事の好悪と成否を考慮しないならば、あらゆる意味で己はこの刃

金に執り憑かれている。いつからか。それはいつからか。もう、忘れた。

「——ちよいと、見せてくれ」

「へ？ あっ、待って!?!」

言いつつ手を伸ばし、栗形の辺りを掴み取る。

制止の声を耳が聞き取った時には既に遅く。

触れたその手に、刀が吸い付いた。

「!?!」

「早く捨ててください!!」

捨てろ、それが出来ればどうにしている。

離れぬのだ。皮膚にびたりと吸着している。そして手を伝い、腕を伝い、身の内より失われる何か。何かを、吸われている。

しかし、それもほんの一瞬のことだった。唐突に刀は吸着力を失くし、開いた掌から離れ落ちる。

落ち、倒れて——いない。

床に倒れず、止まった。あろうことか刀は中空で静止した。

「再封印します! ジンクロウさんは退がって!」

ウイズが刀に触れんとする。娘はその手掌に幾何学の円陣を創り出した。魔法による封印術というやつだろう。

気弱でおっとりとした娘の挙動は実に迅速であった。鉄火場を潜ってきた者の証左。

さりとてそれは己もまた同じ。

そして、己の戦闘経験は告げている。この機、この間合では届かぬ。ウイズの手が刀に触れるより早くそれは動く。下段、抜き打ち。

娘は逆袈裟に斬り裂かれるだろう。

鯉口が切られた。

鞘走る。

刃が娘に迫り——

「!」

「っ!」

娘を押し倒すように退転。一步で刃圏を逃れる。

「じ、ジンクロウさん……!?!」

右肩甲よりやや下を斬られた。切先が掠めたのだろう。大事無し。娘を背後へ押し遣り、それへと向き直る。

「かつは、なんだそりゃあ」

抜き放たれた刀、その露となった刀身。なんと紅いのだ。見紛うことなどない。それは鮮血の彩^{いろ}。

刃紋などと言うが、紅に染まったその刃は時折本当に波紋を立てた。ゆつくりと波立ち、紋様は一定せず、流動している。

「ジンクロウさん、斬られてっ」

「退がってな」

「そ、そんな訳にはいきません!」

「おめえさんが只もんじやねえってことはよつく解った。だからこそよ。ここでは分が悪いことも、おめえさんなら解ろう」

室内戦闘。自然、逃れる場は限られ、十畳ほどのこの空間ではそのほぼ全域が刃圏。

宙に浮いた刀に、踏み込みも何もあるまい。

ウイズは押し黙った。やはり戦さ場というものを心得ている。いい子だ。

刀の紅い切先が己を指す。

「心配すんな……なあに、手馴れたもんさ」

ウイズを番台の裏へ残し、じりじりと移動する。切先もまたこちらの動きに合わせ、ゆつくりと刃先を旋回させた。

好し好し。相手の狙いは完全にこちらを向いた。

内心でほくそ笑む己を見透かしたか、刹那刃は天井を向き一気に振り下ろされた。

半身に躲す。

床を指した刃が返る。斬り返し。

跳び退り、大きく躲す。

追い縋ってくる。中空での刀の形はおそらくは正眼。そこから――
―刺突。

一撃。躲す。

二撃。躲す。

三撃目は突きではなく、

(逆胴……!?)

右方へ跳び逃れる。開け放したままの鉄の箱を蹴飛ばした。

足を僅かに捕られ、体勢が崩れる。

来る。

大上段。唐竹割り。

体を捌き損ね、まな板の鯉にも近しい敵が眼前にある。真二つに両断したい。その気持ちは解らんでもないが。

刃が降り来る。

「殺し急いだな」

紅い切先が額を割る——より早く、我が手は刀身を捕えていた。

両の掌で鎬を挟み止める。真剣白刃取り。見世物にすればさぞ観客は喜んだであろう。今はウイズ一人だが。それほどに、出来過ぎた精度だ。

「すごい……」

そして己の背後の壁には、まっこと丁度良いことに木の柱が立っている。

なおも振り下ろさんと籠められる力。尋常な膂力ではない。使い手無きままこれほどの力を発揮するとは、一体何故か。

が、今はそれを利する。

切先を僅かに逸らせ、己の顔面、その横合いへ導く。そうすれば後は自ずから、勢いのまま刀身が木の柱へと突き込んだ。

前転し、その場を逃れる。糊で固めたでなし、木に刺さった程度ではすぐに引き抜かれる。

ついでとばかり床に転がる鞘を回収した。

背後で木の抉れる異音。振り向けば、切先が勢い突進してくる。顔など無くとも分かる。些細な手妻で虚仮にされ、怒り心鉄に発したことだろう。

己を刺し貫きたいその心情、まったくもって理解できる。

故にその紅色の刃先、その軌道へと鞘口を合わせた。
すらり、鞘中で刃が走る。その手触り。刀身が鞘に消え、最後に鉏はばきをしつかりと啜え込んだ。

過たず刀はそれ自身の力によって、再び鞘へと納まった。

「うおつととと。ウイズ、すまねえが紐か何か寄越してくれ」

「……………え、あ、はい！ ただ今！」

刀はなおも手の中で暴れた。柄を握り、鞘に強く押さえ付ける。

活きが良いにも程があらう。

呆れと、それ以上の感慨を以てそう思う。

7話 地獄の沙汰もなんとやら

明くる日の早朝、ギルドにて。

人も疎らなこの時刻、依頼掲示板の前に他の冒険者の姿は無い。都合がいい。さっさと依頼書を剥ぐとしよう。探す手間すら要らぬのだから。

その依頼は、己が冒険者の登録を済ませたその日から未だ達成報告のないものだ。

固有職業の指定もなく、適正レベルの下限もない。だというのに誰一人受ける者が無いのは、その難度故か。

剥ぎ取った依頼書をそそくさと受付に持って行こうとした時だ。

「お？ おおつす、ジंकクロウ」

「ふわあああ……ふあ？」

背後より声が掛かる。振り向けば少年がこちらに手を振っている。そしてその隣で何憚ることなく大口を開け欠伸をする少女。

見慣れぬ黒緑色の服装が特徴的でよく覚えている。名は確かカズマ。
マ。

隣の娘のこともよくよく覚えている。何せ吐瀉物を浴びせ掛けられたのだから。生憎と名は知らんが。

カズマらに向き直りながら、手にしていた依頼書を尻の衣ポケット嚢へ捻じ込んだ。

「よう早いな。仕事かい」

「ん、まあ、そんな感じ、かな……」

「なんだ。歯切れの悪い」

はつきりとしらない物言いだった。逡巡し、未だ結論を出せぬ。そんな響き。

「実はさ。今日が初討伐なんだよ、俺ら」

「ああ？ 討伐だあ？ その装備なりでか」

上から下まで幾ら見ようが、腰に巻いた革帯に佩いた剣が一振りのみ。こんなものを装備などと呼べば鍛冶屋が発憤すること請け合いです。

事実、己がそれを確かめた。

カズマは気まずさを誤魔化すように後頭を搔いた。

「し、しようがないだろ。まともな装備を買い揃えるような金も無いし、かといつて土木作業じゃ食う分稼ぐので精一杯だし」

「解らんではないがなあ、もう少しどうにかならんのか」

「いやさ、俺もさ、貯金が出来てからとは思ってたんだけどさ……せつかく異世界来てんのに蓋を開けたらバイト生活で……ファンタジー要素欠片もないし……RPGの主人公とまでは言わないからせめて冒険者っぽいことを……」

「??」

ぶつくさ何やら垂れ流される少年の言葉は半分と理解の及ばぬものだった。ただ鬱憤というか、焦燥というか、もはや怨嗟というのか、そういった念はしっかりと感じられる。

「何にせよやめときな。危なっかしくていけねえよ」

「ぶわああああ……にやむ……ふんっ、素人はこれだからいやね」
惜しげもなく思う存分口腔内を晒した娘が、きりりと表情を引き締め言った。胸を反らしふんぞり返る様などは自信に満ち溢れている。

「カズマにはこのアクア様の加護が付いてるのよ？ アークプリーストであり女神であり超絶美少女でさえあるこのアクア様がいれば百人力、討伐なんてちよちよいのちよいよ」

「ほー、そらまた大層だな」

娘に比してカズマの方は、ただでさえなけなしの自信が空気を抜かれたゴム鞠のように萎んでいくのが見て取れた。

両の手でひしと頭を抱える。

「めっちゃ不安……」

「ちよつとおなんだよ!?!」

その心持ちは察して余りある。

だが娘の様に限ったことではない。カズマにアクア、この二人を見ていると、どうにも放って置いてよいものか。

裏路地の暗がりで行き会った折も、少年はぼつねんと佇み夜空を見上げていた。放り捨てて置くには忍びなく、袖擦り合うも多生のなんとやら。それだけの心持ちであったのだが。

「……」

妙な節介が胸中に湧いてしまう。

「カズよ」

「はいカズマです……カズ？」

「もし良けりやな、この俺も連れてってくれねえか？」

「え」

意表を突かれたとばかり、カズマはぽかんと口を空けた。

「二人より三人の方が依頼の成功率も上がると思わんか？」

「そりや確かに……」

「はあ？ どうしてどこの馬の骨かも分かんない奴を私のパーティに入れなきやいけないわけ？」

「ああうん。どこの誰かっていうとな、お前を馬小屋まで運ぶのを手伝ってくれたのにお前にゲ○ぶっ掛けられた親切で可哀想な人だよ」

「何より三人で依頼受けちゃったらそれだけ私の報酬の取り分が減っちゃうじゃない!!」

「〴〵何より〴〵っていうか〴〵そののみ〴〵だよ。お前がごねる理由金だけだよ」

そのまま暫時、カズマとアクアは睨み合った。

「カズマ!? あんた女神たる私が信用できないわけ!？」

「うん」

「即答!？」

「という訳で、むしろ頼むわジंकロウ。こいつとじゃ不安しかない。明日も見えない」

「ううううヒキニートが意地悪言ううう」

「誰がヒキニートか!? お陰様でな、今じゃすっかり立派なバイト戦

士じゃ!!」

「かつはははははははは!」

気付けばその小気味の良い応酬に、堪らず笑声を上げていた。

「ははははは! 仲の良いこったなあおめえさんら、ははははははは!」

「喧嘩するほどなにかって言いたいのかもしれないけどな、わりと本気で心外です」

「ははは」

「はあああ!?! それこっちのセリフなんですけどお!? 冴えないDTヒキニートがこんな絶世の美少女と一つ屋根の下暮らせてることにむしろ感謝して欲しいくらいなんですけどお!?」

「けはははははは、くくく」

「感謝? 感謝!?! なら言わせてもらおう。そんなもんはな……俺を一度でもムラムラさせてから言ってみろやあ!! すげえぞ一度もだぞ!?! 同じ寝床の真隣にいても俺お前で一度もムラムラしたことないんですけど!?!」

「だはははははははははははは!」

「じ、自分の不能を私の所為にしないでくれる!?!」

「誰が不能か!! こちとら毎朝全力でスタンディングオベーションじゃ!!」

「だああはははははははははははははは!!」

「ジंकクロウジंकクロウ、幾らなんでも笑い過ぎ」

腹を抱える己にカズマが複雑な顔で言った。

「いやあすまんすまん。いいい漫才見させてもらった……」

「見世物じゃねえよ」

「そうよ! こんなクオリティのもの漫才とは呼べないわ! いいえ呼ばせないわ! いい? 本物の芸っていうのはね」

「宴会芸の神はちよつと黙ってる!」

「ぶっはははははははは」

「ほらあまたジंकクロウ笑い出しちゃっただろうが!?! 話進まねえよ!!」

まったくだ。

「いや、いや、己から言い出しておいてなんだがな、討伐は一日待ってくれねえか?」

「え? なんぞだ」

「ちよいとした野暮用だ。勝手は承知だが、今日一日は明日に備えてゆうつくり休んでな、存分に英気を養って欲しいのよ」

「なんであんたの都合に合わせなきゃなんないのよ。だいたいそれだと今日の稼ぎゼロってことじゃない!? そこんどこどう責任とってくれるわけ?」

「代わりと言っちゃなんだが晩飯は奢るぜ? 酒は好きかい」

「カズマ、ジंकロウさんの言うとおり今日は一日ゆっくりしてましょ」

「手のひらくるつくるじゃねえか駄女神」

一転満面笑顔の娘に、カズマはげんなりと脱力して言った。

ともあれ言質は取った。甚だ手前勝手な都合故に。

「すまねえな」

「え? いいよ別に。もともと迷ってたしき。むしろ猶予が出来てちよつと安心してる」

「そうかい」

「ジंकロウこそ良かったのかよ。言つとくが俺、剣持って戦ったことなんて一度もないからな。組んでから後悔しても責任は一切取らないからそこんどこよろしく!」

そう言って少年は屈託なく笑った。

機微に聡いとても言おうか。この少年は、その言動の端々に気遣いを窺える。本人にその自覚は無いようだが。

それはむしろ、好ましかった。

「あ、そういえばジंकロウの用って、やっぱり討伐なのか?」

「おお? どうしてそう思う」

「や、だって朝から掲示板の前に居たからさ。てつきりそうなのかなーって」

やはりどうにも目端が利く。

別段、隠し立てするものでもないのだが。

何故か、このアクア嬢あたりが自分達も連れて行けなどと言い出すような気がしてならなんだ。そんな勘働きがある。

「なあに物珍しさにちよいと眺めてたのよ。己は今日も今日とて溝さらいだ」

「なあんだ。高報酬の討伐にでも行くのかと思ったじゃない。あ、その時は私達も連れて行きなさいよ！ アークプリーストの実力を遺憾なく見せてあげるから。取り分は九一でいいわ」

「邪魔しかしない未来しか見えんわ」

「ははっ、機会がありやあな」

的中とは恐れ入った。

「それじゃ俺らは戻るわ。土木作業がない日なんて久々だし」

「オフ！ 完全オフよ！ 朝からシユワシユワいつちやおうかしら」

「やめろ駄女」

「せめて神は付けてよお!?!」

最初から最後まで騒々しいままにカズマらはギルドを出て行った。

たった二人だけであの賑やかさ。見ていて飽きぬとはあのような者達のことよな。

ともあれ、カズマの言ではないが、話を進めよう。己曰くの野暮用だ。

剥ぎ取った依頼書は二枚ある。一日で済ませるとなれば少しばかり忙しない。徹頭徹尾自業自得である。他人の思惑を曲げさせ、己の思惑を通そうというのだから。

受付には既に職員が着いていた。この時刻から仕事を始める冒険者も居るだろう。当然の配慮ながら有り難い。

見知った顔の座る番台へ赴いた。

「あら？ ジンクロウさん。おはようございます」

「おはよう」

「今日は随分お早いですね。清掃業務ならあと二時間くらいししないと受付できませんが……?」

「生憎と今日は別の用向きだ」

すつかりと掃除人が板に付いてきたものだ。

なり手が居ない依頼を率先して消化すれば重宝もされるか。

「あ、じゃあ遂に討伐ですか？」

「おうとも。就いては尋ねたいのだが、依頼を日に二つ受けることあ
できるかね」

「二つですか？ うーん、依頼内容と募集要件にも因りますが……依
頼書にある項目を満たしているなら、特に問題はない筈ですよ」

「そうかい！ そういつあ良かった」

衣囊から取り出した依頼書を番台に広げた。案の定皺くちやだが、
判読するに支障はなからう。

受付嬢殿は苦笑した。

「もお、どうしてこんなにくしゃくしゃなんですか」

「すまんすまん」

「いいですけどね。討伐はそれぞれ制限期間が設定されていますから、
今日を開始日としてそれぞれの期限内にノルマ達成を目指してくだ
さい。ふむふむなになに、『白狼の群の討伐』と『一撃熊の討伐乃至撃
退』ですか。どちらも制限期間は一週間ですねー。依頼の開始前と終
了後に冒険者カードを確認しますからどうか忘れないでえええええ
えええええ?!?!」

「要件を見るに、れべるの下限も職業の指定もないようだ。問題は
ねえな？ そら、手続きを頼む」

廻ること丸一日。ウイズが倉庫から引っ張り出してきた刀との一
悶着を終えた頃。

柄と鞘を紐で縛り、さらにウイズが再封印とやらを施すことによ
やく件の兇器は大人しくなった。

娘の冷えた指先が右肩に触れる。死人である故か、あるいはそもそも先の冷える性質なのか。どちらにせよ、多少動いたことで熱を持った我が身には快い。

清潔な布巾で血を拭い、包帯を巻いていく。負傷の手当ても淀みない。やはり、どうにもこの娘、場馴れが過ぎる。

「ごめんなさい……」

「何故おめえさんが謝る」

「私の不注意でした。事前にこの剣について詳しくお伝えしていればこんなことには」

「さて、どうであろうな。己ならば事情を知ろうが知るまいが、先に手が出ていただろうぜ。それほどに、見事な一振りだ」

口の端を引き上げて笑い掛けると、娘は困ったような呆れたような微笑を浮かべた。

シャツを羽織り、肩を回す。稼動に支障は見られない。

「しかしそれにしたとて、あの様は只事ではない。一体全体こいつあんななんだ？」

箱に一先ず仕舞われたそれを鋼鉄越しに透かし見る。見えるものか。見える筈がない。

だのに、箱の中で煌々ときらつく紅い刃を幻視するのだ。もはや眼球に焼き付いて離れやしない。それほどまでの、鮮烈。

「……出自は、はっきりとは分かりません。遠い昔、東の果てにあったという島国でこれは造られたそうです。誰がどうやって、何を目的に打ち上げたものなのか……ただ、その切れ味は凄まじく、曰くアダマントはもとより、あのオリハルコンでさえ斬り裂くことができるとか。それだけに多くの騎士やソードマスターがこの剣を血眼になって欲しがりました」

アダマンダのオリハルダのと言われても今一つ腑に落ちんが、恐ろしく頑強な素材であるらしい。

「うん？　するってえと、こいつを抜いて実際に使った者がいるというんことか？」

先程の有様を見るに、とてもではないが正調まともに振り回すことなどで

きそうもない。何らかの方法があるのなら是非に知りたいものだ。

しかし、こちらの問い掛けにウイズは即答しなかった。複雑な顔を作り躊躇うように口を開けては閉じる。そうしておずおずと。

「……その、誰かが使ってそれを確かめた訳ではなくて、ですね。使おうとした騎士さんや剣士さんが、たまたまアダマントイトやオリハルコン製の鎧を着ていたそうで……」

「はっ、なるほど」

つい今しがたの己らのような事態へ陥り、その騎士か剣士は敢え無く刀の錆にされたのだろう。そのご大層な鎧ごと。

これほど確かな逸話もないわ。もはや諧謔と言っていていい。

だがしかし、ウイズの表情はなおも晴れぬ。喉の奥に言葉を詰まらせているかのようだ。どうやらこの娘、この期に及んでまだ出し惜しんでいやがる。

「そういえば、手を触れた時こいつに何やら吸われたが、ありやなんだ」

「はうっ」

異音を口から漏らし、ウイズはびくりと肩を震わせた。そもそも明白なこと。凶星とすら呼べぬ。

笑みを向ければ、観念したようにウイズは頷いた。

「……この剣は呪いを付与されています」

「呪われてんのは見りゃあ解る」

見ただけで解る。

「は、はいご尤もです……それはその、一種のレベルドレインに近いもので」

「れべるどれいん」

鸚鵡返しに口にしても意味内容は何一つ咀嚼できなんだ。

「レベルドレインとは文字通り、触れた対象のレベルを吸収、減退させる能力です。えっと、ジंकクロウさん。冒険者カードを見せていただいてよろしいですか?」

「? そら。こいつがどうかしたか」

幸い尻の衣囊に入れっぱなしにしていた為、すぐに見付かった。薄

板を受け取ったウイズは暫時その内容に目を落とし、程なくその表情を曇らせた。

「やっぱり……」

「どうした」

「見てください。ここ。この項目の数字。これがレベルです」

娘の細い指先に目を向ける。なるほど確かに、レベルと銘打たれた項目に数字が記されている。

「モンスターを倒したり、生物を食べたり、訓練を積んだりして得られる『経験値』、あるいは『魂の記憶』と呼ばれる力を一定量蓄積することで人はレベルを上げ、成長します」

「ほー」

自分自身の成長を明確に数字として知ることが叶うなら、これほど都合の良いものはない。そうそう杓子定規に量られるものか、そんな疑問がないではないが。

「この剣は魂を喰らうのです。触れたものの生气、血肉すら啜って。ですから……」

ふと見れば、ウイズはいかにも暗澹と己の冒険者カードを見下ろしている。

「ジンクロウさん」

「うむ」

「貴方のレベルは……その、残念ですが……最低値まで、下がってしまいました！ 本当に、本当に申し訳ありません！」

「その数字は元から『1』だったと思うが」

「へ？」

「？」

顔を見合わせれば、娘の面立ちの端正なことがよく分かる。ぽかんと口を開けた間抜け面も、なかなかどうして愛らしい。

「あ、あの身の熟^{こな}しで、レベル1なんですか!？」

「まあ、昔取ったなんとやらよ。そんなことよりだ」

娘の慌てようには生憎と応えてやれぬまま、己は既に腹を決めていた。

「店主殿、こいつを俺に譲っちゃくれねえかい」
「え？」

一音を最後に、短くはない沈黙が店内を満たす。
「……………えっ、え、ええええええええええ!？」

ようやく現実に復帰したウイズは開口驚嘆の叫びを上げた。

「あの、あの、でもこれ、呪いの剣なんですよ!？」

「正真の妖刀と称して然るべき品であろうな」

「この剣を持っている限り、貴方のレベルは上がらないどころかずっと『1』のままになります!」

「委細問題ない。ぼいんとだのなんだのと考えなくて済む。身軽でいいじゃあねえか」

「まともに扱えないのに……………」

「それについては一つ、考えがある」

購買意欲を殺ぐ為に様々列挙される欠点、危険性。思うに、そもそもこの娘には、売るという心算すらなかったのだろう。そしてまさか、買うなどと血迷ったことを己が口走るとも考えていなかったのだろう。

商人には不向きな性質である。客を慮る余り利を得る機会を逸している。

「本当によろしいんですか……………?」

「おうとも。一言はねえ」

再三、娘は問いを重ねた。信じられぬとばかり。

己の返答を聞き受けて暫時思案の間を作る。そうしてたつぷり十数えて、道具店店主は深く頷いた。

「わかりました。ジंकクロウさん、この剣は貴方にお売りします」

観念したような、申し訳も立たぬと言いたげな、なんとも色彩入り乱れた顔をする。

こちらの身を案じると同時に、商品が売れたことにも娘はひしと喜びを表していた。

「うむ、で? 幾らだい」

「はい。一千万エリスになります」

慈愛さえ滲む微笑が娘の顔かんぼせを彩る。
こうして己は、その美しい笑顔に報いんが為、金策に奔走すること
と相成った。

8話 一太刀馳走

一千万エリス。金銭感覚も少しばかりは備わってきた今日この頃、それが大金であることは言うまでもない。

だが、その額がかの一振りに見合うかどうかはまた別の話となろう。

刃の様をこの目にしたのはほんの一時のこと。しかし、その刃味はこの身でしかと味わった。あれは兇器まがきもの。その真正の理を顕した刃金。

「……」

己の思考を顧みて、自嘲する。

これではまるで妖刀に魅入られた狂いだ。

兎にも角にも、あの刀の金銭的価値として一千万エリスは間違いなく破格だ。

誰の作かも分からず、伝説の英雄が手にしていたなどという逸話もない。歴史的価値はその時点で希薄。武器としての高い性能は、残念ながら刀の妖しき力が全て台無しにしている。

唯一、美術品の評価でのみそれは値札を付けることが能うのだ。

故あつての一千万。

されど、一千万。

日々糊口を凌ぐに苦心し、無論のこと蓄財などありはしない身上。即金で支払うには非現実的な額だった。さりとして二言を垂れる心算はない。

そうして極短期の内にそのような大金を手にしたいと夢想するならば、それに見合うだけの対価を要する。

命を、己が身を鬼一口へ投じる覚悟が。

その上で、冒険者稼業なるものは最適である。それさえ惜しまぬなら、どうとでも稼ぎ様があるのだから。

場所は道も確かならぬ鬱蒼とした山中。早朝に街を出たが、枝間から覗く日は既に随分と高い。

ギルドからの情報に誤差がないのならそろそろ目的の領域へ踏み込んでいる筈だ。

討伐対象一番『白狼』。

語感の通り、それは白い狼であるという。狼の他聞に漏れず群を形成し、集団で狩りを行う。近隣の牧場の家畜はもとより、時に人間の村落さえ襲うのだとか。

しかし此度、常にならない事態が起こっていた。

白狼の生息圏は雪深い山奥。故に獲物を求めて麓に移動するのは少なくとも「冬季」に限られていた筈だった。そろりと木枯らしが吹き始めたとはいえ、控えめに見積もって今は秋口。

ギルドの職員らも訝っていた。実際に被害に遭った麓住民など寝耳に水であつたらう。

風が吹けば桶屋の儲け話の例もある。何かが作用したのだ。常でない、何かがある。

不意の、その時だ。

「……」

思考へと流れていた五感が気配を拾う。

音だ。草叢を撫でる静かな音。踏んだ枯枝さえ折らぬほどに静謐な挙措。

日が雲に陰り、林を薄暗がりか席卷し始めた。その向こう。居る。

気色。目には見えぬ色。肌身に纏わり付き泡立てる、それは——殺気。

「くく、風上に陣取って見りゃ、早々に釣れたな」

独り言の心算はなかった。そして応えを期待したのでもない。

が、相手方は律儀にも応対してくれた。草を掻き分け、押し隠していた気配を露にする。

暗がりとその白い被毛は目立つ。本来は雪原の中でその身を隠す為のものであろうが、どういう訳か奴輩は冬を待てず山を下りて来た。

一匹、二匹、三匹。続々増えていく。前と言わず、左右と言わず、背中にもその突き刺さるかの視線を無数に感じた。

「ううん？」

牙を剥き、赤らんだ歯茎を晒す狼の目。それらもまたぎらりと赤光を放った。その「三つ」の目が。

なんと、額にもう一つ目玉があるのだ。

瞳孔、虹彩を持たず血管も通わぬ。それは眼球ではなく、宝玉。受付嬢殿曰く、結晶化した魔力塊が額に隆起したものだそうだ。

「Grrrrr……！」

「面妖な」

その今更に過ぎる感慨に苦笑する。

左手に携えたものに手を掛けた。全長二尺超。やや反りを持つ片刃の西洋剣。サーベルと鍛冶屋は呼んでいたか。

鏢から柄にかけては半円の護拳が渡されている。

抜剣し、鞘は放った。素振りとはばかり一閃、空を薙ぐ。

「Ga！」

劈くような風切りの音に獣達は半歩退いた。

その程度で怯む訳もない。武器を持った人間に対する当然の警戒心だ。そこに一切の緩み無し。

多勢に無勢、油断などしてくれるなら苦勞はないが。

「不足もまた無し。かつははは……そら、いつなりと来い！」

「Grrraaaa!!」

号令とばかり、一斉に白い獣が己へと躍り掛かった。

——欺瞞である。一番槍は、我が後背の一匹だ。

左脚を軸に半回転、半拍と要さず後方へ振り返る。そこには今まさに大顎を開け、食い掛からんとする狼があった。跳躍し、その身は中空。

絶好の、斬り間。

回転運動、正しく独楽の様相で、一文字に。

首を斬り裂いた。両断には至らず皮肉で繋がった頭と身体が地に落ちる。

「シイッ！」

刃を返し、身を翻す。再度前方へ刃先を向けた。

今度は二匹。左右から。右方の者を勢いのまま斬り飛ばし、左方はその顔面を踏み込んだ左足下で蹴り落とした。

無論、こちらからも仕掛ける。

脚に噛み付こうとした一匹を跳び越え、その後ろで出番を控えていたのだろう一匹に躍り掛かる。まるで自分はまだ攻撃などされぬとも思っていたかのような、獣にあるまじき虚を衝かれた顔だ。

脳天から打ち下ろす。白い頭が二つに裂け、不出来な赤い花が咲いた。

横合いからまた一影、跳び出して来る。

半歩身を引くだけで済む。

「G a r r !？」

「隙有り、とはならんな」

躲されたことが余程に意外だったのか、硬直しこちらを振り仰いだ犬面、その額の宝玉へ刃先を突き入れた。

「む!？」

引き抜けば悲鳴すら上げず倒れ伏し、獣は絶命した。まさかと思えば、どうやら額の赤目こそ彼奴らの弱所であるらしい。何故そのように分かり易い位置に。そんな疑問が湧き——サーベルの切先を見て納得する。

ほんの三分ばかり、刃が欠けていた。

「はっ、骨を斬ったとてこうはならんぞ」

並ならぬ硬度。うっかりと刃筋がぶれ、半端な打ち込みを晒したなら弾き返されることだろう。

気組みを今一度整え、周囲に視線を這わす。

先程から狼共め襲い掛かって来ん。警戒の位が一段上がったようだ。それとも。

「どうしたい。臆したかよ!？」

言葉など通じまい。しかし挑発は思った以上の成果を見せた。

一匹が辛抱ならんと、単身襲い掛かって来たのだ。

好都合この上ない。食らい付こうと開けた顎に合わせ、横一文字に剣を振り抜く。口の端へ斬り込んだ刃が頭部へ至り、上顎と下顎を分断した。

一匹の凶行は途端、他の者へと伝播する。最初に見せた包囲襲撃、その統率が一瞬乱れた。

隙だ。

「カアッ！」

攻めあぐね脚を止めた者。攻め掛かるも仲間と足並みが揃わぬ者。

案山子を斬るも同じである。一息に五匹、二息でもう五匹、地に這わす。

そしてそういう者から斬り捨て行けば。

「あとは四分五裂」

二十は居ただろう白狼も、今や四、五匹といったところ。

隠れ潜んでいる者は勘定する必要もない。待ち伏せ、奇襲を狙うには数を失い過ぎている。

詰みだ。

「G a a a a A A A A A!!」

「……」

正面から、その者は駆け来る。一際大きな体躯。あるいは群の頭目か。

一直線。無策、無謀。だがその心情、理解に難くはない。

狼でありながら、一騎打ちを挑むその愚行……称賛に価する。

獣が跳ぶ。闇に白銀の影を刻んだ。寸分狂わず己を捉え貫く赤い目玉、残光が尾を引く。

その目を見据え、待つ。頭上高く構えた大上段。

顎が我が喉笛を食らう。それを先んじる。

一剣は斬り、そして裂いた。

二つへと分かれた白い骸が己の背後に墜落する。

血振るい、周囲を睨め付けた。もはや牙を剥く者も唸りを上げる者もない。怯え竦む静寂が暫し。

程なく白狼達は、山の奥へと逃げ去っていった。

「ふうう」

残心を終え、意識下にて制御していた氣息をようやく吐き出す。

とはいえそれも、束の間のことに過ぎない。

何故なら次の手番が聞つかえているのだから。

傾き始めた日の光。それは林に濃密な影を落とす。その奥から這い出してくる。

「……………よう、お出でなすつたなあ」

白狼は既に去った。そも気配の質が違う。白狼のそれが鋭利な氷柱であるなら、彼奴のそれは激する業火。

討伐対象二番『一撃熊』。

言い得て妙な名である。その膂力の尋常ならざる凄まじさを一言のみで解さしめるのだから。

現れたのは全高八尺を超える巨大な獣けだもの。黒い被毛で覆われている。身の高さは無論のことその厚みときたら、己が三枚重なったとしても到底足りはすまい。真実丸太と同等のあの手脚、何人の冒険者を粉碎してきたやら。

熊などと銘打たれているが、その顔はむしろ鬼の形相を思い起こさせる。角がないことが不可思議でさえあった。

今日この日、わざわざ選び二つの依頼を重複受託した甲斐があるというもの。白狼達の血の臭いに誘われ、こうして出向いてくれたではないか。

「オオオオオオ……………!!」

依頼書を確認した際見付けたことだ。白狼の移動経路と熊の縄張り、どういう訳か接していた。

なればこれ幸い、横着をした。

縄張りの内で血臭を撒き散らし暴れば、当然現れてくれるだろうと。そう悪くない公算であったと自負している。

勝手極まるこちらの都合など知ったことではないだろう。

憤怒を露に、巨獣は凶相をさらに歪めた。

我が氣息は既に組み終えた。構えを取る。

「おめえさんの縄張りに土足で上がり込んだせめてもの礼だ。その御

名に倣い……一太刀、馳走仕る」

「グウウオオオオアアアアアアアアアアツツ!!」

叩き込まれる咆哮と大腕。

臆することはない。なあに、誤ればただ死ぬだけだ。

豪腕の間合へ、己の刃圈へ——踏み込む。

カウンターを布巾で拭う。これで何度目だろう。

自覚はあるけれど止められない。

開店前と閉店後に掃除をするのがウイズの日課だった。いつお客が来てもいいように、綺麗な店で出迎える為に、いつだって手を抜いたことはない。

「……」

ふと、掛け時計を仰ぎ見る。閉店の時刻はとうに過ぎて、本格的に店仕舞いを終えている頃合。窓の外はすっかりと群青の夜闇で満ちてしまった。

だのにウイズはまたカウンターの表面を磨き始める。そろそろ光沢どころか、鏡面化しそうな勢いだ。

構わない。だって、待つことには慣れているから。

「……大丈夫かな」

そうして、足元に置いた金属の箱を見た。

まさか、本当に、この剣に買い手が付くなんて……自分で入荷しておいて酷い言い草だが。

呪われた剣。魂喰らい。妖刀。いろいろな呼び方をされ、いろいろな手に渡り、渡った結果その人が斬られたり。とにかく悪評ばかりの品。

けれど自分の目にはとても良い物に見えたのだ。そしていつか

きつと、この剣を必要としてくれる人に出会えると……そう思つて数年、今では立派な倉庫の肥やしである。

でも遂に、ようやく、その相応しい持ち主が現れた。
ジンクロウ。あの不思議な青年。

数多の魂を喰らつてきたこの剣に臆すことなく向き合い、その身を斬られてなお欲しいと言つてくれた人。

「本当に、よかったですね」

箱に眠る剣にウイズは笑いかけた。

しかしそれでもまだ、心には不安が残る。

青年は剣の金額を聞くと、時間をくれと言つた。

『ご覧の通り、食うや食わずでな』

悪戯を咎められた子供みたいな笑みだった。

そして、青年は一括ではなく手付金を払つた上で残額は賦払いにしてほしいとウイズに持ち掛けた。

勿論ウイズは了承した。手付の額を決めることはおろか、ジンクロウに指摘されるまで証文すら用意しなかつたが。残念ながら、手付金を僅かに支払い商品だけを持って逃げるかもしれない、などという発想はウイズの頭に無い。

一千万エリスは大金だ。さしものウイズとて金銭感覚は人並にある（気である）。満額が支払われるまで何年でも待つ心算だった。

けれど、彼は。

『手付は明日の夕刻には用意して参ろう。すまねえがちよいと待つてくん』

軽やかにそう言うや、店を後にした。

一千万エリスに対する手付金を一日で用意などできるものだろうか。ウイズでさえ疑問を呈する程だったが、生憎と尋ねるタイミングを逸してしまった。

「……」

待つのは慣れている。

不意に時計が鳴つた。夕刻とは、もう呼べない時間だろう。

掃除用具を仕舞い、店の鍵を閉める為に扉へと歩み寄る。そうして

サムターンを回そうとした時——扉が逃げた。

「あっ」

というか、引き戸が引かれ、サムターンを取り逃がしたのだ。開かれた扉の先には、待ち人が立っていた。

「おう、遅くまでご苦労だな」

「ジंकクロウさん！」

口の端を持ち上げ、青年は笑った。

「いやあ素材の回収だの査定だの手間取ってな。随分と待たせちまつた」

「……いえ、いいんです。ちゃんと来てくれましたから」

気付かぬ内にウイズも微笑を湛えていた。

待つことには慣れている。来ない日を数えるのももう辛くはない。けれど、

「ふふっ」

待ち人を出迎えるこの嬉しさは、終ぞ知らなかった。

「土産だ」

そうして紙袋を娘に手渡した。

娘は素直に受け取り、その予想以上の重さに驚いた様子だ。

「こ、これ、昨日頂いたケバブサンドですか？　なんでこんなに……？」

「ああ、そりやあな」

両手に持ち替え、紙袋の中をウイズは覗く。紙片に包まれたけばぶが入っているだけ、のように見えるだろう。

けばぶを一つ二つ退けると、ようやくその下のものに気が付いたらしい。

「へ？」

「討伐で五百、素材の買取で三百五十、迅速なる依頼達成にどうぞ報奨として五十と色が付いた。故に、手付金は九百万エリスだ」
「え」

「残りの百万だが、悪いがツケにしといってもらえねえかい」
ぽかんとするウイズに片手合掌に頭を下げて拝む。聞こえているのかいないのか。

思考の停止が数秒続き、娘が目を覚ましたのはまたぞろきっかり十を数えた頃だった。

ウイズの様子が元に戻ったのを見計らい、遂に目当ての品を手にする。

再封印とやらが効いているのか以前のように吸われることはなかった。

不安げな娘の視線を背中に感じる。

「なんだい」

「あ、いえ、その。お売りしておいてなんですが、その剣、どうされるつもりですか？」

「無論使う」

己には、刀剣を美術品として愛でる風雅などない。

「でも、どうやって……？」

「それを今より試すのよ」

不遜に笑みを刻んで、右手で柄を握る。そしてその刀身を覆う鞘に左手を掛けた。

「な、まさか」

「念の為退いておれ」

娘の応えは聞かず、掴んだ鞘を引き抜いた。

途端、現れ出でたるは眼球を焼くほどに鮮烈な紅い刀身。鮮血の刃。

手の中で、尋常ならざる力が暴れ狂う。逃さぬ。先日の二の舞は流石に飽いた。

今にも己を刺し、斬り殺そうとする切先。しかし、今宵はそれを叶えてやろう。

力の拮抗によって小刻みに震える刃、それを空いた左手で握り込んだ。

「!? ジンククロウさんっ」

刃が手掌に食い入る。それではまだ足りぬ。

故にほんの数寸、手の中で刃を走らせた。

そこまでしてようやく、我が手には裂傷が刻まれ、そこから血が溢れ出てくる。いかにも赤々と血は刀身に沿って滂沱していく。

それに比して、ウイズの顔は蒼白だった。

「何を、何をしているんですか!?!」

「ほおれ、見な」

「え?」

血は流れ伝い、刃を濡らし——滴り落ちない。

「はっ、飲んでいやがるぜ」

ぐぐりぐぐりと美味そうに。長年の渴きを潤すかのように。

程なく変化は表れた。

刀身の紅色が消えていく。

「え? ええ!?!」

「ほう」

血色を失くすが如く彩は消え、代わりに表出したのは鈍い銀。刃金の色艶。

灯りを照り返す鋭い光は紛うこと無き正調の刀のそれだ。

気付けば、己を斬殺せんとする怪力も、殺気すら鳴りを潜めていた。今一度刃を検める。

「かつはは、なんだい。紅など差さずとも十分に美しいではないか。のう?」

「へ!? あ、はい」

「いやいや、おめえさん本当に良い品を見付けてくれた」
訳が分からぬと書かれた店主の顔に、今一度向き直る。

「感謝する」

そして刀を鞘へと納めた。

9話 捨て猫のようなもんだ

早朝。

冒険者ギルド併設の酒場、そのテーブルの一角に俺とアクアは座っていた。流石にこの時間は飲んだくれな冒険者の姿もなく、酒場は閑散としている。いつもの……習慣化してることに悲しみを禁じ得ないが……土木作業には行かず、何故こんな時間からギルドにいるかといえ、昨日の約束、延いてはその待ち合わせの為だった。不意に、ギルドの扉が開かれた。

見れば思ったとおり、待ち人の青年が入ってくる。

黒髪で、開襟シャツに綿のズボンと普通の格好。同年代の筈だが背は俺より高く（クソう）、顔立ちもどこか精悍で大人っぽい。

ジンクロウ。自分と同じ新米冒険者だ。

ジンクロウはすぐにこちらに気が付いて片手を上げた。

「おう、すまねえ。待たせたか」

「いや、全然。討伐に行くって言ってたにも拘わらず前日飲み過ぎて寝坊したどこかの誰かのお陰で今来たところだよ」

じとつとアクアの方を見れば、目を逸らしついでに吹けもしない口笛をふしゅふしゅ言わせている。

そんなアクアにジンクロウは笑った。

「ははは、アクア嬢は相当な酒豪と見える」

「ふふん、勿論よ。酒樽の一つ二つなら楽勝だわ」

「カズ、身を持ち崩さんよう、この娘の面倒しっかり見てやんな」

真剣な面持ちと声音で、俺の目を真っ直ぐ見ながらジンクロウは言った。

「えー」

「人をアル中みたいに言わないでくれる!? カズマもなんでそんな嫌そうなの!?! ねえ!?!」

肩を揺するアクアをスルーしつつ、ふと気になるものが見えた。ジンクロウの左掌に包帯が巻かれている。

「ジンクロウ、その手どうしたんだ?」

「ん？ おおこいつか。なに、ちよいと刃物でな。大した傷じゃねえよ」

「そうなのか……あ、そうだアクア。お前回復魔法が使えるんだよな？ だったら怪我治してやれよ」

「ああ、別にいいわよ。はいじゃあ一回千エリスで」

「せこいことすんな」

「ぶー」

迷い無く金を取ろうとする少女に溜息が出る。この拝金主義者っぷり、こんなんでも一応女神なのかと思うと夢が壊れるなあ。

アクアが手を翳す。すると淡い光がジンククロウの左手を包み込んだ。
だ。

「おお」

プリーストの固有魔法ヒール。程なく光は止んだ。

「はい、これで大丈夫。包帯取ってもいいわよ」

「いやいや、こりゃあかたじけな忝い」

なんだかんだ、誰かを癒すのは当然のことと考えているのがこの少女の数少ない女神っぽいところだ。

礼を言うジンククロウに、アクアも珍しく優しげな笑顔を見せた。

するすると包帯を取り去り、露になった掌には。

——未だ赤々と、一筋の裂傷が走っていた。

「？」

「え」

「……アクア、なんか治ってないっぽいけど」

「そ、そんな筈は。『ヒール』！」

再度、アクアが呪文を唱える。今度はさつきよりも強い光がジンククロウの手を覆う。

そうして光が止んだ後、現れた手には。

やはり、傷があった。いや、心なし赤みが引いたように見えなくもないが。

「なっ、なんで、なんでよ!? なんで治らないわけ!？」

「ちよ、落ち着けアクア!」

常がない取り乱し方にむしろこっぴつちが驚く。

アクアはそのままヒールを連打した。ぴかーぺかーと断続的に光るものだから、ギルドに来ていた他の冒険者や職員さんがなんだなんだとこちらを見る。

そうして連続ヒールの的にされたジンクロウ。その左手は、赤みも引き薄皮が張り、一筋の傷痕だけを残した。治りかけの傷、といった感じ。

ジンクロウは感心したように頷いた。

「ほう、大したもんだ。いや助かったぜアクア嬢」

「ちつとも助かってないわよ!!」

アクアは全く納得行かない様子だ。

「なんで完全に消えないのよ! そんな古い傷でもないのにこんなおかしいわ! 何より女神の私の癒しを受けておいて完治しないっていうのが一番腹立つ!!」

なにやら自負心を傷付けられたらしいアクアは、頭を掻き毟って咆哮した。

すると周囲の注目が何割か減る。目を逸らされたのだ。危ない人として。

「にしても、確かにおかしいよな……」

曲がりなりにも、一応は、アクアとて女神。そうでなくとも、アクアのアークプリーストとしてのステータスは冒険者カードを見れば分かる通り本物だ。

だというのに回復魔法の効きがこれ程悪いのはおかしい。

「こんなの、この傷に呪いでも掛かってなきや説明付かないわ」

「呪い?」

「そう。死と崩壊に寄った呪詛なら治癒とか浄化を相殺するから、回復魔法が効かないなんてこともあるの……それにしたって私女神なんですけど? 神よ。マジもんの神……!」

「なあジンクロウ。何か心当たりってないか? っていうかその傷どうやって出来たんだ」

「あん? ああ、こいつなあ」

何故か珍しいことにジंकロウの歯切れが悪い。いや、別に長い付き合いでもないけど。

ひよいと、ジंकロウは右手に携えた刀を持ち上げた。そういえばこっちの世界に来てから刀なんて初めて見た気がする。

見たところ何の変哲も感じられない普通の刀だが。

頭を抱えていたアクアが、それを目にした瞬間その場を跳び退った。

「ちよつ、え、なにそれ」

「ど、どうしたんだよアクア」

「は？　へ？　なにそのエグイ呪い。呪いっていうか存在」

喜怒哀楽の激しいアクアであるが、こういった表情は初めて見る。

怯え、だろうか。

「あんた、なんでそんなの持つてて平気なの？　ドン引きなんですけど……」

「こいつあそんなに危ねえのかい」

「百年二百年じゃ利かない概念の熟成具合よそれ。たぶんっていうか確実に神代の武器。『触ったら死ぬ』とか意味解らないんですけど……」

「俺はお前が何言ってるのか解んねえよ」

触ったら死ぬではなく、死ぬなのか。

「えっと、型○風に言くと、蓄積された神秘が私らレベル」

「○月風とか言うな。皆が皆解る訳じゃないんだから」

ちよつと解り易いのがまた腹立つ。

しかし、女神の力に対抗できるレベルってそれもう神ってことじゃ……この刀、神様なのか？

「それで斬られて出来た傷は回復魔法じゃ癒せないわ。少なくとも私クラスの力のあるリリーストでもない限り」

「……それ、実質人間には治しようがないってことか」

「そうよ」

「マジかよ」

なにそれ怖い。

だっていうのに、ジंकロウは握った刀をしげしげと眺めている。その顔はどこか面白がつてさえあった。

「かつはは、酷え話だ。ウイズめ、とんでもねえものを寄越しやがって」

「ジंकロウ、悪いこと言わないから捨てよう。どっかに埋めてそれのことは忘れよう」

「なあに、血をやってる内は大人しいもんだ。すっかり面倒見るからよ。な？ 許せ」

「さらつと恐ろしいこと言うなよ！ 拾った猫に餌やつてるんじゃないんだから！」

「ははははは！ そらあ言い得て妙だ」

「笑い事じゃねえよ!？」

のらりくらりと躲すに躲され、結局この話は終わってしまった。どうやらジंकロウにこの刀を手放す気は毛頭ないようだった。

麗らかな陽気だった。

疎らに雲を散らせた青空。視線を落とせば、周囲は見渡す限りの緑の平原。芝生を撫でる風が爽やかな緑の匂いを運んでくる。

ああなんて長閑なのだろう。

このまま寝転んで日向ぼっこしつつ昼寝でもしたい。きつと気持ちがいいに違いない。

「おうカズよ、呆けておる場合ではない。食われつちまうぞ?」

「あああああああ!？」

そんな晴天の下、緑の丘で、俺はなんでかマラソンをしています。

併走者は最近知り合った冒険者仲間のジंकロウ。

追走者は蛙。ジャイアント・トードというおそろしくでかい蛙。ずしん、ずしん、すぐ背後で巨体が飛び跳ねる音が来る。全長五メートルはあるあんな奴に踏み潰されたら確実に死ぬ。だから逃げる。超逃げる。

「とはいえだ。いつまでもこうしちやおれんぜ」

「んなこと言ったってさあああ！ どうしろってんだよおおおおお!!」

同じように追い掛け回されているジंकクロウさんはなんでかすげえ冷静だし。それが逆にこっちの焦りを助長してるというか。

「プークスクスっ！ カズマー！ ジンクロー！ すぐ後ろまで迫ってるわよー！ もっと速く走らないと潰されちゃうわよー！ プウーツアハハハハ！」

離れた場所からこちらを眺め、腹を抱えてアクアが笑う。目に涙さえ浮かべて実に実に愉快そうですねクソつたれ。

「あの女後でしばいたる……！」

言ったとおりそれは後の話。今をどうにかせねばあの水色女しばかり回すこともできなくなる。

ずしん、背中すの寸前、一際近くで蛙が着地した。

「ひええええ!!」

「ヒエーだって！ ヒエー！ プークスクス！ ふうく、しょうがないわねえカズマ。助けてあげるわ。だから帰ったらあんたらはとりあえずアクシズ教に改宗」

「カズ、ちよいと見てな」

「え？」

アクアの阿呆な物言いを遮るジंकクロウの声。

思わず隣を見たが、既に青年の姿はない。

振り返る。

そこには足を止め、巨大蛙と正面から向き合う背中があった。

「ジんっ——」

蛙が跳ぶ、ジंकクロウ目掛けて。

潰される。

その光景を幻視してぞわりと全身が総毛立った。

地面が砕け、蛙の前足が埋まる。本気で俺達を潰しに来ていたのだと改めて思い知らされた。

しかし、その下に青年はいない。

蛙が着地する直前に、ジंकクロウはほんの半歩後ろへと退がっていたのだ。

かちり、金属の弾かれる音。鯉口が切られた音。

蛙がまた頭を擡げようとした刹那。

「……」

左手に携えた刀を抜いて斬った。結果から言えば、それだけの話だ。

気付くとそこには、頭を二つにされた蛙が伏せをして動かなくなっていた。

「は？」

「確かにこの凶体で跳んで跳ねられんのは厄介だが、動き自体は鈍い。着地してからも一度跳ねようとする合間は無防備もいとこだ」

かちり、いつの間にか刀は鞘に納まっている。刀身は見えなかった。

「後はそうさな。間合をきちんと量るこつた。そうすりや二尺ばかりちよいと退がるだけで、これこの通り」

左手に持った刀の鞘先で無惨な蛙を指し示す。

さつきから気付いてはいたが、もしかしなくてもジंकクロウは蛙退治のレクチャーをしてくれているらしい。ただ、滔々と語られるジंकクロウの言葉も、今はどこか遠くの出来事に感じる。

呆然とする俺をどう思ったか、ジंकクロウはにやつと笑みを浮かべて言った。

「な？　簡単であろう」

「できるかああああああ!!」

少年は絶叫した。

無論である。無茶を承知で言っている。

「できねばならん。でなければ死ぬぞ」

「うっ……で、でもさ、いきなりこれはハードル高すぎるって！ 剣振るとか以前の話だし！」

「そうだとも。基本の基のさらに前、おめえさんはまず気組みから始めねばならん。本来ならな」

一剣とは、一刀とは、それを振るうという事はなんぞや、などと悠長な講釈を垂れる心算は毛頭ありはしない。そんなものは、そもそも己が偉そうに口にして良いことでもない。

「だがそうも言っていられんだろう」

「まあ、生活掛かってますし……あの駄女神のこともあるし……」

少年はどういう訳か冒険者なる稼業に拘りを持っている。斬った張ったで日銭を稼ぐ阿漕な商売だ。糊口を凌ぐだけならば真つ当な働き口は幾らでもあろう。

何故そうしないかは解らぬ。のっぴきならない理由があるのやもしれん。

そして己は、真つ当であれなどと少年に対し説教を垂れていい分際はない。

ならばせめて、節介を焼く。請われた訳でも、義理筋合いのある訳でもないが。棒振り芸程度、教えても罰は当たるまい。

「うーん……」

「かはは！ そんな神妙な顔をするな。一度でやって見せろなどと言いはせん」

真剣な面持ちで低く唸る少年の様に笑声を上げる。

言動は軽い癖に、妙なところで真面目な男だ。

「誰にも初心はあるものだ。おめえさんはまだ若え。何も焦るこたあねえよ」

「……それ、ジंकクロウに言われてもなあ。どう見ても同じ年くらいだろ」

「さて、どうであろうな。人は見掛けに抛らねえもんだぜ」

「へえー、じゃあ今何歳なんだよ」

「ううむ……数えるのを止めて久しくてなあ。うん、俺にも分からねえ。くくくっ」

「なんだよそれ！……ぷっ、はははは！」

少年と二人、暫し埒もなく笑い合った。

区切りを齎したのは、青い髪をしたその娘であった。ずんずんと歩み寄ってきたアクア嬢は憤り顔を赤くして言った。

「いつつまで私のこと無視してる気!? 寂しいじゃない!! 男二人イチヤイチャ楽しそうにしてさ!!」

「気色悪いこと言うんじゃないねえ」

「おい駄女神。性根が腐つてるとは思ってたけど、まさかそつち方面でも腐ってたのか……あの、あんまり近寄らないでください」

「ちつがうわよ！ 腐女子じゃないからね私!? そりゃちよつと気になって薄めの本読んだことはあるけど……無言で距離取らないでよお!」

後退るカズマの腰に娘は継り付いた。その継る手をなんとしても外さんとカズマは娘を押し退けようとする。両者共に必死である。

「なによなによ！ この前は『頼りにしてるぜ、俺の美しい女神様』とか調子のいいこと言ってたくせにちよつと強い仲間が出来たらもう私はお払い箱なの!」

「美しいとか微妙に改竄してんじゃないやねえよ！ だいたいお前今とこ女神らしいこと何一つしてないからな!? 精々壁塗りと内職が得意な自称女神の痛い子だからな!!」

「ぬぁあんですってえええええ!」

少女は激怒した。カズマの罵詈雑言に腹を据えかねたとばかり。

すつくと立ち上がるや、突然こちらに背を向けて走り出す。

見ればその進路の先、地中から一匹の巨大蛙が這い出しているではないか。

「見てなさいよ！ 女神の女神たる所以……その実力を！」

その瞬間、強烈な光が辺りを照らし出した。

発生源は娘の右手。

「私のこの手が煌き謳う！ 女神の私を愚弄するカズマとジンクロウに思い知らせと、嘶き叫ぶう!!」

「己も含まれてんのは何故だ」

「放つとかれたの根に持つてんじやないすかね」

なかなかの走力。一町ほどの距離が見る間に縮まり、蛙はもはや目前。

娘は光り輝くその拳を振り被った。

「ばああああくねえつつ!! ゴオオツドブロふふう」

アクア嬢の上半身が消えた。

正確には、蛙がばかりと娘を頭から食んでいる。

「……」

「……」

啜えた娘を飲み込もうと蛙が空を向く。口から突き出た二本の脚も同時に天上を差した。

「食われたあああああああ!?!」

「食われたなあ」

カズマと共に走り出す。

蛙に歯は無い。啜え込まれた程度なら怪我も負わんだろうが。流石に捨て置くには余りに忍びない光景であった。

獲物を食っている間、蛙はほぼ身動きもせずカズマの剣に頭を潰され即死した。

「うえうううううええええ……!」

口から吐き出されたアクア嬢は酷い有様だった。

分泌液に塗れ、動く度粘性を持った糸を引く。童女のように泣きじゃくるのも無理はない。

カズマと顔を見合わせる。言葉が見付からぬと、複雑な表情である。己もまた似たような顔なのだろう。

「いやあ! 臆すことなく単身敵に向かって行くなど立派立派。なあ? カズ」

「そうだよな! アクアすげえよ! 流石は女神。すげえ勇気だよ、

うん。でもまあ、今日のところはアクアは後ろで待機しててくれ。蛙は俺とジंकクロウでどうにかするから」

「うううううううええええええええ……」

その後、もう二匹ほど蛙を狩り、本日の討伐はお開きと相成った。

10話 傾いた娘っ子だなあおい

空は茜。外壁の向こうへ日は没し、ムクドリねぐらの群が塹へ帰る。夕刻。

夜気を帯び始めた空気を吸い込む。肺を洗うかに似た心地良さ。討伐を終え、カズマらは今頃ギルドの酒場で夕餉を取っている。同じく卓を囲んでも良かったが、それはまた別の機会を当たればよからう。

借金を抱える分際である。今日から少しばかり質素儉約とやらに勤しもうかと思う。

街中を縦断する河の上流。外壁近くの河原。手頃な石に腰掛け、手には竿。垂らした糸が水面で揺れる。

「釣れますかな」

「まあぼちぼちだ」

「ほほう」

ふい、と傍らに老人が立つ。魚籠の中を覗き込み、なにやら満足そうに頷いている。

「じいさん散歩かい」

「孫と遊んだ帰りだ」

「ほお孫がいんのか」

「男の子でな。八歳になる」

「そうかい。そいつあ元気な盛りだな」

「ああ、一日中引つ張り回されてもう身体がおっつかんわ。ははは」
なんとも嬉しそうに愚痴りおる。

すると、竿の先からぴくりと手に伝わるものがあつた。くい、くい、と微細な感触を手繰り、待ち、程なく食つた。一気に竿を引き上げる。水面を破つて、黒々とした魚影が跳ねた。

「お見事」

掌に余る、でつぶりと太った鮎に似た“何か”である。果たしてこ

ちらにも鮎という魚はおるのか。

老人はも一つ満足げに頷くと、踵を返した。

「気を付けて帰んな」

「あいよ、ありがとさん」

背中越しに手を振りながら老人は去っていった。

これで三匹目。晩飯には十二分だ。

手に荒く塩を握り込み、川で汚れと滑りを洗い、鱗をこそげ落とす。本当にこれが鮎であるのか判断が付かぬ為、用心に内臓も取っておく。抜き取った内臓は、あまり宜しくはないがその辺の土に埋めた。

さて、いぎ塩を塗すという段になる。獲れたての魚の香りを殺さぬよう、濃過ぎずさりとして薄過ぎぬ塩梅を、などと板前の真似事をする気はない。適当でいい適当で。

串を口から刺し入れれば下拵えは整った。

火打石で火口を作り、石と薪で組んだ竈へ入れる。横合いから息を吹き込んで行けば、次第に薪が燃え始め、十分な火勢が出る。

串を打った魚を竈の周りに立てる。遠火で焼くとなればここからが長い。

「……」

焚火の傍へ運んだ石に腰を下ろし、黙って火の加減と焼き目を見張る。住宅地からも距離を置くここでは、薪木の爆ぜと川のせせらぎ以外に聞こえるものもない。

一人、如何にも手持ち無沙汰であった。こう暇では、煙管でも吸いたくなる。

いや、一つ。

話し相手が居ないではない。

「……五月蠅えな。さつきからよ」

焚ける火と河流の音以外にもう一つ。

雑囊の上に無造作に立て掛けたかの一振り。

物言う口など持たぬその刃金が、先程から騒がしい。音を伴わず、当然ながら言葉ですらなく、しかし明らかに己へと飛ばされる。思念”。

「蛙の血はお気に召さんか？　かつ、贅沢者め」

これが所謂生き刀であることを覚ったのは、あの魔道具屋で、鋼鉄の箱に安置されるその姿を見た瞬間であった。

如何なる仕儀を以てこのような有様となったのか。千の時を経、万の命を喰らえば、あるいは為り得るのやもしれん。アクア嬢の言が大袈裟を着た上の世迷言でないなら、もはや妖刀とすら気安くは呼べぬ。

だが、曰く神代の剣であるらしいそれは現在、どういう訳か己に身を許している。邂逅一番、己を斬り殺さんと文字通り飛んで掛かって来たのが嘘のようなしおらしさ。

『この剣はきつと、相応しい使い手を待っていたんです。ジंकロウさんのような人を』

まさか。それこそまさかだ。

道具屋の店主の言葉を思い出し、苦笑が漏れる。そんな可愛げのあるたまか。これが。

それより何より、もつと得心の行く理由があるではないか。如何にも下らぬ理由が。

数多の血を啜ってきたなどと大言を吐くが、その実これは味の好みにすこぶる五月蠅い。今日、蛙を膾なますにした時、握った柄から伝わってきた意思はたった一言『不満』である。

「俺の血は存外に、こやつの舌に合っていたらしいぞ」

夢見がちな店主の顔を思い浮かべ、聞かれもせん皮肉が零れた。

要は、好物は後に取って置きたいと。その辺の童と同等の発想をこの刀はしておるのだ。

『その時まで、小腹を満たす為に使われてやる』

まあ流石に驚きはしたが、そこはそれ、物は使い様次第。得物自身が許すと言う。ならば己は存分に振り回すだけだ。

「……竜が食いたいだあ？　ああ蜥蜴で我慢できねえのか？　似たようなもんだろ。それにほれ、ここいらの生き物はどいつもこいつも大ぶりで食いだありそうだぜ」

こちらの言が終わるを待たず、まるで抗議するかのようにカタカタと小刻みにそれは震える。とうとう目に見えて意思表示してきやがった。

「こちとらの飯もまだなんだ。おめえの我儘ばかり聞いていらるかい。なあに、二百年待てたんだ。一日二日なんぞどうということもあるまい？」

——カタカタカタカタカタカタカタカタカタカタカタ

念など感じずとも何を言いたいかは明白である。しかしまあ今日のところは無視を決め込むとしよう。またぞろ“癩癩”を起こすようなら話は別だが。

そうこうする内に、魚の皮目に焼き色が付いてきた。

「好し好し」

滲んだ脂が滴り、火に落ちるや煙を上げる。塩と脂の旨味が混交され、なんとも言えぬ香りが立ち昇った。

串を裏返す。もう四半刻ほど焼けば身が締まり、味も滲みるだろう。

そして刀を引き寄せた。

「……」

視線を感じる、などというが。これほど分かり易いものも珍しい。

正確にはこちらを窺う者の気配、氣息。いやに露骨なそれが夕風に乗り、己を撫でた。

ゆつくりと視線を持ち上げる。

気配の主は、小高い土手道からこちらを見下ろしていた。隠れる心算など初めからありはせぬ、そう言わんばかりに堂々と身を晒している。

夕焼けの所為ばかりではない紅い装束。外套を羽織り、頭頂部の尖った鍔広の帽子を被っている。手には、宝珠を飾った木杖。そろそろ見慣れた頃合であろう。街の冒険者の中にもよくよく見られる、魔法使いの装い。

魔法使いの知己は二人、リーンとウイズのみ。アクア嬢は司祭だったか。少なくとも対手が知り合いでないことだけは確かだ。

——子供？

それにしても、人影は思いの外に小さく、そして幼かった。不意に、それが土手の上から動く。

坂を下っていることを差し引いても凄まじい速度だ。踏み出す足はまるで地面を噛むが如く鋭い。

どどど、と足音を蹴り鳴らして遂に、眼前に迫る——ことなく、その童は直前で急停止した。

焚火の、突き立った串焼きの寸前で。

「……」

「……」

童は両膝から両手と順々に地面へ付き、四つん這いになる。そうして何をするでもない。ただ、ただ、食い入るように焼ける魚を見ている。

見ている。

ひたすら見ている。

凝視であった。

片時も放れず、微動だにせず、魚だけを捉えている。据わった瞳の中で炎がゆらりゆらりとくゆる様さえ分かる程の至近距離。

「……前髪が焦げつちまうぞ」

「……」

果たして声が届くかも疑わしかったが、童——娘は這い蹲りながら器用に後退した。それもほんの僅かであるが。

火の橙を照り返す魚の白い腹。そこからまた脂が滲み出る。汗を掻くかのように一筋、二筋、滴った脂が火に吞まれ、じゅうと煙を撒き散らす。

——くきゆるるるる

「——」

見上げた秋空は高く遠く、響いた音もその高みへ昇って行ってしまった。

それを追い掛ける心地で暫時空を眺める。去来するのは、目眩。目眩を覚える程の既視感だ。

お前もか。

この街へ訪れた最初の日、人々の暮らしぶりを見るにつけ豊かで閑な土地だなどと印象を持ったものだが。それは全くの見当違いであり、その実、年若い女が、少女が日々空腹に喘ぐほど貧困著しい場所なのやもしれん。

二度同じ状況に遭えば疑いも湧く。二度あることは、の通例に則らぬことを祈ろう。

「腹が空いてるのか」

『くきゅううくるるるる』

「ああ？ 二日何も食ってない？ そりゃあ大事だな」

『ぐうううくう』

「今そこで釣った。もう少し待ちな。直に焼き上がる」

『ぐぎゆるう？』

「食うのは構わんがな、口を使って喋らんか馬鹿者。横着をするんじゃないねえ」

「あ、はい。すみません」

小器用に腹を鳴らす娘つ子である。

無駄に長く生きてきた気もするが、腹の虫と会話したのはこれが初めてだ。間違いなく。

四つん這いから居直り、娘は地べたに腰を落ち着けた。しかし視線は相も変わらず串の魚へ釘付けた。膝を抱え、じっと動かず、待つ。

二日も絶食しておればさもあるう。

時折串を返す度、ぴくりと反応するのがまた面白い。

「……よおし、いいだろう」

「！」

「ぎ、食え」

好い焼き色になった。炙られた塩が雪のように魚体を飾っている。串を取り上げ、一本を娘に手渡した。

居ても立ってもいらぬとばかり、娘は豪快に魚にかぶり付いた。

「あちっ!？」

「おいおい気い付けろ。そう慌てんない。焼いた魚は逃げやしねえ

き」

こちらの言を聞いてか聞かずか、今度は殊更注意深く齧り付く。身がやはり熱いのか、娘の口からほくほくと湯気が立つ。とはいえ、食べる手が止まる気配もない。

「んん〜っっ！」

「美味えか」

「っ！ っ！」

頻りに頷きながら娘は夢中で焼き魚を食った。何より分かり易い応えである。

「そうかい。ゆっくり食え」

己も串を一本手に取り背鰭から食む。噛み締めると、口いっぱいその旨味が広がった。塩味がむしろ魚本来の味を引き立てている。我ながら良い塩梅に仕上がった。

皮はパリつと小気味良い歯応え、ほぐれた身はなんとも柔らかかな舌触りを齎す。

ふと思ひ出し、雑嚢を漁る。間もなくそのざらりとした感触を探り当てた。

掌に収まる、濃い緑の果実。それを小刀で半分に切り割る。途端、爽やかな香りが鼻を抜けた。

「？ なんですか、それ」

「酢橘だ。こいつをちよいと搾るとまた妙味でな」

きゅつと指で軽く押し潰せば出るわ出るわ。流石は絞め立て。たっぷりと果汁を孕んでいる。

汁の掛かった部分に齧り付いた。

「うむ」

悪くない。酒がないのが惜しまれる。

ふと、娘が興味深そうに酢橘を見ていた。割ったもう片方を差し出す。

「おめえさんもやるか」

「で、では、少しだけ」

果肉を潰し、ちよろりと垂らす。やや躊躇いがちに娘は今一度魚に

齧り付いた。

「むおお！」

「どうだい」

「果実の酸味が、はむ、より食欲を、あむん、掻き立てまふよ。旨味がきははふ感じですよ」

「ほう。ガキの癖に味が分かるじゃねえか」

「ガ、ガキとは失礼な！」

「おお、忘れておったわ。握り飯もあるが要るか」

「いただきます」

笹に載った握り飯を今度は躊躇なく受け取った。右手に塩焼き、左手に握り飯。それが大層嬉しいのか、なんとも幸せそうに娘は満面の笑顔を浮かべた。

物の食い方にも性格が出る。最後まで遠慮のあったウイズとはえらい違いだ。

気取りなどない素直な食いっぷりは見ていて気持ちがいいものよ。

結局、娘はもう一匹魚を食って腹も少しばかり満ちたようだ。膨れたようには見えぬ細っこい腹を擦り、吐息を零す。

その様に笑みが浮かんだ。

そして笑われているのに気が付くと、娘は慌てて居住まいを正した。

「コホンっ……ええと、ありがとうございました」

「おう」

「空腹とはいえ、なんだか物凄く恥ずかしいことをしていた気がします……」

「かははっ、まあな」

焼き魚を前にかぶりつきで、近年稀に見る物欲しげな顔をしていった。

それはいい。腹を空かせた童が食い物を欲しがる。至極真つ当だ。気になるとすれば。

「おめえさん一人か。親は？」

「とつくに一人立ちしましたよ。この街には冒険者になる為に来たんです」

「ほう、では仲間がいるのか」

「い、いえ。それは……我が力を御することの叶うパーティがないだけで……廻り合わせがまだ無いと言いますか……」

尻すぼみに語気は小さく細くなつていく。
なるほど。

「道理でな」

「な、なんですか」

この年端も往かぬ少女が何故空きつ腹を抱え河原を彷徨い歩いていたのか、これで得心行つた。

稼業に着いてから日も浅く、どこかの徒党に組み入っているでもないときた。

一目瞭然であるが、どうやら食い扶持も碌々稼げていない。

路頭に迷う寸前か、片足は既に突っ込み覚束ない様子だ。

(こんなガキがなあ)

「む……なにかこう、心底子供扱いされている気がします」

「無論だ」

「そうですか、ならいいで……認めた!？」

「おめえさんは、子供だ」

「きつぱりはつきり言い切りましたね!？」

未成熟な体躯や幼けな面差しは勿論、態度や所作を見るにこれは紛うこと無き子供である。

憤慨を露に、娘はその場に立ち上がり両手を広げた。

「な、なら一体私のどこが子供なのか教えてもらいましょうか!」

「口の端に米粒が残っておるぞ」

「……」

「左だ。いやおめえさんから見て左だ」

探り当てた米粒を娘はぱくりと口に運んだ。

決まりの悪い顔である。見栄を張りたい年頃なのだろう。懸命に背伸びをする様は、とても愛いものだ。

知らず笑みが零れていた。

「なんですかその微笑ましいものを見る笑いはっ」

「くく、すまんすまん。そうだ。おめえさん名は？ 俺はジंकロウというもんだ」

「……ふっ、とうとう聞いてしまいましたか。では、傾聴なさい！」

突然、娘は意気を漲らせる。地面の杖を拾い上げ片手に構え、もう片方の手で外套の裾を靡かせた。片足を半歩前へ、さながら役者が見得を切るかの如く。

「我が名はめぐみん！ 紅魔族随一の魔法の使い手にして爆裂魔法を……！」

「茶は要るかい」

「あ、はい。いただきます」

土瓶が沸いていた。

茶葉を入れた急須に湯を注ぎ、暫し待つ。

葉が開くのを見計らい湯呑みに注ぎ分けた。その片方を娘に差し出す。

「熱いぞ」

「はい」

「ずずず、と暖かい茶を啜る。苦味と渋味、最後に仄かな甘味が鼻に残る。」

「ほお……」

「ふい〜」

少女と二人、気の抜けた吐息を零す。

塩つけの濃い食事の後のこれは舌に心地よい。胃の腑まで洗われるようだ。

肌を照る焚火の熱、そして身の内から感じる茶の温度。なかなかどうして至福である。

「はっ!？」

「うん？ どうした」

「名乗りの途中で何するんですか！」

「おおそうであった。湯が沸いたんでついな」

咳払いを一つ打ち、気を取り直して娘は身構えた。

「我が名はめぐみん！ アークウイザードにして爆裂魔法を操る者
！」

「ほおう」

今度こそ娘は大見得を切り通し、なかなか満足そうに鼻を鳴らした。

「傾いた名乗りだなあおい」

「ふふふ、我が真名、しかと刻むがいい」

「うむ、刻んだぞ。ああー……………めぐ坊」

「めぐ坊!？」

11話 宜しくしてやってくれ

翌朝。ギルド内酒場。

先日と同様に、本日もまたカズマ、アクア兩名とこうして落ち合った。

しかし、些細だが違いもある。

「そういう訳でな。この娘を徒党に入れてやつちやくれねえか」

傍らに立つ娘、めぐみんの細い背をそつと押し出す。

ギルドへ着いてからこつち、己のやや後ろで身を隠すようにしていた娘は、少しばかりよた付きながらようやく前に出た。

暫時もじもじと逡巡を繰り返し、あからさまな咳払いを一つ。

「我が名はめぐみん！ 紅魔族随一の職人の娘にして爆裂魔法を操りし者！ 我が力を欲せし汝らの召喚に応え、今！ ここに現出せん！」

「……」

「……」

「めぐ坊だ。宜しくしてやってくれ」

「めぐみんです！」

しかし、どうしたことか。二人からは一向に反応がない。

「ジンクロウ、ちよつと」

「おう」

ようやく動きを見せたカズマが手招きする。それに従い、めぐみんとアクアを一先ず置いて、窓際へと移動した。

窓からは快晴の空が見えた。幸いに、今日も天候には恵まれている。

そうして、やや声を潜めてカズマは言った。

「で、あのぶっ飛んだ子は誰すか？」

「今しがた名乗ったろう。めぐ坊だ」

「名前はいいよ。いや名前も気になるけど。めぐ、みんな、さん？ 昨日の今日で何があったんだよ」

経緯についてか。尤もである。その説明無くして納得しろと言う

方が道理に合わぬ。

「先日、河原で魚を焼いておったんだが」

「うん」

「気付くとあの娘がふらふらと近寄ってきていた」

「うん」

「これがまた、えらく腹を空かせた様子だった。でまあ腹の虫があまり五月蠅えってんで、適当に飯を食わせてやった」

「……」

「聞けば一人な上に仲間もおらぬという。見るからに食うや食わずだ。そのまま捨て置くにも、飯を食わせた手前忍びなくてなあ。詮方無しと、こうして連れて来た次第だ」

「何してんだあんな」

呆れを堪え切れず、といった面持ちでカズマはがつくりと肩を落とした。

少年の戸惑いは全く然り。

「無論、必要とあらば面倒は全て俺が負う。勝手は承知だがなんとか頼めねえか、カズ。この通り」

言うや、その場で腰を折る。相談も無く、独断でのこと。素気すげな無く拒まれたところで文句も言えぬが。

「ちよ、頭なんて下げんなよ！ あー、ジंकロウが居なかったら、遅かれ早かれパーティーメンバーの募集はしてたって。だからまあ、丁度いいんじゃないか？ 戦力増強できるのは歓迎だし」

「そう言ってくれるか」

ゆつくりと居直れば、少年はそっぽを向いている。合理的な言い分に比した、気恥ずかしげな態度。

この少年の憎めぬところだ。

「……」

視線が頬に当たる。やや離れた席からめぐみんはじつと己を見ていた。

木杖を抱くようにすると、かの娘の矮躯がさらに縮まったかと錯覚する。不安げな様。

カズマの方もそれに気が付いたようだ。

「……じゃ！ ジンクロウ。拾った責任取って、ちゃんとめぐみんの世話するんだぞ」

「うむ、心得た。餌やりも散歩も決して欠かさぬ。大事に育てよう」
「ちよつと待て」

椅子を蹴り飛ばす勢いで立ち上がるや、娘は素早く我らに接近した。

「私の話ですよね？ 私の処遇についての」

「ああそうだと」

「そうですか。いえ、てっきり捨て犬を飼う飼わないの相談でもしているのかと」

カズマはめぐみんを見てから、顎に手を添え一瞬考え。

「犬っていうか、猫？」

「おおそうさな。犬ではない。猫だ」

「誰が捨て猫ですか!？」

振る舞いや拳措など鑑みるに、この娘の印象は間違いなく仔猫だろう。

当然だが娘は納得行かぬ様子だ。

「かつはは、すまんすまん。そう怒ってくれるな。今日から徒党を組む仲だ」

「え、じゃあ」

「おうよ、我が徒党の頭からお許しが下った」

ふくれ面が一転、驚いたように目を見開く。

「いや待て。なんで俺が頭なんだ」

「そうよ！ なんでこんなヒキニートがパーティーリーダーになるわけ!？ カズマが私より上位とかラグナロクが起きても在り得ないんだから！」

それまで席に着いて脚をぶらぶらさせていたアクアが、聞き捨てならぬとばかり食って掛かる。

徹底的な否定とは正にそれであろう。カズマがアクアを睨む。アクアはつんとそっぽを向く。

「この中で正常まともなのはカズだけなんだな。お任せ致すぜ、御頭」

「はあ!? ジンクロウがやってくればいいだろ!」

「美しく気高い私こそ相応しいわ! ステータスだって私が一番でしよ! 私がリーダーやる! やありいたあいい!」

「どうか、ナチュラルに私を異常の側にカウントしてますね!」

ぎやあぎやあと喧しいことこの上ない。

ギルドの職員が我々を窘めに来るまで、そう時は掛からなかった。

討伐対象は昨日と変わらず、巨大蛙である。繁殖時期に入り、餌を求めて人里の周辺に大量出没している。

アクセル近隣の牧場からも程近い平原。山林を下りてきた蛙共がまず通るそこで主に討伐は行われる。

その途上。街道沿いの休憩所で、我々一行は遅まきの朝食を摂っていた。

寄棟の屋根、四方に柱を立てただけの建屋であるが、快晴の今日に限れば、この開放された景色の中で食う飯のなんとも美味しいこと。

「あむん、ほれにしても、んぐ、紅魔族ならアークウイザードっていうのも、はぐつ、はっほくへ」

「食べるか喋るかどっちかにしろ」

握り飯を口一杯に頬張るアクアに、カズマが苦言を呈す。

紅魔族がどうのこうの。確かに、もごもご何言っているやら。

アクアは握り飯を食い切り、水筒の水を一気に呷った。

「ぷつはあ! ……だから、彼女、紅魔族つて名乗ったじゃない。彼らは魔法のエキスパートなの。生まれながらに高い魔力と魔法適正を持っていて、一族郎党ほぼ例外なく優れた魔法使いよ」

「へえ」

「ほお」

カズマ共々間抜けな感嘆を上げる。

そして当の本人であるところのめぐみんを見やれば、握り飯を栗鼠のように貪っている。

「出汗巻食うか」

「んぐんぐつ、いただきます！」

「ほれ、カズもまだ食えるだろう。そうだ漬物うめえぞ」

「あ、うん……………お、よく漬かってる」

「アクア嬢、野菜を残すんじゃないねえ。肉団子やるから一緒に食っちゃまえ」

「わーい！」

出汗巻卵を齧ってご満悦な顔をするめぐみんに笑みが浮かぶ。小動物に餌付けしている心地だ。口には決して出さぬが。

カズマの呆れにも、これでは反駁できぬわ。

だがどうにも、この娘の物の食い方は、何か……………気を急かすかのようなものを感じるのだ。まるで悠長にしておいたら飯が逃げるとでも言いたげな。

出会い頭の欠食具合さえ、あるいはこの娘にとっては日常的なものかもしれん。

「慌てんでもいい。ゆっくり食え」

「？」

もの問いたげな娘の目には応えぬまま、革水筒を腕に掛け呷った。

「ところで、あーくういぎーどつつうのはなんだい」

「「えっ」」

食卓の上を忙しく動いていた突^{フォー}匙^クが止まる。

代わりに、三人分の視線が己に突き刺さるのが分かった。三対の目が物語る言を訳すに何程の苦勞もない。『何言ってるんだこいつ』である。

「いや、まあ、詳しく説明しろとか言われたら困るけどさ……………魔法使いの最上級職業のことだろ？ ジンクロウも流石にその程度は、知っている、よな……………？」

「？」

「魔法系ステータスが一定以上無いとなれないハイクラス！　なんで連れてきた本人が知らないわけ!？」

「し、知らずに私のことパーティに入れようとしてたんですか!?　あんなに……!」

喧々囂々。非難轟々。余程に的外れな質問をしたのだろう。

めぐみんの驚き様など一入であった。

こちらへ来てから十日にもなるか。当然ながらまだまだ知らぬことは多い。己の場合はそれ以前の問題である気がしなくもないが。

観念したように両手を上げる。

「ははは、わかった！　俺が悪かった。だからそう怒らんでくれ」

一先ず呆れの乗った視線だけは頂戴する。

「つまりだ。めぐ坊は大層腕の立つ魔法使いということか」

「そうですとも」

ふんす、と鼻を鳴らしめぐみんは精一杯胸を張った。

「紅魔族随一と謳われた我が魔道の天賦。とくとその目に焼き付けてくれよう……!」

「そうかいそうかい。なら、いろんな魔法見せてくれや。楽しみにしてるぜ」

途端、娘の様子が変わった。

直前まで自信を漲らせ、紅い瞳を真実輝かせておったというに。

俯きながら、娘はぼそりと呟いた。

「……………いろんなは、無理です」

「?　なんと言った」

「いろんな魔法は見せられないです」

カズマやアクアの頭上にも疑問符が浮かんでいる。

「私は爆裂魔法以外、他の魔法は一切使えません」

「……」

「……」

「ほお、そうなのか」

リーンなどは種々の魔法を機に応じて使い分けられていると言っていたが。

魔法使いもそれぞれやり方が違うということか。

「え、一つも？ 爆裂魔法が使えるくらいのステータスなら他の魔法だっていくらでも覚えられるでしょ？」

アクアが不思議そうに尋ねると、娘は突然椅子から立ち上がった。「勿論、覚えられます。そして他の魔法を使えるようになれば便利でしょう。楽もできましょう。けれど駄目です。駄目なのです！」

めぐみんは突き匙を机に叩き付ける。そのまま手で己の外套を払い靡かせた。

「私がアークウイザードとなった理由。それはただ一つ、爆裂魔法を使う為。爆裂魔法をこよなく愛するが故。ただ一筋の爆裂の道を駆け抜けんが為に！」

何を言っているのかは皆目解らんがその情熱の強さだけは伝わった。

つまりこの娘は、爆裂魔法とやらを使う為だけに魔法使いをやっているという。

「絶大な魔力消費の為に一日一発が限度、撃てば立つ力さえ残りません。だとしても、それでも、だからこそ私は爆裂魔法に魅せられたのです！」

「おい今聞き捨てならないこと言ったぞ。ねえ」

カズマが問いかけてくる。必死の形相である。大変な事実が気が付いてしまったかのような焦燥に駆られた貌である。

「ジंकクロウ、ちよつと」

「おう」

カズマと共に休憩所を出る。建屋からやや距離を置き、声を潜めつつカズマは言った。

「あかん」

「駄目か」

その一言に全てが集約されていた。

「完全に駄目な系だよ……！ ピーキー過ぎて使い物にならないパターンのやつだよ……！」

「然もあろうな」

「まさか……分かって連れてきたのかよ」

「事情は知らなんだが、何かしら訳ありだろうとは踏んでいた」

仲間の有無を訊ねた折、妙に言葉を濁す様を見るに予想はあった。

「ここまで極端だとは思ってもせなんだが。」

「どうすんだよジंकクロウ。一日一発限りで撃つたが最後お荷物必至って」

「ううむ、確かに一筋縄とは行かぬだろうよ……が」

休憩所を片目に盗み見る。

「素晴らしいわ！ 浪漫を追い求めて、便利さや効率なんて投げ捨てたその姿勢！」

「ふっ」

アクアが感極まった様子でめぐみんを称えている。気を良くしたらしいめぐみんもふんぞり返り具合に拍車が掛かる。

二人は互いに親指を立てた。

意気投合、友情を深めた少女二人、美しい光景。

「不安しかねえ……」

カズマはいつかと同じようにひしと頭を抱えた。

察するに余りある。

励ましを込めて、少年の落ちた肩を叩いた。

「要は使い様だ、カズ。道具であろうが術技であろうが、魔法であろうがな」

「そういえばさ」

「あん？」

朝食を終えていざ再出発という段になり、不意にカズマが言った。

「あの弁当、どこで買ったんだ？ 俺も今度から朝はあれがいいなあなんて」

「お弁当屋さんなんて商店街じゃ見たことないわね」

「新しく出来た屋台ですか？」

「酒場の厨房をちよいと借りてな、己で拵えたのよ」

小鳥が空で囀り、遠くのエを風が吹き抜けた。

「えっ」

「くくつ、なんだ。そんなに意外かい？」

12話 ああ上出来だ

目的地の平原に到着して早々、一町ほどの距離に蛙が湧き出して、土が膨れたかと思えば中からうっそり蛙が這い出てくる。

その数、五匹。まだ増えるやもしれん。

こちらは四人。小高い丘の上に身を伏せて潜んでいる。

「ふむ」

「うわあ……ねえ、ちよっと多くない……？」

アクアは自身の肩を抱きながら呻いた。蛙に丸ごと呑まれた記憶も新しかろう。

カズマの方は、蛙の集団を辟易と眺めつつ、しかし視線は右往左往一定しない。

「どうした？ カズ」

「いや、こういう時ってほしい油断すると他の土からも湧いて出るパターンかなと。苦勞して倒したー！ 後ろからパク、とか笑えねえ……」

「プークスクス！ その小心者っぷりウケるー」

「もういつペン蛙の餌にしちやるぞ駄女神っ……！」

仲良く漫才する二人に笑いを堪える。

「ああ、カズは間違っちゃいねえよ。良い気組みだ」

「ほれ見ろお脳足りん。人のこと笑う前にその空っぽの頭に何か詰めよう」

「詰まってるもん！ 愛とか気高さとか心強さとか……ちゃんと詰まってるもん！」

「あの、そろそろどうするか決めませんか……？」

おずおずとめぐみんが進言する。その通りだ。我々は、弁当持って物見遊山に來た訳ではない。

そうこうする間に案の定、蛙の屯する位置からも程近い土からまた一匹のそのそと生えてきた。

これで六匹。

屯、などと表したが、蛙共はてんでばらばらに行動している。じつと動かず呆ける者もあれば、忙しくその辺りをどすんどすん跳ね回る者もある。

「ああ増えちゃったよ……」

「……」

「さり気なく逃げようとすんじやねえよ！」

「もうぬちよぬちよはイヤなお！」

カズマがアクアの首根っこを掴み地面に押さえ付ける。いや押さえ付けようとして引き摺られている。

「糞がこの女あ、ステータスだけは無駄に高いんだったっ！」

「ふんぬう！ ふんぬう！」

「んぎぎぎ、ちよ、めぐみん！ お前の爆裂魔法とかいうのであいつら全部吹き飛ばせないのかよ!？」

「我が爆裂を以てすれば造作もない！ ……んですが、ああも纏まりがないと、何匹かは撃ち漏らしてしまいます……」

めぐみんは語気を弱めた。そうして伏し目がちに己を見やる。どうすればいい、視線はそうのように問いかけていた。

「……」

周囲を観察する。幸い、お詛いそええの場合はすぐに見付かった。

数は六、まあ許容範囲であろう。

「爆裂魔法というのは、字義通りと捉えてよいのだな」

「は、はい。衝撃波を伴った爆焰で指定した範囲内の全てのものを消し飛ばします！」

「かつ、物騒だな」

元気良く、そしてなんとも誇らしげに、剣呑をのたまう娘に苦笑する。

「しかし範囲……例えばだ」

蛙共の屯から左方向へ、この丘から直線距離にしてまた一町ほどの位置を指差す。

そこは、三方を丘で囲われ、さながら窪地のようになっていた。

「あそこへそれを撃ち込んだとして、内側全てを殺傷効果範囲に収めることはできるかい」

「ふふん当然です。一步でも踏み込んでいれば黒焦げにできますよ」

「結構結構、承知したぞ」

ならばやることは至極単純にして明快。

「めぐ坊」

「めぐみんです」

「俺が蛙共をあの窪地へ釣り寄せる。おめえさんは六匹全てが収まったのを見計らい、その爆裂とやらを叩き込め」

「へ？」

間の抜けた声を漏らし、娘はほかんと口を開けた。何を呆けるか。

「カズ」

「はいこちらカズマ」

「おめえさんは引き続き周りに注意を払っておれ。こりやあまだ出てくるぞ」

「う、うん。了解」

「アクア嬢」

「なにになに？ ふふんっ、いいわよ。麗しのアークプリーストたる私を存分に頼って」

「何もせず、じっとしていてくれ。頼む」

「なんでよお!？」

立ち上がり、前傾する。疾走の構え。

傍らのめぐみんに笑みを向けた。

「機を誤らんでくれよ。俺まで焦げっちまうからな。かははは」

そう言った途端、シンクロウは駆け出した。丘を危なげなく、それ

でいて物凄い速さで下りて行く。

蛙はもうすぐ目の前だ。

そして当然、蛙もまたジंकクロウを視界に捉えた。餌を求めて下りてきた人里、すると獲物がわざわざ近寄ってきた。襲わない理由がない。

蛙はその大口を開け、ジंकクロウ目掛けて飛び掛る。

ばかり、かぶり付いた先に、しかし目当てのものはなく。

ジंकクロウは横っ飛びに避けてそいつを素通りしていた。当然、行く先にも蛙はいる。

蛙が今度はその手を振り翳す。吸盤の付いた丸い指と水掻きの張った手。糞でかい手だ。

ずどん、なんて音が地面を伝って身体を震撼させた。蛙の手は地面を抉っている。その下に、やはりというか当然というかジंकクロウの姿はない。

またしても素通り。

「ええ……」

「まさかと思えますけど、あの調子で蛙を引き連れていくつもりですかあの人」

めぐみんが信じられないと言外に呟いた。

言ってる間にも、ジंकクロウは次から次へと蛙とニアミスを繰り返す。その都度、食い付かれそうになったり踏み潰されそうになったり、正直見ているこっちの心臓が持たない。

五匹を連れて、最後のやや離れた位置で背を向けている蛙目掛け、ジंकクロウが走り寄る。

真っ直ぐ、迷いなく、減速する気配もない。

ぶつかる。

そう思われた時、ジंकクロウが跳んだ。

蛙の斑模様の背中を踏み付けながら、坂でも登るみたいに駆け上がる。そうして行き掛けの駄賃とばかりに蛙の頭を蹴り付けて、その眼前に着地した。

あんなことをされたら誰だって頭に来るだろう。見たことのない

勢いで蛙が襲い掛かっていく。

そしてジंकクロウの思惑通り、蛙さん六匹は見事釣られた。

「来たよ来た！ ホントに来た!？」

「めぐみん準備！」

「り、了解です！」

やたらテンション上がったアクアが叫ぶ。

それを余所に、緊張した面持ちでめぐみんは杖を構えた。

「黒より黒く、闇より暗き漆黒に我が真紅の混交を望み給う……」

囁くような声で詠唱が始まる。

それと時を同じくして、周囲を風が吹き荒れる。風に乗って群青の光が渦を巻いた。それは中心に佇むめぐみんから発散されている。

群青は、闇のような、あるいは夜空のような、時折瞬く光はさながら星屑。

これが魔力、なのだろうか。

「ジंकクロウは……!？」

正統派ファンタジーな光景に見入って一瞬忘れていた。

ジंकクロウは順調に蛙達を誘導していく。速過ぎず、遠過ぎず、蛙の手が口が届かないぎりぎりの距離を維持しながら爆裂ポイントへ向けて疾走する。

小高い丘を登り、その頂で蛙達の到着を待つ余裕さえ見せて着た。

窪地の中心。勢い追い掛けてきた蛙達が、まるで洪水のように雪崩れ込んでくる。

なんとジंकクロウは、それを待ち受けた。

「ちよっ」

先陣を切って、一匹の蛙が跳び込む。巨体が陽を隠し、大地にさらに巨大な影を落とす。

その真下、完全な直撃コースにジंकクロウは佇んでいた。

何してんだ。アホなのか。バカなのか。

「だ、ダイジョブダイジョブ。死に立てなら蘇生できるから……」

「ああそっかそれなら心配ないかーあははははは！ ……んな訳に行く

かあー!! ジンクロウ!!」

ジンクロウは動かない。じつと腰を屈めたまま。

左手には刀。

蛙が降ってくる。

右手は柄を握り。

蛙が—— もんどりうって、地面に転がった。

「え?」

「は?」

芝生を盛大に削りながら蛙が倒れ伏す。そして後続していた蛙達は、突然転がった仲間に躓いたり衝突したり。完全なる玉突き事故を起こした。

その時、宙を何かが飛んで、程なく地面へ落ちた。

蛙の後ろ足だった。

擦れ違い様に、ジンクロウは跳び掛かってきた蛙の脚を斬り飛ばしたのだ。

どちやどちやともはや塊のようになった蛙達。それを一瞥したジンクロウは悠々とその場を後にする。

退避しながらジンクロウはこちらを見た。

「やれい! めぐ坊!」

「めぐみんです!! ですが感謝を!」

既に燐光、閃光、極光が限界まで高まっていた。

後はそう、少女の一言で全てが完成する。

「見よ! 人類最高最大、最強の攻撃魔法! 『エクスプロージョン』!!」

多層多展開された幾何学模様の円陣が、為す術もない蛙達を捉えた。

視界が赤熱する。

衝撃波があらゆるものを薙ぎ払う。

焔の爆轟が、哀れ蛙達を消し飛ばした。

「……………わ」

いつの間にか閉じていた目をそっと開くと、そこには焼け焦げ、円

形に大きく抉られた大地があった。

宣言通り、蛙は影も形もない。

ふと傍らを見ると、アクアが土に埋まっている。どうやら降ってきた土砂の生き埋めになってしまったらしい。

まあそれは置いておいて。

「ジंकクロウは？」

窪地を隅から隅まで探すが、ジंकクロウの姿がない。まさか……一瞬で血の気が引く。

噴煙やら砂埃やらですこぶる視界が悪い。アクア同様、生き埋めになっっている可能性もある。

ふと、魔法使いの少女を見る。めぐみんはその場に力なく倒れ伏していた。ぐったりと、身動き一つしないところを見るに、本当に比喩でも大袈裟でもなく一発で行動不能になるようだ。

「ああ……すつこく……気持ち良かったあ……」

夢見心地で不穏なことを言う少女にドン引きしつつ、なおもジंकクロウを探そうと。

周囲を見回した時、それを見付けた。

こんもりと、芝を捲り上げ茶色の土に塗れながら身を起こす巨大な姿。

蛙。

「で、出たあああ!! そうかさっきの爆音で……え、ちよつと待て」
ジंकクロウがいない。

傍らには足手纏い二人。

一人は身動きも取れない息をするだけのお荷物。

「……仕方ない。またアクアでも食わせて足止めを」

「ちよつとお！ 当たり前前みたく餌に使わないでよ!？」

アクアが土から飛び出した。土の中からよく聞き取れたな。無駄に耳がいいのだこいつは。

「大丈夫だって。ちよつとまたぬちよぬちよになるだけだから。上半身だけだから」

「いいやよ！ 女神の威厳をぬちよぬちよにされるあんな屈辱もうた

くさんよ！」

粘液程度でぬちよぬちよになる威厳なぞ捨てちまえ。そう内心で思う。

そうこうする間に、もこもこまた土が盛り上がる。

もう二匹、這い出してきた。

「うおい!? 言ってる場合じゃないぞー！」

「ふ、ふふふ、こうなったらやるしかないじゃない。そうよ初めからそうすればよかったのよ。やられる前にやる。それが弱肉強食つてもんでしょ」

「お、おい、アクア? アクアさん?」

トラウマに妙なギアが入って、アクアのテンションがおかしい。

アクアは愛用の物干し竿、もとい花を模った杖を手にいきなり走り出した。

掌中で高速回転する杖が、ハワイのファイアーダンスの時振り回すあれみたいな輝きを放つ。

「喰らいなさい! 愛と怒りと悲しみのおおお!! ゴツドレクイエぷう」

そしてアクアは食われた。それは正直予想通りなので驚きも少ない。

問題は、アクアが食われても、足を止める蛙は一匹だということ。そして現在進行形で俺達に襲い掛かってくる蛙はあと二匹いるということ。

「餌の数が足りねえ!」

「私も普通に餌にカウントされてるんですね。いやそんな気はしてませんでしたけど」

うつ伏せに転がったためぐみんが何やら落ち着き払った様子で言った。

その冷静さは、この後自分も食われることに対する達観とか諦観とかそういうやつだろうか。

その冷静さを見習って俺も食われれば楽だろうか。

「絶対嫌だ……!」

蛙の口から足だけ飛び出たアクアを見ながら力強く言い放つ。

一匹が迫ってくる。どすんどすと、迷いない跳躍で。

逃げたい。いや逃げればいい。ジंकクロウはきつと無事だ。なんなくそんな確信がある。

だからまあ、ジंकクロウが助けに来るまでアクアとめぐみんにはぬちよぬちよぐちよぐちよしてもらいつつ、俺はまたマラソンに勤しむ。

良い作戦だ。確実性という意味では、この場で出来る最善手じゃないか。

だからさ。

剣なんて抜かなくていいんだよ。なにしてんの俺。

「……ああもう！」

「カズマ、逃げないんですか？ 私はてつきり即行見捨てられて餌にされるものと」

「お前が俺のことをどういう人間だと思ってるのか分かったよチクシヨウめ」

だってさ。情けないじゃんか。ジंकクロウばっか格好良い感じじゃんか。

これは見栄だ。ただの見栄。男の意地とかそういう下らないやつ。

別に背後のめぐみんを守ろうとかそんな主人公っぽいこと考えてない。食われるだけならまだしも、うっかり踏まれて潰されるとか笑えない。それだけだ。それだけ。

迫ってくる。動いている蛙を仕留めたことはない。

ジंकクロウは何と言っていた。思い出せ。

蛙は動きが鈍い。だから突撃を避けるのは意外と容易。ぎりぎりまで引き付けて躲し、緩慢な動きの隙を突いて頭を砕く。

わあい簡単。

な訳あるか糞が。

地面を踏み砕く勢いの巨大生物相手にそんな神業できるか。ジंकクロウ的には普通のことかも知らんけどこちとら元々一般ピープルだ舐めんな。

「……間合」

間合を量れ。ジंकロウはそう言った。

目測で？ 分かるかよ。そんなの。動き続ける相手の移動距離なんて。

どすん、また蛙が地面を砕いて近付いてくる。もう猶予はない。距離にして十メートルくらいか。

蛙が地面を。

地面を、砕いて？

砕かれた地面には、点々と足跡が付いている。

そして蛙と俺との距離は——丁度一跳び分。

「あ、間合分かったわ」

蛙が跳ぶ。巨大な影が空を覆う様はめっちゃくちゃ怖い。ジंकロウはこんなものを前にして平気な顔してたのか。

落ちてくる。潰される。蛙の前足が、落ちる。ここだ。

一気に跳び退いた。必要最小限とか知るか。とにかく回避。ひたすら回避。

無様に地面を転がるような身躲し。でも躲した。躲せた！

ジंकロウの言った通りだ。蛙の立ち上がりより、こっちの方がずっと早い！

「おおらあああああ!!」

握った剣をその頭へ振り下ろした。

がつん、ぐちゃ、そんな感触。これは知ってる。

けれど頭を擡げようとした丁度そのタイミングでぶつかったものだから、剣先は深々と蛙の頭を抉った。

「や」

った、と言おうとした時、また新たな影が全身を覆った。

見上げる。

口を開けたもう一匹の蛙が、自分を見下ろしていた。

「あああああああ!!」

上げて落とすとか、この世界の神様は鬼畜なのだろうか。

まるで駄目な女神がいるくらいだから、あながちそれも在り得なく

はない気がする。

頭の片隅で明後日を思考しながら、ぬるぬるぐちよぐちよの末路に絶望した。

その時。

すとん、と蛙の側頭部にそれは刺さった。

何程の抵抗もなく、糠に釘を刺すかのように、その刀は深々と蛙を貫いた。

ゆつくりと巨体が地面に伏す。息を吐き出して脱力するみたいなの、穏やかな死に方だった。

「無事か」

そうして傍らに歩み寄ってくる長身の影。ジンクロウだった。

青年のその笑みを見て、膝から腰から力が抜ける。

へたり込みながら腹の底から大きな溜息を吐いた。

「う遅いよおジンクロウ!! マジで恐かったんだからなー!」

「すまんすまん。思いの外遠くに吹っ飛ばされちまってな」

言いながら、ジンクロウは蛙の頭に刺さった刀を引き抜き、血振いました。不思議と血は一滴も垂れなかった。

ジンクロウは臥せったままのめぐみんに近寄ると、屈み込んで様子を窺う。

「めぐ坊、大丈夫か」

「ええ、いつものことなので問題ないです。それより……その、ジンクロウこそ」

「服がちよいと焦げたが、まあ大事無い」

「……すみません」

「かっははは! 大した威力じゃねえか。いや正直な、侮っておったわ」

爆裂で吹っ飛ばされておきながら、ジンクロウはそれは愉快そうに笑った。文字通り一歩間違えていれば死んでいたと思うのだが、本人分かってるのだろうか。

めぐみんの頭を帽子越しにほんほん叩いてジンクロウは立ち上がる。

「それ、カズも立て。早くせんとアクア嬢が消化されっちゃうぞ」
「うーい……」

緊張やら恐怖やら、大して動いてもいない癖に疲労感半端ない身体をどうにか起こす。

見れば、アクアはもう膝くらいまで吞まれている。

溜息混じりに歩き出そうとして、不意に、後ろから頭を掴まれた。掴んだ手はわしわしと髪の毛を掻き乱し、おまけとばかりぐいと押さえ付けられる。

「のわ!? ちよ、なにすんだよジンクロウ!?!」

「さっきのは上出来だ。よくやったな、カズ」

そうして、なんでか誰よりも嬉しそうにジンクロウは笑った。

13話 小童め

煌々と月が照る晩のこと。

柔らかな夜気、暖かな焚火。そよぐ風が芝を撫で上げ、我が身までも包んだかと思えば、それはすぐに夜空の高みへ消え入った。墨で染めたかのような漆黒に、僅かに滲む群青の色彩。その満天に濁りなく瞬く星星。秋も随分深まった。冷えた吸気が体内を清浄にする。

馬小屋の傍にある石竈を拝借し、火を焚きながら呆と夜天を仰いだ。

静かだ。

民家は遠く、夜半まで商売する酒場や飯屋の喧騒も流石にここまで届かぬ。

虫の声を聞く。馬の息遣いを感じる。

静かな、良い夜だ。

「ジंकクロウ……？」

ふと、声が掛かる。

振り返れば、馬小屋の入り口に少年が一人佇んでいる。

「カズか。どうした。眠れねえのか」

「いや、トイレの帰り。なんか灯りが見えたから」

目を擦りながらカズマはこちらへ歩み寄ってきた。

薪をもう一本、火中へ投げ入れる。

「ジंकクロウこそ何してんの？」

「何、ってほどでもねえが……ま、見付かっちゃったもんは仕方ねえか」

そうして、腰を下ろしている丸太の影からそれを取り出して見せた。

つるりとした陶器。丸い輪郭線を描き、注ぎ口を括れさせた昔ながらの酒器。徳利というやつだ。

無論、中にはなみなみ〃それ〃が満ちている。

「一献付き合わねえかい？」

「ごちになります」

にやり笑みを向ければ、ニシシと笑みが返ってきた。

斜向かいに腰を下ろしたカズマにぐい呑みを手渡す。そうして徳利の中身を注いだ。

「ん」

カズマは一旦器を置き、徳利を手取る。そのままこちらに注ぎ口を向けた。

酌をしてくれるという。小生意気な。

「かはは」

「なんだよ」

「いいや」

おっかなびつくり、手付きからそんな気配を覚え余計に可笑しくなる。

なみなみと注がれたその水面、炎がゆらり揺らめいていた。

「ありがとうよ」

「ん、じゃ」

「ああ」

「乾杯」

盃を持ち上げ、名前の通りぐいと呷った。

僅かに甘く、仄かに苦く、喉を過ぎるに熱い。ふ、と吐いた息が焼けている。

美味しい。

気の所為か。ここ毎夜の一人酒で、舌はこの味に慣れたものと思っていたが。今宵は殊に美味く感じる。

「……っ、ふいい」

「いける口じゃねえか」

「へへっ、そりやこつちに来てからはほとんど毎晩飲んでるからな」

「ほう、そいつあ豪気だな」

少年の空になった器に注ぎ、己の方にもまた注がれる。

注しつ注されつ、そうして穏やかに時間は過ぎた。

「そういえばさ」

「なんだ」

「や、前々から気になってはいたんだけどさ」

「妙に勿体ぶつた、というより躊躇いがちにカズマは問うた。

「ジंकクロウってさ……転生、とかしてたり、するのかなーって」

「ああ、したぞ」

「そっかそっかそんな訳ないよな！ いやごめん変なこと聞いて、っ

てええ!？」

「喧しい。夜中に声を立てるもんじゃねえよ」

「あ、すみません」

冷静になると、少年は手の中の盃を空にした。徳利を向ける。

「まあ、名前聞いた時からそうなんじゃないかとは思ってたけど。明

らかに日本名だし」

「へえ、そうなのか」

「あと地味に確信持ったのはアクアのことかな」

盃を一嘗め、少年は熱の籠った息を吐いた。

「ったはあ……アクアが自分のこと女神だとか言っても、ジंकクロウ

何も言わないからさ」

「なるほど確かに。事情を知ればこそか」

「うん。普通はもつところ、可哀想な人として扱う。実際そうだった」

遠い過去を見るかのような胡乱な眼差しであった。

「あの娘が人でないのは見れば解ることよ。尚且つ、それ以前に似た

ような者と会っておれば間違えようもあるまい」

「見ればって……ジंकクロウはアクアに転生させられたんじゃないの

か」

「ああ、アクア嬢とは初見だ。本人の様子から分らんか？」

「あいつが送り出した人間のこと一人一人記憶してるとか絶対ない。

絶対」

揺ぎ無い確信を以てカズマは断言する。

おかしな信頼もあったものだ。くつくつと喉の奥で笑声を鳴らす。

不意に、ぐいと一献飲み干した少年が身を乗り出す。顔の赤みは焚火の灯のそればかりではないだろう。

「なあなあ、ジंकクロウの特典ってやっぱりその刀なのか!？」

「ああ？・特典?」

「え?」

興奮した様子から一転、戸惑い首を傾げる。

己の反応が慮外のそれであったのだろう。

「いや、ほら、俺らってなんか魔王倒して来いとか言われてこの世界に送られるだろ?」

「そうらしいな」

「その時、転生特典ってやつで、一人一つチートアイテムとか能力とか持って行きたいもの選ばせられるんだけど……え、ジंकクロウは違うの?」

「ああ、魔王をどうこうしろなんて依頼は受けちゃいねえ。その特典とやらも初耳だな。それこそ着の身着のままよ。刀はこの街で買い求めたもんだ」

さらに酒精を呷れば、全身をふわりと綿毛が包むように軽くする。

なにやら、少年から同情の籠った視線を超越された。

「特典無しでこんな世界に放り込まれたのか……」

「ん? 何故だ。ここでの生活はそう悪かないぜ」

「どこが!? 来て早々バイト生活に明け暮れて、いざ冒険だって息巻いても、命張ってようやく稼いだ額は割に合わないのがしょっちゅうなこの世界の、どこが! 悪くない!？」

これ以上無い実感の籠った恨み言。少年の苦勞、主に生活費の工面に掛かった大儀は想像に難くない。

それはそれとして、そのあまりの悲愴っぷりに知らず声を上げて笑っていた。

「はははっ、まあおめえさんの心情も解らんではない。だが俺の場合、元より他に逝き場もなくてな」

「? 天国行きか生まれ直しか選べって話、だったよな」

「俺はどうも死ぬ以前の記憶がねえのさ。ついでにその“記録”も

ねえんだとよ」

「はあ!？」

「憶えていることといやあ己の名と……」

片目に見やる。大人しく鞆に納まるその刃を。

そう、その振り回し方くらいなものだ。

「浄土へ送るにせよ地獄へ墮とすにせよ、罪状を検めねば裁定はできません。同様に人道の輪廻を踏ませてよい者かも判断が付かぬ。なんとも始末に負えん話よな」

なんと答えれば良いものか。少年の面にはそのように書いてあった。

また気を遣わせている。口の端を苦笑が引き上げた。

「エリス嬢——己をここへ送った女神だが、その娘の温情でこうして生かされておる訳だ。これ以上我儘を抜かすとそれこそ罰が当たらあ」

「……その女神様は、ジंकクロウに何も要求しなかったんだな」

「うむ。一つ、あるとすればだ」

白銀糸の髪の毛の美しい娘が己に求めたこと。それは。

『どうか、貴方のこれよりの生に——』

祈るように、両の手を握り合わせて。

我が子にそうするが如く慈しみながら。

「幸せに暮らしてくれ、だとよ」

「女神かな? あ、女神だったわ」

阿呆なことを呟いた後、カズマは夜空を仰ぐ。星でも眺めておるのかと思えば、徐にぼつりと口を開いた。

「うちの駄女神と代わってくんないかな……」

「それをアクア嬢の前で言ってやるんじゃないやねえぞ。またぞろ泣く」

また一献干した。名の由来通り、とくとく音を立て盃へと注ぎ入れる。

ふと、カズマが興味深そうに立て掛けた刀を見ていた。

「それはそれとして。いやあ、やっぱ日本人は刀だよな。名前とかあるのか?」

「検めたが銘はなかった。売っていた店主自身、出自を知らんそうだ」
「おお、正体不明の武器とかいいじゃん。男心を撥る感じ。なあちよっと」

その後の言は予想が付く。故に、少年の手が届く前に釘を刺しておく。

「こいつに触るとな、れべるを吸われるそうだ。氣い付けろ」

「さわらせええええええええええ!!」

奇声を上げて、カズマは腰掛けた丸太の後ろへ引っくり返った。

『突撃牛』というそうだ。

姿は、その名が示す通り牛に近い。とはいえ近い何かである。それらには一様に明らかな相違がその身体に見られた。

一際目を引くのは、その前脚。牛の四肢が剛強であることは語るに及ぶまいが、特に肩から前腕、蹄を持つ足先までが異様に太い。

それこそ奴らが突撃牛と呼ばれる所以であった。

あれは、謂わば射出装置。

後足ではなく、奴らは前足で地面を噛み、全身を撃ち出す。

頭部の両端から突き出た二本角。緩く歪曲し、鋭利な先端が前方を差している。あんなものに突撃されればなるほど、人間など一溜まりもあるまい。

一丈にもなる巨体を高速で射出する膂力。

激突に耐え得る強力無比な筋肉の鎧。

突撃することのみ特化した身体機構。

突撃牛、その名にし負う生物もんすたーだった。

「ジンクロウ！ 頭よ！ 頭を狙って！」

「ジンクロウそこです首を！ 首を落とすんです！」

その名に、相応しい。

「血抜きは早い方がいいと聞きました！　肉の質は死んだその瞬間から落ち始めます！」

「ほらさぱつと！　いつもみたいにするっぱんすっぱんやって！　ほらやって!!」

その名。

余談だが。カズマはこのモンスターの特徴を確認した際、『ミノタウロス』ではないのか？　と疑問を呈していた。

特に関わりはないが。ギルドが発行する『モンスター百科』に記載される名称とは別に、彼らにはもう一つ、冒険者達の間でのみ呼び習わされる『俗称』があった。

「ミノとタンは私んだから！　ミノは味噌ダレで！　タンは葱を乗せてレモンで！　キンツキンに冷えたシユワシユワをこうキュウーつとやるのよ!!」

「はわわわっ獲れ立て絞め立てのロース……お店の前で匂いを嗅ぐだけだったあのロースを遂に……」

何処がとは言わぬが、絶品であるらしい。冒険者のみならず市井の人々にも好まれ、末端価格も相当な額であるとか。どの部位が、とは言わぬが。

言わぬが華とは、このことだろうか。

「ミノ！　タン！」

「ロース！」

「ミノ！　タン！」

「ロースッ!!」

「……」

俗称である。

街道を外れ、西に一里ほど行けば緑に囲われた沼地に行き着く。突撃牛はこの沼へ水浴びをする為にやってくる。

その途上、疎らな雑木林で待ち伏せを行い、折好く二十頭ほどの群を捕捉した現在。

己は涎を垂らした娘っ子共にせっつかれながら、何故か牛追いに勤

しんでいた。

牛の前足が地を抉る。

突撃の構え。

来る。

「ブモオオオオオオオ!!」

脚力を頼みに側転。

上下反転した視界の頭上。高速で行過ぎる黒毛の巨軀。

それはそのまま一本の樹に突っ込んだ。幹が砕け、木屑が弾ける。

僅かな抵抗もなく大樹が薙ぎ倒された。

大した威力よ。

「避けちゃダメじゃない!」

「さ、流石に避けてください! でもできれば避けながら斬ってください!」

「無茶を」

幾度繰り返したかも分からぬ苦笑が口の端に浮かぶ。

外野に徹する娘二人、アクアとめぐみんは興奮した様子でぎやあぎやあと騒いだ。ギルドにて依頼を受託しいぎ牛を見付けた折からこっち、娘らは長らくあの調子だ。

何を考えているかは、まあ瞭然極まる。彼奴らの両目が湛えておるものはただ一字、肉である。

食欲の権化と成り果てておる。

片や、異常な高揚状態にある二人から若干の距離を置いて立つカズマは大層神妙な面持ちで。

「ジンクロウ!」

「なんだあ」

「ごめん! やっぱ俺も牛肉食べたいっす!」

「あいよお! ちよいと待ってな食いしん坊共!」

育ち盛りのガキの食い意地。甘く見ていた訳ではないが。

依頼書を手にもこれでもかとも目を輝かせるアクアとめぐみんの様から類推すべきであったかもしれん。

別段、骨折りとも思わぬ。しかし、己一人で全て片付けるのは些か

ならず過保護というもの。

悪戯心も少しばかり湧いた。

また一頭の突進を躲す。肌を搔く突風が牛共の猛りを表している。

「カズマ！」

「はいはいカズマですよ」

「一頭は仕留めてみせい！」

「りよーかい一頭しとめて……………え？」

水辺への行軍に横槍を入れられ、突撃牛の群は今や三々五々。真つ正直に己を突き殺そうと息む者もおれば、その辺りで暇そうに草を食む暢気者もまたおる。

そういう一頭に走り寄り、その尻を蹴り上げた。

一人佇む、カズマの方向へと。

牛は荒く鳴声を上げ、勢いカズマへ突貫した。

「ちよちよちよちよつまってまってまって!? ジンクロウさああああん!？」

カズマは逃げた。三十六計の兵法に恥じぬ逃げっぷり。

見事なのは、背を向けていながら直線ではなく鋭角に方向転身を繰り返しつつ逃走している点であろう。突撃牛の膂力による瞬間加速は人間の走力など容易く上回る。馬鹿正直に真つ直ぐ逃げておれば、かの二本角のいい的だ。

流石、賢しい小童め。

胸中で綽々感心などしておれば、牛がまた一頭迫り来る。

至近。角の先端が腹部を抉る。その寸前。

地を蹴る。低空跳躍。

突撃姿勢の為に身を屈めた牛、その後背に乗り上げた。

「ブオオ!？」

背中の違和の正体に気付くや、牛は暴れに暴れた。無賃で我が背に乘る不心得者をなんとしても振り落とさんと。

なるほどこれが所謂猛牛乗りろんでおりというやつか。

裸牛の操縦など元より不可能。

既に抜刀し、逆手に構えを取っている。狙うは後ろ首の付け根、延

髓だ。

さくり、何程の抵抗感も覚え、切先は頸骨までも貫いた。

牛はその全身を震わせたかと思うと動きを止め、横倒しにゆっくりと地面を目指す。

倒れ伏すより早く、牛から跳び降りる。

跳躍先はしかし大地ではない。

その辺りに屯する次の牛へ。

「めぐ坊！ 今より叩き出す！ 急ぎ往け！」

「は!? そ、そうでした！」

まさに今思い出したと言わんばかりの顔で、めぐみんは走り出した。

手法は蛙に使ったそれとほぼ同じ。

違いがあるとすれば、釣り方がやや強引である点か。

このように。

「ブモオオオ!!」

「かかか！ そおらどうした!? それでは降りてやれんなあ！」

背を足蹴にされ、牛は怒り狂って跳ね回る。

それを利する。

牛の強靱な上半身が解放された発条ばねのように跳ね上がった。その反動を余さず足下に受け、我が身は飛んだ。

人間の跳躍力では届かぬ距離に佇む牛へと、いとも容易く飛び移ることが叶うほどの飛翔、舌投擲である。

突然降ってきた人間に、驚愕と怒りを緬い交ぜにして牛が暴れ狂う。

そうしてまた跳ね飛ばされる。

これを都合八度ほど繰り返した。牛を船に見立て、牛若の真似事か。

八度目。飛び移った牛の尻を刀の棟で打ち据える。

「ブホオオオオオ!!」

堪らず牛は駆け出した。

踏み付けられた牛八頭の面々は見事、己を標的として、乗られてい

る仲間ごと追い掛けてくる。

重畳。

雑木林を抜け、沼地を大きく迂回しながら過ぎ去り、やや時間を掛けてだだっ広い湿地帯に辿り着く。

稼いだ時間をめぐみんは無駄にせず、所定の位置に既に待機している。いや、詠唱とやらも済んでおろう。

湿地ならば爆焰の飛散も問題にならない。

長居は無用であった。不遜に占領していた牛の背を蹴り飛ばし、進行方向とは真逆へ跳んだ。

全力疾走していた彼奴らにはもはや轉身しこちらに追い継る猶予などない。

紅い光輝が降り注いだ。

『『エクスプロージョン』!!』

「かはは。次はもう少し、陣取る場所を考えんとな」

「……………そうですね」

湿地の泥濘に突っ伏し、見事泥まみれになっためぐみんを起こす。

一先ず手拭で顔の汚れだけは拭き取った。

「んんっ」

「ととと……………うむ、綺麗になったぞ」

「ん……………ありがとうございます」

娘の矮躯を抱え上げ、元来た道を歩く。カズマは果たして上手くやっておるだろうか。猛牛一頭を仕留めろ、というのは流石にまだ荷が重いやもしれん。

「シンクロウも、また随分な無茶ぶりをしましたね」

「そうかい？ カズマあれで、なかなか筋は良いんだがな」

重いなら重いなりに荷物 of 投げ捨て方を心得ている男だ。そう分

の悪い勝負ではない、筈である。

「ところでジंकロウ」

「なんだ」

「……………この抱え方は、その、ちょっと恥ずかしいです…………」

「あん？」

めぐみんが俯き加減にぼそぼそと何やらぼやく。

抱え方。特別おかしなものではない。背中から肩、そして両腿の下へ腕を差し入れ、胸元にもたれかけるようにして支えている。

脇や胸、腹の下に手を差し入れて持ち上げると内臓や血管を圧迫する為に苦痛が多く、安定もしない。ぐずる赤子や猫を抱く際は特に、脚の付け根ないし尻を支え上げることで抱かれた本人も楽な姿勢を維持できる。

「お姫様抱っこは…………」

「姫…………？」

「え？」

想定とは似ても似つかぬ言葉の響きに思わず鸚鵡返す。

それだけで、この聡い娘は即座に察したようだ。

「おい、今なにを思い浮かべながら私を抱っこしているのか正直に言ってみろ」

「首の据わらぬ赤子か、大きな猫つてえとこだな」

「本当に正直に言いますよねジंकロウは!?!」

「おうとも、昔から嘘の吐けぬ正直者と評判であったよ」

昔など、知る訳もないが。

雑木林へ到着してみれば、そこでは未だ一進一退の攻防が繰り広げられていた。

「プツークスクスウ！　すごいすごいカズマ！　今の貴方すごい！

まるで台所で新聞片手の主婦に追いかけられるゴキブリみたいよ!?
ゴ、キ、ブ、リッ、ダッハハハハハハハハ!

「こんの! 駄女神! このっ! 後で覚えてろ! 覚えてろよこ—
—あ、あ、あ、あ、あ、あ、あ、あ、あ、あ、あ、あ、あ、あ!」

近付くだけに騒がしいと思えば、相も変わらぬ光景であった。

一頭の突撃牛が少年を追い掛け回している。しかしそれは、両の前脚を使った一点特攻ではない。牛はやや速度を抑え、旋回性を考慮した短距離の跳躍を駆使しているのではないか。

小刻みに進路を変えつつ逃走するカズマに対して、牛は学習し方策を改めたのだ。

「高が牛と侮ったわ。敵を知り柔軟に対応を変えるとは……うむ、見事也」

「感心している場合ではないと思います」

腕の中で蓋し正論を吐かれる。

そうこうする間にも、牛はカズマの動きの癖を見切り始めていた。左へ半歩踏み出したと見せて右へ逃れる。目眩まし。初見であれば騙されようが、おそらく少年はあの術策を幾度か使っている。

牛は釣られず、迷わず右へ転身した。

カズマの背中が牛の射線上に入る。

牛の巨軀が縮む——あたかもそう錯覚するほどに筋肉が力み、収縮する。射出の構え。

「跳べいカズ!!」

「いっ!!」

怒鳴りにも近い己の声はしかと届いたようだ。

まるで弾かれたようにカズマはその場で跳び上がる。

その股下を牛が突撃した。そのまま過ぎ去る、かと思えば。

跳躍力が足りない。少年は牛の背にすくとんと乗り上げた。

「ブモオオオオ!!」

「うおおおおお!!」

猛牛乗りの続きか。黒い巨体が前へ後ろへ跳ね回り暴れ狂い、その度カズマもまた激しく振り回される。

そうして暴れ牛が新たに取った進路の先には、腹を抱えて笑うアクアがいた。

「え、ちよっ」

「モオオオオオオオオ!!」

「ああああああ!!」

真っ直ぐ、突貫する。

「ちよちよちよなんでこっち来るの!? カズマ!? カズマさん!? なんでこっち来るの!? ごめんなさい!! 笑ったこと謝るから! ごめんなさいするからこっち来ないでよ!! ねえったら!!」

「うるせえ!! 操縦なんてできるかボケエ!! ぬはははははははは!

こうなったらお前も道連れじゃ駄女神!? さっきまでの屈辱千倍で返してやばばばばばばば」

「いいやあー?!?!」

追われるアクア、追う牛とカズマ。

驚くことにアクアは単純な走力で牛の突撃から逃げ続けている。大した健脚だ。

とはいえ、ここは沼地からも程近い。足元の土は湿り気に富み、ともすると其処彼処が泥濘化している。

ああも気兼ねなく走り続ければおそらくは。

「いやあー!?! いいやああー!?! い——ずべし」

「ああああああ!?!」

少女は泥に足を捕られ、その場に顔面からすっ転んだ。

突撃牛は追い回していた対象を視界から失う。しかしその苛烈な勢い、もはや殺し切れまい。

お誂えここに極まる。一際太い大樹が、彼奴の眼前に聳えていた。

牛は顔面から、強靱な樹の幹に突っ込む。地を震わせるほどの衝突音。木の葉が雨のように降り注いだ。

牛はずるとその場に倒れ伏す。

「——あああああああああああべし」

衝突前に牛の背から運よく投げ出されたカズマは、アクアと共に、

仲良く泥の中へ突っ込んだ。

「……」

「……」

「街へ戻ったならば、まずは風呂屋だな」

「そうですね」

14話 優しい娘の知り合いによく似ておるのさ

外壁を潜り、目抜き通りの石畳を蹴って進む。

街へと着いた頃にはすっかり茜に染まった空を仰いだ。其処彼処の家々から夕餉の煙が上がり、まるで白い帯を靡かせるかのよう夕空を彩った。己の腹具合もまた、今がいい時刻であることを告げている。

不意に、背負ったためぐみんが妙な声を上げた。それはどうやら笑い声であった。

「いひひひ、焼肉……ああ焼肉……身の少ない小鳥じゃない……新鮮な、絞め立て牛肉……ふふふふふ」

「めぐ坊、薄気味の悪い声を出すんじゃない」

「失礼な」

「ミノタン〜！ ミノ、タン〜！」

アクアが珍妙な歌を口ずさむ。軽やかな足取りだが、その度に乾いて固まった泥がぼろぼろと道端へ落ちる落ちる。近い内、また清掃業務にでも勤しむかい。

「ん〜、久々の豪華な夕食よお！ 気合入れて飲みまくらなきゃね〜」
「そうやって今日も道端に浄化ゲ○撒き散らすんですね分かります」

同じく乾燥泥塗れのカズマが如何にも嫌味つたらしく鼻を鳴らした。まあしかし、文句を言いたくもなろう。毎度毎度娘を介抱させられるのはこの少年なのだから。

とはいえ、嫌々言いながらしつかりと面倒は見通すのだ。なんとも素直でない。

「焼つき肉！ 焼つき肉！」

「飯の算段もいいが、まずは風呂でさっぱりしてきな」

討伐したモンスターは通常ギルドが買い取る。素材として市場価値を持つものもあるが、死骸は流行病や他のモンスター発生誘引にもなる。それを防止するという目的から、ほぼ無価値のモンスターであってもギルドは小額ながら買取を行っている。

今回討伐した牛は一部をギルド側の買取ではなく、こちらの引き取りとして契約を行った。

「モンスター素材を引き取る時はギルドで検疫するんだっけ？俺、よく知らないんだけどさ、検疫ってそんな早く終わるもんなのか……？」

「なに言ってるの。そんなの浄化魔法ピュリファイケーション掛ければ一発よ。その辺の手続きもちゃんと済ませてあるから。お風呂屋さんからギルドに戻る頃には、精肉加工も終わった牛肉ちゃんが私達を待ってるわ！」

「お前ホント自分の欲求満たすことにだけは手際良いのな」

カズマは呆れとも感心とも付かん顔になる。

「まあまあそう言うな。今日は皆よく働いた。偶の贅沢も心身を癒すに大事な薬よ」

「そういうこと言うとすぐ調子乗るんだよこいつ」

「ははははは！ 違えねえ。カズ、しっかり見張っててやんな」

「へーい」

「ふうんだっ！ 今日のところは！ 牛肉ちゃんに免じてその神をも恐れぬ扱い方も許したげる。今日だけはね！」

上機嫌ならばそれに越したことも無い。背中と隣にそんな娘っ子共を、一方で口調とは裏腹に優しい笑みを湛える少年を伴う。

夜の降り始めた帰途、しかし賑々しさに全く事欠かぬ。平和なこと。

その認識が、あるいは心の隙であったのか。

気配は、するりと己の項を撫でた。

「……」

逢魔ヶ刻とはよく言ったものだ。

昼と夜の狭間にあって、人は路の先に佇むモノを恐れる。見えぬもの、不明なるもの。

そういうものが、今は背中の向こうから。

「？ ジンクロウ、どうかしましたか」

「ん？ ああ、すまねえがおめえ達、先に風呂屋へ向かっておれ。カズ、めぐ坊を頼む」

「え、うん。いいけど」

一旦石畳に座らせたためぐみんを抱え上げ、カズマの背中に負わせる。

「カズマの背中には狭いですね」

「乗って早々に文句垂れやがったこいつ」

「ジンクロウの背中には広くて揺れも少ないので快適なのです。カズマはもう少し身体を鍛えた方がいいですよ。骨ばっついていて痛いです」

「よおし降りろ。今すぐ降りろ。引き摺ってつてやるから」

「ははは！」

さながら兄妹のようだ。愉快なやり取りに満足し、めぐみの頭にぼんと触れる。

「小用を済ませてから向かう。落ち合う場所は……」

「あ、集合はギルドじゃなくて中央広場にしましょ。最近ね、そこにシュワシュワガーデンっていうのができたの！ 屋外酒場でね、二千エリスで飲み放題食べ放題！ そしてなんと言っても食材の持ち込みOKなの！ ね？ いいでしょいいでしょ？」

「おうおう分かった分かった。待ちきれんようなら気にせず先に始めな」

「分かったわ！ ならゼンは急げよ！ カズマめぐみん！ ほら早くお風呂！ 走って！ 駆け足！ ダツシュ！」

言いつつアクアは一人駆け出していく。幼子とてあそこまで喜びの表現に全力を出すまい。

「だあもう！ 犬だつてもうちよい行儀いいぞ。じゃ、後でな」

「ジンクロウも早く来てくださいね」

手を振るめぐみに片手を上げて応え、三人を見送った。

そうして己は、彼らの行った目抜き通りから一本道を逸れる。夕刻、酒場飯屋の書き入れ時だ。大通りから離れたとて人の往来は多い。

だが、それでも分かる。だからこそ分かり易い。

尾けてきている。カズマらの方へは目もくれず。

これではつきりした。この「尾行者」の標的は己であると。

心中に浮かぶのは……安堵であった。

「……」

悠々と歩きながら、思索を廻らせる。

一先ずガキ共と距離を取ることに叶った現状。相手の正体を探りたい。

この地を訪れて三週間余り。未だそんなものかという心持ちだった。誰ぞの怨みを買うにはちよいと短過ぎる気もするが。

ならばカズマらと関わりある何者かか。その可能性も絶無ではない。ないが、そこまで行ってしまうえばもはや見当の付けようもない。

「梨ー！甘あく熟れた梨はいらんかねー！」

ふと見れば、店仕舞い間際の青果店が在庫処分とばかり安売りをしている。

陳列台には売れ残りだろう果実が疎らに並んでいた。中でも目を引くのは、先端が細く下方へ行くに従い丸く膨れた面白い形。洋梨か。

店先で客寄せするお下げ髪の小さな娘っ子に近寄った。

「五つほど包んでくれるか」

「まいどー！」

娘が紙袋に洋梨を詰める。

その合間に、背後を盗み見た。行き交う人波の中、さっと物陰に動く者。

(一人か)

「はいどーぞ」

「おう、ありがとうよ。小銭がねえんだ。釣りはいい」

「わっ、ありがとうおじちゃん！」

娘の笑顔に見送られ、その場を後にする。おじちゃんとは若く見られたものだ……いや逆か。

紙袋片手になおも道を歩く。

そして後背の気配もまた変わらず尾行を止めぬ。

撒くだけならそう難しくはないが、やはり正体を掴めぬままというのも後顧の憂いとなろう。

適当な路地へ入った。

当然、其奴は付いて来た。一瞬とはいえ対象が視界から消える。駆け寄り急ぎ路地裏を覗き込む。が、どうしてか目当ての者はそこに居らぬ。

「!?」

狭苦しい路地は奥に道が続くでもない完全な袋小路。だというに、相手は忽然と姿を消してしまった。

化かされたかの心地であろう。事実、路地に入って来たその者は呆然とそこに突っ立ったまま。

——頭上からその様子を見下ろし、可笑しみに口の端が吊り上がった。

店の勝手口の小屋根から跳び降りる。着地の際、足音を立てたのはほんの悪戯心であった。

思いの外に細っこいその背中へ声を投げた。

「俺に何ぞ用かい」

「ひゃい!」

数寸本当に飛び上がった。

当然、相手はこちらへ振り返る。

妙に軽装の……娘である。項に届くかどうかの短い銀髪。緑の肩掛けを羽織つてはいるが、肌着は胸元を隠す黒い一枚と、腰と下腹をようやく隠せるかというズボン。鳩尾辺りから腹に掛けてはほぼ全て露になっている。風邪でも引きそうなものだが。

整った顔貌、その右頬に一筋走った傷跡が特徴的な少女。

意外、ではあった。

男女の別ではなく、その外見の思った以上の幼さが。

とはいえ鏢に掛けた親指はそのままに、なおも問いを重ねた。

「おめえさん何者だい。何故俺を尾ける」

「え、ええと、そのお」

娘は暫時答えあぐね、適当な言い訳を逡巡する様子であったが。程なく、観念したかのように両手を上げた。

「ごめん。私はクリス。見ての通り盗賊なんだけど」

「盗人だあ？」

鯉口を切った。

「待って待って待って!! 強盗とか野盗の類じゃないから! 冒険者

の一職業! 盗賊職!」

「無論、知っているとも」

鞆口を切羽に押し当て、刃を仕舞う。

くつくつと笑う己を見てからかわれたことに娘は気付いたようだ。

肩を脱力させ、恨みがましい上目がこちらを睨んだ。

「心臓に悪いよ……」

「すまんすまん。で? 冒険者の御同類がこの俺を尾け回す理由はな

んだい」

再三の問い。

娘は頬の傷を指先で掻いた。

「実はさ……キミのその刀を見せて欲しかったんだ」

「うん? こいつをか」

二週間ばかり前。売れない魔道具屋にて掘り出した正真にして正

銘の妖刀。無銘の一振り。

腰の革帯に差したそれを目的に娘はここまで来たという。

何故、この刀を知っている。これはかの魔道具屋の倉庫で長らく埃

を被っていた珍品。店主ですら、己が訪ねるまで存在を忘却していた

ものだ。

何故、現在の所有者が己であることを知っている。店主に訊いたと

いうのが無難な理由であろうが、妄りに客の売り買いを他人に漏らす

とも……世間話のついでにぼろつと零してしまった、という場合もあ

のおつちよこちよいな娘ならばあり得るか。

疑問は尽きぬ。

なれど。

「見るだけなら構わん。うっかり触るんじゃあねえぞ」

「ありがとう! 大丈夫、分かってるよ」

腰帯から抜いたそれを娘の目の前に晒す。

娘はじつと、鞘に納まった刀を観察し始めた。刀身を露にせよとも言わず、どころかこの刀に触れることの危うさをも知っているらしい。

「いよいよ、この娘の正体に興味が湧いた。」

「——いや、心当たりがないではない。」

徐に娘は刀から視線を外し、小さく頷いた。

「ありがと。私の探し物とは違ったみたい」

「そうかい」

「突然ごめんね。でも、キミも随分大物というか肝が据わってるっていうか。尾行された相手によく自分の武器を見せようとか思えるよね……や、これ、私が言っちゃダメなやつだね」

「で、あろうな。隠形に自信があるようだが、武装した者の背後から忍び寄るような真似は感心せんぞ」

「あー……いつから気付いてた?」

「街に入ってからこつち、ずっとこちらを窺っておったろう。本腰を入れて尾け始めたのは我らが二手に分かれた時か」

「初めからじゃん!」

まるで黙っていたこちらが悪いとでも言いたげな口振りである。妙ちきな娘だ。

喉奥で笑声を立てる。

納得の行かぬ顔で娘はまた頬の傷を搔いた。

「なんで? 潜伏も忍脚も使ってたのに……」

「だからか。人混みにぽつかりと穴でも空いたかと思うたわ。あれでは気付くなどという方が無理な話よ」

「ううー、なにそれえ。完璧に隠れたつもりで本当は丸見えだったってこと? めちゃくちや恥ずかしいじゃんか……」

娘は神妙に頭を抱え始めた。

褒められた行いではなかったが、どうにも憎めぬ娘である。

溜息を一つ吐き、娘は気を取り直した様子だ。

「お兄さん。この刀が危ないってことは……」

「ああ、承知している」

「だよねえ。手放す気もないみたいだし、私から言えることは少ないけど……でも」

一呼吸にも満たぬ沈黙。娘がそこに何を思ったかは分からない。俯けていた顔を上げた。

「気を付けて」

真つ直ぐに我が目を見据え、娘は言った。

憂うような、祈るような瞳。

「ありがとうよ」

それに対する応えは感謝以外にありはすまい。

娘は優しい微笑を浮かべた。

「引き止めてごめんね！ またその内ギルドで会うかも。その時はよろしく！」

「ああ、こちらこそ宜しく頼む」

「それじゃ！」

快活にそう言って、娘は路地から駆け出そうとする。

「ああ、ちよいと待ちな」

「ん、なに？ わっ」

「よく熟れておる」

「えへへ、ありがとう！」

投げ寄越した梨を手に娘が背を向ける。

その背に、今一度感謝を告げた。

「わざわざすまねえな、エリス嬢」

「いいえ、お気になさらないで——」

振り返り、えらく品格の上がった微笑を湛えた娘は、はつとした様子で急停止する。

つかつかと再び己に歩み寄ると、頬を膨らませ怒り顔らしきものを作った。それは残念ながら愛くるしい以外の印象を己に与えはしなかったが。

「私はクリス！」

「かはは、そうであった。すまん、知り合いに似ていたのでついな」

「もう……次は間違えないでください！」

べ、と小さく舌を出し、クリスは今度こそ人混みの中へと消えて行った。

15話 いつもの管巻き

酒場には今日も酒精の香りが満ちていた。だけに留まらず、色とりどりの料理肴が長机を覆い尽くしている。

こちらでは特に肉料理が好まれるらしい。例の巨大な蛙も、今や料理人の手により牛蛙ほどの大きさに成形細工をされ、香辛料香草調味汁諸々を施され油でからりと揚がっている。

野菜とて捨てたものではない。どころか、この地で採れる野菜山菜の旨さは言葉にならぬ。どのように調理しても良いが、このところは葉物の煮浸しが特に気に入っている。所詮菜っ葉と侮る無かれ。新鮮なものともなれば噛むほどに旨味が滲み、その後味を酒で流し込むのがまた堪らない。

ギルドの酒場でも他の例に漏れず、先付けとして小料理が出てくる。己のそれは、料理長殿の計らいで毎度煮浸しだ。

「ジंकロウも飽きないよな。そんなに美味しい？ それ」

「うむ、どうにも飽きん。茹で加減と出汁の塩梅が見事だな」

正面に座り、小鉢の炒り豆を摘みながらカズマが言った。

「このところ毎日のように食っている。そう呆れられようが仕方あるまい。」

「……」

「めぐ坊、食うのは構わんから酒が来るまでちよいと待ちな」

「別に欲しいなんて言ってますん……言ってますんが、くれると言うなら貰いましょう」

「そうかい」

傍らからその小鉢へと視線が飛ぶ。興味を引かれた様子でめぐみんが煮浸しを見ていた。

この娘は人が食っているものを度々欲しがる。面白いのは、爺むさい食い物も割合喜ぶところだ。

斜向かいを見る。アクアが机を指でこつこつと叩いていた。

「シユワシユワー、私のシユワシユワはまだあ？ 料理が先に届いてシユワシユワがまだとかありえないんですけどー」

「混んでるんだからしょうがないだろ」

「近々大規模な討伐クエストがあるとか言う噂ですし、酒場を利用する冒険者も増えてるんでしよう」

「繁盛で賑わうならばそれに越した事もあるまい。そら、お待ちかねのもの came だぜアクア嬢」

やいのやいのと言う間に、女給がたっぷりの白い泡を立てる杯を両手に抱えやってきた。

自分の前にそれが置かれるやアクアは満面笑顔になる。解り易い娘っ子だ。

「んふふー。では！ 今日も一日お疲れでしたー！」

「したー！」

「お疲れですー！」

思い思いに掛け声上げて、かちんと杯をぶつけ合った。

討伐を終え、慰労に酒場で飲み明かす。いつの間にかすつかりと見慣れた光景となっている。

アクアはぐびりぐびりと喉を鳴らし、見る間に硝子杯の中身を流し込んでいく。いつ見ても凄まじい呑みっぷりだった。

「だつはあ!! すみませーん！ お代わりくださいーい！」

「おっさんかお前は」

「アクアは本当に美味しそうに飲みますよね……ここは試しに一杯、私も挑戦してみるべきではないだろうか——あたっ！」

「その内な」

どさくさに紛れ、己の杯を奪おうとした小さな手を叩き落とす。

恨みがましい視線を無視して冷えたそれを呷る。当初はこの不思議な喉越しと味わいに面食らったものだが、これもなかなか悪くはない。

「むー」

「こんなものは時間が経てば嫌でも飲める。飲まねばならんようになる」

「一口だけ！ ほんのちよつとでいいですからあ」

纏わり付くめぐみんを往なし躲し、早々に杯を空けた。

「じゃあじゃあ残った泡だけ！ 舐めるだけでも！」

「いたなー。何故かビールの泡だけ欲しがる子供」

「ほらほら、カズマもジंकロウもジョッキ空じゃない！ すみませーん！ もう二杯追加でー！」

「めぐ坊、こんなもんよりほれ、折角の料理が冷めっちゃうぞ。唐揚げ、好きであろう？」

「ふんつ、今夜は誤魔化されません！ そうです。出会った当初から思っていました、ジंकロウはナチュラルに私を子供扱いしますよね！？」

がたん、長机を叩きめぐみんは立ち上がる。今こそ我慢ならぬとばかりに。

「私だつてもうすぐ十四。この程度のお酒くらい幾らでも」

「おおー。こいつあ前に獲った牛の串焼きじゃねえか？ ぱすたとやらも山盛りだ。めぐ坊、ほれ皿出しな。野菜も食え。見てみる煮込み汁のこのごろごろした具材の量。鍋の底が見えんほどだ。どんどん食わねばおっ付かんぞ。さあさあ」

「ちよつ、まだ話は」

「カズ、刺身くれ」

「刺身っていうかカルパッチョね。めぐみんも要るか？ 小皿小皿」

「めぐみんめぐみん、チーズ美味しいよ。ほら、トマトとカマンベールチーズの相性すごいからほら」

「ああ煮浸し食うか？ 好きなもん取んな、さあ」

「なんですかこの包囲網!? いただきますけどねっ!？」

次々と取り皿に盛られる料理を処理する為に、めぐみんは席に座り突き匙を握った。

「お待ちどうさま！」

「シユワシユワきたー！」

「待ってました！」

「おいおい、空きつ腹にそう流し込むもんじゃねえよ。おめえらもめ

ぐ坊を見習いな」

「んぐんぐんぐ……人を食いしん坊みたいにな、あむん、ふわないえほひい」

己が言うまでもなく子供らはががつと食うに食った。程よく疲労した肉体は、口に運んだ諸々を食欲に吸収していく。

長机を占領していた料理も、気付けば半分近く四人の腹に収まった。

カズマは四杯目を、アクアは八杯目を飲み干した。上機嫌な赤ら顔である。

「いやあ討伐もけっこう慣れてきたな。今日なんて俺コボルド三匹も仕留めちゃったからね」

「いくら新米冒険者といってもそれぐらい普通では？」

「んんっ、ぷっはあ!! ああ美味しい……っっていうか、コボルドなんて最弱モンスターの筆頭だから。そんなの倒して喜んじやってるカズマさんかあワイイー！ プークスクス！」

「うるっせえ！ そんなもん百も承知だっつうの！」

言うや、腹立ち紛れにカズマは蛙肉を食い千切る。

「むぐっ、こちとら剣だつてまともに握ったことないんだぞ!? それがここ最近は扱い方もちよつとずつ分かってきて、ようやくモンスター相手に正面切つて戦えるようになった。そこを褒めようよ。労おうよ！ ねえ!」

「人生で一度も剣を握ったことがないって……一体どんな生活をしていればそうなるんですか」

「それはまあ、いろいろあるんだよ……」

カズマが元居た郷里には、この地に比べれば遥かに平和であったそうだ。少なくとも、刃金など用を成さず、武力はただの抑止力でしかない。そう在らねばならぬとする法すらあるとか。

同じく異界から来訪した身の上なれど、そのような世界が存在するなどまるで夢物語のように感じる。御郷が知れるとは、このことだろうか。

「というか、問題はカズマだけではないです」

「？ まだなんぞあつたかい」

「あなたのことですよ、ジンクロウ」

心底呆れ返っている、そう言いたげな顔でめぐみんは溜息を吐いた。

それはそれとして娘の口元を汚す食べ残しを布巾で拭う。

「んんん〜っ……モンスター^①の集団に一人で突っ込んで行くのが問題でないとも？」

「うむ、何を隠そう俺の郷里では常日頃からもんすたーの群を見たならば単身突っ込めと口を酸っぱくして教えられてなあ」

「どこの蛮族ですか!？」

無論、そのような軽口でめぐみんは引き下がらなんだ。

「危ないって言ってるんです！ それにジンクロウ鎧すら身に付けないじゃないですか!」

「介者は不得手でな。そして今の戦術ではどうしても脚を使う故、むしろ身軽であることこそ一番の安全策よ」

「戦術……」

「己が敵の隊伍を乱し、誘う。めぐ坊は待ち伏せ一掃殲滅。カズはその討ち漏らしからめぐ坊、アクア嬢を守る。単純だが、現状叶う最も確実な方策だ。以前にも説明したのであろう」

めぐみんの爆裂魔法の威力は強烈無比。誇張も大言も含めず、効果範囲に捉えたあらゆるものを例外なく消し飛ばす。しかし、魔法発動には相応の時間を要し、発動後は否応なく無力と化した。戦闘能力を持たぬこの娘が、少なくとも二度、確実な無防備を晒してしまうのだ。そして敵がその隙を見逃す保証などどこにもありはしない。

為に、魔法発動まで敵方の注意を引き付ける囮役と、魔法発動後の護衛役が要る。カズが娘ら二人の護衛に徹する、乃至己がめぐ坊を回収しつつ残存敵をカズと共に掃討するという場合も無論あり得る。

だがいずれにせよ、敵方に先手を許すことはできない。手勢の数か、あるいは肉体的性能の面で我方は劣るからだ。直接戦闘能力のないめぐみん、多数を相手取れるほどに未だ育ってはおらぬカズマ、身体能力は並外れているものの満足に扱えた例^{ためし}のないアクア。

そして、斬り進むしか能のないこの阿呆。

我が徒党は、防御力とも呼ぶべきものがまるで皆無だった。

なればこそ己のすべき事は解り易い。良^い的に徹しておれば、この娘が派手な一撃で全て収めてくれる。

「なあに、各々ができることをやる、ただそれだけの話だ。おめえさんは気兼ねせず爆裂をぶつ放しやいい。ははは」

「で、でも……」

その小さな頭を撫でた。柔い髪を梳くように。

幼いながら、他人を慮ることのできる娘が、その心根の健やかさが快かった。

一抹、不安げな翳りが娘の面差しに宿る。

「どうやら対面に座する少年もそれを見逃さなかったらしい。徐にカズマが口を開いた。

「……壁役が要るな」

「あん？」

「俺が防御系のスキルを取るか、肉か……もといアクアをもう少し有効活用するか」

「ん？ ねえ、今私のことなんて」

「ステータス的には問題ないと思うんだけどなあ、肉壁」

「はつきり言ったよね。けっこう早い段階でぶつちやけたわよね」

「おいおい、カズ」

「ジंकクロウだって戦術が一つだけなんてこの状況、あんまり良くないのは分かってるだろ？」

「……まあな」

手管が一本限り、その危うさは語るに及ばぬ。

カズマめ。痛いところを衝いて来やがる。

「ただアクアオールは耐久力と持久力に難がある」

「技名みたいに言っても誤魔化されないから。カズマさん？ ねえさつきからなんで無視するの？ ねえったら」

「俺が馬に乗り機動力を上げるのあどうだ。一撃離脱で釣りも捗る。ああ槍でも買うか？」

「根本的な解決にならないから却下」

「かつははは、こりや手厳しい」

「ジंकロウ。俺真面目な話をしてるんだ！ アクアミートウォールだけじゃ敵の足止めの役に立たない。だから何か他に解決策がないかって」

「真面目に私を肉壁にしようって話なのね。そうなのね?!」

カズマの言は間違っていない。

守りが手薄である以上、攻め手たる己の失態は即ち後方のカズマらの窮地へと繋がる。

「やっぱり、俺のスキル取得が無難かなー」

努めて気軽にそう言っただけで、カズマは自身の冒険者カードを眺めている。

つくづくこの少年は。

「手数を掛ける」

「べ、別に。俺が俺の為に覚えるだけだし」

「素直じゃないですね」

「うっせえし」

「あ、じゃあ、私を壁代わりにするって話はこれでなかったことになるのよね?.. ね?..」

「.....」

「なんか言っただけよお!」

結局のところ、一人に能う物事など高が知れているというそれだけの話だった。

胸中で自嘲が湧く。己はこの子らの何だ。保護者を気取って手前勝手な腹積もりを立て、要らぬ心労と思慮を抱かしている。

愚かしい、それは驕りであった。

「あの、ジंकロウ。私はいつまで撫でられていけば.....?」

「ん? おお、すまんな」

「いえ、別にいいですけど.....謝りはしても手は止めないんですね」
「くふふふ」

めぐみんの頭は触るだに心地よく、知らず長いこと撫で回してい

た。娘は気恥ずかしそうに顔を紅くする。

罫ねぐらの馬小屋にも野良猫が居着いているが、もし家を持つようなことがあれば猫の一匹も飼ってみようかい。羞恥する娘の、その愛い様を見ながら思う。

「今、猫でも飼いたいなあとか思いましたか」

「……」

「無言で穏やかな微笑を湛えても誤魔化されませんよ！」

すつかりと勘が鋭くなつちまった。娘の成長に、喉の奥で笑声する。

「遊んでないでジंकクロウも考えてくれよお」

「すまんすまん」

「結局、何のスキルを取るつもりですか？」

「そこなんだよ。防御系のスキル取るより、いつそ盾でも持った方が早い気がしてきた。もしくは攻撃系のスキルを増やしてジंकクロウと攻めに回る、とか。ほら攻撃は最大の防御って言うし」

「そのすぎるってのあどうやって覚えるんだい？」

「スキルを持つている人に使い方を教えてもらおうと冒険者カードのスキル欄に項目が増えます。必要なポイントを消費すればそのまま覚えられますよ。カズマは職業『冒険者』なので覚えられるスキルに制限はありませんが、クラス補正も付かないので、ポイントは割高ですね」

カズマのカードを見る。めぐみんの言う通り、スキル欄とやらには既にいくつか項目が並んでいた。

必要なポイントさえ支払えば、後は触れるだけでいいという。

「こう言ってはなんだが、なんとも付け焼刃よな」

「まあ気持ちは分かるけど……これくらいゲームチックじゃないと俺みたいな素人がファンタジー世界で生き残れる訳ないし……」

最後の言を、長机に身を乗り出し殊更潜めた声でカズマは呟いた。

「さて、どうするか」

妙案は浮かばぬ。

頭の固さばかり齢が顕れてくる。

「や！ 難しい顔でどうしたの？」

その時、明るい声が頭上から降ってきた。

見上げて最初に目に付いたのは、その白銀系の髪色。硝子杯片手に、クリスが己らを見下ろしていた。

特に了承を得ることもなく、クリスは己の隣にすんと腰を落ち着ける。

酒場でこうしてこの娘に会うことも三度目になろうか。もはや顔馴染みと言って差し支えあるまい。

「なんだか皆でうんうん唸ってるけど」

「我が徒党の趨勢を如何にすべきか考えあぐねておつてな」

「クリスは冒険者になって結構長いんだよな？ ちよつと相談に乗って欲しいんだけど」

カズマは事のあらましをクリスに告げた。

娘も時折相槌を交えつつ、黙ってそれを聞いていた。

「うーん、なるほど。確かにその戦い方は無茶だね」

「だろお」

「です」

「ぶっはあー！」

クリスが言うや子供らはめいめいに頷きを返す。アクアは杯を空にする。十二杯目だった。

じと、とした視線の増加を感じ、苦笑で口の端が歪む。

「キミとしては、何か有用なスキルを覚えてジंकクロウの支援をしたいんだよね」

「……まあいきなり戦力アップなんて虫のいいこと言わないけど、何かこう、お得な感じのやつを覚えたい。低コストで超強力な」

「十分虫がいいと思いますが」

「ふふん、なら打って付けのがあるよ」

「え、マジ？」

「それにもう一つ、防御面の問題解決にも心当たりがあるんだ」

「ええ！ そこんとこ詳しく」

カズマは再び身を乗り出した。

なんと解決策が向こうからやってきてくれたのだ。渡りに船とは正にこのこと。興奮する心持ちもまあ分かる。

が、どうにも解せぬ。

カズマとめぐみんの言だ。虫が良すぎる。

そんな意を込めてクリスを流し見ると、娘は片目を閉じ、悪戯つこい微笑を浮かべた。

これは。

「実はね、紹介したい子が一人いるんだ」

また、賑やかになりそうだ。

厄介事の臭い。うっかり嗅ぎ取ったそれを洗うように、一気に酒を流し込んだ。

16話 めぐ坊は見んでいい

明くる朝。

入り組んだ路地を奥へ奥へと行った先に、その広場はぽっかりと空いていた。

宅地の普請に当たって、何かしらの不手際か計算違いでも起こったか、家と家との間にできた活用当ての無い四方五間分ほどの空間。普段は近所の子供らの遊び場らしく、ゴム鞠やら木の棒やら持ち寄った玩具やらがそこらに散乱している。

カズマ、めぐみん、そして己の三人は、呼び出されるままこうして出向いた訳だが。

「カズ、アクア嬢はどうした？」

「酒場で宴会芸披露している」

「はあ？」

「いやうん、マジなんです……」

「ジंकクロウはまだ見たことないんですか？ アクアの花鳥風月は一見の価値ありますよ！」

本日我らが集まったのは他でもない。戦闘手法の是正について議論が停滞していた折、クリスがその解決案として人を紹介したいと言ってきたのだ。これよりその初顔合わせをする。

まあ、徒党の全員が出向く必要もなからう。

カズマを見れば、柄にもなく緊張した様子である。クリスはどんな人間を連れてくるのか(おそらくは故意に)我らに教えはしなかった。そわそわと落ち着かんのも無理はない。少年の齢相応な姿にどこか安堵する心地だ。

めぐみんの方は、むしろ楽しげである。未知との遭遇は娘の好奇心を大いに擽るらしい。

そうして程なく待ち人は来た。

「お待ちせ」

「……」

片手を振って歩み寄ってくるクリス、その背後に付き随う影一人。クリスは半歩身を引いてその娘を己らの前に導いた。

純白の甲冑が目にも眩い。クリスと比べやや上背があり、手脚もすらりと長い。面差しはきりりと引き締まり、ともすれば冷徹な印象を見る者に抱かせる。しかし齡は精々カズマより一つ二つ上といったところだろう。

「その娘さんかい」

「そ！ ほら、自己紹介」

「……ああ」

促され、甲冑の娘は軽く会釈した。

「私の名はダクネス。クルセイダーだ」

「ク、クルセイダーですか？」

めぐみんが驚いた様子で声を上げた。

そう、確か冒険者における上級職の一つであった筈だ。聖騎士、だったか。神に仕え、魔を、不浄を斬り払うもののふ士。

不意に、すとカズマが前に出た。ダクネスに向けて手を差し出し、見るからに格好付けた作り顔に笑みを浮かべる。

「俺の名はサトウカズマ。冒険者を生業とし、このパーティーのリーダーを務めています」

すると、めぐみんがこそつと耳打ちをしてくる。

「あんなに嫌がっていた癖に決め顔で自分のことリーダーとか言ってますよ」

「まあまあ許してやんな。カズも男だ。美人の前で見栄を張ってえのさ」

「聞こえてるからな」

瓜実顔に切れ長の瞳、小作りな鼻、微かに桃色の薄い唇。ひどく整った容貌である。腰元まである金糸の髪を後頭に結っているが、それがまた白い肌に映えた。

間違いなく、美しい娘だ。

「シンクロウ、鼻の下を伸ばす役回りはカズマだけで十分ですからね」「おや、そうか？ そいつあ残念」

じととしたその目に笑みを返す。

思考はまったく別の方へ向いていたが。

徒党員の募集の条件に容姿だけを引き合いに出すなど愚かな話である。が、それでも上級職であり飛び切りの別嬪。引く手は数多ありそんなものだが……さて。

「ジ、ン、ク、ロ、ウ？」

「さき、それよりめぐ坊。我らも自己紹介と行こうや。な？」

「……コホン。いいでしょう。では私から——我が名はめぐみん！

アークウィザードにして爆裂魔法を操りし者！」

「ジンク로우ってもんだ。ま、性しない剣士だ」

「ああ、よろしく頼む」

口数少なく、ダクネスはそれきり沈黙した。

クリスが苦笑する。

「もう、ダクネス。緊張してるのは分かるけどそんなぶつきらぼう

じゃダメだよー」

「ん……すまない」

「いいけどね。ごめんね。この子、この通り人見知りだし」

「なんの問題もないですよお嬢さん。むしろシャイなところがそ

……とても素敵じゃないですか。なあジンク로우！」

「分かったからその妙ちきな顔やめねえか」

「締まりの無い顔を無理に締めてる所為ですごく気持ちが悪いです」

「ロリっ子後で泣かす」

間の抜けたやりとりもそこそこに、クリスは本題に入る。

その声音はどこか悪びれた風であった。

「昨日言ったと思うけど、私がカズマにスキルを教える。代わりにダクネスをキミ達のパーティーに入れて欲しいんだ」

「代わりに」

そう鸚鵡返しに口にすれば、クリスの苦笑はいよいよ深まっていく。娘は頬の傷痕を掻いた。

「あはは……うん。実はね」

「いや、ありがとうクリス。そこからは私が説明しよう」

クリスの言を遮り、ダクネスは自身の胸に手を当てた。半拍ほどの躊躇い、しかし意を決したように。

「クルセイダー聖騎士などと大袈裟な肩書きを掲げているが、私は、その……凄まじく不器用で、剣による攻撃がほとんど敵に当たらない」

「へ？」

「ほとんど、ですか……」

カズマが頓狂な声を上げ、めぐみんも言葉尻を反芻する。

己はといえば、ようやく得心行った。旨過ぎる話の運びに妥当な落とし所と言えよう。

「でもまあ、その辺は追々ね！ 頑張ってレベルを上げて行けば問題ありませんよ！ な？ ジンクロウ」

「ううん？ ああ、ま、そうなんじゃねえか」

「だるお！ ほらうちのもこう言ってることすし」

「必死ですね」

尻込みしたかに見えたのも束の間のこと、カズマは気を取り直し勧誘を続行した。

その解り易過ぎる下心には呆れよりも感心が湧こうというもの。どうやら、冒険者としてではなく、一匹の男として相当に鬱憤が溜まっている見える。

がつつくようにダクネスに迫るカズマをどうどうと宥めた。当のダクネスは、少年の氣勢に戸惑い顔を赤らめている。怯えからか、息もやや荒い。

カズマの熱情はさて置き、当てられぬ剣に果たして意味があるのか。

そこではたと思い出す。クリスはこういった名目でこの娘を連れて来たのだったか。

「んっ……その、代わりと言ってはなんだが、私は筋力や耐久力、持久力には多少自信がある」

「ほう」

そもそもが、クリスは我らの守りを度外視した戦法を見かねた為に、スキルの教導と人手の斡旋を請け負ってくれたのだ。

つまりダクネスに期待すべきは敵を打ち負かす攻撃力ではない。
とすれば……確かめたくもある。

「めぐ坊、すまねえがひとつ走りギルドに行つてな、木剣を借りて来てくれんか。二振りだ」

「え？　は、はい、わかりましたっ」

「ジंकクロウ？」

めぐみんは疑問符を頭に載せながらも、特に聞き返すこともなくギルドへ走つて行った。

カズマのもの問いたげな声に今は応えず、黙してめぐみんを待つ。

手にしたその意匠は諸刃の直剣。柄元の両方向から鍔が伸びている。諸刃は趣味ではないが致し方あるまい。

片手で振るう。軽い。赤櫛であろうか。

「ジंकクロウ殿。これは」

「おお、すまんな」

対面には、同じく木剣を握つたダクネスが佇んでいる。

突然そんなものを手渡され、こうして差し向かいに立たされればなるほど、その戸惑い様も無理からぬこと。傍で見ているカズマらとてそれは同じだった。クリスなど先程からずっとそわそわと落ち着けずにいる。

だがこの構図、こちらの思惑は過不足無く伝わっておろう。

「なあに、手荒な真似がしてえんじゃない。ただ、おめえさんの腕前を見てみたくてな。二、三本打ち込んでくれぬか？」

「ちよっ、ジंकクロウ！」

クリスが堪らず身を乗り出すが、それを制したのは当のダクネスだった。

「いい、クリス。ジंकクロウ殿は私にチャンスをくれると言ってるんだ」

浅い半身立ちで剣の切先を差し向ければ、ダクネスもまた応えるように木剣を両の手で構える。

握りは深く、強い。ともすれば柄を握り潰さんほどに。

肩がやや上がっている。まるで全身が猛り立つようだ。

「来な」

「……っ！」

一呼吸分の沈黙を踏み越え、ダクネスが突進する。

真つ直ぐな軌道、戦形は素直な上段。

握りのさらなる強まりを感じた。柄の軋みが聞こえてきそうだ。

間境。

刃圈。

相手の木剣が届く最適距離。

振り下ろされる。

「……」

「はああ!!」

乾坤一擲の斬撃は、己の足元より半尺右の地面を穿った。

こちらは、何もしていない。

木剣が引き抜かれる。その勢いに乗る形で横薙ぎに斬線が走る。

しかし、勢い余って娘の体は後方へ退がってしまった。

己の胸の前三寸ばかり、剣先が空を薙ぐ。

「でやあああ!!」

後退から一転、ダクネスは一步踏み込む。地面を抉る左足、剣は片手に引き刺突の構え。

打ち出された剣尖は、胸から大きく逸れている。逸れてはいるが、この軌道ならば肩口をやや削るだろう。

下方から掬うように剣の切先を合わせた。

「！」

木片が飛び散り、拍子木を打ち鳴らしたかのような甲高い音色が響く。

ダクネスの剛剣は己を逸れ、空を行過ぎた。

娘が跳び退く。構えは初め同様、腰を落とし、両の手で剣を正眼に置いた型。

呼吸を整え、肩から力を抜く。娘は残心を忘れなかった。

「なるほど」

「か、掠りもしない、だと……!?!」

「いえ、最後に一度だけ掠ったでしょう。一度だけ……」

木剣を、それを握る己の手を眺める。めぐみんの言う通り、ほんの一度剣を掠め合わせた。ただそれだけのこと。ただそれだけで。

「大したもんだ」

「ええ!?!」

カズマとめぐみん、そして何故かダクネスを連れて来た当のクリスマまでもが素っ頓狂な声を上げた。

剣身から柄、握る指と手から腕へと伝播した衝撃。僅かに刃先を掠めた程度で骨身を震撼された心地だ。

凄まじい。女子の膂力おなごちからではない。

「腕しやうちゆうこつ節の強さは確かに折り紙つきだな。ま、ちよいと力みが過ぎて鯨しやうちゆうこ張りが酷はげえが、腰の据わった良い構えと気組みだ。どうだい、カズ。この娘さんをいっちよ徒党に入れてみねえか」

「え……? お、おう! そうかジंकロウがそこまで言うんならしようがない! いやしようがないっていうのは別に嫌々とかそんなんじゃないですね、もう大歓迎ですはい! な? めぐみんもいよいよな!?!」

「顔がイヤらしいです。何を想像してるんですかまったく……まあ、実際に矢面に立つジंकロウが良いと言うなら、私は特に問題ありませんよ」

めぐみんの承諾も下り、いよいよカズマの調子の良さも極まってきた。

新たな仲間を加え、未知なる先行きにも一筋光明が差したかに思える。きつと、かの娘が子供らの不安を除く一助となってくれよう。

などと勝手な想像に耽ろうとした時だ。

「……まだ、だ」

ぼそりと何事か呟きが零れる。

その主は言わずもがな、渦中のその娘であった。

娘は今なお剣を構えていた。両の手の内にある剣の切先を己へと差し向けたまま、半歩たりとその場を動いていない。

「まだだ。ジンクロウ殿」

「？ まだ、とは」

「私の真価を判断するなら、こんなものでは足りない。そう言ったのだ」

決然とダクネスは言い放った。なるほど、たかだか三合、そしてほんの一度刃を合わせた程度で何をか見て取れるとほごくか。己のそれが浅慮であると、娘は不服を呈したのやもしれぬ。

しかし、違和感を覚える。

娘の頬がやや紅潮していた。発汗、動悸の増加。息遣いも荒い。何よりその目、娘の伶俐だった筈の両瞳が今は、爛々と鈍い光を放つのだ。

「あれ……」

「カズ？」

「いや……うん」

疑問を含めて声を投げたが、カズマは曖昧にそう返すだけだった。いや、半信半疑、といった風でもある。

何がだ。

「ジンクロウ殿、もう一度だ。今度はそちらから打ち込んで欲しい」「うん？ お、おお」

「先に言っておくが手加減など無用だ。全力死力を込め、叩き潰すくらい勢いで頼む。いやお願いします」

お願い、と言いはすれども声音はひどく威圧的であり有無を許さぬ気迫に満ちていた。

先程までの寡黙な印象はどこかへ消え失せた。どうしたことかと疑問は尽きぬ。そしておや？ 娘の様子が……。

「何をしている！ さあ、来るがいい。きついのを一発、二発……五、六発食らわせてみてくれ!! 焦らさずさあ!!」

「あるえええ……」

「……」

カズマが何事か背後で呻きを上げる。

めぐみんは特に何も発することはなかった。この違和に気付かぬ

ほど鈍い娘でもあるまい。察した上で沈黙を選んだのだろう。

クリスは、何故かこちらと目を合わせようとしない。

「……では」

「どんと来いー」

半身から踏み込み、袈裟掛けに斬り下ろす。斜めに走った剣の切先がダクネスの左肩口へ向かい——そのまま肩部鎧の上から打った。娘は受太刀すら取らなかつたのだ。

めぐみんか、カズマか、二人はまるで自身がそれを喰らったかのよう痛ましさに呻く。

「ああんっー」

「……」

打たれた娘は、嬌声を上げた。打たれた肩を押さえ、自身を抱くように蹲る。否、身悶えしながら全身を震わせている。

剣を引き、一步後退する。理解不能の四文字を胃の腑に落とし込む為に少々時間を要した。

ちらと視線を投げる。クリスは明後日の方向を、めぐみんはぽかんと口を開け、唯一合わさったカズマの目は据わり光がない。

「んんっ、すごい……こんな……」

「……」

「まるで身体の芯に響き渡るようだ……あんなにも軽やかな身の熟しだというのになんて鋭く烈しい剣撃……た、たまらん!! もっとだ! もっともっと打ち込んでくれ! 全身隈なくぼっこぼこに!! さあ!!」

打ち込んで来いという言葉とは裏腹に娘は剣を手に襲い掛かってきた。

躲すだけならば何程の難もあらぬ。が、鼻息荒く涎を垂らして躍り掛かってくる女子に、我が身は知らず応戦していた。

相変わらず自身を素通りする剣を横目に、娘の小手に一撃、さらに右肩にもう一撃打ち下ろす。体勢は崩れ、娘がその場に膝を付いたところで剣先を首筋へ当てて。

試しであればこれで仕舞い、と言って差し支えなからう。本来なら

ば。

「く、屈服つ……！ これ以上無い屈服つ……！ ああちよつと叩か
れた程度なのにすぐくじんじんすりゅう……！」

「クリスさん、喜んでね？ あれ喜んでるよね？ 木剣で殴られて悦
んでますよねあの人？」

「……………」

「なんか言えよ」

「人見知りダケド根ハイイ子ダヨ」

カズマは無言でクリスを見限った。

「ジンクロウ、ちよつと」

「おう」

「も、もう終わりか!? このまま剣を突き付けられつつ靴を舐めろと
か犬の真似をしろとかもつといういろ……！」

そうして路地の隅に移動したカズマはひどく平淡な声音で。

「変態だ」

「気の病である可能性は？」

「病気だよ？ 恢復の見込みが無いただのDMです本当にありがとう
ございましたあ!!」

カズマは両手両足を地に付け、路面へ咆哮した。

とりあえず、めぐみんを手招きする。

とてとてと寄って来た娘をくるりと回し、ダクネスから視線を逸ら
させた。特に深い意味はない。

「うむ、ではあの娘の処遇はリーダーに一任致すということに宜しい
な」

「そうですね。なにせカズマは私達のリーダーですからね」

「待ってちよつと待って」

めぐみんと共に踵を返す。しかしカズマは素早く己の裾に縋り付
いてきた。

「ほら、見てみるダクネスさんったらジンクロウの剣技にすっかり好
がっ……悦んでるよ。同じ剣を扱う者同士惹かれ合うんだろうなー
いやー素晴らしいなーだから彼女のことは是非剣士のジンクロウさ

んにお任せしようと思えますリーダーとして」

「ははは、平の徒党員にそのような気遣いなど勿体無い。あのような別嬪は我らが頭にこそ相応しい。ささ、御存分に口説かれよ」

「ああつ、そんなばつちいものを押し付けあうようなぞんざいな扱い方……イイ!!」

「やべえよ見境がねえよ」

悶える娘の喘ぎと、カズマとの押し問答が路地に響く。なんだこの空間は。

これは長引くな、などと逃避に耽ったその時だった。

『緊急クエスト！ 緊急クエスト！ 冒険者各位は正門前に集まってください！ 繰り返します』

17話 野菜が城を落とす時代か

曇天の空を抜け、それは来た。
地平の彼方を越え、それは来た。

その正体を理解するには、少々の時間を要した。
夥しい数の緑の玉。大きさは両手に余る。ずしりと重く、如何にも水気に富んだ物体。

間近にすれば青みと甘みの混交した香りが鼻を抜ける。活き締め故の鮮度だろう。

球菜キャベツであった。

油菜科の多年草。生育するに従い伸びた葉が結球、つまり球状に丸く重なり合っていくのが特徴の野菜である。

食用草本植物である。

その球菜が飛翔していた。

飛翔していた。

何故だ。

「そりゃあ野菜だって生きてるしね。食べられない為だったら空からい飛ぶよ」

「なるほど」

「納得すんのか」

クリスの言に頷くや、透かさずカズマが声を上げた。

心外である。無論のこと、納得などしておる筈がなかうに。これは諦めこそ肝要な事案だ。一々驚愕しては精神の疲労も馬鹿にならん。

「異世界来て、キャベツ狩り……異世界でキャベツ……」

その意味でカズマは律儀と言える。其処彼処で繰り広げられる人と球菜との攻防に逐一文句を垂れ流し続けている。

確かに、重装備に身を固めた冒険者達が野菜を相手に四苦八苦する様はひたすらに奇妙奇天烈。ただ見ている分には面白過ぎる光景だが、御伽噺の冒険を夢見る少年からすれば物申さずにはおられんのだ

ろう。

「それはそれとしてだ。アクア嬢！」

「なーにーシンクロー!? 今私は一攫千金真っ最中で忙しいんですけどー!?!」

「すまねえが鍋にちよいと水をくれい」

「はいはい。花鳥風月うー!」

三丈ばかり離れた場所でキャベツと格闘していたアクアが、片手に握った扇子をこちらへ差し向ける。そう見て取った次の瞬間、扇の面から水が溢れ、それは一本の放物線を描いて己が持つ小鍋へと寸分違わず流れ込んだ。

見事な水芸である。めぐみんの言はまっこと正しかった。

石組みの竈には既に火が入り炎を上げている。その上に鍋を置き、沸くまでの間に下拵えを行う。

「……ところでさ、シンクローウ」

「おう、なんだい」

球菜は捕まえた当初こそそれはもう暴れたが、裏側の茎の根元辺りに刃を刺し入れるや途端に大人しくなった。なんでもそれがこの野菜の締め方だそうだ……深くは考えまい。

俎板まないたなどありやせんので、外葉を一、二枚剥いでから、直接適当な大きさに千切り取っていく。

それを放った木皿に同じく、塩、ごま油、刻んだ行者ニンニクを入れ、匙で和える。すると、胡麻の香ばしさと行者ニンニク独特の臭気が鼻を抜けた。唾液が口内に満ちるのが分かる。

「なに……つてか無駄に美味そうだし! ホントに何してんだよ!?!」

「こいつの酒肴つまみにと思うてな。おめえさんもやるか」

傍らに置いた徳利を指で弾く。たつぷりと満ちた中身の所為で陶器の涼やかな音色は聞けず、風情もへったくれもない。

昼酒かつ喰らうのにこんな所でせつせと肴を拵えている輩が今更風情だの風雅だの片腹痛いが。

「あのさあ、キャベツにやる気出ないのは分かるよ? だからってこ

んなとこで本格的なクッキングしなくてもさ……ほらあ！ 駄女神がこつちを飢えた獣みたいな目で見てるから！ キヤベツ一玉一万エリスじゃなかったらあいつ全速力でこつち来るからな!？」

「あの娘は……も少し節制つてものを覚えさせんとな。頼むぜカズ。飼い主であろうに」

「誰が飼い主か」

「あの一、そろそろいい?」

「あ、すんません」

おずおずとクリスが進言する。

当初の目的を忘れるところであった。カズマに盗賊の技巧を伝授してくれるという申し出。有り難い話よな。

「丁度いい機会だし、ぶつつけ本番。実戦で覚えてもらおうからね!」

「うつつ! お願いしまつす!」

カズマはクリスに連れられ、数多の冒険者と無数の球菜舞い踊る正門前、そこに広がる平原へと歩を進めた。

「ジंकロウは行かなくていいんですか?」

「うん? そうさな」

先程までその辺りをうろろしていためぐみんが戻って来ていた。大方球菜の群に爆裂魔法を放つ算段でも付けていたのだろうが、ああも人間野菜入り乱れては難しかろう。現に娘の顔にはしつかり『不服』と書いてある。

「ま、こいつが出来上がったら考える」

「……なんですか? これ」

「塩きやべつとか言うそうさ。酒場の親仁に教わった」

見れば鍋の水が沸々と湯気を立て始めていた。泡立つ鍋を一旦火から取り上げて置き、そこに予め用意していた削り節を一掴み放り込む。

鯉そのものを凝縮したかのような強い芳香、それが湯に溶けていくのが分かる。暫くすれば、湯面に浮いていた薄い削り節は鍋の底に沈んだ。頃合である。

布巾で濾す、などという律儀なことはせん。杓子でそのまま出汁を

掬い、先程調味料と和えた千切り球菜へ掛ける。適当に混ぜること数回。

カズマ曰く本格料理らしい——またえらく大雑把な本格料理もあったものだ——『球菜の塩と胡麻油和え鰹出汁がけ』が完成した。指で一欠片摘み、齧る。

「む」

胡麻の香りが鼻を抜け、行者にんにくの辛みを乗せた塩味が舌にじわり滲みる。しかし噛むほどに主張を強めたのはむしろ、甘味である。球菜の、野菜ならではの素朴な甘露。出汁が後味を飾り、にんにくを加えたにしては驚くほど爽やかな味わいで口内は満たされた。

旨い。

「ほう、こいつあ悪くねえ」

「……」

「へいへいわかったわかった、ほれ」

「べ、別に要求した訳では……まあくれるというならいただきますよ、ええ」

めぐみんがこちらに屈んで皿からそれを摘み取る。口に入れもしゃもしゃと咀嚼する内、見る見る娘の顔は綻んでいった。

ほとほと今更であるがあまり行儀の宜しい食事風景ではないな。ふと、苦笑が漏れる。

『『ステイール』!!』

「ぎやあああああああああ?!?!?!」

平原に甲高い悲鳴が響き渡る。聞き覚えのある声を見やればそこにはやはりクリスとカズマ。

内股中腰と奇妙な格好でクリスが追う。その顔は火入れた鋼も斯くやという具合に真っ赤であった。

なにやら薄い布切れを片手に振り回しつつカズマが逃げる。その顔は戦に勝利し鬨を上げる兵卒もかくやという具合に歓喜で満ち溢れていた。

「パ、パン……ッ！ 私のお！ 返してえ！ お願いだからあああああ!!」

「ぬっはははは！　だあっははははは！　なんだろうこの解放感！
久々に俺が俺らしく俺してる感じ!!　ぎゃあはははははは!!」

「な、な、な、なんとという……街中の冒険者達が一堂に会するこのよう
な場で、少女の下着を剥ぎ取りあまつさえ公衆に晒し上げるな
どつつつ……鬼畜だ！　下種！　外道の所業……！　なんて……な
んて……なんて羨ましいことを?」

意味の分からぬことを口走りながらダクネスは全身を震わせた。
そうして少年を追う者がもう一人加わる。

「朝夕の風が随分と肌寒くなつてきおつたな」

「そうですね。ローブだけだと流石に冷えます」

「そのように薄っぺらな外套では然もあろうよ。もっと暖かくしねえ
か」

「し、失礼なっ。これは紅魔族御用達の由緒あるローブですよ！

……とはいえ防寒対策は今の内から始めないとダメですし。買い物
行きましようジंकクロウ」

「魂胆が見えとるぞ。荷物持ちが欲しけりやカズに頼めばよかろう」

「えー、いいじゃないですかー行きましようよー。あ！　それにジン
クロウだってコートの一着くらい買わないと」

「上手い口実だ。で？　何が食いたいか言ってみな」

「最近市場の近くにパスタ料理のお店が新しくオープンしたのです！

これは是非一度賞味すべきではないでしょうか」

「はん、こやつめ」

「えへへ」

次の休日の使い途は、どうやら決まっていたらしい。

秋風に冬めいた匂いを覚えた。もうすぐ、凍える季節がやってく
る。

「……あの、和やかにされているところ申し訳ないんですが、向こうで
騒いでる三人はジंकクロウさんのお仲間さんですよ？　緊急クエ
ストということで他の冒険者の方もいらっしやいます。できればも
う少し大人しく、キャベツ討伐に集中していただけると、その……」

傍らに立ったのは見知ったギルドの受付嬢であった。名は確カル

ナと言ったか。やんわりと選りすぐった苦言が耳に痛い。

赤の他人を装ってみたが所詮は無駄な悪足掻き。己が彼奴の一党に組しておることは傍目から明らかなのだから。

仕様も無くえいこら立ち上がり、尻の土を払う。

「カズの野郎、ありや何をしてやがんだい」

「多分クリスのパン……ツを、スキルで盗ったのでしよう。冒険者から変態にジョブチェンジしたんですかね」

「ああ下穿きか……クリス嬢も災難だなあおい」

カズマの逃げ足にクリスとダクネス双方追い付けぬ様子。

どころか、少年は逃げながら幾度も『ステイル』と叫び道中のキヤベツを無力化している。凄まじい、ともすると気味が悪いほどの手際の良さである。若い娘の下着によって一体どれほどの活力が少年の中で漲ったのか、想像する気はさらさら無い。

情動に飽かせて暴れてはいるが、まあ一発殴りもすれば正氣に戻ろう。

「お」

そうして拳骨固めて駆けようかとした時、不意に見知った顔を見付けた。

街の冒険者連中の群集の中、栗色の髪を一本に結った娘。リーンであった。傍にはいつもの面々、喧しいダストと同じく悪乗りするキース、諫め役のテイラーが雁首揃えている。

ふと、リーンはこちらに気付いたようで、笑みを見せて手を振ろうとした——しかし、そう見えたのも一瞬のこと。

はっとした様子で、リーンはぶいと顔を背け、そのまま木杖を手に歩き去ってしまった。

「ふむ」

「……知り合いですか？」

「この地で、ああいや、この街で最初に出来た馴染みというやつだ。その筈なのだが、はて……俺あなんぞやらかしたか」

「いや、私に聞かれても」

いやまったくその通り。

キースはにやにやと、テイラーは苦笑を浮かべつつこちらへ向けて片手を上げた。そしてダストは中指を立てた。

途端めぐみんが顔を顰める。

「柄悪いですね」

「いろいろと荒い奴らだが、性根が腐っておる訳ではない。ただまあ、頭は悪い。あの金髪は特にな。くくくつ」

喉の奥で笑声を上げる。一見では、なるほど確かにあれはチンピラ以外の何者でもない。あれの面白みを知るには、関わらねば解らん。今度、カズマらも交えて酒でもやろうか。そう勝手な心算を練る。娘っ子の御機嫌の斜め具合、その辺りも窺わねばならんのだから。とりあえず、走り回るカズマへ追い続ける。横合いからの奇襲、今まさに絶好調のカズマといえど躲すことはできないようだ。

その頭頂部へ拳を無造作に打ち下ろす。

「こら色ガキ」

「いでえ!？」

中身を満載した樽を殴ったような重く鈍い打撃音。顔面から地面に倒れこむカズマの首根っこを捕まえる。

乱痴気騒ぎもそろそろ仕舞いか。

そう思われた。

「首領ドが出たぞおー!!」

突如、曇天を貫き怒号のような声が響く。

群集が動きを止めた。

「首領!? 馬鹿な! 早過ぎる!」

「奴が完全成長を遂げるにはまだ十年は掛かる筈だろ!？」

口々に騒ぎ立て、驚愕が波のように伝播する。ギルド職員らも俄かに色めき立っていた。

カズマ共々なんのことやら分かる訳もなく、下穿きと再会を果たしそれを胸に抱き締めるクリスにどういふことか問おうとした。

しかし、その要はすぐに消える。

実物が現れたのだ。

「首領キャベツ……!!」

球菜である。幾枚もの葉が折り重なり結実した緑の野菜。周囲を舞い踊るものとそれに形状的な差異はほぼ皆無と言えた。

違うとすればただ一点。その体積。

灰色の雲にぼつりと写る黄緑の粒。それが見る見るうちに肥大していき、ついにその全容を現した。

人を横並びに三人ばかり立たせたとして、真上から完全に押し潰してなお余る。一丈を優に超える巨大球菜。

襲来する。

「でかあああい!?!」

「言うとする場合か」

絶叫するカズマを押しやり、共に跳ぶ。

先程まで突っ立っていた空間をそのでか過ぎる球体が通過した。地を薙ぎ払うかのような恐ろしい突風。あんなものとまともぶつかり合えば無事では済むまい。

「逃げろー!!」

何者かの叫び。それがまた号令となったか。冒険者共は四分五裂、一斉に逃げ惑った。とすれば維持されていた戦線が崩れたことで球菜群の総進撃が始まるだろう。

「首領キャベツの体当たりは城壁程度なら貫通します！ 冒険者の皆さん！ 上手く回避しつつ応戦お願いします！」

「簡単に言うな！」

「それができれば苦労しないわー！」

「ちなみに首領キャベツの討伐報酬は三百万エリスです！ 買取でさらに五十万エリス上乘せされます！」

「うおっしやあああああ！ やってやらあああああ!!」

「あっはははは！ 三百五十万は私のものよ!! キャベツをおつまみに毎日シユワシユワ三昧よ!!」

聞き覚えのあるがなり声がしたような気がしたが勘違いであろう。あのような守銭奴の知り合いはおらぬ。

同じく尻を捲っていた冒険者の幾らかが報酬額を聞いて掌と踵を返す。

そして尽く、撥ね飛ばされていった。

「ギャアアアア!？」

「いやああああ!! やっぱ無う理いいー!？」

「何をやってんだあの駄女神は……」

知らぬ存ぜぬに徹していたカズマが、我慢ならずといった風にぼやく。

さしても、なかなか厄介である。

「めぐみんの爆裂魔法なら一撃だよな」

「動きがあまりに速い。その上、奴あ飛翔しやがるぜ」

「出が遅いのがやつぱりネックだなあ……動きを止めようにもあれ相当パワーあるぞ。キャベツの癖に」

「城壁を破るほどらしいな。かつはは！ 野菜が城を落とす時代か」

「笑い事じゃないし。あとそんなイカレタ時代認めねえ。認めたくねえ……」

カズマと悠長に相談していると、クリスとダクネス、遅れてめぐみんがやってきた。

クリスはカズマからやや距離を取りつつ己の背にきつと隠れた。

「で? どうしよつか。ちよつと拙い状況だよ」

「ああ、首領キャベツの出現でキャベツの動きが目に見えて変わっている」

首領の名の通り、あの巨大な球菜は他の小粒共の親玉であるらしい。てんでんばらばらに降り注ぐばかりであった小球菜に統率が為され始めた。

冒険者の徒党は基本五、六人から組まれる。稼ぎの分配、個々の利鞘、募集の効率、安全生存率の確保等、諸々加味した結果広まった人員の最適数らしいがそれはどうでもいい。

問題なのは、球菜共がその一個班単位の集団を各個毎に潰していることだ。

歴然の事実として、我方は彼方に数では劣る。

「頭を潰すしかなかろうな」

「我が爆裂魔法の出番ですね!」

「いいや、めぐ坊にや最後の仕上げを頼まあ」

統率者を失えば、半端に寄り集まった球菜共など良い的ではない。それこそ爆裂一吹きでどうにでもなろう。

しかし、高速で飛び回る巨球体に対して、爆裂魔法の射程外からその足を止める手段は今この場がない。ならば直に肉薄して仕留める必要がある。

カズマを見やる。少年はこちらと目が合った瞬間に意図を察したようだ。

逃げようとするカズマの肩に腕を回し、無理矢理引き寄せた。

「いやだー!! どうせあのデカ物に『ステイル』して動き止めろとか言うんだろ!？」

「ちよいと違うな。あれの動きを止めた上で息の根も止めるのがおめえさんの仕事だ」

「いいやああああ!？」

「いいじゃねえか付き合えよう。偶にや男同士で無茶の一つも踏もうや」

ギルドで借りた木剣はまだ手元にある。野菜相手なら真剣よりも都合が良からう。

「じゃあ私は統率からあぶれてるのをちまちま捕まえようかな」

「むう、大物を撃てないのは残念ですが。わかりました。私はいつも通り合図を待ってます」

「……………」

「? ほら、防衛はダクネスの十八番でしょ。行くよ!」

「ん……わかった」

三人はめいめいに役割を見付けて散っていく。

後には野郎二人が残された。少年も諦めたように悪足掻きを止める。

「はああ……それで、どうやって近付くんだよ」

「敵陣中央を突破、喰い破る。ま、俺が道を作るからおめえさんはぴったり付いて来りゃいい。いいか、ぴったりだぞ」

「逸れたら袋叩きなんですな解ります」

嫌々言いつつ理屈はきちんと抑えている。だからこの少年は面白い。

「往くぞ」

「へーい」

言葉少なに、即ち問答の要もない。

疾走する。そして己の後背に少年はぴたりと随った。

自然、親玉へ不届きにも近付こうとする我々に、球菜の群が襲い掛かってきた。

視界を埋め尽くさんばかり、堪らず眼前の景色は緑に染まる。四方八方から降り来る球体、逃げ場などありはしない。

我々は敢え無く全身を打ち据えられる——無論、それは何もしなければの話である。

振るう振るう。振り回す。

今この時この場に必要であるものはただ一事、速度。

身体稼働の効率最適化。木剣の重量、運剣へ乗せた体重、斬撃による運動力、疾走による推進力。全てを連動する。

「うひいいいい!!? よく考えなくてもあの大きさの繊維と水分の塊にぶち当たったら大怪我で済まなくね!」

「かはははは! 今更何を言うとするか! 打ち所が悪ければ死ぬるぞ!」

斬り払った剣閃は八の字を描き左右の敵を打ち飛ばす。

打ち下ろした剣は切り返さず体軸をそのまま半回転させ再度斬り下ろしと為す。

大道芸染みた体捌き、ただ単純な身体能力に立脚した連続斬撃。絶え間を生まず、どうにも免れぬ間隙は最小化し、剣閃による幕を張る。

断じて剣理に非ず。

然れど是正しく武力也。

攻勢を子分に任せたか、親玉たる首領球菜は防衛網のその先で動きを止めている。好都合。まさか手勢も連れずたった二匹で軍勢に突っ込んでくる阿呆が居るなどと思いませんのだろう。

打ち落とした球菜が五十を超え始めた。

あと、十歩。

そして目の前を覆っている球体群にもまた綻びはある。その間隙を、見付けた。

「ギャアアベエエエエ!!」
「!?!」

咆哮した。何が。無論のこと、球菜がである。

首領球菜が突如こちらへ突っ込んできたのだ。

自身に侍るもの、そして自身を守っていた小粒共々粉碎して、迫る。カズマもまた反応していた。目配せするまでもなく、己が左へ跳び退くやカズマは死に物狂いで右へ横っ跳ぶ。

数多の球菜を轢き潰しながら巨体は我々の間を通過した。

「こえええ!! 仲間ごと殺しに来たぞあれ!」

「暴れるだろうとは思ってたが、ああも見境がないとはなあ」

「どうする!?!」

「どうもこうも、正面からやり合うしかねえやな」

「ですよー」

過ぎ去った巨大球が舞い戻ってくる。標的は、カズマであった。

凄まじい速度。体積から見積もって重量とて相当な筈。加速されたかの超重量物による衝撃、間違いなく五体をばらされるだろう。

左腰に差した鞘に手を掛ける。またぞろ『不満』を飛ばしてくるが致し方もなし。

一太刀で斬り断つ——しかしその思惑が成就することはなかった。

迫り来る緑塊。

足をもたつかせるカズマ。

その合間に躍り出る。

「ダクネス!?!」

「来い!!」

突如立ち塞がったダクネス、もはや球菜とて軌道を変えることは不可能だった。

衝突する。

空間を震わせるほどの衝撃波が生まれた。地が抉れ、ダクネスの両脚が沈む。

両脚が。

なんとダクネスは未だ二本の脚で立っている。

受け止めおったのだ。あの巨体の一撃を。

「かつ、御見事！ カズ!!」

「『ステイール』!!」

反駁など要らず、カズマは受け止められた球菜に手掌を向け叫ぶ。

一瞬の発光。

「うおっと!」

「……なあるほど」

思えば不思議であった。『窃盗』^{スティー}とは字義通り対象の所持する物品を何かしら奪う技であるという。ならば、ただの野菜に対してそれを使い、一体何を奪い取っていたのか。なまじ『ステイール』がしっかりと球菜共に作用していたので余計に解らなんだが、今その疑問が氷解した。

カズマは両手に巨大な葉を抱えていた。球菜共が羽のように広がっていた外葉を。カズマめは、飛翔能力を実現する為の機構、それを奪い取っていたのだ。

ならばもはや、ダクネスが抱えるものはただの育ち過ぎた吼える野菜でしかない。

「どおおおおおおりやああああああ!!」

今度はダクネスが吼える。

その自慢の筋力を惜しげもなく発揮し、首領球菜を放り投げた。地響きを鳴り散らしながら球菜ところは跳ねる跳ねる。改めて娘の怪力が知れるというもの。

「悪いな、カズ」

その球を追い掛ける。しぶといことに、球菜は再び外葉を捲り上げ変形し、新たな羽を造り出そうとしている。

させぬ。

止めは己が頂く故に。

木剣を上段に取り、疾駆した。
羽が、完成する。球菜が飛翔する。

間合。
捉えた。

水気に富んだ手応え。断末魔も上げず、野菜はようやく野菜らしい静けさを取り戻す。

振り返ると、カズマがこちらに親指を立てていた。
嬉しそうな少年、その横合いをすり抜ける。

「え？」

「何をしとるか。早う逃げんと巻き添えを喰うぞ」

「げ」

「ダー公、おめえさんもだ」

「首領キャベツの一撃があればとは……くう、惜しい。もつと何度も何度も押し潰して欲しかったが……ダ、ダー公？」

カズマに対して言わんとすることは過不足無く伝わったようだ。

何やら不穏当なことを口走るダクネスは、その腕を引っ張り上げ無理矢理に立たせる。

そろそろ、あの娘っ子も我慢の限度であろう。

走る。統率を失い浮遊するばかりの球菜の群を走り抜ける。

「いいですね?!? いいんですよね?!? 撃ちますよ?!? 撃っちゃいますよ?!? ああもう出ます!! 『エクスプロージョン』!!」

背後で爆音が、遅れて爆風が我々の背中を後押し、もといふっ飛ばす。

木の葉のように舞い上がる中、肴は焼き球菜も悪くない。そんな下らぬことを思った。

18話 女の甲斐性つてもんだ

藁敷きの寝床にも、いつの間にもやらすつかりと慣れた。厚手の布を一枚ほつ被せてやるだけで寝心地も随分違う。

馬の糞尿と氣息の臭いは二日目あたりで気にならなくなった。人間の感覚器のいい加減さがこの時ばかりは有り難い。

こうして馬屋で朝を迎えるのは、はて何日目であったか。そのような疑問を持つのも、この浮世に馴染んできた証やもしれん。

切られんばかりに澄んだ井戸水で顔を洗い、ふと空を仰ぐ。抜けるように高く、雲も疎ら。快晴と言つて良かろう。

気分も良く小屋に取つて返し、隣人に挨拶をした。

「よう、早起きだな」

溜息のような嘶きでそれは応えた。鼻面を撫でてやるとそのつづらな目を細める。

まだまだ齡若い雌馬である。目の醒めるような赤毛、しなやかな体躯と毛並。なかなかの美馬だ。

馬を牧場へ放すと、いつものように糞を始末し、新たな藁を敷き詰める。

ここで寝泊りするに当たり小屋の掃除だの馬の世話だのを義務付けられている——などという決め事がある訳ではない。謂わば、これは趣味のようなものだ。

「ん？」

藁掻きを仕舞う為に馬屋に戻ると、一室から喧しい異音が鳴った。正しく高らかというか、威勢があるというか、なんとも派手な高軒である。

見ればやはり、そこには見知った者らの姿があつた。片や寝相も行儀良く毛布に包まったカズマ、片やその少年に足を放り出し涎を垂らしながら腹を搔くアクア。

「うぐう」

「にへへへ……もう飲めにやいい……」

いかにも対照的な寝顔に苦笑する。仲良き事、などと言った日にはカズマが発憤すること請け合いであろう。

そろりと昼前に足が掛かり始める時刻だが、起こすのも可哀想だ。いや起こさぬ方が酷なのか。何にせよ、あれもまた有意義な休日の使い途である。

身支度を整え、馬主に馬の様子を言付け、宿の時計を見ればもう正午が近い。

「おおっといけねえ」

僅かに歩みを速め、街へ繰り出した。

心地良い晴れの空、陽も一段と高くなった真昼の街路。老若男女それは数多く、白い石畳の上を賑々しく行き交っている。

ギルドからも程近いアクセルが中央広場。円形の人工池の真っ只中に杯を三段積み重ねた噴水が設えてある。

待ち合わせの相手は、果たして池の縁に腰掛けていた。特徴的な紅い装い。そうそう見間違えるものではない。

近付いていけば、程なく娘もこちらに気が付いた。腰に両手を突き、踏ん反り返って懸命にその小さな小さな胸を張る。

「遅いですよジंकロウ！」

ぷく、と膨れ面になっているのはどうやら無意識のようだ。年の頃を思えば幼稚とも思えるが、この娘がする分には何の違和も覚えん。そうしてそれを見て笑う己の様が、どうやらお気に召さぬらしい。めぐみんは膨れ面をさらに赤くした。

「遅刻しておいてなんですかその態度は!?! これはもう今日一日の食という食全てジंकロウの奢りです。財布を空にしてやります」

「おいおい、そりゃあ随分な御沙汰じゃねえか? 約束の刻限までまだちよいと間があったらう」

「エスコートする男性が女性を待たせるなど以ての外です！ ……つて母が言っていました」

「かつ、左様さやいで」

行き届いた教育だこと。

「うむ、然らば早速えすこおとさせて頂きやしよう」

「ふふふ、わかれば良いのです」

慇懃なこちらの物言いに、しかしめぐみんは満足げであった。

「手始めに腹拵えと行くかい」

「当然です！ パスタが我々を待ってますからね！」

外套を自ら靡かせ元気一杯に言い放つ。言い放つや、娘の小腹がくうと鳴いた。

開店間もないとあつて客の入りは上々。二十坪ほどの店はほぼ満席に近かったが、無事席にあり付けたのは運が良かった。

挽肉と種々の刻み野菜を、おそらくは赤茄子トマトの汁で煮詰めた赤いタレ。それをたつぷりと平打ちの麺に絡めた一品。料理名は生憎と忘れた。聞くだに舌を噛みそうなややこしさだけが印象に残っている。

ともあれ、めぐみんの満悦顔を見るに味は申し分ないようだ。

己が注文した品は、大ぶりの貝や烏賊をふんだんに使ったより汁気の多いものだ。魚介特有の強い風味、良い出汁である。

「はひほほひひほうへふへ」

「あんだつてえ？」

「んんぐ……貝も美味しそうですね」

「ああ、美味えぞ。新鮮なものを丁寧ていねいに下拵さげえしたんであろうよ。身の締まり具合といい、味の滲み具合といい、こいつあなかなかの一品だぜ」

そう言つてこれ見よがしに貝を一つ摘む。殻を取らずそのまま調

理されていることも旨味の抽出に一役買っている。

呷るように貝殻を傾け、その身をつるりと吸い込む。

程よい弾力の歯応え、噛み締める度塩と香辛料、酒精に飾られた旨味が口内に満ち溢れる。

「ううむ、美味え」

「ああっ一口！ 私にも一口ください！」

「へいへい」

気付いているのかいないのか、真つ赤なタレ塗れの口で貝を食む。途端に綻ぶ顔を見るに付け、この娘からは本に食道楽の才をひしひしと感じるものだ。

布巾で娘の口周りを拭う。

「じ、自分でできませうよう」

「んで、今日はどうする。合羽か肩掛けだかを探すんだつたな」

「んんんく……ぷはっ、勿論です。それこそが主目的ですからね。中央広場から目抜き通りにかけて青空市が開いてるでしょう？ あそこは街の外から来た行商なんかも露店を出しますから面白いものがいっぱいある筈です。なにより安いのです！」

「ほう、よつく知ってるなあ」

感嘆する己をめぐみんは呆れたように見返した。

「いや、逆になんで知らないんですか。この街で生活する上で常識ですよ。というかジंकクロウはどこで買い物してるんです。服とか」「それがな、馬屋の主や飼い主が掃除と馬の世話の礼だと言って、古着だの雑貨だのを折に触れ寄越してくれるのよ」

買い物らしい買い物は、それこそあの刀くらいのものだ。

今あれはギルドの貸金庫に預けてある。箱にきちんと安置してやればあのじゃじゃ馬が存外に大人しい。

「むう、その役得はちよつと羨ましいですが……」

「いやいや、人徳というやつかもしれないぞ？ かかかっ。ま、貰いもんばかりで済ませるのもちよいと味気ねえ。いい機会だ」

そこでふと、思い立つものがあつた。

「……ふむ、手土産があるに越したこともない、か……？」

「？ なんですか？」

「うん？ おお、いいや、こちらのことだ。さあさあ、冷めねえ内に浚っちまおう」

露店と屋台がずらりと並ぶ青空市。荷馬車が擦れ違える程度はあろう道幅も今や狭しと、夥しいまでの人々が往来していた。

人波に負けじと泳ぐように店を回る。一瞬、連れの娘が逸れやしないかと気を張ったが、足取りもしつかりと人を掻き分ける勢いでめぐみんは進んでいく。なんとも、心強い限り。

食い物、飲物がやはり多く目に付くが、珍妙な動物植物、跳ねる野菜、喚く野菜、宝飾品や木工、陶磁器、金物、彫刻、皮革、書物、絵画、訳の解らん雑貨、冒険者に向けた刀剣甲冑、魔術品、そして無論のこと酒に煙草。

なるほど、ここならばどんなものでも揃うだろう。質を問わぬならば。

「ジंकロウジंकロウ、これなんてどうでしょうか」

冬も近いとあつて、防寒に重きを置いた服飾も数多く取り揃っていた。

色とりどりの外套の中で、娘が最初に手に取ったのはやはりというか、黒地に幾何学の紅い紋様がびつしりと刺繍されたものだった。はつきり言つて、なかなか毒々しい。

色柄の趣味など各人の自由である。気に入ったというならそれも良からうが。

差し出された外套の生地に触れる。

「薄いな。それにほれ、織り目が粗い。これで草叢なんぞ歩こうものならすぐ襤褸切れになっちまうぜ」

「うっ、そうですか……惜しいですね。こんなにカツコイイの……ならば！ これなんてどうです！」

「丈が合わんだろう。それにおめえさんが着るにや重過ぎる……
ほっ、見ろ。裏地に帷子を縫い付けてやがる」

「ぐおう、重たいー!」

品数豊かなだけに変り種もまた多い。金属の棘が肩から背中から腰から其処彼処に生えた外套、刃物を仕舞う衣囊と鞆がびっしり縫われ袖口には短刀を射出する発条パネが仕込まれた上着、単なる襟巻きかと思えば裏地が鞣革で袋状に編まれ袋フラックジャック 棍クワンに早変わるもの、腰に巻けるほどに恐ろしく薄い剃刀の鞆が偽装された革帯。

……探せば探すほど、より暗器に特化して行くのは何故なのか。売り手の趣味、作り手の気質、そのどちらともが素晴らしく歪んでいる。もしや、店を間違えたらうか。

「うん?」

ふと、様々な衣服(?)が壁に陳列される中で目に付くものがあった。目に付くと言っても、他の珍品の禍々しさの為にそう見えたというだけで、外形は至極まとも正常である。

手に取る。柔らかな生地。織り目細かく縫い目も丁寧。裏地には要所要所毛皮を張り、防寒性をより高めている。

純白の外套だった。一体となった頭巾フードには何やら猫の耳のようなものが配あしらわれている。

「ははっ」

「どうしたんですか?」

他所で衣類を漁っていたためぐみんが、こちらの様子に気付いて近寄ってくる。傍に来た娘に背を向けさせ、丈を合わせた。少しばかり余裕があるといったところ、身動きを妨げる程ではなからう。

「めぐ坊、ちよいと試しに着てみな」

「へ? はあ、わかりました」

尖帽を脱ぎ、すすと袖を通す。前を合わせ、頭巾を被せてやればそこには、まるで雪ん子のような童女がいた。

「かははは」

「ちよ、なんですかその笑いは!?!」

「くく、いやあすまんすまん。思った以上に愛らしいのでな。許せ」

「えっ、そ、そうですか……?」

「おうとも! そら、姿見がある。手前てめえでも見てみな」

店に備え付けの大きな鏡の前で、めぐみんは矯めつ眇めつ自身の姿を眺めた。くるりと回って見栄など切る様を見るに付け満更でもないようだ。

「でもその、ちよつと子供っぽくないですか?」

「そうかい? よく似合っておるがなあ」

「えへへへ」

「店主」

決まりだ。

店の奥へ呼び掛けると中年の女が出てきた。

そうして未だ鏡の前で身構えたり体勢を変えたり余念のない娘を示す。

「あれをくれ。幾らだい?」

「はいはい。七万五千エリスだよ」

「ほお、なかなか良い値だな」

「そりやそうさ。白狼の毛皮だからね。でも防寒着としちや本当に良い物だよ」

めぐみんが半身立ちになり片手を突き出すように構える。どうやらあの傾かぶいた名乗りの練習らしい。

女は娘の奇態に微笑んだ。

「妹さんかい」

「まあそんなようなもんだ……ところで、この店の品、こりやあんたが揃えたのかい?」

「ああ違う違う。うちの旦那の趣味でさ。頭おかしいだろ? あはははははは!」

「かつ、そうかい」

それを笑って済ませるこの女も大概豪放である。

「その手袋、あと靴も付けてくれるか」

「はいよ、まいどあり。手袋はおまけね。九万でいいよ」

「お、こいつあすまねえな」

「いいよいいよ。お嬢ちゃんよかったねえ新しいお着物買ってもらえて」

「え？ ああつ、なに勝手にお金払ってるんですか!？」

めぐみんは慌てて財布を取り出しながら食って掛かる。が時既に遅く、金は店主の女の手に渡っていた。

なおも財布を持って娘はあたふたする。

「いいじゃねえかこれくらい」

「結構なお値段だったでしょう！ 私の目は誤魔化されませんよ！」

「いいから払わせてくれい。ほれ、男に奢らせてやるのもイイ女の甲斐性つてもんだぜ？ な？」

「ぐ、むむむ、いいおんな……」

「かっはははは！」

頭を撫でてやると不承不承めぐみんは財布を仕舞った。

本に、いい娘っ子だ。

19話 通しておらん筋がある

めぐみんの冬着を無事に見付け、概ねの目的は達した。防寒着一式を入れた紙袋を片手に、其処彼処で香り立つ物珍しい焼物や菓子を買って食いしながら娘と二人適当に市をぶらつく。

己の方はその辺りにあつた手頃な皮革の上着を買い求めた。さして選び抜いたという意識もないが。それになにやら、娘は不満顔を浮かべる。

「むー、ジंकクロウのは私が選びたかつたのに……」

「そうかい。そんならまた今度いいの見繕つてくれや」

「約束ですよ！」

「おう」

いかにも不安定な三段重ねの丸い氷菓アイスを小器用に舐めるめぐみんに感心しつつ、目端では露店の品揃えを窺った。

何か手土産を、などと軽く考えていたが。なかなかこれは難しい。

「？ 何か探してるんですか？」

「あちよいとな」

めぐみんの問い掛けに胡乱な応えを寄越す。

すると何を勘繰ったか、娘はにやりと意味ありげな笑みを浮かべた。

「もしかしてどこかのイイ人にプレゼントですか？」

「かかつ、んな言い回しどこで覚えてきやがんだ。カズの野郎か？」

「私だつてこれくらい知ってますう。ふふん、ジंकクロウもスミに置けませんねえこのこの」

どこぞの親爺のような所作で肘打ちを喰らう。

見れば氷菓が、がら空きであつた。

隙在りとばかり一番上の団子をがぶりと丸ごと頬張る。

「ああつ!? 何するんですか！ 酷いですよお！」

「ほはおつめてえ！ 牛の乳と？ 脂に砂糖に、いや塩もか？ 凍ら

せただけでえらい変わり様だあな……贅沢に果肉も混ぜたか。はあ、夏場なんぞに食った日にや堪んねえなこいつあ」

「じゅんじゅんじゅん！」

「くくくつ、本に口は災いの元よな。悪ガキ」

ぽかぽかと痛くもない拳を喰らう。

ふと、前方に幾つも傘が立てられていることに気付く。すわ野点でも開かれておるのかと呆けた想像をしたが、どうやら屋外に構えた喫茶店であるらしい。

「何か飲んで暖まるか。この時期の氷菓は流石に腹を冷やす」

「むう」

「怒るな怒るな。お、ぱんけーきってのが美味えらしいぜ？　めぐぼ

——」

「食べます！」

「へいへい」

現金な娘の元気な返事に満足しつつ、席の一角に腰を落ち着けた。すぐさま給仕が注文を取りに来る。

賑やかに通りを行き交う人々と街並を眺めながら、暖かな紅茶を口にする。甘い物続きだったこともあり、この渋味は有り難い。

見ればめぐみんは先程まで手にしていた氷菓などどつくに平らげ、今は目の前に運ばれてきた分厚い焼き菓子にいざや臨もうとしている。良く食うに越したことはない。しかし、あの小さな腹のどこに今の今まで食った量が収まっているやら。皆目解らぬ。

ともあれ一心地着いた。

「それで、はむっ、んぐんぐ……探してるのって誰かへの贈り物なんですか？」

「まあな。ほれ、前の球菜キャベツの折に栗色髪おなじの女子が居ったろう」

「なるほど、あの人が」

「おいおい勘違いすんな。別に色じゃあねえ」

こんな爺の相手に当てられてはリーンが哀れに過ぎる。

この街、この浮世で最初に出会った娘だ。出会った、というには些か急場だったが。それから何かと世話になり、碌々礼もせぬまま妙な

仕儀に陥っている。

「なんだかむすつとした様子でしたけど……」

「俺が至らなんだのよ」

怒らせてしまった原因に皆目心当たりがない——という訳でもない。何とはなしに察するものはあった。

「手ぶらでは心許無いんでな。何かしらご機嫌取りになるものを探しておる訳だ」

「えー、物で釣るってどうなんでしょう」

「まあそう言うてくれるな」

この娘らしい鋭い指摘である。

めぐみんはそのままパンケーキの最後の一切れを腹に収め、背もたれに身を預けて小さく息をつく。実に満足そうな顔だ。

しかし大した間も置かず、居住まいを正して娘は言った。

「事情は解りました。ならば私も一肌脱ごうじやありませんか！」

「ああ？」

威勢よく、めぐみんはやる気を満々と漲らせる。

娘のその氣勢には申し訳ないが、生憎と募るのは不安ばかりだった。

陽も落ちて随分経つ。酒場はいつも通りうるさかった。

行儀とか落ち着きとかいう言葉とは縁の無い冒険者達の吹き溜まり。うるさくない訳がない。

けれど、このテーブルだけは静かだ。他と比べて少し、という程度の差で。

普段ならジョッキ片手に周囲に迷惑とシユワシユワを撒き散らし

ながら騒ぎまくるダストと、ここぞとばかり悪乗りするキースが大人しい。今はテイラーと三人、テーブルの端に寄り集まってちびちび酒を飲んでいる。

そうして時折、チラチラと視線だけがこつちに飛んで来る。

「なに？」

「なんでもないっす」

テイラーがびくりと肩を震わせた。いかにも怯えていますって態度。ムカつく。

「なあなあ、リーンのやつ……」

「シツ、今は刺激すんなって」

「直に原因が来るだろう。それまではそつとしておこう……」

何やらこそこそ様子を窺われている。腫れ物のような扱い。ムカつく。

ムカつくムカつくムカつく。

なにもかも気に入らない。

グラスをテーブルに置く。叩き付けた、といった方が近いかもしれない。三人がびくりと震え上がった。

「お代わり！」

「はいはい」

通りかかった給仕係に声を掛ける。

彼女はすぐに空いたグラスを取りに来た。ふわり、と淡い香水の匂いがする。ディアンドルの襟元からは白い豊満な双子山と谷間が大胆に見えている。自分とは大違い。

そういえば、キャベツ狩りの時に騒いでいた騎士の女の子、スタイル良かったな。後から知ったことだけど、どうやら彼女もジントクロウのパーティーメンバーの一人らしい。

それがなんだか一番ムカついた。

無意識に自身のその、何とは言わないが見下ろしてみた。無性に悲しくなった。

「ふふっ、どうしたの？ 今日随分荒れてるじゃない」

「別にいい……」

ライトグリーン製の髪を耳に掻き上げながら女給が微笑する。グロスを引いた唇がいかにも艶っぽい。幼さと妖艶さを同居させた甘い垂れ目、それが自分を見詰めてくる。

酒場を訪れる男性冒険者の実に三割はこの女給が目当てだともっぱらの噂だ。

「失恋？」

「そ、そんなんじゃないし！」

「ふうん、そっか。まだそこまで行ってないんだ」

「う……」

痛いところを突かれて声が漏れる……いやいや違う違う。別に彼とそうなることを望んでるとかそんな話じゃない。凶星とかではまったくない。ないったらない。

そもそも出会ってまだ三ヶ月も経ってないのだ。どんな即落ちだ。自分はどんだけチョロいのだ。

途端に、綺麗な含み笑いをされた。

「そっか、なら私も立候補しちゃおうかな」

「なっ、なんで……！」

「冗談。ほら、ウワサの彼、来てくれたわよ」

「ふえ!？」

思わずギルドの入り口に目をやる。扉を潜り丁度入って来た。長身の男性。開襟シャツにズボン姿はいつも通り、季節柄か首にストールを巻いている。

来店者を見て取って、給仕の一人が駆け寄る。というか絡みに行つた。特徴的な赤毛のショートカット。少し男勝りで、荒くれ者揃いの冒険者にだって負けない勝気な子だ。

「お！ ジンクロウじゃーん。聞いたよ首領キャベツ仕留めたんだってー？ 儲かったんだろ。なんか奢れよお」

「かつ、耳聡いじゃねえか。ん？」

そうして目が合った。

慌てて逸らす。

だがもう遅い。見なくても彼が歩み寄ってくるのが分かる。

「……」

「はあい、ジंकクロウ。いつものでいい？」

「おう、ありがとよ」

「ふふ……がんばってね」

耳元でそう囁いて、女給は去って行った。甘い残り香が頬を撫でる。

「やっと来やがったかこの野郎」

「なんだなんだ。待っててくれたのか？ 悪たれ小僧が」

「誰が小僧だボケ」

「あー疲れた。じゃ、後頼むわ」

「俺達は先に退散する」

ダストを皮切りに、キースとテイラーも席を立ち上がる。もしかしくなくても自分は置いて行かれようとしている。

でも、それを追って自分も席を立とう、とは思えなかった。

「へへ、上手くやれよ」

「まあなんだ。せめて機嫌だけは治していつてくれ。冒険に支障が出る」

「リーン」

ダストがぽんと肩を叩いた。振り向くと、青年は親指を立てた後、それをそのまま人差し指と中指の間に———そう認識する前に席を立ち、杖ワンドに手を掛けていた。

自分でも驚くほど淀みなく杖が半回転する。振り子の要領、下段から、ダストの両脚の間を抜けて。

「ふおおおおおおお?!?!」

甲高い悲鳴が店中に響き渡った。泡を吹くダストを引き摺ってキースとテイラーは慌てて逃げていく。

「杖そうじつの扱いは随分上手くなったな」

「あのアホの所為でね」

「くっふふふ！ で、あろうな」

杖の扱い。魔法の補助器具としてではなく、打撃武器としての扱い方。それを教えてくれたのは誰であろうこのジंकクロウだ。振り方と

か持ち方とか、ジंकロウ曰く基礎の基のさらに前の話らしいけど。ジंकロウは可笑しそうに暫く笑った後、ごく自然に自分の隣の席に座った。少しだけドキリとする。ううん気の所為だ。うん、気の所為。

テーブルに突っ伏して顔を隠す。今は、あまり見られたくない。

「……なんか用」

努めてぶつきら棒にそう言った。

こんなことで怒る相手じゃないと解ってるけど。

「ああ、おめえさんと話がしたくてな」

「……」

ジंकロウは穏やかにそう告げた。

なんだか自分ばかり駄々を捏ねてるようで嫌になる。

いつも不思議でならない。この青年と話す度、ひどいギャップを感じるのだ。それは人生経験だとか人間的な厚みだとかそういう類の。ダスト達や自分とそう齢も違わない筈なのに、その事実を忘れてしまう。単に大人びているというだけでは説明の付かない老獪さがある。

ぶつちやけ包容力半端ない。

(うん、ぶつちやけ過ぎかな……)

男慣れしてない新米冒険者の女の子がちよつと年上の男性冒険者に入れ揚げるなんて話は枚挙に暇がない。そして、そんな経緯で成立したカップルが上手くいったなんて話は終ぞ聞かない。

(私は引つかからない……！)

今思えば、危ない所を助けられたからといって自分はあまりにも露骨に彼を意識し過ぎていた。それこそ冒険者あるある第一位くらいのシチュエーションではないか。

そりゃあ、何かと気に掛けてくれるのは嬉しかった。冒険者なんて言う危ない仕事、将来の不安だつてある。親身に相談に乗ってくれる、いや話を真剣に聞いてくれるってだけですごく楽になった。

人当たりは良くて、誰にでも平等な接し方で、仕事は清掃業務だろうと真面目に取り組むし、かといって洒落や冗談が通じない堅物って訳でもないし、実は物凄く強いってことも知っているし、料理上手な

のはびつくりしたけど女子的にポイント高いし、顔も結構好みだったり……。

(違う違う違う違う)

謎の再確認作業を脳内から追い出す。これではまるで、まるっきり、ゾツコンじゃないか。

違う。自分はそんなチヨロクなんかかない。

「すまねえな」

「え？」

唐突な謝罪の言葉に頭がようやく現実へ戻ってきた。

謝罪。自分が機嫌を損ねていたことは、勿論知られていたのだから。う。

でも。

「……別に、ジंकロウに謝られる筋合い、ないし……」

出てくるのはそんな不貞腐れた言葉ばかりだった。

そもそも謝罪を受け取る権利がない。勝手に期待して、勝手にがっかりして、勝手に怒ってるんだから。

「それもいくまいよ」

「なんで」

「通しておらん筋があるんでな」

「……じゃあ、なんで私が怒ってるか分かる？」

めんどくさい彼女みたいな問い掛けをしてる。その自覚はあるし、それが理不尽なものも解ってる。それでも聞いてしまった。

ジंकロウが知る訳ない。あんな下らない理由――

「すまねえなあ、一緒に討伐行ってやれなくてよ」

「……………」

じわ、と目が熱くなる。これじゃあ本当にめんどくさい女だ。必死に顔を隠す。隠して、袖で目元を拭う。

「……なんで」

「ん？」

「なんで……パーティ、組んじやったの」

「うむ、そうさなあ」

勝手に期待していた。ここでの生活に馴染んだら、ジंकロウはきつと自分達とパーティを組んでくれる。そんな勝手なこと。

実際はそうならなかった。それだけなのに。

「やっぱり、上級職の人だから……」

「？」

「美人だし、可愛いし、スタイル抜群だし……」

「ああ??」

不意に、ジंकロウが変な声を上げる。

そのまま数秒、沈黙が続いた。

「ぷっ、くくく、かはははは」

「？」

「はっははははは！ そうか、そうか！ くくつ、なるほど傍から見りゃ、ははは、そうよなあ、そう見えるわなあ、かっはははははは！」
突然ジंकロウは笑い始めた。大笑いである。目に涙さえ浮かんでいる。

自分はいえ、訳も分からずぽかんとその様子を眺めた。

お腹を擦りながらジंकロウは何度も頷いた。

「よし！ なあリン。一遍な、己達の徒党に付き合ってみねえか？」

「へ？」

「そうすりやおめえさんのその大いなる誤解も一瞬で解ける。間違いねえ」

「う、うん」

なんだか勢いに押される形でそんな約束をしてしまった。

ジंकロウは嬉しそうに微笑むと、ぱんと自分の膝を叩く。

「ならば釈明はこの辺りにしてだ」

そう言つてジंकロウはごそごそと椅子の下に手を伸ばす。気付かなかつたが、そこには紙袋があつた。

「まあ、大したもんでもねえが」

程なく青年の手が何かを探り当てる。

引き出された掌、そこには小箱が握られている。ぱかっと小さな音を立てて開いた箱の中にあつたのは、紅玉を飾った銀の環。

指輪だった。

「詫びの印に、貰ってくれるか」

指輪。ジンクロウが。私に。貰ってくれって。

気付くと椅子を蹴り飛ばして立ち上がっていた。

「つつっ!? つ!? つっ!?」

「おおどうしたどうした」

「なんっ、これ、え、わらひ!?」

「ああ、おめえさんの為に、うちの魔法使いの娘が見繕ってくれてな」

「へ……?」

一瞬で沸騰しかけた頭が急冷却される。同時に、びっくりするくらいのがっかり感で両肩が落ちる。

すとん、と再び着席した。

「なんでも身に付ければ魔力の回復が早まるそうだ。俺は魔法に関しちゃ門外漢以下なんだな。いい品だと太鼓判もくれた。安心して使ってくれ」

「……………はい、ありがと」

中級魔法を使うにもひいひい言ってる身なんだから。これ以上無いくらい有り難い贈り物の筈だ。筈なのに。

恨みがましくジンクロウを見やる。涼しげな横顔がそこにあるだけだった。

鈍感。朴念仁。そんな言葉が喉元までせり上がってくる。

「こいつは俺からだ」

「え」

ジンクロウはそう言うや、ふわりと何かを広げ私の首に巻いた。

一瞬見えたのは綺麗な象牙色^{アイボリー}。首元を覆う柔らかな感触の正体をすぐに理解する。

マフラーだった。何の変哲もない。ただただ柔らかかで、きめ細かで、羽のように軽い。触れただけでこれが上等なものだって分かる。

でも、今それはどうでもいいことだった。

「差し色は何がいいかとさんぎ悩んじまったが、いやあ安心した」

「……………」

「よおく似合うぜ、リン」

彼は優しく微笑んだ。

私はただ、心の中で思う。

——チヨロくてもいいや

「けっ!」

「ブークスクス! カズマさんもしかして羨ましいの? そうよねえゲームが友達のDTヒキニートには真似できないことされてるもんねえプフウ!」

「アクアさん、このツケが溜まって来てるそうですねボクは知らないっすけど。頑張つて支払いできるといいですねボクには関係ないっすけど。差し当たつて今夜から皿洗いか頑張ればいいじゃないすかね。じゃ、そういうことで」

「すみませんごめんなさい調子乗りましたあ! だからお願い今夜の分だけ本当に今夜だけお願い! ツケがさっきので限度額超えちゃったのお! お酒飲みたいのお飲まないと手が震えるのお!」

腰に縋り付くアクアをカズマは能面のような顔で見下ろした。

それをダクネスは頬を赤らめて心底羨ましそうに見詰めていた。

「ハアハアハアハア、あれはまさしく養豚場の豚を見る目だ。なんと
いう……? どうしたんだ、めぐみん」

「え?」

正気に戻ったダクネスに呼び掛けられて、ようやくめぐみんは我に帰った。

知らず、視線はずっと同じ方を向いていた。ジंकロウとリーンという少女。

ダクネスもそれに気付いたようだ。

「随分と仲が良さそうだが、その、やはり二人は恋仲というやつなのか」

「ジंकクロウは違うって言ってましたけど……」

しかし、リーンのあの表情や態度を見ればそんなものは一目瞭然で。

傍から見ても容易く知れるのだ。なら、あの老獪な青年が気付かないことなどあり得るだろうか。

「……」

それとも、気付いていて気付かないふりをしているのか。

(……それは)

ひどく、残酷なことのよう to 思える。

「めぐみん？」

「あ、いえっ！ なんでもありません」

どうして。

どうしてだろう。

その事実が少し、ほんの少し、こわい。

20話 理に合わせぬ

酒場の朝は一日の内で唯一静かな時間だ。給仕は仕事を終え、料理人は今晩の下拵えを始め、厨房の下働きが眠気眼で清掃をしている。

適当な長椅子に腰掛け、ふと時計を見上げる。約束の刻限まではまだ今少し暇があった。

「……」

隣に座った娘は、今朝ギルド前で落ち合ったきり口を開こうとしない。また御機嫌を損ねた、などということとはなからう。

どうやら緊張しているらしい。

「くく」

「……なにさ」

「いんや」

「ふーん」

じとりとした視線が右頬に刺さる。人の気も知らないで、といったところか。

リーンはいつもの見慣れた緑の装いに、つい先日送った襟巻を巻いている。齡若い娘への品としては少々地味かとも思ったが、なかなかどうして可憐な仕上がりだ。元が良いのも幸いした。

「心配要らん。きちんと話は通しておいた」

「でも、いきなり知らない奴がパーティーに入り込むのって嫌でしょ。空気感とかあるだろうし」

「かかつ、あいつらにそんなもんを気にするような繊細さは、無え！」

「わりときっぱりはつきり酷いこと言ってるよね」

事実なのだから仕方がない。

「それに……魔法使いならもういるでしょ。それも、紅魔族の子」

「ん？ めぐ坊のことか？」

「……私なんか入っても意味ないじゃん。中級どころか上級魔法だって簡単に使えちゃう天才がいるのに」

「ほお」

以前にも聞いた覚えがある。なるほど、紅魔族とは通常、己が知るそれより遥かに多芸であるらしい。

まあ、あの娘も見方と立場と角度を幾らか変えれば天才と呼べぬことではないだろう。事実、人の身で天象が如き力を放つことができるのだ。

些細な欠点も、ほんの一人背負い^{おんぶ}してやる誰かが必要というだけのこと。

しかしそれはそれとして、リーンが言うところの凄腕魔法使いと己の知るところのあの娘にはひどい食い違いがあった。それがまた可笑しいやら面白いやら。

「くくく、こりや会うのが俄然楽しみになってきたなあ」

「？」

不思議そうな娘の顔を見返す。含み笑いをする己は、さぞ意地悪く見えたことだろう。

「俺は冒険者のカズマ。よろしく。んでこっちの青いのが一応そこはかとなくアークプリーストのアクア」

「一応とかそこはかとなくてなによ!？」

「私はダクネス。クラスはクルセイダーだ」

程なく、カズマら四人とギルドで落ち合った。

各自リーンへ挨拶と自己紹介を済ませる中、ふと首を捻る。常ならば我先にと名乗りを上げている筈の者がなにやらえらく静かなのだ。めぐみんはリーンを前に黙りこくっていた。杖を手で弄くり、伏し

目がちに見たり見なんだり。妙な逡巡が窺える。

「どうした、めぐ坊」

「い、いえ……………ゴッホン！」

露骨な咳払いで意を決したか、娘は自らの外套を跳ね上げ、片足を踏み出し半身に立つ。

「我が名はめぎゆみん！ アークウイザードにして爆裂魔法を操りしもによ!!」

「噛んだ」

「噛んだわね」

「噛んだな」

「噛みおったなあ」

しみじみとカズマ、アクア、ダクネス共々四者四様に呟いた。

表情の無い面^{いろ}でめぐみんは言う。

「噛んえまひえん」

「いや噛んだって」

「勢い良く噛んでたわよね」

「完全に噛んでいたな」

「舌あ大丈夫か？ ちよいと見せてみな」

めぐみんはぷいとそっぽを向いてしまった。そうして耳だけが赤々と染まっっていく。

名乗りの不発もそうだが、どうも本調子ではないようだ。

ともあれリーンへ向き直り、めぐみんを示す。

「めぐ坊だ」

「め・ぐ・み・んですっ！」

「う、うん。私はリーン。よろしく」

気圧されるようにリーンも名乗り、これにて顔合わせとなった。

「それで、今日はどうするん？」

カズマの問いに頷く。

特段、詳らかに予定を組んでいた訳ではない。討伐にせよ探索にせよ、何かしらの依頼を受託し遂行する。つまりは行き当たりばったりだ。

というのも、直近に解決しなければならん問題が浮上した。

そしてそれは、己一身の都合——リーンに対する釈明行為——とは関わり無い。こちらは謂わば序ついででのこと。

「まったく、ジंकクロウの我侭にも困ったものね。まあ知らない仲じゃないし、冒険の一つ二つ付き合つてあげなくもないけど。この海よりも深い女神の慈悲に感謝し咽びなさい」

「酒場のツケがとうとう払い切れなくなつて出禁食らいそうつて泣いて縋り付いて来たアクア様は流石言うことが違うな——マジばねえつすわー」

「うえええええん言ううわあなあいいでえよお！ ごめんなさいい討伐一緒に付き合つてくださいい！」

酒屋のツケと侮つて、積んで重なり溜まりに溜まり。塵も積もればの故事に一切の偽り無く、泣きを見たのがつい昨日。アクアは酒場の用心棒と思しき物騒で屈強な出で立ちの男共にやんわりと最後通牒を下されていた。

今もまた酒場の奥間から鋭い視線がアクアに注がれている。ギルドへの出入りだけが許されているのは温情か、無いなら稼げとの圧力か。まあ後者であろう。

腰元に縋る娘の頭をぐいぐいと下に押しやりながら、カズマはリーンに向き合い。

「すみません。うちのアル中がすみません」

「あ、うん」

引き攣つた頬でリーンはどうかこうにか愛想笑いを作った。

借金返済の資金繰りに付き合わせるのだ。カズマの卑屈な様も察するに余る。

アクアに金をくれてやる、ということもカズマにはできた筈だ。何せ、巨大な野菜の討伐と納品による報酬が懐に入っているのだから。首領と渾名された球菜の討伐に三百、納品でさらに五十。直接首領を討ち取った我々に報酬は支払われ、当然、順当に山分けとなった。

加えて、カズマは新たに習得した技能を使い、相当数の良質な小球菜をも捕獲していた。総額で一体どれほど儲けたやら。

それでもなお安易に財布の紐を解かぬのは、少年なりの思慮であろうよ。

「くく、すっかり良い兄貴分じゃねえか。ええ？」

「まるで他人事みたいな言い草だよ。仲間の一大事なものね。助け合いは大事だよ。ジンクロウね」

「ははははは」

「露骨に笑って誤魔化すな」

日頃、飲兵衛の相手をごくさり気なく少年に丸投げしていたことが気に食わぬらしい。

少年の据わった視線に刺されつ、とまれ我々は依頼が張り出された掲示板へ移動した。

今日も今日とてギルド発行の依頼書が壁に所狭しと貼り付けられて……。

「おらんな」

「なんでこんなスカスカ……」

溝さらいに土木作業、家事手伝いから様々な小間使い、山林洞窟の探索・調査等々。モンスター討伐は蓋し冒険者の花形に違いあるまいが、冒険者ギルドにはそれ以外にも多くの仕事が官民間わず舞い込んで来る。

質の良し悪しはあれど職に溢れることはない——などと、知らず高を括っていたようだ。

掲示板には数えるほどの依頼書があるのみ。

無いものは強請れぬと、少年らは僅かに残ったものから選別を始めた。

「カズマ、一撃熊などどうだろう。絶対に気持ちいいぞ」

「オイオイこの変態騎士、欲望を隠そうともしねえ」

「もつとわらわらと押し寄せてくる雑魚を消し飛ばせるやつにしましょう。荒野で突撃蟻が巣を掘り始めたらいいです。これにしましょう。絶対に気持ちいいです」

「知らなかったのか？ 爆裂狂に選択権などぬあい」

「もつと楽なやつにしましょうよ。うん、っていうか今日のところ

はもうやめとかない？ 明日、明日から頑張りましたよ」

「……………」

「いだだだだだ!? ごえんあはい! うそだから! きょうがんあるから!! むごんえほつへつねんないへえ!」

黄赤青それぞれの世迷言をカズマは丁寧に切って捨てる。あしらい方一つ取つても随分手馴れたものだ。

そうしてその様を呆然と見ていたリーンが口を開く。

「……毎回こんな風なの?」

「常にこうだ。賑やかである?」

「ええ……………」

脱力感を声に固めたかのような呻き。この様を目の当たりにするだけでも、娘の抱く誤解の大部分は解けたような気がせんでもない。

「見ての通り、この徒党で頭張ってんのあカズだ」

「三人はクルセイダーとアークウイザードとアークプリストで、あの子は冒険者なんだよね? 最弱職の」

「そうらしいな。しかし蓋を開けりゃ、その最弱何某が居らねば何一つ成り立たん。奇妙な話よなあ」

「でも……………やっぱり、クラス毎のレベルとスキルの差は大きいと思う。どうしようもなくさ」

娘の言葉は、どこか諦めを孕んでいた。

肩書きが無用とは思わぬ。況や冒険者のクラスとは厳然と数値化された能力により獲得するもの。それに重きが置かれるのは当然の成り行きと言えよう。

剣士と呼ばわることに否やはない。剣を振るしか能がない己には分相応。上級職の娘らに擦り寄ってお零れを貪る下賤輩、そう揶揄されたところでどうということもない。言いたい者には言わせてやればいい。

しかし、だからとて、この苦労性の少年が同様に世間から後ろ指を差されるのは少々面白くない。

それもあって、リーンの反応は小気味が良かった。

「その辺りも含めてだ。今日は面白えもんが見られるかもしれねえぜ

「？」

戸惑う娘に片目を瞑って見せる。良い経験となれば幸いだ。

「……おつ。ジンクロウ、これなんてどうかな」

「ん？ どれだい」

「ゴブリンの……あれ？ 討伐じゃない。調査？ だつてさ」

少年はなにやら首を傾げながら依頼書をこちらへ寄越した。なるほど確かに、題字には間違いなく「調査」と銘打たれている。

覗き込んできたリオンもまた眉を寄せた。

「『廃村に住み着いたゴブリンの調査』？ なにこれ」

「ゴブリンって、あのゴブリンだよな」

「最弱モンスター筆頭その二よ」

カズマの言に、アクアが言い足す。どうしてか胸を張り偉そうにする。すると得心かぬと、ダクネスもまた腕を組み思案顔を作る。

「数は多いが、新米の冒険者でも簡単に倒せる。謂わば初心者向けの練習台のような奴だが……」

「村や牧場、商人や旅人見境無く襲ってきますから、普通は巣や群を見付け次第討伐となる筈ですよ」

仕舞いにめぐみんの解り易い説明が入り、ゴブリンなるモンスターの像も大凡掴んだ。

思えば、先頃片手間に読んだギルド発行のモンスター百科にも記載はあった。十、ないし数十の群からなる小鬼。知能は低く力も弱い。他の種族、特に人・亜人種に対して強い攻撃性を示す。狩猟生産の文化は持たず、他文化への略奪によってのみ糧を得る奴輩。

迅速な討伐を望まれるのは自明の理と言えた。しかし、依頼文には『調査を優先、可能であれば討伐』とある。理に合わぬ。

紙を手に踵を返す。

「ちよいといいかい」

「ジンクロウさん。おはようございます」

すっかり顔馴染みとなった受付の女に今しがた剥いだ依頼書を見せる。

「こいつの詳細を知りてえんだが」

「ああ、これですか……」

それを目にした途端、女はなんとも難しい顔を作った。

「……どうも更新がまだだったみたいですね」

「？ どういうことだ。調査とあるが」

「あ、調査依頼には違いありません。報酬額が上がります。ええと確か、今の五倍ほどに……」

「受けましょう!!」

澆刺とした声でアクアが吼えた。なまじ肺活量は人並外れているだけに、きんきんと頭蓋にまで響く。

早々にカズマが首根っこを捕まえ、引き下がらせてくれた。

そして、ますます以て不可解は募る。

受付嬢は居住まいを正した。

「……実はこの依頼、リタイアが続出してるとです」

21話 その知恵に期待している

緑の臭いが噎せ返る。

秋も深まり、冬を目前に控えてなお木々は鬱蒼と繁り、未だ色濃く香った。

所々に苔生した根が顔を出している。舗装などされている筈も無い山道は、人間共の容易なる歩みを阻んだ。

現に、隣を歩くリーンが根に足を捕られ、いや踏み外した。

「あっ」

「おおっと」

反射的に伸ばされた手を掴む。見た目通りに軽い娘の身体は、支えるに何程の労苦も感じない。

リーンは気恥ずかしげな笑みを浮かべた。

「ご、ごめんジンクロウ」

「なんのなんの。だがまあ、気いつけな」

「うん……」

吐息を零すような声で応え、娘は何やらぼうと己の顔を見上げた。

「……………」

ちくりと背中を刺す気配。首を回らせてやるとほんの一瞬、紅い娘と視線が相對する。すぐに顔を背けられてしまったが。

「ラブコメか。ラブコメなのか。これがかの名高きラブコメの波動なのか」

「カズマがまた意味の分からないことを言い始めたぞ」

「そつとしいたげて。自分と余りにも縁遠いものを見せ付けられてカズマさんは今凄く傷付いてるの。そう。それはもうあと二回新生しないことには希望も持てないくらい遠い……」

「微妙にリアル(?)な数字で喻えんな。え? マジなの? 俺とラブコメってそんなに遠いの? 因果律レベルなの? ねえ!」

「はっ、すっ惚けてねえで歩きやがれい」

賑やかな少年らを伴ってなおも山道を往く。街を出てもう幾らにもなる。目的地は近い筈だ。

小鬼——ゴブリンの巣と化した廃村は。

かの村の異変をギルドが察知したのは七日前。始まりは樵達の噂話だった。曰く、山の中にゴブリンの村があると。

打ち捨てられた人間の居住地が野生動物の棲処になることなどそう珍しくもない。況や、モンスター共ともなれば小規模な集落はもとより、兵員を常設しない城砦、人の手が入らぬ洞穴、未調査の遺跡等を罫とするも殊に顕著であろう。

それに伴い、討伐依頼の斡旋をするにも最低限ギルドが把握し、かつ冒険者に対して提示せねばならない情報をそこから仕入れる必要がある。

ギルドの初動調査にて判明した事実は噂話を再確認する結果となった。小さな集落は、今や立派なゴブリン共の巣窟だったようだ。そこからの対応は多少拙速な感はあるけれど、世間的常識の範疇と言えよう。村の位置、規模、ゴブリンの大まかな数、それに見合った報酬の設定。ギルドはギルドとして最低限の仕事を済ませ、それをまとめた依頼書を揚々掲示板へ張り出した。

『調査後、一週間の内に三組のパーティがこの依頼を受託しました。ここのところどうしてか依頼の件数が減っていて、残っているのも高難易度のものばかりでしたから、それが災いしました……その三組とも、リタイアされています』

ゴブリン討伐は手軽な小遣い稼ぎ。新米冒険者の腕試し、中堅冒険者の暇潰し——などと揶揄する者もいる。しかし、それも一面的な事実ではあるようだ。

その、曰く「暇潰し」を断念せざるを得ない事態とは如何なるものか。

『二組目のパーティは村への途上で突然 “何か” に襲われ、命辛々逃げてきたそうです。二組目のパーティも同じように、抵抗する間もなく……最後のパーティは前二組の情報を基に、山道を使わず村の側面から回り込むように近付いていったそうなんですが』

依頼の受託に当たって、前任者達からの報告を我々に伝える受付嬢

も困惑を隠せない様子だった。

『ゴブリンではないゴブリンに襲われた、と』

「……ふむ、にしても」

「？ なんだよ」

「いや」

近くに寄った少年の姿を見て頷く。

自然、カズマは怪訝な顔で己を見返した。

「馬子にも衣裳たあこのことだと思つてな。 かつ」

「うるつせ」

少年は不機嫌に鼻を鳴らした。

褒めたという心積もりに偽りはない。 が、おちよくる気がないかと
言えば嘘となろう。

出会つて間もない頃、討伐へ行くと思巻いて（不安に頭を抱えて）お
きながら、身に帯びたるはお腰にほんの一振り。 仕立ては良いが、ど
う見繕つても寝間着にしか用立たぬ衣服。 険を冒すの言葉の意味を
壮大に勘違いした姿形なりであつたところの小僧つ子が、だ。

今こそは見違えた。

同意を示してダクネスが頷く。

「あのふざけてるとしか思えん格好は見ていてハラハラしたからな」
「ファンタジー世界に来といていつまでジャージなのかしら、この人
バカなのかしら、うわ恥ずかしい……つてずうつと思つてたけど、よ
うやくカズマもそれっぽい感じになつたわね」

「ええ……あの格好で討伐とか行つてたの？ ……ちよつとありえな
い」

「皆さんの暖かい言葉に泣きそうです」

丹念に鞣した皮革製の鎧を少年は身に纏っている。 それも胸、両前
腕と両脚、各関節部といった身体稼動を損なわぬ最小限度に留めて。

腰元には以前振り回されていた剣は無く、代わりに一尺ほどの小刀

を佩いていた。こちらはそれだけに留まらず、後腰に一本、皮鎧の胸元に増設したらしい鞘へさらに二本、短刀を差してある。

筋力に劣る自身の分を弁えた拵えと言えよう。少々刃金気は欲張ったが。

「クリス嬢の入れ知恵かい」

「まあそんなとこだよ。どうせ俺貧弱ですからねえ」

「拗ねんな拗ねんな。立派なもんだ。頼りにしておるぞ？」

「へーい」

山道はいよいよ獣道の様相を呈している。

道ならぬ道、草叢を小刀で掻き切りながら進んだ。そうして程なく小山の中腹辺りに差しかかったであろうか。手荷物を下ろし一先ずリーン達を休ませ、一方で己とカズマは手頃な木を探す。

「ジंकクロウ、これならいいんじゃないやね」

「おう」

カズマが示した大木を見上げる。どっしりとした幹、枝ぶりも太く、周囲のものより頭一つ抜きん出た高さ。文字通り天を覆い隠さるばかり。直に触れればいよいよその頑強さを窺える。お誂えだ。

早速と雑嚢を漁り、取り出したるは鉤縄である。三叉の尖端を三方へ歪曲させた鉄器に縄を結わえた、拵えとしては至極標準的なもの。手掛りの薄い高所、乃至山谷を渡る為の投擲具だ。

「あ、それ俺がやってみていい？」

「んん？ 構わんぜ。やってみな」

カズマは鉤爪よりやや遊びを残して縄を握り、勢い回す。裂かれた空気が甲高い音色を立てた。

そうして十分な勢力に育ったそれを、一気に放り上げる。

鉤爪は、しかし目当ての枝を少しばかり逸れていく。

『『バインド』！』

それを見越してのことだろう。少年は擲った鉤縄へ声を放った。

途端、鉤爪が軌道を変える。這い登る蛇のように、鉤自身が縄の尾を引いて飛翔していた。

そのまま枝の一本にぐるりと巻き付き、最後がちり、と爪が樹皮

に食い込む。

「いよしー!」

「ほおう、見事なもんだ。そいつも例のスキルとやらかい」

「そういうこと」

少年は得意気に笑って見せた。

縄を軽く引き、徐々に体重を加えて引き下ろす。大きく撓む様子も無い。

樹幹を踏み付けながら縄を頼りに木を登る。

十丈に届く高さ、近くの枝を頼りにさらに登る。

周囲に生え並ぶ木々を追い抜き、突如視界が拓けた。久しく見ない空の下、緑の海が眼下を彩る。

そうして、その先に。

「あつたぜ」

「たっけ! こっわ! え? なんか言った?」

「見ろ」

続いて四苦八苦しなから木を這い登ってきたカズマに、それを指し示す。

件の村の小さな全容をそこに望むことができた。

「……流石に遠過ぎて中の様子までは見えないな」

「それを見越してな、このようなものを用意してみた」

腰に括った小袋からその筒を取り出す。

掌に収まる円筒、両端の底面に丸鏡^{レンズ}が嵌め込まれている。単眼鏡というやつだ。

端を引つ張ると収納されていた本体が伸び出てくる。海賊仕様とでも呼ぼうかい。

「あ! ずりい!」

「備えあれば憂い無しと言うやつよ」

「いや用意しようとは思ってたんだけどさ、冒険者は望遠鏡なんて買わないからどの店にも置いてなかったんだよ。なんでも千里眼とかいうスキルがあるらしいけど……ちなみにどこで売ってた? それ」

「知り合いの店だ。魔道具……まあ珍品を扱つるところでな」

一癖二癖、下手を打つと癖しかない奇妙な品揃えである。

この望遠鏡にしてもそうだ。

『ジंकクロウさんジंकクロウさん！ これ！ これすごいんですよ！』

この魔石を加工して作った特殊なレンズを嵌め込むことでなんと望遠鏡越しに「覗き見るだけで」対象に魔法を掛けられるんです！

売れます！ これは売れますよおジंकクロウさん！ ただ覗き見た本人にも魔法が還ってくる上に、付与できる術式が〈デコイ〉だけなんです。ふふふ、思わず奮発して魔石全部買い占めちゃいました！

『ほうかい。そいつあ大層だな。どれ、その単眼鏡一つ貰えるか』

『ジंकクロウさん！』

『ああそれと、くれぐれもその妙な石ところは付けてくれるな』

『ジंकクロウさん!?!』

悲しげな顔で魔石とやらを外す店主に少々罪悪感を覚えたものだが。

「すげえな。その魔石の利用価値がいつぺんに消し飛んでる。もつとこう催眠とか麻痺とか弱体化デバフ系統の魔法なら役に立つのに……」

「ほー、いろいろとよく知ってるじゃねえか」

「初級魔法覚えるときに軽く勉強したんだよ」

勤勉なこと。学ぼうともせぬ己が不真面目なだけ、とも言えるが。

「魔石つてのも一応貰ったが、おめえさん要るかい？」

「要らない」

ともあれ、望遠鏡本来の用途で役立てる機会が廻ってきた。

覗き込むや、視界が狭まり遠近感覚が変化する。

最初に目に飛び込んできたのは、大口で欠伸をする小鬼の顔だった。突き出た鼻、尖った耳、疣と面皰にきびにまみれた顔。有体に言つて醜悪な容貌である。見張り役のようだ。

村の周囲にはそも、石造りの垣がぐるりと築かれている。経年劣化により幾らか崩れたそれを補強する形で、木片の粗末な防柵が随所に組まれていた。

そして何より目を引くのは、村落周囲三ヶ所に築かれた物見櫓であ

ろう。これらもまた、木材を雑多に組み合わせ塔の体裁を繕っている。人間の体重であれに登ればすぐにも崩れ去りそうなものだが、小鬼の矮躯なればこそその心配もないらしい。

「見な」

「サンキュ……うっわ、マジですか。ちよつとした要塞じゃないか、これ……」

少年が腹腔から低い呻きを漏らす。気持ちは分からんではない。

四方一町にも満たぬ集村を満たす小鬼、小鬼の群。

打ち捨てられてからどれほど経過しているのか。壁は崩れ屋根は落ち、住居としての原型を留める建屋はごく少ない。

小鬼共は其処彼処に縄を巡らせ、そこへ布を張り合わせ簡易のテントを拵えている。

焚火を囲み、酒宴に興じているらしい。そこらに転がっている無数の酒瓶と酒樽は一体何処からくすねた物やら。

「四十つてどこか。荒ら屋の中にも居るだろうが」

「ちよつと待て。『敵感知』、と」

一言、カズマが呟く。先日来クリスより教わったスキルというやつであろう。

字義を追うなら、おそらくは敵の居所を探る術。どうやら望遠鏡越しであっても効果はあるようだ。

「……壁に隠れて見えないのが二、三匹いるから、合わせて五十、くらい……？ たぶん」

「ほー」

そんなことを少年は何の気なしに言っただけだ。この距離から遮蔽物の向こう側に居る存在を捕捉できるなど、十分過ぎるほど有用だろうに。

「うん？ いやちよつと待った」

「どうした」

「………村の中心にある建物の中。なんか、でかいのが居る」

村の中央——なるほど確かに、赤い瓦葺の建屋が一軒あった筈だ。やや細まった煉瓦造り、おそらくは尖塔の名残だろう。趣としては

吉利支丹きりしたんの教会と行ったところ。

単眼鏡を覗き込むカズマの様子が変わる。好い結果は、得られなかったらしい。

「いやいやおかしいって……ゴブリンの巣だろここ……」

「どんな奴だ。そのデカ物つてのあ」

「……周りのゴブリンと比べても倍はあるぞ。縦にも横にも」

「そりやまた」

小鬼共の体格は精々人間の子供ほど。単純計算するなら、そのデカ物の体長はカズマや己すら凌ぐ。

そんなものはや小鬼とは呼べぬ。別種の何かであろう。

そこまで考え、ふと思いつくものがあった。ここへ出向く前、ギルドで受付の娘が零していた。

『小鬼ではない小鬼』、だったか

「え？」

ともあれだ。偵察と呼ぶには粗いが、状況を判断するに十分な材料が揃った。

「さて、戻るかい」

「うん……でもどうするジंकクロウ。戦力差、予想以上に厳しいぞ」

「それを今より皆で話し合う」

カズマ共々樹上から帰還し、早々に村の状況を娘らへと報告したのだが。

「ありませんよ」

開口一番めぐみんは断じた。

「あんた達、ゴブリンよ？　ゴ・ブ・リ・ン。最弱モンスター筆頭中の筆頭よ？　それがなに？　自分たちで柵と見張り台とキャンプ作って村の中央の教会にはでつかいボス？　ゲームのやり過ぎで頭ちやらんぼらんのカズマだけならともかくジंकクロウまでおバカになっちゃったわけ？　プークスクスー！」

「うーん、流石にちよつと信じらんないかも」

「確かに……そんなゴブリンは聞いたこともないな」

アクアの調子はいつも通りとして、めぐみん初めリーン、ダクネスの反応も概ね同様。半信半疑。いや見るかに疑心の方が勝っている。ゴブリンという生物に対する認識の差か。彼ら——この世界の人々にとって、ゴブリンとは知能の低い害獣のようなものなのだろう。

野生の獣が建築土木に勤しんでいた……などと、眉唾もいいところだ。況や大真面目にそんなことをのたまう者の正気をこそ疑おうというもの。

しかし、揺るがし得ない事実である。

「こんなことで嘔吐いたって仕方ないだろ」

「いくら戦いたくないとはいえゴブリンで話を盛るのは無理がありませんよカズマ」

「そんなに恐がらなくても大丈夫だって。ゴブリンだよ？ 新米でも油断しなきゃ余裕で勝てる相手だよ。私も援護するからさ、ね？ 頑張ろう！」

「まったく、冒険者がこの程度の相手に臆してどうするのだ。仕様の無い奴だ。仕様がないからカズマは私を盾として使うといい。使うとイイ。心配ない。私がカズマに代わりゴブリンに群がられ、蹂躪され、ぐつちよんぐつちよんにされるから……いやさせてください！」

「別に逃げる口実作ってる訳じゃねえよ！ なんだよその無駄な一体感！ そして涎を拭け変態」

怒涛のような三者三様の言い草にカズマは憤慨した。然もあらん。気遣わしげな言葉選びがむしろより惨めさを誘っていた。

「百聞は一見に如かずってなもんだ。なんなら登って見てみるかい？

ちよいと高えが」

「あ！ あ！ じゃあ次、私登りたい！」

「ずるいですよアクア！ 私も登りたいのです！ 遥か高みから下界を睥睨してやります！ あ、別にジंकロウを疑っている訳ではないですが」

「そうそう。あんまり突拍子もないことだからびっくりしてさ。ジン

クロウが私達を騙すなんてこれっぽっちも思っていないよ」

「ジンクロウの観察眼は信頼している。余程の異常事態ということなのだろう」

「お前ら手首に潤滑油でも注してんの？」

掌返しのこの滑らかさよ。

こうして軽口に花を咲かせるのも良いが、それは機会を改めるとしよう。

カズマは居住まいを正し、その場の全員を見渡して言った。

「えー、村の様子と敵の数、装備なんかを考慮に入れた上でジンクロウと協議致しました結果」

「荷物まとめな。引き揚げだ」

落ちを引き継ぎ、努めてあつけらかんと締め括る。

暫時、沈黙が宙を漂った。

浮遊するそれを最初に叩き落としたのはやはりというか、めぐみんだった。

「な、なにを弱気な！　びびりのカズマならいざ知らずジンクロウまで！」

「ついでのように人をティスんのやめてもらえます爆裂ロリっ狂」

売り言葉に軽妙な買い言葉も相まって、カズマとめぐみんは珍妙な構えを取りながらその場で睨み合った。

片や静かに、腕組みしながらダクネスが言った。

「……めぐみんの言い分ではないが、ジンクロウにしてはいつになく弱気だな。カズマもだ。お前の知力なら何かしら戦力差を覆す妙案を思い付いてくれそうなものだが」

「期待してくれんのは嬉しいけど、今回ばかりはなー。明らかにイレギュラーな事態だし不確定な要素多過ぎるし……何より、このパティが統率の取れた集団を相手にするのは自殺行為以外の何ものでもない」

「？　どうしてだ？」

ダクネスが首を傾げる。

それを受け、カズマは居並ぶ面々——めぐみん、ダクネス、そして

一人樹に登り始めたアクア、最後に己を見てから、それはそれは深い溜息を吐き出した。

「うち、統率力ゼロじゃん……」

「あー」

「かかかつ、違えねえ」

「そこは納得するんだ」

リーンが驚いたような呆れたようななんとも言えぬ調子で呟いた。

「そういう訳なので、はい全員撤収！ 持ち帰った調査結果の報酬は山分けでよろしくどうぞ」

「むう」

「むくれてもダメなものはダメでーす」

不満満面のめぐみんにもカズマは取り合わず、そそくさと荷造りを進めた。他の者らも、大なり小なりの口惜しさを呑み込んで帰り支度を始める。

しかしなおも杖を両手で握り締め、めぐみんはその場で立ち尽くしたままだった。何やらいつにない我儘な様が新鮮なような、愛いような。

「どうしたどうしたためぐ坊。利口なおめえさんらしくもねえ」

「だってそれは……多勢を相手にしてこそその爆裂魔法ですから」

「今回ばかりは仕様もあるまい。なあに、この先機会は幾らでもあらあな」

「でも」

「ジンクロウ、支度できたよ」

ひよこりと横合いからリーンが顔を出した。一房の栗色髪が娘の肩口から垂れ下がる。

「思えば今回、こちらの都合で付き合わせておきながらこの娘にはとんだ徒労を掛けた。」

「おめえさんもすまねえな。無駄足を踏ませちまった」

「え、ううん、全然！ ハイキングみたいでむしろ楽しかったよ。でもその、ジンクロウさえ良ければなんだけど……また、誘って欲しいな」
「おう、無論だとも」

「えへへ」

「……」

そうして視線を戻すと、めぐみんは一人身支度に入っていた。蹲つて丸まった小さな背中が、ふと妙に気を引いた。

今一度声を掛けよう。そう思った時、樹の上からばたばたと騒がしい娘が帰って来た。

「ねえねえカズマ、今村の方見てたんだけどね。おつかしいの！ブークスクス！」

「なんだよ。お前も遊んでないで帰る準備しろよな。忘れ物ないか？ハンカチと水筒と弁当箱と財布と。あ、そういえばいくら中身が無くても財布は愛用のやつを一つ使い続けた方が縁起が良い、ってうちのじつちやが言ってたぞ」

「えっ、そうなの？ 私お金使い切った財布いつも捨てちゃうんだけど。今度から取っとこ……ってそうじゃなくて。ゴブリン、ゴブリンがね」

小賑やかなアクアをカズマがあしらう。見慣れた様を横目にやりとりを聞き流していたが――

「あーはいはい。ゴブリンがどうしたんだよ」

「そのゴブリンがね、ゴブリンの癖に行儀よく整列してなんか集会みたいなの開いてるの。おつかしいでしょ？ ゴブリンの癖につプークスクス！」

「は………？」

聞き捨てならぬことを娘は笑い混じりに言った。

図らずもカズマと目を見合わせる。言葉を交わすこともなく、我々は再び樹に足を掛けた。

樹上からの森の眺望に変化はない。廃村は変わることなくそこにある。当然だが。

しかし、村の内にあつてはその限りではない。単眼鏡の中に覗く光景は、先程の娘の言そのままのものであった。

「……武装し、隊列を組んでおる」

「はあ!？」

カズマの勘定は正確であった。五十から為る小鬼共が五列縦隊を組み、二隊に別れたそれらが村の拓地に整列している。

単眼鏡を寄越されたカズマもまた、すぐにそれを認めて口を開けた。

「ジंकクロウ、これって」

「うむ。何処ぞへ攻め込む心算らしい」

完全武装の兵員を召集した上で行うことなど、調練か進軍のどちらかであろう。そしてどうやらこの儀において、前者はあり得ぬ。

大気の震えを肌感じた。遅れて響き渡ったものは、ケダモノの雄叫びであった。

「でっ、出た! 大ゴブリン!」

「見せてくれ」

目当てを探すまでもない。丸鏡越しに巨軀が我が目へと飛び込んできた。

確かに大きい。カズマの見当では小鬼二匹分とのことだが、どうやらそれどころの騒ぎではない。自身の頭二つは上と見てよかろう。

そして目を引くのは何も体格ばかりではない。身に纏う甲冑は金属装甲。携えた長柄、その矛に当たる部分には肉厚の片刃が装着してある。所謂、斧槍というやつだろう。全身装甲に加え、通常の槍や斧よりも重みに勝る斧槍を苦も無く持ち上げる膂力は瞠目に値する。何より、武器としての機能の多様性からあれを扱うには相当の技量を要する。

つまりあの大鬼は、それだけの武芸達者。

大鬼が隊列の先頭に陣取り、何やら小鬼共に声を上げる。それを受けた隊伍は皆手に手に武器を掲げ咆哮を上げる。

「何やってんだ、あれ」

「戦の前の兵士の鼓舞、にしか見えねえな」

「い、戦!？」

「だが、こんな山奥から何処へ?」

直近で最も大きな街はアクセルであろうが、それにしても手勢が少な過ぎる。さりとて他に適する場所も――

「山の麓に村があるのです」
「めぐ坊」

いつの間にもやら、めぐみんがそこにいた。己とカズマの居座るその一段下の枝に乗り、村の辺りへと目を眇める。

「ゴブリンは狩猟採集も農耕もやりませんから、必要なものは略奪で揃えようとするでしょう」

「村を襲う気かよ」

カズマが呻くように吐き捨てた。

異常に装備の整った小鬼の大軍。村の一つや二つ、あれでは一溜まりもなからう。ギルドへ取って返し事の次第を報せ、対抗し得るだけの冒険者を揃える。

当然ながら、そんな時間は無い。

視線を感じ眼下を見やると、娘の紅い瞳がこちらを射していた。

「ジンクロウ」

めぐみんの言わんとすることは明白である。しかしだからとて容易に頷けるものでもない。

「カズよ。皆と（みんな）で」

「却下」

「おいおい、せめて最後まで言わせてくれい」

隣の少年に苦笑を向ける。カズマの方はこちらに見向きもせず、単眼鏡から廃村を覗き込んでいた。めぐみんはきよとんと小首を傾げている。

「なれど、どうする。数の差は歴然、それも平素相手取っているような烏合の衆ではない」

「ふふふ、我が爆裂魔法の出番です！」

「……」

「……」

「？ なんです。今放たずいつ放つというんですか！」

奮起するめぐみんには残念なことだが、此度の戦闘で爆裂魔法は用

立てられぬであろう。威力云々ではなく問題なのは出の遅さと、何より隠密性とも呼ぶべきものが皆無であることだ。

爆裂魔法を使う様はこれまで幾度も目にしてきたが、あれは放つ直前に殊更過剰に光る。唸る。轟く。お前達を狙いこれより火を放つと声高に吹聴するかのよう。

獣の群が相手ならばそれでもどうにか機を合わせられた。しかし、此度相手らには統率者が在る。

「先ず以て隊を逃げ散らせ、そのまま魔法の発射位置を取り囲むだろう」

「いやーまず弓でそこを盲射めくらうちにして、相手をその場に釘付けにするとかありそうじゃね？ あ、でも木が邪魔か」

「いやいや、腰を砕くってえなら十分に意味があるだろうさ。うむ、先に敵の身動きを封ずる。おめえさんもなかなか、顔に似合わねえ悪辣さじゃねえか」

「へへっ、そう褒められると照れるって」

「何故でしょう、私の爆裂魔法が愚弄されている気がする」

愚弄とはまた聞こえが悪い。爆裂魔法の強力は間違いなく人後に落ちぬ。相手と状況が活用を許してくれないのだ。

「カズ、ここはおめえが知恵を絞ってくれ」
「え」

「力任せで事に当たれば、我ら何れかが確実に命を落とす。力と、それを補う工夫をせねばならぬ」

「っ」
息を呑む気配は足の下から。

カズマは言葉なくこちらを見据えた。

「策が要る」

「……」

他力本願なこちらの物言いにも、カズマは不平を言わなかった。口元を手で覆い、眉間に皺を寄せる。まるで脳髓を絞るように思索を回らせているのだ。

「……考えが無いことも、ないけど」

「おお」

思いも掛けぬほど早く応えがあり、自ら頼んでおきながら驚嘆に声が漏れる。

さりとて自信満々とは流石に行かぬ様子。カズマはぶつぶつと何事か呟いている。断片的な思考を、糸を縫り合せ紐に、紐を縫り合せ縄とするような。

「要は正面からぶつかりたくないんだよな……まとめて削りたい……こっちはジंकクロウが居るから……戦力を分断させて……」

「カズ」

「……………大、丈夫。時間も無いし、全員に話しながらまとめる」

「ああ、頼む」

常に無い少年の苦悩する様。事実とはいえ徒党の皆を引き合いに脅すような真似をした。己の言葉はさぞ、少年の両肩を圧していることだろう。

それを理解し、重荷を負わせている自覚もまたある。しかしながら、己の胸中に浮かんだのは——酷い話もあったものだ。

「期待してるぜ、カズよ」

高所特有の疾風は、その無責任な言葉を吹き払ってくれた。

22話 我が「いくさ」

村へと続く道は、今や雑草と雑多な小石で荒れ放題となっている。しかし近頃はここを踏んで出入りするものがあるようだ。踏み均された足跡の上を歩めば多少は脚への負担も軽い。それも一つ二つではなく、少なくとも五十に及ぶ轍。

人ならぬ、異形のモノ共のそれ。

伴い歩く銀甲冑の娘を見やる。足取りは確かで、表情はきりりと締まっている。これより戦場^{いくさば}へ赴く士^{もののぶ}としてこれ以上ない程に相応しい姿……に見える。外面だけは。内実さえ知らねば。

「フッフ、楽しみだなジंकロウ。この先で何十ものゴブリンが我々を待ち受けていると思うと……」

「思うとどうなるんだい」

別段聞きたい訳でもないが。

美しい女騎士は、途端その伶俐な顔をへにやりと緩ませ、赤らんだ頬にだらしない笑みを湛えた。

「堪らんつ、ハアハアハアハア、興奮してえ、ぜぜ全身が震えているー」

「武者震いだ、うん」

「ククツ、フフ、フフフフ、フウ、フウ、フウ……!」

呼吸荒く、それを鎮めようとして今度は鼻息荒く吐息する様は有体に言つて、下卑ている。品がない。平素の取り澄ました顔が様になる分、余計に酷い。

「意気軒昂は結構だがな。せめて面だけでももう少し引き締めてくれい」

「ヌフウツ……んゝんゝ! 分かっている。騎士として! 無辜の民を襲わんとする魔物を退治しに行くのだ。騎士として! それが嬉しいという気持ちもあつてな、余計に昂ぶるんだ……!!」

「左様で」

「……一っだけ不満があるとすれば、騎士としては、出来れば剣を振るいたかったよ」

そう苦笑することで、ダクネスはようやく正常な顔に戻った。そのまま娘は首を回らせ自身の背に負っているものを一瞥する。

長方形の木製盾。

幅は一尺半ば、全長は三尺をやや凌ぐ。木製とはいえ、随所を金属板で補強され重量もそれ相応だ。そも、本来これは騎兵が馬上から構える為の物であるとか。徒歩で、尚且つ甲冑を着込んだ者が単独で用いるなど通常は論外。

その筈だが。

「かつはは、いやいや、剣より余程しつくり嵌っておるわ」

「なんだか褒められている気がしないぞ……」

「褒めておるとも。おめえさんの怪力を拝むのが今から楽しみだぜ」

「むむむ」

何やら心外な様子で娘は唸る。いかにも納得行かぬ様子からも分かる通り、この盾は娘の持ち物ではない。誰であろう我が徒党の御頭様自ら用意なされた物である。何時だったか酒の席で盾がどうのと零していたが、まさか手ずから調達し、さらには事態を見越してここまで持ち込んで来るとは。御都合的と笑うより、むしろその周到さに感服する。

「こりや、益々以てしくじれんな」

「？」

道行きは頗る順調。拍子抜けするほどだ。

視界の両端に延々と続く林が、不意に風鳴る。音と言えはその程度、静かなもの。鳥や獣はおろか虫の声すら聞かぬ。

「……」

僅かな眼球運動で、雑木林の暗がり、その先へと視線を這わす。今はそれだけでいい。

程なく、村の入り口が見える。村の外周を囲む垣に、これまた木材で組まれた両開きの門扉。それが口を開けて我々を待っている。

待っているのだ。

「……」

「……」

開け放たれた門を潜る。防柵は間近で見れば高さ一丈弱。手掛かりも多く攀じ登れぬほどではない。ただし、登っている最中に無防備な背中を斬られるか突かれるかする覚悟は要るが。

つまり、この柵は何も、外敵の侵入を防ぐばかりが目的ではないということ。

門を潜り、潜り切った瞬間、両扉が軋みを上げて翻る。木屑を散らしながら、勢い門扉は閉ざされた。

「っ、ジंकクロウー」

「おうよ。ダー公、あまり離れるな」

断たれた退路を惜しまず、尚も歩を進める。踏み入ってすぐはただっ広い拓地があり、隅には切り出された材木が積まれ、村の半ばに疎らな家屋の残骸が点在している。中央には遠目からも見えた、あの教会跡らしきもの。

小鬼共の姿は無い——と見えたのも一瞬のこと。家屋の影、材木の後ろ、其処と言わず彼処と言わず、わらわら、わらわらと湧いて出てくる。

矮躯。小鬼の呼び名に相応しい小さな影。一匹一匹が大した脅威でないことは確かであろう。しかし、こうも数が揃えばそのような前提は容易に覆る。

見る間に居並ぶ魔物の群。そしてそれは群体にして軍隊。彼奴らは皆一様に軽装甲を纏い、腰には刃渡りの同じ小刀を佩いている。武装の統一、延いては各兵士の能力の平均化は即ち軍隊行動を想定しているからに他ならない。

当然とばかり、小鬼めらは我ら二人の背後にも回っている。既に包围は完了した。

だが、そうしておきながら尚も一気呵成に襲い掛かつては来ない。今はまだ待てをされているのだろう。行儀の良い飼い犬よろしく。程なく、その飼い主が現れた。

「お出でなすったぜ」

「なっ、なんだ、あれは……」

娘が声を漏らす。無理もない。小鬼なるものに対して一定の常識

観を持つダクネスからすれば、あれは異常以外の何ものでもない。

直に見れば、いよいよ以てその巨軀は際立つ。頭は地面から七尺余りの位置にあり、幅と厚みに至っては先達て立ち会った熊にも劣らぬ。全身を黒く焼けた金属装甲で鎧よろい、手に長大な斧槍を携えた其は、もはや。

「オーガ……ではないのか。あんなゴブリン見たことも聞いたこともないぞ！」

鬼。そう呼ぶが相応しかろう。

隣に立つ娘の肩が震える。額から頬へと汗が流れ落ちた。血走った目を見開き、呼吸も荒く不規則。

化物の体現が今、軍勢を率いてここに立った。そんなものと相對して平静で居られる方がどうかしている。娘の有様は人として正しいものだ。

正しい人情だ。そうとも……外面だけは。内実さえ、それさえ知らなければ。

「あんな大きな体で……あんな太く屈強な腕で……組み敷かれ、言うことを聞かねば命はないとか脅されつつ、鎧と衣服を乱暴に剥ぎ取られ思うが俣の辱めと嗜虐を受け、最後には騎士としての尊厳すら踏み碎かれたりなんかしちやつたりしたらどうしようジंकロウ!？」

「知らん」

ともあれかくもあれ、序盤が整った。それもこちらの思惑通りに。数匹の小鬼を従えた大鬼がのっしのっしと進み出た。そうして兜の下から黒々とした目がこちらを睨め付ける。

「人間、冒険者だナ？」

「喋った!？」

低く、地響きめいた声。僅かに音程を外しながらもその化物は確かな人語を発した。

「たったの二人。オマエら、なにしに来タ」

「おのれらを討伐しに来たに決まっておろうが」

鼻を鳴らし、乱暴に吐き捨てる。

「かつ、ぶりん相手に五人も十人も引き連れてどうなる？ 大した稼ぎにもなりやしねえつてのによ。二人で十二分。いんや、それでも足が出ちまうか……？ かつははははは！」

表情筋を歪めに歪めて口の端を曲げに曲げて嘲笑という貌を捏ね上げた。さらにこれ以上無いほど解り易く、そして丁寧に相手方を虚仮下ろせば、場の空気に鉛の風合が加わって如何にも重く苦い。

其処彼処で鳴り響く獣特有の唸り声。憤怒、憎悪。おそらくは小鬼共の一朝一夕でない人間種に対するそれに今、火が入ったのだ。

しかし、今にも噛み付かんばかりの氣勢を見せる手下に比して、その長たる鬼は不動。変わらずこちらをじっと睨む。

睨み——にたりと嗤った。

「オマエらはいつもそうダ。オレたちを雑魚だと言ウ。簡単に殺せると思つてイル」

「違うつてのかい？」

「ガアアアア!!」

返答に代え、大鬼が咆哮した。すると周囲に居並んだ小鬼が一斉に腰の剣を抜き放つ。号令であろう。その意味は、特に思案に値しない。

殺せ。

その意でこの場は満ちている。

「オレたちを見下すオマエらは、簡単に殺セル。だから閉じ込めたタ。オマエら、逃がさないタメ」

嘲笑は何程の間を置かずこちらに返された。敵を侮る愚物など敵ではない。兵法の条理である。

「フツ」

ダクネスが一步踏み出し、正対から真半身になる。そうして身体が半回転する勢いを使い、背にした盾を前に回し、その手に掴み取った。

戦闘態勢。敵方味方、双方共に。

戦気は疑いようもない。今にも襲い掛かってくる。それを前にしながら、しかして自身は直立不動。

待つ。敵の攻勢を待つ。

抜剣したということは、敵の企図する戦法は白兵。数で勝り、且つ獲物は自陣に閉じ込めたのだから押し囲んで斬り伏せようとするは道理。況や、慢心で武の理を弁えぬ者など斬つて捨てられぬ訳もない。

——だが、それこそが本望。

「ダー公、前だけだ。前から近付く者だけ手当たり次第に打ち飛ばせ」
「わかった。背中はお前に任せたぞ………ちよつと勿体無いが」
「聞かなかったことにしてやらあ」

腰に差した鞘に手を掛け、鯉口を切った。

天頂よりやや傾き始めた陽を照り返し、刃金が光る。

大鬼が握った長柄を掲げ、その先端の斧刃を我らへ差し向けた。会戦の合図。

獣の雄叫びが木霊する。

「……」

「ツツ!？」

轉身し、右後背へ一步大きく踏み出す。そこには既に小鬼が剣を振り上げ迫っていた。

五十を超える獣共の音量は大気を震わせ、他の音を蹴散らす。それに乗じてのことだろう。殊更静かに近寄っていたらしいその小鬼は、翻つて向き合ったこちらに泡を食っていた。

順手で抜打、するには近過ぎる。故に柄頭を小鬼の小さな顔面、眉間に打ち当てた。

「ゲツ」

確かな手応えと共に、それは仰け反りもんどり打って倒れ込んだ。鞘から刀を抜き放つ。同時に、革帯から抜いた鞘を放った。

軽く振るうと刀身が空を裂く。

「ギギギ！」

「グルアアア!!」

左右から同時に来る。

右に引き込んだ刀を、即座左へ突き出す。切先が喉笛を貫く、それもほんの一寸程度。命を奪うだけならこれで十分。

右脚を引き下げ、返す刀で右方に斬り下ろす。逆袈裟。
これで三匹。

「おお！ 流石だなジンクロ——」

「前を見んか前を」

「おおっとー」

二匹、正面から躍り掛かってくる。

一拍遅れて後背の左右からも。

「どっせえい!!」

ダクネスは横に構えた盾を前へと突き出す。腕力に頼まぬ、前進する体重移動力を加えた盾越しの強烈な体当て。

悲鳴すら上げる間もなく、矮躯が二つ宙を舞った。

「かつは」

笑っている場合でもない。

右方の斬撃を躲し様、胴に横一閃を入れる。左方は刺突の構えで突進してきたが、これは避けることなく小手に打ち落とす。

握られていた小剣と手首が二本転がった。そして袈裟に斬り上げ、止め。

ふと見れば、ダクネスが盾を持った自身の手元を見詰めている。

「重い……子分達も普通のゴブリンとは違うのか」

「普通がどんなもんかは知らねえが、何れにせよ舐めて掛ければ命取りよ」

笑みを向ける。ダクネスではなく、未だ四十七の兵卒の向こう側に立つ巨躯へ。

無表情。その貌に色は無い。忘我しているのではなく、表出しようとするものを殺した貌。冷徹な戦闘者のそれ。

当然の成り行きではあるが騙せるのはこちらが動き出すまで。反撃した途端、馬脚を晒した。

敵を侮る愚物から、猫の皮を被った虎であると……これはまあ、ちよいと見栄の張り過ぎか。

「ふっ」

足元を狙った剣を跳び避け、上げた脚で顔を蹴り飛ばした。

逆手に回した刀で脇から背後を突く。切先が、近付いていた小鬼の鳩尾を射抜いた。

盾を避け、ダクネス自身を狙う小鬼。その間に割って入り込み、逆手持ちのまま胴体を浴びせ斬りにした。水気を伴って辺りに骸が崩れ落ちる。

「……」

軽い氣息で一気に踏み込む。駆け出し損ねていた小鬼、その首を斬り落とす。

首を失った身体から黒々とした血が噴出す。落ちた首が小鬼輩の前に転がった。

群体の勢いが止まる。獣の獍猛さは何処へやら。

一つの理解が彼奴らに行き渡っている。

「グオー！ ガガ！ グルロロロ！」

唸りか咆哮か。人語ではない、しかし確実に何らかの言語を鬼の長は発した。

その瞬間、群が動く。迅速な変化だった。剣を手にした小鬼らが引き潮のように退がり始め、代わりに出てきたのは。

「弓兵だ！」

「構えいダー公！」

地に衝き立てた盾をダクネスが構える。己もまた急ぎその背後で身を屈めた。

二人がそうしたと同時に、無数の衝撃が盾を叩いた。そして同じく無数の風切り音が傍らを過ぎ去っていく。

地面に刺さり、刺さり損ねた矢が転がる。

「くうっ、すぐに次が来るぞ……！」

「ああ、頃合だ」

釣瓶射ち。近接戦闘では分が悪いとなれば、遠間から射掛けてしまえばいい。当然であり、これ以上無く有効な手段だ。

これをやられては身動きのしようもない。

「ここまでだ。」

「ガァー！」

今一度の号令。人語ならずともその意味は理解できる。
構え。

「グルア！」
狙え。

次の瞬間には、再び矢の雨が降り注ぐ。そしておそらくは盾の死角を突いて。少なくとも次の掃射を完全に防ぐことはできまい。弓が引き絞られていく音を聞く。死の足音と同義のそれが。

「グ——!?!」

放て、そのような意味合いを持っていたらだろう言葉はしかし、完成を待たず途切れた。

辺りに渦巻く、「魔力」によって。

「来たか！」

「ダー公、おめえさんも備えな」

逆巻く風に光が迸った。溢れ流れる群青の内で、星のように瞬き消えるを繰り返す。

幾何学の円陣が空に現出する。赤光、燃え盛るような眩さ。

「ガッ！ グガ！ グガア!!」

化物の叫びすら呑み込む勢いで、臨界に達したそれが天より降り来たらんとする。

—— エクスプロージョン!!

その刹那。遠く、微かに、娘の声を聞いた。

粉塵が村全体を包み込んでいる。視界は悪い。三歩先を見失うほどに。しかしそれも長くは続くまい。

「今だ。ダー公、こいつを持って往け」

「おお！　それが例の。待ち侘びたぞー！」

言うや、ダクネスは矢の筈むしろと化した盾を捨て、こちらが差し出した“それ”を受け取った。白布で包まれた、掌に収まる円形。

その如何にも嬉々とした様に苦笑する。

「これがあれば思う存分モンスター達に蹂躪してもらえるんだなジンクロウ!？」

「ああそうだそうだ。だからとつとと行け、行っちゃまえ」

「うん！　行ってくりゅっ!!」

「頼むから走り続けてくれい。わかったな？」

「フフフフフ」

解っているのかいないのか最早判別もできぬまま、ダクネスは塵埃の中を疾走していった。

「ガアアアアアアアア!!」

娘がこの場を離れたと同時。煙の中から巨大な影が這い出てくる。

吼え散らしながら斧槍を振り回す。粉煙を吹き飛ばす勢いだ。

「おうい、こつちだこつち」

「グルア!!」

呼び掛けるとすぐに大鬼は自身を捕捉した。足取りも確かに、ゆっくりと近付いてくる。

やや晴れ始めた視界を埋め尽くすように肥大する姿。間近にすれば尚一層その巨おおきさを実感できる。

僅かな距離を隔てて相對する。そうして見ゆるは、苛立ちに歪んだ正しく鬼の形相。

「キサマ……」

「あれを喰らわせられりゃ話は早えんだが、そうも行かぬか」

爆裂魔法の殺傷効果範囲内に、この大鬼も確かに捉えていた筈だ。しかして未だ健在。手傷一つ負ってはいない。

まあ、魔法発動の兆候があれば、回避されたところで不思議はないが。

囷が敵の注意を引き付け、本命が敵の不意を打つ。つまるところ、常日頃我が徒党が使っている戦法であるが。

「……確かに強力な魔法だつた。まともに喰らっていたら、ナ」
「……」

「オレの兵、大して死んでない。すぐに逃げ散らせろ。不意打ち、失敗。オレの兵すぐに戻ってくる。魔法使い、オマエの仲間場所もすぐ分かる。オマエの負け」

勝ち誇るでもなく、冷ややかに鬼は言った。

今回、この戦法は明らかな悪手。敵の知能、練度が高ければ囷は囷足り得ない。注意を引くも足を止めさせるも不十分。不意打ちは失敗した。

不意打ちが、本来の目的であったなら。

「……………」

周囲には未だ、空に舞い上がった小石や土砂がぽつぽつと降り続けている。傘に当たる雨粒を聞く心地。

「？」

「どうした。兵が戻って来んのが不思議かい？」

「！ ナニイ……!?!」

獣の呻きも足音もせず、静かな。

兵卒共は未だ帰らず。

「オマエ、なにをしろ…………!?!」

「小細工よ。手前てまえの兵共は今頃、娘の尻を追い掛けておるだろうぜ」

「！ スキル…………『デコイ』！」

「よく知ってるじゃねえか。ま、似たようなもんでな」

愕然とする鬼に笑みを向ける。嘲りなど微塵も含めず、ふと湧いて出た妙な親しみを込めて。

笑って、切先を差し向けた。

「…………」

憤怒で鬼の腸が煮えている。思惑にまんまと乗せられたのだから。兵士達を追い呼び集める、などという真似は今更できない。させはしない。光栄なことに、己はこの大鬼にとって「背中を見せて良い相手」ではなくなった。

方途は一つ。敵を殺すか、己が殺されるか。

「隠れ潜ませせておる小鬼を使うか？」

「……」

「生憎だが、其奴らに娘を追い掛けられては困るのでな。動いた者から斬るぞ」

最早驚きはしないと、鬼は無言で斧槍の柄頭を地面に打ち付けた。物陰から影そのものが分離し、形を取るかのように“それ”らは現れる。暗々とした黒衣に身を包んだ小鬼が五匹。村までの道中、林からこちらを窺っていた気配の正体。

再三、この村に近付いた徒党三組を襲ったのも此奴らに相違あるまい。

「……オマエ、強いナ。強い人間の癖に、オレたちを見下さない。危険な、人間」

「ならばどうする」

「殺ス」

黒衣が一斉に剣を構えた。纏った装束の下から剣身だけがこちらを向いている。

そして、斧槍の刃が己を差す。

「血の臭い……剣かラ……？」

「……」

「危険なオマエは殺ス。我が主の障害になるオマエは絶対に——殺ス!!」

殺意が我が身を叩く。叩き付けられる。

久しく感じなかったそれが、どこか懐かしい。

刀身を立て、胸の前へ。抱くような心地。そうすると、冷えている筈の刃金を熱く感じる。そうか。

「……俺もお前も、昂ぶっているのか」

娘を呆れられた筋ではない。

己もまた、どうしようもない愚か者だった。

23話　そして彼の「いくさ」

作戦は以下の通りだった。

- ① ジンクロウと盾持ちダクネス二人の囷
- ② 集団背面からの奇襲（エクスプロージョン）
- ③ ダクネスによる敵集団の誘導
- ④ カズマ、リーン、ついでにアクアがそれらを一掃

「いやいやいや無茶でしょ!?　無理でしょ!?　特に④番!」

茂みの中で四人、小さく屈み込んで村の様子を窺う。必要に応じて潜伏や忍び脚なんかを使いながら慎重に近寄ってきたので、そうそう見付かることはないだろう。

ノータイムでツツコミをくれるリーンの有り難みを噛み締めつつ、頷く。

「うん、ぶっちゃけ俺とアクアだけだったら無謀通り越して絶望だったわ」

「うんうん」

「なにその謎な自信満々具合……」

数の不利は勿論、貧弱ステータス冒険者カズマくと無駄ハイステータス駄女神アクアちゃんに完全武装したモンスターを倒せる訳がない。まともな戦闘技術がない。そもそもゴブリンの群に正面から向かってく度胸もない。ジンクロウじゃあるまいし。ないない尽くしで涙が出る。

それが正常だ、なんてジンクロウは言った。それはつまり自分は異常だ、と言っているも同じなのだが。

あの男にその自覚は残念ながら……ある。あるのに無謀な戦い方は止めない。

それが最善だから。そうやって聞かないのがジンクロウだった。

「まあ普通にやったら万の一つ……億の一つも勝機は無いな」

「そこまで!」

「えーなので、ジンクロウの無茶振りに俺なりの一捻りを加えます。さあ出番だめぐみん!」

「ツーン」

満を持して呼び付けた爆裂少女は、しかし何時もの意気揚々さも元氣一杯加減も鳴りを潜めて。なにやら膨れっ面で杖を弄り、地面に「の」の字を書いている。

「なんだよめぐみん。いつもの痛い勢いはどこいったんだ？」

「誰が痛い子だコラ」

「中二病重罹患者という痛すぎる欠点はあっても、殺る気だけはこのパーティー一番のめぐみんらしくないぞ」

「おうマジの喧嘩が御所望なら買い占めてやりますよパンツ泥棒コノヤロウ」

煽り文句に対する忌憚の無いレスポンス。けれど沸騰し掛けたポルテージもすぐに冷めてしまう。

なんとなくだが、その理由は察しが付いた。

「あのなあ……最初の打ち合わせで説明したろ！ お前が爆裂魔法撃ってくれなきゃ作戦が成り立たないんだって」

「理解はしています。してませんが、こう、張り合いがないというか……ああー!! やっぱり納得いかないのです！ 我が最強の爆裂魔法が何故「穴掘り」要員なんですかー!!」

「しょうがないだろ！ 『今から超でかい殲滅魔法で吹き飛ばします』って喧伝しまくりの爆裂魔法あんな統率取れた集団に撃ったところでどうやっても全滅とか無理——どころか上手いこと躲かわされて！ 目立ち過ぎるから当然こっちの位置もばれて！ 無力なお荷物二人抱えてるから逃げることもできずにそのまま集団リンチでグロ同人みたいな展開しか待ち受けてないんだよ!!」

「ぐ、ぬぬぬ」

「……あれ？ ねえ、今無力なお荷物に私もカウントしてなかった？」
議論の余地もない当然の事実なのでアクアを無視しつつ、それでも不満爆発、いや燃焼くらいでどうにか抑えるめぐみんと睨み合う。

「……」

ふと、こちらに向いている視線が一瞬動く。チラチラと盗み見るように、めぐみんはリーンを見た。

「？ なんだよ」

「……別に」

「いやさつきからリーンの方見てたろ」

「え？ 私？」

「見てません」

「いや見て——」

「見てません」

本当にどうしたのだろうか。偏った趣味嗜好はあれどこの変態パーティで正常な部類のめぐみんが今日に限って異様に頑なだった。

リーンか？ 反りが合わないのか、それとも他に何か気に喰わない要素があるのか。

「……」

「……」

……リーンもリーンで最初の人当りの良さから一転、今は何故かだんまりだし。

黙って見詰め合う少女ら二人。無性に気不味い。居心地が悪い。

え、何この空気。

どうすんだよ。何一つ進展しないし。これから細々と段取りも控えてるし。

「ね、ねえ」

「ああもお！ なんなんだよお前ら！」

「ねえねえつたらカズマ」

「うるっせええええ!! こっちは今なんかよく解らん板挟みでなあ!!」

「ゴブリン達が一斉に弓持って走って行ったんだけどこの後なんかするんだっけ？ ジンクロウとダクネスってば大丈夫なのよねこれ？」

「——」

そう、ここは戦場。事態は刻一刻と移り変わっていく。そして茂みの向こうの廃村では、ジンクロウとダクネスが絶賛戦いの真っ最中にある。

①番、第一段階の締め、多勢で押し切ろうとするゴブリン達にジン

クロウ達が粘り強く抵抗すれば、敵は高確率で飛び道具を使用すると踏んでいた。その予想は別に有り難くもないが見事に当たった。

だから爆裂魔法は、必ずこのタイミングで発動させなければならぬ。絶対に。

でなければ、いくらジンクロウでも……。

「めえええぐううみいいいんんん!! その顔に似合わん黒レースパンちい剥ぎ取られなくなったら爆・裂・魔・法を撃てえええ!!」

HURRY! HURRY! HURRY!!」

「なん!?! なんて知って!?!」

「いいからばやぐじろ」お!!」

「わ、解りました! 解りましたから! ごめんなさいすぐやりますからあー!」

なにやらものつそい苦労して、やっとのこと、めぐみんの爆裂魔法が廃村の中央——つまりは、ゴブリン集団の背後へ炸裂。

村の中は一気に瓦礫と砂塵の煙幕で満ちた。

「ぶっは?! ごっふ?! げっほげほ?!」

「ごっふ?! こ、これじゃ何も見えないよカズマ!」

「ごっほごっほ! だ、大丈夫、えっふえっふ! 敵感知スキルで位置関係はバッチリつぶはっ! そ、それより急いでめぐみんを隠すぞ!」

「……」

涙と鼻水と涎を撒き散らしながら盛大に汚らしくむせるアクアを後目に、あらかじめ集めておいた落ち葉だの枝葉だのを倒れ伏しためぐみんに被せていく。

「……ホントに一発撃ったら魔力切れなんだ」

「……悪いですか?」

「んー、まあ良くはないけど……親近感湧くかも」

「……そうですか」

(ホントなんなのこの空気。ジンクロサーン、タスケテ)

めぐみんを埋め(隠し)終えたら、いよいよ時間との勝負。

茂みを飛び出して村に走り込む。近寄って行けばこの土煙の中でもそれは見えた。

ぽっかりと空けられた半球状の丸い“穴”。爆裂魔法によつて穿たれた巨大クレーターが。

「リーンは櫓の支柱を斬ってくれ！ どれでもいい、とにかく太い柱全部だ！」

「了解！」

「アクアはこの場で待機！ アークプリーストのカンストステータス期待してるぞ！」

「むふふーん！ カズマもようやく私の魅せ方つてものが解つてきたみたいね！ まっかせなさい！」

事前に打ち合わせた通り、指示を聞くやリーンは駆け去っていく。自分も自分の仕事をしなくては。

「バインド！」

声と共に、宙へ放り投げたロープが独りでに動き出す。狙いは、こちらから見て穴の対岸に建つ物見櫓の頂点。見通しが最悪のこの状況でも問題はない。何せ櫓の上には、打って付けの目印がある。

見張り役のゴブリンが、敵感知スキルで一目瞭然だった。

そのすぐ傍の、物見台の縁にロープが結び付いて鉤が食い込む手応え。

「いよしー！」

櫓のゴブリンが縄を切つてしまえば全て御破算だ。しかし、そんな暇は与えない。

リーンは既に櫓の根本に到達していた。

「『ブレード・オブ・ウインド』！」

煙る景色の向こう。薄く見えた碧いマント、そして魔法の詠唱。準備は整った。

さあ来い。

「変態聖騎士ー!!」

「んほおおお！ なんとという罵倒!!」

残念な雄叫びが煙幕の向こうから聞こえてくる。ぶっちゃけ聞きたくもないし知人だと思われたくもない気持ち満々だが、今この時に限ってはまさしく千載一遇。待ち侘びた到来というやつだった。

「グアッ！」

「グルルルル！」

「ギヤツギヤギギギ!!」

白銀の甲冑姿の癖に猛烈な速度で駆け抜けるダクネス。その女騎士の背後には夥しい数のゴブリンが地鳴りを響かせながら追い縋ってくる。

ダクネスが所持しているだろう魔石のレンズには『デコイ囿』の魔法が宿っている。ダクネス本人がスキルを使えば面倒はないのだが、筋力と耐久力を鍛えることにのみ心血を注ぐマソヒストダクネスにその辺期待などしてない。

重要なのは、ゴブリンの魔法抵抗力の低さだ。モンスターの中でもより獣に近い奴らは、ものの見事に囿スキルの誘引に引っかかってくれた。

「真っ直ぐ突っ込めえ！　ダクネス！」

「ぬううおおおお!!」

ダクネスは穴へと飛び込んだ。自然、それはゴブリン集団も同じ。晴れ始めたとはいえ未だ視界は悪く、何より全力疾走で勢い付いた集団が急に停まれる筈もない。

先頭の数匹が穴の存在に気付いたようだがもう遅い。一塊の団子、あるいは雪崩のようにゴブリン達は播鉢状の穴へ次々に滑り落ちていく。

しかし、それくらいではゴブリンを無力化したことにはならない。穴はある程度深さがあるものの断崖のように切り立っている訳でも、穴底に棘や水を満たしてある訳でもない。

「出番ですアクア先生ー!!」

「シャオラア!!」

(いつも通り) 女神らしからぬ気合いを発して、アクアがロープを引っ掴む。

「リーン！　アシスト頼む!!」

「任せて！　『ウインド・ブレスト』！」

腐っても女神であるアクアのカンスト筋力、そしてリーンによる中

級風魔法の後押し。

支柱を切断された櫓が、鉤縄に引っ張られ、さらには突風に煽られたことで、木片を飛び散らせ盛大に軋みを上げながら見る間に傾き――遂に倒壊する。

ゴブリンが大挙するめぐみん手製の大金の底へ。

「ガウ!」

「ギャアアアアアア!?!?」

倒壊した櫓はもはや櫓ではなく、材木の瓦礫である。

それが全部余さずゴ布林集団へと降り注いだ。

木材の廃棄場のような有様になった穴の縁から目当てのものを見付けた。

「ダクネス! 大丈夫か!」

敵を罫に嵌める為には、タイミング的にどうしてもダクネスごと瓦礫の下敷きにするしかなかった。ダクネスの耐久性……強度を考えれば無事の筈だが。

木片の中から手甲を嵌めた腕が出てくる。それは拳を作り、次いで親指を立てて見せた。

「し、心配するな。なんとか生きてはいるさ……」

「! 待ってろ、今引つ張り出してやるからな……!」

「あ、お構いなく。瓦礫の下敷きにされるなどという絶体絶命の危機がこれほど気持ちいいとは思わなくてな。カズマ、是非にもう一回頼めるか」

「うるせえ変態!! まだ段取り残ってんだから早く出てこい!! 『バインド』!!」

腕にロープを絡み付かせ、力任せに引っ張った。

とはいえ、甲冑を着込んだ人間一人を大量の木材の下から引き摺り出すには、最弱職業冒険者カズマくんの筋力ステータスでは到底無理である。

アクアを動員して、心底名残惜しそうなダクネスをやつとの思いで釣り上げた。

「だあ！　ぶっつはあはあはあ！　ああああきつつい！　クソ重いんだよ変態ドM騎士の癖によお!!　つつはあぜえ！　はあつ、はあ！」
「ど、ドMと体重は関係ないだろ！　まったく、お前は どうしてこう、私の悦ばせ方を心得てるんだカズマ……！」
（息切れし過ぎてツツコム気も起きねえ……）

くねくねと身悶えする聖騎士（笑）を早々に見限り、急いでその準備に走った。

といっても、別段大した手間ではない。近場に転がっている酒瓶を、手当たり次第に穴の中に放るだけだ。

安物の瓶は材木、あるいは材木の合間から這い出そうとしているゴブリンに命中するや、粉々に砕け散ってくれた。盛大に中身の酒をぶち撒けながら。

「ひひひ、さあて細工は流々つてやつだな……」

ここまでの大立ち回りを演じて、全てのゴブリンを仕留め切ることもなどできない。現に今まさに、生き残ったゴブリン達が次々瓦礫の下から姿を見せている。

だからこれが大詰め……いや、これこそが止め、だった

「それではリーン先生おねげえしやす」

「ほ、ホントにやるの……？」

「当たり前じゃござんせんか。やらないとこつちがやられちまいますからねえ。ほら急いで急いで、ひいーひひひ」

「う、うん、やるよ。やるけどさ、お願いだからその顔と喋り方やめて」

まるで良心を五寸釘でめった刺しにされたような顔でリーンは涙目になった。

「ふ、『ファイア・ボール』!!」

そしてまるで何か人として大切なものを振り捨てる覚悟を終えたかのような虚ろな目で魔法を唱える。

リーンの掌中に現れた拳大の火球。それが弾かれたように、穴の中へと射出された。

今日は快晴。日差しは強く気温は高め。秋季に入り湿度は低く、空っ風が程よく吹いている。

武人だった。

「どら、次でケリにしようや」

「……」

応えに言葉は要らず。

斧の穂先を脇構えに引く様が、何より衰え知らずの戦意を物語っていた。最期の、その瞬の切先まで戦い抜くと、魔物の戦士は言ってくれた。

こちらは上段。重心位置は体の真中。行きも退きもせぬ、つまり待ちの姿勢。

意図は過不足なく相手へ伝わったろう。

——来い

「グウルルウオオオオオオ!!」

大気を蹴散らさんばかりの咆哮。気の塊が真実我が身を打つ。

生半な気組みで挑めば忽ち肝を潰し竦み上がり、為す術も無く、その肉厚の戦斧で頭から股座までを両断されただろう。

どうしてそのような無様が晒せよう。

命を削って今まさに、正面から真つ直ぐ、土が地を踏み鳴らして向かってくる。討たれた同胞の為、仕えた主への忠節の為、そして己が戦人としての矜持を果たす為。

信念の下に何者かを殺す。そして同じく、何者かによって殺される。その覚悟。

それを前に、どうして不覚を晒せよう。

応える術はこの手に一つ。

「――」

「オオオオオオオオアアアアアアアアアアアツツ!!」

間合が接する。体格、長柄という距離の優越を持った相手の間合へ。

敵の武器は、こちらの武器よりも確実に早く到達する。考慮の余地もない事実、眼前の現実として。

そう、一目瞭然なのだ。敵の間合、敵の武器の間合、敵が武器を振るうその始点が。

そこへ合わせる。

ほんの半歩、膝を抜く独特の脚捌き、「縮地」と呼ばれる最速の前進瞬発運動。

対手の武器、槍斧の刃圏は広大だ。己が手にしたこの刀の刃及ばぬ遙か遠間から一方的に斬り付けることができる。その優位性は語るに及ぶまい。

であるが故に。

懐^ミだけは、どうすることもできない。この機、武器を振るうという意を定めてしまったこの瞬機、この至近距離に入られたなら。

長物の利は死ぬ。

我が剣が利を得る。

斬

肩口から鎖骨、肋骨を断ち、心から肺、種々の臓腑を裂いて脇腹より出でる。

その一刀は生命を活かすあらゆるものを断ち切った。

斧槍を取り落とし、巨軀が膝を付く。ぐらりと巨樹の倒木めいて崩れようとしたその直前、

「血ノ、におい……オマエ、か……ラ……」

大鬼は、自らが作り出した血溜まりに沈んだ。

意味も薄い血振るいを済ませ、刃を鞘に仕舞う。

「……で、あろうな」

今更言われるまでもない。

文字通り身に沁みて……この身には疾^とうの昔から血臭が沁み付いて離れぬことなど。

草叢に隠して埋めためぐみを掘り起こし、リーン、めぐみん on
ダクネス、アクアと自分が改めて集合した頃。

「おうい」

「！ ジンクロウ！」

鞘に納めた刀を担ぎ、呑気に片手を上げてゆるゆると、青年が一人歩み寄ってくる。

衣服の随所に着いた汚れ。それが乾き始めた血なのだと見て取った時には、リーンは駆け出してジンクロウに跳び付いていた。

「ジンクロウ!? 怪我したの!？」

「ん？ ああ、心配すんな。こいつあみな返り血だ」

「そ、そか……よかったあ」

「くかか、御苦労だったなリン」

「うん……ほんつといろんな意味で疲れたよー。まあジンクロウほどじゃないけどね……えへへ」

ジンクロウは微笑み、リーンの肩をぽんと一つ叩いた。

そうして次に、その笑みはこつちを向く。

「首尾はどうだい、御頭おかしら」

「うつせうつせ。煽てたつて効かないつての。人が苦労してどうにかこうにか凌いだつてこと分かつてんのかコノヤロー」

「おいおいそう邪険にすんない。遠目に見えちやいたが、やはりお前さんの見立てで結果が聞きてえのよ。な？」

「はあ、どつかの誰かの無茶振りの通りにしましたけど何か？」

溜息混じりの皮肉がこの飄々とした男にどれほど通じるんだか。そんな呆れと諦めを内心で思った。

「見事だ」

「え」

返ってきたのは達者な軽口ではなく、一言。神妙というか、真剣と
いうか。

「流石は佐藤和真よ！」

「うわっぷ、ちよ、だからっ、頭こねんな！ 脳味噌がジェラートになるー！」

「かっはははははははー！」

抗議の声など聞いてはくれない。ジンクロウは俺の頭をこしやご

しやと撫で回し続けた。

「ふふ、ジंकクロウ相手ではカズマも歳相応か」

「だよなー、さつきまでゴブリンに嬉々としてお酒ぶっ掛けてた人は思えない」

「まあ腐つても我々のリーダーア。このくらいの褒賞はあつても良いでしょう」

「ああもお！ 誰か止めろよ！ 誰か、だから、あの、そんな微笑ましいもの見るような目で見んな!!」

頭を撫でられて喜ぶような年齢ではないし、そんなキャラでも断じてない。ないのだが妙に気恥ずかしい。

そしていつかと同じだった。可笑しな話だ。何故か撫でられてる自分より、撫でてる本人が……ジंकクロウが一番嬉しそうなんだから。

一頻り頭をぐしゃぐしゃにされた頃によく解放される。今日一日の労働の疲れに、もう一つおまけがプラスされた気分だった。

「はい撤収。もう帰る。さつきと帰る。一刻も早く帰る」

「ああ、日も随分落ちてきた。急ぎ仕度をするぞ。ゴブリン共の首級はどうする」

「基本、討伐したモンスターは冒険者カードに記載されるが……」

「……今回のこれ、どうなんだろう」

リーンが呻くように言つて、未だに炎が燻る穴を見た。

いろいろと細工を働いたのはカズマだが、実際に穴に火を入れてゴブリンを燃やしたのはリーンである。となれば経験点は丸つとりーンに加算される筈だが。

「皮算用は後でもよかろう。なに、なんとなれば我らの報告をギルドが調べれば済むことよ」

「それもそうか。んじやあ、とりあえず燻つてる火を消さないとな」

半球状の穴に綺麗に収まっているとはいえ、うっかり森に燃え移つて山火事にでもなれば大惨事だ。

「井戸はあったが枯れておつた。沢までは徒^{から}で半日ほども掛かろう」

「ええ、マジっすか……つっても俺の『クリエイト・ウォーター』じや

全然足りないぞこれ」

「私も手伝うけど、うーん残りの魔力でこの広さを消火できるだけの水かー……ちよつと怪しいかも」

「……」

まともに魔法を使える人間との生産的な会話に地味に感動を覚えてしまった。

なんて馬鹿なこと考えてる場合じゃない。こんな山奥で夜になつてしまえばそれこそ身動きすら取れなくなる。

「ああ！ はいはい！ わたしわたし！ 私がやる！」

「んだよアクア。まさか例の宴会芸で消そうってんじゃないだろうな」

「違うわよ。あれはあくまで観衆に向けた芸術であつてこんな無粋な用途じゃ使わないに決まつてるでしょ」

「知らねえよお前の芸人魂とか」

「そうじゃなくて、カズマってば私が何の女神なのか忘れてるんじゃないの〜?」

「宴会芸の」

「ちつがうわよ!! 水う! 水の女神!」

「そういえば、初対面の時そんなようなことを言つてたような言つてなかつたような」

まあ名前からして水に関わりがあるのは明白だ。こいつが本当に女神なのかどうかは日々怪しくなっていくが……。

「ホントにできるのかよ。結構な勢いで燃えてるぞ、ゴブリンとか木材とかゴブリンとか」

「この程度の炎私にかかれば種火よ種火。ふふんっ、いやだわ今日の私ってばヒキニートなんかと比べ物にならないくらい何から何まで大活躍じゃない!」

「ふーん」

一抹の不安がないではない。なにせアクアだ。この駄女神だ。

しかし、他に方法もないのは事実。俺とリーンで手分けしても、完全に消火するには丸一晚くらい掛かるだろう。何より本音を言えば、

とつとと帰って寝たかった。今となつては馬糞臭いあの馬小屋が恋しくさえあつた。

だから。

「わかつた。任せたぞアクア」

「任されたわ！ 見てなさい！ 水の女神アクア様の本気……！」

後悔つて、後にしかできないから後悔なんだなっておもいましたまるる

「セイクリッドオオオオオオオオオオオオオオ!!!」

「あ？」

「へ？」

「え？」

「ん？」

「は？」

晴天の空が暗く淀む。灰色の雲が頭上を覆う。

光と共に周囲に漂う水、水、水。それらは余さず残さず天上の雲へと寄り集まつて。

「クウリエイトオオオオオオオオ!!!」

「あ、アクア？ アクアさん？ ちよ、ま」

巨大な、それはそれは巨大な、村一個よりもさらに巨大な水の塊となつて。

そして。

「ウウウオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオ!!!」

「「「「あああああああああああ?!?!?!」」」」

「あーあ、こりやひでえ」
落ちてきた。

降るでもなく、注ぐでもなく、空から水が落ちてきた。

結果から言えば、大金星。そう言つて差し支えあるまい。

小鬼の軍勢を残らず平らげ、軍団長たる大鬼もまた打ち取った。冒険者稼業に就いてほんの数か月。新米に毛が生えただけの徒党にしては出来過ぎた成果であろうさ。

「そう思わんか、なあリン」

「思わない」

「ははは、こいつぁ手厳しいな」

「そりゃね。山の上から麓まで洪水で流し落とされちやつたりすると誰でもこうなると思うよジンククロウ」

気付けば麓にいた。急流の川下りよりさらに激しい濁流で押し流され、往路半日の道程が復路は一瞬であった。

リーンと、そして咄嗟に引き寄せためぐみんを腹に乗せ、仲良く三人大きな水溜まりに横たわっている。

甲冑を着込むダクネスは下手を打てば溺れ死ぬ危険すらあったが。

「水責めっ……ふ、ふひひ、これもなかなか……」

何の心配も要らぬようだ。

「こんの駄女神があああああああ!! おのれは毎度毎度話にオチ付けないと気が済まんのかクソビッチがコルアアアアアアア!!」

「良かれと思つてやつたんだもん！ 良かれと思つてやつたんだもん！」

「限度があるわああああああああ!!」

そして我が徒党の頭と酒豪の女神は元気に仲良く大喧嘩の最中。

「まあ、うん。誤解というか偏見というか、そういうのは解けたかも」
「うん？ おお、そうであったそうであった。で、どうだ。この徒党は」

「うん！ 二度と組みたくない！」

「私が言うのもなんですが、賢明な判断です」

神妙な顔で頷くめぐみんを、しかして笑うに笑えぬこの有様。

それこそ笑うしかあるまい。

24話 袖振り合うも他生の縁

アクセルからも程近い東の森を抜けた先、台地の上にその廃城はあった。

生者が絶えて久しい伽藍洞の大広間、城主謁見の間にある豪華な椅子にそれは坐していた。

黒い騎士甲冑。椅子に腰掛けていてもなお分かる偉丈夫。

「魔王様より賜った強化ゴブリン部隊が全滅しただと」

驚愕を滲ませた男の声は、鎧の掌から発せられた。本来胴体の上に据わっているべき頭部が、兜を被って男の手の上に収まっている。

首無し騎士デユラハン。

死霊、屍鬼、時に妖精の一種に数えられる存在。しかし何れも同様にある一つの事象と関わり深い。

即ち、死。死に纏わり、死に囚われ、死を司る。

そしてこの男こそ、この世界の人種の敵。魔王軍幹部が一、デユラハン・ベルディアであった。

「ふ、駆け出しの街と侮ったわ。まさか上級冒険者パーティすら塵殺するゴブリン・ウォリアーを倒せる者がいたとは……あの預言、下らん御伽噺かと思っただが。満更出鱈目でもないらしい」

首無しの騎士が立ち上がる。

傍らには巨大な諸刃の剣が立て掛けられている。刃渡りだけで大人の大人ほどもありそうなの巨剣を掴み、苦も無く肩へ担ぎ上げた。「ならばこの俺自ら出向き、**光**とやらを確かめてやる」

黒い瘴気、怨念と憤怒で彩られた戦気を全身に漲らせ、暗黒の騎士が今動き始めた――

「つ、ついでに、ウイズの様子でも見に行つてやろう。ついでに、ああ、ついでだ。アクセルで店を開いたとかいう話だし、いや偶然今思い出

したんだけどね。ぐふ、ぐふふふ……さあ、今回は何色だろうなあ！
久しぶりに目の保養と行こうかなあ!! ぐふふふはははははははは
!! ついでだけでも！ ホント他意はないけども!! ぬっはははは
ははは!!」

結局、あのゴ布林共の正体は今以て判っていない。ギルド側も引き続き調べを進めるとのことだが、はてさて事が明るみになるのも何時になるやら。

気にならぬかと言えば嘘になろう。とはいえ我が身はしが祥ない冒険者剣士。真つ当な堅気衆のように定まった生業があるでもなし、糊口を凌ぐ手立てと言えば雑事雑役が関の山。

化物魔物の討伐征伐？ なるほど確かにそれこそは冒険者稼業の花形に相違あるまい。

切った張ったに身を置いてこそ冒険者の本懐、とは、ダストだかキースだかの言であったか。いや、それともカズマのボヤキであったか。

そうした思惑が、解らぬではない。むしろ己にしてからが刃金を振るうは馴れ親しんだ日常行為であった。

それ故に、今の己を見たならばダスト辺りは小言と悪態を吐いて寄越すだろう。

「お〜い、どんなもんだー冒険者の兄ちゃん」

「おう、今に済む」

釘を打ち付けること数度。我ながら見栄えも悪くない。修繕の済

んだ野地板に土を塗り込め、仕上げに赤い瓦を押し付けて葺く。
ここからならばよく見える。アクセル、赤い瓦葺の屋根が彩る美しい街並みだ。

屋根の修繕を終えて、大工道具一式を抱えて梯子を下りる。
そこには、禿頭を撫でるパン屋の店主が待ち構えていた。

「腐った基礎板は鋸で切つて、手当たり次第糊で埋めて板を打つた。ま、向こう数日は晴れる。固まっちゃえば雨漏りもしなくなるであろう」

「いやいや十分だありがとう。すまんねえ、溝さらいのついでに屋根の修理までさせちまって」

「なあに、いいつてこと」

「あ！ お疲れ様だねえお兄さん！ よかったらお茶でも飲んでつて。今ちようどエピが焼き上がったとこなの」

「お、いいのかい。すまねえな」

店の奥から恰幅の良い奥方が、茶と奇妙な形のパオンを盆に載せて運んでくる。

表に据えられた客用のベンチに腰掛け、出された膳に両手を合わせた。

まさしく麦の穂のように幾重にも別れた丸い生地。その中にベーコンを丸め込んで共々焼いている。

齧り付く。表面はしつかりとした歯応えだが、中はふっくらと歯ざわりも優しい。中に蓄えられていた蒸気が口から鼻へと抜けて、バターと肉の香ばしさが一杯になる。

ものの三口で平らげ、紅茶を啜る。

「うむ、こいつあうめえや」

「だろろう？ 焼き立てのエピの味なら、うちはアクセル一番さ」

「かかかつ、ならば次は是非、己の仲間を引つ連れて邪魔させてもらおうぜ」

もう一度合掌して膳を返し、店を後にする。

力と血が湧くような心地。いい腹拵えになった。何せまだまだ仕事山積みなのだ。

街の溝さらいと一口に言っても、一人の冒険者が街中隈なく道を家々を廻らねばならぬ訳ではない。朝ギルドの受付で依頼『溝さらい』を受託した冒険者それぞれが幾らかに区分された領域を割り当てられる。この領域の多寡と清掃の出来栄えによって、固定の給金に少しばかり「色」が付く。

今日はその受け持ちがやや広い。無論、志願してのこと。

清掃業務の際に身に着けるお決まりの作業着姿、スコップと箒と鎌と工具諸々を背負子に担ぎ、今日も平和なアクセルに行く。

「あ、掃除のおじちゃん！ また果物買いに来てねー！」

「おお掃除屋の。この前は孫と遊んでくれてありがとうよ」

「掃除のおっちゃんだ！ なーなー今度また釣り教えてくれよお」

「この前はありがとよ掃除屋の兄ちゃん。御蔭で雨降りでも店先が綺麗なもんだ。また頼んだぜー！」

板に付くとはこのことだろう。うっかり本業を忘れてしまうほど。

当の本業はしかし、今は手を付けようにも付けられない。魔物討伐依頼は相も変わらず増える兆し微塵とてなく、かといって粹人を気取り無聊を託っていられるほど懐は暖かみを欠いた。

それというのも、痛手はやはり先のゴブリン退治。

最後の最後でアクア嬢が派手にやらかしてくれた。あの大水で廃村の炎が余すところなく消え去ったのは良いが、山を流れ落ちたそれが麓の村にまで達したのがいけなかった。

村の家々、そして住人に幸い被害は無かったものの、何と村の食い扶持と年貢を賄う麦畑を、丸ごと駄目にしてしまったのだ。

此度の依頼料、己とカズマの蓄財を賠償に当てた。加えて、あの大型ゴブリン。奴の首には3,000万エリスもの賞金が掛けられていたそう。近年各所の村々を襲い始めた新参の魔物とあって、額は控えめだそうだが逡巡の余地もない。

どうにか掻き集めた金で、こうして借金だけはこさえずに済んだのだった。

まあ当然、今や我が徒党は螻蛄おけらの集まり。その日その日も食うや食わずで、貧乏暇なしの習いに偽りなくこうしてせっせと働いている訳

だ。

今頃はアクア嬢を筆頭に、カズマやめぐみん、ダクネスも引つ張り出されて、子供ら四人新たな依頼をこなしているだろう。

湖の清掃だか浄化だか。まあ溝さらいと似たようなものか。

『汚染された湖の浄化』

アクアが持つてきたその依頼を終える頃には、もう日も暮れていた。街は帰路を急ぐ様々な人が行き交っている。あるいはそうした人々を店先から呼び込む商売人や酒場の活気で周りは溢れている。

この雰囲気は嫌いじゃない。夕飯は何を食べようかとか今日は奮発してちよつと良い酒飲もうかなとか、そういう何でもないことに胸躍らせて帰路に着く。素敵やん。

だから。

「おい！ 聞いているのか！ アクア様をこんな惨めな境遇に貶めて君は恥ずかしいと思わないのか！」

目の前で声を荒げる青年を見るともなしに見ながら、意識は夕飯の算段に勤しんでいたとしても自分に責められる謂われはない。と思う。

檻に閉じ籠るアクアを荷車で護送する途中、上等な甲冑に身を包んだこの青年に捕まった。なんでも自分と同じ転移者、転生者だとか。当然、というのも悲しくなるが、アクアが自分でこの世界に送り出した地球人の顔を一々覚えている筈も万に一つとして無く、名前も臍げで……みつ、まつ？ なんとたらさんと名乗っていたような気がする。「ふんっ、アークウイザードにクルセイダーの仲間か。おおかた彼女達の優秀なステータスに頼り切って君は碌に戦うこともしないんだろう。装備を見れば分かることだ」

(カエルの唐揚げもそろそろマンネリだなー。たまには野菜中心のメニューもいいかもなー。あ、ジंकロウの摘まみちよつともらおう) 毒と呪いで汚染された湖の浄化方法として、檻に入れたアクアを湖に漬けて置いた。するとあら不思議、ほんの七時間程度であんなに黒ずんでいた湖が透き通った清水に。その際、でかい鰐の魔物に取り囲まれ、檻ごとド突き回されたりしていたが、それも迅速な浄化の為の止むを得ない犠コラテラル・ダメージ牲である。

飲み水の清濁は人間にとって死活問題。珍しくアクアがアクア自身の手で世の為人の為になったのだ。

まあ、現在我々が無一文になったのはこの女の所為なので、称賛はしても同情心はない。

「君達！ もう心配ない。こんな男さつさと見限って僕のパーティーへおいで。大丈夫、君達は僕が守ってあげるから」

(焚火前でまたジंकロウと飲みたいな。あの渋い感じがいかにも荒くれ冒険者って気分が出てイイんだよな)

「……カズマ、ちよつと聞いてますか？ カズマってば」

「なんだよ。今俺は晩御飯と晩酌の計画で忙しいんだ」

つんつんと肩を突かれ、青年を後目にめぐみんの方へ首を巡らせる。一応声は潜めた。

「それ、せめて目の前の問題を解決してからやってください。あと晩御飯はお肉がいいです」

「ここらめぐみん。こここのところ肉料理ばかりじゃないか。ちゃんと魚や野菜も摂らないとダメだぞ」

「私はシユワシユワさえあればなんでもいいわ。皆が決めて。あ、突撃牛は食べたいわ。お刺身なんかもいいわね。あつ中華！ 中華にしましょうよー！」

「任せるんじゃないかねのかよ飲兵衛女神」

そしてメンバー全員揃いも揃って晩飯の事しか考えてないのかよ。その連帯感をほんの一ミリでもいい戦闘中に発揮してくれ。切実に頼むから。

「さつきからごちやうちやと。はっ、どうやら何も言い返せないみた

いだな。凶星を突かれて」

「カズマカズマ、なんだか物凄いドヤ顔し始めましたよ」

「うん、見えてる。見たくもないけど見えてる」

散々な言われようだ。ハイクラス職業のメンバーにおんぶにだつこなダメな奴。簡単に言うとなんかそんな感じに扱き下ろされてる。

アル中女神。爆裂狂い。ドM騎士。

こいつは知るまい。このぶっ飛んだ変態達と冒険するのがどれだけ冒険であることか。

「いや、あの、カズマも大概私達を扱き下ろしてますが」

さて置き。

「おい、置くなよパンツ泥棒」

それでも不思議なことには、怒りは然程湧いてこなかった。

いやイラつとはしてるけどね？ 転生特典の優秀な性能に頼り切りなのむしろお前じゃね？ とか色々な部分でイラつと来てますけどもね？

ただ、そういうイラつきだったり鬱憤だったりは、きつとどうつてことない。ちびちび酒を酌み交わして、愚痴の一つ二ついつでも聞ってくれる友人がいる。

ジンクロウ、あの剽悍な青年を思い出すと、なんだか怒る気も失せるのだ。

「おういカズー」

「あ」

噂をすれば、本人が。

汚れた作業着姿、種々の掃除用具を背負ったジンクロウが歩み寄ってくる。

「お疲れーっすジンクロウ」

「ただいまなのです」

「うんうんグッドタイミングよジンクロウ！ これで全員揃って酒場に繰り出せるわー！」

「今日も清掃業務か。重労働だったろう……いつもすまないな」

「おう、お前さんらも御勤め御苦労。あとダー公よ、その言い草ではま

るで我この街の領主でござい！ ってな風に聞こえちまうぜ？」

「んん、っ、いやすまん。妙な言い回しをしてみました。うん」

なにやら軽妙に笑って、そのままジंकロウは首を傾げた。

「で、こんな道のご真ん中でてめえら何をしてんだい」

「あーうん。それがさ」

改めて尋ねられてみるとなかなか説明に困る。要は道端で絡まれています、というだけの話なのだが。

「き、君は、もしかして僕らと同じ転生者なのか？」

「あん？ あー、どちらさんだい。カズの友達か」

「違います」

ノータイムでノーを突き出す。そんな勘違いをされては堪ったもんじゃない。

こつちの素気無い態度に苦笑して、ジंकロウは青年に向き直った。

「俺あシノギ・ジंकロウという。よくは分かんが、うむ、その転生者というやつらしいぞ」

「僕は御剣響夜。知つての通り、君達と同じく魔王征伐の使命を受けてこの世界にやって来た」

「ほう、そいつあ御苦労なこつて」

聞きようによつては小馬鹿にしたような物言いだが、たぶんジंकロウのことだからわりと本気で感心してたりするんだろう。

目の前の青年に、そんな内実が理解できる筈もなく。

「なん、君は、ふざけてるのか!？」

「ん?」

「僕らは世界の危機を救う為にこの世界にいる。だというのに、君のその恰好……はっ、溝さらい？ まさか、未だにそんな雑用をやっているのか？」

「そうさなあ、そろそろ四月よつきにもなる。すこつぷ捌きもなかなかに上達したもんだぜ。かかかっ」

モンスター討伐なんかの傍ら、ジंकロウはわりとコンスタントに溝さらいや清掃なんかの依頼を受け続けていた。街の人と顔を合わ

せて世間話しながら掃除をするのが性に合つてるとかなんとか。

まあ冒険者つぼくはない。血沸き肉躍るファンタジー！ とは遙かに遠い地味いいな作業だ。

でも、だからといって。

「そんな下らない仕事に逃げて恥ずかしいと思わないのか！」

「？ とは、どういう意味だい」

「とぼけるな。モンスターと戦うのが恐くて、安全な街の中でやり過ごせる楽な仕事に逃げてるんだらう君は！」

「は？」

「あ？」

下らないだの、楽な仕事だの、赤の他人の、お前みたいな奴にジंकロウを貶す権利がある訳ないだろ。

今の今まで何も感じなかったのに、その瞬間全身がカツと熱を持った。血管に血が過剰に巡って、腹の底で何かがぐつぐつ煮える。

ていうか、それはどうも自分一人ではなく。

いつの間にか前に進み出ていた小さな紅い影。めぐみんが、杖をその辺に放るやなんかすごい光り始めたんですけど——!?

「暗黒に染まれ我が真紅。『エクスプロー——』」

「ああ!？」

「だああああああー!!? 待たんかいロリっ子お!!?」

「めぐみん待ってお願い待ってごめんなさい待、つでえええー!!?」

「街中は不味い!! せめて外で……いや私に來い!! ズドンと來い!!」

「さあさあさあ!!」

突然のめぐみんの暴拳に、ジंकロウが羽交い絞めに、俺がその口を手で塞ぎ、ダクネスは真ん前に陣取り、アクアは腰抜かして石畳を這った。

「むぐむむんぐむ」

「もう詠唱しないなら手をどかしてやる」

マジトーンで言うと、いかにも不承不承といった態度でめぐみんは頷いた。

視線で確認すると、ジंकロウも頷いたので暴走娘の口元から手を

引いた。

「なんちゆうことすんだよこの爆裂狂」

「別に何も不自然なことはしてないです。カズマだって怒ってるじゃないですか」

「え？ うん、まあ、そうだけど……や、だからってお前こんな街中で爆裂魔法とか危な過ぎるだろうが。関係ない人だって周りに大勢」

「大丈夫ですよ。短縮詠唱の上に魔力も絞ったので、精々荷馬車と私達が吹き飛ぶ程度です」

「何一つ大丈夫じゃねえよ」

うん？ 短縮詠唱？

なんか今聞き捨てならないことをこのロリっ子が零したような。

それを尋ねるより早く、地面にそつとめぐみんを下ろしたジンクロウが、その場に屈んでめぐみんに目線を合わせた。

「どうしたどうしためぐ坊。賢いお前さんらしくもねえ」

「……」

笑みを向けるジンクロウからめぐみんはそっぽを向く。

「……ジンクロウが何も言わないからです。あんなに好き勝手言いたい放題で……ジンクロウが本当は凄い人だってこと、なんにも知らない癖に」

「ふうん、そうか……ははは、そうかそうか」

尖がり帽子の上からぼんぼんとめぐみんの頭を撫でて、ジンクロウは笑う。

そうだ。さつきからジンクロウは笑ってばかりで、この甲冑男の言葉に気分を害した素振りすらない。

「そうとも。笑って済む内が華よ……とはいえ、だ」

ジンクロウは肩を竦める。そして目の前の甲冑くんに向き合った。

「どうも己が気に喰わぬらしいな」

「——あ、そ、そうだ。君みたいな臆病者のところにアクア様を置いてはおけない！」

「こいつやっぱり消し飛ばします」

「ロリっ子ステイ」

直接殴り掛からんばかりの勢いのめぐみんを今度は俺が羽交い絞めにする。

まあ、この後の展開は簡単に読める。

勝負をして、勝った方がアクアの所有権を得るとかそんな感じだろう。

「あの、私地味に物扱いなんですけど……」

いや初めから物扱いです。WEB版でも小説版でもアニメ版でも。

……変な電波を頭から振り払う。

ともかく、結果は目に見えてる。もうなんなら今からお風呂入りに行けるレベルで。

極上の武器を持った素人の青年と、スコップを持った年齢不詳戦歴不明（数えられない的な意味で）の剣士ジンクロウ。

お前が馬鹿にした男の強さを思い知るがいいわ。

「カズマがまた邪悪な顔をしています」

「うーん、なんだか子供っぽくて私好みではないな。ふふ、まあ微笑ましいが」

「ジンクロウ。早く終わらせてよー。私お腹空いたー」

外野のヤジなんて聞こえていないのか、青年が腰の剣に手を伸ばす。

「勝負だ。勝った方がアクア様と旅する権利を得る！」

「ほう。勝負」

「勿論、剣で——」

剣の柄を掴み、一気に引き抜こうとして——止まった。

いつ動いたのか、いつあんなに近付いたのか。

ジンクロウの手が、青年の剣の柄頭を押さえ込んでいた。抜剣すら許さず。

「まあまあ落ち着きな、お若えの。ここは天下の往来だ。御腰の立派なもんは大事に仕舞って置こうや」

「……………へ？」

返事が遅れることたつぷり三秒弱。どうやら青年はたった今、ジンクロウの存在に気が付いたらしい。

それほどに不意を衝かれていた。

「飯だ。飯にしよう」

「え？」

居直ったと思えば出し抜けにジंकロウは言った。

思わず聞き返した俺を見て頷く。

「腹が減っておるから皆苛立つのよ。めぐ坊を見な。今にも喰らい付かんばかりではないか」

「ちよつ、人を食いしん坊みたいに言わないで欲しい！」

「いや食いしん坊だろ。間違いない」

「なにをー!？」

「かっはははははー！」

愉快愉快と一頻り笑って、ふとジंकロウは青年を見た。

「お前さんもどうだ」

「へ？ ぼ、僕も、ですか？」

「はあ!？」

「無論お前さんだよう。ああ、連れ合いが居るんなら遠慮なく一緒においで。良い店を見付けてな。くくく」

「ちよつ、何言っただよジंकロウ!？」

「いいじゃねえか、カズ」

こちらの抗議なんかどこ吹く風。

いつも通りの剽悍さで、男は唄うように言った。

「袖振り合うも他生の縁、ってな」

25話 酒飲みやどうにかなるもんさ

目抜き通りから路地へ入り、建物が押し合い圧し合うような狭い袋小路にその店はあった。

行燈の仄かな灯が暗い小路の中でまるで道標のように我々を出迎える。

「いらっしやい」

扉を開くと、柔らかな声が掛かる。カウンターに立っていたのはこの女店主だ。歳は三十がらみ、などと本人は言っていたらうか。己の見当が爺の節穴であることを差し引いても、もつと若い。もつと幼く見える。小造りな顔立ち、特にその、甘く垂れた目尻が、童女のような印象を齎した。

淡い青のロングスカートに前掛けをして、編み込んだ黒髪を纏め上げ、それを頭巾で覆っている。それは夜の酒場より、昼間の定食屋こそ板に付いた装いとも思えた。

事実この店は、昼に食堂も商っている。

「あら、ジンさん。まあ、今日は大勢で」

「すまねえな。座敷は空いてるかい？」

「ええ。どうぞ」

奥は十畳ほどの板間の座敷になっている。

我が徒党五人、そして新たに三人を加えなかなかの大所帯だが、思いの外に収まりもよく全員が腰を落ち着けた。

「じゃあ先に、お飲み物はどうなさいますか？」

「ああ、エールを六つとオレンジジュースを一つ、それから一本浸けてくんな」

「いつもの、ですね」

「かかつ、早速覚えられちまったな」

「ふふふ、少しお待ちくださいいね」

注文を受けて、ぱたぱたと女将は奥へ引っ込んだ。

「……ジンクロウ、よくここ来んの？」

「いんや、常連気取れるほどじゃねえさ」

「その割には気安い感じでしたが」

ぶつきらぼうにめぐみんが眩く。何を勘繰っておるのやら。

どうもこの娘の目に己は稀代の女誑しのように映っているらしい。

そうこうする間に両手に硝子杯を持った店主が現れ、卓に置いていく。

「お待ちどうさま」

「はいはい！ エールこっちこっちー！」

「さあさあ、お前さんらも取れ。ああめぐ坊はこっちだ」

「そして私だけナチュラルにオレンジジュース……」

目敏いボヤキに聞こえぬふりをしつつ、女将を手招く。

「鴨鍋を二つ。それから焼き物、蒸し物を一通り頼む」

「はい、お鍋がお二つと、焼き……あ、そうだ。実は今朝採れた筍を灰汁抜きしたんです。よかつたら」

「おお、そいつあいいねえ。調理は任せる。二皿ほどこさえてくれ」

「はあい」

注文を終える頃に折好く熱爛も上がった。

アクア嬢が『待て』し続けるのもこの辺りが限界であろう。

「では、親睦会といこうじゃねえか」

乾杯の音頭を執ると、おずおすと杯が掲げられた。

店を訪れてから、いや店への道すがらも、妙に一同は静かだった。

間合を量りあぐねているのか、出会い方が悪かったか、初対面同士が訳も分からぬまま飲み連れ出され困惑しているのか。

まあ全部であろう。

この場に漂う不味い空気など知らぬ存ぜぬと、アクア嬢は元気良く一気に酒を飲み干していた。

「たっはああああ……！ この為に生きてるわああああ……！」

「おっさんか」

「ちよ、サトウ・カズマ！ 女神様に対して失礼だろう！」

「いやどう見てもおっさんだろ。よく見てみ、仕事上がりの中年サラリーマンがそこにいるから」

「……どう見ても女神様だ」

「今ちよつと言ひ淀んだな？ やっぱりお前もおっさんだと思つてんだろー！」

「お、思つてない!! 断じて思つてないですからねアクア様!!」

「んえー？ べつつにーどうでもいいわ。すみませーん！ お代わりおなしやーす！」

心底興味も薄く、アクア嬢は空の杯を振り回した。今あの娘の両目には酒しか映つていない。

アクア嬢の素気無い返事に青年はがつくりと肩を落とす。

「まあまあツルさんよ。そう気を落とすな」

「ツ、ツルさん？ えつと、僕ミツルギです……」

「おおすまんすまん」

ミ……ツル……青年は二人女子おなごを連れて来ていた。緑の髪をした剣士の方はクレメア、桃色髪の方はフィオと名乗っていたか。

最初こそ警戒心も露に、青年の後ろでこそそこそこちらの様子を窺っていたものだが、同じ卓を囲み酒にも口を付けた今、気を張るのも馬鹿らしくなったようだ。近くに座るめぐみんやダクネスと姦しくも世間話に花を咲かせている。

「へー、めぐみんちゃん紅魔族なんだー！ あたし初めて会ったよー！ うちの魔法使い自体いらないから余計に新鮮かも。あはは、有名人に会えたみたい」

「べ、別に有名という訳では。ま、まあ！ 我が魔道の才は確かに紅魔族随一！ 畏敬と尊敬にひれ伏してしまつても無理からぬことでしょう！」

「キヤハハハハ！ なにそれウケるー！」

「ウケる!?!」

「クレメアさんは剣士なのだろう。是非立ち会つて(斬られて)みたいものだ」

「やー私なんてぜんっぜん。ダクネスさんはクルセイダーでしょ？ ステータスだつて私なんか足下にも及ばないつて」

「そんなことはないさ。数字は数字。大事なのは(痛め付ける)テクニクだ。私で良ければいつでも練習台になろう」

「ダクネスさん……ありがとう」

流石は女子衆。頭の固い男共とは違い、ああしてすぐに打ち解けられる柔軟さは見習うべきであろう。多少の擦れ違いがないではないが。

店主が小さな焔炉を二つ、卓に並べて置く。次に蓋をされた土鍋をまた二つ、その上に据えた。

「煮えるまで少しお待ちください。あ……ジンさん、同じものでいい？」

「おう、あんがとよ。騒がしくてすまねえなあ」

「ううん、賑やかで楽しいわ。うふふっ」

柔らかに笑むと、空の徳利を下げ、店主が調理場へ戻る。

不意に、じいところちらを見るカズマに気付く。

「なんだい、カズ」

「いや、前々から思ってたはいたけど、ジंकクロウの年齢不詳具合がさ」

「あんだそりや」

「酒の飲み方が様になり過ぎってどうか。あと『いつもの』が通じるのが羨ましい割と本気で」

「へっ、執拗しつぱつこく通つてりや、その内に店の主人がうんざりしてくんよ。『おいおいあの貧乏剣士がまた来やがった。今晚も独りさもしろく酒を啜るに違えねえ……それ見ろ！』ってな具合だ。ははは」

「もお、ジンさんったら……」

気付けば熱燗を布巾で包んだ女将が来ていた。困ったように眉尻を下げ、微笑を浮かべる。

徳利を卓には置かず、女はそのままこちらに注ぎ口を向ける。こちらも御猪口を差し出した。

「そんなこと思ってますせんよ。鼻屑はなぶしにしてくれて嬉しい、っていつも言ってるじゃないの」

「おや、そうだったかい？ いったか、相伴が過ぎて酔っ払ったお前さんから『飲んだくれ剣士はとつとと帰れ！』などとキツうく御叱り頂いた気がするんだがなあ」

「あ……あの時は久しぶりで飲み過ぎて、ジンさんまで深酒しないよ

うにつてつ……もお！ ばか！

「かつはははは！」

女将は顔を赤らめて、ぴゅーつと調理場へ引っ込んでしまった。
からか 擲揄う度にあの愛いしい反応をされる。我ながら全く以て意地の悪い。

そんな下らぬやり取りをカズマと、そしてなにやらツルさんまでもが神妙な顔で眺めていた。

「あんたホントに幾つだよ……」

「あなた一体幾つなんですか……」

「知らん。忘れた」

それ以外に答えようもないのだから。

散々つばら飲んで、大いに食いに食った。

酩酊と満腹が程よく身体を重くしている。寢床に入り目を閉じれば、一息で眠りに落ちられよう。

店を出て、一先ず大通りを目指して八人ぞろぞろと歩く。

「ふあ〜……」

「くく、めぐ坊はもうお眠のようだ」

「ふあぶつ!? し、失敬な！ 全然眠くなんてありません！ このまま朝までコースでも余裕です！ ……ふ、く……」

意気込んだ矢先に欠伸を噛み殺していれば世話もない。いや世話を焼きたくなる。

己とカズマ、アクア嬢は同じ馬小屋だが、めぐみんとダクネスはそれぞれ寝所が別にある。

めぐみんを宿に送らねばならんが、それは己でもダクネスでもいい。

そうして通りに行き着いた。

「クレメア、フィオ、先に宿に戻っていてくれ」

「え？ キョウヤはどうするの？」

「僕はもう少しだけ、彼らと話がある」

そんな会話が耳に入り、話の主を見やる。ツルさんは己とカズマに視線を寄越していた。

「ふむ……ダー公、めぐ坊を頼めるかい」

「それは構わないが、大丈夫か？」

「……あの魔剣男、まだゴチャゴチャと絡む気ですか。撃っちゃいましょうか」

「心配要らねえよめぐ坊。今日はもう帰って休みな」

剣呑に紅い瞳を光らせる娘に笑みを送る。

「ありがとうよ」

「ん……ジンクロウがそう言うんなら」

娘は素直に引き下がってくれた。

一方、素直でない男は満面の顰め面で溜息を吐き捨てる。

「メンドクセ。ボクもう帰りたいんですけどー」

「そう言うな。野郎同士、梯子酒と洒落こもうぜ」

「お酒!？」

「ダクネスー、アクアも持ってつてくれー」

文字通り浴びるほど飲んだであろうにまだ飲み足りぬか酒乱の女神。半ば意識もない泥酔状態でありながら、酒の一言に反応したようだ。

譫言で酒、酒、酒と垂れ流しながら、アクア嬢はダクネスに引き摺られていく。

「またねーめぐみんちゃん!」

「おやすみ、ダクネスさん」

女子衆が夜景に消え、男共三人が通りの端に居残った。

「んで、なんだよ。手短にな」

「君なあ………はあ、謝りたいんだよ」

カズマへの苦言を一つ飲み込んで、ツルさんは言った。

「今日、あなた達に働いた無礼と失言を」

「殊勝過ぎて気持ち悪い」

「確かに」

「やっぱり酷いな君ら!?!」

カズマの言に同調してはみたが、よくよく思えば平素のカズマの慇懃無礼、手練手管、悪戯三昧を見慣れ過ぎていて、為にこうした善人を怪訝に感じてしまうのではないか。

世慣れし過ぎた傍らの少年に苦笑を送る。

「と、とにかく！ すまなかつた。何も知らずに、僕は思い込みであなただを貶した……一緒に食事をして、君達が強い絆で結ばれているんだってことを思い知ったよ。まるで暖かい家族みたいだ」

「くっさ。そういうセリフ吐くのって恥ずかしくなんない？」

「役者でもやってみたらどうだい？ いやお前さんなかなかの美男子だ。そらあもうわんさと固え客を掴めること請け合いよ」

「あの、もういいです……」

ツルさんは悲しげに項垂れた。流石に少し、ふざけ過ぎたか。

己はもとより、どうやらカズマの方も先刻の件は特に気に留めてない。そう、些細な出来事を一々穿り返しても詰まらぬ。

この場合、揶揄いこそがこの少年の気遣いなのだ。

その不器用さに忍び笑う。

「……でも」

「うん？」

「一つだけ、頼みがあるんだ」

俯いていた顔を持ち上げ、ツルさんは真つ直ぐにこちらを見据えた。それこそ腹を据えた様子で。

「もう一度勝負がしたい。いや、今度こそ……アクア様をかけて僕と勝負をして欲しい。条件は同じ。一対一で戦い、勝った方がアクア様をパーティに連れていける」

「ええー……」

「そらまた、律義だねえ」

心底嫌そうにカズマは呻いた。己は内心に可笑しみが湧く。

わざわざ宣言を上げ、宣誓を決め、決闘まで設けて。

「惚れっぽい野郎ってのは厄介だな、カズよ」

「だってあのアクアだぞ？ 趣味悪過ぎだろ……」

行き会った時から知れたこと。この青年、どうやら本気である飲兵衛女神に首つ丈らしい。心酔、といった毛色も見えるが。

「恋だの愛だのってな往々にして盲目めくらなもんだろう」

「めんどくせえ……」

「くくく、だからおめえは童貞ガキなのよ」

「どどどど童貞じゃねえしっつ!!!」

「ぷっ、くひひひ……!」

「す、すみませーん、あの、そろそろこっち向いてもらっていいですかー……?」

カズマと顔突き合わせてひそひそ話に花咲かせていると、ツルさんがいかにも消沈した声を上げた。

少々放っぽり過ぎたようだ。

「よしカズ、任せた」

「任されねえよ!」

間髪入れずに言を跳ね返される。

「ジंकロウがやればいいだろ！ なんで俺!」

「その方が向こうも納得するからな」

「は? どういう……あ、あー……まあそうだろうけどさ……」

やはりというか、聡いこの少年は己の意図するところを瞬時に察した様子で、見る見る反発が弱まっていく。

そうして最後には溜息交じりに。

「……しよーがねえなあーもおおお」

「かかかつ、頼りにしてるぜ御頭」

「ふーんだっ!!」

不承不承、また不承。嫌々全開でカズマが進み出る。

対するツルさんは怪訝な顔をした。

「君が? 戦うのかい?」

「それ以外の何に見えますかー?」

「……いや、そちらがそれで構わないなら、僕に異論はない。ただ、勝敗が決まってからの撤回は無しだ」

「はいはい」

「なら、行くぞー！」

言うや、ツルさんが剣を抜く。なんでもその銘を魔剣「グラム」という。神から与えられし特典の武器。外観は、飾りがやや派手な身幅のある諸刃の剣だった。

刃は実に滑らかであり、街灯に依らずそれは自ら発光していた。特典の武器には何かしら特殊な能力があるとかないとか。要は己が使っているあの妖刀と似たようなものだろう。

翻って、カズマは無手。腰には短剣を革帯で吊るし、身体各所に小刀も仕込んでいる。

「武器を構えろ。サトウ・カズマ！」

「あ、そう？ んじゃあ『クリエイト・ウオーター』
「な!？」

軽い調子でカズマは手を構え、掌から水を発射した。バケツ一杯分ほどの量、浴びれば風邪でも引きそうだ。

寸でのところでツルさんは後退して水を躲した。

「魔法が武器ですどうぞよろしく」

「くっ、この男はー！」

「はい『フリーズ』」

続いて掌から飛び出したのは冷氣。空気中の水気を凍らせながら、ツルさんの足元目掛けてそれは飛んだ。これで、ばら撒かれた水を踏むツルさんの脚が地面ごと凍り付く。
が。

「その手は食わないー！」

甲冑のままでありながら、身軽にも青年は跳躍してみせた。

冷氣はツルさんの脚の下を素通りし、その動きを凝結させることは叶わなかった。

『『バインド』』

「へ?。」

するり、薄い世間を泳ぐ蛇——否、細い、それは細い糸。目を凝らしてようやく見えるほどに黒く、暗く塗り潰された鋼の糸だった。それがカズマの袖口から伸び、未だ宙にいた青年の、その片足に絡み付く。

半拍よりも短い間に、青年が地上に降り立った。

凍結した石畳の上へ。

青年の体捌きはそう悪くない。平素から身体を動かすことに慣れているのだろう。凍った石畳の上でも直立できるだけの体幹を、その身体はきちんと備えていた。

「くおっ……!?」

カズマは鋼糸を握り、カ一杯引き寄せた。不安定な凍結した地面、そこに立つ青年の片足を。無慈悲にも。

見事な一本釣り。脚は天頂を差し、もんどり打って青年は背中から倒れ込む。

『『ステイール』』

止めもまた静かなもの。一瞬、掌を発光させたかと思えば、既にその手には魔剣グラムとやらが握られている。

悠々と歩み寄り、倒れた青年の鼻尖へ切先を差し向けた。

「はい終了!」

「——」

「終わり終わりー。お疲れっした〜」

絶句するツルさん。

魔剣をポイと捨てて早々に踵を返すカズマ。そのままこちらに歩き去ろうとした少年が、ふと足を止めて青年の方に振り返る。

「俺に勝てない奴がシンクロウに勝てる訳ねえだろボケ」

捨て台詞も堂に入ったもの。中指まで立てる様はもはや悪漢、チンピラ、立派な小悪党そのものである。

「ではな。風邪などひかぬよう気い付けな」

「ア、ハイ」

尻餅を付いたままこちらを呆然と見上げる青年に別れを告げて、少年と二人、己が疇ねぐらへと帰路を歩いた。

「随分とまあ、怒ってくれるじゃねえか。ええ？」

「そんなんじやねえし」

「くく、そうかい？ くふふ」

「……あーあー、ったくもお。酒！ また奢ってくれよな!？」

乱暴に頭を搔いて少年が怒鳴る。

「応さ」

それがどうにも、嬉しいのだ。

26話 命あつての物種だわさ

今日も今日とて仕事だ仕事。

馬小屋掃除と馬の手入れを済ませてからギルドへ顔を出す。朝飯は食堂で済まそうかい。それとも依頼の道すがら買い求めようかい。そんな気楽な心地で、人気も少ない静かな掲示板前。相変わらず貼り出された依頼書は数も疎らだった。

「？」

不意に、目端に過ぎるものがあつた。見知った顔の受付嬢ルナ、その前に陣取って押し問答する者。

近寄っていくと、話し声も明瞭になる。

「どうにかありませんか……」

「申し訳ありません。私わたくし共と致しましても、あくまで幹旋が職務でして……」

「し、しかし……このままでは農らの村が……」

老人が力無く呻いた。当たり前だが、見たところ冒険者ではない。市井の者。日焼けして赤らんだ顔や筋張った手足からして、どこぞの農村から来たのだろう。

「横から嘴挟むが、いいかい？」

「へ」

「！ ジンクロウさん」

これも悪い癖だった。

無性に節介の蟲が疼きやがる。

老人はアクセルから西へ馬車で半日ほど行ったところにある山岳地帯、その山裾の村の村長であつた。痩せ馬に鞭打って、日を跨いでまで駆け出しの街アクセルのギルドを訪れる要件は一つきり、即ちモンスター討伐依頼である。

「ある日突然、村の近くの森で大きなモンスターが暴れ始めたのです

じゃ」

「そのモンスターというのが、その、マンティコアとグリフォンなんです」

マンティコア、グリフォン。生憎どちらにも聞き覚えはない。

この己の無知なるを心得ているルナが、気を利かせてギルドのモンスター百科を引っ張り出してくれた。

マンティコアとは、有体に言えば人面の獅子であり、その尾には無数の毒針を生やしているという。

グリフォンとは、頭部を含む上半身が鷲であり、下半身は獅子であり、翼にて空を飛翔するという。

聞くだにそれは、まさしく伝承に語られる怪物、紛うことなき化物の姿形であった。

「この二匹の討伐依頼、実は随分前からギルドに要請されていましたが、もともとは街道筋で縄張り争いをしていましたそうなんです」

「街道筋？　しかし、今」

「はい。争いが纏れたのか拗れたのか、詳細は調査しないと分かりませんが……移動したんです。モンスター二匹とも、街道から逸れて山岳方面に」

縄張りを巡って相争っていた魔物、いや獣が、その守るべき自らの領域を離れてまで闘争など続けるだろうか。

———　そうか。縄張りを放り出したのではなく。

「趨勢が傾いたのだな？　両獅子何れかに」

「はい。山岳地帯は昔からグリフォンの縄張りです」

合点が行った。戦いに敗れたグリフォンが己が縄張りへ逃げ、それを追い、また新たな居地とせんが為にマンティコアはその領域へと侵略を始めたのだ。

そして今、近隣の村はその煽りを受けている、と。

「正式な依頼ではないか。何故わざわざ直訴など」

「それが……街道への被害は街の流通に関わりますから、ギルドも公的補助として報酬を出せるんですが。今回モンスターの移動先は山岳地帯で……」

「……はっ、なるほど。金を落とす利が無えと沙汰が下ったか」
「すみません……」

「おいおい、お前さんが責めを負うことじゃあねえよ。御上の決め事だ。下々の者にやどうしようもねえさ」

グリフォン、マンティコアなる魔物がどれほどの脅威であるのかわど、新参冒険者でしかないシノギ・ジंकロウには未だ理解できぬ。さても、冒険者稼業は事程左様に命懸け。文字通り、命を賭けの質に預け、その末に初めて二束三文を得るのだ。

命など値札の付けようもないもの、買い叩かれて死ぬとて文句は言えぬ。死人に口無し。そしてそれこそは険を冒す愚か者の末路に相応しい。

「で、御代は幾らなんだい」

「以前は、二匹の討伐、あるいは撃退で50万エリスでした……今回、グリフォンはともかく、縄張りの外に出てしまっているマンティコアは要討伐対象になります。グリフォンは最低撃退、マンティコアは討伐を必須として……お支払いできるのは10万エリスです」

命を使った阿漕な商売にこの額は釣り合わぬ。

ここいらの玄人連中が考えるところの、命の売値にそれは届かぬらしい。

傍らで老爺が項垂れた。腰も曲がり、見るからに草臥れ、倦み疲れしている。

「虫が良すぎたんでございますよ……冒険者様達は、命張っておられるんだ。こんな端金はしたがねじゃ……無理もねえですじゃ」

村の蓄財を掻き集め、ようやく揃えた10万エリス。ギルドが補助を打ち切ったのなら、報酬を支払うのは当然ながら依頼者本人。

今や冬も間近。寒村に貯えを放出する余裕などあろう筈がない。

10万エリス。これが全てなのだ。この老爺、その山村の、全て。

「十万か。はは、そりゃ確かに、碌な徒党も雇えまい」

「へえ、仰る通りで……」

「精々、この素浪人が関の山よ」

「……へ？」

「じ、ジンクロウさん!？」

老爺の肩に手を添える。心底この爺様を憐れに思う。

なけなしの金で雇えるのが——こんな奇矯な剣士たった一人きりなのだから。憐れと思わずおれようかい。

「ほ、本当に？ 本当に、受けて、くださるので」

「応とも。だがまあ、あまり期待してくれるな。見た通り食うや食わずの貧乏剣士だ。この痩せぎすをうっかり化物に喰われちまうとも限らんぞ？ かつはははは」

お道化て笑う己に、けれど老爺は不安がるでも、まして怒り出すよ
うなこともせず。ただおずおずと震える手で、薄汚れた革袋を己に差
し出した。

首を左右して、革袋を押し返す。

「事が上手く運んだ後で良い。爺さん、その金は大事に仕舞つときな」

冒険者の給金は、基本的には後払い、達成報酬という形が基本だ。
少なくともギルドを介した依頼であるなら、この構図は義務付けら
れている。

しかし今回のようなハイリスク・ローリターンの依頼では受けてく
れる冒険者自体が少ない。ほぼ居ないと言ってもいい。

だから村長は、前払い、あるいは前金を成否に関わらず用意するこ
とで依頼受託者側に利を示すしかないのだ。

……碌々戦いもせずにリタイアして依頼料だけをくすねる、なんて
性質の悪い冒険者もいる。そしてこの条件では、そんな悪さも違法行
為として摘発することが難しい。

「失敗した」と言い張ればいいだけなのだから。

「……」

依頼受託の手続書を前に、筆が止まった。村長は一早く城門前に馬
車を回しに行き、受付には自分と冒険者の彼、ジンクロウの二人だけ

だ。

新規の依頼書貼り出しの時刻までまだかなり余裕がある。ずばらな冒険者が口にする『早朝』ではなく、本当の意味で早朝と呼ばれるこの時刻にギルドへ顔を出すのはこの青年くらいである。彼お気に入りの清掃業務はいつ何時だつて余ってるから、早く来ようが遅く来ようが変わりないんだろう。

ギルド受付窓口は今、ひどく静かだった。耳鳴りを覚えるほどに。「……その、本当に受けるんですか……?」

「二言はねえよ」

「せ、せめてパーティメンバーの方に助力を仰げないのでしょいか」
「この依頼を受けんなあ、己の勝手自儘よ。そこに彼奴らあやつを巻き込むのは道理に合わぬ。幽明境ゆうめいぎかいで博打をやるならその果てが何処に向かうにせよ——責めを負うは自己一身のみ。そうでなくてはならぬ」

彼が前金を固辞したのは、依頼者である村長の不安を気遣つてのことでもあり……同時に、絶対成功を保証することができないという事実への彼なりの誠意だった。

「ははっ、なんだい。嫌に食い下がるな?」

「それは! ……ギルド職員として、本当は言うべきじゃないのかもしれないですけど……やっぱり危険です。ソロで大型モンスターの討伐なんていう冒険、本来やってはいけないことなんですから……」
「いや全く道理だ。しかし時には無理も通さねば、生きることさえ儘ならぬものよ。なあに、初めてつて訳じゃねえ。どうにかするさ」

「ああそうでしたね! ……もう! ホントに、貴方つて人は……」

気負いも恐れもなく、とても軽やかに青年は笑った。

その笑みが、見る者の焦燥を無性に掻き立てるといふことを、彼はちゃんと分かっているんだろうか。

手続書の記入事項が埋まった。

「……では最後に冒険者カードを確認します」

「はっよ」

氏名、年齢、職業、最終討伐モンスター等を再度記録。これで依頼受託手続は完了した。

とても手慣れたいつもの業務。

それも見慣れた光景なのだろう。青年は一言礼を言って、踵を返しそのまま扉へ向かう。何処へ？ 当然、依頼者と共に仕事場へ赴くのだ。

——このまま一人で行かせて本当に良いの？

それは、普段受付業務をこなす時には絶対に覚えない感情。躊躇。他の誰かに、他の冒険者には、こんなこと考えもしなかった。受付業務は自分の仕事だ。それ以上でもそれ以下でもない。そして冒険は、冒険者の仕事なのだ。それ以上でもそれ以下でもなく。

どちらにも共通するものがある。糧を得なければ生きていけない……という世知辛い必要性が。

見ず知らずの冒険者を心配も同情もできる。けれど、それは仕事の延長でしかなくて。

その冒険に行かないで欲しい、そんな風に思った相手は彼が初めてだった。

どうしてだろう。どうして私はこんなにも……決まってる。彼と出会って、少しずつ理解していったこと。そしてここ暫くではつきりと自覚した。この気持ち。彼が自分にとってどういう存在なのかを。

そうだ。彼は。

ジンクロウさんは——

(超！ 優良物件!!)

ギルド受付嬢ルナ。今年で2●歳独身、現在彼氏なし。(この世界では)とうの昔から立派な行き遅r——適齢期を迎えている。

冒険者ギルドの受付嬢は仕事柄、基本的には、出会いに事欠かない。日々新参古参、老若男女の区別なく多くの冒険者と顔を合わせ話をして仕事をこなし、時に私的に交流し、親密さを増して恋やら愛やら育んで、遂には「結婚しました♪」なんてのはザラにある。

……らしい。

ここで紐解かれるのがアクセル七不思議の一つ。アクセルの冒険

者ギルドの受付嬢は、とにかく、如何ともし難く、事程左様に――
――モテない。

出会いはあっても恋が生まれえない。交流はあっても進展しない。もうホントびっくりするぐらい。

浮いた話なんてひとつつつもない。一番最近の色っぽい会話？

一昨日の夜の、酔っ払いのセクハラ発言くらいかな。

涙が出てきた

ルナはぐつと堪えた

そんな、もはや渴いてゆくしか選ぶ道のない惨憺たる女生の前に、突然現れたのが彼、シノギ・ジंकロウ。

仕事ぶりは真面目で、人当たりも良好。彼が清掃業務をこなした次の日の朝はギルドへの苦情が通常の三割は少ない。

では冒険者の本領、モンスター討伐の腕前はどうか。ノウハウや知識量は、正直心許ない部分もある。しかしそれはギルドや他の冒険者との情報共有で十分に補えるだろう。問題は戦闘能力、技量だが……有体に言つて、王都で活躍している一線級の冒険者に優るとも劣らない。あるいは、凌ぐ。

ギルドは国内各所の支部で得たモンスターの討伐記録、冒険者情報のある程度共有するのだが、それと照らして見ても彼の戦歴は遜色ない。何より、単独で、それも極短時日の内に全ての依頼を完了している。

王都の中級冒険者の実力は、地方の上級冒険者に匹敵する。というのが、かなりぎつくりとした冒険者評価の指標だ。

となれば、ハイリスク・ハイリターンの冒険者稼業。実力絶対のこの業界において、将来的な彼の高収入は半ば約束されていた。

真面目一辺倒かと思えばそうでもない。妙に洒脱で身のこなしも軽やか。でも時には俗っぽい話題で愉快そうに大笑いするし、深い悩みも浅い悩みも、正解の無い日々の愚痴なんかも、あの優しい笑みと共に聞いてくれる。

(カードに表記された年齢は17歳……年下であるの包容力?……ヤバいわ。お姉さんを籠絡してどうしようっていうのマジでむしろ籠絡

してお願い)

——余談だが、アクセル冒険者ギルドにおいてルナを食事に誘った男は、なんとジंकロウが初めてだった。

ルナが高嶺の花扱いされていることもあって誘い難いという普通の理由が一点。そして、アクセルの男性冒険者のバイタリテイが実は密やかに発散されており見向きもされないという大きな大きな理由が一点。

こういった不純な動機から、いやある意味純粹一途な肉食獸的な本能から、ルナは一計を案じた。

そして運とタイミングもまた女に味方したらしい。

「あ……あの、す、すみ……すみません……」

「ああ、はい」

一人の冒険者が、依頼書を手に受付前で立っていた。その人物をルナは知っている。冒険者など数多居るが彼女のことは記憶を掘り返すまでもない。それもその筈。彼女はアクセルでは珍しい、ソロ専門の冒険者。

そしてその手に握られた依頼書は。

「マンティコアとグリフオンの、討伐……?」

「え、あ、あの、なにか、不味かったです、か? す、すみませんすみません! 辞めますこれ辞めますからあの!」

それは、今しがたジंकロウが受託した依頼。その更新前の、旧い方の依頼書だった。

おおかた職員が貼り換えるのを忘れてそのまま掲示板に放置されていたのだろう。

職務怠慢だ。担当者は何をしているのか。また新人の尻拭いをしなくてはならない等。悲喜交々をさして置いて。

「ああなんて丁度いいところに!」

「やめまっ……へ?」

少女の手をひしと握り、その紅い瞳を見詰めて。

「お願いします! ゆんゆんさん!」

「はい? な、なにをでしょうか……?」

27話 人聞きの悪い話

早朝、石畳に靄が湧き、まだ肌寒さを覚える時刻。

ギルドへ向かう道中、パーティメンバーが落ち合って早々に、開口一番爆裂魔法オンリーガールは言った。

「たるんでますよ」

「なんだよ、藪から棒に」

脈絡も伏線もあつたもんじゃない。

めぐみんはローブを手ではためかせて、分かりやすく発奮した。

「ジंकロウのことです!! ここのところずっと単独行動じゃないですか!」

「あー、まあ擦れ違いは増えたかもな」

「カモもネギもありません。パーティの一員としての自覚が足りないのですよ!」

自覚どうこうというのなら、自分も大概そんなものの持ち合わせないが……。

「カズマ?」

「……」

「パーティリーダー(仮)を名乗っておきながら、まさかキゾクイシキなんて欠片もありませんが何か? とか寝惚けたことを口にしないでしょうね……?」

「案の定(仮)を添えて来やがったな爆裂ロリイメが」

初対面の(本性を表す前の)ダクネスに気の迷いからリーダーなんて見栄を張ったりしたが、このパーティにまともな指示系統なんてものは無い。ぬあい。無いったら無い。

あるのはその場その場を行き当たりばったりで乗り切る無駄なアドリブ力とノリと勢いと愛しさと切なさを抜いた心強さぐらいだ。

頼みの綱だと思っていた男は、ジंकロウここ最近は何故か自分へと事あるごとに無茶振りを投げ寄越してくるし。

「むうううああああああ!! 不完全燃焼ですー! また突撃牛の時みたいにうじやうじやと寄り集まったモンスターを一気に消し飛ばしたいのですうー!!」

「やっぱそれが本音か。ジंकロウのあの釣り野伏(笑)は良い子が真似したら死ぬんだよ。諦めろ」

「ううー! じ、じゃあ良い子とは遥か程遠い悪い子代表のカズマになら出来るというんですか!?!」

「誰が悪童じゃコラ。てか普通に考えて、良い子が真似して死ぬことは悪い子が真似しても大抵死ぬわ」

「ぬぬぬぬ……!」

ロリっ子ロリっ子とおちよくることは数多いけれど、今日のめぐみんは常にないくらいロリ、もとい幼稚だった。

「どうしたんだよめぐみん。これじゃあロリっ子というより駄々っ子だぞ?」

「んなつ、言うに事欠いてなんたる暴言を!? 許すまじこのパンツ泥棒があー!」

「まあまあ落ち着け二人とも」

互いの両掌を掴み、所謂手四つ状態ロックアップで睨み合う俺とめぐみんに、横合いからダクネスが仲裁に入った。

「あまり強く言ってやるなカズマ。めぐみんはただ、ここ暫くジंकロウに構ってもらえなくて寂しいだけなんだ」

「ななな何を言ってるやがりますかダクネス!?!」

「ああ、なるほどな。そういうえば前臨時でリーンがパーティに入った時も露骨に機嫌悪かったもんな。お爺ちゃん取られてめぐみんちゃんぶんすこぶんでちゆかあ?」

「この男はこの男で未だ嘗てないくらいイキイキとした顔し腐ってやがりますよ!?!」

人の弱味を見付けるとなんだかとっても楽しい気持ちになれるんだってことを知った今日この頃だった。

流石に脇腹をどつかれたが。

「ふ、ふふん! ダクネスもカズマも発想が子供っぽいですね! 私

はあくまでもパーティーメンバー同士の結束の大切さを語っているだけで、べ、別に私がジंकロウを、す、す、す……スキ、とか……そんな話をしているのではなくて!!」

「ほーん。じゃあジंकロウに彼女とか」

「ぐ」

「恋人とか」

「ぬ」

「そういう相手が出来たとしてもなーんにも気にすることない訳だな」

「それはダメなのです!」

叫んでから、めぐみんは自分の声の真剣さに自分で驚いたらしい。

そうして見る見る意気消沈して俯いてしまった。

「違うのです……ジंकロウは、その、そういうのじゃなくて……もつと、もつと別の……」

そのままぽつりぽつりと悲しげに呟くめぐみんを見ると、なんだか無性に居た堪れない。

「あーもー、そんなにしよげるなよお。分かってるよ。好きとか嫌いとか言っても変な意味じゃないんだよな? 人間的な部分がーとかそういう、そういうなんかこう………悪かったよ。ちよつと言い過ぎた。だから機嫌直せよお、めぐみん」

「そうだぞ、めぐみん。カズマの妄言は今に始まったことじゃない」「おい」

「それに、寂しがってるのはカズマも一緒だろう?」

「はあ!? んなわけねーし! 俺は立派に冒険者一人前でやっていますしおすし! あいついなくなったら何の支障もござんせん!! ええええござんせん!」

反射的に捲くし立ててから気付く。こちらを見上げる紅い眼光、そのニヤついた顔に。

「おやおやくカズマ? まるで弟妹が出来て以来親に構ってもらえない長男のような寂しん坊っぷりですねえ。同期の冒険者といって、なんだかんだでジंकロウにおんぶにだっこでしたもんね? そ

れが突然組む機会も減ってさぞ面白くないんでしょう？ 解ります。解りますよ。だって顔にそう書いてありますからねえ!!」

「ここぞとばかりに息吹き返しやがった!? というか毎度毎度おんぶにだっこされてんのは間違いないとお前だかな!?」

睨み合いが膠着常態に入り始めた頃。ふと気付いてみれば、いつもなら真っ先に茶々を入れてきそうな騒がしい奴の声がない。

アクアはぼつねんと道端にしゃがんで膝を抱えていた。

おバカで能天気で元気一杯だけが取り柄のこの女神が、どうしてこ
うも暗く沈んでいるかというところ。

「……アクア、いい加減観念しろよ」

「うううだって！ だってえ！ 私のせいじゃないのに！ 私なんにも悪くないのに！ なんて私が借金背負わなきゃいけないの!?!」

先日の『湖の浄化』クエスト。あの時、ティーバッグよろしくアクアを湖の水に浸ける為、ギルドから金属製の檻をレンタルした。

そうして無事クエストを終了してドナドナ（擬音語）とアクアを護送している途中、例の魔剣の人に遭遇。ブルータルアリゲーターに齧り付かれても軋む程度だった頑丈な檻を、魔剣の人……いやツルさんだったっけ？ そうだそうだ、そのツルさんが素手でひん曲げて壊したのだ。

当然、弁償である。クエストの要項にもきっちり「レンタル品が破損、故障した場合は全額をクエスト受託者に請求致します」と明記されていたし、馴染みの受付嬢さんには口頭でもしつこく念を押された。

斯くして、アクアは成功報酬30万エリスから檻の修理代金20万エリスを天引きされた訳だが。

「次の日、手元に残った10万エリスで梯子酒かましまくって遂には街金で借金してまで飲み明かしやがったのは、えつとくどこのどなた様でしたっけ〜?」

「ほ、ホントは30万の筈だったんだもん！ だから30万分飲んで
だっぺいいいじゃない！ 飲ませてよ！ 私の生き甲斐奪わないで
よおー!」

「うわあ……」

アル中という罵倒がマジで洒落にならなくなってきたな……。

まあ、受け取る筈だった報酬額の大半を持っていかれたという点だけは同情の余地がある。そして本来その弁償金を支払うべき人間は、今この街にいない。

アクアを懸けた勝負（爆笑）に負けたツルさんは。

『自分の未熟を痛感したよ……アクセルを出て、暫く武者修行の旅に出ようと思う。いつか君と、そしてなによりシノギさんにリベンジする為にね。また会おう！ サトウ・カズマ！（キラッ）』

などという意味不明なことを勝手に供述して去っていった。あ、ちなみに最後の擬音はあいつのやたら白い歯である。

「あんの魔剣男お……今度会ったらタダじゃおかないわ。ゴツドブローを叩き込んでから50万エリス耳を揃えてきっちり支払わせてやる……！」

地の底から響き渡ってくるかのような低い声と光の無い据わった目で自称女神が拳を握る。金額の割り増し甚だしいが、口にはすまない。どうせ他人の金だし。

ジンクロウ曰く魔剣の人ツルさんはアクアに首つ丈らしいが、そんな彼に対するアクアのヘイトは鰻上りだった。

呆れるべきか悲しむべきかも判らない、いろんな意味で救いような話にめぐみんもダクネスも顔を引き攣らせている。

「そ、それはともかく。いえ、だからこそです！ 今日こそジンクロウを捕まえて、冒険の華！ モンスター討伐に繰り出すんです！ ふふふ、私とジンクロウのコンビに係れば伝説に謳われる邪神だって屠り去れますよ!! ほふほふですよ！」

「そ、そっか！ そうよ！ めぐみんの爆裂魔法で凶悪なモンスターをドツカンドツカン倒しちゃえば借金なんてチャラどころか毎日毎晩高級シユワシユワ飲み放題だって夢じゃないわ!!」

「お前はどんだけ他力本願極めるつもりなんだよ」

「私としてもモンスター討伐に行くのは賛成だ。この体が、そろそろ嗜虐を求めて疼き始めている……！」

「お前は討伐じゃなくまず病院行ってこい。頭の」

「んっ……言葉責めは基本という訳か。やるなカズマ」

いつもの面子がいつもの調子を取り戻してきた。いや別に取り戻して欲しいなんて1ミリも思っていないけど。

ただまあ、こいつらの手綱を一人で引つ張るのもそろそろ疲れてきた頃だ。めぐみんの言い分ではないが、今日くらいはジंकクロウを捕まえてこの負担を折半してやる。

「けどそんな簡単にいくのか？ もし先に清掃業務なんて受けてたら今日一日はどこにも行けないぞ」

「ふっ、抜かりありません。その為の事前調査は既に完了済み。この時刻なら、まだジंकクロウは依頼を物色しているだけで受託まではしていない筈です」

事前調査も何も本人がそう言ってたんですけどね。そのドヤ顔にデコピン入れてやろうか。

「いや分からないぞ。ジंकクロウのことだから今頃どこぞの美人とデートに出掛けたかも」

「はっ、ジंकクロウに限って仕事もせずに女に現を抜かすなんてありえませんよ。カズマじゃあるまいし……カズマじゃあるまいし!!」

「繰り返すな！ 大事なことってか!？」

朝っぱらから騒がしく、いや限度があるわ。

そろそろ御近所から苦情が来そうなので、四人でギルドへの道を再び歩き出した——その時。

「うん？」

「？ どうしたんですか、カズマ」

「馬だ」

朝靄の向こうから、軽快な蹄の音がしていた。この世界、延いてはアクセルの街で馬なんて別に珍しくもない。

こんな朝早く、街中を馬で早駆けする奴がいることに少し驚いたのだ。

「めぐみん、はじ寄んな」

「あ、はい。すみません」

一応、道の真ん中から端っこへ移動する。暴れ馬でもなければ轢かれるようなことはないだろうが、念の為だ。

案の定、杞憂だった。

馬はきちんと俺達を避けて――

「よう、カズー！」

「え？」

「あ」

「おや」

「んあ？」

白んだ朝の空気を貫いて、輝くような“赤”が過る。

四者四様に頓狂な声を上げた。その横合いを、赤毛の馬を駆ってジंकロウが過ぎ去っていった。

馬上にいたのは男一人ではなくもう一人、男の前側、ジंकロウの胸に抱えられるようにして少女が馬に跨っていた。

「すまぬが先を急ぐ故！ 御免！」

そんな言葉を張り上げて、遠退いていくホーステール。仲良くお馬でツーシーター。

対するこちらに言葉はない。特に、傍らの爆裂少女には。

「……」

「……」

「……あー、その、なんだ……あつ、そう！ で、デートって決まった訳じゃないから！ な？ めぐみん。めぐみん？ おーい？」

「……………よ」

「よっ」

ぼそりと一音、聞き取れるか取れないかのぎりぎりの音量に思わず耳をそばだてた。

「よりによつて何故ゆんゆんですかあああああああああああああ
あツツツツ!!!」

少女の絶叫が朝空と俺の鼓膜を貫いた。

28話 傾奇な娘に合縁奇縁

白いハンケチを振りつ播らしつ、なにやらよく解らない達成感の滲んだ笑顔で「いつてらつしゃくい」などと己らを見送った受付嬢殿。その笑みの底にどんな魂胆があるのやら。文句を言うのも問い詰めるのも、ともかくにも全ては仕事が進んでからの話だ。

途中、偶然行き逢ったカズマらに碌な挨拶もできぬまま一路城門へ向かう。

石畳を蹴る軽やかな蹄の音色と馬体のうねり、久しく触れることになかった感覚を懐かしむ。乗馬の心得は確かにあった。どうしてか、あった。

相変わらず、身体は体験を知ってはいても、頭は経験をとんと覚えちゃいない。

都合の良い記憶喪失もあったものだ。

「すまねえな。突然引つ張り出されてさぞ面喰らったろう?」
「ひゃい!」

己の胸板の前に抱えられ、すっかり縮こまっていた娘が、今度は発条ばねが跳ね戻るような勢いで背筋を伸ばす。

「乗り心地はどうだい? 火急とあってこんな風に相乗りさせちまったが、不都合がありやすぐに言いな。依頼人の村長は荷馬車で来てるそうだ。そつちに移りたきや移つてもいいんだぜ?」

「い、いいいいえ、おおか、おおお構いなくっ!!」

馬小屋の主、そして馬主の許しを得て、一頭の馬を借り受けた。何かと世話をする事の多かったあの赤毛の雌馬である。

若く体力があり、脚回りも実に滑らかで、馬自体の乗り心地に関してはこれ以上のものもなからうが。

この娘からすれば、訳も分からずギルドの職員に唆されるまま見も知らぬ男と馬上に押し込められた恰好になる。

年若い女子であるなら尚の事、気分の良い状況ではあるまい。

（お、男の人と馬の二人乗りしちやった……あるえの小説にあつた。数少ない。まともなラブシーンみたい……どうしようどうしようどうしよう。ど、どうするのが普通なの!? 寄り掛かっていいのかな!? 重いかな!? 手綱持つてるし邪魔になる!? わ、私臭くないかな!? 昨夜はちゃんとお風呂入ったけど大丈夫かな!? うわーん今朝も水浴びくらいすればよかつたあ!! ……やつぱりわかんないよお! 助けてめぐみーん!!）

気丈にも娘は押し黙って不平不満を飲み込んでくれたようだ。

これはいよいよ急がねばなるまい。幼い娘子の思慮を無碍にするなどは人道に悖るといふもの。

「すまねえが飛ばすぜ。ああ、己のこたあな、ただの背もたれとでも思つて遠慮なく寄り掛かつてくんな」

「え?」

「はあつ!」

「ふえええ!」

取り急ぎ城門へ、そして村長と落ち合い、駈足に山岳地帯の村を指した。

平原に流れる小川で一時休息を取ることとなつた。

村長が御す荷馬車は一頭立て、おまけに馬も高齢で平素は農耕馬として用立てているらしく、人間二人を乗せて長距離の早駆けは無理があつた。

結局はこちらの若馬で相乗りのまま、半日ほどを共にした娘子は心無しぐったりとしている。

「大丈夫か?」

「は、はひ……ちよつと、その、気疲れして……」

「村長、道行きはあとどの程度だい?」

「へい、この野っ原を川沿いにもう少し行きますと丘が見えます。そこ越えりやすぐですじゃ」

「だそうだ。悪いがもう暫く辛抱してくれ」

「ああああいえ！ 疲れたって言っても大したことないですから！ むしろ良い疲れですから！」

「んん？ そうかい？ そんならまあ結構だが……」

(いや良い疲れってなんなの私い!?)

娘はひしと頭を抱えて下を向く。余程に乗馬が堪えたか、はたまた別の理由か。

そつとしておくのも手だが、それではちと愛想がない。

「受付嬢殿から聞いてはおろうが、今一度改めて自己紹介でもしておukai」

「!? じ、自己、紹介……」

「己はシノギ・ジnkクロウ。見ての通り剣を使う。ま、言っちゃえばそれしか能がねえ。ははは、魔法だスキルだつてのはすまぬが期待してくれるな。で、お前さんは？ おうそうだ名前も聞いちやいなかつたなあ。いや己という奴は熟不調法でいかん。よけりやあ教えてくれるかい？」

「は、はい……わた、我が名………」

消え入りそうな声が真実空気に消え入った。娘は俯いたまま、もごもごとその唇だけが動いているのが見える。

暫時そのようにして、火に掛けた土瓶の水が湯に変わる程度に時が経った頃。

「っー」

娘は腰掛けていた丸太から勢い立ち上がった。屹度こちらを見据える瞳に決死の覚悟を滲ませて、頬は紅潮し表情は強張り今にも泣き出さんばかりの様。

一步を、踏み出す。

両腕を一旦交差させ、そこから右掌をこちらに突き出し左腕は後ろへ引き直つ直ぐに伸ばした。

「我が名はゆんゆん！ アークウィザードにして上級魔法を操る者！ やがては一族の長となる者!!」

秋空へと高らかに。平原を風のように。少女らしい高く柔らかな声が、精一杯の肺活によつて走る。奔る。

そうして今、しんと静寂が舞い落ちた。

得心を込めてぼんと手を打つ。

「おお、お前さん紅魔族か」

「はう!? あえて言わなかったのにやっぱバレた!?」

「その傾かぶいた名乗りを見りや流石にな」

「うう！ よそ様から見た紅魔族のイメージが予想通り過ぎるっ……！」

何より、紅魔の娘っ子に出会うのはこれで二度目。合縁奇縁の妙と
いうやつだろう。

そこでふと、項垂れていた娘子、ゆんゆんが突如顔を上げる。暫時
目をぱちくりと瞬かせ、きよとんとしてこちらを見ていた。

「あの、私の名前を聞いても、その……笑わないんですか……?」

「人の名前を笑う趣味はねえな。うむ、確かに耳慣れぬ響きだが、ゆん
ゆんか……随分愛らしい名だと俺あ思うがねえ。なあ村長?」

「へっ!?!」

水を向けられた村長は、ぽかんと開いていた口を今思い出したかの
ように閉じてから首を捻った。

「へえ、いやあ、儂のような老いぼれにや今の子供らの名前はどれもチ
ンブンカンブンで……」

「ああ気を遣われてる!? ものすつごく気を遣つて有耶無耶にしてく
れてる!?!」

「ははは、それじゃあ仕様もねえな」

「し、シノギさんまでえ!?!」

目尻に湛えた涙が光る。紅潮どころか茹蛸のような顔で恨めしげ
にゆんゆんは己を見た。

「ははっ、愛らしいってなあ嘘じゃねえさ。この国の者に言わせりや
己の名の方が余程奇妙に思えよう……それより、多少元気は出たよう

だな」

「え？ わ、私ですか？」

「街を出てからこつち、何やら塞いで見えたのでな」

呆然として、またしても押し黙る娘に笑みを送る。

「己か、依頼か、事の仕儀か、気に染まぬことも多かろう。や、無理を聞き入れて下さり本当に有り難う存ずる」

「そそそんな滅相もないです!! 私こそ横から割り込んじやったし! 余計な御世話じゃないですか!? な、なんなら報酬もシノギさんが全部もらってください!」

「そうはいかん。己と御手前が仕事を受け、そして己と御手前が共にこれを為さんとするので。その対価を受け取らぬでは筋が通らぬ」

「は、はあ……そういうものですか……」

「そうとも。今我らは一蓮托生。徒党の御仲間と相成ったのだから。くふふ、酷い即席だが」

「! 仲間……」

「応。故に、どうか宜しくしてやってくれるかい?」

薄々勘付いてはいたが、どうやらこの娘は人と話すことが不得手のようだ。しかしそれは己とて同じ。格別に弁が立つ訳でも、まして八方美人を名乗るには氣立てと思慮が桁一つ分ほど不足であろう。それでも一つ、目の前の娘を慮るならば。

「こつ……こちら、こそです! よろしくお願いします!!」

華やぐように咲く笑顔。この日初めてゆんゆんは笑った。

恥じらい怯えてなお人恋し。この娘は殊更誰かと親しむという行為に臆病でありながら、同時に強い憧れをも持ち合わせている……ように思う。まるで箱入りの童女のように。

そのような心積もりで見れば、なるほど。

「くく」

「? なんですか?」

「いや、まっこと愛い童^{わらし}だよ。お前さんは」

「??」

「はははは。よー!」

膝を打って、えいこら立ち上がる。

赤毛の馬に近寄ると、小川から顔を上げてこちらに鼻面を擦り寄せ
てくる。催促の通り撫でてやれば心地好さそうにその目を細めた。

「そろそろ出立しようかい。村長、また案内を頼む」

「へい、ただ今」

馬の手綱を引き寄せ、娘の傍らに移動する。どうどうと馬を落ち着
かせたところで、拱こまねく娘の小さな手に己の節くれたそれを差し出し
た。

「そら、手を取んな」

「は、はいっ」

「おおおお、そう鯨しやちよこぼ張ると馬の背中まで凝っちまう。ははっ、気楽に
行きな、おゆん嬢ちゃん」

「はい！ ……………おゆん？」

29話 魂老いても未熟を知る。それは果たして幸か不幸か

村へ着く頃には日暮れも間近であった。

当初の予定通り探索は一夜を明かし、早朝を待って行う。

夜の森は間違いないく獣、魔物の領域だ。人間などという非力な生き物が不用心にそんなところへ足を踏み入れるならば、餌になる覚悟が要る。

一刻を争うとはいえ、無茶無謀で事を仕損じては世話もない。

逆に言えば我らは時を得た。ならばやれるだけの備えを固めるに如かず。

差し当たり情報収集などが適当であった。

「ここいら一帯はもともとグリフォンの棲み処だったんです。曾曾じいさんの代にはグリフォンの家族が巣を作ったそう、ええもうかれこれ二百年近く昔から」

「その所為か、この村じや一撃熊や白狼に悪さされるなんて滅多にねえんですよ。残念ながら今では数も減って一頭だけになってたんですが、この一頭が身籠っておったんですわ。三ヶ月くらい前はまだ腹も大きかったです」

「二時期、姿が見えなくなっただろうなんて言っていたら、うちの子が森の泉でグリフォンにばったり出でくわ会したとかで……そのすぐ後かねえ、突然マンティコアが森で暴れだしたのは」

「オレ見たよ。グリフォン、手に怪我してた。針みたいなのが刺さってて……すごく痛そうだった」

「マンティコアの毒針が刺さった土は周りの木が枯れやがる！ 枯れ木には毒が残っていて焼いて出た煙は吸うと目や喉がやられるし、おちおち薪拾いも出来やしねえ……！」

「泉の水はもう飲めん。マンティコアの野郎が水場にしていて近付けん上、あの毒気では……」

「……いよいよよとなったら、村を捨てなきやならん」

村長は言った。疲れ切った諦めの念……それは無理からぬ心情であつたが、そのみでは断じてなかつた。

山村に住まう百人強の家族を生かす為、痩せ衰えた老爺は覚悟を唱えた。故郷を捨てるという最後の決断を。

それをただの諦めなどどうして言える。長としての責めを放り、老骨をこの地に埋めてしまった方が遥かに安楽だつたらう。過去、少なくとも二百年から培い育んできた生活基盤を手放し、また一から全てを作り上げねばならぬ。生きるとは時に、死をも超えて難行だつた。

それでも生きると、老人は言った。

——ならば、この死に損ないが為すことは一つ。この身の使い道など、一つきりではないか。

明くる朝、白く焼けた陽光が林を抜け、夜明けの歓喜を鳥が歌う頃。草を踏んで森へ分け入る。とはいえ、前回のゴブリン討伐の際に登った山道に比べれば、木々は疎らで草叢も背が低い。歩き回るには然程難儀しなかつた。

「風下から回り込み、件の泉へ向かうのが良からう。お前さんは見たことあんのかい、そのグリフォンだのマンティコアだのつてえの？」

「あ、はい。戦つたことはないですけど、里の周りにはわりとたくさんいました。里の入り口には石化されたグリフォンが彫像として飾つてありましたし」

「はっ、そいつあまた珍奇な趣向だこつて。いやまあ己に比べりや格別重畳だ。俺が知っておることなど精々伝聞と挿絵くらいのもんでな、ははは」

「ええ……よ、よくそれで依頼を受けようって思いましたね」

「物好きが祟ったかねえ。ああ今からでも遅くはねえぞおゆん。こんな危なっかしい依頼はこの物好きに放って、お前さんは降りたつていいんだ。誰も責めやしねえさ」

「そつ、そんなことできません！ ギルドの受付さんにどうしてもつて頼まれたことですし、困ってる村の人達を放ってなんておけません！ それに！ そ、それに、それに、あの……」

躊躇いどもりつつかえて、沈黙が続くこと三拍四拍、息を吸い吐くこともう三拍。

その場に立ち止まり、待つ。状況は一刻を争うが、一瞬を惜しむほど逼迫している訳ではない。なにより懸命に口中で言葉を紡ぐ娘の様、それを急かすのはどうにも憚られた。

そうして、どうにかこうにか吹いて飛びそうな小さな声で。

「な……………仲間……………ですし」

「ありがとうございます」

「すすすすみません仲間とか気安く言っちゃいました調子乗りました!! ……………え」

「さ、では行くとしよう」

「！ は、はい!!」

「あく、なるべく静かにな？」

「すっ！ ……しゅみません」

「くくく」

娘の一喜一憂に揺れ動く百面相は、実に面白かった。

林を進むこと一刻(二時間弱)ほど。回り道のわりには比較的早く、水の匂いが香った。そしてそれに混ざり絡み付く鱧えた臭い。

無言でゆんゆんに手で示し布で鼻と口を覆わせ、己自身も覆面を施す。

歩み、進むほど見えてくる。木々に、地面に突き刺さった長さは一尺か二尺ばかりの黒く細い棒。そしてそれが刺さった個所は何れも黒ずみ、煮崩れたかのように泥濘化していた。

これが話に聞く毒針か。

「麻痺だ神経だつてえならまだしも可愛かったな。奴めの毒はどうやら触れた端からそれを侵し蝕むようだ」

「……」

「? どうした、おゆん?」

「い、いえ、あの、針の大きさが……」

「! 隠れろ」

前方から気配を聞き取って、傍らの娘子を引っ張り込み木の裏手に身を隠す。

「マンティコアですか!?!」

「そのようだが……もう一頭、おるな」

慎重に、木々の影を伝いながら近寄っていく。大気を揺るがせる音と威勢。獣の、鳴動を異にする二種の咆哮。

不意に隠れ蓑たる木々の途切れ目に行き会う。拓けた地面、浸食され露となった岩肌、それに囲われるように空いた窪地に満ちる豊かな水。森の只中に湧き出た大地からの恵み、この場所は、それは美しい清泉だったのだろう。

今では見る影もない。随所が溶け崩れた草木に覆われ、濁り淀んだ毒沼が眼前にある。

そしてその沼の畔でソレらは対峙していた。

「ゴルルルル………」

片や人面獅子。身の丈は優に三間(6m)を超える巨軀。やや緑がかった体毛で全身を覆い、鬣は黒。顔は一見して男とも女とも付かぬ。形相ばかりが険しくも禍々しい。

「キキキッ!!」

片や鷲にして獅子。並ぶ木々の天頂よりもやや高くで翼を羽搏はばたかせ滞空している。鷲と同じく白牡丹のような鮮やかな純白の羽毛、鋭い鉤爪を具えた猛禽の前脚、そして胴から後ろ脚は太く強靱な獅子の

それ。合成獣などと純名あだなされるも肯ける奇怪な有様よ。

しかし、すぐさま湧いた不審が口を吐いた。

「小さいな」

「大きい……！」

「ん？」

「え？」

はてな、とゆんゆんと顔を見合わせる。

あのグリフォンは体高、体長共に馬と同程度。相對したマンティコアの巨体に比べれば一層その体軀の小ささは際立った。が。

「マンティコアですよ！ あんな大きな個体、紅魔の里でも多くありませんよ!？」

「おつとそつちかい。するつてえと……あのグリフォン」

その前脚を見る。何れも傷など付いていなかった。

その体、特に腹を見る。孕み腹には到底見えず、さりとして産後間もないといった衰弱も見て取れぬ。

威嚇の咆哮こえ、翼の扱い……何よりその眼。不純物を一切宿さぬ澄み切った、無垢の眼。自身を遙かに超える巨大な敵を前にして当然発すべき一抹の怯懦の色すら浮かべぬ、それは無知の眼だった。

「そうか。あれが雛鳥か」

「雛？」

「ここ三月の内に子を産んでいたのだろう。」

「ああ、そうかい。腹の子の為……」

出産を控えた親鳥は自身の滋養、そして産まれてきた雛の餌を求めて、己が縄張りを逸脱してまでも狩りへと赴いたのだ。

そして運悪く、あの人面獅子の領域を侵してしまった。

どのような戦闘風景が画かれたのか、それは想像するより外ないが。親鳥は敢えなく返り討ちに遭い手傷を負って逃散した。それで済めば事は単純だったろう。

しかし、マンティコアはそれだけでは満足しなかった。どころか、今度は彼方がグリフォンの領域を侵し、それだけに留まらず己が新たな居城として全てを奪い取らんとしている。

「さて、どう出るかね」

「……どつちの味方をするか、つてことですか？」

物分かりの良い娘に笑んで頷く。

マンティコアはその尾を真横に振るつた。先端に群生した針がその勢いで抜け飛ぶ。狙いは当然、自己を見下ろす有翼の獅子。

一際大きく翼をはためかせてグリフオンは針を避ける。避ける。一本や二本などと端な数ではない。二十と夥しい数が一斉に注がれるのだ。しかもかの毒針は掠り傷一つが致命となる腐蝕の猛毒入り。雛といえど、グリフオンはそれを理解しているのだ。故に避ける。避けるより外に術がない。

一進一退と言えば聞こえは良いが、内実の情勢は至極一方的。

「……雛は、そう長くは持つまい」

右へ左へ尾が振るわれる度に空を覆う針の幕。

グリフオンは一向に近寄れぬまま、しかして弾幕を躲さねばならず悪戯に体力だけを奪われている。滑空ならばいざ知らず、飛翔し滞空するには常に羽搏き続けなければならぬ。それもこのような宙の低みで、雑木林を気にして満足に速度も出せぬとあっては。

程なく、動きが鈍り始めた。高度の維持すら儘ならない。

飛翔という優位性が死ぬ。

マンティコアは自身の間合を誤りなく把握していた。グリフオンが一定の高さに達した瞬間を見逃さず——跳び掛かる。

「ガア!!」

「キィ?!?!」

獅子に相応しい太く強靱な前脚、そしてその指にもまた獲物を捕らえる為の爪が具わっている。

空舞う鷺は地上へ引き墮とされ引き倒され、仰向けに転がったところをマンティコアは前脚で踏み付けた。胸の辺りを押さえ付けられ、グリフオンは地面に張り付け状態となる。

藻掻き、足掻き、何としても拘束から逃れんとするグリフオンをまるで嘲笑うかの如く……いや、事実その人面には禍々しき笑みが浮かんでいた。組み伏せた非力な弱者を嘲弄し、自己の強力を誇り驕る。

そう、初めからあの人面獅子は、グリフオンの雛など手遊びの的としか認めていなかった。あの雛の拙い飛翔能力が相手ならばいとも容易く決着を付けられたろうに。羽虫の羽を一枚ずつ雀り取るかの悪辣な嗜虐心。そんなものが、ありありと透けて見えた。

なるほどあれこそは魔物の名にし負う、邪悪の嗤^{えみ}よ。

「……」

この時点で己の腹は九分九厘決まっていた。鞘の鯉口を握り、指は鏢に掛け何時なりと抜刀が能う。

しかし、待つ。

「グルルルル……！」

「キツ!! キュイツ!! キキツツ!!」

未だマンティコアはグリフオンを踏み付けにしたままその無様を見下ろしている。止めも刺さず、さりとて爪や毒針を使って甚振る素振りもない。

一方で、静止したままの体に比して、針の尾はゆっくりと動き続けた。す、す、と半円を描くように、それこそ鎌首を擡げる蛇同然に。

(怪物めが)

やはり、思った通りあれには――

「っ！ ダメ!!」

「!? 待て！ おゆん!!」

突如、木の影からゆんゆんが躍り出る。こちらの制止など耳に入らず、広げた掌を頭上へと翳し。

「『ライト・オブ――』」

どのような魔法を繰り出すつもりであったのか……知る由もない。それが発現するだけの暇が与えられなかった。

毒針が、狙い過たずゆんゆんに降り注いだのだ。

「えっ？」

「！」

立ち尽くす娘子を、轉身しながら追い抜く。その真ん前へと陣取る。

飛来する針の群へ、相對する。

五本。襲来する数十の針の内、命中の軌道にあるのはたったそれだけ。それだけ斬り落とせばいい。

既に抜打ち、一本目を斬り折った。

二本目、三本目を返す刀で同時に落とす。

「ちいッ……！」

四本目が右肩を掠めた。

五本目を縦に両断して即座、逆手に持ち変えた刃で肩口を裂く。垂れるほどだった血が小滝めいた勢いを得て流れ出る。

「シノギ、さん……？ —— つつ、あ、あぁつ、シノギさん!?」

「一旦退く。立て直しだ」

「っ！ は、はい……！」

狼狽しかけたのもほんの一瞬のこと。娘はこちらの言を聞くや泣き言全てを飲み込み、前を見た。目の前の現実を。

猛烈な勢いで人面獅子が迫ってくる。針で手傷を与えた獲物。狩り獲るに何の労苦も要らぬ、とでも踏んだのだろう。

今自身が足蹴にするもう一匹を放り捨ててさえ。

「呵々っ、一二兎目を追ったな？ 愚か者め……！」

爪先で足元を小突いた。それは其処ら中に幾らでも散らばっている。惜しげもなく寄越してくれた。有り難いことよ。

針を、宙に蹴り上げる。くるりくるりと回りながら己の胸先ほどに舞い、上がり、重力の引手に捕まる。後は落ちるのみ。落ちる。その前に。

左脚を斜め前方へ踏み出し、地面を削り固定。同時に、上体を半回転、その回転運動に合わせ右脚を繰り出す。斯く在りて体重移動力は遠心する。力は体軸から大腿、脛から足首、遂には脚甲へ到達。

生木の撓りめいた蹴撃の狙いは一点、空中を舞う毒針。

—— つまるところ、針の尻を思い切り蹴り込んだ。

びゅん、と。真っ直ぐに射出されたそれは、意気揚々と喰らい付いて来たその人面の、左目に深々と突き刺さった。

「ギツツ?!?!? ギャアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアア!!!」

「大当たり」

「目を閉じてください！ 『フラッシュ』!!」

咄嗟に腕で顔を覆う。

それでもなお凄まじい光が辺り一面を照らしたのだと、この目に走る鋭痛が物語る。

「ギイイイイイイイイ?!?!」

残った右目を焼かれたマンティコアの激痛に比べれば、微々たるものであろうが。

地を盛大に揺らしながら、真緑の巨体が打ち揚げられた魚のようにのた打ち回っている。

これ幸いと、我々はその場を退散した。

念を入れて、逃走先は村から逆方向へ行く。まかり間違つて怒り狂った怪物が村を襲うような事態だけは避けねばならない。

幾重にも連なる木立を抜けること四半刻ばかり。

相応に距離を稼いだことを見計らい、一本の木に背を預けて座る。

「シノギさんっ!」

途端に娘は飛び付いてきた。傷口を診ようとする手をやんわりと往なし、被っていた白布をジャケットの上から巻き付ける。

圧迫はごく弱く。血は流れるままにさせ毒の流出を促す……気休め程度の処置だが。

「わた、私のせいで……!」

「いいや、お前さんの御蔭よ。雛鳥は無事に逃げ果せた。まったく……己がもたもたと動き出さぬばかりに危うく手遅れになるところであった。いやあ御手柄だぜ、おゆん」

「つつ……そんな、そんな風に、優しいこと言わないでください……」

私のせいなのに……私が先走って相手に気付かれたから……!」

ぽろぽろと涙を溢す娘子に笑みを返す。

今にも罫り殺しの目に合わんとしている仔鳥を見て、煩雑な戦の勘定などする己こそがどうかしていた。娘は頭ではなく、心で動いたのだ。その行いを責める理由が一体全体何処に在る？

一度鼻を吸ると、娘は涙目に力を込めて己を見た。

「リタイアしましょう。すぐ街に戻って、プリーストの人を探して浄化魔法を掛けてもらわないと……」

「いや、街へ取って帰すにはまだ仕事が残っておる」

「な、本気ですか!」

「ははは、応とも。いやなに、別に意固地で言ってんじゃあねえ」

娘は蒼い顔に固い表情を浮かべる。

それがどうにも労しく、思わずその目尻の涙を拭っていた。

「んっ……」

「泉までの道中、森の様子は目にしたであろう。己の見通しが甘かった。事態はもはや火急の極み、そしてここが瀬戸際だ。今あの人面獅子を何とかしなけりや、この山……否、山谷原野の一切尽く、尋常な生き物の棲めぬ魔境となろう」

様は無い。マンティコアという魔物を侮った附け。この傷は、己が未熟を知る良い目印である。

——そして、次は此方の手番だ。

「そ、そうかもしれないですけど! ピュリフイケーションだっ毒が回り切ってからじゃ意味ないですよ!?! もしっ……もし手遅れに、なったりしたら」

「うむ、それもそうだ。なればこそ己の命がある内に手早く済ませねばなるまい」

「っ! シノギさん!!」

蒼かった顔が途端に紅潮し、娘は怒りも露に泣き声を上げた。

「言っつていい冗談と悪い冗談があることくらいボツチの私にだって解るんですからね!? 本当の本当に洒落にならないくらいマンティコアの毒は危険なんです!! だから私こんな焦って心配して右往左

往してバカみたいじゃないですか!? それなのに! それなのに!
!」

「おおどうどう」

ガ―、と仔犬の威嚇のようにゆんゆんが発奮する。両手を上げて降参を示すが、一向取り合ってはくれぬ。

「すまんすまん、そう怒らんでくれ。堪忍してくれい。うむ、己の物言いが無思慮だったな。ああそうだそうだ。お前さんの言い分が正しい。すまん、許してくれ? な?」

「もお!!」

己の謝罪をその場凌ぎとでも受け取ったか、娘は膨れ面でじと目を呉れた。同じ紅魔族と聞いてか、思い出されるのはやはりあの傾いた娘っ子の顔だった。

「さあ時間も無え。幸い毒の回りは頗る鈍い。この五体が自在の内に片を付けようぞ」

「……マンティコアを何とかしたらすぐに街に帰ります。約束ですよ?」

「ああ、約束しよう」

上目遣いに睨まれたれば、唯々諾々肯かずにはおられぬ。
なかなかどうして、人を誑せる娘だった。

手柄と一口に言ったが、それは何も雛鳥の窮地を救ったことのみではない。
むしろこれこそ、娘の大手柄と言える。

「あの怪物、尻尾にも目がありやがる」

「目……?」

「や、物の喩えでな。本当に目玉が埋まっている訳ではない。しかし、

そうやって差し支えないほどに、あの尾っぽの感覚は鋭敏なようだ」
獅子の人面は完全にグリフォンを見下ろし、我々はその死角に当たる方向の木立の影に隠れていた。

にも関わらず、ゆんゆんが飛び出した瞬間にも彼奴はこちらの姿を捉え、且つ攻撃してきた。反応、行動までの淀み、時差とでも言うべき間は限りなく絶無^{ゼロ}。

つまり、あの怪物は初めから第三者の存在を感知しており、その尾で以て周囲を探りを入れていたのだ。そして「グリフォンとの戦闘行為」を囿として、まんまと我々を誘き出してみせた。

「返す返すも、狡猾よな」

そして、悪辣であった。思い出されるのは、己がこの世界を訪れた日、初遭遇した『初心殺し』と呼ばれる魔物。手傷を与えた獲物を態^{わざ}と逃がし、それを助けに来た者ら諸共狩り獲るといふ凶悪な知恵。

これを斃すとなれば、こちらも同等以上の知恵を絞るか……あるいは。

「おゆん、ちよいと頼めるかい？」

「な、なんですか。私に出来ることだったら何だってやりますよ!!」

「ははっ、そりゃあ心強い。だがまあ、やるこたあ至極単純でな……」
気合十分に両手に握り拳を作る娘子。

その気負いを和らげてやる為に、努めて気安く。

「お前さんの魔法で、あの厄介な尾っぽをぶった斬って欲しいのよ」
「え!?!」

何処だ。

何処へ消えた。

あの忌々しい人間共め。

絶対に逃さぬ。絶対に見つけ出し、その腹を引き裂いて腸を啜り食ってやる。いや、いや、この身が味わった苦痛をそのままにして返さねば。ならばその片目を抉り出し、残った方の目の前でそれを噛み潰して見せてやる。

許さぬ。許さぬ。許さぬ!!

「つてえ処ところかい? 手前てまえの腹は」

「ゴアツツ!!」

草を踏み、木洩れ日を刃の肌で弄びながら、悠々と歩み寄る。

憤怒の情念をそのまま象ったかのような形相。兇相。人のそれに近い形をしているが為に、表出した感情は殊更に明白であり斯くも瞭然。

マンティコアは怒り心頭に発して、のこのこと姿を現した己を睨み付けた。

間合は五丈（15m）ほど。とはいえ、相手の巨体と脚力あらば一跨ぎの距離でしかない。

あの針に至っては、既に射程圏内である。

「駆け比べと行こうか」

「ガアアアアアア!!!」

一振り、二振り、立て続けに尾が振るわれ、夥しい数の針が眼前を覆った。

瞬発し、横つ跳びに躲す。動き出す様が見えている今、専心すれば回避それ自体は容易い。

問題は、避けるばかりでは一向に近付けぬということ。近付けねば斬るも斃すも話にさえならぬ。

あるいは二、三本受ける覚悟で踏み込めば。

（一太刀は浴びせられるか）

その一合で斬り切れればそれでいい。その後の己がどうなるかはさて置き、生態系を脅かす要因をこの身一つで取り除けるならばそれは安い買い物と言えよう。

しかし出来ぬ。それは今や選ぶことの叶わぬ選択肢となった。

娘に泣かれてはやはり、敵わぬ。

「おおつと危ねえ」

「グルルルル……!!!」

跳躍の着地点を狙って放たれた針を、剣の重みで叩き落とす。続く弾幕、斜めに斬線を走らせ、身体に通った射線の針のみ斬り払う。

走り、また走った。

「ああ忙しい忙しい」

「シイエエヤアアアアアア!!!」

「呵っ、五月蠅うるせえよ」

——手筈は、呆れるほど代わり映えしない。全く同じと表してもいい。

己が演ずるは今日この日この時もまた囃役。脚と嘲弄によつて魔物の気を引き、その隙を露見させることが御役目であった。

されど今日に限ってはこれが難行。

敵には二つの目があつた。顔に据わつた両目、そして尻尾に埋まつた感覚器という「目」が。

これら二つを同時に、己一身へと引き付け、他所を向かせず釘付けにせねばならない。

対敵マンティコアは実に用心深かつた。激昂し、宛あたかも視野狭窄、忘失の体である癖に、その尾は針を射出しながらに、今以てゆらゆらと揺れ動き周囲の警戒を怠つていなかった。

恐るべき戦馴れ。冷徹に、敵は伏兵の存在を確信している。

これでは奇襲など為し得ない。先程の焼き直しが関の山。どころか、さらに無惨な結果が待つていよう。

どうすればその判断能力を奪える。どうすればその沈着冷静の面貌を剥ぎ取れる。

どうすれば——決まっている。目には目を、歯には歯を。

悪辣な所業には悪辣な手管を弄すまで。

また毒針の雨が降り注いだ。それを、待ち受け、剣を振り被り。

打ち返した。刃の腹、取り分け鎬しのぎを使い、五、六本をいっぺんに。

「ガウ!」

跳ね返った針数本が一挙に、人面獅子の顔面へ殺到した。命中する前に、それは獅子の前脚によって防がれたが。

「ううむ惜しいな。残ったもう一つにも生やしてやろうと思ったんだが……」

「――」
嗤う。眼前の獣を嘲笑する。

指差し、口端を歪め、一目瞭然の意思を目一杯に表現する。

「それよ。そこに埋まっておる目玉よ。大事な大事な最後の一個だ。しつかり守らねば、ほれ！」

「!!」

足元の針を蹴り飛ばす……真似をする。

実際には、土を幾らか削っただけだ。

しかし反応は劇的であった。前脚を上げ、獣は自身の顔を庇った。

そしてそれがただのふりであったことを覚った時。そしてそれを見られ、見たその人間がどんな顔をしているのか認めたと瞬間。

「ツツツツ!!!!」

咆哮は音を伴わず、代わりに何かが切れた音を聞いた。神経か、血管か、それとも堪忍袋の緒か。

「呵呵ハハハハツツ！」

「アアアアアアアアアアアアアアアアアツツ!!!!」

十重二十重、針が視界を覆う。弾幕から間隙が消えた。

疾走し、木々の裏、影を渡る。樹皮と幹を抉る弾着音、次いで響くじゅぐじゅぐとした悍ましい濡れた音色。

幹の中心までも溶かされた木々が次々に立ち枯れ、続々と倒れていく。

このまま行けば森中の木が枯れ落ちても不思議はない。いや、森の全域が禿げるよりも前に。

「ガアアア!! ハッハアアアア!!」

「……こいつぁ不味い。隠れ蓑がなくなっちゃった」

針の雨霰を凌ぐ盾となるべき木が、もはや数も無い。周囲は一気に開拓され、一面の枯地を晒している。

逃げ隠れる場を失いつつある鼠を、怒りと喜悅の緋い交ぜになった兇相が笑う。

これで終わりだと、尾が振るわれた。

「っー」

それを前に、己が為すべきことは変わらない。

真っ直ぐに走る。人面獅子に背を向けて。

これは間違いなく暴挙。背を見せることは勿論、射撃に対して直線方向を逃走するなど愚行中の愚行である。

獅子は容赦なく己を背中から射殺そうとするだろう。踵の先に針の着弾を感じる。

背骨に走った悪寒を頼りに剣を背後へ振れば、寸でのところで針が手元で弾かれた。

次の刹那、針は自身を貫くだろう。その次のもう一刹那で、我が身は文字通り針の筵むしろとなるだろう。

同時に、針を放ちながら猛然と追走してくる人面獅子。彼奴は何の手心も無く毒で煮崩れた己を轢き潰すだろう。

その前に、至る。この脚を届かせる。

走り、走り、走り——その末にようやく辿り着いた。

眼前に迫る大樹。幹回りは大人三人が両手を広げて届くほどの、見事な巨木。

「はあっー！」

その樹幹に、足を掛けた。樹皮を踏み付け、一気に駆け上がる。

その足跡に追い縋るように針が次々に刺さり刺さる。

一切の減速なく駆け登る。駆け抜け、そうして踏むべき幹が消えたその最上、頂点で、跳んだ。

「ガアッ!？」

空中で身を躍らせ、転身して眼下を見やった。

地上から三丈（10m）弱、見下ろす先には人面獅子。その人面が驚愕から一変、喜色満面を浮かべた。

「……」

飛翔する為の翼も持たぬ人間風情が、空に。宙に身を投げた。自ら

射撃装置を失った獅子は、尾を断たれた痛みと不意を打たれた衝撃にもはや迎撃の構えすら取れず。

対して己は、我が身を重力の手に委ねて刃を返す。切先は真下を差し、逆手に握った剣を構えてひた落ちる。

真つ直ぐに、人面の眉間目掛けて。

「あばよ」

するりと、実在を疑うほどに軽く、皮を肉を頭蓋を、脳髓のその幹を貫いた。

一つの生命を刺し殺した。

血振るいし、刀を鞘に納める。

思いの外に手間取った。事程左様に己が見通しの甘さを右肩の傷共々に痛感する。

「己もまだまだ……か？」

自己の未熟を嘆くべきか、琢磨する余地を知り喜悅すべきか。ふと思案などしてみる。

考えてはみたが、どちらもただ気疲れだった。悲喜交々を思つて揺れ動くを厭う。それこそ正しく魂の老い。

耄碌爺が張り切り過ぎた。今回の顛末は、つまりはそれだけのこと。

帰ってカズマに愚痴でも投げよう。酒と飯を幾らか食らわせれば、少しは付き合ってくれるだろうか。

「シノギさん！」

「おう、おゆん」

少し離れて潜んでいたゆんゆんが小走りに寄ってくる。

思えば今回この娘には世話を掛け通しだった。何か礼をせねば。

などと思ひ巡らせていたところ、傍に駆け寄ってきた娘はさつと己

の手を取るやぐいぐいと引っ張って行くとする。

「つとと、どうしたどうした」

「どうしたもこうしたもないです!! すぐにアクセルに戻りますよ! もう時間がっ、早く解毒しないと……!」

「ああ」

そういえばそのようなことを言っていた。いや、約束していた。しかし、どうにも慌てた心地は微塵とて湧かぬ。さらに言えば、心身は至って平常運行。

「おゆんよ、どうもその必要は無えらしい」

「何言ってるんですか!?! もういい歳して病院に行きたくないとか言わないでください! さー、行きますよ! 早く早く」

「いやいやそうではなくてな。毒気がな、どうにも感じられん。調子も変わらず、体もこの通り平気の平左と来た」

「はあ!?! そんな訳……あれ?」

己の顔を見て、体を見て、もう一度顔を見て、そうして今度はぺたぺたと其処彼処を触り出す。

血は多少失った感を覚えているが、傷の痛みは見た目通り、腐蝕毒による浸蝕のような激痛や毒症にありがちな嘔気、目眩、発熱もない。有体に言ってぴんぴんしている。

「な、なんで……? 確かに毒針で傷付いたのに……」

「うむ、心当たりが無いでは無い」

頻りに首を捻るゆんゆんに、鞘に納めたそれを見せた。

「諸々省くが、こいつぁ血と魂を喰らう妖刀だな」

「はあ!?!」

「毒を出す為に傷口を斬り裂いたのだが、血を摘み食いしたついでに毒気も吸い取っちゃまったようだ」

「あ、あの、冗談ですよね? 私が紅魔族だから喜びそうなお話を作ってくれてるんですよ?」

「これが冗談のような真の話でなあ。ははは」

「笑い事じゃないですよ!! 捨てましょう!! 今すぐに!!」

「ははははは」

「ああまた笑って誤魔化されてる!？」

今更驚くことでもない。呪われた妖刀が毒をも喰らう。むしろ自然の有様とさえ思える。

まあ、少しばかり理屈をでっち上げるなら……あの毒は、所謂生物学だの化学だのが網羅するところの自然物ではなく、むしろ異世界側の、魔法だの呪法だのといった類の摩訶不思議な代物だったというのとだろう。

非実体の、魂などというものを喰らう刃金。生き物を蝕む殺意の塊たる毒はさぞ、その偏食と悪食な舌に馴染んだらうよ。

思わぬ効用……などと思えて堪るか。悍ましさに拍車が掛かったわ。

さ、あれど。

「使えるか」

「なにに!? そんな物なにに使う気ですかシノギさん!？」

「おいおい、別に悪さしようってんじゃねえぜ? ちよいと気懸りなことがあつてな」

慌てふためく娘つ子を、またどうどうと宥めつつ。

頭の隅に置いた記憶を手繰る。

「あの雛鳥、何故ここに居た」

「へ? 何故って、この辺は元々グリフオンの縄張りだって村の人が……」

「縄張りの主を張っておったのは親鳥の筈だ。親鳥が死んだら、仔鳥がこの土地に居座る理由はあるまい。何せ分かり易い脅威が、さんざ森だの山だのを荒らし回っておるのだからな」

それでも、あの雛は逃げるところか無謀にも戦いを挑みさえした。結果はどうあれ、雛のマンティコアに対する敵意は明白。

無知故の蛮行? それともグリフオンとは生来血気盛んな生き物だからか?

違う。そうではない。

雛にはこの土地を外敵から守らねばならない理由があつたのだ。

それは、おそらく。

「親鳥は、生きておるかもしれん」

場所は泉からも程近い。林を抜けた先に、岩肌を晒した険しい山岳が横たわっていた。そこからさらに歩けば断崖に突き当たる。見下ろせば見付かった。

岩壁の中ほどにぼつかりと空いた洞穴。そして、吹き上がった風に乗って枯草と糞尿と、何よりも獣の臭いが届く。

手近な岩に縄を括り、するすると崖を降りる。

穴に辿り着き、足を踏み入れればもはや間違いようもない。ここはグリフオンの壻であった。

「よう」

「キッツ……！」

低い唸りと甲高い嘶き、雛鳥が身を固くして己を睨む。

そして、その奥。洞の暗闇に目が慣れるほど、その偉容は益々大きさを増すようだった。

双眸が我が身を射抜く。雛のそれとは比べものにならない、生きて歳月を余さず混淆し、煮詰め、凝縮したかのような力強さ。

体格は、先のマンティコアに優るとも劣らない。雛鳥が真実雛であったことを再認識できる。

グリフオン。聞きしに勝る怪鳥ぶりよ。

「ク……」

だがそれも今は、本領とは程遠い。ぐつたりと横たわったまま、ただこちらに顔を向けるだけで精一杯の様子。親鳥は弱り果てていた。腕には傷がある。針は既に抜かれた後のようだが、どす黒く変色し血の流れも止まった傷口は見るも無惨。

毒に侵されたまま、むしろよくぞ今まで生き永らえたものだ。生物としての強靱さは、人間などとは比べようもない。

限界はすぐそこまで来ていた。もうあと僅かな時間で、さしもの大怪鳥すら命運を天に還すこととなろう。

「……」

鯉口を切り、刀身を鞘から抜き放つ。

「キキッツ!!」

当然と、雛鳥が翼を広げ咆哮した。敵意を剥き出しに威嚇を繰り返す。もう半歩でも近付けば、威嚇は鳴り止み、今再び闘争が幕を開けよう。

「言葉なぞ解る筈もなからうが……」

容易には近付けまいと予想は付いていた。武器を持った人間に野生の獣が早々気を許す訳がない。

だからとて、上策は浮かばなかった。情けない話だが。

「し、シノギさん、待ってくださ……ふえ!? グリフォン!? こ、こんなに大きいの!?!」

そうこうする間に、ゆんゆんがおっかなびつくり縄を伝い降りて来てしまった。

こうなれば無理矢理にでも……そのように、粗雑な考えに流され掛けた。その時。

「……」

「!?!」

低い唸りが洞に響く。ひどく静かな、それは獅子の鳴き声だった。

驚いたように親鳥を見上げる雛。親鳥は雛をその嘴で撫で、擦り、

そうして引き離した。

別離わかれの挨拶を終えたのだ。

親鳥が己を見据え、その頭を垂れる。まるで刑場、土壇場で項垂れる罪人のように、その首を差し出してくる。

我が首級くびを呉れてやると、親鳥は言っているのだ。

己らが何者であるのかを覚り、己らがマンティコアを斃したことをも覚り、そして自らが狩られることを許容した。

雛鳥の代わりに。

「……まったく。見事だ。天晴れな覚悟だよ。強きものよな、母親と

「というのは」

どの種族でも、どの世界でも。

母の覚悟に敵うもの無し。

刀を構える。上段。視線はただ一点を射す。

「っー」

裂帛を発し、刃を振り下ろした。

断頭台に差し出された首——ではなく、その腐り掛けた傷口へ。

皮一枚。殺ぐのはほんのその程度でいい。

傷口から綺麗に一枚の皮を切り落とす。刃には、血糊がべつとりとこびり付き、赤黒い尾を引きながら辺りに飛び散る、などということは一滴とて無い。

傷口からは続々と血が流れ出続けた。まるで重力を忘れたかのようになり、毒気を孕んだ黒い血は、半円の橋を宙に架けながら、それ以上に紅く黒い刃へ吸い取られていく。

「ひ、ひええー!?!」

ゆんゆんの叫びに苦笑する。これの非常識さと、こんなものを使う己自身とに、呆れ果てて。

存分に吸い、食い、満足したか。刀は鈍い銀色に戻り、超常の怪力も鳴りを潜めた。

そして肝心のグリフォンは、あまりの事態に混乱しているのか。ただじつと己の顔を見詰めていた。

「ん、傷を診せな」

返答などしようもない相手だ。勝手に見分させてもらう。

傷口は先程のどす黒さが嘘か幻の如く、今では赤い鮮血が流れている。毒気は完全に吸い尽くされたようだ。

ふと思いい立ち、ジャケツトを脱いで開襟シャツも脱ぐ。右袖は破り捨て、残りの部分を小刀で斬り裂き整えていく。

「し、シノギさん? 何やってるんですか?」

「纏まった長さの布が無いんでな。こいつで我慢してもらおうのよ」
出来上がった包帯を、親鳥の腕に巻き付けていく。

「これも気休めだ。腕が元通りに癒える保証もない」
無責任に、伝わるかも分からぬことを言い置いて。
包帯もまたしつかりと巻き終えて。

「……さて、己の用は済んだ」

複雑な色彩の、その双眸を見上げる。

「親子共々、達者でな」

村への帰路、娘と二人連れ立って歩いた。

日も傾きかけている。空は次第に茜に染まっていくだろう。刃金の紅とは違う、穏やかで暖かな色に。

「随分と世話を掛けたな、おゆん」

「い、いえいえいえ！ 私は別に、そんな、大したことしてないっていうか、ただ慌ててやらかしたただけっていうか！」

「何を言う。お前さんの御蔭でこれほど上手く事を運べたのだ。改めて礼を言う。ありがとうよ」

「……………」

笑みと謝辞を送ると、突然娘は押し黙ってしまった。

かと思えば、額から汗して顔色を青へ赤へ変え、口はもごもごと声と言葉を出そうとしては飲み込んで。

「し、ししシノギ、さん」

「おう、なんだい」

「そそそその、ああああああの」
「うむ」

今日何度目かの百面相。まっこと面白き娘子よ。

気長に待つ。待ってやればいい。

「わ、わた、わ、私と……」

「ん」

「私と、こ、これからも……!」

一世一代、決死の覚悟を固め、力を振り絞って、ゆんゆんは口を開いた。

「私と、これからも一緒に……!!」

「? あれは」

「い、一緒にパ」

「剣士さん!! 魔法使いさん!!」

「ひゃい!」

ゆんゆんがその場に跳び上がる。

声は林道の向こうから。こちらに息せき切らせて走り寄ってくる人影が見えた。

顔は覚えていた。村の男衆の一人だ。

「安心しな。首尾は上々」

「ち、違うんだ! 今、街に物売りに出てた若い衆が帰ってきたんだが……」

男は汗みずくになりながらも言った。

「魔王軍の幹部がアクセルを襲ってるってよ!」

30話 首無しモノノフ

「くおるあ!! カズマ! なんだそのへつぱり腰はよお!! ツルハシはもつと腰入れて使いやがれい!!」

「はいいいすいやせん!!」

「バアツカヤロウ!! そんな持ち方してつと怪我しちまうだろが!! 土建のドの字も知らねえ冒険者のトーシロが小綺麗にやろうなんて欲張るんじゃねえ!! まず安全第一だコノヤロウ!」

「すんまつせん!! はいすんまつせん!!」

すつきり爽やかに晴れた空へ木霊する暑苦しい怒声と悲鳴。

鳴いて、もとい泣いているのはいつも通り俺だった。

「アクアの嬢ちゃん!!」

くわつ、と鬼のような顔の親方はアクアに振り返り。

「相つ変わらず良い仕事だぜ。うちでもう一年……いやあ半年もやってりやすぐ左官の頭になれる腕前だ。なあ、何度も言うが、この道を本気で極めてみる気はねえか?」

物凄く神妙かつ真剣な声で親方は言った。冗談めかした風など一切なく、心底から思ってた言葉なのだそれは誰にも明らかだった。

そんな親方を前に、青髪女は鼻から吐息して首を横に振った。

「芸術ってものはね、求めちゃダメなの。ただあるがままを魅せてこそ観衆の心を動かせるのよ。この白く滑らかな壁は私の心そのもの。不純のない清く美しい私そのものを表現したからこそ、これほどの出来栄えに……」

ものっそいドヤ顔で天狗、もとい嘘八百並べ立てた後のピノツキオばりに鼻を高くひん伸ばしたアクアが長々と講釈を垂れている。

(女神ってなんだっけ)

捻じり鉢巻きにニツカポツカ。右手に鋺を、左手には塗り材を。それはどこからどう見ても立派な土木作業員で、左官職人のアクアで

あった。

今日も今日とて俺とアクアは土木作業に勤しんでいる。

モンスター討伐系の依頼がギルドの掲示板から絶えてこれで何日目だろう。ああだこうだとぼやいでも、日々の食い扶持がどこから降って湧いてくれる訳も無くて。

結局は異世界転生以来お馴染みなアルバイト生活に戻っている。

「よおし!! 切りもいいところで昼飯だ!!」

『ういっすー!』

親方の号令に作業人足一同が威勢よく応える。

皆それぞれが持参した弁当なり出来合いの軽食なりを広げ、自分とアクアもその辺の材木を椅子代わりにして昼飯を取り出した。

「あー、ジंकクロウがいれば弁当作ってもらえたんだよなー」

「そうね。昼ご飯代も浮くし次があつたら絶対捕まえないと」

「いや材料費くらいは出せよ。食い物までタカリでしたら本気で終わりだぞお前」

流石にその、最後の尊厳だけは守って。

落ちぶれ果てたアクアと知り合いとか思われたくないから。

最近、裏通りから表通りに進出したというケバブ屋のケバブサンド。たっぷりの野菜とたっぷりのジューシーな牛肉を挟んだパンに齧り付く。甘辛いソースが肉の旨味を引き立て、しゃきしゃきとした野菜は絶妙なアクセントだった。

「んぐ……結局昨日は戻らなかつたな、ジंकクロウ」

「はふはふ、がふがふつ、んぐぐ……山の向こうでなんか討伐だっけー? そりゃ一日で戻るなんて無理に決まってるじゃない。なに? なになに? カズマさんもしかしてまた寂しくなっちゃった? おじいちゃん遠くに行つて寂しくなっちゃった?」

「うつつぎい煽り方すんじゃねえよ! なにそのゲス顔!? ゲスすぎて逆にすげえわ! 鏡見てこい自称女神!」

食べカス塗れの口でニチャアっと笑みを作つてこちらを心底こき下ろすアクアの邪悪っぷりにむしろ感心すら湧く。

「だいたいその爺が出掛けて一番ご機嫌斜め……というか急転直下し

てる奴があそこにいるだろ」

外壁工事用の石材やら木材は牛車で運ばれる。荷車を牽く牛の為の餌、干し草がそれこそ荷車に山盛り一杯積まれてあるのだが。

俺はその頂上に指を差した。

「……………」

その頂上で、大の字に寝転んだままぼくくくつと空を仰ぐちまつこい少女に。

地面に突き刺した杖に帽子を引っ掛け、ただひたすら日向ぼっこに精を出すめぐみんがそこにはいた。居たというか有った。何せ身動き一つせずにいるもんだから、もはや干し草の重石と化している。

「おいカズマ」

「はい？」

のっそりと近寄ってきたのは親方だった。親方は髭面をこつちに寄せてひそひそ声で言う。

「あのお嬢ちゃんをどうにかしてくれ。日がな一日あそこに陣取ったまま動きやしねえ」

「いや、俺も何回かどけて言ったんすよ。でもこう梃子でも動いてなるものかって感じで。親方からも言っちゃってもらえないっすか。いやホント遠慮なく叱り飛ばしてもらっていいんで」

「バカヤロウ。あの年頃の娘つ子にそんな真似できるか。どんな口汚い反撃喰らうかわかったもんじゃねえや。うちの娘もよお、あれっくらいの頃は反抗期が酷えのなんの……」

厳つい顔がしなしなとしよげ返る。父親に対する反抗期の娘の当たりの強さが恐ろしいのはどの世界でも共通らしい。

「お、お嬢ちゃくん？ そんなところで寝てると牛にかじられるよ？降りてきてくれよ、ね？」

「仕出しの余りだが、昼飯にどうだい？ 聞いている？ 聞いてないか！ ははは！ ……はあ」

それはそれとして、親方だけでなく工事に駆り出されている大工のおっちゃん連中までめぐみんの扱いに困っている。

腫れ物というか、おっかなびつくりというか。無言で不動で大の字

を貫く少女というやつは、おっちゃん達にとって未知の生物ないし珍獣に当たるとして、退かすことも叱ることも出来ずお手上げ状態だった。

あれだけ不機嫌オーラ発散しまくってれば然もありなんって感じだ。

「カズマ！ ほれ、ほれ」

「お前のパーティの子だろうが」

「なんとかしてくれ、いやしてくださいお願い」

「ええ……」

ムキムキマッチョメン共にせつつかれて、干し草の山へと不承不承近寄る。

「めぐみーん」

「動きません」

「うわお意志が固い」

一言発する間も取り付く島もねえ。

「今ゆんゆんをどう折檻してやろうか熟考してる最中なんです。邪魔しないでください。とりあえず乳ビンタ1000回は確定として……」

「やめたげてよお」

その子のクーパー靱帯が死んじゃう。

先日、ジंकクロウとお馬でツーシートを決めていた女の子はどうもめぐみんの知り合いだったそう。とんだ偶然というか重なる不運の必然というか。ホントに間の悪いことこの上ない。

めぐみんの不機嫌マツハ化の要因に、その事実が一役も二役も買っていることは言うまでもない。

要は一番の親友だと思ってた奴が自分に何も言わずに共通の友人と二人して旅行に行っちゃまった感じだろう……合ってるか合ってないかはともかく、なんか別の黒歴史が紐解かれそうになったので思考を止める。

「ジंकクロウにも勿論お仕置きを受けてもらいますよ。ちよつと乳がでかくて顔が良いだけの、誘えばはいはい付いてくるチヨロボツチ女

にうつつを抜かすなど許しがたい気のゆるみ。そんな男には……そうですね。あのいつも大事そうにしている剣に紅魔族的ハイセンスな名前を呪符で貼り付けてやります。向こう100年くらい絶対に取れない強力なやつを。いくら頼んでも触らせてくれないケチン坊にはお似合いの罰です。ふむ、ピョン吉なんてどうでしょうカズマ」

「やめろ。名前付けた途端元気に跳ね回りそうだ」
あれは、魂を喰らうとかいう中学生が授業中に考えたようなヤバイ設定を冗談でもなんでもなく地で行くマジモンの妖刀である。あれで斬られたジャイアントトードやコボルトが糸の切れた人形のように事切れる様を何度となく見てきたのでその効能に間違いはない。間違いであって欲しかった。

そんなド根性マジキチ刀がどっこい動き回る様を想像して……寒気がした。いや、まさか本当に動かないよねジンクロウさん？ 大丈夫だよねジンクロウさん？ ねえ!？」

一人戦々恐々とする俺をどう思ったか。めぐみんはじとつとこちらを睨む。

「ふんっ、カズマはどうせジンクロウの味方でしょう」

「ああ？ いや、別にそんなつもりはないけど……」

「はっ、どうだか。口ではなんののかのと文句を言って、内心ではあわよくば女の子を紹介してもらおうとか考えてるんでしょう。カズマらしいゲスイ計算です」

「お前ん中で俺はどんだけ女子に飢えてんだよ」

「三日間飲まず食わずで荒野を彷徨ったジャイアントアースウォームくらゐ」

「化物級ってか!? 性欲お化けってか!？」

流石に酷過ぎる。寛大なカズマさんの堪忍袋の緒も、この言い草にはテツシユのコヨリ並の強度に落ちるといふもの。

「よおっしわかった！ お前がそんなこと言うんなら俺からも良い事教えてやる！ ジンクロウがそのゆんゆんって子と討伐に出掛けたのはなんでだと思っ!？」

「な、なんだと言うんですか」

「男は！ おっぱいが！ 大きい子が！！ 好きなんだよおおおおお！！」

「ツツツ!?」

天空を貫くように叫んだ。その真理（個人差があります）、その真実（主に大嘘です）を。

大気を震わせて響き渡った怒声。牧草を食んでいた牛馬は驚き嘶き、大工のおっちゃん親方達は唾然と固まり、昼飯を掻き込んでいたアクアは鼻からケバブの肉を吹き出した。

そして今の今まで不動を貫いていためぐみんは、堪らずといった風に干し草の上で飛び上がる。

「解ったか!? あの子が選ばれ、自分が選ばなかった理由が！ そうかそうかまだ解らないか！ ならば何度でも言つてやらあ！ お前には！ 乳が！ な——」

「その口を閉じろおおおおお!!」

次の瞬間、文字通りにめぐみんは飛んだ。中空に身を躍らせ、両手は交差させて前方へ、落下地点である俺に向けて。

「フライングクロスチョップだ!?」

急いで逃げようと背を向けた時には既に遅く。背中にチョップと押し掛かりを食らい、そのまま前のめりに倒れた。

「ぐおお、馬乗りからの裸絞めとか、おま、洒落にならん……!」

「言つてはならぬ一線を踏み越えやがりましたねコノヤロウ!」

「うるせー！ 不機嫌なだけならまだしも、勝手にメラメラ焼き餅焼いて他人にまで八つ当たりするからだ！ ガキかお前は!?」

「ええガキですよ！ ヤキモチですよ!! ガキがヤキモチ焼いちや悪いですか!?!」

「こいつつ、開き直りやがった」

「ガキどころか、まず最初に人のことを犬猫扱いたしたのはどこのどいつ達ですか!?!」

「くっ、このロリっ子め、20話近く前の話蒸し返しおってからに……!」

「ふふふ、口約束だろうと逃しませんよ！ 拾ったからには餌やり・散

歩・遊び（爆裂）まで責任持って請け負うのが飼い主の義務でしょう！ それなのにジंकロウはっ！……………ジंकロウは「っ？」

背後からの首の絞め付けは相変わらずだったが、少女の怒声が止む。漲っていた怒気が萎んで、なんとも弱々しく。

「突然、私達と他のパーティの魔法使いを引き合わせたり……………ここのところは何かと戦闘の指揮をカズマに執らせたり……………今回だって、私達に一言相談してくればよかったのに……………これじゃあまるで」

「めぐみん……………」

お前、泣いて。

「まるで、自分がいついなくなってもいいように、準備してるみたいじゃないですか……………」

「……………」

その言い分を的外れだとは言えなかった。というより、薄々勘付いていたことだ。

リーンと伝手を繋いでくれた時から……………ではない。もつと前から。

——この街で、ジंकロウに出会ったその時から。

なんとなく、いつかは、そうなるんだろう。そういう予感を抱えながら今まで付き合ってきた。

一線を引かれてるとかそんなややこしい話じゃない。言ってしまうえばシノギ・ジंकロウという青年は、ゲームでいえば期間限定のお助けキャラみたいな存在だった。

勿論、本人がそんなようなことを言った訳ではない。単に自分がそう感じていただけで。

不思議というなら、ジंकロウがパーティを抜けて自分達の前から去っていくかもしれない、その事実で内心で納得している自分自身がないにより、可笑しいくらい不思議だ。動揺も、戸惑いも、驚くほど少ない。

めぐみんはどうだ。こんなにも、泣いてしまうほどに、感情を揺さぶられて——

「そんなこと私は許しませんからねえ!!」

「うぎいあああ?!?!? めぐみんっ! ギブ! ギブう……!!」
「ジंकロウはもはや我が爆裂道の門下! 途中退場なんて認めませ
んんん!!」

その門下認定に本人の承諾は無いんだろ? 当然ながら。
寂しくて涙が出ちゃう女の子だもん、などという可愛げがこの口
リータ爆裂狂いにあるなどと一瞬でも思ったことを悔やむ。

めぐみんの肉付きの薄い細い腕の骨が喉仏を良い感じに圧迫して
苦しさ半端ない誰か助けて。

ぎやあぎやあ騒ぎに騒ぐ俺達二人に、ふとアクアがひよこひよこと
近寄ってくる。

「ねえねえちよつと二人とも!」

「へ、へるぷみーごつです……」

「なんですかアクア!? 私は今この男を絞め殺すのに忙しいのです
!」

「なんか門のところに変なのがいるわよ。それもめつつちやくちやア
ンデッド臭いのが!」

「え?」

工事現場からも程近い正門に目を向ければ、果たしてアクアの言葉
通り、ざわざわと落ち着きなく様子がおかしい。

そして、様子のおかしい奴がいた。

「だ、だから俺は! いやっ、ですから、私はただの旅の騎士でこの街
にいる旧い知人に会いに参っただけだ!」

「なら氏素性を詳しく聞かせてもらおう。それに騎士なら仕えている
主の名を明かせる筈だ」

「そ、それは、あー、そうだ! 今は浪々の身故、主君を持たず……」

「では以前に仕えていた主は? どの領主だ? 生まれは? 王国
に親類縁者はあるのか?」

「お、おい待て! この街では入門の時こんな検めはない筈だぞ!」

「うるさい怪しい奴め。不審人物に限っては検問も厳しくなる。入街
規則にもきちんとか載ってる決まりだ」

「こんな怪しい奴、俺が番兵の任に就いて以来初めてだ」

「さあ大人しく検問所へ来い怪しい奴」

「なんだそのローブと頭巾は！ 恥ずかしげもなくこんな怪しい恰好をして」

「馬にまで大布を被せるとはますます怪しいぞこいつ！」

大きな男だった。2メートルは軽く超える偉丈夫。全身を黒いローブで隠しフードを目深に被り、背中には布で包んだやたらでかくて長い板のようなものを背負っている。

そして、跨っている馬もまたでかい。工事の材木運搬に駆り出されている輓馬も相当な大きさだが、あの馬の体軀はそれよりさらに一回りは大きい。その馬にも、まるで姿を隠すように頭から布をほつ被せている。

衛兵の皆さんから理不尽なレベルで力一杯怪しまれるのも肯ける。あの見た目の奴を素通りはありえないわ。

普段なら、このまま事の成り行きを野次馬として観戦するだけなのだ。さつきこの駄女神は、不穏なことを口にしていた。

「……あれ、アンデッドなのか？」

「間違いないわね。くっさいくっさいアンデッド臭がぶんぶんするもの」

アクアは顔を顰めながら、鼻を抓んで顔の前をパタパタと扇ぐ。アンデッド臭なるものが一体どんな臭いなのか知らないし知りたくもないし、そもそも嗅ぐこともできないので理解は難しいが、この本気で嫌そうな顔を見るに嘘は吐いていないようだ。

アンデッド……この世界では屍鬼や死霊系のモンスター全般を差してアンデッドと呼ぶが、そんな生きた死人が下手な変装をしてまでこの駆け出しの街に何の用があるのやら。

「ふふふ丁度いいわ。ここのところクエスタ受けられなくて稼ぎも少ないし毎日のシユワシユワ量も減ってイライラしてたのよ。私の慈悲（腹いせ）でこの世から塵一つ残らず消滅ぐえ」

「駄女神ステイ」

秩序勢力所属のアクアにすればあれは怨敵に当たる。こうしてシャツの襟首を掴んでいなければ今頃は勝手に退魔魔法ぶちかまし

に飛び出していたことだろう。

目的も正体も分からない相手にそんな真似をして、事が平穩無事に終わる保証がどこにある。誰がしてくれる。少なくともこの女の所為で現在進行形で気苦労真つ最中の身としては、暴走暴拳は厳として阻止せねばならない。

「ほほう……」

「あ、ちよつ、まっ」

片方の暴走を捻り潰したかと思えば、また一人爆裂の導火線に火が付く。

帽子と杖を引つ手繰るように携えめぐみんが駆け出した。

「ああくそ！ ややこしい奴がややこしいことをー!!」

「衛兵諸君は退がってくださいー!」

「な、なんだ」

「どうしたんだいお嬢ちゃん。迷子かな？」

「いや冒険者の子だろ。外壁工事に來てる」

「ごめんなお嬢ちゃん。おじさん達、今仕事なんだ。向こうでお兄さんお姉さんと遊んでもらいなさい」

「迷子でも遊びに來た訳でもありませんよ!?!」

衛兵さん達の大人の対応は至極真つ当だ。

けれどそんなもの知ったことではないと、頭のおかしい魔法少女はビシリと黒尽くめを指差した。

「その不審者の正体はアンデッドです！ 呑気な衛兵は騙せても、紅魔族随一の魔道の才人たる我が目は誤魔化されません!」

さも自分が看破しましたとでも言わんばかりの高らかな宣言である。

小さな背中にようやく追い付き、その首根っこを捕まえる。

「ハハハ！ まったくこの子ったらもう！ すみませえくん失礼なことを……」

「ぎくうつつ」

「え」

愛想笑いで誤魔化そうとした矢先、そんな擬音が辺りに響いた。響いたというか言った。当の黒尽くめの、その口から、擬音語を発した。

んなベタな……。

「……」

「ななななななな、何を言ってるのやらわわわわわわかりませんなあ。おおおお俺が!? この俺がアンデッド!? ハハハハハハハハハハッ、そんな筈がないではないかおかしなことを言う娘だなあ! 俺がアンデッドに見えるのか!? どこがだ!? いや深い意味はないが! 参考までにどんところがアンデッドっぽかったか言ってみてくれ! 参考までに!!」

複数の無言と視線が黒フード男を刺す。八割方が呆れを含有成分とした微妙な沈黙が流れ、それに耐えかねたアンデッドの男が余計に騒ぐ。

「な、なんだその目は!? 俺は違うぞ!? 違うからね!? 今日^はは服装がちよつとシツクに決まり過ぎてるだけで普段はもつと明るい」

『ターンアンデッド』!」

「痛だだだだだだあー!?!?」

横合いからぺかーつと光が溢れ出す。それは真つ直ぐに馬上の男を貫いた。

まるで肉を火炙りにしたかのような音と共に、黒フードの男の身体から黒い煙が立ち上る。苦しみ、悶え、盛大に痛がった末、男のフードが捲り上がった。

その下には、黒鉄色の兜を被った頭がある。それ自体は普通の外見だ。全身フルプレートを着込んだ人間などこの世界では珍しくもない。

その頭が、傾き、ズレて、落ちた。

「あ?」

「え?」

「んん?」

ごとり、鈍い音を立てて地面に落ちた。

「ふつ、バレてしまつては仕方ない。そうだ。我こそは魔王軍幹部が一人、ベルデイ」

「赫奕と猛り狂え、深淵に凝固せよ。我が憤怒^{いかり}、我が漆黑。紅蓮の業火に昇華せん——」

「回避い——!! 頭のおかしい魔法使いが、頭のおかしいことをするぞお——!!」

そう叫び、一目散にその場を逃げ出す。アクアはめぐみんが一步前に進み出した瞬間には走り出していた。こういう時だけは察しが良い女だ。

衛兵達もその辺りは抜かりない。何せこのロリっ子には、キャベツ騒動の時の前科がある。あの時も、危うく居合わせた冒険者や城門の兵士まで巻き込みそうになったのだ。その堪え性の無さと容赦の無さは、既にこの街で周知の事実。

蜘蛛の子を散らすように逃げ去る俺達を、デユラハンの人は呆然と見送った。無知とはこんなにも憐れなことなんだなあっておもいました。

魔力が空中に黒い渦を巻き、その中で日暮れ間際の星のように光が瞬く。

幾何学模様の魔法陣、それがデユラハンの頭上を覆った。

「ふあ?」

「喰らえ! 我が怒り(八つ当たり)の一撃! ジンクロウのバカバカバカー!! 『エクスペロージョン』!!」

31話 所詮、刃金狂い

ここらが潮時だろう。

そのような心算が、いつしか腹の内にあつた。

何を以て頃合いとするのか、それははつきりと定まるものではない。あの子ら、少年らが独力にて身を立てるその時を以て……など、偉そうなことを宣うのたま気もさらさらない。

無い、つもりだ。

己を何様に仕立て上げた物言いであろう。血を分けた親子でも、義理を結んだ縁者でもない。師弟、というのも些か仰々しい。腐れ縁と呼べるほどに気安い間柄かも知らんぬ。

なんともおかしな繋がりだった。おかしな、子供らだった。

良くも悪くも尋常一様に収まらぬ、一癖も二癖もある曲者揃い。よくぞ今の今までやってこられたと妙な感心すら湧いた。

ほとほと、面白き奴らよ。

面白すぎてすっかり離れ難くなっていた。糞喧しく厄介事に欠かず気は休まらず……ひどく気の置けぬ、心地好き日々。からりとした春晴れの空が年中続くような、そんな日々。

そろそろ行かねばなるまい。

ここはあまりに、陽気が眩しいゆえ。

相応しきところへ。

「け、剣士様、そりやいくらなんでも無茶だよお！　ここから早馬飛ばしても街に着く頃には日が暮れてる！」

「今から行っても全部終わった後だ……」

赤毛の若馬に跨がる己を、村人らは口々に引き留めた。

彼らの忠言は一々尤もだ。魔王軍の幹部なる者が現れたとギルドから魔術仕掛の伝書鷹にて文字通り報が飛び込んできたのは今から

四半刻ほど前。

どう甘く見積もったとて、己がアクセルに到着するのは戦事の終結、その遙か後。

勇んで馬を駆ったところでどうにもなりはしない。無意味の三字を噛み締めるのみ。

「忠告有り難く頂戴した。だが行く」

「ジंकクロウさん……」

こちらを見上げるゆんゆんに笑みを送る。安堵など望むべくもなく、娘の顔には不安と、己を労るような翳りばかりが深まった。

真に憐れなのは娘の方だ。無茶な早駆けに相乗りは難しい。今よりこの娘は一人置き去りにされるのだから。

「すまねえな、おゆん」

軽々な詫び言を残し、手綱を引きつ馬の腹に蹴りを呉れようとした。

「ジ、ジंकクロウさん!？」

「!」

ゆんゆんの呼ばれる声、そしてなにより吹き荒れた一陣の風に馬の脚が止まる。

甲高く嘶き、今にも暴れようとする若馬の興奮を諫める。馬体を震わすほどの、怯え。

その正体はすぐさま姿を現した。雑木林の枝間から、巨大な両翼の影が地を覆い隠す。

「グ、グリフォンだ!？」

羽搏はばたき、空気と砂塵を蹴散らしながら鷲と獅子の合成獣は降り立った。己の目の前に。

鋭い金眼がこちらを見据える。馬上にある今、それを半ば見下ろすような恰好。

期せずして早く再会が叶った。故に見紛うこともまさかあるまい。あの雛鳥だった。

村人、そしてゆんゆんも、突如現れた怪鳥に言葉を失くしている。何故どうして、そのような疑問とモンスターという存在への恐怖が、

場の空気を鉛色に染めた。

時間にして十にも満たぬ短い刻。正しく固唾を飲む衆人環視の中で——しかし驚くほど淀みなく、彼我の疎通は済んだ。

「己に背中を許すと言うのか」

「……」

「……忝かたじけない！」

馬を跳び下りる。そして迷いなく。

「ええっ!？」

どよめきと、娘の驚愕の叫びを地上へ残し。

天空そらへ。

重力の手を逃れ、人の身には届き得ぬ遙か高みへ。風が全身を叩き、掻き巻く。己という場違い者を責め立て、相応しき場所に追い落とさんとして。

それでもなお、昇る。

有翼の獅子と共に虚空を翔けた。

「……」

鷲獅子の名に恥じぬ粘り靱い筋骨が、翼を翻す度にうねる。躍る。その剛強なる感触には、もはや雛鳥などと揶揄できぬわ。

景色が視界の隅へ次々に滲み、消え去るかのような凄まじい速度。山を越えるも、これならば文字通り一跨ぎであろう。

間に合ってくるか。

内心でそう祈念して……自身を啜う。

間に合うだと。一体何に。何を急ぐ。何を焦る。

子供らの無事を信じられぬのか。魔王軍の幹部とやらの凶き手があの子らを襲うことを、恐れているのか。

下らん。粗忽な勘繰りだ。

あの街には、己なぞ比べるべくもない思慮深い少年がいる。賢しい小僧あやっつ子、カズマがいる。

彼奴あやつならば上手く逃げるに違いない。屹度、逃げ果せる。

「ああ、そうとも……」

逃げちまえばいい。

魔王、戦。そんな諸々放り捨てて、娘子ら皆連れて逃げるのだ。無謀だの蛮勇だのなんてのは、このいかれに投げて寄越しな。そうさ、それつくらいしか能がねえ。この死に損ないには、それこそお似合いだ。

「お前さんは逃げな、カズ」

代わりに今、刃金狂いがそつちへ行くからよ。

突然だがうちのパーティで最もレベルが高いのはめぐみんである。それも至極当然のことで、群を成すモンスターを上手いこと誘導した後、一網打尽にするのがあの少女の役割だからだ。爆裂魔法で消し飛ばしたモンスター達の経験値、魂の記憶、生命力、言い方は様々あるが、まあつまりRPGで言うところのEXPをボーナス付きで総浚いしていくのだから、それはもう上がりになる。うなぎ登りである。なまじ囹役が優秀過ぎて、もはや経験値泥棒の域なのだ。

そうしてレベルアップ毎に獲得したスキルポイントをこの少女が一体何に費やすかというとなんとも語るまでもない。爆裂魔法の威力上昇だ。

……いや、魔法の熟練に関係したスキルを何やら密かに取得していたようではあるが。

まあそれも微々たるもの。爆裂爆裂爆裂と爆裂に狂った少女の爆裂魔法は、今や敵モンスターに憐憫とか同情を禁じ得ないふざけた破壊力になっていた。

もうもうと立ち込める土煙の中に、うつそりと影が立ち上がるのが見えた。

「嘘だろ……!?!」

零れるように驚愕が口をつく。

クレーターを覆っていた煙が晴れてその姿が露になる。黒い甲冑

だった。ローブは爆せて消し飛んだのだろう。肩当、胸当はもとより、手甲、草摺、脚甲、鉄靴に至るまで鈍い黒鉄色をした全身鎧姿。

右手には、冗談みたいに巨大な諸刃の剣が握られている。

そして左手に、兜が載っていた。兜を被った人間の頭が。

デュラハン、首無しの騎士は生きていた。いやアンデッドなのだからしつかり死んではいるのだろうか。

土や埃に塗れながらも、そいつは無傷でそこにいる。ダメージは……ある、筈だ。アンデッドに対して物理攻撃は効かない、ないし効果が薄いということは重々承知している。

しかし、今あいつが喰らったのは爆裂魔法。炸裂魔法でも爆発魔法でもなく、泣く子も笑うネタスキル爆裂魔法である。

いつだかめぐみんが得意げに話していた。糞燃費かつ糞重いスキルポイント量を強いられる爆裂魔法の唯一と言つていい純粋なメリット。物理攻撃耐性、魔法攻撃耐性を持つモンスターはもとより、実体を持たない存在にすら爆裂魔法はダメージを与えることができる、と。

「純粋に耐え切ったってことか……」

魔王軍幹部。つまり中ボスだ。さてHPはどれだけ削れただろう。序盤のステージに物理無効かつ鬼耐久の明らかに近接特化っぽいボスが、エンカウントではなく向こうからやって来て強制イベとかどんなクソゲーだよ運営訴えるぞコノヤロウ。いやまあ厳密にはあの女神が勝手に攻撃してボスバトル開始しやがったのだが。

……そんな下らないことでも考えていないと、今にも回れ右して全力逃走したくなる。

「爆裂魔法……人の身でこんなふざけた魔法を覚えようとする頭のおかしい魔法使いが居ようとはな」

「誰の頭がおかしいと」

「お前だよ確実に」

忌々しげに呟くデュラハンに思わず同意する。頭がおかしくなきやこんな魔法は覚ええない。

地面にべちゃつと倒れ伏したためぐみんから針のような視線を感じ

!!

「呼んだか?! いや、もつと呼ぶがいい!! 罵倒の限りにいい!!」

上擦った嬌声が、今は亡き正門から響き渡った。

ずどどどど、と地面すら揺らす勢いで疾走接近する一人の影。白銀の鎧を身に纏い、それでも猪めいた猛進でダクネスは現れた。

「うわあ、マジで来やがった……」

「そりやあ来ますよ……ダクネスですよ?」

「ですよね……」

「ああ好い! その呆れと侮蔑の視線つ……! 最近のカズマはますます嗜虐サドのスキルに磨きが掛かっているな!」

「そんなスキル誰が取るか!」

人聞きの悪いことを大声で喜ぶ変態は、しかし走りながら腰の剣を抜く。

真っ直ぐに向かう先は一つ。首無し騎士デュラハンだった。

「緊急クエストの放送は聞いた! 街の者には指一本触れさせんで、魔王軍幹部のデュラハンよ! この私が相手だ! 他の冒険者が集まる前に存分に痛め付けてくれ!!」

物凄くカッコいいと思ったのは当たり前だが気の迷いで最後の最後に台無しだよ。いつも通りで安心したわチクショウめ。

ダクネスは剣を構え、走りながら振り下ろす……ようなことはせず、切先を前方に構えたままにデュラハンへと突っ込んだ。

下手に振り回したところで棒振り芸以下ならば、剣を持ったまま体当たりでもする方がマシだ。とは、例によっていつかのジंकロウの助言というか苦言であるが。これが思いの外に嵌った。

捨て身タツクルなんてそれこそダクネスの好物であるし、この筋力と耐久力のお化けに全力疾走で衝突されるなどもはや交通事故のレベルだ。

如何にデュラハンといえど、これなら!

「はあー!」

強烈な金属音。鼓膜をびりびりと劈いて空に散る。

剣と剣がぶつかった。何の手加減もなく。土埃が舞う。黒鉄色の

鉄靴が地面を抉って、止まる。

砲弾のようなダクネスの突進を、あのデュラハンは受け止めやがった。

「……そしてクルセイダーか」

「!?」

刃と刃が互いを食い合って酷烈な音色を奏でた。ギヤリギヤリギヤリギヤリ、盛大で派手な刃毀れが聞こえる。どちらかの剣はもう刃物としては使い物にならないだろう。

ダクネスはなおも足腰の力を総動員して前進し、相手を押し込もうとする。

「ダクネスが、パワー負けしてる……!?」

けれど、動かない。びくともしない。ダクネスの足は空しく土を掻くだけだった。

「やはり」

そしてそんなこちらの必死さなんて意にも介さず、騎士の生首は眩く。兜の下の表情は影になって見えない筈なのに、その時は。その時だけは、はつきりと。

そいつは笑みを浮かべていた。

「お前達だな。あの山、あの廃村で、ゴブリン部隊を殲滅したのは」

「な、に……ぐっ!?」

デュラハンは片腕に持った大剣を一当てしてダクネスを押し返した。

「上級冒険者パーティを苦も無く屠るゴブリン・ウォリアーが、こんな駆け出しの街の冒険者に何故敗れたのか疑問だったが……合点が行った。先程の火力に、剛強なタンク、高レベルのプリースト……魔法使いはもう一人居た筈だな」

「なんで、そんなこと」

小さく漏らした疑問に、しかしデュラハンは律義に答えてくれた。

「情報収集の為の偵察斥候にあの村を見張らせていた。本来は、この街の冒険者の実力を量るのだけが目的だったが、とんだ誤算というやつだ。だが、その甲斐はあった」

デュラハンは左腕を、左手に載せた頭をこちらに向けて。

「剣士の男は不在のようだな。冒険者の少年よ」

「っ!」

心臓が跳ねた。背中に汗が噴き出す。気分が、悪い。それは悪寒だった。先程過った悪い予感が、今、的中しようとしている。

知られてはいけないことを、知られた。

脳内に巡った文言。その意味を理解する。

「ふっ、ゴブリンの親玉がデュラハンとは変わった趣向だが……それはそれでヨシ！ 下賤なゴブリンを使って村娘や女騎士を廃城に連れ去り、死してなお尽きぬ邪悪な欲望をその凌辱で満たそうとはなんと素晴らしい！ もとい汚らわしい！ だが！ 生易しい責め苦なほどに私は屈しはしない！ どれほど耐えられるか、その腕力で試してみろ！ さあさあさあ!!」

いつもの調子で、ホントに何一つ変わらないいつもの調子で（大事なことではないけど二回言いました）、ダクネスは言葉とは裏腹にデュラハンへと攻め掛かる。

剣をとにかく振り被り矢鱈滅多に振り下ろす。めちやくちやな軌道ではあるものの、鈍器としては優秀だ。

一秒に一回ペースで殴り付けられる剣。それをデュラハンは全て受け止め、弾き返す。何程の苦も無く。

「狂った言動をとれば、俺の戦意を殺げるとでも思ったか」

物凄く理知的な捉え方をしてくれてる。最初から最後まで言葉通り狂ったドMな変態に、デュラハンの人は大真面目に。

ダクネスの大雑把で、馬鹿力な一撃を受け弾き上げるや——ダクネスの腹に、左拳を叩き込んだ。

「がっ、は!」

「もはや欺かれはせん。悔りはせん。我が全力を以て貴様らを討ち倒そう」

一瞬だけ頭部から手を放し、それが落下する前に相手を殴打して受け止める。そんな早業。

くの字に体を折るダクネス、その頭上でデュラハンが剣を振り上げ

た。頭から、斬られる!?

『クリエイト・ウォーター』!!」

「む!？」

右手から水を発射。デュラハン目掛けてぶっ放す。

奴は即座に後退して水を避けた。

ひとまずダクネスを助けられたことに安堵し、そしてもう一つ確信を得られた。

デュラハンに限らず、吸血鬼や人狼といった西洋の怪物にありがちな弱点“流水”。それはこの世界、そしてあの露骨な回避行動からしてこのデュラハンにも当てはまるようだ。

それはそれとして。

「先生ーッ!! 出番ですよアクア先生ーッッ!!」

「まゝがざれゝだば(任されたわ)！」

ずぼっとその当たりの盛り土の中からアクアが出土する。案の定さっきの爆裂で生き埋めになっていたらしい。

口から鼻から土と砂を吐き散らしながらアクアはめぐみんばりの大見栄を切る。……カツコつかねえ。いやでも、今この瞬間ほどアクアを頼もしく思ったことはない。

大洪水でデュラハンを水責めに、なんてまだるっこしい工程は要らない。痩せても枯れても女神なアクア、その退魔能力はそんじよそこのアークプリーストさえ目じやない。

「セイクリッドオー！」

燐光が立ち上る。浄化の光が円陣を描き、そのままデュラハンへ——デュラハンが、脇構えから大剣で地面を打った。

「やせんよ」

剣先は地面をまるでプリンのように抉り取り、奴はそれを掬い上げるように打ち飛ばす。詠唱中のアクア目掛けて。

土塊つちくれの散弾。それは驚くほどの集弾性でアクアの顔面に殺到した。

「ターンばべらばばばあ?!?!」

「アクア!？」

「目があ!?! 目があー!?!」

顔を押しさえながら、もんどり打ってアクアが倒れる。そのまま右へ左へごろごろと地面を転がった。

めちやくちや痛そうではあるが一応無事らしい。カンストステータスなだけあって、ダクネスに及ばないまでもアクアも十分に頑丈だったのが幸いした。

また安堵を噛み締める……そんな余裕は既になかった。

「侮りはせんと、そう言った」

「貴様！・よくもアクアを!!」

一喝吼えるや、ダクネスが踏み込んだ。腹の痛みも治まってはいないだろう。それでも渾身の力でダクネスが剣を振るうのが分った。けど。

ダメだ。ダクネスの剣では、あのデュラハンには。

「剣の腕は、どうやら詐術ではなく本当に未熟なようだな」

「それでも貴様を止めることくらいは出来る!」

「そうか?」

一際強く剣がぶつかり合う。押し負けてなるものかとダクネスの全身が強張るのが見えた。

そして、遠目からでも解るその変化に、直接相対するデュラハンが気付かない訳がなくて。

強張りはつまり、動作の停止、停滞だ。その隙を、デュラハンは打った。

「ぐあツツ!」

というか蹴った。

さつき殴ったのと同じ、ダクネスの右脇腹を。

苦悶と呼気を諸共に吐いてダクネスの身体が宙を飛ぶ。飛んで行った先には、痛みに悶えるアクアがいた。

「ぎゃん!」

「うあ!?! す、すまんアクア!」

「お、おいアクア!?! ちよ、まさか」

ダクネスの下敷きにされて潰れた蛙のような声を上げると、それきりアクアは静かになった。気絶したらしい。

チーン。

そんな擬音が脳内を過る。背中と額にどつと汗が湧く。まずい。やばい。まずいやばいまずいやばいまずいやばまず。

「……腹パンからの容赦ない足蹴とは、あれは相当なやり手だぞ、カズマ。ふふ、ふふふ」

「馬鹿！ お前こんな状況でまだそんな!？」

焦りで脳髓が洗濯機の中身みたいにくちよぐちよになりつつある今、ダクネスの変態性癖は呆れよりも安心すら覚えるが。それでも時と場所を考え……。

赤く染まった悦びの顔。いつものダクネスだ。どんな時だつて変態で、ドMで、逆境だろうが全部悦んで向かっていく。どうしようもない、どうしようもなく頼もしい奴が。

「逃げろ、カズマ」

なんだよ、その顔。

いつものだらしない顔はどうしたんだよ。ニヤケて緩んだ顔は、ここになくて。

「めぐみんを連れて、早く」

「ダク……ネス?」

「このデュラハンはこの私でも少し、好過ぎる……!」

いつものふざけた言動で、ダクネスは剣を構えた。

いつの間にも移動したのだろう。幽鬼めいて気配も無くダクネスの目の前に立っていた巨軀。首無し騎士が大剣を振り上げていた。

「ダクネス——」

剣戟の音。金属の鉦。剣の、折れた残響。彼方に飛び去る刃。

ダクネスは盾にした剣諸共、大剣に押し潰された。

地面を砕き、その体が土中へ沈む。それほどの衝撃。土煙の中でダクネスは、動かなかつた。

「諸手の打ち込みで両断出来ぬとは、呆れた耐久力だ」

放られていた首が空中から落ちてきて、その左手に収まる。

「……いや、失言だったな。人間の守護者として貴公は間違いなく優れた騎士だった。その不退転の覚悟に敬意を」

首無し騎士が神妙に何か言っている。耳には入ってきてても、意味を咀嚼する機能が死んでいた。

知られてはいけなかった。思考はそこに終始する。

変則奇策のおもしろビックリ芸。俺達の戦法は常日頃それだった。ステータスはピーキーで行き当たりばったり、連携なんて望み薄で、出たところ勝負のアドリブ合戦。それでも、意外性だけは世界一だったと思う。頭のおかしい超強力な爆裂魔法、どんな痛打強打でも倒れない鬼耐久騎士、おバカで不運で間も悪いけど底抜けに明るい本物の女神様、最弱職冒険者、そして……変な剣士。

敵は油断する。油断しなくても調子は狂う。その隙を全力で突っ突きに突いて今の今までやってきた。

知られては、いけなかった。好意的な勘違いも大いに災いと呼んだ。

今、俺達は窮地に居る。今まで経験したことのない絶体絶命を目の当たりにさせられてる。

どうすればいい。いやどうできるっていうんだよ。

「カズマ……逃げて、ください」

「っ！ めぐみん……!? で、でもアクアとダクネスが！」

めぐみんを助け起こしながら、視線は二人と、デュラハンに釘付けだ。目を離れたその瞬間、目の前に現れるんじゃないか、そんな下らない恐怖心があった。

めぐみんは、ぎこちない動作で首を振った。隠しきれない悔しさを滲ませて。

「無理です。私は勿論、カズマにもあいつに勝つ手段が無い……」
「……」

めぐみんの言葉は冷徹だった。そしてどこまでも正しい。

最弱職の、冒険者のガキに、出来ることなんて何もなかった。

奥歯を噛み締めても、軋みが骨に響くだけだ。伝説の勇者の血が目覚めることもない。何か曰く有りげな武器も持っていない。そもそも装備すらここにはない。

無い無い尽くしの凡人。それが、俺だ。

「居たぞおー！」

「あそこだ！ デュラハンだ！」

「！」

やにわに響いた野太い怒声にぎくりとする。

見れば崩れた正門から次々と、多種多様な出で立ちの冒険者が出てくる。さつきダクネスが言っていた緊急クエストの放送とやらによりやく集まったのだろう。

助かった。これでようやく、矢面から解放される。デュラハンの相手は、大挙する他の冒険者に投げてしまえばいい。

まずめぐみんを背負って街に避難させ、次にダクネス、アクアを引き摺って退散する。

「……」

「？ カズマ？」

逃げればいい。その言動や行動からも分かるが、あのデュラハンは一端の騎士を気取ってる。逃げようとする背中にもまだ斬り掛かってくるようなことはない、筈だ。

一目散に逃げる様を見せれば、案外簡単に見逃してくれると思う。八割くらいの、悪くない公算で。

逃げれば、いい。いつものように。プライドなんて糞食らえだ。命あつての物種だ。自分は勇者でもなきや、武人なんて仰々しいものを名乗った覚えもない。食う分稼げればそれで十分。命懸け？ まっぴら御免だ。

逃げて何が悪い。命を惜しんで何が悪い。誰が咎めるってんだ？ 咎められたから何だつてんだ？

知ったこつちやないね。なあ、あんたもそう思うだろ……シンクロウ。

——— そうとも、逃げちまえばいい

ここには居ない筈の男の声を聞いたような気がした。

多分あいつならそう言うだろう。そう、言ってくれるだろう。

そして多分、あいつは逃げないのだろう。

「……………」

その確信があった。あいつは、たとえ自分より遥かに強い敵を目の前にしても、逃げない。

あの軽やかな笑みを浮かべて、散歩にでも出掛けるみたいに向かっていくのだ。そういう奴だ。シノギ・ジंकロウって男は。

「カズマ？　な、何をやる気ですか？　馬鹿なこと考えないでくださいよ！」

「ごーんねん、もう考え付いちゃった後だよ」

俺を捕まえようとするめぐみんの手を躲かわし、立ち上がる。

デユラハンは集合しつつある冒険者達を眺めていた。自身を打倒する為の戦力が着々と揃いつつある状況でも、慌てる様子は絶無。絶対の自信があるからだ。己の剣技に、己の強さに。

「誰が行かないのかよ」

「ならお前が先に行け」

対する冒険者達も、遠巻きにデユラハンを観察するだけで攻め寄せる兆しは今のところない。

それもその筈、賞金と臨時の討伐報酬が出るとはいえ、一番槍に駆け込んで真っ先に死ぬような阿呆らしい事態は避けたいのだろう。まず誰かが、どこかのパーティが戦い始めるのを待ち、なんとなれば敵が消耗してから動き出したいと考えるのが人情というもの。消極的で打算的で、合理的な、拝金主義の冒険者らしい判断だ。

誰だってそうする。俺もそうする。

「お前と出会わなきゃそうしたのに！　ま、でもしょうがねえよなあ！」

「ダメですカズマ!!」

めぐみんの声が背中に継る。

でも行く。

「おいこらデユラハンこつち見ろ！　『クリエイト・ウォーター』！　「なに」

右手から水鉄砲を発射。

初期水魔法は込めた魔力に依じてある程度放出量をコントロール出来る。バケツ一杯分からコップ一杯分まで、あるいはそれ以下の微

調整も可能だ。

射出面積を限界まで絞れば、少ない水量でもそこそこの勢いと速度は出る。

7メートル近い飛距離を稼いで、水の矢がデユラハンに命中……することはなく、半身に反れて呆気なく避けられた。

まだまだ。

『クリエイト・ウォーター』！ 『クリエイト・ウォーター』！』

「ちっ、小僧……水遊びのつもりか!？」

「鎧、土と砂まみれなんだろ？ 綺麗にしてやるよお！ 『クリエイト・ウォーター』ッ!!」

再三の水鉄砲攻撃、というかちよっかいに、デユラハンが兜の下で苛立つのが見えた。

「先に死にたいらしいな」

「先に死んでんのはお前だろバーカ」

「よかろう。その挑発、乗ってやる」

！
ヘイト稼ぎに弱点突くのは基本。効果は覷面、タゲ取ったつたでえ

デユラハンはダクネス、アクアを捨て置き、真っ直ぐ自分の方に向かってくる。

当然、逃げる。逃げながら水を発射し続ける。

『クリエイト・ウォーター』！』

「馬鹿の一つ覚えか。くだらん」

「なら試しに浴びてみるよ！ 水嫌いのデユラハンちゃんよお！ なんか風呂嫌いみたいだなニューアンスだよな！ ああ心なしかお前ちよつと臭いぞー!」

努めてふざけて、軽々しく、不真面目に。

デユラハンも承知だろう。我ながら見え透いた挑発だった。

逃げる俺を追うデユラハン。そうして爆裂魔法のクレーターから遠ざかる。これでめぐみんも多少安全圏だ。

「……それで？ どうする冒険者。お前の攻撃など受けたところで俺には傷一つ付けることは出来ん。それとも魔力が尽きるまで水遊び

に興じるか？」

「へっ、誰が好き好んで死人のおっさんとそんな気色悪いことするかよ。可愛いゾンビ娘ちゃんに食われて死ぬ方が千倍マシだわ。むしろそっちでオナシヤス！」

「では、その素晴らしき夢を抱いて死ぬがいい」

デュラハンは大剣を構える。あいつがその気になれば、こんな10メートル程度の距離一步で詰め寄って俺を斬り殺せる。

じゃあ何故一瞬でそうしないのか。

それはこいつが徹頭徹尾“騎士気取り”だからだ。生前どうこうなんて知らないし興味もない。だがそれこそ奴に付け入ることの出来る唯一の油断、隙。

相手の出方を見て、それに応じる。あくまでも戦争や、もしくは決闘のような体裁を無意識に取ってしまう。

だから待つてくれる。時間をくれる。泳がせてくれる。

この場所に誘き寄せられてくれた！

右手を掲げ、水魔法を発射——しない。掲げた右手は地面に叩き付けて。

『『バインド』!!』

「なにぃ!？」

『『バインド』! 『バインド』! もういつちよ『バインド』オ!』

土が盛り上がり、うねる。土砂を突き破って現れたのは、無数のロープだ。

城壁の増築工事に使われる材木、石材。それを運搬する牛馬を繋ぐ為の縄と鉄杭が、工事現場周辺には其処彼処に打ってある。

先程の爆裂魔法は盛大に土砂を空へと巻き上げて、なんとも上手くこれらのロープを覆い隠してくれた。完璧な迷彩である。

砂中から獲物へ食らい付くガラガラヘビのように、ロープはデュラハンの胴体や脚、剣を握る右腕へと絡み付いた。

「この程度の、拘束など……!」

「ですよー」

このデュラハンには馬鹿力代表ダクネス以上の腕力がある。牛を

繋ぎ止められる縄と杭でも、きつとそう長くは保たない。それ以前に、ロープを斬られてしまえばそれまでなのだ。

だから手早く、素早く。

『クリエイト・ウオーター！』

発射可能な大量の水を浴びせ掛ける。

放物線を描いて、上から降り注ぐ水をデュラハンは忌々しげに見上げた。

「甘いわあ!!」

火事場、もとい水場の馬鹿力か。デュラハンは縛られた右腕を無理矢理に引き寄せ、大剣をびゅんと振り回した。剣は円を描いて、一瞬だけ傘のようになり雨を蹴散らす。

失敗か。

拘束してから弱点の水を浴びせて弱体化させる。この目論見は完遂を見ず、終わった。

じゃあ予定通りこうしよう。

既に、"それ"は見付けて、拾い上げている。右手に持ったそれをサイドスローのフォームで振り振り、投げた。

スキル発動。

—— 『^{スローイング}投擲』！

それは盗賊の固有スキルだった。比較的小さな物体、石やナイフといったものを投げた時、このスキルを使用することでステータスに応じた補正を掛けて命中精度を高められる。

命中補正に作用するステータスは狩人の『狙撃』に近い。

筋力は飛距離を延ばし、器用さはコントロールに直結する。そして何よりも、幸運値。幸運が高ければ他のステータスが低かろうが関係ない。投擲されたものは狙った箇所当たる。

つまり、俺が投げた物はだいたい当たる。

俺が投げたもの……ダクネスの折れた剣先。彼方に飛び去った刃は。

デュラハンはわざわざ付いて来てくれた。拘束具の隠された地面、そして丸腰の俺が武器を手に入れられるこの絶好のシチュエーション

ンに。

タイミングもまた完璧だった。

デュラハンが頭上で水を周囲に撒き散らした御蔭で、投擲された刃が水を浴びる。水濡れの刃は高速回転して向かう。空中に綺麗な曲線を描きながら、左手の生首へ。

届け！

過たず、刃は、生首の顔面に。

届かなかった。

「……は？」

金属音。跳ね飛ぶ刃。

届きはしたのだ。敵は防御も間に合わず、棒立ちで投擲された剣先を受けた。

兜。兜の額で、刃を弾いた。

「うそん」

「悪くない手管だった。その機転は称賛に値する。だが、残念ながら、俺は頭を狙われることに慣れている」

にべも無くデュラハンは言い放つ。肩すら竦めて見せて。

「お前達冒険者が窮した時、最後に狙うのはいつもここだ。弱所を突こうとするのは合理的な判断だが、読み易い。来ると分かっていたらば対処はさらに容易だ」

ロープを引き千切り、デュラハンは拘束を脱した。

そうして歩み寄ってくる。ゆっくりと。こちらの手札が既に尽きたことを知っているから。

「残念だったな。せめて苦しませよう……」

「『ステイール』!!」

「!?」

手を伸ばし、スキル発動を宣言する。

目の前のデュラハンから剣を、なんてのは不可能だ。えげつないレベル差がある。『ステイール』は自分のレベルを大きく超えた相手の装備までは奪えない。

だから、俺が盗るのはお前の剣じゃない。

意識を失つても手放さなかった。未だ、ダクネスが握っている、折れた剣を。

手中に現れた柄を握り締め、一步踏み込む。

「つらあ!!」

鎧にだって隙間は無数にある。これだけ近けりや狙い放題。

眼前のデュラハンに、欠けた剣を突き込んだ――

「――ちい……つくしようが!」

刃は、1ミリたりと刺さらなかった。

装甲を避けて、腹と胸の間に精確に突き入れたにも関わらず。鎧の下に帷子を着込んでいる訳ではないのだろう。

アンデッドに鋼の武器は効かない。聖水をぶっ掛けたとか、祝福儀礼されたとか、純銀製とかならまだ目はあつたかもしれないが。

無いものはしょうがない。本当に、しょうがない。

「見事だ。今の一撃は、完全に不意を衝かれた」

「はっ……」

称賛の言葉に鼻を鳴らす。

「惜しいな少年。その機転、俺の部隊に欲しいほどだ」

「あー申し訳ないけど、そういううちの爺ちゃんの許可が要るんだわ。というか、お断りだよ」

「そうか」

大して残念そうにも見えないのがちよつとムカつくが、まあいい。一矢くらいは報いたかな。

巨大な剣が持ち上がり、後方へ流れる。真っ直ぐ、横一文字の斬線。

「俺、結構がんばったよ」

だからさ、ちよつとくらい褒めてくれよな。ジंकクロウ。

刃が奔り、光る。

ゆつくりと視線が落ちる。倒れて傾くのでなく、落ちる。

何をされたのだろうかとか首を巡らせようとして、できなかった。それもその筈で。

目の前に自分の身体が転がった。

俺は、どうやら首を落とされたらし――

一瞬、時間が止まったような静寂が辺りを包む。息を呑み、声の出
し方を忘れる。

そして次の瞬間には騒然と、冒険者達のどよめきが響いた。

「カズ、マ……?」

それすら何処か、遠い場所の出来事に思える。現実には思えない。

目の前の光景を現実と思えない。

剽軽で、悪辣な智慧に溢れた、でも憎めない少年が、首を落とされ
てそこにいる。そこに、ある。それはもう命のない物だった。

命はそこから一面に広がっていく。赤い、血。地面を染め上げる血
溜まり。

その中心で存在する少年だった、物。カズマだったモノ。

「カズマあ!!!」

私は叫んだ。叫んで呼べば、起きてくれるかもしれない。半ばそん
な望みすら抱いて。

けれど、そんなことはあり得なくて。

カズマは死んでしまった。死んでしまったのだ。

「さて」

デュラハンが振り返る。その手で殺した少年を見限り、こちらへ、
正門に屯する冒険者へ、アクセルの街へと。

「次は貴様らの番だ」

静かな最後通牒。虐殺の宣言。

狼狽えて、後退る者がいた。無惨な少年の骸の有様に、怯えて身を
竦ませる者もいた。

皮肉にも、少年の死が冒険者達を恐怖させた。立ち向かおうとする
意志を挫いた。

何も出来ない。文字通り、自分には何も。起き上がることさえ儘ならない。

仲間の仇を討つことも。

「くっ……いー」

無理矢理に身を起こそうとして、失敗する。無様に地面へ突っ伏す。この無力な身体を今ほど恨めしく思ったことはない。爆裂魔法の代償の重さにここまで堪えたことはない。

「カズマ……」

脱力して、もう一度名前を呼ぶ。少年はやはり、応えてはくれなかった。

目が熱を帯びる。熱いものが滲み、零れる。

震える声で、名前を呼んだ。呼ばずにはいられなかった。どうして、貴方はここにいない。

「……シンクロウ……いー」

涙が地面に落ちる。小さな黒い染みが色付いて、そこに。一片の羽が舞い落ちた。

「へ……？」

頭上、空を見上げた。昼をとうに越して、それでも抜けるように青い。巨大な雲が群を成して泳ごうと遮られることのない大空。その高みに、大きな鷲が見えた。

一陣、風が吹き抜ける。

「……何者だ」

デュラハンの声にはつととして視線を地上に引き戻した。

いつ現れたのだろう。まるで初めからそこにいたかのように、男が一人立っている。

どうしてか素肌に皮革のジャケットを羽織り、腰帯に一振りの剣を差した青年。

シンクロウがそこにいた。

「シンクロウー！」

思わず、再び名前を呼んでいた。抑えきれない喜びと安堵を自覚する。

けれど、ジंकクロウはこちらの呼び掛けに応えなかった。視線すらくれず、その目はただ一点。ただ一人を見詰めて。

歩いていく。ゆっくりとした歩調で、慌てるでもなく、焦るでもなく。真つ直ぐに、迷いなく。

血の溜まりにも躊躇なく踏み入る。今や池の様相で広がった赤一色の中心で屈み込む。ズボンが血を吸い上げるのも構わず、男は両膝を着いた。

男はそうして、少年と対座した。

「馬鹿野郎が」

そつと、男は両手で少年の頬を包む。顔に着いてしまった血をその親指で拭うが、拭っても拭っても血は薄く伸びて広がるばかりで。

少年の顔はどんとどんと薄汚れていく。二度と、元通りにはならない。

「どうして逃げねえ。逃げちまえばいいじゃねえか。逃げて何が悪い。何を憚ることがある。誰が咎める。誰が……」

独り言のような呟きが、不意に止んで。

「俺か」

男は静かな吐息を零す。

「俺の、所為か」

何も、言えなかった。名前すら呼ぶことは躊躇われた。ジंकクロウのあんなに大きかった筈の背中が、今は小さく、そしてどうしてかひどく……老いさらばえて見えた。

鉄靴が地面を打った。

デユラハンは何故か待っていた。ジंकクロウの行為に、何をすることもなく。

しかしそれも終わりだと、剣の切先を突き付けることで示す。

「お前が件の剣士だな」

「……」

「その小僧は今俺が斬った。ならば丁度よかろう。ゴブリン・ウオリアーを直接屠ったというその剣技、この俺に見せてみる」

傲岸にデユラハンは言い放つ。ジंकクロウを焚き付けようという

意図がありありと透けた物言い。

しかしジंकロウは動かなかった。剣先で背中を差されているにも関わらず、振り返ることさえしない。

「今日のところは見逃して頂けまいか」

「なにい……？」

「な」

ぽつりとジंकロウは言った。

意味が分からなかった。どうして、そんな。

カズマは殺された。このデュラハンに首を断たれて、こんな無惨な姿にされた。なのに、どうして。見逃して欲しいなんて。

ジंकロウの口から出た言葉とは思えなかった。

「御存知かは分らんが、この街、アクセルは駆け出し冒険者の集う地。御手前の如き強者が攻め落とす価値はござらん。戦時というならば尚の事。聞けば、御手前は一軍の長であられるとか。戦を仕掛けに参られたというなら使者を立て口上を述べるが作法と存ずる。少なくとも“この地”では、それが法理でありましょうや」

理路整然と言い募る。それはひどく理性的な、不戦の申し出だった。

「確かに。俺が生きていた時代から宣戦布告と交渉は慣例だった。それで血を流さず済んだ戦も一つと言わず知っている」

「なれば」

「だが」

大剣が振り落とされる。地面を砕き、土石が飛び散る。

「それは人間の法だ。我が身はデュラハン。とうの昔に人道を落伍し、魔道に身を堕とした。そしてお前達は冒険者。そしてこの街は新たな冒険者を生み出す温床。そしてお前達を殺すことこそ、魔物の理……故に」

そうして翻った大剣の切先が指し示したのは、倒れ伏す自分だった。

「この街の者は、皆殺しだ」

決定事項を読み上げている。デュラハンの口調には気負いも激情

も含まれていない。ただ与えられた務めを為す、そんな機械染みた無機質ささえ感じた。

「どうにもならない。停戦交渉は呆気なく決裂した。『そうかい』」

ジンクロウは言った。そこには何の感慨も無かった。相手の無法に怒りも、戸惑いもしていない。

デユラハン同様、あるいはそれ以上に無感動に。不意にひくりと、その肩が震えた。

「そうかい。そうかそうか。くくつ、くふふふ……」

微かだった震えは見る見る激しくなり、遂にはひきつけを起こしたかのように、ジンクロウは笑い出した。

「呵々ツ、呵々ハハハハハハハハハハハハハハハハハハハハハツツ!!」

高らかに、哄笑した。悦びを謳って、こみ上げる快哉を笑声として口から吐き出し続けた。

「ジン、クロウ……?」

楽しそうだった。とてもとても楽しそうだった。ぞつとするほどに。怖気が全身を震わすほどに。

「……何が可笑しい。仲間を殺され、気でも触れたか」

「カカカツ、クフツ、いや、いやいや……」

ジンクロウは頭を振る。

笑いを堪えるその様に、デユラハンは苛立たしそうに大剣で空を斬った。

「なに、己一身の都合で街の者らにまで巻き添えを食わすのあ、気が引けたのよ。他人様の命を博打の質に当てるなんてなあ、それこそ無道であろう? 今ばかりは御手前にはお帰り頂いて、後日に……と、賢しいことを考えておったのだが、ぶつ、いやいや、手間が省けた。くくつ! ああ、まこと、よくぞ言うてくださったあ……よくぞよくぞ」

「やはり狂ったか。所詮は心弱い人間、ということか」

「よくぞ、よくぞ……」

「ならばお前も、その少年と同じ所へ送ってやる」

「よくぞ……」

デユラハンが剣を構え、その背中に向かう。生かしておく価値も消え、言葉通りの、慈悲を与える為に。

ジンクロウ。名前を呼ぼうとして、喉が詰まる。手を伸ばそうとして、体が竦む。

どうして。

逃げて、とか。危ない、とか。言うべきことがたくさんある筈なのに。

どうして、こんなにも。

「——よくも」

男は少年の首をそつと置いた。壊れ物をそうするように。蹲っていた背中が、立ち上がる。

ジンクロウが初めて振り返る。

「よくも、やりやがったな」

その貌に笑みは無かった。何も無かった。

敵を見据える鋼鉄のように冷えた両目があるだけ。

左手が鞘を握り、親指で鏢を弾く。柄に手を掛け、ジンクロウは剣を抜いた。

鈍い銀の刀身が露になり……消える。

「奪るべき首級も、命も持たぬ屍。ならばしようがねえ……」

銀が消える。代わりに刀身を塗り潰したのは、紅。

目に突き刺さるように鮮やかな、血の紅。

「貴様の魂、喰ろうてくれるわアツツ!!」

ああ、どうしてだろう。こんなにも。

こんなにも、ジンクロウが、こわい。

32話 武人落伍

変わらぬ。

眼前にて膨れ上がった極大の憎悪と相対してなお、首無し騎士ベルディアには感慨と呼べるほどのものも無い。

過去、幾度となく目にした光景、耳にしてきた怨嗟だ。仲間を、近親者を、愛する誰かを殺された人間が、激情のままに武器を執る。己という怨敵を殺す為に。

それを愚かとは思わない。むしろ逆、そうあるべきだとさえ思う。

殺生の有為無為などという議論は平穩無事な温室で哲学者にでも勝手にやらせていればいい。

敵を殺す。殺害行為の正当化としてこれほどシンプルで、好ましい理由はない。復讐、報仇、雪辱、ベルディアはそれらに端を発する憎悪、憤怒を尊重する。肯定する。

生前が騎士であったから……それも、一つの理由かもしれない。尊厳と倫理を護る騎士道というものに傾倒し、信奉すらしていた。

今や、騎士道は唾棄すべき妄念となったが。

人として、戦場で剣を振るっていた頃。魔人として、現世普く人々を斬り殺している今。

何処に違いがある。

人と人から魔物と人に立場が移り変わったただけだ。向けられる恨み憎しみ怒りは何一つ変わらず、我が身を焼き滅ぼさんとして燃え盛り続けている。

そうして、そんな正当なる復讐者達を幾百と滅ぼし返して来た。傲岸不遜に、その正当性を認め尊びながら、恥など知らぬと、天命すら踏み倒して、動く屍として生き続けている。

いつか。

いつかは報いを受ける日が来る。絶対の確信を以てベルディアは断言する。

何故ならこの身もまた、怨念によって武器を執ったのだから。

変わらぬ。変わらぬと……そう諦めた。

だが。

——今日こそは俺の、報いの日か

斬り落とされた自身の左腕を見下ろして、ベルディアは兜の下で薄く嗤った。

良い日和であつた。

からりと晴れ上がり、白雲の遊泳は頗る穏やか。しかし、と。山間の天候を思い起こす。雲はやや低く、朝方に比べて冷涼な風の中には微かな水気が香った。

日暮れ頃に一雨、降るやもしれぬ。

不意に空を仰いで、物思う。

歩みはゆるりと綿を踏む心地。四肢から余分な力を脱く。急ぐ理由などない。

そこで思い立って、腰帯に結わえた下緒を斬り、鞘を引き抜いて放り捨てた。もはや用も無し。

為すべきは一つ。一つに絞られ、他の一切尽く総ては削がれ、研がれ、洗われ、落とされ亡失した。残ったものはひどく純一だった。

その一ひとつによつて己おれが十全する。

単一能を執行する為だけの器物。即ち——まがきせもの兇器に。

まず敵手の間合に達する。

対手は巨軀の全身甲冑姿、得物は刃渡りにして七尺を優に超える巨大な諸刃剣。斬り間は圧倒的に彼方が優越する。

対してこちらの刃は二尺をやや超える程度、身幅厚み共に相手に握られた怪物剣と比ぶれば正しく矮小の二字。

如何にしてこの質量差を覆す。如何にして。

「……」

「！」

縮地法。膝の踏み抜きにより、前進運動の起点を消失させる。
間合奪り。

運剣の最大効率化。体重心の移動により生ずる慣性力の損耗を
絶無にする。

下段から斬り上げ。

相手は左手の首を上空へ投げ上げ、片手から諸手に大剣の操法を
変ずる。脇構えから横一閃に肉厚の刃が奔った。五体の自在性を取り
戻したことでその動きは疾風めいて敏速。もう半瞬の後にも、己は首
を刎ねられたであろう。

しかし。

「……」

「!？」

既にその左肘を断裁した。

斯くしてこの儀、この一合、この一刀は最速を窮めた。

なんたる

身体を反転、右手に引き付けた大剣ごと回転する。振り抜くの比
べれば間合、斬撃が網羅する射程距離は半減するが、剣速、切先の到
達速度は倍以上に跳ね上がる。

しかし両刃は空を裂き、骨はおろか皮肉すら触れず。

躲された、のではない。そもそも剣先は届いてすらいない。敵の肉
体は最初から、こちらの刃圏の僅かに外側で足を止めた。

読まれた。間合を、剣筋を、何より企図を。

なんたる

回転斬撃を悠々と見送ったその男は、即座上段から斬り下ろす。

狙いはこの、残りの右腕。これが失われればいよいよ文字通り、打
つ手は無い。

舌が巻き潰れるかの冷徹さで、相手はこちらの戦闘能力を剥奪する
気だ。

斬り返しては間に合わぬ。

逃げ、避けるは死。

故に前へ。敵に向かつて踏み込む。肩口から体当て。甲冑を帯びたこの体格の重量が丸ごとぶつかれば、その衝撃は骨をも砕く。

肩部装甲が男の胸骨に衝突し、突き飛ばす。

「ぬう!？」

その異常な軽さに呻く。身体同士が衝突、いや接触したならば自身に加えた力に相応する衝撃が、「手応え」が撥ね戻ってくる筈。

それが無い。微塵とて感じぬ。

奴は接触の瞬間に重心を後方へ流し、さらに足捌きによって自身に加わった衝撃力を全て殺したのだ。

その理合は腑に落ちる。全く見事な体操法の妙技。

しかし同時に、認め難い厳然の事実を知る。

またしても、攻め手を読み切られた。

否、否、否、尽くを。

「逃すかあ!!」

後方へ退がったのなら追うまで。

敵の重心は下がり、前進移動力に至ってはマイナスにある今、打ち合えば勝てる。必ず勝てる。

そも肉体のスペックが、ステータスは圧倒的にこちらが上なのだ。膂力など比較にもなるまい。打ち合い、押し合い、あるいは剣先が僅かに触れるだけで事は足りる。

捉えれば勝てる。ほんの寸毫、捉えられたなら。

刺突。

半身から踏み込み、胸元に引き付けた剣を前進と共に押し出す。^{レイピア}尖突剣の構えを彷彿とする突撃。それが人の身の丈を超す巨大剣であるうともこの魔人体は細剣同様に、いやそれ以上の速度で刺突を放つことが出来る。

逃げられまい。この突きは敵手の後退速度を明らかに上回る。追いつける。貫ける。

敵の鳩尾を、射——抜けず。

僅かに逸れた。敵は真半身になることで剣尖より逃れ、だけに留まらず。

刀身が翻されている。上段構えにあった切先と柄頭の天地が逆転している。そうして鰐元で剣身を擦るように受け、刺突を完全に逸らしたのだ。

逸らしながら、即座に敵手は動く。攻守すら逆転した。受けた剣の腹を摩り上げながら横一文字に斬撃が奔る。

躲し——切れぬ！

無様に踏躡たたらを踏み、一步二歩大きく距離を取る。

運良く折良く、そのタイミングを計らって胴体へと出戻ることが叶う。腕の余りでしかない左上腕に頭部を抱え込んで浅ましく安堵を噛む。

男はこちらを追わず、その場に静止。切先を中段に置いて片足の踵を上げる。

危うい。『浮遊』を維持できるだけの魔力が底を突くところだった。もう一合、対敵より攻め寄せられていたならどうなっていたことか。こうなる。

甲冑の胸当、鎧において最も強固で計算し尽くされた防刃構造から成る胸部装甲が、斬られた。鋭利な裂傷を刻まれていた。

「……………ふ、ふふ、くくくく」

心胆を伝うのは寒気。幾年月踏み倒し続けて来たものが今こそこの身に寄り添っている。

死。

その予感が、こんなにも生々しく、ありありと。

ああそれはなんたる、なんたる。

「なんたる僥倖！…なんたる恐悦！！俺はこれを、この死闘を待ち侘びていた……………」

無念だった。無念を呑み苦汁を嘗める、ただそれだけの生涯だった。

下らぬ政争と陰謀に巻き込まれ、御家も血族郎党も、愛した女さえ失った。殺された。

人がましい暖かみの何もかもを奪い尽くされ、崩壊の一途をひた歩むだけの自我。しかし、それでもなお、己が己足り得た唯一の縁よすがが。騎士、武人としての矜持。

それだけが己に意味を与えた。人間であることに意義を与えた。間もなく、その尊厳もまた踏み躪られたが。

身に覚えのない罪状を幾十と貼り付けられ、呆気なくこの首は断頭台を転がり落ちた。芥こみを包んで捨てられる、塵紙同然の、惨めな最期。だが命が惜しいなどと思つたことはない。死にたくないなどこの手が神に祈るなら、それこそ切り落としてしまえばいい。

無念は、慚悔は一つ。たった一つ。

この首は処刑斧によつてではなく、戦場の泥に塗れた剣によつて斬られ、断たれ、奪われねばならなかった。多くを殺した。義によつて、武によつて、殺して殺して殺した。ならば己もまた義によつて殺されねばならない。武によつて殺されねばならない。

謀の末の裏切りでも構いはしない。捨て石として使い潰されるなど至上の榮譽だ。そう、それ一つさえ叶うなら。

俺はただ、戦場で死にたかつたのだ。騎士として、武人として死にたかつたのだ。

そしてそれは遂に許されなかった。己はただ奪われ、顔も知らぬ権力者共の靴底の赤い染みとなつた。それだけの、甲斐も価値もない生涯。

その屈辱、この絶望、余人には解るまい。武人非ざるものには断じて解るまい。理解などもとより不要。

今、その絶望が歓喜に変わろうとしている。

切望が、眼前に現れた。たった一人の剣士が、血と汚泥と火の臭いに塗れたあの世界をこの場に顕現させた。

戦場を、連れてきてくれた。

「やはり」

返礼をせねばなるまい。

とうの昔に諦め、腐り落ちるのを待つだけの我が身が、死に汚くも存続するその意味……魂に、この男は価値を見出だしてくれた。

斬り殺すべき怨敵として。

ならばその価値が決して翳ることのないように。

「やはり——あの小僧を殺しておいてよかった」

邪悪は邪悪らしく振る舞わねばなるまい。

人倫に悖^{もと}ることをしよう。鬼畜にも劣る汚穢^{もと}を言葉にしよう。

魔に、身を墮とそう。

それが唯一、殺戮者の責務なのだから。

その甲斐はあった。我が邪悪は邪悪らしく実に真つ当に成果を示した。

まず、空気が死滅した。

肌身に感じていた、世界に満ちていた「生命」とも呼ぶべき気配が消えて、死んだ。

次に、遠巻きに観戦者を気取ってこの剣闘を眺めていた冒険者共。その内の幾人かが卒倒するのが見えた。戦場の氣に当てられ正氣を失くす新兵など珍しくもない。しかし、その戦気を発散しているのはたった一人の人間だった。

そして。

「

眼前に、立ち現れたのは一つの意志。一つの、概念。

それはたった一節、こう言った。

死

ね

33話 殺人刀

次の一合で終わる。

ベルディアは静かな確信を得て瞑目した。

胸中に満ちるのは喜び。もはや手に入れることは叶うまいと過去へ打ち捨てた願いの成就を祝って。

そして、この歓喜と等しく湧き上がるのは、ひたすらの敬服であった。

眼前の、一廉の剣士に、心よりの畏敬と尊敬を。

氾濫するかのような劇烈の戦気。そこに焦がれ続けた懐かしさを嗅いだ。今一度あの麗しの戦場へと舞い戻る機会を与えてくれた彼に、感謝を覚えるのはベルディアにとって当然だった。

しかし、そのみがベルディアの首を重くした理由ではない。

魔王と呼ばれ、また称する人物（魔物？）を頂点とする魔王軍。その配下には八名の幹部が存在する。

配下、などと言っても八名全てが魔王に忠誠を誓っている訳でも、従僕の身に甘んじている訳でもないが。

ともかく、ベルディアもまたその魔王軍幹部八名が一。帰属意識薄弱極まる幹部達の中で、ある種、最も軍属としての意識を持って……引き摺っていた。生前の、騎士としての在り様に、一兵卒として戦争という機構の歯車であることに、骨の髄から浸り染まっていた。

今では魔王軍の斬り込み隊長などと揶揄する声もある。従軍経験から来る過剰とも言える規律秩序の遵守がそうした通り名を呼んだのだろう。

しかし、何よりの所以はやはり、剣。

剣技、剣術、剣腕。

魔物でありながら剣に固執し、剣による闘争に心酔する。人間性を棄てた落伍者が、今以てそれだけを棄てられずにいる。愚かしいまでの剣戟嗜好者。

為に、魔王軍幹部における強さ（勝敗数）の序列を競ったならば、ベルディアのそれは必ずしも奮わない。

特に魔法を使う者との相性は最悪と言っているほどだ。魔力枯渇を敵からの搾取ドレインタツチによって克服し、また同時にそれを弱体化効果デバフとして利用され、仕上げにほぼ無制限の破壊魔法で釣瓶撃ちに遭えば……ベルディアならずとも、この地上の大凡の生物は滅却されるだろうが。

魔法、あるいはこの世ならざる悪魔めいた権能ちからにも、ベルディアの剣は屢々しばしば後塵を拝した。

だけに留まらずベルディアの生前から死後の今に至るまで、敗北に終わった勝負は決して少なくない。

故に、これは無意味な仮定である。

——もし、剣によって魔王軍幹部八名が相争ったならば。

下らぬ仮定。酒席で語らう妄想の類。幹部連中は、人間でないことは勿論、そもそも戦闘時ヒト型ではない者すらある。

王陛下御前の、ルールに基いた行儀の良い試合を行う訳ではないのだ。己が全能力を競ってこそ闘争の果てに掴み取る勝利には価値が生まれる。

無意味な机上の空論である。

ただ……一つだけ、明白な事実があるとすれば。

ベルディアと言う名の男は、騎士であった生前から、そして魔人たる死後に亘ってなお。

——剣を交えて敗北したことなど、遂に、たったの一度もありはしなかった。

今、この瞬間までは。

眼前に佇む男の戦闘能力を鑑みる。取り分け剣技に着目し分析し、我が手に染み付いた剣技それと較べ合わせた時、結論は至ってシンプルに表れる。

技量が、桁一つ分は違う。

あくまでも過少に見積もった戦力比。それに加えて使用武器の拵

え、運用法、修めた技術すら異なる敵手なのだ。この考察が然して意味を為さないことはベルディアとて理解している。

しかし、感じ入らずにはおられない。武人として、打ち、斬り、刺す為の凶器を扱う者……剣士として。

一体、どれほどの研鑽がここまでこの絶技を揮い得るのか、とうの昔から人の定命を超えてこの世を彷徨う魔人デユラハンをして理解できぬ。

天才……そういった例外という名の思考停止をベルディアは嫌悪する。生まれながらの性能を否定はしない。しかしそのみで勝敗が決するほど戦場という場所は単純明快さに程遠く、生憎と慈愛にも乏しい。並み居る古強者を容易く剣の錆とするような気鋭の新兵が、開戦一番降ってきた投石に頭を砕かれ二十にも満たぬその生涯に幕を降ろす。などという話は枚挙に暇がない。

なるほど、あの男は間違いなく剣才なるものを宿しこの世に生を受けたのだらう。その天稟を如何なく発揮し、惜しげもなく使い潰して、ひたすらに飽くこともせず剣を振るい続けて来たのだらう。

この世の剣士共が血の涙を流して欲する天稟それが、この男にとっては己が剣腕を支える添え木の一本でしかないのだ。

才覚も、修練も、闘争すらもその手段。いや、供物だ。

それほどの純度。驕らず、迷わず、ただ一つ処のみを目指してひた歩む一剣。

秘奥

そう呼ばれる何処いずこかへ、この剣士は到ったのだらうか。

それが今、この目で見られるのか。

「ふ……」

「……」

空は暗雲の気配も濃い。風は身を切るほどの冷たさで、とうに凍った筈のこの骸さえ凍えさせる。

澄んでいる。大気も、魂さえ。

己の脚で三歩、相手の脚ならば四か五といった距離。依然として、到達する速度はこちらが優る。

それは携えた武器にしても同じ。己は敵手の刃が届くよりも遙か

に遠間から一方的に彼方を斬り打つことができる。

まあそれも、敵の不意を衝ければの話だが。

そんなことが軽々に出来ていれば、己はむぎむぎこの左腕を落とされはしなかった。

使用武装の分析確認と共に、己に搭載されたあと幾つかの戦闘能力をベルディアは思索する。

取り分け強力なものやはり。

『死の宣告』

怨嗟の魔人、アンデッド・デユラハン固有の呪詛。効果は呆れるほどにシンプルであり、字義以上でも以下でもない。

任意の対象に任意の死期を強制する。それは明日でも、七日後でも、今この瞬間にでも構わない。

呪い、即死。

しかも、発動には一定の魔力を要するものの、呪死を約束させるのはあくまで呪詛そのものに宿った怨念。つまり、魔力や法力で如何にベルディアを上回ろうとも、この呪詛を解くことは出来ない。

この怨念に匹敵する存在位階の精霊、あるいは神の言祝ことほぎでも受けぬ限りは。

悪辣にして非道、そして極めて高効率な殺戮を可能にする異能。断じて戦闘行為でなきにせよ。相手が強敵であるならなおのこと、考慮に値する。

考慮した結果、ベルディアはこの能力の使用を捨てた。

結論は思索も半ばで自ら出していた。この呪詛に匹敵する存在位階の者には意味を為さぬと。

それこそ、眼前の男の手には握られているではないか。常軌を逸した滅死の呪物が。

今までにも、ベルディアが目にしたこともないような特異な武器、防具、能力を行使する冒険者はいた。いずれも冒険者として突出した成果を挙げてはいたが、ベルディアは彼らを下等上等の区別なく葬ってきた。『死の宣告』が大いに猛威を奮ったのは勿論だが、特殊能力を持つ冒険者は力ではベルディアを圧倒出来ても一様に技量が未熟に

過ぎ、尽く剣に血糊する結果となった。

余談である。

問題は、かの者の握る剣が過去に遭遇したどんなモノとも比較にならない存在力を垂れ流していることだ。

禍々しき殺戮思念。死滅嗜好。生命必殺の祈り。

—— 兇気

アレよりも破壊力のある武器はあった。

アレよりも頑強な盾や鎧はきつとあった。

しかし、アレより悍わぞましい刃を、ベルディアは知らない。

呪まじないではアレに勝てない。あの兇器、そしてあの剣鬼から勝を得んと欲するならば、斬り結ぶより他に途はない。

然りとてそれもまた至難。つい今しがた技量ではどう足掻いても及ばぬと自解したばかりなのだ。純粹な剣技の競い合いの末に突き付けられた敗北に喜樂はすれど、だからとて未だ己は自身の弱さに許しを呉れてやるような悟りの境地へ赴くつもりはさらさらない。

“技”……技術では彼奴に届かない。奈落より仰ぐ夜天めいて高く、遙かに遠い。

“体”……肉体能力では確実にこちらが優っている。魔物と人間のスペック差は絶対だ。

“心”……精神状態はどうか。憤怒燃やし、憎悪滾らせてなおその剣筋に鈍りは見えない。あるいは見破れぬ、だけか。

それを付け入る隙と嘯くには今少し勝因が足りぬ。心は一先ず捨て置く。体では勝った。けれど技によってそれすら覆された。

「！」

敵が、動いた。

頭蓋の内て繰り広げた長考は、その実数秒にも満たないだろう。とはいえ戦闘中、特に互いが互いに必勝の隙を、必殺の“機”を狙い窺い合うこのような構図に至って、実時間の経過などに然したる意味はない。

遠目に様子を窺うばかりの冒険者共、街の専守防衛を優先する兵士達、あれらが加勢に来るといふならば巧遅を捨てて拙速に動いてやら

ぬでもないが……。

まさか、だろう。

目を抉るかのような紅。強すぎる色彩が揺らめきながら、流れる。この剣士に余人の手助けなど必要あるまい。そも、誰が近付ける。紅い殺意を刻一刻振り撒くこんな男に。

右手に握られた剣、その柄元が肩口の高さにまで持ち上げられた。刃先は天頂を真つ直ぐに向いている。

だがしかし、変化は終わらなかった。

「……」

脇を締めたことで剣が身体へと側められ、剣身が傾く。傾くまま、倒れ、流れ流れて。

「なに……」

左肩と左膝が前に出る。男は真半身の姿勢を取る。

そして自然、右手に握られた剣は男の身体の真後ろへと隠された。

その構え、その剣形。そこに込められた意図、作意をベルディアは即座に覚った。

(捨て身、だと)

理解はしても得心は浮かばず、ただ不審ばかりが湧き起こる。一体何のつもりだ。

身体を前面に押し出すことで、完全な無防備を晒している。剣先が真後ろ向いていては打ち込みの出遅れは必至。肉体能力に優るこちらにまず間違いなく先制斬撃の機が巡るというのに……いや、それはどうか。

剣の全容は男の身体の裏側に隠されている。切先が果たして本当に後方を差しているかどうかはここからでは確認することが出来ない。刃の方向、柄の握りといった情報を把握出来ないということは、つまり、敵の攻撃がどの方向から来るのか予測出来ないということだ。

右上下段から、あるいは体軸を時計回りに轉身させれば左側から刺突、斬撃を放つのも十二分に可能であろう。

とすれば、敵の企図は明白^{くわだて}。

畏だ。

宛も隙だらけの半身を晒すことでこちらの攻撃を誘い、隠形の剣から必殺の一撃を見舞う心算。

こちらが如何に物理的な速度で優ろうと、相手の攻撃タイミングを捉えられなければ不意の一打は成立し得ない。逆に、こちらの剣筋を完全に見切っている彼方は、最高のタイミングで我が身を迎え撃てる。

あの捨て身の剣形は、最良の機を制さん——という我方の魂胆を逆手に取った欺瞞に他ならない。

「……………」

敵の思惑は看破した。ならば次はそれを打破する術策を弄すまで。幸いにして、詭えたかのような対抗手段がこの手にはあった。これを用いれば相手の工夫は些末な小細工に落ちる。確実に、敵手を斃し得る。

迷うことはない。もはや是非もない。もとより方途は一つのみ。

——一抹の疑念を捨てて

尋常の方法では勝てないと言うのなら、異常の法を取るまで。

あと一つ、我が異能を開陳しよう。

魔力を練り上げる。魔道に生涯と来世すら捧げる熟達の魔法使いには及ばぬまでも、魔人体たるこの身が蓄える魔力量は並の生物の比ではない。それを全て使う。余さず、全て。

全てを、この首に。

物質的に切断された首と胴には、しかして不可視の繋がりが張られている。この魔力の集中行為によって戦闘行動に支障を来すことはない。

右手の剣を地面に突き刺す。そして高密度の魔力塊と化した素首、それを、手に。

中空へ放り、投げ上げた。

景色が眼下へ流れ過ぎ去り、狙った通りの高度に到達した。上昇の勢いが弱まり、後は地表へ真つ逆さまに落ちるだけ。その上昇限界で、止まる。

重力という自然法則を無視して、首が空中にて静止した。

存分に魔力を蓄えたこの頭部はごく短時間のみ『浮遊』能力を持つ。戦場をゲームの盤面ボードのように俯瞰出来るこの小技が、戦争従事者であったベルディアにとってどれほど有用なものであるかは語るに及ばない。

ただし、飛翔魔法のような極めて高度な術式を組み上げる必要はないが、浮遊させられるだけであって首自体に身動きは取れずこの状態では自在性など皆無に等しい。紛れもない弱所の一つである頭を無防備にも身体から遠ざけるのだからリスクも高い。

そんなリスクを飲み込んででも、この暴挙には打って出るだけの価値があった。

浮遊能力は、あくまでも多量の魔力放散による副産物でしかない。

真の能力は、この「眼」にある。

ベルディアの「眼」は時を停める——宛も、時間が停止してしまっただかのような速度域にまで、視覚能力を強化することが出来る。

魔力の過剰過給オーバーブーストが眼球と脳へ瞬間的な処理能力向上を齎もたらし、遠近視力、空間認識能力、反射反応速度、取り分け動体視力は桁違いの性能を発揮した。

それは、蠅の羽搏はばたきを悠々と数え上げてなお余る。

白兵戦においてこの異能が反則級のそれであることは言うまでもない。あるいは、これを上回る身体強化スキルを持つ冒険者が居たとして、剣技でベルディアを上回れないのならば意味はないのだ。残念なことに、過去の「実例」がそれを証明した。

『死界の邪眼』

視界内に捉えた敵を確実に斬り斃す為の高速の……拘束の眼。

もはや逃れることは出来ない。過去最大量の魔力を邪眼に込めた。ここまでの強化措置はベルディアさえ未知の領域。

しかし、その力は既に敵を捕捉した。完全に、完璧に。

敵の剣の位置は空中ここからならば一目瞭然。奴の隠形はあっさりとなら無効化された。

そして切先、握りは勿論、今やこの眼には体重心の位置から呼吸の

深淺すら見通せる。呼吸を読まれることがどれほど致命的かは武人ならずとも知れたこと。

攻撃タイミングを、捕捉出来る。
勝った

十中の九、あるいはそれ以上の公算において勝利条件は整った。

その構え、その身体状況を総括し結論。敵は向かって右下段から、体軸の回転斬撃でこちらを迎撃する。間合は当然、その斬撃が放たれる刹那も、己は断じて見逃さない。絶対の自信、生涯と死後を捧げた自負を以て、断言出来る。

技^キでは、及ばぬという。決して到達出来ぬ次元にかの男は立っていないと。

ならば己は、体^{タイ}を窮める。巧緻からは程遠い拙劣さで、凡夫が肉体能力の極致を以て技巧の達人を葬ってやる！

胸奥から戦気を吹く。敵手のそれを吹き払う意志で。

今、踏み出す。

「おおツツ……!!」

鉄靴で地面を打ち、踏み付けて、一步、そして一步。

間合が閉じる。消える。

遂には我が最大射程へ対手を覆う。

つまりは、敵の間合の遙か遠きで。

剣を振り落とす。

さあどうする。どう出てくる

見えている。世界は今や極低のさらに下、停止寸前の超速度遅滞域に達した。

空間内のあらゆるものをベルディアの邪眼は見ている。

健気にも男に手を差し伸べようともがく少女、大地を吹き払う風のうねり、大気中を舞う塵の煌めき、空舞う鳥も羽虫も地を這う獣も人間共も余さず。

眼前の剣士の、皮膚の伸縮、流れる血脈、筋肉の収縮、骨の軋み、呼

吸、視線、その眼が語る意志^{こしよば}さえ。
全て。

全て——そうして遂に、男は動いた。

左脚を軸に轉身、後方に控えていた刃が最短軌道を経て高速射出される。

見えて、いるぞ。

右脚を踏み込みながらの斬り上げ。なるほど一步分の前進運動によつて間合は詰まる。

が、足りない。全く足りない。

一步では到達出来ない距離に我が身はある。剣先すら掠るまい。そして我方の剣は確実に彼方を上段から断ち割れる。

曇つたか

憎悪に、憤怒に、やはりその刃は鈍っていたのだ。

勝機を焦り、愚かにも攻め手を急ぎ過ぎた。待ちの姿勢を維持できず、来る我が打ち込みに肝を潰し機を誤った。

もはや術はない。この体勢、斬るという意を定め、肉体が斬撃の為に起動したこの瞬。退くことも躲すことも攻撃手法を変えることも無論不可能。

後は時間経過に従い、剣が骨肉を断ち斬るに身を任せるだけ。

終わったのだ。

勝敗は、決したのだ。

………だのに。

なんだ、これは。消えない、払拭できない、この疑念は。

——奴は何故、「待った」？

あれほどの殺意を放ちながら、必殺の意志を露にしながら、奴はこちらに打って出てくるのではなく、迎撃態勢を執った。

こちらの攻め手をわざわざ待っていた。剣形隠形などという小細工を弄してまで。

その技巧にあかせて斬り込んでくればいいものを。あるいは今頃この身は為す術無く斬り斃されていた可能性もある。

何故、そうしなかったのか。

……この異能を、知っていた？

僅か数回打ち合っただけで、この邪眼の真価を看破されていた、と。

ああ、この剣士にならば出来る。出来るのだろう。そんな洞察力を
具えていたとて何程の不思議もない。この剣士ならばある。あり得
る。

だから、こちらから打ち込ませた。

打ち合いでは梃子摺る。そう見越して、先手を譲った。

そう。先程、己が自ら思索したこと。

『斬るという意を定め、肉体が起動したこの瞬』。完璧な無防備とな
る、この「機」へと、我が身を誘い込む為に。

届かない。届きはしない。

敵の剣は遙か遠い。その刃渡りでは絶対に斬撃はこの身に及ばな
い。

届かぬ、筈だ。

刃は。

何を。

眼前の剣士は何を。

刃を、その手に、握り込んで。

轉身、左脇構えとなった剣を男は素手で握っていた。それは宛も鞞
から剣を引き抜こうとする所作で。

馬鹿な。鞞は、つい先程男の手で放り捨てられ、腰元には存在しな
い。そんなことをすれば自然、刃が掌を斬り裂くだけだ。

意味がわからない。理解できない。それはベルディアの知識外、常
識外の暴挙。

そう、ベルディアは知らない。

その剣形が、居合、抜刀術と呼ばれる構えであることを。
近似するナニかであることを。

ベルディアは決して対手を過小評価しなかった。その剣技を認め、
称賛し、最大の警戒と全能力を以て打ち破らんとした。尽力の限りを
尽くした。一切の驕り、侮り、油断を捨て去り、武人として一個の武
人と向き合った。

それが誤りであったと最期まで気付くこともなく。

ベルディアは敵を過小評価しなかった。過大に評価し、かの剣士に

武道の幻想を抱き、判断を誤った。見落とした。敵の「異能」を見落とした。

鞘の代替品——皮膚と肉を裂きながら刃が奔る。刃先は皮肉を存分に舐め上げ、味わい、そこに満ちた血潮を吸い上げる。生命の素、そこに宿る魂ごと。

抜打

掌が形作った架空の鞘から、高速で発射された刀身が紅い穢れを纏って空を薙ぐ。

そう、虚空を。

当然だ。首無し騎士は未だ間合の外。刀身が何者をも斬らぬは自明の理。なればもう一刹那でこの愚劣漢に頭上から巨剣が相応の末路を呉れるだろう。

この世の条理を遵守するなら。

死を受け入れ、大地に骸を晒す。武人に相応しき最期を甘受するべきだろう。もし、己が、正調の武人であったなら。

理は、既に捻じれた。

斬撃は奔っている。今以て、虚空を奔り、奔って。紅い刃によつて描かれた紅い斬線は空間を奔り、満ちる。水面に落とした墨の一滴の如く。無際限に。

それは飛翔ではなかった。物質化した斬撃が標的目掛けて発射される……そんないじらしさなどなかった。

拡張

描かれた斬線。斬撃。いや……「斬り、殺す」という結果が、思念が空間を侵食しながら拡がっていく。

そして斬るという行為と、この拡張侵食に時差は生じない。つまり。

間合などもはや無意味。その斬線上に存在するあらゆる物体は既に斬られている。

届かぬ筈の斬撃、無間の遠きにあつた對手。

それを紅い軌跡がなぞり上げている。右脇腹から左肩へ。
デユラハン、その胴を既に――斬り、断った。

「――」
ずるり、と。

斜めに上半身が崩れ、下半身もまたそれに追従した。二分割された骸は、その断面から血液ではなく、黒々とした瘴気を吹き出し、撒き散らす。

その傍らに、首が落ちた。

双眸に光は乏しく、それは消え去る寸前の蠟燭めいた。

「……今、の……剣……は……」

掠れ、微風にすら掻き消されてしまいそうな声を素首は発する。

ひどく純粹な、好奇心を滲ませた問いだった。まるで未知の剣に出会い驚き、そして歓ぶ、ただの剣術使いのような。

「そう、さな。名付くるならば……異形剣」

正調の剣術などからは程遠い。

捨て身による欺瞞、変則の剣形から放つ異能の、異常なる斬撃。

断じて、武人の一刀ではなかった。それはただの殺人刀、憎むべき怨敵を破壊する為だけの機構。

現世にあつてはならぬ、この世ならざる異能、異常、異形の剣。

「異形剣――〃幽〃」

死に損ないの、生きることには疲れた“亡者”が振るうにこれほどの剣があるうか。

「異形の……剣……く、ふっ」

騎士の男は破顔した。

ひどく愉快気に、笑声を上げた。

「くく、ふふふ……魔に、堕ちしこの身を、斬るに……それ以上の、剣は……な……い……」

黒い瘴気は風に浚われ、消える。その肉体ごと、初めから存在などしなかったかのように。

それが死。

生ける屍の騎士は、塵も残さず消滅した。

「……………」

何一つ残さず。

仇は消え去り、そしてこの手には刃金だけが残る。魂の血糊に穢れた、悍ましき刃金だけが。

今更何を驚くこともない。仇討ちの完遂によって齎されるのは虚無だけだ。そんな真実は、教授されるまでもない。

知っている。

心底、飽いてしまうほどに。

骸、そうだ。あの子の骸を吊ってやらねば。

血液に代わって鉛を満たしたかのような身体を手繰る。そうして一歩、重い足を踏み出した時。

そこに佇む少年と目があつた。

「い……………よ、ようつ。ジंकロウ」

「」

片手を上げてはにかむ小僧っ子、カズマ。カズマが、そこに立っていた。

己の理解能力の超過を自覚する。文字通り言葉を失くした。

「あー、その、び、びっくりするよな。いや俺もびっくりしてんだけど。アクアに蘇生してもらったんだよ。ほら、あいつあんなんでも一応女神って設定だろ？」

「設定じゃないわよ!! せつつつかく生き返らせてあげたっていうのにちよつとくらい私を敬いなさいよこんのヒキニート!!」

「ああああわかったわかったありがとうござんしたー! つとまあこういう訳で、なんかこの世界一回だけなら蘇生するのは割と普通らしくてさ。あ、あはははは……………」

ばつの悪い笑みを浮かべ、頬を搔く。その様は、何一つ変わらぬ。血溜まりに沈んでいたあの光景こそ夢か幻であったかのようなだ。

刀を地に突き刺し、少年へと歩み寄る。

「へ」

そうして、右手でその胸倉を掴み上げた。

「ぐっ!? な、ジंकロ……………!?!」

「戯け者ッ!!」

「ひっ」

「おのれの力量も忘れたか!? 敵わぬ相手だとしてめえの頭で解らぬ道理か!？」

息を詰めて少年は震え上がった。涙すら浮かべて、何かを口にしようとしては失敗を繰り返す。

「何故逃げん!? 何故……!？」

「ジंकロウ!」

横合いから腕を掴まれる。罅割れた甲冑姿、ダクネスが己を見据えていた。

「カズマの身体は蘇生して間もない。これ以上は」

「……」

そこから先を口にさせるのは憚られた。それこそ道理。愚劣は、己である。

手を放す。

少年は二、三度咳き込んで、そうして己を見上げた。ひどく、怯えた目で。

そして、同じ情をした瞳がもう一対、己を見ている。ダクネスに背負われたためぐみんが、伏し目がちにこちらを見詰めていた。

「生きて、いるのか」

「う、うん」

愚かしい問い。見たままの事実を、しかし確かめずにはおられなかった。

「……そうか」

肺腑から息が抜けて、落ちる。代わりに肉体を満たしたものは、安堵と、重い疲労だった。

今一度、少年に手を伸ばそうとして、思い止まる。

刀を抜いて、子供らを横切る。

「ジ、——」

背中に掛けられようとした声、無数の視線、全てを置き捨てて逃げないようにその場を後にする。

雪が降り始めていた。

34話 青い鳥の行方とは得てして

ちらちらと揺れながら白い綿毛が落ちてくる。鼠色の雲間から零れて舞って風に揺られて。

降ったり止んだりを繰り返しながら、疎らな雪の日が続いていた。もう、かれこれ二週間。

優しい秋はお仕舞いだとばかり、骨身に凍みる冬がひっそり始まった。

そうだ、あれから二週間にもなる。あいつなら光陰矢の何とか、なんて言いそう。時間の移ろいの早さに驚くようなら半人前、さも感慨深いなどと浸るなあ気取り屋、楽しめるようになっちまえばそいつあもう立派な老い耄れよ、とか……うん、すっげえ言いそう。

そうして自分の言葉の説教臭さを笑うのだ。あいつは。

「……二週間、か」

「ぶええつくしよーい!! んあ、あ? あんかいつひやかジユマク?」

くしやみと共に盛大な鼻水を噴出するアクア。そんなきつたない女神から距離を置く。

早朝の馬小屋前の丸太椅子、アクアと二人、焚火の前で必死に身体を縮こまらせている。珍しい晴れ間が災いして朝方の気温はおそらく氷点下。芝生にはきっちり霜が降りて、起き抜けは凍死を覚悟した。

寒い。マジ寒い。死ぬほど寒い。

ガタガタ震え上がる俺とアクアを、馬の世話なんかしながら笑う男の姿が……今はない。

ジंकロウが俺達の前から姿を消して半月くらいが経った。

ギルドの集会所には暖炉がある。馬小屋なんかには比べれば居心地は格段に良かった。だからだろう。ギルドには早朝にも関わらず冒

険者がごった返している。

まあ、文無しは往々にして宿無しであるので、冬場、特に今日のよ
うに寒さ厳しい時期など、馬小屋や無人のあばら屋を間借りしている
冒険者達の出勤時間はめっちゃ早く早い。

俺やアクアもその例に漏れず、ギルドの門扉に飛び込んだ。かじか
んだ手が、室内の暖気に溶かされて痒いやら痛いやら。

「……お」

「あ」

扉を潜つてすぐに、酒場のテーブル席に座るとんがり帽子が目に入
る。その下の眼帯と紅い瞳に視線がぶつかった。

湯気立つカップを両手で包んでぼんやりしていたのは、爆裂娘めぐ
みんだった。

「おはよう、めぐみん」

「ぶえつくしゆい!! ああつくしゆいちくしようめい!! めぐび
んおぼよヴ」

「お、おはようございます。鼻水すごいですよアクア。はい、塵紙」

「ありやとーめぐびん……ぶぴいいいいい!」

「なあ、お前今日冒頭から鼻水しか出してないぞ」

「んああ、スツとしたー!」

いつそ清々しいくらいきちやないアクアを放つて、とりあえずめぐ
みんの向かいに座る。

「……討伐系の依頼、増えてきたな」

「ええ、例のデュラハンが居なくなつて、モンスターが戻ってきたんで
しようね」

「あー」

「……」

「……」

会話終了。

……いやまあ、今のは身のある話を振らなかつた俺が悪い。別に世
間話に花を咲かせに来たわけではないし、長続きしない会話に今更氣
まずいとか思うような相手でもない。

本題は、ある。一応。近頃のトレンド的なやつが。

「今日も探すのか」

「私は探します。カズマは嫌なんですか」

「嫌とは言っていないだろ。ただ、討伐依頼があるんなら久しぶりに受けてもいいかなーってさ」

「ではカズマ達だけでどうぞ」

堅い声音でそう言うと、めぐみんはマグカップに視線を落とした。それ以上の問答を拒むみたいに。

頑なだった。態度も雰囲気も目も何もかも。取り付く島もないし、歩み寄りの余地もない。ジंकクロウの単独行動にご立腹だった時とは違う。怒りよりもずっと後ろ向きで、子供の駄々や我儘に似ているがそれともまた違う思い悩み。重い、悩み。

あの日、俺達は俺達の知らない「ジंकクロウ」を知った。

それは普段の剽悍で、軽妙で、大人というか年寄り臭いお節介焼きの青年ではなくて……ひどくおそろしい、誰か。

自分自身、その姿に足が竦んだ。たじろいだ。誤魔化しようもないくらい、こわかった。

そして、そんな青年の変わり様に俺達四人の中で一番怯えたのは、めぐみんだった。

無理もないと思うし、ビビりまくっていた自分にそれを責める権利もない。ただ、そういう理屈が通っていたとしても、めぐみんは納得できないのだろう。爆裂魔法に対するエキセントリックな言動と行動を差し引いてしまえば、この少女は年相応、もしかしたらそれ以上に人間関係の機微に敏い。繊細だ。多分、年齢不相応に利口なのも災いして。

「無理に協力してくれなくてもいいです。私一人でやります」

慕ってた、なんて言い方は仰々しくて好きじゃない。懐いてた、と言った方が印象はしっくりくる。めぐみんはジंकクロウに滅法懐いてたし、ジंकクロウもジंकクロウでめぐみんを特別猫可愛がりしてた節がある。十三、いやもう十四だっけか。この世界では一人立ちの年齢らしいが、ジंकクロウからすればめぐみんは十二分に世話を焼かず

にはいられない幼い子供に違いなく。

青年の優しさに誰よりも近くで触れていたためぐみんだからこそ、その変貌の衝撃は並大抵ではなかったろう。

だが何よりこの少女が気に病んでいるのは、青年の変化なんかではなくて。

「私はもう……平気ですから」

その変化に、怖気づいたこと。あいつを「ごわい」って思ってしまったこと。それがきつと、後ろめたくて仕方ないのだ。

「あく、えく、のく、うく……だああもう!!」

「ちよつとちよつとカズマ、いきなり大声出さないでよ。私達まで変な人みたいに思われるじゃない」

「お前に関してはもう手遅れじゃ! それに……」

守ろうとしてくれた。……結果として、青年は間に合わなかったのかも知れない。自分は首を落とされて、二度目の死つてやつを味わった。けど、あいつは自分の死に、豹変してしまうほど怒り、怒り抜いて戦ってくれた。そんなジंकロウに、そんな人に、俺は。俺は。

言うべきことは他にあった。もっと言いたいことがあった。なにより、言わなくてはいけないことが、あつた筈なのに。

なのに。

……そんな思考がぐるぐると巡っている。この二週間、ずっと。きつと、めぐみんも。

同情する。文字通りに、これに限っては同じ気持ちを持て共有できると確信できる。あまり嬉しいことではないけど。

でもな。

「叫びたくもなるわ! やいロリっ子! そうやって拗ねてイジけてたつて何も解決しないからな!! 泣こうが落ち込もうが今日も明日も明後日も俺達や食つていかなきゃなんないんだよ! どつかの自称女神のアホの所為で貯えだつて! ないし! な!!」

「いだっ!? あだっ!? シッペやめっ、やめなさつ、お願いやめてカズマさあん!!」

八つ当たりにアクアの腕を捕まえてバツシバツシ叩く。無駄に張

りツヤのある肌は実に軽快で良い音を奏でた。

「……そんなこと、わかってます。だからこそジंकロウを探してるんです。我が爆裂魔法が最大限の力を発揮するにはジंकロウが必要なのです。絶対、絶対、必要だから……だから……」

「そうやって一生あいつにおんぶにだっこで行く気かよ。俺達は同じパーティ組んでるメンバーだ。けど、家族じゃない。友達同士の仲良し倶楽部じゃないんだ。依頼を受けて、稼ぐ。冒険者なんだよ」

「わかってますよ!!」

椅子を蹴倒して、めぐみんは叫んだ。店中の視線が俺達に突き刺さるのを感じるが、今は無視する。というか知ったことか。

紅い目がこちらを睨んだ。薄く濡れて光る大きな瞳が。

「わかってます……! わかり、ますけど。でも、私は……このまま
は、嫌なんです」

一度唇を噛んで、めぐみんは俯いた。

「このまま、こんな別れ方で、私とカズマとアクアとダクネスと……ジंकロウの。五人の、パーティが終わってしまうのは、嫌ですよ……!」

「……」

「……もし、これで終わりだとしても……なら、せめて、最後まで……ジंकロウに何か言ってやらないと、気が済まないじゃないですか」

——じゃないと、何も始められません

そう言つて一滴、涙がテーブルに落ちた。

めぐみんは乱暴に袖で顔をぐしぐしと拭う。案の定赤く腫れた目元が、なんとも痛々しかった。

「……カズマはこのままでいいんですか」

「勿論、いい訳ないだろ」

努めて憤懣を込めて顔を顰める。

「しよーがねえーなあー。なら、今日も探すかーあの唐変木。まったくどこほつつき歩いてんだか。街を出た、なんて噂はちつとも聞こえてこない癖になんでこう尻尾も掴めないかなー」

「……」

「んだよ」

頬杖を突いてめぐみんを見上げる。

ぱちくりと瞬きすること数秒、赤い半目が自分を見下ろす。

「……結局カズマだつてそのつもりだったんじゃないですか」

「ねえカズマ。男のツンデレとかキモいだけだからやめた方がいいわよ?」

「うっせうっせ!」

ここぞとばかり赤と青の小娘共が全力で小馬鹿にしてきやがる。

そうだよそりや探すわ。探さないでか。あの野郎にはまだまだこれからもこのパーティーで働いてもらうのだ。てかこんな駄狂変態三人娘を自分一人に丸投げなんぞさせねえ。今更逃げられると思つたら大間違いだ。ノルマは一人1・5人で折半つてもう決定してるから。変更不可だから。

「素直じゃないですね」

「素直ですう。素直に事故物件の処理をあいつにも押し付けたいだけですう」

「ふふっ」

あの日以来、こんな風にめぐみんが笑つたのは初めてかもしれない。本当に子供のご機嫌取りも楽じゃないぜジंकロウ。

よっこらせ、と椅子から立ち上がり肩を回す。アクセルの街は広い。また脚を棒にして歩き回らなきゃならないのだ。

「東の方の裏通り。空き家も多いから食い詰めた冒険者が結構集まつてるらしいぞ」

「なるほど、身を潜ませるには好都合ですね。川沿いを探索しようかと思つてましたが、そっちの方が可能性高そうです」

あいつの消息はちらとも知れない。日雇いの傍ら、日毎にパーティーメンバー手分けして街の中を探してみたりしたが、未だに手掛かりすら見付からずにいる。

街の正門（跡地）に詰めている番兵の人には小まめに確認しているが、今のところジंकロウらしき青年の目撃情報は無い。

つまり、少なくとも街から去っていったなんてことはない……筈、たぶん、きつと。

人知れず、人目を忍び欺いて姿を消すくらいあの男なら造作もなくやっつけてしまいそうではあるが。

「ダクネスは今日も来ないか」

「鎧の修理は終わったらしいんですが、他に用事が出来たとか……」

「ふあ〜……ね〜私はギルドで留守番していいい〜?」

席を立ち、めぐみんとあれこれ相談を打ち、アクアのぼやきは無視して歩き出す。

下手な考え休むに似たり、本当に至言だと思う。やる事を一つ決めてしまえば気持ちは遥かに軽くなった。頭と胸奥の蟠りは消えなくても。

待つてろ、ジंकクロウ。必ず見付け出して、ここ半月分溜まりに溜まった文句を全部浴びせ掛けて――

「キャツ」

「うわつと!?!」

なんて下手な考えを弄んでいた矢先、完全な前方不注意だった。

扉の脇に鎮座する彫像の影から人が一人飛び出して来た。注意散漫の自分にそれを避けられる訳もなく。

軽く肩と肩がぶつかる。小さな悲鳴と共にその人影は半歩ほど後退った。

「す、すみません!」

「あ、いえ! こつちこそ」

「なにやってるんですかカズマ」

めぐみんの呆れ声に反論も出来ない。へこへこことこちらが頭を下げると、その人はいかにも恐縮して片手を左右にぶんぶん振った。もう一方の腕には、なにやら細長い箱を抱えている。

いやに黒い装いだっただ。黒、いや暗い濃紫のマキシ丈ワンピース。肩には同系色のカーディガンを掛けている。

ウエーブがかったロングヘア、前髪が片目を隠しているのもチャームニングだ。

透き通るような白い肌。細い顎のラインの中に、落ち着いた印象の目鼻立ち。薄幸というか影のある雰囲気を絶妙なエッセンスにした、有体に言って物凄い美女だった。

何より、地味な色合いの服に包まれた派手過ぎる凹凸の肢体。修道女、というかもはや喪服のような暗い装いにそのナイスバデーは凄まじいギャップである。

だからその二つのメロンに、眼球が自由を失ったとしてもそれは俺の責任ではないと思うんだ。

「あ、あのお……?」

「いやー失礼しましたお嬢さん。お怪我はありませんでしたか?」

「え、あ、はい。大丈夫です」

「そうですかそれは何よりです。貴女のような美しい人に傷一つでも付いたらそれは世界の損失でしょうから」

「へ? あ、あははは……それは、どうも」

「鼻の下が伸びすぎて猿みたいですすよカズマ」

「そんな慣れないセリフ、よく恥ずかしげもなく言えるわね。似合わない過ぎてキモいんですけど……うっ?! くっさ、くっさ!」

「忌憚の無い意見ありがとうコノヤロウ共!」

すっかりいつもの調子を取り戻した爆裂娘となんか後半やたらdisってくる女神に、振り返り様チョップをくれた。

綺麗なお姉さんは俺達に会釈して、そのまま受付カウンターの方へ向かった。

うむ、ヒップラインも実に素晴らしい。

「いつまで凝視してるつもりですか……」

「出来ればこのまま四六時中」

「バカ言っでないで行きますよ! ほら!」

「ええ〜」

「っ? っ?!」

アクアの如くやる気を喪失させる俺にめぐみんが容赦なく蹴りを入れてくる。

当のアクアは、何故か首を捻りながら鼻をひくつかせていた。なに

してんだこいつ。

ともかく不承不承、俺達は今日もまたジंकロウ搜索行へ繰り出そうとした……。

「あの、ジंकロウさんは今日こちらに来てますか？」

「ん？」

「え？」

「ほえ？」

のだが。

「剣士の、シノギ・ジंकロウさんのことでしょうか？ いえ、今日は……というか、ここ最近はギルドで受付された記録もありませんね。見掛けたという話も聞きませんし……」

「うくん、そうですか」

「……ところで、差し支えなければ、なんですが。その、ウイズさん」
「あ、はい」

「ジंकロウさんとは一体どういったご関係でしょうか。出来れば詳しくつ、可能な限り細かく！ 一から百まで順番に!! 教えていただけますか??？」

「ひっ!! ど、どうしたんですか!! なんでそんな詰め寄ってくるんですか!! わ、私になにか不味い事をしちゃいましたか!!」

カウンターから身を乗り出した受付嬢さんが対面のお姉さんにずいど迫っている。何が、とは言わないがばるんっ！ と零れ落ちそうな勢いで。

いやいやいやそつちはひとまず置いて。

今、あの喪服のお姉さんは確かに言った。

「やっぱり冒険者同士でくっつくからこの街の受付嬢はもてないんですよ!! そうなんですネ!! 抜け駆けですかウイズさんまでえ!!」

「ひいひい!! ごめんなさいごめんなさいごめんなさい!!」

「あ、あのー……」

「! た、助けてください通りすがりの方あ!!」

なんか鬼のような形相で受付嬢さんはお姉さんの両肩を掴んでがつくんがつくん揺らしている。このままいくと首の骨がぼつきり

逝きそうな勢いだった。めっちゃ怖い。やばい関わりたくない。

しかしめぐみんとアクアが背中を押してくる。自分は絶対に矢面に立ちたくないという強い意志を感じる。この、こいつら……！

「えっと、お姉さんは、その、もしかしてジंकロウの知り合いなんですか？」

「そ、そうです！ 私のお店のお得意さんで……」

「お店!? やらしい店!? アクセル風営法違反!? そのエロい身体で彼をモノにしたのね!?!」

「魔道具店です!! 出店許可の届け出しましたよね!?!」

「やっぱり床上手が全てなんですよ!!」

「話聞いてくださいお願いしますう!!」

「……………」

小一時間続いたとき。

「はあ、はあ、ふう、こ、こわかったあ……………はあ、はあ……………」

「お、お疲れ様です」

ぐつたりと大理石の床に両手両膝を付くお姉さんを心底憐れみながら、酒場から持ってきた水をコップで差し出す。

受付カウンターから注がれる猛獣のような眼光には気付かないふりをして、改めて尋ねた。

「あの、ジंकロウのことなんですけど」

「ん、ん、ん……………ぷは……………あ、す、すみません。そうでしたね」

「魔道具店の知り合い、ですか……………」

「ええ、以前に剣を一振りお売りしたんです」

「……………」

まさか、であるが。

あのやべえ刀の卸元がすわ目の前に……………うん、今は置いておこう。そつとして置こう。パンドラの箱を面白半分で開ける頭のおかしい

35話 千客万来。馬は帰れ

アクセルの街はその中央を大きな川が縦断している。というか、水場に沿って集落が発展した結果の現在なのだろう。

中心地に建つギルドを出発して、蛇行する川を遡ること約30分。早くも街の外縁を囲む石壁が見えてきた。

石壁にはトンネルが空けられていて、壁の内側には番兵さんの詰所が設えてあった。

先頭を歩くお姉さん——ウイズが番兵の一人に会釈する。

「こんにちは。魔道具雑貨店のウイズです」

「ああウイズさん。こんにちは。シノギさんのところですかね？」

「はい、通っても大丈夫でしょうか」

「勿論」

なんて、簡単なやりとりで通行許可が下りた。

顔見知りというのもあるだろうが、街から外へ出る分には然したる検査も要らないようだ。策すぎね？　と思わなくはない。

デュラハンの人の格好がどんだけ常軌を逸して怪しかったのかがよく分かる。

なんともあつさりど街の外に出てしまったが、目的地はまだ先らしく、俺達はなおも川沿いを歩く。

ふと、その時。

「ん？」

音が耳を打った。甲高く、硬い音色。響きからしてまだ少し遠い。

何となく聞き覚えがある。音の正体を記憶から掘り起こそうとして、横合いから差した声がそれを妨げた。

「……よく来るんですか」

「え？　いえ、時々お掃除の手伝いに来るぐらいです」

おずおずとしためぐみの質問に、ウイズは柔らかく微笑んで答えた。

「……そうですか」

「？」

美人なお姉さんのきよとん顔は実に可愛くて眼福この上ないが、「ジंकクロウとはどういう関係なんですか」「旧くからの知り合いなんですか」「懇ろなんですか」「大人の関係ですか!?!」……後半は主に俺が知りたいことであるが。なるべく詳しく。臨場感強めで。

ともかく、めぐみんの言外の意図は見事にかわされた。というか気付かれもしなかった。天然……だと……!?!

カズマさんの好ポイントを続々積み上げていく素敵お姉さんとマジでどんな経緯で知り合えたのか切実にジंकクロウを詰問したくなってきた頃。

「お」

その家は見えた。

川沿いに繁った雑木林の奥、突然木々が拓けたかと思えばその空間に行き会った。枝葉によって丸く区切られた空から陽光がスポットライトめいて差し込んでいる。

その只中、小さな一軒家が建っている。いや、うん。確かに「一軒の家」には違いないのだが。

茅葺きの寄り棟屋根。

漆喰を塗られた板壁と所々剥き出しの土壁。

縁側、縁框があり、そのすぐ下の飛び石が前庭から背の低い木柵の門扉まで続く。

普通の家だ。実際に見たことはないが、その外観はひどく馴染み易い。

だってそれは、古風な日本家屋だったから。それはもう、小さい頃テレビでよく見ていた日本む〇しばなしに出てくるような山奥の古びた庵だったから。

いやもう丸つきり、完全に、立派な百姓家です。時代劇でしか見ないような木造りの小屋敷。

「なんでやねん」

ここ、洋風ファンタジー異世界。

これ、江戸時代の農家。
世界設定守れや、せめて。

そしてまた、硬質な音が辺り一帯に響く。音源は探すまでもなく、目の前にある。いる。

「あ……」

「なんだなんだ、今日は随分客が多いな」

笑みを刻んで、そいつは薪割り用の斧を手元でくるりと回し肩に担いだ。

割られた薪たきぎに代わって、一回り太い枝、もとい丸太が置かれる。置いたのは女の子だった。

その子はこちらに気付くと見るからにぎよつとして男の背中に隠れる。そしておそるおそる俺達を覗き込むと。

「あつ、めぐみん!」

傍らの少女の名前を叫んだ。驚いたような顔はすぐに笑顔になり、何やら慌ててしかめ面を作る。

「な、なんとという偶然! なんとという運命の悪戯! 再会できるのをつ、じゃなくて! 再戦の機会を心待ちにしていたわ! さあめぐみん! 今こそ因縁の対決に——」

「チエエエエエエエエエエ!!!」

「ひええええええ!」

自分の真隣から少女が猪の如く飛び出した。

イカれた奇声というか氣勢を発して。

「なんで! また! ゆんゆんが! ここにいるんですかー!」

「いた!? あた!? いたたたつ!? めぐみんなんで!? なんでいだつ! なんておっぱい叩くの!? ちよつまつ、めぐみん!?」

ばっしんばっしん平手が少女の胸を襲う。歳は自分より少し下に見えるが、もしかしたら、万に一つ、めぐみんと同じ年の可能性もある。

年齢不相应のなかなかの発育なものだから、それはもう揺れるわ弾けるわ凄い。何がとは言わないがとにかく凄い。

「いたたたたたたツツ!? 取れる! おっぱい取れちゃう!?」

「ぬんぬんぬんぬんぬん!!」

上体を左右に∞を描くように振ることで平手打ちに体重とその反動が乗り凄まじい威力を發揮している。

あのロリっ子、デンプシーロールなんてどこで覚えたんだろう。

「……」

「おうおう仲良きこと」

などと、そいつは如何にも暢気に言った。

最後に見た時と何一つ変わらない、あの軽やかな笑みを浮かべて。

そいつは、ジंकクロウだった。間違いなく、俺の知ってるシノギ・

ジंकクロウだった。

「はあ……」

「他人の面見て溜め息たあ御挨拶だな、カズ」

「吐きたくもなるわ。あー、なんか……もう疲れた」

用意していた文句とか……謝罪とか、諸々一切どっかに失せた。認めたくないが、安堵の溜め息つてやつで蟠っていたもの含めて吐き出ていってしまったらしい。

もしくは、めぐみんの勢いに全部持つてかれたか。

たぶん両方だった。

「説明、あるんだろうな?」

「はて」

「すつとぼけても見逃さねえよ!? いや、最悪俺は誤魔化されてやつてもいいけど、あのロリっ子は絶つつつ対許さないからその辺覚悟して言葉選べよな?」

「……ああ、そいつあ確かに道理だ」

観念するようにジंकクロウは言った。

「二週間近く音信不通だったのはこの家を建ててたから、か?」

「そうさな。まあ、まずは分かり易いところから話そうかい。この庵は元々この土地に建ってたもんだ。そこのウイズの口利きで見付け、殆ど捨て値で買い上げた」

「口利きなんてそんな。ただ、私のお店の世話をしてくれた不動産屋さんをご紹介しただけで……」

恐縮するように、ウィズは両手をぱたぱたと振る。

「え？ 元々？」

「おうよ。己も初めに見た時や面食らった。随分昔、この街を訪れた流れ者がこさえ、長らく住み着いていたらしいが。その家主もとつくに死んで手付かずのまま打ち捨てられておったのよ」

「流れ者、ねえ……」

「ああ、己らと同じ、流れ者だ」

十中八九、過去にこの世界へ転生した日本人が建てたのだろう。いったいどれくらい昔のことなのやら。

アクアを問い詰めても無駄なのはマツルギの件で周知の事実なので真相は闇の中である。

「我ながら無理な条件を出しちまったと思うが、いやよくぞこうも御逃え向きな場所があったもんだ」

「あはは……普通、街の外に家を建てる人はいませんからね。いくら駆け出しの街とはいえ、モンスターや野盗の被害もゼロではありませんし」

「ああ……」

そりやまあ出るだろう。勿論、街周辺の安全確保は常日頃行われているだろうが、カエルとかトカゲとかゴブリンとかコボルドとか、根絶が難しいモンスターなどそれこそ無数にいるし。幸い強盗被害には今のところ遭ってはいないが、絶対ないなんて保証もまたどこにもないし。

その為の壁で、その為の番兵で、そして冒険者である。

「人気を嫌^{ひとけ}つてのことだろうが、相当に変わり者だったらしいな。この家の主は」

「ジंकロウも大概だと思うけど」

「違えねえ」

嫌味も同意されてしまえば意味がない。仕方ないので、ジंकロウとお互いの苦笑を突き合わせた。

「けど、それにしただって二週間も何してたんだよ。一から建てたって言うならまだしも、ただの引っ越しにそこまで手間取るか普通？」

「いやそれがな、確かに庵は手付かずで残っちゃいたんだが……正真正銘の手付かずでな。屋根は抜け、床は腐り、壁は崩れ、そろもう酷え有様だよ」

「うわぁ」

「はい、本当に。建ってるのが不思議なくらいでしたね……」

うんざりとジंकロウは肩を竦め、傍らでウイズが遠い目をする。

「まあ、大黒柱は辛うじて無事だってんで建て直しまでは行かないだが、修繕だ掃除だなんだかんだと小忙しいのなんの」

「ああそれで……」

「しかしどうだ。素人の手遊びにしちや上々の出来であろうや」

冗談めかした得意顔で、自分の背後の庵を親指で指す。

古めかしい佇まいだが、壁の漆喰は滑らかだった。茅葺屋根も毛足(?)は整っているように見える。中はどうなっているのだろう。古式の日本家屋なんてテレビで見るとくらいだ。純粋に興味はある。

「って、ジंकロウが自分でやったのかよ」

「おうさ。職人を雇おうにも銭が無えんでな」

「ですよ」

したくもない同意と世知辛い共感にな、涙が出ますよ。

「……言えば手伝ったのに」

「そうか。そうだな……そうすりゃあよかつたな」

「……」

細やかな文句を呟く。

この飄悍な男には大概の嫌味も皮肉も通じない。けれど今は、ひどく神妙に頷くのだ。

「しかしそれも行かんでな」

「なんでさ」

「ああ、それがな……」

「？」

いつに無い歯切れの悪さ。ジंकロウは何とも言い難い微妙な顔をした。

思わず首を傾げた、その時。

『『ターンアンデッド』!!』

『あいだだだだだッツアー!?』

「え?」

「ひえ、なに!？」

「この声は……」

「わっ、なんだよ!？」

俺やウイズ、そして未だにキャットファイト（一方的）していためぐみん達もその絶叫というか悲鳴に動きを止める。

そんな中、シンクローは一人忌々しげに。

「戯けめ、見付かりおつた」

林の暗がりから突然激しい蹄の足音が立った。

嘶いななき草木を掻き分けて現れたのは、黒く大きな馬。サラブレッドな

んで目じやない巨体の怪物馬だった。

その馬は、頭から鼻面までを兜で覆っている。おそらくは馬の頭蓋骨を象つたものなのだろう。馬鎧自体は然して珍しくはないが、わざわざこんな不気味な形を選ぶ馬主の趣味を疑う。示威効果という意味ならなるほど、観面に効いている。

などと観察している場合じゃない。馬は真っ直ぐに俺達の方へ駆け寄っているのだ。

「やべっ、皆逃げ——」

「あー、よいよい。どうせ狙いは一人だ」

「へ?」

真っ直ぐに、迫る。

馬は真っ直ぐ、シンクローにもめぐみんにも乳しばかれ中の女の子にも、勿論俺にも目もくれず——ウイズに突っ込んだ。

より正確には、前脚と後ろ脚を思い切り広げて、頭も目一杯下げて、地面を腹這いにスライディングしながら。

ウイズのスカートの中にその馬面を突っ込んだ。

『ぶるひっひひひいいいん!!』

「キヤアアアアアーツツツ!?!」

堪らず悲鳴を上げるウイズ。

堪らんと言う感じで嬌声を上げる馬。

なんだこれ。

「なんだこれ」

「さあな」

「ジっ、ジंकロウさあくん!! 助けてください、も、もぞもぞしないでえ〜!!?」

『ぐひっ! ぐひひひいーん!!』

「……」

ジंकロウは脱力するように一息吐いて、肩に担いでいた斧を手繰る。掌の中心でそれをぐるりと回転させ、ゆっくりとした足運びで踏み込み、その動きの緩慢さとは比べ物にならない速度で斧の刃先を振り落とした。

ざくり、と。肉厚の刃は深々と抉り込んだ。

馬の首……の、数センチ手前の地面へ。

「夕餉は桜鍋でも饗すか? まあ、カズ」

「いいねー。馬肉なんて田舎の爺ちゃん家で食べて以来だ」

「馬肉と聞いては私も相伴せずにおけませんね」

乳しばきに飽きたのか満足したのか、めぐみんも加わっていいよ食肉加工の相談が始まる。

ロングスカートの下にある馬面の表情は分からないが、黒い馬体全身にびっしりと汗を吹き出し始めたところを見るに容易に想像はついた。

さっそくと言わんばかり。ジंकロウが再び斧を持ち上げた瞬間、馬は地面を削るようにその場を後退った。器用だなおい。

「なんだい、もういいのか。遠慮せずもつと楽しめ。ウイズにや後で己からきちつと詫びを入れておいてやる。然すれば確と——介錯仕ろう」

「や、悪乗りしといてなんだけどジंकロウも馬相手にちよつと大袈裟……」

『そうだそうだ！ 動物愛護という言葉を知らんのか貴様！』

「「え？」」

抗議するようにもう一度それは嘶いた。

俺とめぐみんと女の子、三者三様に声を上げて固まる。三つの視線は一カ所へ、黒くてでかいその獣に。

喋った。馬が。

「なんで毎回私のスカートに頭を突っ込んでくるんですか!？」

『そこにスカートがあるからだ。言わせるな恥ずかしい』

「もつと恥ずかしがるべきことがありますよね!? 人として!」

『だって馬だもの。だから全裸でも許されるよね! ほうら御立派様だよお』

「いやあー!!? ち、近寄らないでください!!」

顔を真っ赤にして当然の訴えをするウイズに、黒い馬はそれは流暢に、そして実に腹の立つ、いやもういつそ清々しい変態っぷりで返す。

魔物というか、広義の意味でモンスターチックな馬だ。

「ジ、ジंकロウ。こいつ」

「だああ!! はあつ、ぜえつ、ごっほ、おえつ、やつと、追い、付いた……!!」

林から水色の髪が飛び出してきた。息せき切らせて嗚咽まで吐く、それはアクアだった。

さつきから静かだと思ってたが、どうやら雑木林の中で馬と追い掛けっこしてたようだ。

小枝やら葉っぱやらに塗れたアクアは、どうにかこうにか息を整えると、びしつと一点を指差して。

「そいつ! その馬! あのアンデッドよ!!」

「指示語多いわ」

「だーかーらー!!」

アクアの知能指数低めの発言に首を捻る。

しかし思索を巡らせるより先に、答えはあっさりとは寄越された。傍らの、ジंकロウから。

「お前さんの首を刎ねた野郎だ」

「え」

『如何にも』

鷹揚に馬は頷いた。ひどく、人間臭い挙動で。

『あの時は名乗る間もなかったな。よもや殺した相手に再び見えるまみとは僥倖か、数奇と呼ぶべきか。ともあれ改めて名乗ろう。勇敢な冒険者の少年よ。我が名はベルデイ——』

『『ターンアンデッド』!!』

『あいつだだだだだだだあ——!!?』

『キヤアア!?! 私まで消える!?! 消えちやいますう!?!』

焼け焦げたような黒い煙を上げて馬が叫ぶ。巻き添えでウイズも叫ぶ。

アクアは愕然と両手を握った。

「カズマどうしよう! 私魔法が効いてない!」

「いや効いてる効いてる。効いてるけどとりあえず今はやめろ」

36話 おいでませ化物屋敷

俺がこのような姿になったのは、聞くも涙、語るも涙の訳がある。そう、あれは今から100年前……200年だったかもしれない……いやそんなに経ってないかもしれない……え、何年くらい前だっけ？ ウイズ知らない？ 知らないか。知りたくもないという顔だな。やめろそんな冷たい目で見るのは……興奮するだろうが。フフフ。

「死に損なったのよ、この間抜けは」

『あつ貴様！ 簡潔に要約するんじゃない！』

カツコン、斧で丸太を真つ二つに割りながら、心底つまらなそうにジंकロウは言った。

「そして、それを仕損じた間抜けが己よ」

さらに二分割、もう二分割、手頃なサイズに薪を切り分けて溜め息。さりげなくジंकロウの背後に逃げながらウィズは頭を振った。

「いえ、むしろ逆です。斬りすぎたんです、ジंकロウさんは」
「？」

「そりやどういうこった。ああ、おゆん。すまねえが薪こいっを裏手に積んできてくれ」

「あ、はあい！」

「なにが、はあい♪ ですか。色目の使い方を覚えましたがこの雌猫はあ!!」

「ひい!? 今までにない言いがかりだよめぐみん!」

めぐみんの方こそ猫の威嚇めいて発憤しているのだが、なんのかの言いつつ薪束を二人分けあって運んであげている。なんかもうツンデレというより情緒不安定な人だった。

仲良く喧嘩する二人の少女を見送ってから、ふと先刻からの疑問が口をつく。

「あの子って、前にジंकロウと馬に乗ってた子だよな」

「ああ、妙な成り行きで片棒を担いでくれてな。めぐ坊と同じ紅魔族

だそうだ。おゆん……いや、ゆんゆんだったか」

「ゆ……ああ紅魔族ね、はいはい」

そのコミカルファンシーな響きは間違いなく紅魔族のそれだ。

「腰を折ったな。で？ 斬れ過ぎちまったのが何ぞ拙かったか」

「あ、はい」

斧を布巾で拭いながらジंकクロウが水を向けると、ウイズは頷く。

「あの剣の切断力は使用者の能力に依存します。そしてもし、十分な技量を持つ人があれを振るえば、その刃が断ち斬るのは物質だけに留まりません。魔力や神力しんりきのように形を持たない力や概念、なによりも、魂を喰い破ってしまう……」

「うわお厨二心を擽るワード。ボクわくわくしてきたぞー」

「いつ聞いても御大層な謳い文句だ」

そういう香ばしい設定は創作だから許されるのであって、現実には本当にただただ厄介で面倒で危なっかしいだけだった。

おいそれと振れない刀に何の意味がある。いや気軽に振り回されたらそれこそ困るが。

「おそらくベルディアさんは、あの剣で体を斬られたことで頭との縁、魂の繋がりまでも断ち切られてしまったんだと思います。だから、本来なら屍体共々消滅する筈だった首一つ分の魂だけこの世に残存したんです………残念なこと」

『今残念って言ったよね？ ウイズ、今確かに残念って言ったよね』

「ですが、総体の大部分を剣に食われれば完全消滅は時間の問題です。それに、刃に宿る呪詛が死病のように魂を浸蝕する筈ですから………本当に、どうして消え去ってくれなかったんでしょう」

『本音を小出しにするのはヤメテ。傷は浅くても鋭さは剃刀だから』

馬の悲しげな物言いを、頬に手を添えながらナチュラルに無視する素敵なウイズだった。余程にセクハラに対する恨みが深いのか、はたまた何かしら因縁があるのか。どうも後者に思えてならないような、見事なセメント対応である。

「まあ、己の手落ちには違いあるまい。得物を御しきれなかったのだからな」

「えー。そういう結論になる？　この場合、武器のクソ仕様が問題じゃね？」

「すみませんすみませんっ。元はと言えば私があの子をジンクロウさんにお売りしたばかりに……！」

「えっ!?　い、いやいや！　ウイズが謝ることないって」

「おうとも。妖刀と承知で買ったのあ己だぜ」

「前言撤回して悪いけど自業自得じゃねえか」

「かかっ！」

斧の刃を検めながら、物騒な話を一息で笑い飛ばす。男のいつもの調子に、喜びより呆れが勝った。……うん、こういう感想もいつも通りだな。

ジンクロウは斧を玄関口の傍に立て掛ける。

続いて、庭先にあつた大きな桶を引つ繰り返して、中に満ちていた水を辺りの地面に撒いた。打ち水、なんて季節でもないが、はて。そうして今度は水瓶からバケツで水を掬い、続々桶に流し入れていく。

「何してんだ、それ」

「水を換える」

「ふーん……」

微妙に回答になつてないが、まあいいや。

なにせ一番の疑問がまだ残っている。どうでもいいと言えはいいのだが……。

「いや、でもなんで馬だよ」

あのデュラハンの魂が偶然消滅を免れていたというのは分かったが、それがなんで馬になって復活しているのか。これが分らない。特に解らない。

『好きでこんな姿に身を窶やつしたのではない。否応なく魂が空の器に引き込まれたのだ』

「器……」

馬、もといデュラハンの馬は苦み走った声を発した。

いやさつきは『喋った』と表現したものの、よく見るとこいつは声を出す時に口を動かしていないのだ。声は声帯からではなく、もつと

内側から聞こえているように感じる。

あるいはそもそも、「音」ですらないのかもしれない。

『この男に斬られたことで、俺の魂の存在力は浮遊霊以下に弱体化した。あのまま行けばもう四半刻と待たず消え去っていただろう。だが運悪く……いいや、まさに悪運とでも言おうか。戦場から逃がしていたアンデッド・ホースがまだ近辺を彷徨っていた』

「あ」

そういえば、正門前でゴタついた時こいつは乗っていた馬を遠ざけていたっけ。

『……あれは、俺の断頭刑が執行された後、諸共屠殺された我が愛馬の亡骸、それを置いて作ったただのゾンビだ。その魂はとうの昔に天に召されている。であればこそ、肉の器としてはこれ以上なく適していたらしいな』

隠しようもない皮肉げな響きを吐き捨てる。デュラハンのはつきりと、自分自身を嘲っていた。

『吸収同化された結果、魂は馬の形に定着した。自分の意思では、もはやこの肉の牢獄から出ることも叶わん』

「そうだったのか……あれ、でも」

確かあの馬、布の下には首が無かった筈だ。けれど目の前のデュラハン馬は、黒鉄色の兜の下にすっかり馬面が収まっている。

『生えた』

「は？」

『だから、生えたのだ』

「あ、そう……」

別に問い詰めてまで知りたいことでもないので、納得しておく。

しかし、改めて解ったことも一つある。

筆不精とも思えないジंकクロウが、二週間ろくすっぽ連絡一つ寄越さなかったのはおそらくこのゾンビ馬の所為だ。

「魔王軍幹部が実は生きてたなんて知れたら……大騒ぎになるよな」

「はっ、平穩無事とは行かんだらう」

面白くもなさそうにジंकクロウは鼻を鳴らす。

国王軍と魔王軍の戦争情勢が現在どうなっているのかはよく分からないが、和気藹々としていないことだけは確かだ。魔王軍関係者との繋がり、あまつさえ内通なんて疑われた日には、逮捕拘束の末に投獄……いや、中世の価値観からいけば即刻死刑も当然あり得る。

あ、やべえ。

「うん！ 俺やつぱり今晚は桜鍋がいいなジंकクロウ！」

『し、死肉だから食べると病気になるぞ！』

「アクア先生ー！ 浄化おなしやーす！」

「あ、処す？ 処しちゃう？」

『いやあああああああ!!』

両手をわきわきとさせてアクアが眼光を輝かせる。歪んだ笑みを浮かべるその貌は弱者を甚振る悦びに満ちている。焚きつけといえなんだが、どっちか悪もんか分かったもんじゃないやねえ。

「別段止めやしねえが、其奴を仕留めたところで大した意味はない」

「？ どゆこと？」

「ん」

ジंकクロウがふいと目の前に立つウィズに指を差す。

きよとんとそれを見返していたウィズだったが、瞬間ぽんと手を打って頷いた。

「ああ、そうです。ベルディアさんを消滅させても、私が居たら嫌疑は晴れませんか」

「うむ」

「なんで」

「いえ、実は私もとあるご縁で、魔王軍の幹部とかやらせていただいてまして」

なるほど、確かにそれではデュラハンが居なくなっても泣き所は無くならないか。

うんうん。

「ええ……」

自称屍ノーフキンゲの王のリッチーなお姉さんは、魔王軍八大幹部の一人だそ

うです。

「ご近所さんの自己紹介みたいなテンションで国家反逆罪レベルの告白をされていた。これだから天然は！ 天然は！」

「カズマカズマ、処す？ 処していい？」

「ひいご勘弁くださいい!!」

「……こんな調子で厄介事が増えやがる。深刻ぶってお前さん達に顛末を話すのも何やら阿呆臭くてな」

言いつつ、ジंकクロウは傍の木柵に掛けてあつたジャケットを弄まさぐる。内ポケットから取り出したのは、小さな円筒。

蓋を開き、中から顔を出したのは煙管だった。銀色で、細く括れていて、一番太い部分に小さく桜の飾り彫刻が施されている。

「そうこうする間に、早十四、五日……光陰なんとやらだな。くくつ、体はともかく頭こいはきつちり耄碌してやがる」

人差し指で米神を叩き、ジंकクロウが笑う。

案の定というか、想像した通りのその物言いはむしろこっちが可笑しかった。

マツチを擦って、火皿に盛った刻み煙草に直接火を近付ける。

「便利だろう？ 燐寸というんだぜ」

「知ってるよ」

「そうかい。物知りだな、カズ」

小馬鹿にしてるようにも、本気で感心してるようにも聞こえる言い草だった。

一服、ジंकクロウは実に旨そうに煙を吐き出す。いつの間にか風下に立ってるし。

「ああー！ タバコなんて吸ってますー！」

「ん？」

「お」

見ればめぐみんとゆんゆんが、庵の裏から戻ってきていた。薪束を片付けるだけにしては随分時間が掛かったな。

「うう……おっぱい痛い……」

「……」

胸を押さえてゆんゆんが涙している。

裏でも叩いてたんかい。

「おう、御苦労だったな」

「そんなことよりそれです！ タバコなんて百害あって一利なしですよ！」

「ま、ま、そう言うてくれるな、めぐ坊。この土地の刻みは初めて呑んだが、こいつがまたなんとも乙で……ぷふう。うむ、旨し旨し」
「だあめえでえすー！」

煙管を奪おうとめぐみんは手を伸ばしてぴよんぴよん跳ねるが、ジンクロウはそれをひらりひらりと躲しに躲す。そして時折器用に煙管に口を付けては吸い、煙を吐く。

煙を撒いて躍る的なコンセプトの大道芸に見えてきた。

「さて、そろそろか」

「ふんっ。よっ。ほっ。はっ！ え」

言うやジンクロウが止まる。そして煙草を囲う盆踊りを主に踊っていためぐみんもまた急停止する。

少女の視線は一点、空を見上げたまま釘付けになっていた。

空の、何を。

「へ？」

「あ」

「んえ？」

「ちよっ」

なーんか今日は皆して奇声を発してばっかりだなー、なんて頭の片隅で思う。

視線はめぐみん同様、空に釘付けだったが。

空から舞い降りてくる。大きな影。

最初は、翼を広げた大鷲かと思った。しかしその鷲には翼以外にも脚が四本あるのだ。鉤爪を具えた鳥類特有の鱗に覆われた四つ指の前脚。そして腹から下の胴体は太く強靱な獅子の趾行性の後脚。

鷲と獅子の合成獣^{キメラ}、グリフォン。

それが落葉や土を蹴散らしながらばっさばっさと羽ばたいて地面

に着地した。

「こ、この子」

「な、なんですか!?! て、敵襲ですか猪口才な!! 消し飛ばしますか!?!」

「どうどう落ち着け」

そう言つてグリフォンを、ではなくテンパるめぐみんをジंकロウが宥める。

当のグリフォンの方は俺達など意にも介さず、水桶の水をごくごくと飲み始めた。

ああ、こいつの飲み水かこれ。

「なんでグリフォンがここに……」

「ジंकロウさん! この子、あの山に居た雛鳥の!」

驚きながら嬉しそうに顔を綻ばせてゆんゆんがジंकロウを見る。

「ああ、村からアクセルまでひとツ飛び背中を借りたんだが、何の気紛れか街の近場に居着いちまってな。何ぞ悪さをするでもなし、棲み着こうが翔ち去ろうが此奴の好きにさせてくれようと……」

存分に飲んで満足したのか、桶から頭を上げたグリフォンはジंकロウに近寄る。

めぐみんはすっかりたじろいで二歩後退する。

体長も体高もデュラハン馬の巨体にまつたく劣らない。真実見上げるくらいの大きなグリフォンが首を屈めて俯いた。そうして、その頭や額をぐいぐいジंकロウの胸元に押し付け、擦り付けるのだ。

まるで飼猫の臭付けマーキングみたいに。

「斯様な腹積もりなんぞ知らんとはかり、この有様だ」

「ク、ク」

鳴き声はまるきり催促で。ジंकロウが嘴の付け根や首筋を撫でてやると、グリフォンはうっとり目を細めて喉を鳴らした。

「流石に街中まで付いて来られちゃ敵わねえんだな。こんな辺鄙な場所に住処を見繕う羽目になっちゃった。ええ? おい。わかっているか? しょうがねえ奴め。かつかか」

「キュウ」

小鳥のような声で大鷲が応える。

ジンクローはその口調とは裏腹な、穏やかな笑みを浮かべた。

「えっ、郊外の家探してたのって魔王軍とのあれこれ勘繰られたくないからじゃ」

「それもある。此奴のついでだが」

事も無げに言いやがった。

ついで呼ばわりされたのに、ウイズはくすくすと口元を隠して笑うし、馬は……表情とか分からん。けれどそれでも、ほんの一息嘶くだけだった。

「めぐ坊、ほれ。お前さんも撫でてやんな」

「ふえ!? だ、大丈夫なんですか……?」

「噛み付きやしねえさ」

「そ、それじゃあ……」

頗るおそるおそるめぐみんなが手を伸ばすと、グリフォンはそつと頭を低くした。賢いな。少なくともアクアなどより確実に。金色の鋭い眼差しがひどく理知的に見える。

おっかなびつくりな手付きで羽毛を梳かすめぐみんなに、グリフォンは大人しく身を委ねている。

「おお……生のグリフォンに触るのは初めてです」

「めちやくちや人馴れしてないか、こいつ」

「何も最初からこうだった訳ではない。だがまあ、魔物も獣も大した差はねえな」

「それはこの子が、というかジンクローが変なんです。産まれた時から育てているならまだしも、野生種でここまで人に懐くことなんて普通ありませんよ」

「ほーん。我らは変わり者なんだとよ? くくく」

「ク、ク、ク」

ジンクローがそう言うと、グリフォンも鳴き声で応える。まるで言葉が理解できているようだ。まさかこいつまで人語話し出さないだろうな。

ふと、ゆんゆんが遠慮がちに手を伸ばす。

「わ、私も撫でたいなーなんて……」

「キシヤアアツ!!」

「なんでえ!?!」

あんなにも大人しかったグリフォンが咆哮を上げ、その迫力にゆんゆんは蹴散らされた。

しくしくと落ち込む姿は、なかなか可哀想だった。

「ダメよ。動物にはね、人間の下心なんて見通しなんだから。私のように清く美しく純粋な心で接すればほら、こんな風に簡単に心を許して」

「ギャブツ」

「痛つつつたああああああい!!?!」

アクアが不用意に出した手にグリフォンは躊躇なく噛み付いた。手首から先が嘴の中に消える。千切れてはいないようだ。よかったよかった。

「よくないわよ!?! ちょっと痛いホントに痛い!!?!」

「清くー? 美しー? なんだつけー?」

「痛だだだだ!! 痛い! 痛い!! なあんでよー!! ちょっとくらいモフらせてくれたっていいじゃない!! 背中に乗って飛びたいの!! 楽して移動したいの!!」

「下心しかねえじゃねえか」

「くふ、はははっ、純粋な下心だな」

一頻り^{しき}阿鼻叫喚するアクアを面白がって、さてこれからどうしようか。そんな空気が流れた時だった。

「折角来たんだ。晩飯くらい食っていけ」

「え、マジで? そりやまあ有り難いけど」

「わた、私もい、いいんですか!?! 晩御飯にお呼ばれ!?! う、生まれて初めての!?!」

「別にゆんゆんは帰ってもいいですよ?」

「シユワシユワはあるの!?! あるわよね!?! 無いなら買ってくるわ!

お金ちようだい!!」

「ナチユラルにたかるんじやねえよ駄女神。いや、それはともかく

……」

空を見上げる。珍しく晴れ間を覗かせる澄んだ冬空。その高いところで、太陽は未だに燦々と輝いている。

時刻は多分お昼前。晩飯の算段を立てるには少し早過ぎる。

「無論、下心有きよ」

ジンクロウはそう言うと、バケツや雑巾、箒に塵取り、叩きなどをテキパキと俺達に配り始めた。

「ここ暫くは建屋の修繕に掛かり切りでなあ、肝心の中は碌々手入れ出来ず仕舞いでよ」

「……で?」

「ああ、渡りに船とはこのことよな!」

実にイイ笑顔で草刈り鎌を手にジンクロウは頷く。

「晩飯代だ。ちつと働いていけ」

「「ええ……」」

37話 冬の夜長

柱を磨き、廊下を雑巾で駆け、畳を入れ替え、障子紙を貼り換え、雨戸の立て付けを直し、竈の灰を掻き出し、雑草を刈り、家の周りから裏庭にある馬小屋まで。隅から隅まで掃除し終える頃には、日はとっぷりと暮れていた。

ぶつぶつ文句を垂れながらも、子供らはよく働いてくれた。特にアクア嬢の、平素の振る舞いに似合わぬ職人気質な働きぶりには驚くやら可らしいやら。

その業前を以て、外壁の漆喰は当初より遥かに見違えたと言っていない。

冬の昼日中は足早で忙しない。墨を垂らしたかのような夜空からは、快晴だった青空の名残も窺えぬ。

街灯りから遠いこの庵では、世間あかの濃さもまた一入だ。

しかし、であればこそ。

「冬景の闇深き故に月の妙、つてか」

「そりゃ綺麗だけどさ」

縁側から望む十六夜を着に、猪口を一呑みで乾す。

澄んだ酒精の味わいが僅かな香気を残して胃の腑へと落ちる。

「……ふ、堪えられんな」

「何もこんな寒空に縁側で飲むことないだろ」

「冷えるほど爛こいっが沁みるのさ。そら、一献」

「あ、うん。さんきゅ」

右隣に莫塵を敷いて座るカズマへ徳利を向け、少年の差し出した猪口に注ぐ。透明な液体からほろ甘い湯気が立ち上った。

『ぶつはあああああ！ うんまあ！ 今日も元気だお酒が美味い!!』

さああんた達もじゃんつじゃん飲みなさい！ これは女神アクア様の命令よー!』

『い、いいんですか!? 私なんかがいただいて本当にいいんですか!?』

ゆ、夢みたい……お呼ばれさせてその上飲み会にまで参加できるなんて……ゆ、夢なんですか!? どうせ夢なんでしょう!? それとも早く

帰れのサインを見落としたか私!？」

『アクア様? その、御酌してくださいるのはすごくすごく光栄で有り難いんですけど、さつきからアクア様の指が浸いてしまってお酒がお水に。しかもこのお水なんだか物凄く神々しい光を放ってるように見えて目が痛くて匂いを嗅ぐと鼻と喉もぴりぴりと。多分私、これを飲むと戻って来られない場所に逝ってしまう気が……』

『そおれ一気! 一気! 一気!! 一気!!』

『アクア様? 聞いてますかアクア様!?!』

背後の障子戸の向こうからくぐもった騒ぎ声が絶えず響いている。

灯に映された娘らの影絵が、大きくなり小さくなり其処彼処へ行ったり来たりと忙しない。主にはアクア嬢であるが。

賑やかな暖気。これでは寒さも忘れようて。

「ふいー……ダクネスも呼べばよかったな」

「ダー公か。今はちと難しいかもしれないねえな」

「え? なんで」

「や、実はな。先達って彼方あちらには一つ頼み事を申し入れたのだ」

手酌でもう一囁み呷あおる。酒精では口も濡れまいが。

「ところでカズよ。お前さん、ダー公が貴種の出なのあ知ってるか」

「きしゆ? ああ、貴族かどうか? まあなんとなくは」

「ははっ、やはり承知か」

「冒険者歴キャリアは俺らと大差ない癖に身形は良いし、武器とか防具の類いに結構出費するわりに金に困ってる素振りもない。じゃあただの金持ちの道楽かっていうと、立ち振る舞いがなーんか仰々しいし、嫌味なくナチュラルに偉そうなところとか……確信も確証もないよ。ただの勘」

誇るでもなく少年はそう締め括った。

その、曰く「ただの勘」とやらを働かせられる人間がこの世にどれほど居るだろうか。

「くふふっ」

「なんだよ」

「いんや」

忍び笑いをするこちらを見て、またぞろ揶揄われでもしたのかと少年が訝しむ。

愉快だった。なにやらひどく。

「その貴顕なる姫御前にこの下賤な素浪人風情がいじましくも御願いの儀を上申奉ったのよ」

「またダクネスが嫌がりそうな謙り方を」

「カズも試しにやってみな。珍しい表情かおが拝めるぜ」

「やらいでか（義務感）」

悪趣味な笑みを小僧つ子と二人突き合わせる。

酒の味が一段と増したような心持ちがした。かえすがえす、意地の悪いこと悪いこと。

「んで、頼み事って？」

「ああ……これがない、いじましいってなあ何も謙遜じゃあねえ。卑しい金勘定の御相談よ」

「金？」

火鉢に掛けた鉄瓶がふつつつと煮えた吐息を零している。気が付いたカズマが火箸で炭の位置を変え、火の当たりを弱めた。

空の徳利に酒を注ぎ、沸騰からやや落ち着いた鉄瓶の湯へと浸ける。

「お酒は温ぬるめの爛ぬるがいいと……なんだよジンクロウ、借金でもあるのかよ」

「いやいや金の無心ではない。宵越しの銭は惜しむ性質だな。はっ、アクア嬢ほど豪放な真似はそうそう出来やしねえよ」

「まったくあの駄女神……お気軽に放蕩かたがたされる身にもなれっての」「かかっ！」

「はあああ……」

少年の、その歳に相応しからぬ重く根深い溜息が世闇に溶ける。「そもそも金って、何の金だよ？」

「懸賞金だ。そこの馬っころの」

「え？」

『ん？ 俺？』

庭先で呑気に干し草を食んでいた馬が首を傾げた。

『……ああ、そういうえば、挑んでくる冒険者共の大半はどうもその賞金が目当てだったらしいな』

「魔王軍の幹部って設定だったわけ。そりゃ国から懸賞金ぐらい掛けられるよな—」

『設定ちやうわ！ ふんつ、まったく……それで？ 人間共は俺の首に一体幾らの値を付けたのだ？』

「三億だよ」

「へえー………へ？ え？—」

『ふむ？ 冒険者だけを狙い討っていた所為か？ あまり奮わない額だ』

「さてな。所詮は御上の決め事。戦場いくさばから物言いを仰いだところで埒も無い」

『道理だな。王宮の政治屋共が市井の現実など知るものか。知ろうなどと考えもすまい』

鼻息も荒く、まるで積年の恨み辛みを唾と吐き捨てて、今一度黒馬が嘶いた。

魔王軍のベルディアなる者に対して抱かれる脅威性の多寡が、机上に着く執政者と矢面に立つ戦闘者との乖離するのは致し方もない。その言葉を信ずるならば、犠牲になっているのは主に冒険者達。国に税を、年貢を献ずる義務を負った民草ではなく。

国の営みそのものに害は及ばぬ。ならば必然、人々の肌身で感じた印象よりもその扱いは軽んじられるだろう。

三億エリスは、妥当な額となる訳だ。

「さ、さ、さつ、ささ三億う!!？」

「しっ、喧しい。めぐ坊が起きちまう」

「あ、すんません……」

胡坐に畳んだ左腿に、小さな頭が乗っかっている。微かに朱みを帯びた黒髪、額から目元に落ちた細い束をそつと横にわけける。

「ん、う……」

一度だけむずがるような声を出すと、再び娘子は穏やかな寝息を立

て始めた。

上下する華奢な肩に毛布を掛け直す。

「いや、いやいやいやでも三億だぞ？ ジンク로우解ってるか？ 三億だぞ？ 一十百千万十万百万千万三億だぞ？」

「わかったわかった。少しや落ち着け」

今度はカズマが鼻息荒く嘶いた。

かと思えば一転、弛んだニヤケ面で徳利を押し戴く。

「へ、へへ、まあまあジンク로우さんどうぞお一つ」

「おう、苦しゅうない」

「本日はお日柄もよく晩酌には打ってつけのボクお家が欲しいです
!!」

「胡麻擦るんならせめても少し粘りやがれ。ええい、きつたねえ。涎を拭かぬか戯け」

「じゅるるっ、とすみません」

意地汚いやらノリが良いやら、興奮の熱冷ましにと少年は涎共々ぬる爛を啜る。

「いいなあいいなあ！ 慎ましく暮らせば一生働かなくていいじゃんかー！ クソお！ 俺だつて悠々自適異世界ライフ送りてえよおー
！」

「カアツ、若僧が枯れたこと抜かすんじゃねえや」

「普通ですうー。最近の若者のトレンドは安定！ 平穩！ 日常！」

「あんだそりや。世も末かい」

「俺んところはわりと新世紀序盤だけどこの有り様よ？」

「はっ、そらまた救い様のねえこつて……しかしまあ、幸いにしてその夢は叶いそうにねえぜ」

「？」

若人への苦言という老い耄れた楽しみは一先ず脇に退け、景気の好い話に食い付く少年へ世知辛い事実を贈る。

「その懸賞金三億だがな。つい先日、一銭残らず綺麗さっぱり消えて無くなったのよ」

「はあ!? なんて!?!」

「ん〜？」

仰天瞠目して叫ぶ……ような真似はせず、器用に潜めながら声を上げるカズマ。

そんな少年を薄笑い混じりに見返す。

「心当たりはねえかい？」

「は？ 何のことだよ」

「近頃はやらかしちやいねえかい。例えばそう、何ぞ粉々に吹っ飛ばすような」

「吹っ飛ばすってそんな……あつ」

「かっかつ」

流石の察しの良さに今度こそ笑声を零す。

そうして己の柔らかくもない武骨な腿あしで、それでも安らかに眠りこける娘の頭を撫でた。

「街の正門は流通の要所だ。いつまでも吹きっ曝しつてえ訳にもいかんわな。金子で償えと御沙汰が下ったなら是も非も有るめえ」

「……………」

「ん？」

ふと、打てば響くようだった軽妙な声が途絶える。見れば少年は、手にした空の猪口をじつと見下ろしていた。

表情には曖おくびにも出すが、その眼にはありありと。

ありありと、面白くもねえ彩が。

「馬あ鹿」

「うわつ」

右手でその小利口な頭を掴み、捏ね繰る。髪を掻き混ぜ、右へ左へ前へ後ろへゆらゆら。

「らしくもねえ。おお？ なんだなんだ。何ぞ気負うたか？ ええお

い？」

「ちよつ、やめ、この……！」

「くふ、かっははははは。気にすることあねえよ」

嫌がる少年を無視して、もう一度ぐいと頭を押さえ付けた。

「泡銭が順当に弾けて消えた。そんだけの話だ。いや？ むしろ大儲

けじやねえか？ あの正門、行商連中に言わせると、荷馬車の往来にはちよいと狭苦しいそうだな。さりとて何度上申書を送ろうが領主からは梨の礫ときた。そんな折、体良く建て替えの名目が立ったとくらあ……大きな声じや言えねえが喜ぶ者が大半よ」

「……」

「それにな。ここいらの相場に照らしても、公事に纏わる普請をたかが三億で賄えるなんてなあおめえ、僥倖を通り越してこいつあ珍事だぜ？ ははははははっ」

爆裂魔法が破壊したのは正門と隣接した番兵の詰め所、外壁を正面向かって左右十間（約20メートル）分ほど。門外の商店や民家は無傷な上、無論のこと怪我人の類もまた皆無だった。

「上出来よ。お前さん達や」

誰一人として傷付けず、この街を守り通した。

それ以上の偉業があろうか。

故に、己は不遜にも喜悦する——この誇らしい子供らを。

「……ダクネスの家に相談に行つたつていうのは」

「ああ、流石に公共土建の相場なんてなあ門外漢だったんでな。過か不足か含めて諸々の勘定を詰める為に一席設けてくれぬかとダー公……おつとと、姫御前に話を^なつけて頂いた次第だ。おうそうそう、その時に知れたことだが、俺あてつきりダー公を領主の娘御と決め付けていたのだがこいつがとんだ見当違いでな。実際はもつと」

「呼べよ」

こちらを見ずに、少年はひどくぶつきら棒な声でそう呟いた。

「ふっ、すまんな」

「……」

最後にもう一度くしゃりとその頭を撫で付ける。

「ごめん」

「ああ？ 聞こえねえな」

「……………ありがとう」

「おう」

すっかり冷めてしまった徳利を刹那迷い、結局は少年に勧める。

「ん……ぐっ、やっぱ冷た!？」

「冬の冷ひやもなかなか乙であろう」

「知るか！ 冬はぬくい方がいいし、夏はひやつこい方がいいの！

俺はー」

「はははっ、そうかい」

ぶつくさ文句を垂れながら、それでも徳利一本分を飲み干して、少年は荒く息を吐く。

「はああ、ああー！ ったく、ホントにジंकロウはジंकロウだよ！」

「なんだそりゃ」

意味の分らぬ呻きを上げて、突如カズマはすつくと立ち上がる。

回れ右して障子戸に取り付き、そのまま室内に滑り込むや後ろ手で戸を閉めた。

『おらあ！ カズマさんのお出ましじゃあ！ 飲んでるか野郎共!？』

『男なんてカズマとジंकロウしかいないんですけどお。まあいいわ！ さあカズマにも私のお酒を飲む権利を上げるわ！ 有り難さにむせび泣きながら味わって飲みなさい!』

『ってこれ水じゃねえか駄女神い!!』

『痛ったあああああい!? カズマが私のことぶったあ!？』

騒がしい。

いつものように。

「……」

酒瓶から直接手酌で、と思ったが。猪口に注ぐではちと心許ない。

さりとて、己は今満足に動いてはならぬ身。足の上の仔猫はそつとしておきたい。

「はい、どうぞ」

「うん?」

左背から伸びてきた手には器が載せられていた。掌大のぐい呑を一つ、差し出していたのはウイズであった。

38話 償い

黒く暗い装いとは裏腹な、青みさえ帯びた白い相貌。そこに柔らかな笑みを湛える美しい女。

ほとほと月光の似合う女だった。

「おう、有り難え」

「ふふ」

器を受け取ると、代わりとばかり酒瓶を奪われ、逆に女はその注ぎ口を向けてくる。

有り難く、酌を頂戴した。

そのままカズマに代わって右隣にウイズが行儀良く腰掛ける。

「お前さんもやりな」

「あ、はい。ありがとうございます」

「なんの。わざわざ足労掛けた上に、水だけ飲ませて帰す訳にやいかねえんでな」

「あははは……アクア様の触れた液体は例外なく聖水になってしまうようで。墓地に撒けば、たとえ百を超える迷える魂達すら天に導けるでしょうね」

「そらまた御大層だな」

そうしてもう一つ、ちゃっかり用意していた女の盃にこちらから酌をする。ウイズは軽く盃を掲げ、己もそれに応じた。

注文の「品」を店主手ずから運び届けてくれたのだ。この程度を謝礼と呼ぶには些か心許ない。

「……ふう、おいしい」

「くく、顔に似合わずいける口だな」

「ええっ、そ、そうですか？ うーん冒険者時代はこういう付き合いも多かったのです、やっぱり多少は……」

照れた様子で話をしながらも、ウイズは早々に盃を空にしていた。

下戸に無理強いをするような憂いも消えた。心置きなく、二杯目を勧める。

不意に、ウイズが目を細めた。

「……ふふふ、ぐつすりですね。めぐみんさん」

「部屋に戻って休めと言うのに案の定だ。まったく寝相の良い童だよ」

「ジंकクロウさんに会えて安心したんですよ。ギルドからの道すがら、ずっと貴方のことを心配してらしたんですから」

声音にやや責めるような響きを感じた。

途端に口端を苦笑が滲む。それは一心、自ら我が身へと刺し向けた嘲りの針。

ほんの一言、居所を伝える術は幾らでもあった。十と四日、何時なりと会いに出向くこともできたろう。

それを怠った附けを背負い、気負ったのは、誰であろうこの子らだった。今ようやく安寧な眠りの中にいる、この娘だった。

あどけない寝顔に親指の腹でそっと触れる。子供らしい熱と瑞に富んだ肌は白桃の表皮めいて滑らかだった。

「……えへへ……」

にへら、とだらしなく解ける顔。一体どんな夢を見ているのやら。

「ああ可愛いっ。まるで赤ちゃんみたいですよ」

「赤ん坊扱いは流石にこの娘もヘソを曲げるぜ」

現に己がそれをやって怒られた。

「あはは……そうですね。もう、立派に女の子ですもんね」

ひどく柔らかな笑みが女の顔貌を飾る。じわりと、肌身ではなく胸奥に満ちる日向のような熱。

それは慈愛だった。

そうして心向くままウイズは身を乗り出して、眠れる娘子の髪を梳き、撫でては慈しむ。

乗り出す、というか乗り上がって、であるが。

「おいおい、ウイズ」

「はいっ」

己の左腿あしに頭を置いて眠るめぐみんに触れようと思うなら、右隣に座すウイズは必然己の右半身へ撓しなだ垂れ掛かることとなる。

女は、どうしてか躊躇などしなかった。己の肩にその腕で縋り、己の右腿にその両脚ごと跨り、己の胸板でその豊かな乳房を潰す。極上の柔らが我が身を侵す。

しかし驚くべきことに、この期に及んでウイズはこちらの忠言を理解しなかった。

何か御用がお有りでございましょうか、とばかり。小首を傾げて薄く笑みを浮かべられるほどの間尺さえ使い、続く己の言葉を待っているのだ。

「お前さん、よく察しが悪いと言われんか」

「ええ!? は、はい! 昔から友人知人関わりなく、親しい人には特によく言われます……ど、どうして分かったんですか?」

「おお、どうしてだと思おう?」

「えっ、うくん……」

うんうん唸って、とんちきな素直さで考え込むこと十を数えた頃。とうとう痺れを切らしたのは、己でもウイズでもなく。

『引っ付き過ぎじゃああ!!』

「へ? あっ!? ひゆい、し、しゅみません!」

馬つころの怒声により、遂に、ようやくに、自身がどういう状態であるのかをウイズは覚った。慌てて女は身を離そうと仰け反り、そのままごとんと後ろに尻餅を突く。

「すみませんすみません! 不躰にその、だ、抱き着いてっ、私ったら、はしたないことをっ……!」

「いや、いや、そう謝られつちまうと己の方こそ身の置き所がねえや」
『そうだそうだ! ウイズが気付かないのをいいことに人の目の前でイチャイチャにちやにちやとイヤらしい!』

「あ、ベルディアさん。まだいらしたんですか」

『おっほく辛辣うく?』

一瞬だけ正気に戻ったものの、結局ウイズはまるで熟れた柿の实のように真っ赤な顔をした。

水揚げ前の禿かむつのようにおぼこい様。

「うう……」

「かかつ！ 恥じらいを思い出してくれたようで安心したぜ」

「ご、ごめんなさい。お酒の所為でしょうか。気が抜けてて。ふ、普段はこんなことしないですよ!? ジンクロウさんが初めてで……ああそのつ、へへ変な意味じゃなくてですね!?!」

「わかつたわかつた」

目を白黒させて言い訳を並べる娘。その美貌とは打って変わった愛らしさが、どうしても笑みを誘う。

「いや達ての御所望とあらば膝だろうが肩だろうが一晩でも二晩でも貸すに吝かではない。さあさあ遠慮は要らんど?」

「ふえ!? い、いえそのつ、そんな、困ります私っ、出会って間もない殿方と……でもお……」

なにやらもじもじと指と指を捏ね繰っている。今や顔色は熟れ柿から茹蛸のそれへと悪化の一途。

羞恥する美人は違いなく眼福保養甚だしいえど、少々^{からか}揶揄い過ぎたな。

「や、すまんすまん。ほんの軽口……」

「じ、じゃあ肩をちよつとだけ……」

「あ?」

「え?」

目を見合わせて、暫し互いに無言。しかし、言葉がなくなるとも理解するものもある。

わなわなと唇を震わせるウイズは、遂に夕焼けの赤光を放つ。

「おう、いいとも。さ、こつちおいで」

「んんんんんーツツ……!!!」

「痛で、痛で。はははっ! いやすまん。相すまんかった。悪い冗句だったなあ。うむ、猛省する。な? だから許してくれい。ははっ、おお痛ててて」

「もお! おもおお!」

ぱしぱしと女はこちらの右肩を叩いた。なんとも控えめな力加減であったが、心の動揺はその比ではないと見取る。

悪い癖なのは承知だが、こうも愛い^{かお}表情を拝めるとあつてはなかな

か、やめられる自信は一向湧かぬ。

「……………」

「ん……胸を悪くさせたか？ いや無理もない。こればかりは己の性質が悪かったな。この通り、御詫び致す」

頭を垂れる己に、しかしウイズは呆れるでも悪態吐くでもなく、ただ木枯らし響く沈黙が流れた。

おもむろに、視線が己を射貫く。

「ジंकロウさん。手を、見せていただけますか」

「……ああ、構わんよ。こんなもんでよけりや存分に眺めて」

「いいえ、左手を見せてください」

続く言葉は切って捨てられた。この優しい女にあるまじき強い言動。

有無を言わせぬ固い意思が、その瞳に宿るのを見た。

些末な小細工や言い訳を幾らか腹の内て弄び、もとより無意味であると知る。

観念無念。左手を差し出した。

「っ！ そんな、なんで……………」

「……………」

今、己の両手には白帯が巻かれている。前腕から手首、掌までをがんじ絡めにして、五指だけが露になっている。

今日も今日とて小忙しく働いた。滴った汗を拭う為と言い張れぬことはなかった。斧を振るって薪を割りこさえていたのだ。掌の皮膚の保護の為と言い張れぬことはなかった。

しかし、どうか。今更嘘八百を並べてどうなるでもなし。失笑すら買えまい。呆れ、愛想尽かしの溜息でも頂戴すれば重畳。

ウイズは、何れの表情も見せてはくれなかった。

己の左手をその両手で包んだまま、目を見開いて惑乱している。

「オドが通っていない……………血流も完全に滞ってる。体温が異常に低い……………まさか、左腕全体が」

「肘から先だ。二の腕と肩に障りはない」

悪戯を白状する童の心地とはこんなものだったかな。と、愚昧なこ

とを考える。同時に、奇妙な懐かしさも。

「そのおどつてえのが無えことはそんなに拙いことなのかい？」

「あ、当たり前でしょう！」

やにわに女は激昂する。

当たり前のことであるらしい。なるほど、ならばこの場合、当たり前のことを阿呆のように聞き返した己が悪い。

急ぎ左手の白帯を解いたウイズは、その下の有様を見て息を呑んだ。

赤々と、掌を横断する裂傷。刃傷だ。

「不思議だろう。血も出ねえのさ。痛みもねえ。だのに腐って落ちる様子もねえときた」

「もう……感覚も、ないんですね……」

肯くと、女はまるでこの世の終わりのような顔をした。

なんとも勞しい。左手でそつと、女の手を握る。

「触れても感じられんというのは初めはなかなか厄介だったが、慣れちまえばどうつてことはねえ。きつちり動くし、こんな風にお前さんの手も握れる」

「……」

「だからそんな顔するな。折角の美人が台無しになつちまう」

お道化て見せても、ウイズの瞳は暗がりから戻つては来なかつた。

そこに滲むのはどうしてか、後悔。

「……どうして、こんな状態なのに、私、身体に触るまで気付けないなんて……！」

『ウイズが気に病むことはない。お前の目を今の今まで欺いたこの男の手管が異常なのだ』

暗闇から赤い目玉がこちらを見ている。黒い馬となつたベルデアが、うつそりと歩み寄ってくる。

『人の意識の裏表面を衝く悪辣な手腕において、この男の右に出る者は居まい』

「褒められてんのか、俺あ」

『無論だ。その技量によつて俺は貴様に敗北したのだからな』

皮肉とも自嘲とも取れる妙な言い回しだった。

不意に、馬がじつとこちらの掌を睨む。表情に乏しい馬面に、しかしありありと表れるものが、ある。

——恐怖

『……ほとほと悍ましい切れ味よ。まさしく特級の呪物に相応しい。死した屍すら斬り殺し、飽き足らず仕手をも貪らずにはおかんとは』
「あの子が……でも、あの子はジंकロウさんのことを使い手として認めた筈です！」

『そうとも。認め、委ねたのだろう。だからこそこの男は、あの刃に宿る“敵を斬り殺す”という名の全能を行使できた。左腕の麻痺はその代償に過ぎない』

「代償なんて！」

異形剣。そう名付けた、剣術にあらぬ殺人術。

皮膚表層を斬り裂き、滴り落ちた血潮を刃が吸い上げ空間をも両断する拡張斬撃を放つ……言葉にすれば如何にも陳腐だった。鼻息で笑い飛ばせる程度には。

ただ、より正確にこの術の実態を理解しようとするならば。

血は、媒介物に過ぎない。刃が啜るのはその紅い液体に含有されているあるモノ。

曰く、魂という。

生きとし生ける者共全てが肉体に宿す不可視の霊体。あるいは最も根源的なちから。

かの妖刀は、それを喰らう。喰らうことによってその能力を揮い、喰らう為にこそ斬り、殺す。存在と機構が一体となった刃金。

まさしく兇器。

先刻承知の、今更検めるまでもない真実だった。

「刃の報いは己に返る、か……くっ、くふふ、至言じゃあねえか」
「そ、そうです。アクア様に、本物の女神であるアクア様の御力なら、きつと治せる筈です！」

文字通り天啓を得たとばかりに、女の暗澹としていた瞳に光が差す。

しかし。

『無理だろうな』

「な、無理なんかじゃありません！ アクア様は」

『あのプリーストの力は知っている。まあ、女神だとかいう話は初耳だが……それでもこの男の腕はどうにもなるまい。実体である肉体の欠損ならば治癒や蘇生の余地もあるだろうが、失ったのは非実体、魂の左腕だ。地上に零落した神如きに、そんな生命創造紛いの奇跡が起こせるのか？』

「……」

『そもそも、あの剣の呪力がそんな小細工を許すとも思えんが……』

いやに実感の籠った声音でそう締め括り、嫌気を払うように馬が鼻息を吹く。

ウイズは、両肩を落として俯いた。その細い肩にまさか自責など負ってはいまいか。

「ウイズよ。己とこの馬ところは斬り合いをしたのだ。命を奪り合った。容赦も、躊躇も、一分の情けも無く」

「……」

「それがこの始末だ。情けねえつたらねえ話だ。一方は不覚傷、もう一方は畜獣に成り果てた。死ぬに死に切れず、恥を忍んで生き永らえちまった」

もはや過ぎたことだった。笑顔で水に流せるほどの仏心はこの身になくとも。

死に場所を惜しむような恥知らずな真似は、生き穢い自覚はあつても流石に気が咎める。

故に、今この時は事実だけ見よう。

何せ目の前に、童のように泣く女がいる。我が身に湧いた悲喜交々など腹の底にでも蹴り戻せばいい。

「仕損じた故、己は生きている。敵は身体を失い馬になった。そうしたことでも出た払いは左腕の、半分つてどこか？ かつはははは！ 安上がりじゃねえか。なあ？」

『いや、斬られた上に馬にされた俺の方が明らかに過払いだと思うん

だが』

「手前はカズの首を刎ねたであろうが」

『あの小僧はその後生き返ったろう!』

「生き返るんなら殺しても良い、そんな法があるのたまと宣うか。呵ッ、ならば貴様も精々畜生道に甘んじるがいい」

『ぐぬぬ……!』

愉快な世間話に花が咲く。

ウイズの痛ましげな視線に気付かぬふりをして。

「己もいずれば畜生か。それとも修羅か……まあ、地獄に行つてから考えるさ」

事程左様に、笑い話よ。

刃金を振るう殺戮者共の下らぬ末路を嗤うのだ。

ウイズは荷物を置き、そのまま帰っていった。

夜も深いこの時刻、それでも夜の似合う女は委細構わず闇の中に溶けて消えゆく。ほんの一筋、光るものを零して。

「……悪いことしちまったな。ほんに優しい女だ」

三尺ほどの横長の木箱に納められていたのは、黒漆の鞘。

力を増した妖刀を封じ、鎮める為には、新たに強力な術を鞘に仕込む必要があつた。おそらく、これから先、延々と繰り返していかねばならない。

なるほど確かに、己はあの店の御得意だ。

「さて、いい加減中に入らんか。なあめぐ坊」
「……………」

一瞬、迷うような気配が腿から伝わったが、娘は観念してすつくと身を起こした。

「いつの間にか静かになつたな。他の連中も寝入つたか。そらそら、

冷えるぞ。毛布を忘れんな」

「……ジंकクロウ」

「ん、なんだい」

「私は、怖くなんてありませんから」

俯いたまま娘は言った。垂れ下がった髪に隠され、表情も、瞳も、見えない。

「ジंकクロウが過去にどんなことをしても、ジंकクロウが……どんな風になっても、怖くなんてありません。嫌いになんて、なりません。ずっと、ずっと……だから」

娘は立ち上がる。屹度、真っ直ぐ床に落ちた視線、その目から涙を落として。

「黙って居なくならないでっ、ください……!」

踵を返して、顔を背けるようにめぐみんは障子戸を開き室内に消える。

その敷居を跨ぐ寸前、ぽつりと一言。それはそれは痛烈な。

「拾った責任、取ってください」

39話 久方の管巻きと相成りて

「ジンクロウさんちに住まわせてくださいおなしやす!!」

「駄あ目」

日を追うごとに冷え込みも増す冬のアクセル。道々に薄く雪の轍を描いて訪れたギルド酒場にて、出会い頭に平身低頭カズマがそのようなことを言い出した。

そしてこちらの応えは単純明快な上述二字に集約する。

「なして!」

「あのような荒ら屋に三人も四人も鮎^{すし}詰めでは狭^すっ苦しいだろう」

「そうですよ。カズマやアクアは諦めてください」

「めぐ坊もな」

「なして!?!」

カズマとめぐみんが長机の向かいから身を乗り出し、迫る。

さて置いて、梅干しを一つ摘めば強い酸味で口内にじわりと唾液が満ちた。それを熱めの白湯を啜^すって流し込むと、なんとも爽やかな心地になる。朝にはやはりこれが良い。

「頼むよジンクロウもくん! 掃除洗濯するからー! 馬と鳥の餌やりもやるからー!」

「いいじゃないですかー! ほら私ちっちゃいですよ!? あれくらいの家なら私とジンクロウの二人でも収まりはいいでしょう! 今なら可愛い黒猫も付いて来ますよ! お得ですよ!?!」

「おいおいめぐ坊はともかくカズなら解らんか。男の独り住まいにやいろいろあるもんだらう?」

ニヤニヤと笑みを向けると、まず反応を示したのは何故かカズマではなくめぐみんだった。

かっつと火を入れたように赤くなつた顔を彼方へ背ける。さてはて一体なにを勘繰^くつたやら。

「解るけど、馬小屋生活でわりと痛いほど身に沁みて解るけど……切実な話この寒さは死ぬ。マジで」

「冬場冒険者連中はどう凌いでんだい」

「……手つ取り早いのは宿を取ることですね。勿論出費は痛いですが、寒い時期だけと割り切って仕事を増やしたり貯えを当てたり。住み込みの働き口を紹介してくれるところもあるにはありますが、そういうところは例外なく薄給重労働です。それで身体を壊して冒険者業を引退したなんて言う話もあります」

「うわあ……」

「そうそう上手い話はねえか」

「あとは家を買うくらいしか」

「そんな金はぬあい!! そんな金があったら苦労しぬあい!!」

カズマの魂からの叫びは一々尤もだった。

地獄の沙汰も金次第。越冬が命懸けなのはどんな浮世も変わりあるまい。

しかし、今突き付けられているこの世知辛い事実こそは問題の解決策に外ならぬとききた。

「兎にも角にも金子を稼がにや」

「目指せマイホームってか!? 気が遠くなるわ!」

「千里の道も一歩からと言いますよ」

「おうさ、めぐ坊の言う通り。残りたったの九百九十と九じゃねえか」
「………遠い!! 頑張つて前向きに思考持つてこうとしたけど駄目だった! やっぱ千里って遠い!!」

無論、千里における一歩とは目指す頂へと続く道に真実踏み出す心意気こそ肝要……という訓話であり、その道道に待ち受ける艱難辛苦は各人自助努力によって乗り越える以外に術はない。少年の弱音は、無理からぬことと言えた。

「まあまあそう悄しよげ気げるな。どこぞの首無しがいなくなった御蔭で仕事には困らねえぜ」

「寒季に山から下りてくるモンスターも多いですからね……ふふっ、ふふふふふふう! 我が爆裂魔法の餌食となる有象無象には事欠きませんよ! ねえジンクロウ!」

「へいへい」

「今の時期なら一撃ウサギが雪に紛れて出て来ている筈です。突撃してくるあのウサギに一度でいいので正面から爆裂魔法を撃ち込んでみたいのです。あ、白狼なんかは群で行動しますからね。わりと賢い上に群にはリーダーがいて統率力も凄いそうですがまあジंकロウなら何とかしてくれますよね。白狼を一網打尽。くう、イイです！
実にイイ！ うんうん、ジंकロウがいればあんな爆裂から、こーんな爆裂まで思いのまま……むふふう、んふふふはははははははははは！！」

何やら良からぬ皮算用で興奮から有頂天に高笑いをする娘っ子。

ふと、カズマが卓面を指で叩く。

机に突っ伏し顔突き合わせ、頭上で歌舞伎役者顔負けの大見得を切るめぐみんを他所にひそひそと。

「実際のところ、冬場のモンスターは強烈なのしかないらしい」

「なるほど、依頼が余りに余ってんなあその所為か」

「冬本場になる前になんとか手付金だけでも用意して……冒険者ってローン組めるかな」

「ろーんってな知らねえが、金を借りるにも質種が要らあな」

「うーん、アクアの羽衣とアクアの杖とアクアの……幾らにもならないか」

「せめて一言断ってやりねえ」

「そもそもあいつの大ポカが無きや冬備え出来てたんだよ！ 短期で貸家に入れるくらいには……」

「くくつ、まあな。しかし、やつちまったもんは仕様もねえさ。文字通り、水に流してやんのが男の甲斐性つてもんだぜ？」

「男気で飯は食えないの！ 冬は越せないの！」

「うむ！ 全く然り」

少年の全身全霊の慟哭に、反駁する余地は絶無であった。

ああでもないこうでもない駄弁を交わす己とカズマ、とどろけえくすぶろおじよんなどと机に乗り上がって元気に燥ぐめぐみん。

論議は凝り固まり、停滞を見せていた。

「これ、行儀が悪いぞめぐ坊」

「あ、はい。ごめんなさい」

そう言うと、めぐみんは元居た対面座席から食卓を乗り越えて己の隣にすくとんと座る。机を周り込むのが面倒だったのだろうか。

「ごおら、横着するんじゃないやあねえっ！」

「んひゃっ!?!」

悪戯娘への仕置きと。その脇の下に両手を突っ込み、蜘蛛の脚も斯くやと指先で撥り捏ね繰る。

なんとも細っこい体軀。両手で掴んでしまえそうなほどだ。

そしてそれはつまるところ逃さず捕まえ易いということである。長椅子の上を暴れ回る童を思う存分撥り倒せる。

「にゃひはははははっ!! ごめっ、ごめんなさい! ごめんなさいい

! やめひひひっ、あははっは、ははっっ!」

「もうやらんと約束するか? お?」

「す、する! します! だからうひゃひゃひゃ! にゃふ! 降参

です! あひひっ! こ、降参します! だからゆるっ、うひゃひっ、

ゆるしてくださいい!」

「おい二人共、遊んでないでなんか考えてくれよ」

「そうは、言っても、下手な考え休むに、似たり、と」

「いっひひひひひっ! ひい! ひい! こ、降参って言いましたよ

!?!」

散々笑い転がすこと暫し。めぐみんは肩で息をしながら長椅子の上にごったりと崩れ落ちた。

その時、傍らに立ち止まる者があった。

「すまない、遅れた。身仕度に手間取ってな」

「よう、ダー公」

「ダクネスはよーっす」

「――」

「……無闇矢鱈にだらけてるな。特にめぐみんは一体どうしたんだ」

そう言ってダクネスは小首を傾げる。

珍しきかな装いは様変わりしており、常の甲冑ではなく枯草色の外套を纏い、鳶色の革長靴を履いている。

「世の無情を嘆いておったのよ」

「うん?？」

「ダクネスこそいつもの鎧はどうしたんだよ」

「ん、以前の戦闘でボロボロになってしまったのでな。修理に出そうかとも考えたが、買い換えることにした。オーダーと採寸は済んでいるから、今は出来上がりを待っている」

「……」

カズマはひどく胡乱な目でダクネスを見上げた。

「……な? こんな調子でいられたらそりゃ俺じゃなくなつて勘付くつて」

「ははは、確かにな」

「? 何のことだ」

「何のことだじゃねえ舐めてんの? それで身分偽ってるつもりか?」

せめてもうちよつと世を忍べよ。もしくは庶民の金銭感覚学んで出直して来いこの貴族令嬢がぁ!!」

「なつ?！」

滔々と立て板に水の如く駄目出しか罵倒かも分らぬ雑言を吐き、最後に皮肉を飾る丁寧さよ。

驚きと羞恥にかつと頬から耳まで紅潮させ、ダクネスは息を呑んだ。

「ジ、ジंकクウ! よりによって、カ、カズマにバラしたのか!？」

「いや洩らしてくれようと思ったのだから? 案の定とうの昔から存知の様子で」

「解らいでか。貧乏人の妬み嫉みセンサーを舐めるなよ。お前が平民じゃないことなんて会って三日で気付いたわ!」

「そ、そんな……う、嘘だ! だって、その、私に対するお前達の態度には貴ぞつ、んん、っ! そ、そう、身分の差を感じなかつたぞ!」

謙りや阿りや、遠慮も何も無く……:対等に、扱ってくれたろう」最後の言葉を娘は殊更大切に、ひどく大切に、口にしたように思えた。

少年と視線だけ交わす。次いでカズマは肩を竦めた。

「いや、なんならちよつと見下してたけど？」

「はううんっ！」

「そういうとこだよこの糞DMが!!」

「ンンツ!? ストレートな罵倒は胸に響くぞカズマあ……!」

身悶えして悦楽する娘子に、貴顕たるのその片鱗とて見当たらぬ。これに敬服せよというのは些かならず無理が勝つ。

「という訳で、俺の中でのダクネス株は塩漬け一定なんで安心しろ」

「うー、評価が低い自覚はあるが、見損なわれたまま挽回のチャンスも与えられないなんて……役立たず、穀潰し、軽蔑の眼差し……ふふ、ふひひひひひ」

「……」

「はあ……」

思うに、この娘ほど人生を強かに謳歌する者も居るまい。

げんなりと溜息を吐くカズマ共々、しみじみとそのように感じ入った。

「ん……あれ? ダクネス。いつの間に来ていたんですか。そしてどうしてニヤケ面で涎を垂らして……ああやっぱり言わなくていいです」

「じゆるるる……んんっ、すまない。流石に品がなかったな」

「今更だけどな」

カズマの言には肯くより外ないが、そうは言っても節度は知らねば。

暴れた拍子に落ちていた尖がり帽子をめぐみんの頭に載せる。

「奔放も結構だが、今少し幼子にも心配りをしてくれんか」

「す、すみません」

「……誰が幼子ですか」

「今ちよつと反応遅れたろ。遂に幼女扱いに違和感なくなってきたんだろ」

「聞き捨てませんよ!? 誰が幼女かパンツ泥棒!!」

打てば響いて勃発する小気味の良い兄妹喧嘩。それを眺めていた心持ちは多分にあったが。

不意にぼつりと、ダクネスは辺り見回す。

「そういえば、アクアはどうしたんだ？」

「ん？」

「あれ、そういやさつきから妙に静かだな……」

「集合してすぐテーブルに突っ伏して寝てましたよね？ ……いませんね」

一人で十人分は騒々しいかの女神の御姿が見えぬ。眠っていればこそこの静けさと了解していたが、話し込んでいる間に何処ぞへ行ったやら。

と、然したる間も置かずその青色髪は見付かった。

魔物討伐から家事手伝いまで、官民から舞い込んだ種々数多の依頼を記した紙面が貼り付けられている掲示板。その真ん前に陣取って、きよろきよろと物色する背中がある。

悪い予感がした。

そうして宙を泳いだ視線がカズマのそれとかち合う。どうやら同じことを考えている。全く以て喜ばしからぬことだが。

「めぐ坊、すまねえがあの婆娑羅司祭の首根っこ引っ掴んで来てくれぬか」

「はーい」

この賢い娘は野郎共の不安を汲んでか、素直にアクア嬢の元へ行つてくれた。

あれを野放しにするには肝の太さがもう二回りほど足りぬ。よしんば、どんな厄介事を運び込んでくれるやら。

めぐみんが無事にアクアをとっ捕まえてくれることを祈りながら、冷めた白湯、もとい水を飲み干す。

「……実際さ」

出し抜けにカズマが口を開く。

頬杖を突いて、見るともなしに窓の外を見ながら。

「シンクロウが俺らをあの家に近付けたくないのって、例の魔王軍幹部との関係どうこうってやつだろ」

「ん〜？」

「露骨に解んないふりすんじやねえよ」

素知らぬふり、という程の意図もない。それはただの、続きを促す相槌である。

「……魔王軍幹部を倒した———そう見せ掛けて懸賞金をまんまとせしめた。そう勘繰る奴も出てくるかもしれない。もしくは……ベタなところでスパイとか。スパイわかんない？ ええと、そうそう間諜」

「事態の真偽がどうあれ、それを事実としてでっち上げ利用しようと企む輩には、残念ながら心当たりが多い」

カズマの言に応じたのは、己ではなく傍らに佇むダクネスだった。幸い、ダクネスには事のあらましを既に言い含めてある。

娘は腕を組み、長机の縁に腰を預ける。

世間には煌びやかに映る貴族社会、そこに拭い難く蔓延る暗がり、を、娘は知っているのだろう。

「どのような嫌疑であれ、累が及ばんに越したことはあるまい」

「一緒に住む住まない程度で免れることでもないだろ」

「それがそうとも言えん。冒険者の徒党なんてもものあ所詮利得の繋がりによ。その内の一人が罪科を責められたとて、他の者らは知らぬ存ぜぬと通せばよい。ふむ、なんとなれば糾弾に加わることでより疑いの目からも離れられよう」

「おい」

常ならぬ眼光が己を睨み付ける。

そんな少年に笑みを返した。

「事実はどうあれ、な？ そう振舞えばいい。そしてそう、金尽くの付き合いたいと思わせるなら棲み処は他所がよかろうさ」

「……」

心底納得行かぬとばかり、少年は顔を顰めた。

ダクネスは何も言わず、ただ静かに吐息を零す。

「なに、ただの些細な備えよ。もし取り越し苦勞で終わったんなら……ふっ、存分に笑い種にしてくれな」

暫くして、掲示板から娘二人が戻ってきた。引き連れて帰ってくるだけでえらく時間を食ったな、などと暢気に構えていたところ。アクア嬢はしっかりとその手に、騒動の火種を持ってきていた。

「ねえねえこれ見て！ 雪精の討伐だって！」

40話 太刀打ち仕るは冬の猛将

アクセルから遠く広がる平原地帯。街ではささめくほどだった雪が、山麓を望むここでは牡丹の落花の如し。

厚みを増した轍を刻み、疎らな枯れ林を訪れた。

雪精は綿毛に目が付いたような、生き物とも無機物とも分からぬ物体だった。無数に宙を漂う掌大の毛玉が一匹討伐ごとに10万エリス。

この破格の報酬額にカズマなどボロ儲け大儲けと大いに沸き立った。事実身も懐も寒々しいこの頃である。降って湧いた一攫千金に飛び付くのも無理はない。

しかしそれでも、今少し思慮を欠いた。もう僅かばかり警戒すべきだった。

のこのこ雪原行に赴いたのが運の尽き。いや、あるいは、アクア嬢を撃肘し切れなんだ我らの手落ちか。

何れにせよ、後悔という精神の手遊びは文字通り後の楽しみに取って置くとしよう。

見渡せば死屍累々、もとい我が徒党の面々の奇態が其処彼処にある。

「……」

思いの外すばしっこい雪精に罅を開けんと、早々に爆裂魔法を放つためぐみん。雪原にべちゃりと俯せに伸びたまま動こうとしない。死んだフリのつもりらしい。

今回、雪の精の溜まり場へ乗り込むとあって、特段の冷えに備え各々防寒着を誂えたが。めぐみんの装いは、以前市場で買い求めた白狼の毛皮であった。雪の降り積もる只中ではこれ以上ない迷彩と言えようか。

「ああっ、新調した剣が!? また買い換え……いやいやそれではあまりに贅沢だ! ううん磨り上げて小剣として使うのが庶民として自然、なのだろうか……?」

出鼻に剣を半ばから両断されたダクネスは、拾い上げた切先を手にもうんうん唸る。今朝のやり取りを気にしてか、下々の者らの物持ちと儉約について考えめぐねているようだ。勤勉は結構だが、まず先に時と場を考慮すべきではなからうか。

「ははあ、將軍様におかれましては本日もご機嫌麗しう存じまする。存じますから許してくださいお願いします斬らないで殺さないで」

それはそれは見事な土下座と露骨な御弁口おべっかを並べるアクア嬢。恥も外聞も狗に食わせたとばかりの実に堂に入った命乞いであった。

その行いを卑しいとは言うまい。事実、その即断即決の土下座によつてかの女は白刃の脅威より逃れたのだから。

「なあカズよ。お前さんも見習わねばならんぜ」

「絶対対そんな暇なかつたぞ今!! 先つちよ掠つた!! 先つちよ掠つたよこれ!」

雪の上に尻餅を突いてカズマが叫ぶ。

そうして自身の首を震える指先で擦さすった。喉仏の僅か下あたり、そこには横一文字に薄つすらと裂傷が走っていた。血も滲まぬほどに微かな刃傷が。

「正しく首の皮一枚つてえとこか。命拾いしたな」

「どいつもこいつも人の首をぽんぽん飛ばそうとすんじやねえよ!! 仕舞いにや泣くぞこらあ!!」

泣きながら口角泡を飛ばし悪態吐く元気な姿に、可笑しいやら安堵するやら。

襟首を掴んで引き倒すのがもう半拍遅ければ、少年の絶叫の通りにその首と胴が泣き別れしていたことだろう。

「ガキだろうと問答無用かい? 折角の武者振りが泣くぜ」

皮肉気に歪めた笑みを向けようが応えはない。その心情に揺らぎは見えず、意思の疎通が成っているかすら判然としない。

武者、であった。

この土地を訪れてよりよくよく目にする板金鎧とは風合いを異にする意匠。鉄の板札と鞣し革を威おどすことで堅牢性と軽量化を両立し

た全身甲冑——“具足”と呼ばれるそれ。両肩から下がる大袖、腰回りを覆う草摺等、装甲面に細かな紐の編み込みが施されたこれらが特徴的であることは言わずもがな、しかしてその偉姿において最も目を引くのはやはり、兜。鬼の二本角を思わせる前立、そして鼻頭から顎までを覆う面頬が、相対した者共を否応なく威圧する。

耳から後ろ首までを防護するしころ、その下から伸びた純白の鬘たてがみが寒風に泳ぐ。

太刀を握り、不動にて我らを睥睨する鎧武者一領。

「で？ どうする」

「撤収」

「土下座よ」

「一撃くらいは欲しい」

「雪冷たいです」

纏まりの欠片もない物言いが四者四様に返ってくる。

いつも通りだった。

「存外に余裕じゃねえか、手前てめえら」

「この首見て本気で言ってるジंकクロウちゃん？」

「冬將軍は雪の精霊の王よ。きちんと敬意を払えばきつと寛大に見逃してくれるわ。だから皆早く土下座して！ 謝って！」

「あのデュラハンの攻撃にも数回は耐えた剣と同じ品を、苦も無く斬り折るほどの強さ……この身で受けずにおけようか!？」

「ジंकクロウ、おんぶしてください」

いつも通りに過ぎて、緊張感も糞もへったくれもない。さりとして、身動きの取れぬ娘子と鼻息荒く飛び出そうとする変態とそろそろ五体投地まで致しかねん神の石柱。

継戦の意義を認めず。

カズマの言に乗り、退散するが至当であろう。

しんしんと降る雪にそろそろ埋もれ始めたためぐみんを掘り起こそうと踏み出した、その時。

「……」

「いつ」

その場で静止する。傍らで少年の息を呑む声を聞いた。

視線を呉れる。眼前、四か五歩の間合から……对手的足運びが尋常のものであればの話だが……切先を我が身へと差し向けられる。

抜き放った太刀に込められた意は、勘案の余地なく明白。

斬る

純白の武者は凍て付いたその敵意を露にした。

「な、なんでだよ!? 武器持っていないだろ!? ってソレかあ!?!」

「ジ、ジジジシンクロウ!! そ、それ! その腰のやつ! 早く捨てちやいなさいよ!!」

「ああ? ああ、こいつか」

左腰の差し物を指差してカズマとアクアが喚く。なるほど、刃物を捨てねば降伏とは認めぬと。

「念の入ったこと」

肩を竦めて、腰の革帯から鞘ごと抜き取り。

「そら、これで満足かい」

躊躇なく彼方へ放り捨てる。

一瞬、掌の皮膚に刺すような『思念』を感じたが、まあ気の所為であらう。

くるくると回転しながら、一刀は弧を描いてやや離れた雪原へと突き立つ。晴れて、丸腰と相成った、が。

しかし、それでもなお。

「おいおい」

白銀の太刀は真つ直ぐに己を差したまま不動。その敵意もまた、一縷と削げる様子はなかった。

カズマ、アクアが青い顔をしている。ダクネスは高揚して紅潮している。めぐみんのそれはもとより見えん。

「アクア嬢よう、話が違うじゃあねえか」

「だから土下座しなさいよシンクロウも!」

「頭が高えってか」

なればと面を下げようにも、彼方は此方が身動き一つすれば斬り捨

てる、といった風情だが。

「ジンクロウ何かしたんでしょ!? 謝って! 何でもいいから早く謝るの!!」

「同胞を殺しておいて知らぬ存ぜぬとは言うまいがな」

確かに、先刻雪精を六匹斬った。その仇を討たんが為に斬り合いを所望とあらば己にも応える用意はある。

あるいは、アクア嬢がその懐に一匹、雪精を隠し持っていることを看破されたか。……アクア嬢の傍に立っていたカズマの首が飛び掛けたのは、それが理由のような気もするが。

どうも違う。我が身を射抜く戦意、闘気の発端は。

その根は、仇討ちの為の憤怒にも、況してちよろまかしに対する制裁にもない。

刹那、武者が動いた。

「散れい!」

「ダクネスはめぐみんをつ!!」

「ひいひいひい?!?!?」

目配せも要らず、カズマの反応は実に敏速だった。ダクネスに指示を飛ばしながら、未だに蹲ったままのアクアを引き摺ってその場を退避する。

『』

純白の鎧は既に眼前にあった。たつぷり五歩分の空隙を真実、一刹那で詰められた。やはり具足を着込んだ徒歩かちの動きではない。どんな魔法を使ったやら興味は尽きぬが、さて置こう。

今まさに、上段構えの太刀が真っ直ぐに倒れ来る。

そして己は無手。唐竹に脳天から両断されるまで残り四半拍の半といったところ。

白刃取りでもやってみるか? 笑止、大道芸の通ずる相手ではない。体格と臂力にあかせ、潰し斬られるが関の山であろう。

退がり、あるいは左右に跳び躲すか? 愚行、その歩幅を明らかに無視して高速移動する敵から逃がれ切れるものか。

ならば致し方ない。

方途は一つ。敵刃を打ち、逸らし、落とす。

その為には一振り、兇器が要る。今この手の内に無い兇器が。ここより遙か遠間の雪上に打ち捨てた、刃金が。

何を暢気につつ立ってやがる。これだけが唯一の能であろうが。そら、仕事だ。

「——来い」

右手を翳し、一声。それが当然の行為であると傲岸不遜に構え、呼び付ける。

果たして、刃金は応えた。地に埋まる鞘から肌を覗かせ、一拳に飛び出す。隔たれた空間すら斬り裂くように飛翔し、既に我が手に。

糸に巻かれた柄の感触。鉄と、沁み付き拭えぬ血と命の重み。

上段の打太刀に、こちらも上段にて応ずる。

「シイッツッ！」

『!?!』

正対称の相打ち。自然、刀身が衝突する。

しかし打つのはその刃先ではない。鎬しのぎ、敵の刀の腹を削ぎ落す。

斬線は狂い、本来袈裟懸けの軌道を走っていた刃は、この身を行き過ぎて雪原を抉った。

「御返し申す……！」

刀身を翻す。

左下段から斬り上げ。

相手の右脇下を刎ね飛ばす意気で放った斬撃は、なれど空を薙いだ。

白武者が後退した。それも、脚運びを用いず身体が不動のままに、あたかも地面を滑走した。

「ほう、面妖な」

切先を中段に置いて静止。

敵は右脇構えに剣形を変じ、間合を空けて停止。

仕切り直しといったところか。

「ジंकクロウ！」

「どうあっても己は御許し下さらぬらしい。カズらは退がっておれ」

「今刀がジंकクロウのどこまで独りでに飛んでったように見えたんすけどー！」

「おう気の所為だ。気にすんな」

「嘘吐けえ!!」

少年の抗議の声を苦笑で流し、気組新たに敵手と相對する。

敵の得物は太刀。それも、己が手にした刀より長く、厚く、身幅もある。俗に野太刀と呼ばわる長物であった。いや、あるいは、そう見えるだけなのやもしれぬ。白き武者の体格は真実見上げるほどもある。肉体に見合った刀剣を “再現” した結果、ああまで長大化してしまったのか。

思い出されるのはやはり先の、対ベルディア戦。

自身のそれを遙かに上回る巨大さの体格と武器。加えて肉体能力の明白な優劣。無駄に生き永らえ、その結果として積み重なっただけのこの技量によって辛うじて勝ちを拾った。

そうとも。必勝の確信など望むべくもない。あの時も、この今も、眼前に生と死が二股に道を分けて己を待ち受けている。

つまりは。

「相手に取って不足無し」

「ダメ、ダメです!!」

俄かに血を奮う我が身を、刺すような声で制止される。背中に縋るめぐみんの視線を感じた。

「だって、ジंकクロウの……!」

「なに心配要らん」

肩越しに左手を振って見せる。閉じ開き、戯れに狐の口を象形する。

娘子は押し黙った。安堵の気配からは程遠いひどく固い沈黙だった。それがなんとも劳しい。

すまぬ。心中で無責任な詫び言を置き、敵を見据えた。

「我流、シノギ・ジंकクロウ。返礼無用。太刀打ち仕る」

『』

言葉なく声もなく、然れども武者より陽炎の如く気迫が立ち上る。

笑みが零れた。

喜ばしいことに、彼我の意志だけは間違いなく過不足なく疎通していた。

踏み込む。

「ツッ！」

突き、逆胴、股下から斬り上げる逆風、運剣の連動連撃。

しかして、敵は甲冑にあるまじき敏捷性で初撃二撃を躲し、三撃目を打ち合わせて逸らした。

「もう一手」

『!』

打ち上げられた刀身、切先を返し再び袈裟へと走らせる。

その斬り下ろしを、またしても横合いから太刀によって弾かれた。

予測通りに。

『!?!』

弾かれる勢いそのままに、ぐるりと轉身し再度斬り込んだ。

相手の力を利用したことで斬撃の勢力は十二分。

刃先は——空を切った。

遠ざかる純白。その滑走による後退で、こちらの奇襲から逃れたのだ。

「くく、厄介よな。その歩法は」

『』

「其方の手番ってかい？ 参れ！」

巨躯の武者が、まさしく空を覆わんばかりに襲い来る。

袈裟、逆袈裟、袈裟、打ち下ろしの連撃は単調だが、その単純明快な剛力が何よりの脅威となる。

削ぎに削ぎ、落とす。間違っても受けてはならない。受ければ、力比べに持ち込まれる。結果は火を見るより明らかであろう。

四合目、刀身を肩に担ぐように今再びの斬り下ろし———という、欺瞞。

担ぎ上げたかに見せた剣は、そのまま脇構えに引き付けられていた。横薙ぎに胴？ 否。

敵手が動く。己の左側面へ進突する。

(抜き胴か……!?)

真半身、そして縦に構えた刀身で走り寄り寄る太刀を躲しながら防ぐ。白の甲冑は滑走して己の横合いを擦り抜けた。側面を斬り付ける都合上、刀身を寝かせる為に自身正面の防護が薄まる胴の太刀。それを運剣と共に敵の脇を駆け抜けることで、攻撃と回避行動を両立させ得るのが抜き胴だった。

雪上を滑走するこの敵手にして実に有効な手妻。

背後で轉身の気配。敵の追撃が来る。

振り返るだけの暇はない。

『!』

「……」

切先は、既に左肩から背後へ、背後へ回った敵手へと差し向けている。

その鋭鋒を敵は見逃さなかった。見やれば追撃の手を止め、依然間合を維持している。

迂闊にも躍り懸かってきたなら、そのまま喉笛射抜いてくれようものを。

なかなかどうして抜け目のない。

「呵々ッ」

不謹慎の誹りは免れまいが、それでもやはり笑みは堪え切れず。

なんと、なんと快い。心地よい太刀筋か。

剛力の優位性を誇りはすれ驕らぬ、そして技巧すら併せ持った剣。ベルディアの振るう荒々しくも合理を窮めた殺戮剣ともまた違う。

無論、己の振るう異形なる剣とも全く異なる。

不純が無いのだ。それはひどく、無垢だった。

憎悪や憤怒、そうした利己精神より根付く害意。それは一種の力を生むが、同時に技を、刃を曇らせる不純物であった。心魂持つ人、あるいは魔物が兇器を振るう時、そうした意志を排することは至上の難行だ。不可能と断じてもいい。

だのに、かの者の剣ときたら。

山頂より湧き出た川の清水めいて純粹。怨嗟などという穢れとは縁遠い、ただ鋭く、ただただ靱い。

うっかり斬られてしまいたいほどに――

「馬鹿な」

戯言を腹の底で嗤う。

精霊は自然そのものに宿る意志の塊のようなもの。アクア嬢はそう言っていたか。なるほど獣や魔物とは根本的に在り方を異にする故にこそ、こんなにも潔らかなのだろう。

手付かずの自然物に、理屈を超えて人間が感動を覚えてしまうように。

自然、現象に近しいナニか。なればその行動原理はただ一つ。自己の存続、同胞の守護。

そして彼奴は今日この日この時、その目的を達する上での最大の障害に行き逢った。同胞の安寧を脅かす兇きモノ。シノギ・ジंकロウという危険分子と。

故以て、武者の戦意は己を見逃さぬ。この地に安息を齎す為に。

……最も危険な脅威の対象として認識されるのが、今まさに手にしている凶刃ではなくまさか己自身であるとは、心外とも榮譽ともつかんが。

「……惜しいな」

相手に人がましく、煩わしい感情などというものはありはしない。この激烈な闘争すら、あれにとつては自己およびそれに連なる精霊種達の存続行為でしかないのだ。

しかし、それでもやはり。

惜しまずにはおられぬ。この、ひどく純一な太刀打ちを。

故に、

「次の一太刀にて、幕を引こう」

』

「なにせ、うちの坊が頗る心配しておるんでな！」

純白の武者に動きは見られない。しかし、はつきりと、無音の中に顕れている。

一撃必殺

その意を、互いに酌み交わす。

名残を惜しんでいながら、その終着の瞬間を待ち詫びた。その一剎那を待ち望んだ。

我方は上段、彼方もまた上段に剣を執る。

「……」

そして、事ここに至り、ふと物思う。今、十かそこらの術策が脳裏を過り、また練り上げ……そうしてそれらを亡失した。塵紙に丸めて何処かへ捨て去った。

これもまた不純物。

かの武者は、こんなにも愉しい一時を味わわせてくれた。本人にその心算が微塵とて無くとも、そこに感謝を抱くは己の勝手。

そして、これもまた勝手だ。

策を捨て、ただ愚劣に、愚直に斬り込む。眼前の純な剣豪に報いんが為に。

競うのは戦術ではなく、ただ一剣のそれ。精妙なる運剣であり、鋭敏なる剣速であり、不退転の覚悟。

「呵々、くっふふふー」

そういう愚かなことが、したくなった。

「……」

「』」

瞬きを忘れ、見据える。見据えられる。

一足一刀の間合にて、静止。その時を待つ。来るその瞬機を。

「……」

「』」

風が凧ぐ。暗雲に雪もない。音は全て、地表の白に食われた。ただ、静かで、枯れた林の連なりはむしろうら淋しく空虚。けれど胸奥は満ち足りていた。この時間には爽やかな歓びだけがあった。

機は

—
今

「ズアアツツ!!」

『■■■■ツツ!!』

山肌を震わせ木霊する氣勢。二種二色の戦気。劈く刃金の音色。飛び散った鉄片が雪を無数に抉る。

「……」

』

そうして、曇天にほんの一筋陽が差し込み、くるりくるりと宙を躍る白刃を照らした。

太刀の刃先、一尺ほどの鉄の棒きれが墜落し、程なく雪原に突き刺さる。

それを待っていたかのように、直後。音もなく、左の手首が雪に没した……純白の籠手諸共に。

剣速は互角だった。

運剣の確度で我方が優った。

ただそれだけの、単純な決着。

『……………ミゴト、ダ』

風鳴りめいた音声おんしやうが面頬の下から響く。

純白の武者は半欠けの太刀を地面に突き立て、その場に両膝を付き正座した。

そうして兜を俯かせ、その下の首をこちらへと晒す。

その様、その姿は、まさに。

「首級をとれと言うのか」

『……………』

無言のままに肯定を示す。純白の武者はまたしても不動を貫く。その覚悟の程を表すように。

なるほどそれは戦場の、武人の習いに他なるまい。死力を尽くした死合いに敗北した者が潔く、慈悲すら請わず、肅々と宿敵の手柄に身を躰す。それこそは武の礼法。

だが。

「要らんー」

『……………』

「何故に、か？ くくつ、この身は下賤な冒険者の剣士だぜ。武人の美德など知らねえのさ」

そう言つて、呵々大笑する。

そんなこちらを呆気に取られた風で見上げる武者。その恐ろしげな鬼の面が、今やなんとも間抜けというか愛嬌たつぷりというか。

「魂震う善き立ち合いであつた。感謝する」

』

残心を解き、一礼する。

血振るいし、刃を納めようとして、納めるべき鞘が彼方に放り捨ててあつたことを思い出す。

「いけね。ウイズに怒られちまう」

「ジンクロウ！」

「おう」

離れた場所で動静を見守っていたカズマ達が、決着を見て取つて駆け寄ってくる。

そうして先陣切つて来たのはカズマ、ではなく。

「プウークスクスツツ!! 冬将軍がなんぼのもんかしら!!」

「うわすんごいドヤ顔。鬼の首獲つたみたあい。しかも獲つたの自分じゃない癖に」

「はっ、肝心の首級はとっちゃいねえがな」

「よくも女神であるこの私に土下座なんてさせてくれたわね!」

「全力で自分から行つてたよね？ 地面に向かってフルダイヴかましてたよね?」

「ありや近年稀に見る土下座の中の土下座であつた」

がなり立てるアクア嬢に逐一小言を付け足すカズマの律義さを面白がりつつ。

遅れてダクネスと、それに背負われためぐみんが到着した。

気を利かせて拾つておいてくれたのだろう。ダクネスの手には刀の鞘が握られていた。

「ジンクロウ！ 大丈夫でしたか!」

「応ぎ。この通り、ぴんぴんしておる」

開口一番の娘子の心配満面に、柔く笑みを返す。それに驚き、哀しみ、遂には呆れて、めぐみんは弱々しく笑みを浮かべた。

運良く勝ちと命を拾った。その結果は良かったのか、それとも悪かったのか。

どちらとも判らぬ。判らんが、生きて、こうして童の頭を撫でている。それだけは確かに、幸いと言えるだろう。

「……まったく、どうしようもない人ですね。ジंकクロウは」

「そりや手厳しいな」

「ふふ、甘んじて受け取るしかないだろう。戦いの最中の、めぐみんの心配し様と言ったら」

「わー！ わー！ ダクネスッ!?」

かっつと赤面してめぐみんはダクネスの肩をゆさゆさと揺さぶる。なんともはや、微笑ましいこと。

刀身を納め、その光景に笑んでいた。

「二億エリスよ!!」

「あん?」

不意に、一際大きくアクアが叫ぶ。この世で至上無上の重大事と言わんばかりに。

「だあかあらこいつ!! 冬將軍の賞金よ！ 特別討伐褒賞として二億つて大金がこの首に掛かってるの!」

「マジか!? あのデュラハン馬、もとい魔王軍の幹部クラスで賞金額三億だったよな……?」

「冬將軍は雪精にさえ手を出さなければ人にも魔物にも基本的に干渉してきません。それでも、その強さだけで多くの冒険者達に恐れられ、賞金額を跳ね上げている珍しい例です」

「王国精鋭の騎士団ですら戦闘を避ける、ある意味特異点のような存在なのだが……」

じ、と。四対の目玉が己を見る。まるで珍獣にでも出くわしたような色の目だ。

そそくさと視線を明後日へ、空模様など眺めていた時。

ふと、思い付く。

「アクア嬢」

「なによジंकロウ。言つとくけど二億は山分けにするんだから。それでも一人頭四千万よ！ 四千万!! 四千万分のシユワシユワ……んん〜!! 飲み切れるかしら!? でゆふ、でゆふふふふふ!!」

「かかかつ、景気良く皮算用してるとこ悪いがな。ちと頼みがある」「ええくなによー」

不承不承のアクアに、拝み手一つ。

「この者の手首を繋げてやっちゃくれんか」

「ああそんなこと? 別にいいわよ………って、はい?」

切断したてはやほやの手首。生身とは勝手も異なろう。なにより……この呪物による傷だ。異能を用いてはおらぬとはいえ、果たして……。

だがしかし、正真にして正銘なるこの癒しの女神様ならば屹度為し遂げてくれよう。

「ジंकロウ」

凝固するアクアを後目に、物問いたげなカズマを見やる。

「もとよりこの土地を侵略し、そしてこの者の同胞を手に掛けたのは我らよ。その仇を討たんとする気概を、この上庄し潰し首まで奪ったとあっては正しく人道に悖^{もと}ろう。さしもの刃金狂いとて心が痛む……」

「……」

胸を押さえ、首を左右し目を閉じる。良心の呵責を全身にて表現したつもりだが。

少年には今一つ不評なようで、呆れ深いジト目が己を見ていた。

「というのは建前でな」

「うん、だろうね」

「彼奴の如き劍豪、斬るには惜しい」

「………はあああ」

たつぷりと、肺腑の根の底の底まで息を吐き出して、カズマは下を向いた。

そしてすつくと居直り。

「勿体ねえなあ二億!!」

「くっ、ふふははははっ。ありがとうよ、御頭殿」

「言ってる」

「ちよっカズマ!? 本気!? ホントのホントに!? 二億エリスよ二億エリス!? ねえ!? ジンクロウも!? めぐみん!? ダクネス!? ねえったらあー!!」

ぎゃあぎゃああと叫び騒ぎ駄々を捏ね地団太を踏み地面をのた打ち回るアクアを、どうにかこうにか宥め賺して治癒を施す。

相応の時間を要したものの、無事その手首は繋がった。それを不可思議とばかり、しげしげと眺める武者に背を向ける。

「ではな」

『……………』

背中に触れる視線に撥られながら、我らは帰路を歩き出した。

41話 独り身の気儘な侘びの住まいよ……ん？

日暮れ近くなるにつれて崩れ始めた雲行きは、帰路を進む内にすっかり黒く暗く染まっていった。街の門扉を潜る頃には重々しい雪が空と大地の境を満たし、無数に落ちてはその嵩を増していく。

「あー疲れたあ……い！」

「おう、ご苦労さん」

ギルド酒場に着いて早々、手近な長机にカズマとアクアは突っ伏した。

続いてダクネスが悲しげに布で包んだ剣先を卓に置く。

最後に、ダクネスに代わって背負っていた小さな荷物を長椅子へそつと降ろした。

「誰が小荷物ですか」

「めぐ坊、お前さん読心術を使うのか？」

「しつかり口に出てましたよ!？」

徒歩^{かち}での移動とあって長らく負^かぶられていためぐみんだが、流石は童っ子。まだまだ元気である。

「うう……私の、私の二億う……ううううう」

「しつこいぞアクア。あとよしんば冬將軍を討伐したとしても、その二億はお前のじゃない」

「いいじゃないの! 私達の勝利じゃないの!？」

「じゃないの」

「まあ確かに、少し勿体ない気もするが。実際に戦い、そして勝利したジंकクロウの意見を尊重すべきだろう」

「ララティーナ御嬢様は黙って!!」

「いや待て何故その名を知っている!? ジंकクロウか!? いやカズマか!？」

「そうです。わたくしカズマです」

「ななな何故わかった!? 私は一度だってお前達の前でその名を口にしたことなど……!？」

「アクセルに住んでる大貴族で領主じゃない方の家の娘なんて情報出

揃ってれば簡単に分かることだろう？　もうっ、ララティーナ御嬢様つたら慌てんぼさん」

「気安く呼ぶなあ!!」

ダクネスの扱いを心得てきたらしいカズマもまた元気に、そして矢鱈滅多に澆刺としている。人の悪い顔というものが妙に似合うのだ、この小僧は。

「さて、ならば今日のところはこれにてお開きと、それでいいか」

「うーい。お疲れさん」

「ああ、それとカズよ。実入りも無くはねえんだ。今晚くらいは宿を取りな」

「ううううん……考えとく」

「カズマのケチんぼ！　暖かいベッドで寝させなさいよ!?　私を誰だと思ってるの女神様よ!?　女が……二億ううううううううう」

「うるっせえ。ララティーナちゃん、こいつ何とかしてくれよ」

「だから呼ぶなあぶっ殺すぞ!?!」

ダレるカズマと呻くアクア、長机を粉碎せんばかりに叩くダクネス。

賑かな面々に片手を上げて歩き出し。

「くくっ、儲け少なく草臥れ至極か。明日は空けようや、カズ」

「そうすつか……ジंकクロウもお疲れ」

「おう、お前さんらもよく休みな」

「おやすみです、皆の衆」

同じく片手を上げてめぐみんも続く。

「こらこら」

「途中まで一緒に行くだけです」

「ほー、そうかい」

いつの間にやら足腰もしつかりと立って歩いている娘子。その尤もらしい言い分に頷く。

「ならついでだ。お前さんの宿まで送ろう」

「え？　いえその必要は……普通にちよつとそこまで付いて行くだけで……」

「なに遠慮すんな。女人の夜道をえすこおとするのも男の務めなのであろう?」

「そ、それはまあそうかもしれませんが」

もごもごと口内で言い訳を転がすめぐみんを、素知らぬ風で伴い帰路を往く。

大方道を別れた後に隠れて尾いてくるつもりだったのだろう。とはいえ、棲処やしきは知れているのだから黙って押し掛けることも出来ように。それをしないのは、この娘の律義りつぎさ故か、はたまたその賢いお頭で何某かを察したのやもしれん。

「いい子だから、自分の部屋でゆつくり休みな」

「むう……」

幼子同然にむくれるめぐみに笑む。その頭を帽子の上から撫でて、逢魔ヶ刻に沈む街を歩いた。

番兵に挨拶をし、裏門から郊外へ出る。

めぐみんを宿に送り届ける頃には、日は没し、街中は宵の活気を持ち始めていた。しかし一步外壁を潜ってしまえば喧噪は遠退き、純粋な夜の闇が己を出迎える。

川沿いから逸れて雑木林へ、己が疇への道を踏む。

「……」

虫の声すら碌々聞こえぬこの時分。外界の静けさが深まるほど、大きさを増すのは内の声。思考。そして感覚。

特に、この。

「……呵ッ」

左手を見る。掌を開き、閉じ、握り込んでまた開く。

当然、返るものはない。触觉はほぼ死んだも同然。触れようが傷付けようが、あるいは切り落としたところで微塵の痛みすら覚えぬだろう。

日常生活を送るに当たってこれほど不便なものもない。肘の先で精巧な絡繰義手を操るような難行であった。操法に慣れた今でさえ、油断すれば物を取り落とすこともある。

だのに、あの時。

雪精の王。冬將軍などと渾名される劍豪との太刀打ちの折。

劍術において、柄の握りが技の精粹を左右することは語るに及ぶまい。固く過ぎれば斬撃は鋭敏さを失い、逆に柔く過ぎれば刃先へ断裁力が十分に至らぬ。

無痛不感の手腕で劍を振るうなど通常論外の所業。加えて敵の劍腕は、達人を称して不足なし。あれは敗死もまた覚悟の上での立ち合いだった。

その結果がどうだ。

一度劍を握ったなら、この腕は支障を来すどころか感覚欠損に陥る以前のまま自由自在に動いた。なるほど確かに、我が肉体には殺人刀の術理が骨の髄から沁み付き刻まれている。脳髓への刺激など要さず肉体は稼働できるだろう。

だが、しかし、あの瞬間。

あの最後の一合。

己は賢しらにも祈念を抱いたのだ。『左小手に一打、浅傷あさでを』と。勝負の最中であって我ながら浅慮を働かせたものだと思う。敵の技巧の見事なるに惹かれ欲を張った。もしそんな傲り高ぶりごとと一刀の下に斬り伏せられていたなら、地獄に持参する土産話の笑い種としてこれ以上のものもなからう。

されど事は、どちらにも転ばなかった。

敵の小手に浅傷を打つどころか、刃金は確とその手首を切り落とし

た。

この腕は明らかに、己の意志を越えた。

特化、否、最適化とも呼ぼうか。

劍を、刃金を振るうという行為にのみ性能を絞られた肉の絡繰。この腕は、どうやらそんなモノに成り果てたらしい。

何故、か。

疑問の余地は絶無。その解、その元凶は己の左腰に差さっている。無痛不感の左手で柄頭を握る。

「俺の血を、命を貪り喰らい込めるだけに飽き足らず、その果てに己が手足とする心算か」

刃金一振りでは、真の斬撃は為し得ない。それを振るう仕手が、人型の五体が要る。

より多くを、より強くを、斬り、殺し、啜る為の傀儡。刃金を振るうだけの殺戮器械。

それを作ろうとしている。

「呵々ハハハハハ！ 大した妖刀だ。大した悍おぞましきだよ、手前は」
左手を鞘へ、そうして親指で鯉口を切る。

刀を抜き放つ。

夜闇を濡らすは紅の霧。陽炎か瘴気の如くそれは立ち昇る。

血潮よりなお黒い紅色の刀身に笑みが映り込んだ。獰猛な、刃金に狂った男がそこにある。

それを、その幻影ごと——

「カアアツツツ!!」

斬り払う。

裂帛の気を吹き、暗闇すら切断せんと。

そして一拍の後に、眼前七歩の遠間に屹立していた木が袈裟懸けに擦り落ちた。

「舐めるな。兇器風情が」

刀身を鞘へ、切羽を鳴らして叩き込む。

紅色の妖気も消え失せ、幻は影も形もない。

まだ使える。まだ、使われはしない。

もし、これを使い続けたその果てに、身も魂こころすらも喰らい尽くされるが定めと言うならば。その前に——我が身の始末は我が手でつける。

「それまで精々使われている」

侘びの住まいは程なく見えた。

林の拓けた小さな空間に、古びた一軒の庵が佇む。

しかし。

「……」

野郎の独り住まいである筈の庵には……どうしてか灯が点つていた。

そして土間に設えた高窓から立ち上っているのは、どう見ても飯炊きの煙。

「来客というには些か傍若無人だな……」

気配を殺し、また気配を探りながら忍び寄り、そつと玄関戸を開く。

土間には竈があり、やはりそこには鍋が火に掛けられていた。くつくと煮えて木蓋が揺れる。

当然、竈の前にはその作り手がいた。

今しがた斬り裂いた夜闇に負けず劣らぬ黒さ暗さの装いに真反対の白い前掛けをした、女。

「ウイズか」

「あ、ジンクロウさん。おかえりなさい」

ウイズは杓子片手に、ふわりと柔らかな笑みを湛えた。

42話 独り住まいがなんだって？

囲炉裏の灰を均し、赤々と燃える炭の上に新たな炭を幾つか置き足す。

しかし、もともと灯っていた炭火によって既に部屋の中は暖かい。娘が気を利かせてくれたお蔭だ。

ふと、土間から鼻歌が聞こえてくる。鈴を転がすような声が耳を撫でる。

そして同時に鼻を擽るのは、肉と野菜の溶けた甘み。仄かに牛の乳のようなまろやかさも混じった。

「あつ、ジンクロウさん。その、もしかしてシチューって苦手でしたか……？」

「んん？ うむ、食ったことあねえな……だがこの匂いを嗅いでると、どうも涎が出ていけねえや」

「まあ、ふふふっ！ なら、楽しみにしててくださいね」

むしろ自身こそ楽しみに笑みを深め、ウイズは鍋を掻き混ぜる。すると、調理に掛かるとあつて後頭に結び上げたその茶髪が、馬の尾のように左右に揺れた。

時折味を見ては都度に香味や薬味を加え、ようやく味が調ったかと思えば、今度は俎板で野菜を切り始める。何やらもう一品こさえるつもりのようなのだ。

てきぱきとそつ無くウイズは調理場を動き回る。それを見て、何か手伝いを、と上げかけた腰を再び莫塵に落ち着けた。

あの様子ではこの図体は邪魔にしかなるまい。

懐から煙草入れを取り出す。刻みを指先でこより、大事に火皿へと盛る。

「しかし、今宵はどうした。こんな辺鄙なところへわざわざ」

「え、ああ……」近所の方から良いバターを頂いて。でも一人で食べてしまうのも勿体ないと思ったので、ジンクロウさんにも、って」

「そいつあ有り難えがな。それだけか？」

「家に……食材が……無くて……バターだけ舐めようかとも思ったんですが、その、なんとというか………みじめで」

「そうか」

一服、吸って吐いた。紫煙はくゆり、解け砕けて失せる。それが何やらひどく、物悲しかった。そして心なしかいつもより、苦みが強い気がした。

しゅんと肩を落とした後ろ姿を少し憐れむ。

「その、使った食材の代金はきちんとお支払いしますから！

………いつか、必ず……きつと」

「要らねえ要らねえ。好きに使いな」

語尾に近付くほど縮んでいく細い背中は見ただに忍びない。

なにより、手料理を馳走された上に金まで払われたのでは貰いが多過ぎる。

「いやいや美人と夕餉の相伴に与れるんならその程度、安いもんだ」

「……もお、そういうこと、誰にでも言ってるんですか？」

「かかかつ、其奴がお前さんのような女おんなならばな」

「も、もういいです！ 大人しく待っててください！」

「へいへい」

こちらに振り返っていた顔が、ぷいと再び俎板に向かう。背けられた表情は窺い知れぬが、女の白過ぎる肌の中で耳だけが赤々と染まっ
ていく。

擲から揄かいの蟲が腹の底で喜ぶのが分かる。我ながら悪い趣味だ。

底意地から捻ひねられてる。飽きるほど歳を食っても治らんのだから救いようもない。

そういう男だ。己は。

故に。

「なあウイズ、お前さんは何も気にすることあねえんだぜ」

「……」

俎板を打っていた刃の音が、止まる。

沈黙の暗幕が降りる。鍋の吹く音ばかりが矢鱈に耳につく。

しかし無音の中にも感情の揺らぎだけは看えた。それは女の、夢げ

な優しきだった。

「この腕も、あの怪態な剣も、既に己が負わねばならぬ責めの内よ」
かの女がこんな寂れた庵を訪れる理由は容易に察しが付く。

自身が売り捌いた物が客に禍を運んだ、と。少なくともそう思い込んでいる。そんな存念を抱えて、この心優しい女が知らぬ存ぜぬ平気の平左を気取れる筈もない。

償い。贖い。罪滅ぼし。さて、どの言い回しが嵌るやら。

綺麗に掃き清められた居間。光沢すら放つほど磨き抜かれた板間と柱。確かめてはいないが洗濯も終わっているらしい。そうして目の前で飯炊きまでされればぐうの音も出ない。

甲斐甲斐しく働く女の、労を惜しまぬ献身に涙が出そうだ。

だが。

「お前さんが気負い、気を患うのは、言っちゃなんだが御門違いってえもんだ」

それが事実だ。

己には、この女の献身を授かる筋合いがない。

「……それでも」

背を向けたままに女は頭を振る。

「ジंकクロウさんには、一廉の剣士としてそれを振るう覚悟があることは解ります。私も、魔法という武器で多くの敵を、自分が敵と決め付けた誰かを屠ってきましたから……」

「その心得があるならば……」

「でも！ 私は商人なんです！」

俄かに、女は声を荒げた。そしてその、微かに震える肩を見る。

「冒険者であり、魔法使いでもあるけれど、同じかそれ以上に私は、商人なんです。ええ、お売りした物が良くない結果を招いたなんてことも一度や二度じゃない……五度、くらい……十度はあつたかな……さ、三十、四十？ 五、六……百はない、筈です……と、とにかくつ、今までにも、たくさんのお客様にご迷惑をお掛けしたことがあります」

「おう」

「返品と返金はしよっちゅうですし、商品の効果というか被害で酷い有様になって怒鳴り込んで来る方も数え切れなくらいいました」
「そうかい……」

やにわに、どんな面で話を聞くべきか分からなくなってきた。

もう一服ほど吸い込むと、刻みの味も尽きた。灰皿に雁首を打ち付け燃え滓を捨てる。

「……ジंकクロウさんが初めてなんです」

「うん？」

「あんなに純粹に、うちの商品に喜んでくれたのは」

「ほう、そらまた奇人変人も捨てたもんじゃあねえな」

などと茶化してみたものの、期待したような反応は得られなかった。

振り返るやウイズは笑った。あまりにも寂寥の彩深い、そんな笑みを浮かべて。

「嬉しかったです。とっても、とっても。なのに……」

「……」

「……私は、私に出来る精一杯でジंकクロウさんにご恩返ししたいんです」

「恩と来たか。大仰なこった」

「はい」

軽口に気を悪くするでもなく、女はなおも真っ直ぐに頷く。

「貴方は私の、大事なお得意様ですから」

その顔容に浮かぶ笑みはやはり、ヨルガオの花弁めいて美麗。嗅ぐ筈もない花の香気を錯覚するほど、それは心を惹き付けた。

しかし、それほどまでに美しい笑顔が、どうしてかひどく痛ましい。女の苦悩が、この老いた胸には痛いのだ。

不意に、玄関戸が叩かれた。

「？ こんな時間にどなたでしようか？」

「……」

ウイズの猜疑は尤もであろう。このような時刻、そしてこのような郊外の小屋に、一体誰が何用か。

針ほどの細さで警戒心を携えつつ立ち上がる。外は静かだった。

「あの馬つころはどうしてる？」

「馬？ ああベルディアさん。さあ……？ 私が邪魔した時にはいらつしやらなかったです」

興味薄げに言ってウイズは小首を傾げる。ベルディアの粗雑な扱いについては当人らで勝手に話し合いでも設ければいいが、警邏の目が一つ居ない事実を念頭に置く。

とはいえ、もう一つの間——グリフォンの雛が騒ぎ出さないところを見るにそう危うい存在ではなからう。獣の感覚の鋭さは人間など及ぶべくもない。

土間に立ち、戸口へ向かう。

「どちらさんだい」

声を掛けながら、戸を開けた。

目の前には、相も変らぬ夜の帳が下りている。人の姿は影もなかった。

「……お」

「ジンクロウさん？」

ふと何の気なしに落とした視線が、それを捉えた。

それは敷居のほんの手前で、両脚を揃えてそれはそれは行儀よくお座りをしていた。

青みを帯びた白の体毛。まるで新雪のように無垢な銀。

細く長い手足、胴、背筋は伸び、長い両耳もぴんと伸びて。

その背後で、たっぷりとした毛並みの豊かな尻尾が揺れている。

「狐……？」

「狐だな」

それはどこからどう見ても、純白の被毛の狐であった。

そつと屈み、視線を合わせる。

「ふつ、なんだいお前さん。家になんぞ用か？ ん？」

戯れに問い掛ける。無論のこと返事を期待した訳ではなかったが、

しかし。

狐は首を縦に振った。

「ほう、お前さん言葉が解るのか」

「もうジंकクロウさんったら。そんなことある訳ないじゃ……」

『シノギ・ジंकクロウ』

期せず、風鳴りめいた声が響く。

「……」

「……」

ウイズを振り返り仰ぎ見るが、女はぶんぶんと首を左右した。

つまり、今の声を発したのは。

再び目の前の狐を見る。朱い瞳がなおも己を見上げていた。

それは獣の目ではない。そしてこの目を己は知っている。

『オマエに会うタメに来た』

「……」

不純物というものを一切含まぬ澄み切った、あまりにも潔きよらかな目。

加えてこの、肉の喉を通さぬ声は——記憶が再起されたその瞬間、眼前で氷雪が逆巻いた。身を切るほどに凍て付いた冷気を放ち、白い霞が狐を包み上げる。

「!? これは、精霊？ まさか、どうして!?!」

「どうしてだろうなあ」

ウイズの叫びには心底から同意する。

懐かしさを覚えるには時間というものが圧倒的に不足している。なにせ今日の今日、つい昼間のことであるからして。

純白の武者鎧。白銀の鬘。鬼の面頬。

「冬將軍!?!」

43話 短え独り身だつたな

縁側では冷えるかとも思われたが、風も凧ぎ雪雲も散つた今時分、この季節外れの月見がなかなか乙なもの。なにより、今宵の客人は寒さには滅法強いときた。強いどころか、その権化といった方が正しいのだろうか。

冬將軍と呼ばれる雪精の頭目は、武者鎧姿でどつかりと縁框に腰を下ろした。

その隣に同じく胡座を掻く。

「で、己に会いに来たと申したか。冬山から遠路遙々」

『……』

こつくりと鬼の面頬が頷く。

挙動の素直さに妙な愛嬌のある奴だ。

「先刻の意趣返しにでも参つたか」

まずあり得るとすればこの辺り。

武者を標榜せし士がものぶ劍を以て敗北を喫した。潔くその結果を呑み、勝者の手にその命運を明け渡すは武人の作法であろう。事実この武者は一度、自らその首級を己に委ねた。

……いや、あるいは。

なるほど、その覚悟を己は撥ね付けた格好になる訳か。

武士の情けなど勝者の傲りに他なるまい。それを耐え難い恥辱と取るは何一つ不思議もない。そうとも、武人であればこそ。

「今一度刃を交えるが望みとあらば、尋常に御相手致そう。とはいえ、それがし某としてまた常在戦場の氣組足りぬ未熟者。この侘び住まいで事を起こすのは少々障りがあるものでな。場所柄を変えたく……」

『……チガう』

「？」

厳めしい鬼面が左右する。

再戦の申し出ではないと言う。

不意に、武者はその胸甲の下に手を入れた。

「っ！」

「ウイズ」

途端に背後で膨れ上がった警戒心と戦気。敷居の内で控えていたウイズを視線で諫める。

その様を周章狼狽とは言うまい。鉄火場を潜ってきた者の逃れ得ぬ性、当然の備えだ。むしろ悠長に座したまま相手の出方を待ち受ける己こそ異常。暢気な阿呆に相違ない。

程なく、懐から表れ出た手には何かが握られていた。

掌に収まる青緑色の小さな石。鉱石のようだ。それも、岩奥から直接抉り出したかのように武骨な、原石である。

「なんだそりゃ」

「そ、それは!？」

一声、裏返った叫びをウイズが上げる。武者の取り出した石を食い入るように見詰め、わなわなと震える両手を出しては引っ込めてを繰り返す。

「知っておるのか店主」

何故かそう聞かねばならん気がした。

「そ、それは、おそらくマナタイトです。それも超高純度の。いえ、それだけじゃない……この魔力は、もしかして……」

『玄武』

「っ!? ま、まさか、あの宝島の!？」

「??」

ほんの一言で両者は疎通していた。無知な男を一人置き去りに。そんな物分かりの悪い男を見て取り、ウイズは丁寧の説明を呉れた。

曰く、玄武という名の亀の習性だと。神獣とまで崇められる巨大なその亀は、平素は地中深くで寝起きし鉱物を主食としている。そうして取り込んだ鉱物は体内で凝縮され、長い年月を掛け背中の甲羅から地層状に表出する。正しく、その身に金銀宝珠を背負う山の如き様から、冒険者からは宝島の俗称で親しまれているとか。

「なるほど。で、そいつあその大亀から採った鉱石という訳だ」

「ただの宝石なんかじゃありません！　これ、玄武のManaタイトですよ！」

「まなたいと、ってなあなんだい？」

「……………そこからですか」

「かつははは、いやいや世間知らずまつこと面目ない」

勢い前のめりに目を輝かせていたウイズの肩が落ちる。

「Manaタイトは魔力を宿した宝珠のことです。基本的にManaタイトの自然物はレイライン、ええと、魔力が集中しやすい土地に位置する鉱脈から主に採掘されます。でも稀に、体内でManaタイトを精製するモンスターもいて。神獣・玄武はその筆頭で、取り込んだ稀少鉱物と自身の生命魔力を合成して超高純度、超高密度のManaタイトを造り出します！　これはその原石！　甲羅の中心部、それも普段は他の鉱石や鉱石モドキに覆われて掘り返せないくらい深い位置にしか出ない超稀少鉱石なんですよ！」

「ほー」

「ほーって!?!　この大きさでも五千万エリスは下りませんよ!?!　いえっ、カットすればもつともつと価値は上がります！」

「はっ、そらまた」

御大層な、とは口には出さず置く。どうも近頃同じ感想ばかり吐いている気がする。

五千万ときたか。妖刀を五つばかり買って釣りがくると思えば、なるほど……………御免被る。

差し出されたままの碧の石。仄かに光を発しているようだ。めぐみんの放つ暴力的な爆焰とは正反対に穏当な。

「こいつを、俺に寄越すってのか?」

また、鬼面がこっくりと頷く。

『オマエはオレを斬らなかつた。殺さなかつた。その見返りに、これをヤル』

見返り。命を奪らなんだ敵に、その礼をしに来たと。

理屈としては誤解の余地もない。この武者の純な有り様を思えば、こうした行為も実のところ予想はしていた。

暫時、眼下のそれを見詰めて。

「要らん。仕舞いな」

「ええええええええええ!! ななな、なんでですか!」

「お前さんがびつくらこいてどうする」

仰天するまでに驚き慌てるウイズがなにやら面白い。

「だ、だってこれがあれば大金が自由に使えるんですよ!? 担保とし

ての価値は十分どころの騒ぎじゃないです! 融資受け放題です!

あんな商品やこんな商品まで買い付け放題、店頭にずらつと並べ放

題……ですよ!」

「ぷっ、くくく、いやはやウイズよ。お前さんも可愛い顔してなかなか

俗な女おんなよな」

「はうあ!?! しゅみません……」

恥ずかしげに赤く染まった顔で、ウイズはしゅんと肩を落とした。

そのまま両手の人差し指をちよんちよんと突き合わせる。

金子そのものではなく商いの品に夢を馳せるあたり、この娘の商魂

とやらには疑いもないが。如何せん成功の兆しは微塵とて見えな

かった。

『……石では、ダメか?』

武者は首を傾げ、至極神妙に問うてくる。

剛健な見た目に反した仕草はやはり可笑しみを誘う。

「いんや? 別に品にケチを付けてるんじゃないやあねえさ。大層御立派な

鉢かぶの土産と存ずる。しかしだ。己がそれを貰い受ける筋合いは、無

い。なあ? ウイズ」

「それって……」

筋、道、理。当てる字は何だろうと構わぬ。ただ、それらが満足に

通らぬまま恩だの礼だのと気負われては堪らない。老骨で立てた柵しがらみ

に若人を縛るなど考えるだに悍おそましかろう。

ウイズは俯くばかりで、頷いてはくれなかったが。

「お前さんを斬らなんだのは、単にその劍腕に興きが湧いたからよ。間

違ってても仏心なんてもんが湧き出たからじゃあねえ。それに忘れた

か? 己も、我が徒党の面々も、お前さんの同胞を殺した。そうする

ことで得られる報酬を目当てにな」

『……』

「重ねて言うが、礼なぞされる筋合いはねえ。どころか、仇として憎み恨まれるが必然。この事実を如何にする？」

武者を見据える。応えを待つ。

この傲岸不遜なる男にもはや礼節など無用。そう示す。そう促す。今やその真意か、あるいは真剣を晒す権利が目の前の武者には生まれただのだと。

「如何に」

重ねて問う。

仇討ちならば刃にて応ず。これもまた武の鬼道なれば……。

『精霊は死なナイ』

「なに……？」

『雪精は現世に降りる時、雪の“容”^{かたち}を成す。もし刃や火で散り、溶けたとしても、崩れるのは“容”。命ではナイ。お前達が“容”を崩した雪精は山に還った。季節が巡り、冬になれば、また“容”を作る』

ずずいと宝珠を突き出して、鬼面が大きく頷く。

『オマエは仇ではナイ。オマエはオレの恩人ダ』

「……………」

至って大真面目に武者は言った。まるでこちらを安心させようと懸命な様で。

それが、なんともはや。

「くっ、ふふ、ははははは！　そうかそうか！　はははははっ！」

「ジ、ジंकクロウさん……？」

「いやあ恥ずかしい！　とんだ早とちりよ。頓珍漢なことを滔々語っちゃまった。ははっ、参った参った。お顔が熱い熱い」

手でこの間抜け面を扇ぎながら、笑う。笑う他ない。うっかり悲愴ぶって素っ頓狂を演じてしまったのだから。

相手方はしっかり筋を通してここに居られる。それを即座に理解できなんだ己の手落ちだった。

「相分かった。御手前の御配慮、有り難く頂戴致す」
『ソウか』

「拝領……とまあ、宣っておいてなんだが」
『?』

この期に及んで二言を垂れる不躰を承知で、案を一つ。

「その鉢、あの小僧にやっってはくれぬか」

『小僧?』

「ああ、何を隠そうその小僧っ子こそ我が徒党の御頭様でな。お前さんの助命も、頭のカズが認め、徒党の面子を説き伏せてくれたからこそ叶ったのだ」

まあ説き伏せたと言えなくもない。駄々を捏ねるアクアを無慈悲に捻じ伏せられるのもカズマの度量というもの。

己一身の独断……独善を、溜息一つで許してしまうのだから。返す返す珍奇なガキで、大きな男だ。

武者は暫時、考え込むような素振りを見せ、掌の石と己を交互に見た。そして、結局はずいと石を差し出した。

『……オマエがそう望むなら、好きにするとイイ』
「忝い」
かたじけ

向き直り、一礼して受け取る。見た目以上に重く、そしてぼんやりと暖かな石だった。

果たして子供らは喜ぶだろうか。

『……オマエはいいのか』

「うん? ははっ、金には常々困っちゃいるがな。幸い食うには困らず済んでおる。ああ、そんな店主は万年おけら螻蛄の困った娘だ。あまり高価な物を見せてやるな。目に毒だ」

「酷い!?!」

『わかった』

「ええ!?! そ、そんなあ……ちょよ、ちよつとだけ、ほんの一欠片だけでも融通していただけませんか?! 次の商品はきつとバカ売れ間違いないですから! ねえ!?!」

縫るようなウイズの視線も意に介さず、武者は何やら考え込んでい

る。

曰く、不満足とでも言いたげな態度だった。

「なんだなんだ。まだ納得いかねえってのか」

『……』

「はっ、ここいらの連中はどいつもこいつも律義だねえ」

己が如き粗忽者こそ見習うべきかもしれん。

気が向いたらば、だが。

「ならば晩飯でも食っていけ。ウイズ、すまぬが膳は三客用意してくれるか」

「え？ あ、はい。ふふ、勿論です」

『？』

何のことやら分らぬとばかり、武者の兜に疑問符が生える。

「一杯付き合え。そいつでチャラだ」

「出会い頭のありやあ面食らったぜ」

『？ 何のことダ』

斟酌もこれでどれほど往復したことが。

なみなみ満ちていた酒瓶の中身が心許なくなる程度に呑み交わした頃。

叢雲から顔を出した月を見て、不意にそんなことを思い出す。

「狐だよ、狐。玄関開けた先で狐が行儀よくお座りしてるかと思やあ、びゅん！ と寒風一吹きでその武者振りだ。己も吃驚こいたが、ウイズなど肝潰しておったぞ」

酒肴を粗方平らげてしまったことに気付いたウイズは、土間でまた何かを拵えている。気を利かせたというよりは、自分の口寂しさを紛らわせたいのだろう。遠慮がちに見えて存外ちゃっかりしているのだ、あの女は。

「狐狸に化かされるってなあよく聞くが、狐に成って化かしに来る

たあ驚いたぜ」

『オマエが教えた』

「あん？」

武者は言うや、手を面前に掲げる。人差し指と小指を立て、他の中指、薬指、そして親指は中央で合わせる。

それは手で表すところの、狐の象形だった。

それを己が教えた。そんな覚えは……いや。そうだ。冬山でこの武者と太刀打ちに臨まんとしたあの時。

「めぐ坊にやったあれか。おお？ あれを見て狐に化けたというのか。それにしちゃ随分見事な化けっぷりだったな。どこからどう見ても白狐そのもので……」

言い終わるを待たず、突如として風が逆巻いた。縁框の傍らで氷雪が渦となつて舞い回り、程なく止んだ。

そしてそこには、柔らかな青白い被毛をした一匹の狐が座っている。

「おお、こいつあ御見事。その姿形は自分で考えんのかい？」

『チガう。オマエが、教えた』

「？ どういうこつた」

『この姿は、オマエが頭に描いたモノ』

精霊なるものを今一つ理解しておらぬ己という無学の徒に、精霊の頭目は懇切丁寧な教授を呉れた。

曰く、〃容〃を持たぬ精霊が手っ取り早く姿を得るのに、人間の想像を利用すると。良くも悪くも想像力、もとい妄想力に長けた人間から得られる〃容〃はどんな身形であれ強力になるらしい。力弱い雪精を守護する為に、この者もまたより強靱な想像を求め、ある時行き会った〃ニホンジン〃から現在の武者鎧の姿とそれに付随した介者剣術を会得したそう。

己が言えた義理ではないが、少なくとも現地の冒険者にとっては迷惑千万な話だ。

「するつてえとなんだい。お前さん、どんな姿にでも化けるのか」

『オマエが思い描けば』

「ほう、ならば狸はどうだ」

『ん』

口にするや、また氷雪の竜巻が上がり、消える。そうしてそこには、ふつくらとした白い冬毛の、まるまるとした狸が鎮座していた。

ぽかんと口を開けていたのも束の間、感心とも珍妙ともつかぬ心地に笑いがこみ上げる。

「はははっ、よし！ では続けてだな。栗鼠はいけるか」

『ん』

「おお！ では獅子はどうだ」

『ん』

「ほお！ かかかつ！ こいつあ魂消た！」

その後も動物、植物、魚に虫、様々な器物に、仕舞いには分福茶釜など。酔いも手伝い勢い任せにいろいろと化けに化かせ、調子に乗って大いに笑った。

両手を叩いて喜ぶ己は、どこから見ても立派な酔っ払いであろう。

「いやいやほんに見事。こいつあアクア嬢の宴会芸にもおさおさ劣るまい」

『楽しいのか？』

「おうとも！ 存分に楽しませてもらった。ふふははは！」

『恩返しに、なったか？』

「うん？ 恩返ししい？」

そんなことを、狐が問うてくる。

「そいつあ妙だ。恩を返すなあ狐じゃあねえ。鶴だ」

『つる？』

「おう。鶴の恩返しつつつてな。今は昔、山で猟師の罠にかかっておった鶴を男が助けた。するとその夜、美しい女が家を訪ねてきて自分を男の女房にしてくれと言う。ん？ こいつあ鶴女房だったか？」

『……』

思えば似たような話だ。冬山で助けた武者が家を訪ねて来て恩を返したいと言う。まさしく今の、この様こそ。

『恩返し……ソウか。ソウやればオマエは楽しいのか』

「……いや、いや待て」

——しまった。

そう思った時には既に遅い。制止の声は氷雪の吹き荒ぶ音に掻き消され、残響すら立ち消える風と共に失せる。

残ったのは。

「……ジंकクロウ」

「おいおい」

純白。無垢な白。

青白い、流れごと凍て付いた滝のように豊かな、腰元まで滴り伸びた髪。

透き通るとはこの事と、雪の細工物のように白い肌。白の瓜実顔に、切れ長の目、すつと通った鼻筋、血の巡りを疑うほど薄い唇。時に童女のようなウイズとはまた違う。花の盛りを丸ごと氷の中に閉じ込めたかのような、美しい女がそこにいる。

白地に細かな雪の華を刺繍された振袖が、雪の精霊たる自負を示しているようでなにやら面白いが。

現実逃避もそこそこに、大して満喫もできずに終える。

何故なら雪から生まれた女の冷たい手が、己の横面を、頬を撫でていた。

「嫁入り？」

「もうよい。な？ わかったからもう頭ん中読むんじゃねえ」

鶴女房だの雪女だのと、要らぬ記憶ばかりが掘り返される。難儀なことに、思い出すまいとすればするほど脳味噌というやつはより一層に思い起こすのだった。

こちらの言葉には耳も貸さず、冬將軍、もとい冬の女おなはこちらの頭ばかりを覗き見て。

そうして、微笑んだ。

「オレ、オマエの女房になる」

44話 看板裏から熱い視線が突き刺さる

馬車に揺られること三日。正門を潜って中央通りを歩く。寒さも一段と厳しさを増していく日々で、珍しく麗らかに晴れた今日は比較的肌暖かである。

「ああく……すっごい眠い！」

目蓋が重い。木板を打ち付けただけの固い座席には体の節々を痛め付けられた。

長旅に疲れた体には、この日和は逆に堪える。

こうしてアクセルの石畳を踏むのも実に二週間ぶり。

「ったくあの御者。へボい腕しやがって。お陰で体中くっそ痛え。こんなことならやつぱもつと値切つとくんだったぜ」

「誰が手綱握ろうが道の良し悪しは変わらねえだろ」

「それに、そもそもお前が王都近くまで遠征しよう、なんて言い出したのが原因だろう」

ダストのいつも通りのチンピラ染みた、というかチンピラの難癖そのもののぼやきを、キースが皮肉り、テイラーが苦言を吐く。

二週間以上前に遡る。

アクセル近郊にある廃城を魔王軍の幹部が乗っ取ったとかで、その魔力に当てられたモンスターが軒並み逃げ隠れてしまった。モンスター討伐を主な収入源にしている冒険者にとって、これが痛手でない筈もなく。これから冬備えもしなければならぬ中、狩場を他の街に求めて遠出を図るパーテイもいた。

そして自分達もまたその御多分に漏れず、討伐の遠征を行った訳だが。

「なにも王都周辺とか拘ることなかったじゃん。アクセルの廃城から遠ざかるだけでよかったのに」

「バックおめえ、前線近くの方が稼ぎがいいだろが」

「単価はな。けど、移動費と現地での宿泊費なんかで、結局収支はほとんどんって感じだったぞ」

「ダストは単に借金取りから逃げたかったただけだろ。酒場と武器屋の

ツケと宿代と、ああそれと覗きと恐喝なんかの罰金刑と」

「逃げてた訳じゃねえよ。ほとぼりが冷めるのを待ってただけだ」

「同じだよ」

このロクデナシっぷりに呆れるのも疲れた。慣れた、と言ってしま
うのはなんだか気持ち的に負けたような感じがムカつくので言わな
い。

私達三人からのツツコミを気にも留めず、ダストはにやりと歯を見
せて笑った。

「抜かりはねえ。当てはある」

「当てえ？」

「ああそうだ。俺には一人金持ちのトモダチがいるんだよ」

「……ちよつと、それまさか」

「じゃあちよつくらジंकクロウくんのところ行つてきまーす！」

「待たんかい屑」^{ダスト}

走りだそうとするダストの首根っこを両手で捕まえ、引き戻す。カ
エルが絞め殺されたような声を出しながらダストは急停止した。

「なにすんだリーン！」

「屑拾いだよバカ！ 金の無心なんてみつともないことしないでよ！

それもよりによつてジंकクロウになんて！」

「ああ!? いいだろがちよつとくらい！ なんせあの野郎は魔王軍幹
部の首を獲ったんだぞ?!」

「まあデュラハンだから、元から首は取れてたらしいがな……」

その噂は、自分達の遠征先まで轟いていた。

突如として魔王軍の幹部がアクセルの街を襲った。『首無し騎士の
ベルディア』、『斬り込み隊長』、『死の宣告者』、『ちいと殺し』……最
後のの意味がよく解らないが、ともかく、数々の異名、渾名で冒険者
達に恐れられていたそのデュラハンが、なんとたった一人の剣士に打ち
倒されたという。

噂の剣士の名は、シノギ・ジंकクロウ。

「……ふふ」

同じパーティーですらない、ただの冒険者仲間だけど。それでも何故

だか誇らしい。

強い人なのだということは知っていた。でもまさか、ここまでなんて。

驚きと嬉しさに、自然と笑みが零れてしまう。

「あたちいジンククロウさまに惚れ直しちゃいまちたあ、つてか？
ペッツ！」

「っ!? そ、そんなんじゃないし！ ただ、し、知らない仲でもないから、純粹に凄いなって思うだけで……ほ、ほほ、惚れ、惚れ直すつて、それじゃあ私がジンククロウのことす、好、好き、みたい……！」

「待つてろ三億エリスくん！ 今、会いに行きま——ぐえ」

木杖の先端、鉤のような歪曲で走り出そうとするダストの首を捕え、引き倒す。潰れたカエルのような呻きを上げて、ダストが仰向けにひっくり返る。

「な、なあ。リーンのやつ、また一段と杖術に磨きが掛かってないか……？」

「男の影響だろうぜ男の。女は男の趣味で180度変わるからな」

「いろいろ教えてくれやがったからな、ジンククロウめ」

「ま、うちのパーティ的には凶暴な前衛が増えて心づよ」

「あ、あ？」

「「なんでもないっす」

杖を回転させ、その遠心力で風を裂く。鋭い音色は男共のひそひそ声を消し飛ばすには十分だった。

鼻から吐息して、咄嗟の動きで乱れてしまった髪を整える。そして、その手触りに顔を顰めた。

「……傷んでるなあ、やっぱり」

帰りの道中は当然ながら野宿だった。碌に手入れも出来ず、精々が沢の水で流すくらい。それは身体も同じことで。

貴重な薪を使って沐浴だつて（比較的）頻繁にやった。この服も、アクセルに到着する直前に着替えたものだ。

それでも、やっぱり、心許ない。ダストではないが、真っ先に会いに行きたいのは自分だつて同じなのだ。

「……まずはお風呂済ませなきゃ。やつぱり着替えよう。宿に取りに行かないと。ああ今日って美容院開いてるかな……」

あの人に会う。ジंकロウに、会える。たったの二週間なのに、随分長いこと会っていないような気分だ。

そわそわする。全身にゆるく緊張感が伝っていく。心臓の鼓動が少し、強くなる。

早く会いたい。会って、顔を見て、声を聞きたい。

「ああもう……！」

これじゃあ本当にバカダストの言う通りの、恋する小娘って感じだ。

熱くなる頬に冷えた手を当てても、その熱は少しも引いてくれない。すぐに頭を振る。

やることがたくさんあるんだから。早く帰って準備を……。

「お？ あれジंकロウじゃん」

「へっ!？」

いつの間にか回復してのっそり起き上がったダストが呟く。

視線を追った先、大通りに所狭しと並ぶ露店の一つ、その前に佇む背の高い人影^{シルエット}。牛皮のジャケット、黒いズボン、そして腰帯に差した細身のサーベル（あの人はカタナって呼んでたっけ）。

噂をすれば影、ジंकロウがそこにいた。

緊張と羞恥心が消し飛んで、ただ子供みたいな喜びが湧きあがった。

「ジ」

思わず手を振って、名前を呼ぼうとして——発しかけた声が喉奥で詰まる。

ジंकロウの、彼の傍にいたもう一人の影。

白い、人。

純白の、見たこともない異国風の装い。そして、陽の光の中でさえ青みを帯びた白銀の髪。

「ああ？ なんだよ、女連れかよ……ってなんだあの美人!? 野郎、あんな上玉侍らせやがって……! よおし絡んでやる。そしてあること

ないこと吹き込んで台無しにしてや……ぶべっ!？」

ロクデナシがロクでもないことを口走っているところに、その腹へ杖を突き入れてすぐ近くの路地へ叩き込む。

キースとテイラーも同じようにやろうとしたら、二人は既にそそくさと逃げていた。

まあいい。とにかく自分もまた、路地の影へと身を隠す。

どうしたものか。

昨夜、酒盛り終えて就寝し、起床してからこうして街を出歩いている今まで、その一言を延々と繰り返している。

大通りに出て、露店を物色するふりをしながら、ギルドまでの道行きを長引かせる。時間を欲した。解法とは言わん。上手い言い訳を思い付くまで、今暫し。

「ジंकクロウ、どうした?」

「んー?」

上の空で心中に埋没していると、肩にそつと触れられる。白魚を思わせるしなやかな手。爪の先に至るまで見事な造形美を誇る女生は、その美しい顔を心配そうに翳らせた。

「何か、悩み事か?」

「そうさな。悩みといえば悩みどころよ」

問いに対して何ら具体を示さぬ応えに、しかし女は得心する。

「オレのことか」

「ん、まあな」

頭の中を覗き見られるというのは、初めこそそれはもう困惑したが、こうした意思の高伝達速度を目の当たりにすると、むしろ便利に思えてくるのだから現金な話だ。

とはいえ、悩みの種扱いされるのが愉快である筈もない。どころか気に病みやしないかと一瞬案じたが。

「ふふふ……オレのこと、考えてる。濃く、深く、強く。ジンクロウの中、オレでいっぱい……ふふふっ」

「……お前さん、見てくれもそうだが、気性の方がえらく変わっちゃいねえか？」

無邪気であるのに、その笑みはひどく妖しげで……あまりに艶やかだ。

野太刀を用いて巧みに介者剣術を振るっていたあの武者と同一の者とは到底思えぬ。

そう、あの冬將軍と呼ばれた鎧武者が、控えめに言って絶世の美女に化け、こうして己の隣を歩いている。

頭を抱えたくなる冗談だ。冗談のような、けれど現実であった。

「己の想像だか妄想だかが、お前さんをそのように変えたのか」

「そうじゃない。オレは雪の兄弟達を守る為にしか人間の心は見ない。確かに、人間の心は、精霊には“色”が強すぎる。だからあまり見過ぎると容と霊質そのものが狂う。でも」

また、笑み。しかし、今度浮かべたそれは、どこか幼かった。色事など無論のこと知らぬ童の貌。それはむしろ、太刀を手にして挑みかかってきたあの武者をこそ思い出させた。

なるほど間違いない。舌の根も乾かぬ内に撤回しよう。女これと武者あれは同一の存在であった。

「ジンクロウの心はとても静かだ。まるでオレの故郷の、あの冬の御山のよう。雪の白と木立の影。音も色も無い。静謐の世界……」

「そらまあ、歳相応に枯れちゃいるだろうが。かかつ、褒められてる気はしねえな」

冬山に例えられる精神性とは、人としてどうなのやら。

女は首を左右する。頭の挙動に随って繊細なその白髪が流麗に宙を泳いだ。

「冷徹。冬の御山は何もかも差別しない。弱いモノも強いモノも、命は、最期に御山に還る。でも、弱いモノも、強いモノも、恵み、守り、育ててくれる。雪の下、土の中、その一等奥に、優しさがある」

ふと、女の足が止まる。振袖の袖口で口元を隠し、その下で微笑す

る。笑みに蕩ける眼が己を見詰める。

「厳しくて、優しい。御山のようなジंकロウが——オレは好きだ。好きだから、こうなった。こうなれた」

「……」

刹那、通りを流れる喧噪が遠ざかり……再び戻る。

虚を衝かれるとはこのことか。どんな面をすればいいやら解らん。こどもも真っ直ぐ、そして不純のない好意は、過去に見聞きしたことがない。色恋とも違う、親愛の情。

笑止。振り返るべき過去を都合よく忘却した蒙昧漢が何を抜かす。何を。

——いや、一度はあるか。

色も恋もまだ知らず、ただ純粋な情を掛けてくれた。紅い少女が、それを与えてくれたような気がする。

「……オレ以外の、色……紅い……子供……?」

「また何ぞ見えたかい」

「うん………これ、ジंकロウの大事なもの?」

「かもしれんな」

答えると、女はまた何か考え込む素振りを見せた。

通行人が訝しげにこちらを盗み見、そして行き過ぎる。それを十ほど繰り返した時、雪化粧の如き白い顔が、そこに埋まった赤い目が己に向かう。

「オレがその子供に成れば、ジंकロウは嬉しいか?」

「やめろ。そんなこたあ間違つても頼みやしねえ。もし悪戯にそんな真似をしようもんなら、家から追ん出すぜ」

正面に赤い眼を見据え、噛んで含めるように言い置く。

女は目を見開き、そうして俯いた。

「……わかった。しない」

「おう」

「………ごめんなさい」

「わかったんならいいさ。やはりお前さんは純で、物分かりもいい」
肩を竦めて、心なしか小さくなった女。その俯いた白い頭を撫で

る。まるで新雪のように精緻な手触りだった。

「オレの容、これでいいのか」

「ん？ 器量の良し悪しを聞いてんのかい？ おいおいその容姿なりでまだ足りねえってのか」

「……」

「ふむ、自分では分からんのか」

「うん、人間の想像を見取れば力は強くなる。けど、容の出来栄えは精霊の能力次第……」

不安気な瞳が己を見上げる。

何を求められているかは即座に察した。齒の浮くような文言を。

溜息一つで腹を括る。

「ああ、目の醒めるような別嬪おんなだぜ。どんな男もお前さんのような女を放つてはおくまい」

「ジンクロウも……？」

「眼福にや違えねえが」

現に、この美人を振り返る男共の鼻の下の伸び切っただらしねえ顔が其処彼処に見て取れる。

しかし、勘違いされては困る。

「俺とお前さんの面を家に招いた覚えはねえぞ。冬の「！」」

冬將軍、武者、狐、狸に、美女、そしてその他諸々……姿形も自在なる雪の精霊を見やる。

さてどう受け取ったやら。白い女は一瞬、意表を衝かれたとばかり固まる。

ぼけ、と視線が中空を彷徨う。焦点が合わさり、それが己を捉えた時、白い頬にさっと朱が差した。

「……そうか」

なんてやりとりを路地の看板の裏から見て聞いた。

いや、内容の半分も理解はしてないけど。半分でたくさんだった。

「……………」

「けっ、イチヤつきやがってあの野郎。いったい何処であんな美人引っ掛けて来やがったんだあ？」

「……………」

「魔王軍の幹部倒したからって調子乗ってんじゃあねえのか。へっ、さっすが英雄様は羽振りもあつちも御盛んでいらっしやる。二ヒビヒビ」

「……………」

「…………あのー、リーン？ リーンさんよ？ そろそろなんかリアクシオンを超越せ。その殺し屋みたいな目やめろ。怖えから。頼むから。お願いだから。ねえ聞いている？ ちょっと」

杖を取り出す。

「なにする気？ ねえつたら。流石にダストさんも殺しの手伝いはやーよ？ あ、ボクちよつと用事思い出したわ！ 先、宿に帰ってるからよ。お前もまあその、程ほどにな？ じゃ、そういうこと——
—うおっと!?!」

「？」

とりあえず炎熱系の呪文を備えつつ、看板裏から飛び出そうとした矢先。背後でダストが声を上げる。

まずこつちを静かにさせよう。そう思い、振り返ると、そこには。

紅いワンピースに革ベルト、そして黒のマントを羽織った小さな少女が立っていた。

尖がり帽子の下から、紅く燃える瞳が覗く。

「さて、どういうことでしょうかね」

「それはこつちが聞きたいかな」

燃える瞳とは裏腹な冷えた声に、こちらも無機質に応える。

めぐみんは気分を害する様子もなく、そのまま私と同じように看板裏に張り付いた。

「では一先ず様子見ということでは」

「異議なし」

「……帰っていい？」

45話 冬の子と夏の子ら

大通りに犇めき広がる市、その店構えは相変わらず千差万別、色とりどりであった。

以前にめぐみんと訪れた物騒な武器防具店も、変わらず剣呑な品揃えでそこにある。

その真ん中で、白雪の女はキョロキョロと忙しなく市場の賑わいを見ている。

「そんなに珍しいか」

「うん。こんなたくさんの人間、見たことない」

「お前さんの山に比べれば騒がしかろう」

「でも、面白い」

言葉通り、姫御は興味の赴くままあっちへ行ったりこっちへ行ったり。まるで一人歩きを覚えたばかりの幼な児のようだった。うっかりと目も離せぬ。

「これこれ、あまり遠くへ行くな。はぐれちまうぜ」

「ん、それなら」

呼び掛ける己に、女はそつと振袖の下から手を伸ばす。細くしなやかな指が差し向けられる。

その意図は明白だった。理にもまた適う。

「？ ジンクロウ」

「へいへい」

断る理由を探しあぐね、結局その手を取る。百合の花弁めいた手触りと真実雪に近しい体温。

はてさて、はぐれないよう手を引かれているのはどちらやら。

「オシドリ夫婦は普通こうする」

「また妙なことを覚えやがったな。そいつもここの入知恵か」

自身の頭を指先でこつこつと示すと、女は首を左右して。

「ウイズがそう言ってた」

「ああ？」

頭を読んで……という訳ではないらしい。

冬の女はこちらの腕を引き寄せ、自身のそれと絡めた。左手を見やれば、念の入れどころとばかり指を一本一本しっかりと握り合わせて。

「……うん、本当だ」

「はっ、なんのこった」

「ウイズが教えてくれた。こうすると、なんだか胸の中がふわふわする……これ、好きだ」

柔らかに笑んで女は吐息した。肩口に頬を寄せられ、半ばしな垂れ掛かるように。

女店主の指南の賜物、とでも言おうか。効果は実に靦面。こちらに為す術はなく、姫御の思うままに男は一人気を惑わせている。

今晚もウイズはあの庵に夕餉を拵え——そして相伴し——に来る筈だ。ならば是非、礼をせねばなるまい。苦言と小言を十か百か、酒でも酌み交わしながら吐き出せばあつという間に数えてしまえよう。

「色に惚けてんのあ、小僧も小娘も変わらん……」

「？」

「なに、年寄りの愚痴だ」

青みを帯びた白髪を空いた右手でぐしゃぐしゃと撫で付ける。きめ細かな指通りのそれは大した乱れも見せず、風が一薙ぎするだけでまた綺麗に整った。

「ふふっ、それも好きだ。んん……もっと欲しい」

「犬猫みてえなことを言うんじゃねえや」

「？ 犬も猫も人の言葉は話せない」

「こいつあ言葉の綾というもんだ」

「むう」

不満顔まで妙にあだっぽい。

人を化かす、いやたぶらかすには十分過ぎよう。

「こらあいろいろ教え込まねばならんか……」

「オレ、人間らしくできてない？」

「出来すぎで困ってんのさ」

「??」

さも不思議そうに目をしばたく女が何やら小憎い。八つ当たりに、その流麗な鼻頭を指先で小突いた。

そんな光景を見詰める三対の目。

「なんなのあの女なんなの……!?」

「近くないですか近すぎますよねこんな往来でふしだらな……!!」

眼光鋭く怒気荒く、ジンクロウと謎の女の動向を睨む少女二人。

身を隠した看板の端を碎かんばかりに握り、実際に潰していることに気付いているのかいないのか。

軋んで悲鳴を上げる看板を見ないようにダストが目を逸らすと、その持ち主であるらしいパン屋の親爺の泣きっ面がそこにあった。

「ジンクロウもジンクロウです！　いくら美人相手だからって気を許し過ぎですよ！」

「それ。ほんとそれ」

「前から思っていたことですがジンクロウはやはり節操が無い！」

「ギルドの受付さん、女給の子達……」

「酒屋の女将さんから、果ては知らぬ間にウイズにまで……!」

「えっ!?　あ、あの店主さん!?　あんな綺麗な人にまで粉掛けてんの!?　ぐぬぬうジンクロウめえ……!」

安酒あおつて宿の部屋で寝よう。

終いには猫のように毛を逆立て襲い掛かりかねない様子の少女二人を見限り、今日一日を安息日になるとダストは内心で決めた。

「どいつもどいつも」

「? ジンククロウ?」

「ああ、大した事じゃあねえさ」

あれで隠れているつもりらしい。小刻みに震え、時折軋むパン屋の看板を尻目に息を吐く。夏に瑞々しく青む緑葉の如き娘子らに呆れ、というより、彼女らの盛んなるに圧倒される秋山に敷かれた枯葉の如き己を嗤って。

ふと冬のが立ち止まる。

何やら興味深げに屋台の一つをじっと見詰めていた。

焼き菓子の類らしい。

小麦粉を主とした生地を捏ね上げ、丸めたそれを二枚の鉄板に挟み焼き上げている。何より特徴的なのはその鉄板の形状。格子状に溝が打たれ、その隙間を生地が満たすように広がるのだ。

甘く香ばしい香りも然ることながら、出来上がった菓子の見てくれがなかなか面白い。

「どうした。こいつが気になんのかい」

「うん」

「食ってみるか?」

「うん!」

頷く娘の目はきらきらと輝いていた。似せるなど己で言い含めておきながら、やはりその素直な反応にはどこかの娘つ子を想わずにおれぬ。

「店主、包んでくれ」

「はいはいまいど! いくつ?」

威勢の良い女店主は言いつつ、ベルディアの大剣も斯くやという大きな焼き器鉄板をぐるりと裏返した。

さても、数。我ら、看板裏に潜む奴ら。そして。

「八つ……いや、九つだ。九つくれ」

「あらら、たつくさん食べるのねー。うーん、どうします? 作り置きもあるけど、あとちよつとで新しいのが焼き上がるよ」

「焼き立てか。そいつぁいいね。ゆるりと待たせてもらうぜ。ところでこいつぁなんて菓子なんだい」

「おや知らない？ ワッフルって言うんだよ」

とはいえ然したる間も置かず菓子が出来上がる。湯気の立つそれらを紙袋に包み、金子と交換に受け取った。

対して、傍らで待つ冬の様子は、餌を前にして「待て」を強いられた仔犬のようである。

いかにもわくわく今か今かとした心持を我慢して、白い両手を拱こまねいでいる。

「熱いぞ、気を付けな」

「うん……あつっ」

「おいおい、ゆっくり食え」

半紙に包んだ一つを手取るや、娘は豪快に噛り付いた。案の定焼き立ての菓자에驚いたがそれも一瞬、ふ、ふ、と熱を冷ましながら栗鼠のように食っていく。

「旨いか？」

「んっ……んまい」

「ありがとねー！」

店主の笑顔に見送られ、再び歩を進める。

「精霊ってえ奴あ皆健啖なのか？」

「んっ、ん……食べる必要はない。存在を維持するだけなら、大地からマナを吸うだけでいい。でも……食べるの楽しい。『うまい』楽しい。ウイズの作ったシチューうまかった。だから……もつというんなもの食べたい……ダメか？」

「かかつ、結構結構！ いいじゃあねえか。どんどん食え。遠慮せず食え。人界にやまだまだうめえもんが溢れておるぞ。楽しみが尽きんな？ かかかつ」

「……うんー！」

綻ぶように笑顔になる。そこには一匙分の安堵も含まれた。

妙な知識とその偏りを除けば、この娘は実に素直で。なるほど、その心根は幼子と何も変わらない。

やりたいことをやるのに、本来己の許しなど得ずとも良いのだ。だのにこうして、一つ一つを尋ね、考え、確かめようとするのは、この

者が他者という存在を認め、また優しくあろうとする故か。

「ならば、まあ、心配要らんか」

「？」

「ああ、お前さんと会わせたい者らがおってな。差し当たりそこに三人ばかり」

ガタガタと後ろ二間ほどの距離を隔てて尾いてくる看板を親指で示す。看板の出所であるらしいパン屋はどうに遥か向こうなのだが。

「敵か？ 殺すか？」

殺気も織り交ぜず、真実氷雪のように冷たく冬の娘は言つてのける。

「剣呑剣呑。安心しな、敵じゃあねえ」

「そうか」

「あのちっこい娘は一度冬山で見たろう。どうやらお前さんのことが気になるらしいぜ」

「……敵意。怒り。オレだけじゃなくジंकロウにも向いてる。やっぱり敵？」

「騒々しいが味方だよ。懐こい仔犬も初めて見る者には吠えて掛かる。そういうあれだ」

「？ そうなのか」

「そうなのさ。ああ、そんなもんさ」

買い食いをしながら露店を眺め、時折興味を惹かれた店に立ち寄ってはまたそぞろ歩く。

まるでそれはいつかの自分とジंकロウだった。

「……」

看板の裏で、ふと肩が落ちる。紛れもなく怒りで燃え上がった感情の火が萎む心地がした。

「これ、このまま行くとギルドに着くよ」

隣で同じように前方を覗うリーンが言った。

その言葉通り、ジंकロウと異国風の女性は冒険者ギルドに向かっているらしい。

そうして程なくギルドの表玄関に到着した。

青空市で調達（強奪）した隠れ蓑の看板を捨てて、路地の物陰に潜む。ジंकロウと女の人は扉の前で二、三何か言葉を交わすと。

「えっ」

その場に女性を残して、ジंकロウはどこかへと歩き去ってしまった。

「ど、どうでしょう……?」

「え!? うーん。とりあえず、二手に別れる……?」

「いやまだ追っかける気かよ」

ダスト（だったつけ）のぼやきをリーン共々無視して、二人でうんうんと悩む。

あの女性の正体を探りたいのは山々なのだが、肝心のジंकロウがないのでは意味が薄い。第一に知りたいのは何を置いても二人の関係なのだから。

「だあー! うだうだめんどくつせーなあ! 遠征帰りで俺は疲れてんだよ! もう帰って酒飲んで寝たいの! いい? ダストさんはもう帰っていいよね!」

「ダストうつさい! はいはい帰りたいきや帰れば! てかなんで付いて来てんのよ頼んでもないのに」

「尾行の邪魔なので早くどっか行ってください。爆裂させますか?」

吹き飛ばされますか? それとも消・し・ズ・ミが御所望ですか?」

「はいすんませんすーぐ立ち去りまーす」

「ところで、一体どこまで遠出したんだい」

「ああ? 王都近くの森だよ。あの辺りはゴブリンなんか群で隠れて都に攻めて来っから。依頼自体は初級レベルでも報酬はうまうま……あん?」

「ふえ?」

「えっ」

すぐ背後から差し込まれた声にはつととして振り返る。聞き馴れた

ものだ。しかし、それがここにあるということが不味いのだ。
そうした悲喜交々をはつきりさせる間もなく、そこ立つ人物の笑み
を見上げた。

ジンクロウは手にした紙袋を差し出して。

「どれ、お一ついかがかな」

46話 嘘も方便と申しますれば

ギルド酒場の長机を、常の顔ぶれに一人加えて囲む。ギルドまで同道していたダストは早々に疇へと引き上げていた。

その面々が、皆一様に焼き立てのワッフルを食んでいるのが面白いというか異質というか。

ギルドを訪れている他の冒険者やギルド職員の怖々とした視線を見るに放たれる気配が後者であることは疑いもない。

食事をしているのだから口数がそちらへと割かれることは何ら不思議ではないが、この場に居合わせてそろそろ四半刻。この人数が無言を貫く様は、なるほど言い訳の余地もなく異様であろう。

最初に口を開いたのは、やはりというか、機微に聡い少年であった。

「……えー、あー、なんなのこの空気」

「その原因について今からその下手人に尋問するところです」

カズのおそろおそろといった問いに、さながら拷問役せめどいのようにめぐみんが応えを寄越した。

そうして同時に二対の猫目から鋭い視線が突き刺さってくる。めぐみん、そして久方ぶりに顔を合わせた魔法使いの娘リーンから。

卓に頬杖を突いたりリーの顔は、ワッフルを食べている最中も、平らげた後も、常にこちらを向いたままだ。然りながら常の快活な表情は鳴りを潜め、目は細められ口は真一文字に結び不満不機嫌も露わな。

「どうかね。もう一人の下手人が見当たらないんですけど?」

「それです。一体何処に匿ったんですか。まずはそこから吐いてもらいますよジंकクロウ」

もう一人。それは言うまでもなく、かの冬の娘子のことであろう。

白銀の髪、純白の着流しを纏った美しき女生は今もなお己の隣に……居らぬ。我らの後を尾けてきためぐみんらを悪戯に出し抜いた隙に、女は姿を眩ませた。というか己が眩ますよう冬のに言い含めた訳だが。

では、かの冬の精霊殿が今どこに坐わすかと言えば――

「ところでジंकロウ。さつきから気になってたんすけど、その狐はどしたん」

「先夕、家を訪ねて来おってな。気が合うたので連れてくる」
「なんじゃそりゃ」

青みを帯びた白の被毛。炎のように豊かに揺らめく尻尾。狗に連なる細つそりとした頤おとがい。

白狐びやくこに姿を変えて冬のは己の膝で丸くなっている。

「あんたの家動物ばつか増えてくなくなあ……まともなのは少ないけど」

「お喋りな馬つころを除けりや皆可愛いもんだと思うがねえ」

「ジंकロウ！ 話を逸らさないでください！」

「そうだよジंकロウ！ でも後でちよつと撫でさせて！」

「あつずるい！ 私も！ 私にも触らせてください！」

この美麗な毛並みが極上の触り心地であることは一目で知れるというもの。当人が許すなら好きにすればいい。

撫でるも擦るも構わぬ故、ついでにこの詰問刑をご勘弁願いたいのだが。

「それとこれとは話が別」

「です」

この問屋は実に働き者であつた。ぞんざいな卸しなど断じて許さぬと。

「だそうっすけどー、あんたまた何やらかしたんだよ」

「まったく。何をすればこんな責め苛むような好い、悦い視線に晒されるのだ羨ましい」

「ジंकロウ、ワツフルもう無いのー？」

「一人一個だよアクア嬢。いやあ待て待て。やらかしたたあ人聞きの悪い。このシノギ・ジंकロウ、人倫ひとのみちに背くような悪因悪行を働いた

覚えはとんとござらん。大御神と御仏に誓つて潔白よ。なあアクア嬢？」

「ワツフルくれないなら知ーらない」

「おいおい聞いたかカズ。神も仏もありやしねえ」

「そんなことは異世界よこに着いたその瞬間から知つてたわ。女神？ い

ねえよんなもん」

「存在否定!?! いるでしょ! ころ! ほら目の前に! 麗しくも清らかな! 水の? ほらみいずうのお?」

「はいはい水芸の神ね。解ってる分かってる」

「ちつがうわよ!?!」

その時、木製の卓面きつくりが強かに叩かれた。

「誤魔化さないでよ!!」

「誤魔化さないでください!!」

「ヒエツ」

「うひゃあ!?! ごめんなさい女神とか調子乗りましたあ! だからめぐみんもリーンも怒らないでよお!」

「くふう→ 理不尽な怒声とはやはり堪らないなっ……!」

己の代わりに何故かカズマとアクアが震え上がり、ダクネスは興奮に身震いした。いざや勢い付かんとした娘ら二人が途端に微妙な顔をする。

この徒党の調子つばずれは今に始まったことではないが、ほんに毒気を溜め難いことこの上もない。

気の取り直しと、めぐみんが咳払いを一つ吐く。

「単刀直入に聞きます。あの人はジンクロウの何なんですか?」

「それ」

便乗する形でリーンが頷く。

「私もアクセルに居着いて長いけど、あんな目立つ人今まで見たことないよ。昔からの知り合い? 最近この街に来たの? 友達……な訳ないよね。こ、恋人……? それともまさかお妾?!」

「本妻が居らんに妾も何も無かろう」

「ま、まあ、それもそっか……」

「じゃあなんなんですか!?! ただの知り合いならあんな、あ、あんな気安く触つ、身を寄せ合うようなこと……」

「なんだよまあた女性関係ですかー。ウイズに続いてまあた……ジンクロウさんは大っ層おモテになりますねえ……!!」

「かかかつ、おいおいそんなに褒めるない。照れつちまう」

「褒めてねえよ!？」

カズマの嫌味と戯れ合っている間も、娘子ら二人の視線は依然変わりなくつんつんと両頬を突く。

あたかも悋気の火を燃やすようにも見える様。しかし、その火勢はむしろ、内に宿る不安げな色を押し隠す為のものに思えてならなかった。幼子どうこうと他人を扱えた身分ではない。己自身がリーンを頑是無いと、めぐみんを童のようだと、そう口にしておきながら、要らぬ憂慮を与えたでは世話はない。様もない。

「いや、すまん。きちんと話を通しておればよかつたな。報せを怠つた己の手落ちよ。めぐ坊には、こりや二度目になるか。誠、申し訳ない」

面を伏せて詫び言を添える。

「い、いえ……この前のことはもう……」

「……私が帰ってきたのは今日も今日だし、事前に連絡しろとか……流石にそこまで無茶なこと言わないよ……ぶっちゃけ、そんなことしてもらう義理も、ないし……むう」

めぐみんはしゅんと肩を落とした。以前の筆不精に関しては徹頭徹尾己に非があるように、むしろ気を沈ませてしまったか。

リーンはリーンで何やら膨れっ面を作り拗ねている。また別口の由縁であるらしい。

「つまりあれか？ ジンククロウがまた知らない女の子侍らせてたからそれが誰か問い質そうとしてる、と」

「へー、私達の知らない人なの？ カズマとは比べ物にならないプレイボーイっぷりねー。ねえどんな気持ちカズマ？ 同じ転生者として今どんな気持ち？」

「うるっさいわ下衆の女神い！ ああはいはいはい羨ましいわ畜生めえ!! 今度ナンパのコツおせえてジンククロウ先生!!」

「ジンククロウ、お前がそこらの軟派な輩と同じだとは思わんが、何事にも限度というものがある……めぐみんを不安がらせるなら、私の性癖を一旦置いてこの拳を振るうに吝かではないぞ」

「おお……ダクネスが、あのダクネスが性癖を置くとか言ってます」

「明日は槍が降るな。そしてそこに変態が一人跳び込むんだろうな」
「ダクネス大丈夫？ 熱があるならピュリフイケーションかけたげよっか？」

「んなつ酷いぞ皆!？」

「日頃の行いだなあダー公。善因善果、悪因悪果、因果に応報、これ世の法理とくら。いやこの世はまっことよく出来ておる。はっはっはっはっは」

「笑いごとじゃないぞジंकロウ!? そしてお前が笑っていいことでもないぞジंकロウ!？」

「かかつ、いやすまんすまん」

「さても言い訳を考えねばなるまい。相手方が納得出来る、それもう出来の良い言い訳を。」

「あれは、古い友人の娘御でな。訳あつて家で預かることとなつた」

「友達の、娘さん、ですか……?？」

「……ふーん」

捻り出したその応えに、けれど娘らはやはり納得が行かぬ様子。それもその筈、一度着いた血気の火を鎮めるには些か理合いが不足であろう。

ならば、と。

目を伏せ、声音を落とす。

「父親は居らず、母御の大手一つで育てられたそうだが……近く、瘡おこりを患われてな。そのまま、だ……」

「あつ……そう、なんですか……」

「ご、ごめんジंकロウ! 私達……」

「いやいや、お前さん達が気に病む必要はない。天命、否、自然しねんのことよ……誰にもどうにもできはせん」

首を左右して、瞑目する。

重い沈黙が卓上を席卷した。

その重苦しさをしかし、恐れず口を開いたのはダクネスだった。

「……お悔みを申し上げる。顔も知らない、一騎士に過ぎぬ身だが」
「代わって、頂戴致す」

両手を握り合わせ、ダクネスはその場で祈りを上げた。
それを一礼を以て拝する。

すると、他の面々もおずおずとダクネスに倣い手を合わせた。子供らの心根の優しさが今再び感じ入られようというもの。

「そうした所以でな。あの娘は家の住人と相成った。流星に、母御の代わりなど務まるまいが……」

ふと目をやれば、膝上から赤い目がこちらを見上げている。次の己の言葉を待っている。静かな目が。

「父親の真似事くらいは、努めてみようかと思う。とりあえずは、それで勘弁しとくれ。な?」

「? ジンクロウ?」

「ああいやいや、こつちのことだ。かかっ」

「う、おお……ふ、ふわっふわ、ふわふわです」

「か、可愛いっ」

「う、うちのちよむすけだって負けてません! しかしこのモフモフは……反則ですっ」

御白洲の取り調べも無事終えて、娘子らは約束の通り、白狐の豊かな被毛を思う存分指先で梳くしけずっている。

「へ、へえ、た、確かにまあまあのモフモフ具合ね。ちよつと私にも触らせ……」

『ガウツツ』

「ヒエツツツツ……!!? すみませんもうしませんお許してくださいお見逃してくださいごめんなさいいいい」

「もう、アクアは。乱暴にしようとするからですよ……というかなんで土下座までしてるんですか」

「はっ!? な、なんでかしら。体と本能が勝手に全服従のポーズを取れと囁いて……っ」

「あははは、随分と大袈裟だなアクア」
「??？」

机一つを向かいに、卓に肘を預けながらそんな光景に微笑む。
ふと、隣に座る少年が、じと、とこちらを睨んでいた。

「なんだいカズ。何か言いたそうだな」

「まあ、二つくらい？」

「遠慮すんな。言ってみな」

「じゃ一つ目。さっきの話、どこまで本当なんだよ」

こちらを見ず、今度は狐を見詰めながらに少年は言った。

「そらあ無論のこと。一から十まで全部だとも。ああ、だが友人ってなあちと言い過ぎたかもしれん。なんせ親御が『山』とあっては、どうしたとて己の正しく岡惚れ、もとい片思いにしかならんのだよ」

「……………瘡がどうこうっていうのは？」

「今の冬山は雪と寒気に覆われておる。春が来るまでそのままであろうな」

「……………」

少年は、それはそれは大きな、それはそれは深い溜息を落とした。

「いやさあ、ちよつと予想はしてたよ？ タイミング的にも。鶴の恩返しの展開は」

「気が合うな、カズ」

「だからってこれはさー。ちよつと安易？ っていうかー。ヒロインの供給過多っていうかー。設定の盛り過ぎで読者が半笑いするやつっていうかー」

椅子の背にぐったりともたれ掛かり、少年は天井を仰ぎながら滔々とぼやいた。

どういう意味やら一分と解らんが、何やら根深い諸々を窺える。

少年はこつそりと、机の陰から指を差し、声を潜めて問うた。

「…………冬將軍？」

「冬將軍」

鸚鵡返しが、しかしこれ以上なく簡便に意図は通じたらう。

そんな聡い少年と今一度、苦笑を突き合わせた。

47話 女神も十色

「屁理屈を捏ねるんならほれ、この前の話の続きだ」

「魔王軍関係者がどうこう……つてまたかよ」

「そうとも。まただよ」

「はーい、お茶お二つ。どうぞ」

「おう、あんがとよ」

ギルド酒場の女給が盆から湯呑を二つ、卓に置く。

少年共々に煎茶を啜って人心地。

「魔物ならぬ精霊。なれどまた人外……と、まあそこまで大仰に構えておる訳じゃあねえ。ん……馬鹿正直に正体を明かして騒動の種が吹くなあ面倒なんだな」

人ならぬモノを飼う異端者……そのように目を付けられないとも限らぬ。

「ああ、騒ぐだろうな。アクア辺りが特にぴーちくぱーちく」

「それにお前さんは自ずから察したからよいが、あの女、あの狐こそ冬將軍也——などと突拍子もねえ話、そうそう信じられまい」

「はっ確かに。んー、なら実際に冬將軍の姿になればいいんじゃない？

自由に化けられるんだろ？」

「こんな冒険者共の巣窟でか？」

「……無理か。じゃあ場所を変えてジंकクロウの家とか……ああ」

合点が行ったとばかり、少年が間延びした声を漏らす。

「……つまりさっきの口八丁、一から十まで全部その場凌ぎの時間稼ぎかよ」

「おうとも。孤児を憐れんで……なんてなあ嘘八百にしても性質が悪い。娘子らには後日種を明かすさ」

再び横つ面を睨め付けられている。先程よりも今少し鋭く、真っ直ぐな責めと咎めの針。

「……あんたつて、結構あくどいよな」

「年の業よ。真似してくれるな？」

少年は鼻息を一吹きして、ふと口を歪める。

「まあ？ 確かに、騒動の種ってやつは俺らかもしないけどさ」
「ん？」

「それってつまり、ジंकクロウが種を育ててる土ってことだよな」
「……」

返す言葉は、生憎と喉元に備えもなく。

それは見事な、清々しいほど得意げな笑みを少年は浮かべた。

「これ、一本取ったよな俺？」

「生言いやがって、こんの小僧つ子が……くつ、ふっはは」
「ははは！」

一頻り面突き合わせて笑い、茶を飲み干した。

「さて、暫く離れる」

「え？ どこに？」

「すぐそこだ。すまんがあの子らを見ていてくれ」

「……りよーかい。お土産よろしくー」

「へっ」

軽口に送られ、席を立つ。

厨房では今晚の仕込みであろう、料理人達が忙しなく動き回っている。こちらを見付けた親仁が金杓子を挙げて挨拶を寄越してきたので、こちらも片手を返す。

障りになる前に、料理人達の横合いを摺り抜けて勝手口を出た。

酒場の裏手は路地を挟んですぐに、ギルドとは部署を分けた政に關わる庁舎が建っている。三階分の煉瓦造りの壁が空の半分ばかりを覆い隠し、日当りは頗る悪い。

そうして、勝手口から降りる階段の半ば辺りに腰を下ろした。

「……日陰はやはり冷えるな」

冬本番に足を掛け始めた今日この頃、珍しい陽気とはいえ場所が悪い。
い。

一献傾けられるならば、寒空だろうが存分楽しんで見せようが。しかし。
かし。

「どうする？ 中で話すか」

「あー私の方は気にしないで。大丈夫、手短に済ませるよ」

軽やかに言つて、真実軽業師の如き身の熟しで屋根から降ってくる人、一人。

目に飛び込むは銀、項を隠すまでの白銀しろがねの髪。冬の娘のそれとはまた風合いを異にする、夏の雲海を思わせる清々しい純白色。

「しかしエリス嬢よ、その格好はなんとかならんのか。寒々しいったらありやしねえ」

冒険者が言うところの盗賊職であるこの少女の装いは平素からして軽く、薄い。隠密行動を旨とする故の致し方ない措置なのだろう。上は胸を覆う当て布紛い、下は下腹と腿の付け根を隠す股引きのようなもの。流石にそれのみということではなく、その上から分厚い外套を羽織り襟巻きを首に掛けてはいる。

だからとてやはりどうしようもなく、見るほどに身震いする軽装である。

「いやあははは、職業柄どうしてもね。衣擦れの音とか致命的だからさ」

「かつ、盗人稼業も楽しやあねえな」

「もお！ だから盗人はやめてったら。シーフ！ 由緒正しい冒険者盗賊！」

こちらの軽口にも律儀に発奮してくれる娘に微笑む。

軽口ついでに。

「その盗賊殿のお気に召されるような品が、手前の侘び住まいなぞにありましたかな？」

「うっ……」

途端に目を泳がせた娘は、そのままずっと己の隣の段に腰かけた。

「……やっぱり気付いてたんだ」

「前も言つたらう。そのスキルとやら、便利ではあろうがちと利きが良すぎらあ。叢の合間にぽっかりと穴が空いておったわ」

ここ数日に亘り、あの小庵の周囲に潜む気配があつた。それも以前に覚えのあつた異常な、作られた静謐の技。

果たしてやはり、正体はこの女子である。

「し、しよーがなかったんだよ。グリフォン相手じゃスキルでも使わないとすぐに気付かれちゃうし……いや、いやいや、やつぱり『潜伏』状態の盗賊を見付けられる貴方がおかしいんだってば」

「人間を始めてからこつち、随分永いんでな。かかつ……こいつもまあ、ただの年の業よ」

「……………」

そうして漏らした軽口、もとい戯言には、しかし。

どこか、寂しげな表情でクリスは口を噤んだ。

そうして一、二、吐息の間。

「……何か、思い出せましたか」

「さて、一向に。物の扱い方だの名前だの、ああそれと減らず口はぽんぽんと浮かびやがるんだが。肝心要、己がどこの誰で、何をしてきたのかどう生きてきたのか、どう死んだか。その辺りはほとんど、思い出されぬ」

都合の良い記憶喪失もあつたものだ。あるいは、都合の悪い記憶を必死に忘却しようとしているのか。

——だが、もう遅い。僅かにだが馬脚は覗いた。

あの首無し騎士との斬り合いで、己の本性の一片は確実に露見した。殺人刀使い、刃金狂い、その妄執が。

……まあ、今更驚くべきことでもなかったが。

そこまで考え、ふ、と笑む。傍らの、ややも俯く娘子に目をやる。

「何かと心配をかける。すまねえな」

「いえ、私には、送り出した責任がありますから……なんて、女神エリスなら言うんじゃないかな？」

最後にお道化て娘は笑った。

「でもまっ、心配ついでに言うとき、貴方の家はちよつと騒がし過ぎるね」

「そうかい？　人二人に獣が二頭、それと精霊一柱。少々賑やかだが

——」

「違うでしょ。獣は一頭、精霊一柱と……人は貴方一人だけ」

突如、声色が変わった。今までそこにあった暖かみがあたかも喪失されたが如く。その質感、硬く冷たく、鋼めいて。

「あとの二つは人でも獣でもない。魔なるモノ。この世の正理を冒したアンデッドです。生命の流れに出来た淀み。あつてはならない存在です」

「そいつあえらく手厳しいな」

そうして、瞬き一つしない紫水晶の、その瞳を見返す。

暫時の間、互いに視線を向かわせ合った。先に逸らしたのは、クリス。

呆れ、そして諦めの風合いを滲ませ、吐息を娘は零す。

「……貴方の寛容さは美德です。諸人を差別区別なく受け入れるその度量は尊敬に値します」

「そう手放しに褒められちゃ面映ゆいねえ」

「しかし、この世には守らなければならない秩序ルールがあります。彼らは生ける屍イリーガル。間違いは正さなければいけない」

厳然と娘は言い置いた。動かざる理、何よりも重き大事と。

神の法。なるほどそれは重かろう。なにせそれこそは世界一個を形作る礎なれば。

なれば……なれど。

「人が横道に入るのは、それなりの訳があるものよ」

「……………」

「許せ、とは言わん。それこそ己が言えた義理ではないものでな」

口を歪ませ、笑う。己自身を嗤う。

そして今もう一つ、不遜な願いを重ねた。

「己の寛容を買ってくださいさるといふ。ならば今少し、僅かばかり、御身の懐を空けては頂けまいか」

「……理解は、せねばと思えます」

娘は、今度はひどく悲しげに目を伏せた。

「人が魔物に身を墮とすのは、私利私欲や背信のみに依らないのだと……己むに己まれぬ多くの事柄がその道へ赴かせてしまうのだと……そう、仰る通りですね。寛容は美德であり功德。それを危うく、

忘れるところでした……」

両の手を合わせ、娘は瞑目した。それはまさしく、女神が祈り、祝福をこの世の何処かへと賜う様。

日陰の路地に一筋、陽光が差した。それは白銀系の少女の髪を洗い、輝かせる。

なんともはや珍事、もといそれが神秘であろうや。

「けれど、ジंकクロウさん。一つだけ、絶対に、譲れない、許されないことがあります」

目を開き、両手を開き、こちらを向いてクリスが微笑む。優しげな表情が娘の顔を彩っている。

だのに、どうしてか。どうしたことか。この、薄ら寒さは。

「貴方がどんなに慈悲深く、度量広き人であつても、それが尊ぶべき性質であつたとしても——悪魔だけは例外です」

「ほう、悪魔」

「ええ、神の愛に背を向け、そして人々を背信へと誘う悪しき存在。奴輩こそまさしく存在してはならない存在、と言えるでしょう。リッチー、デユラハン、吸血鬼や人狼……人から魔物への転生てんしやうをかのモノ共は好んで唆します。そうすることで生まれ、衝き動かされる人の心、情念を餌とする為に……穢らわしい」

無論のこと実際にはやらぬものの、娘はそのまま唾でも吐き捨てそうな様相で言い捨てた。

「いいですかジंकクロウさん。たとえどんなことがあると、どんな誤りがあるうとも、悪魔とだけは絶対に、絶対に、絶対に関わり合つてはいけません。親交など持つてしまったなら、貴方の魂が穢されてしまう。あつてはならぬことです。あつてはならないのです。お解りいただけますねジंकクロウさん」

真実、体積を増したかのような威圧感を醸し出しながら娘の顔が迫る。迫り来る。

両手でその肩を支える。そうしなければ押し潰されると、半ば危惧して。

「どうどうわかったわかった。もう十分に。だから落ち着きな。な？

瞬きせんと目に悪いぜ？」

「……………ふう、すみません。つい、熱くなっちゃってしまっ」

「そのようで」

吐息一つで神威を収め、ようやくクリスに戻った娘は、不意に両手を打った。閃いたとばかりに。

「そうです！ ジンククロウさんも是非エリス教会の門戸を叩いてみてはどうでしょう！」

「おおっ？ またぞろどうした」

「いえ、いえ、なにも信仰を持つて欲しいなんて言いません。強要などそれこそ以ての外です。ただ信じて頂きたいのです。ただ願って頂きたいのです。自分自身の幸福を、そしてほんの僅かでもいい、貴方の隣に在る人の幸福を。一日に一度、いえ七日に一度でも、気付いたその時、その瞬間に、ほんの一瞬でも祈り願えば、世界は少しだけより良くなれます。誰であろう人の心が、そうするのです。さすれば神はその全権能で人々に報い、応えてみせます。ジンククロウさんの迷える魂にもきつと、手を差し伸べたいと神は思っております。ええ本当に」

なにやら勢い込んでその瞳は爛々と輝いていた。ある意味で先程よりも威圧感は強かったちよつとおそろしかった。

「そらまあ、有り難えこつて」

「あ、ふふっ、そんなお礼だなんて……………照れちやいますよおお！」

「ははは……………」

「それはともかくさあジンククロウさんも！ 是非是非エリス教会にお越しください！ ね！ 今すぐにはみゆっ」

二の句を上げようとする口元に、そつとワツフルを押し当てた。

「ま、ま、ま、そいつあまたの機会に取って置かせてもらおう」

「……………むう」

それは見事な不満顔でクリスはむくれた。むくれ面のまま、出されたワツフルに噛り付く。

はむはむと食べながら拗ねた瞳で己を見詰めている。

「……………教会の扉はいつでも開いてるよ。いつでも遊びに来ていいんだ

からね」

「わかったわかった。また今度焼き菓子でも供えに行こう」

「ん、んむ、んっ……約束だよ！」

結局、クリスは己の手から器用にワツフルを平らげた。

そうしてすつくと立ち上がり、一蹴りで元来た屋根へと駆け上がる。

ふと、ひよっこり屋根の上から顔だけ覗かせるや。

「約束だからね！」

「あいよ」

そのまま訪れた時同様の軽やかさで、盗賊の娘は去っていった。

「なにやら、アクア嬢が可愛く思えちまった……」

これぞまさしく女子の神秘。

そう、愚昧なことを考えた。

48話 教えることが山とある

明くる日。

先達てカズマにも言っていた通り、めぐみんとリーンに事のあらま
しを語って聞かせようと宅へ招いたのだが。

『だ、だって……ここんとこ遠征とかで忙しくて、寒くなってきたし厚
着で、ほとんど、お手入れとかいろいろ……女子にはいろいろあるの
!!』

いろいろあるらしい。この上に問いを重ねるのは野暮というより
下衆のなんとやらであろう。

沸騰するほどに赤面したリーンにそうして追い払われてしまった。

ともかくにも、都合の付いためぐみんと市で買い食いなどしなが
ら庵へ赴き、話を始めて小一時間ほど経ったろうか。

「……」

「……」

己はどうか居間に正座し、目の前に仁王立つ娘子に見下ろされ
ている。

薄曇りの空は、障子紙越しにも白く、ともすれば灰の色味を持つ。
晴れ間は今少し遠く、むしろ暗雲の兆しこそ近い。そう、まるで今こ
の場この時の様相で。

囲炉裏の炭が小さく爆ぜた。

「要約すると、嘘を吐いたわけですね」

「いや、一から十まで真っ赤な嘘というわけではなくてな」

「う・そ・を、吐いたんですね?」

「言葉の綾と言えぬでも——や、や、まっこと仰る通りで」

俄かに膨れ上がった怒気が陽炎のように娘の背中から立ち昇った。

慙懃無礼を自覚する身とはいえ、ここに戯言を放って命が足るとは
思わぬ。

めぐみんは瞑目し、鼻から大きく息を吸い込みそれは深く吐き出し
た。

「……ジंकクロウ、私はなにも嘘を吐いたことに怒っているわけではないです。あの場で厳密な説明をするのが難しかったのは理解できません」

「へい、御配慮有り難く存じませう」

「しかあし」

我ながらカズマにも負けず劣らぬ揉み手愛想笑いを、めぐみんは一睨みで蹴り払った。

「冬將軍が命を助けられた恩返しに家を訪ねてきた……ここまではいいでしょう。ここまでは」

「うむ、ならばどうか。その先も目ごぼし下さるといふのは」

「ごぼしません」

めぐみんは不意に、土間に向かって指を差した。

「あんな美女に姿を変える必要がありませんか!? あ、あまつさえ一つ屋根の下二人で暮らすなんて……破廉恥です！ 不潔です！」

土間では女が二人、せつせと何かを拵えている。

今日も今日とて白く潔らかな冬の乙女と、近頃はこの庵に滅法出入りの増えたウイズである。

さて、娘の言い草はあまりにも潔癖……などとは、揶揄できまい。男女七歳にして席を同じうせずの故事が言い表すのは素朴な分別の尊さであつて、清廉たれなどという御仕着せの文句ではないのだから。

めぐみんの言は正しい。こちらには返す言葉もない。

ないので。

折に触れて寝泊りすることの多くなつたウイズのことは、触れず、黙っていた方が為になるだろう。

「お茶が入りましたよ」

間延びしたウイズの声を背に受ける。けれど、先に盆を持って居間に上がったのは冬の娘。

盆の上には湯気を立てる湯呑と、小皿が二つ。

膳を使うほどのこともなからうと、炉縁にそれぞれをそつと置く。皿には一つずつ赤みを帯びた黒い丸、おはぎが載っていた。

今朝から煮炊いていた小豆はこれの為であったか。

「ジンクロウ、食べて」

「ん？ おお、では有り難く頂こう。めぐ坊もほれ、冷めぬ内に」

「……しようがないですね。ですがまだ話は終わっていませんから」

ぷりぷりとしながらもめぐみんは素直に莫塵に腰を下ろす。手を合わせ、己は素手で、めぐみんは行儀よく突き匙を使った。

掌に収まるほどの大きさ、それをがぶりと半分ばかり齧り取る。存分に噛み締め味わうことしばし。その間、冬の娘の視線は己の顔を刺したまま片時も離れることはなかった。

「んくッ！ おいっしいです！ 優しい甘さの粒餡に包まれたもち米がまたもっちゃんもっちゃん……んふふうく、こんなのいくらでも食べちゃいますよ！」

「うむ、確かに。こいつあ旨めえや」

「ホントか？」

「おうとも」

決して移ろい豊かとは言えぬ娘子の表情かおにしかし、淡い不安と安堵が過るのを見た。

「おめえさんが作ってくれたのか」

「うん、ウイズが教えてくれた。ウイズは上手だって言ってくれた。でも……ジンクロウ、喜んでくれるか分からなかった。だから……」
「ふふっ、そうかい。いや大したもんだ。上々だよ。いやいや上々のも一つ上と言ったところだ」

最後の半分を口に放り、頻りに頷きながら味わう。

「ううむ旨めえ。やあ旨かったあ。こりやあ初めてとはとても思えん！ 結構な馳走であった。ありがとうよ」

「……うん」

か細くそう応えると、途端、白い頬に薄紅が差す。なんとも愛らしい照れと恥じらいだった。

ふと上目遣いに冬のは呟いた。

「じゃあ、ん」

「ん？」

「ん……撫でて」

そう言って俯き、頭を寄せてくる。はらりと小滝のように娘の純白の髪が己の膝に垂れ落ちる。形の良い旋毛がこちらを向いていた。

「よしよし」

「……んふふっ」

髪を洗うように梳かすと、喉を鳴らすように冬の子は笑った。絶世の、傾国の、そんな詞が相応しかろう麗しき見目に合わぬ幼さ。目を細めて喜ぶ様はまるきり平素の仔狐であった。

それがまたなんとも愛いのだ。困ったことに。

「ぬう……ぬうんぬうんぬうん！」

「ん？ おや、こいつあなんの鳴き声だー？」

「むう〜！」

素知らぬ風で言う途端、冬の子とは反対の方からずいといと小さな頭がぶつかってきた。

めぐみんはその頭をぐりぐりと己の肩口に擦り付けた。それでは足りぬとばかりに両の拳で、己の胸といわず背中といわずぽかぽか殴り付けてくる。

「くう案の定です！ でれっでれじゃないですか！ 人が見ている前で恥ずかしげもなくうぬぐぐぐ〜！」

「痛ててっ、いやすまんすまん。こう素直に甘えられっちまうとつい、な？」

「これ、ダメか？」

冬のはそう言って首を傾げた。

「ダメですー！」

そして間髪入れずめぐみんが否やを叩き付けた。

「駄目ではないとも。だがまあ、時と場を選ばんとあたたたっ、ふっふふ！ このように、叱られちまうこともあるかもしれん。はははっ」

「笑い事じゃないです！ ああもお笑わないで！ ぬうー！！」

「あらあら」

顔を赤くして怒るめぐみんの姿にウィズは微笑んだ。

「ふふふ、冬將軍さんにヤキモチ焼いちやったんですねえ。めぐみん

さんつたら可愛い」

「だ、ただ誰がヤキモチなんか!!」

吠えかかるめぐみんを、慈愛の籠った目で迎えるウイズは実に聖母然としていた……その口元は粒餡で黒々と汚れていたが。

出会った当初とは打って変わって、この女からは、こここのところ頓とみに遠慮というものが失われたような気がする。

いや食事を伴にするのは構わぬ。調理を任せているのだから摘み食いなど幾らでも結構。まあ、この細やかな行儀の悪さも愛嬌と思えば面白い。

「ウイズよ。小豆は体に良いが、餡子ばかり食うておると太るぞ」

「ぐはっ……!?!」

まるで心の臓を抉られたかのような喘鳴を上げ、ウイズはその場に倒れ伏した。

この様子からして、ほとんど一人で平らげたのだろう。健啖健啖。

「ジंकクロウは時々びっくりするくらい無慈悲ですね……と、とにかく! 男女七歳にして同衾せずです! 適切な! 距離というものが! あるでしょう!」

「どーきん?」

「かかかっ! そりや男女で同衾は不味かろうな! て、痛て、いてえいてえ。いやいや仰る通り。ほんにほんに。だから、な? そろそろ堪忍しとくれいめぐ坊」

「ジंकクロウ、どーきんってなに?」

肩だ背中だの叩かれるなら快いばかりであろうが、いい具合に肋骨や脇腹に拳骨が刺さる刺さる。

傍らで素朴な疑問を呟く娘に曖昧な笑みだけ返す。誤魔化したところ、この精霊殿には何もかもお見通しなのだから。

降参の体で両手を挙げる。するとようやく、めぐみんは攻撃の手を緩めた。緩めただけであって相変わらずばかばかと殴られ続けているが。

「……許して欲しいですか」

「おおそりやあ勿論。お頼み申す。これ、この通り」

「どーきん……」

平身低頭に腰を折ると、遂に娘の手は止んだ。

「条件があります」

「へい、なんなりと」

「！」

ふと顔を上げ娘子を見やると、そこにはにんまりとした人の悪い笑みがあった。我が意を得たりというか、思惑成就せりというか。

めぐみんは満を持して言った。

「ならばいざ征かん！ 爆裂道中——」

「どーきんって交尾のことだなジंकクロウ」

言つて、手を打つて冬の娘は深々得心して頷いた。

「オレと交尾しよう、ジंकクロウ」

「……………」

小首を傾げて、白銀の長い睫毛がぱちくりと上下する。

紅い娘は赤熱して頭から蒸気を上げた。そうして五つほど拍を刻んだ頃。

庵の外へ、林の其此処へ、娘の怒声が轟いた。

49話 娘のご機嫌取りも楽じゃあない

夜から明け方にかけて降っていた雪はギルドを出る頃には止んでいた。山から程近いこの辺りも、天気が落ち着いてくれたのは行幸か、それともとんだ不幸か。

この時節、人通りなど近隣を歩き来る商人くらいのものだろうか。轍も少ない雪道を、しかし連れ立って歩く変わり者が三人、ここに

「いざ征かん!! 爆裂道中膝栗毛!!」(take2)
「いざー」

拳を突き上げ、めぐみんが吼えた。

冬の娘も無表情のままそれに倣った。

白狼の毛皮を纏うめぐみんと蒼みを帯びた白の振袖姿の冬の子。並んで歩く姿はさながら姉妹か、親子のようだ。

「どこで覚えてきやがんだいそういう言葉をよ」

「カズマが教えてくれました! 特にひざくりという響きが実にカツコいいのです!」

意味など知らぬ癖に使い処は妙に的を射ている。

栗毛の馬の代わりにされるのは十中八九、己なのだから。

「……なにか文句がありますかジंकロウ?」

「いえいえ滅相もござんせん」

こちらの些細な問いにも、殊更に娘は噛み付いた。それを無体とは言うまい。なにせこの子の機嫌を損ねたのは誰であろうこの身ゆえ。

先日のお叱りから明けて本日。

冬の娘子の純心、もとい世間知らずを懇々説明すること丸一日。灼熱の如く怒れるめぐみんをどうにかこうにか宥め説き伏せ、夕餉に娘の好物をこれでもかと馳走してようやくその火勢を弱めたはよいもの。

めぐみん言うところの、許しを呉れてやる条件がつまるところそれだった。

『爆裂魔法を撃ちに行きますよ!!』

いつも通りであった。呆れが安堵に代わる程度には。出会ってより一切変わりなく、ともすれば一層前のめりに。

「元気がありませんねジंकロウ！ こんな爆裂日和にんですか！ シャキツとしてくださいシャキツと！」

「しゃきーん」

「へいへい」

「まったく、やっぱりたるんでますねジंकロウは……ほら！ フユノを見習ってください。この燃えるような爆裂熱を」

「ばくれつつ」

「かかっ、顔は随分と涼しげだがなあ。あん？ フユノ？」

「え？」

「ほいさ」

ふと耳慣れぬ響きに鸚鵡返す。

「だって、ジंकロウがそう呼んでたじゃないですか。フユノって」

めぐみんはそう言って、白銀の娘を指差した。

冬の……雪、あるいは冬そのものが姿容をとって立ち現れたのがかの者である。であれば、かの娘は冬という季節そのもの。冬を冠し、冬を渾名すは当然として呼ばわっておったが。

「フユノ……いい響きじゃねえか。おめえさんはどう思う」

問うこちらを冬の娘は瞬きして見返す。

娘が小首を傾げると、雪を纏った柳のように蒼白の髪が肩に垂れた。

「ジंकロウが呼びたいなら、そう呼べばいい」

「ならば決まりだ。フユノ。似合いの名を貰ったな。さ、めぐ坊に礼を言いな」

「うん。ありがとう」

「は？ えっ？ 今ので決まったんですか!? ちよちよつ、それならもつとイカす名前を考えますよ！ 紅魔族的ナウイハイセンスなやつを！ そうですね、たとえば……『びゅうびゅうカチコ』とかどうで——」

場所は小高い丘の上。

手付かすの新雪が白く眩い。そこからさらに遠くを見やれば、山を背にした雑木林が広がる。

「風上に陣取っている。すぐにも……そら、来たぞ」

林、草間に浮かぶその赤い光。それは眼だった。人に非ぬ、獣の眼光。

白狼。

以前に一度、相手取った覚えがある。あの折は金策の為とはいえ一人で少々無茶を押ししたが。

今回は手勢があり、なによりドでかい花火の隠し玉がある。

「むう、ここからだとよく見えませんね……林ごといつちやいましてよ
うか」

「これこれ、そいつ俺とフユノがしくじった時にしてくれい」

思い切りの良すぎる娘を諫める。隠れ蓑たる叢ごと吹き飛ばすというのもなるほど一手ではあるが、狼の敏速さ相手にはちと分が悪い。大半を逃げ散らすだけに終わるおそれもある。

なれば、そうさせぬよう仕向けるが我らの役処。

「フユノは左から回り込み狼共を追い立ててくれ。己は右から押し進み、挟み撃ちにする。原の中央まで引き込んだ後は即時退散。仕上げは頼むぜ、めぐ坊」

「うん」

「任せました。ふふふ、トドメの一撃こそは爆裂の誉れ！ ジンク
ロウも解ってますねえ、このこのく」

「くくつ、好物目の前にした途端上機嫌になりやがって」

「あたつ」

妙におじん臭い調子で肘鉄を呉れるめぐみん、その頭を小突く。

犬耳を戴く小さな頭を撫でながら、フユノへと振り返る。

「すまん。先陣を切らせることになる」

「別にいい」

言葉通り、何一つ気にした様子もなくその美しい無表情が頷く。雪上を高速で疾走……いや、滑走できるフユノとはどうしたとて足並みを揃えるのが難しい。折角の俊足を、こちらの鈍足に合わせ損なわせるのは避けたいところ。

「俺もおめえさんのように動けりゃあいいんだが。ま、贅沢は言えねえ——」

「下りなら、できる」

「あ？」

言うや、不意にフユノは掌を口元に添えた。

そうして、ふ、と。唇から静かに吐息する。まるで、偶さか掌中に乗ったタンポポの綿毛を風に踊らせるように。

されど踊ったのは、綿を纏った種子などではなく、凍てついた氷雪、風。氷った塵が逆巻き吹き遊び、遂には己の両足へと取り付いた。

めきめきと音を立てて氷が張っていく。空に満ちる水分と足下の雪を食らいながら。

十も数えぬ間にそれは終わった。それは完成していた。

革靴の底に、氷が纏わり付いている。細長い板きれのような形で、長く伸びた爪先の辺りがやや反り返っていた。

そり。

「なるほど、下駄そり轉そりつてえやつか」

「こういうのはスキー板っていうんですよ……でも、これ、すごい。全部氷で出来てるんですか？」

「うん。つよく作ったから、たぶんそんなに割れない」

魔法、というより精霊としての能力か。何れにせよ。

「大したもんだ。有り難く使わせてもらおう」

「ん」

示し合うほどの合図も要らず、目配せ一つしてフユノと二人、丘を滑り出した。

姿勢は低く、両足は揃える。それだけでこの身は一挙に疾風めいた速度を得る。眼下に遠く見えた雑木林が大きく、視界に広がる。

自然、その奥に潜むモノ共の姿も、今、瞭然と捉えた。

「Grrrrr……い！」

低く地を這うかの唸り。油脂を孕む生臭い息遣い。突き出た顎、剥かれる牙。

「Gaaa!!」

吠声はいせいが草木を震わせ、雪原に吸われ、沈む。それは号令だ。獣に非ぬこの身なれど、その意味を取り違えはしない。

曰く、敵を殺せと。

開戦の狼煙が上がった。叢の闇からあたかも今まさに生まれ出でたかの如く、白い狼達が飛び出してきた。

二手に別れたこちらに対して、先方の反応は実に素直だった。総数二十ばかりの狼の群は、ほぼ半々、二つの塊となって我らに襲い掛かった。

前方に三匹、同時強襲。こちらの喉、左足、右腕をそれぞれに狙い食らい付いてくる。

「ッ」

気を吹き、反転。鯉口を切る。下駄すだ轆きりを履く脚と、それに乗る体ごと時計回りに方向を転じ。

――抜打。首を切断。

――斬り下し。脳天を割る。

刀身の棟を腕で支えながら、浴びせ斬り。喉笛を裂いた。

雪の白に、赤い花がひらく。

そうして斜面の雪を削り散らしながら減速。

「Aaaa!!」

「Gah!」

当然とばかり足の鈍った獲物を追って二匹、左右から来る。

さらに反転し、右方の敵を背に迎える。そうして肩口から刀を担ぐように、刺突。

過たず、切っ先はその大きく開かれた口腔に真っ直ぐ這入り込み、喉奥、そのさらに奥までを貫いた。

留まらぬ。未だ。敵はもう一匹。眼前にある。

「ずあッッ!!」

覇気を飛ばし、刀を引き戻す。狼の体内に飲み込まれた刃で、その内部から背中を斬り開いた。

大上段から斬り下し。

顔を割り、胴を裂き、股間を抜け、一匹の狼を二つに両断した。

血の轍を雪原に刻み付け、坂の半ばで停止する。

横目にフユノの様子を見やった。一抹、湧いていた心配もあっさりと杞憂に終わる。

「……」

娘はその手に、二振りの小太刀を握っていた。どこにそんなものを隠し持っていたかなど問うだけ愚かしからう。

鎧武者姿で振るっていた野太刀とは刃渡り、重量共に程遠く、かけ離れた操法を求められように。

しかし一切合切障りはない。絶無だった。

事実の一つ。

己同様、襲い掛かってきた七、八匹の狼を、娘は事も無げに。

斬り刻み、斬り捨てた。

滑走から一変して一足跳びに踏み込む。斬り間に入った相手から順々に、喉を裂き、肋骨下から心の臓を突き、逆手に転じた小太刀二刀で首を貫き、切り開くように飛ばした。

円を描く。全身の回転運動により生じた遠心の力、慣性力を余すところなく切先、物打ち処へ伝導することで、現在は女人の体格でありながらフユノはその一分として刃の殺傷力を損なわず振るっている。

あれも過去、太刀打ちを交わした冒険者から学び取ったものだろうか。それとも、またぞろ己の頭の中から盗み取ったのやもしれぬ。

「呵呵っ」

思わず笑声を漏らしながら、向かってくる白狼を一匹、斬る。もう一匹、斬る。

三、四と続く二匹を、下駄轉のそりで諸共踏み付け、横並びに地面に縫い留める。そうして、逆手に翻した刀身を二度、喉の真ん中へ突き下ろした。

そしてまた、失笑する。

斯様な、己の乱闘ぶりなど比べるべくもない。

冬の精霊、その戦の、あまりの美麗に妙な可笑しみすら湧いた。

小太刀を両手に携え、氷雪を羽衣の如く纏いて舞い踊る天女。フユノの様は、月並みに評してそれ、であった。

「G a a a a ツツ!!」

林の奥から咆哮が上がる。

さらなる一群が草木の闇間から湧き出した。おそらくは群の本隊、というより全戦力が。

先遣の者共の惨憺たる有様に、遂に業を煮やしてくれたらしい。

なんと有り難や。下策中の下策を打ってくれるか。

「フユノー」

呼び掛けながら、下駄鞆の爪先と踵を半ばほどに斬り落とす。走るには鞆よりもかんじきが望ましかった。

赤い花が点々と咲き誇る雪上を駆け抜ける。

当然、無数の、夥しいまでの獣の息遣いが背中を覆う。逃がすものかと。骨まで食らい尽くしてくれる、と。肉色の殺意が肌を泡立たた。

——しかし、彼奴らはすぐにも気付いたろう。自分達が、自ら死地へ踏み込んでいたことに。

「雪原を征け、紅の一撃——」

円陣が、幾重にも幾重にも幾何学の文様を刻み、拡がり、空に編まれていく。

雪原が赤く染まる。あたかも日暮れの茜と見紛うほどに。

「『エクスプロージョン』!!」

空が落ちてきたかのような極大の衝撃。炎が爆轟を伴い、雪を、土を、岩盤を削り、吹き払う。

冷気に慣れ切っていた肌身を、暴力的な炎熱が容赦なく焦がした。事実、血と脂の焦げる臭いを僅かに嗅いだ。無論それは己自身から発したのではない。

もはや影も形も残さぬ、白狼達の残り香だった。

大気を震撼する衝撃と暴風がようやく収まる頃。

やや距離を隔てた場所に純白の振袖姿を見付ける。フユノは、扶れ、焦熱した地面から立ち昇る狼煙を見上げていた。

歩み寄って行くと、向こうから小走りに近寄ってくる。

「ジंकロウ」

「上手く運んだな」

「オレ、役に立った？」

「ああ無論だとも。相変わらず、見事な太刀筋だった」

「ふんすっ」

胸を反らし、両手を腰に添え、声で鼻息を吹く。大威張り、というようなことを言いたいらしい。

相変わらず表情は色味に乏しいが、褒められたことを素直に喜んでくれるならそれでいい。

頭を撫でてやると、掌にぐいぐいと押し付けてくる。大きな犬のようだ……いや狐か。

「……私には何か言うことではないんですか」

丘の頂で。雪に埋もれた白い毛むくじやらを抱き起すと、むくれっ面でそんなことを言った。

明くる日。

雪山は晴天に恵まれ、雪の白が大いに目を焼いた。

目的地は、山の中腹に穿たれた洞穴であった。えいこら満足に均されてもおらぬ山道を登り、登り詰めること半日。

苦勞して辿ったその道程を——しかして今、我らは滑り降りている。猛然と、疾風の如くに、過ぎ去っていく景色を一顧だにせず。

なにせ、振り返っている余裕などないのだから。

怒怒怒怒怒

轟轟轟轟轟

音にすればそんなものが。

諭えるなら、山そのものが。

背後のすぐ傍まで、迫ってきていた。

「オオオ、オ、オ、オ、アアアアアアアアアアアツツツ!!」

咆哮が、山彦の反響すら消し飛ばし山そのものを震わせる。

「一撃、白、熊は一撃熊の突然変異種です！ 普通この時期一撃熊は冬眠に入りますがこの白熊は逆に冬季にだけ活動します！ 体長体重体格どれも一撃熊の二倍から三倍以上！ 足の速さ・持久力共に馬を凌ぐそうです！ すごいですね!!」

「そのようだな！」

小脇に抱えたためぐみんが、懇切丁寧な説明を寄越してくる。モンスタリーの多様な生態について茶でも点てながらのんびり談義したいところだが、斜面を高速で滑走しながらではそれも叶わぬ。

なにより、今まさに雪崩の如く追い縋ってくる巨獣に摺り潰されてしまえばその機会は永遠に巡っては来ないのだから。

「ジンクロウ、もう追い付かれる」

「おう！ そのようだなあ！」

並走するフユノが、実に端的な、直近の確実なる未来を予言してくれた。

それに礼を言う暇はなく、冷酷な現実に対して悪態を吐く暇すらもない。

今は、なにを置いても。

「すう……」

人差し指と親指を口に含み、吐息を尖らせ、一気に吹く。

指笛の甲高い音色が山を通り抜けた。先程の咆哮に比べれば涙を誘うほどに儂い音の圧である、が。

「音の量の大小は些末事。人の耳などは所詮、自然界においては劣弱の誇りを免れない。」

故に、〃かの者〃の耳ならば委細問題なく届いていよう。

それが証拠に、既に。

熊の前足が、暴風めいて我らを刈り取らんとした刹那——飛び込んできた騎影が三人を攫った。

「おー」

「ひう!? た、高い! 高いですよ!」

「連れてきておいて正解だったろう。おめえさんもそう思わんかなあ」

「キユウツ!」

風を、その巨大な翼が捕らえ空に上がる。飛翔している。

グリフォンの雛。鷲の羽毛と獅子の毛皮が同居したその背。先頭にめぐみんを座らせ、フユノ共々抱えるようにして跨った。

こんなこともあるうかと、特注で鞍を見繕っておいてよかった。裸馬、もとい鷲獅子に三人相乗りは流石に無理がある。

「さて、どうするか」

「ここから撃つちやいますか? 魔力切れした後がちよつと恐いですが……」

眼下の白い巨体を見やる。

以前に行き会った一撃熊と同じ、鬼のような形相が逃した獲物を忌々しげに睨め上げていた。

「あの大きさを馬より速く動くのだろうか? 魔法を放つ間だけ鈍重になつてくれるんらしいが」

「むう……」

「足を奪う外に術はないな」

「え」

手綱を繰り、様子見の為の旋回飛行から下降態勢へ。

「ど、どうするんですか!」

「言つたらう。ちよいと行って奴めの足を止めてくる。めぐ坊、おめえさんは機を見計らい空から花火を落としてくれい」

「なつ、花火とは失礼な! って、いやいや見計らうって何をです!」

「なに、一目瞭然よ。フユノ」

「わかった」

呼び掛けると、即座に頷いた。何一つ口にはしていないのだが。

見返す己の顔が妙ちきだったのか、フユノはわざわざ今一度改めてくれた。

「氷で坂をつくれ。そう言ってる?」

「おう、そうともその通り。こう、*ヅ*の字に頼みてえんだが……解るか？」

「わかる。ジंकクロウのことなら、わかる」

淡く、微かな笑みをフユノは浮かべた。

「……かかつ、殺し文句だな」

直向きの情を感じずにおれぬ。純心は美德だが、こうも容易く懐に入られては少々困りものであった。然様に贅沢な悩みよ。

「ゴホンツ！ ジ・ン・ク・ロ・ウ？」

「おおつとと、では行くとするか。めぐ坊、ほれ、縄で体を括りな。放り出されつちまうぜ」

「え？ ……あつ、はい！」

人馬一体の境地など要らず、グリフォンはこちらの意を即座に汲み取った。

翼を畳み、緩やかな下降はほぼ垂直落下に近付く。自然、飛翔によつて齎されるその速度は自由落下の比ではない。

空の高みにあつてなお巨大な白。獣の巨体が見る間に視界内を肥大する。

そして、その大腕と爪が網羅する最大攻撃圏を間近にした瞬間——
——驚の翼を広げ、空を掴んだ。

「くう……！」

急激な停止によつてその背に跨っていた我々に強烈な慣性力が働き、その場に留まろうとするグリフォンとは裏腹に、体は下へ、さらに下へと投げ出される。

それこそは企図。

「跳ぶぞ」

慣性力の為すが儘に、己とフユノはグリフォンの背から跳び出した。

「ガアアアッ!!」

咆哮と共に一撃白熊が腕を振り上げた。獣の動体視力ならば、なるほど。落下してくる人間を正確に叩き落とす程度、造作もなからう。それがただの自由落下であつたなら。

し、のた打ち回る一撃白熊の姿があった。

——その頭上で、赤黒く焔が渦を巻いた。

めぐみんはきつちりと機を見計らってくれたようだ。

「凜猛なる巨影よ知るがいい！ 紅蓮の太陽を、日輪の灼熱を——

」

枯木は火を上げる間もなく灰に、その巨体をして骨すら残すこと能わず塵となる。

「喰らい尽くせ！ 『エクスプロージョン』!!」

グリフォンの背にぐったりとうつ伏せに伸びるめぐみんの姿は、天日に干す布団の様に似ていた。

「……何か、また失礼なこと考えてますね」

「いんや？ 滅相も」

勘のいい娘に、努めて胡散臭い笑みを送る。

不満げな視線が己を顔を刺すのが分かった。

縄を解き、グリフォンの背からめぐみんを抱き上げる。そうして爆

心地を振り返るが、そこには何も無い。骸の欠片一つ。

「綺麗さっぱりだな」

「それが爆裂魔法の威力です」

「以前にも増して強烈になったんじゃあねえかい？」

「ドヤア」

なんともいやらしい満面の笑みだった。あまり褒めたつもりはないのだが、本人が満足ならまあ、いいだろう。

「これで終わり？」

「ああ、帰るとしよう」

とことごと歩み寄ってきたフユノの、頭に積もったままの雪を払い除けながらに頷く。

よく働き、程よく楽しんだ。概ね良い一日だったと総括しておく。

「どうだい、めぐ坊。ちったあ満足できたかよ」

二日続けてなかなかの強行軍だったが、娘の望み通り爆裂魔法を撃ちに撃った。

多少は機嫌を治してくれたものかと。

「——なに勘違いしてるんですか」

そう思っていたのだが。

「私達の爆裂は、まだまだこれからです！」

「おー」

爛々と瞳を紅く輝かせ、めぐみんは天に拳を突き上げた。

それを真似てフユノもまた拳を突き上げる。意味は……分かっておらんのだろうな。

「ハハッ、堪忍してくれえい……」

腕の中で、傍らで、娘子らがそれはそれは元気に騒ぐ。

爺の独り言など、吹き消してしまうほどに。

50話 ふりいたあ家を買った

朝の冷え込みも一入ひとしおに鋭くなった。葉も落ちて痩せた雑木林の間をひゆるりひゆるりと寒風が吹き抜ける。

「先に出るぜ」

「あ、はい！ ちよつと待ってくださいね！」

玄関口を潜りつ、後ろへ声を投げた。

すると土間からぱたぱたとウイズが駆けてくる。手には風呂敷に包まれた小箱が一つ。

「お弁当です。ジंकロウさんとフユノさん、あとめぐみんさんの分も。三人で召し上がってください」

「おお、こいつぁ有り難えや」

家事を任せきりにしている上、こうしてなにかと行き届く。

「いやいやお前さん、嫁の貰い手にや事欠かんなあ」

「へっ？ も、もお！ からかわないでください！」

「くくく」

白い頬を朱色にしてこちらの肩口をぽんぽん叩く。この女に、街の男共が何かと熱を上げるのも頷ける。

「お前さん、今日はどうすんだい。店は開けるのか」

「い、いえ。定休日ですから、お店のお手入れだけ……あ、ただ今晚遅くに用事があつて、少し出掛けますね」

「そうかい。伴は要るか？」

「いえいえ、本当にすぐですから。どうか気にせず、お休みになってください」

庭先で雪を弄んでいたフユノを手招く。振り袖を宙に泳がせながら娘は従順にとことこと寄ってきた。

「ウイズが気を利かせてくれた。フユノも礼を言いな」

「ありがてー」

「かつ、己を真似るんじゃないやねえや。ちゃんとほれ、あ・り・が・と・う、

だ」

「ありがとう」

「……ふふっ、どういたしまして。ちゃんとお礼が言えて偉いですね、フユノさん」

ふわりと、ウイズは微笑んだ。なにやら乳飲み子を見詰める母のよ
うな様で。

一方で、きよとんとフユノはそれをただ見返している。何を褒められたか、いやそもそも褒められたことすらよく分かっていないらしい。

ウイズと顔を見合わせ、一吹き笑う。雪色の頭を撫でてやると、フユノは不思議そうに、けれどやわやわとはにかんだ。

「二人ともいつてらっしや〜い」

「いつてらっしやいます」

「いつてきます、な？ お前さんも暖かくしなウイズ」

もはや我が別宅と言わんばかり、すっかりと居着いたウイズに見送られ、侘び住まいから這い出して背を丸めながら街の裏門を潜る。

一路、浅く積もった雪に轍を踏み、訪れたるはギルド酒場。

黒檀の両扉を開け放つ。朝も早いとあって人気も疎らな大広間、その中央へと不意に目を引かれた。長机を縦断する通路の真ん中で腕組みして仁王立ち、ふんぬと陣取る者がある。

こちらもフユノに負けず劣らずに白い姿。柔らかな白狼の毛皮に身を包んだ小さな娘っ子——めぐみんは我々の到来にしっかりと笑顔
顔を湛えた。

「おはようございませす！ さあさあ今日も一日一爆裂ですよ！」

今日ではて、幾日を数えたか。娘子曰くの一曰一爆裂とやらは。

モンスター討伐はなるほど確かに冒険者稼業の花形であり、こう連日隙間なく討伐に励めばギルドからの覚えもめでたくなろうというもの。

それはまあ、素直に喜ばしいことであろう。いそいそと勤労に励む

もまこと善哉。

さ、あれど。

とは言っても。

「こう毎ん日引つ張りまわされちや、なかなかどうして堪えらあ」

長椅子の背もたれに肘を預け、天井を仰いでぼやきを垂れる。

すると対面で笑声が立つ。斜向かいに座った少年が、いかにも意地悪そうな笑みを浮かべていた。

「ちよつとは俺の苦勞が分かつたろ？」

「かつ、ああほんに老骨に染み入るよう」

もう一つ負け惜しみを投げ、カズマ共々笑い合う。

「元氣な盛りたあよく言つたもんだ」

「毎日爆裂魔法ぶつ放せてこれでもかつてくらい上機嫌だからなー、あのロリっ子」

「めぐ坊もそうだがフユノもな。性格はまるで違うつてのに妙に馬が合つたらしい。今もほれ、あののように」

顎で、ギルド内の依頼掲示板を示す。

そこには雪ん子と雪女子おなごが二人、なにやら姦しく話し込んでいる様子だ。

『野良アイスゴーレムの討伐』！ ふふふ、氷の塊ならばさぞ爆裂のし甲斐がありそうですね」

「かき氷にすると美味しい」

「え、食べられるんですか？」

薄らとぼけた会話が聞こえるような聞こえぬような。めぐみんが手を引き、フユノは手を引かれ、掲示板の端から端まで隅々見て回す。姉妹のよう、などと表した気もするがはてさてどちらが姉でどちらが妹か。

そして己もまた、今度はどこに引つ張り出されるやら知れたものではない。

「……見た目超美人なおねいさんなのに中身は少女、どころか幼女だよな」

「人に成つたのは初めてという。雪の精霊が世情だの人情だの知る筈

も、いや知る必要もなかったのだ。無知で無垢、幼子と何も変わりあるまい。それを思えばめぐ坊は実に良い姉貴分だよ。おおそうだ、現に妹が一人居るそうだな」

「へえー」

「それはそうと、そっちはどうなんだい。仕事の方はよ」

そう言つてカズマを見やる。その装いはあの常の緑い薄着あおに厚手の羽織りという、仕事をする風情にはとても見えない。何より剣の一本すら帯びていないのだから。

「この時期はパス。暖かくなるまでは討伐はなし。というか冬場のモンスターに嬉々として突っ込んでいくあのロリっ子が頭おかしいんであつて本来はこれが正しいの」

「それもそうか」

「それに、冬越えの目途は立つたからさ」

「うん？」

冬備え冬越え、それは目下カズマらの抱える重大事であつた。

金がない。家もない。馬小屋で冬を越す命懸けは真つ平御免と騒いでいたのがなにやら懐かしい。

それが解決したとはつまり。

「売れたか、あの鉢は」

「売れたわ。めっちゃ売れたわ」

先の雪精討伐依頼の折、なんのかのとあつて家に居着くこととなつたフユノこと冬將軍。義理堅いことにかの者は手土産を持参してやつて来た。

玄武とか呼ばれる巨大な亀が、その甲羅の内のさらに内で造り出すとかいう魔石。その原石を。

冬將軍はその身の命の恩義にとその鉢を己に差し出したが、成り行きを勘案した結果、我が徒党の御頭様であるところのカズマがそれを受け取るべきとの結論に落ち着いた次第であつた。

鉢をどのように処分しようとするかはカズマの自由。如何様にでもと、半ば投げ寄せた恰好ではあつたが。

「値打ちはどんなもんだい？ 悪くとも、冬場は宿で凌ぐ程度にや

なつたのだろうか?」

「まあ……うん」

「?」

カズマは実に歯切れ悪く、妙な笑みを浮かべた。苦笑とも失笑とも喜びを堪えるニヤケ面とも見て取れる。

「正直、宝石の値付けとかよく分かんなかったからさ。最初はギルドの鑑定士じゃなくウイズに相談しに行ったんよ」

「……大丈夫だったのか。あれはーほれ、そこどころがどうも」
「分かっている分かっている。ウイズに捌いてもらおうなんてこれっつぽっつっつちも考えてなかったから」

少年の言葉を聞き安堵する。そして一抹の哀切を思う。

「ウイズも一応は商人だし、宝石商とかの伝手もあるだろうって。勿論、事前に紹介料の額も取り決めてさ」

「おう、すっかりしとるのう」

無論、カズマがである。おそらくウイズにはそのようなこと思いつきもしまい。

「俺はそんな時までそのまま売り払おうとしてただけど、ウイズが『加工すれば価値が上がるかもしれない』って提案してくれたのね。んじゃあって、宝石商さんとこ出入りの職人さん紹介してもらおうってこと」

「ほー」

そういえばあの娘、そんなようなことを溢していたか。

「……そっからだな。おかしくなつたのは」

「あん?」

少年はひどく遠くを見ている。懐かしむというより、それは他人事の世間話をするかの体で。

「まず職人さんがさ『こんなやべー宝玉加工とかボクには無理無理力タツムリ』とか言い出して。宝石商の人が『こんなもんアクセル近郊で捌ける訳ねーべよ馬鹿なの?』とか言い出して。アクセルでダメなら、王都に店構えてるような豪商に頼めとか無茶言い出しやがって」
「そいつぁ面倒だな」

「だろう？ 紹介状持参で王都まで行かなきゃダメか〜って思ってたから、いや一人使えそうなのがいいたなと」

「……おお、ダー公か」

「うん、貴族の、それも王族にも縁深い家柄らしいじゃん？ それなら相応の美術品の買い付けとかででかい商人ギルドに伝手とかないかな〜ってさ。まあ案の定……王宮の献上品を加工してる職人さんと知り合いだとかで」

「そらあ、また随分と」

話が弾んだというか転んだというか。

「なんか現物の魔石を見た職人さんのテンション上がっちゃってすぐおたかいじゅえりいが出来上がったり、王都の商人ギルドがそれを聞き付けて各地の豪商呼び集めて競売始めたり、なんでかこの国の第一王女殿下様の目に触れてお褒めの御辞ことばを賜ったとかで妙な箔が着いたりいろいろあったよ」

「おう、そうかい」

何かと怒涛の展開を一息に言い切つて、カズマはもう一つ疲労の色濃い溜息を吐き出した。

「まー、なんやかんや一ヶ月弱掛かりましたが、家を買う算段が付きましたことここにござい報告しまつす！」

「おお、そいつあ目出度めでてえや」

当初からの心配事が一つ片付いた。

最悪、この冬限りは我が荒あばら家に匿うことも考えていたが、子らに狭苦しい思いをさせずに済むというもの。

「えー、つきましては、こちらの書類に」

「あ？ なんだいこりや」

「ジंकクロウのサインと拇印を……左上のここね」

「はあ？」

カズマは取り出した半紙をこちら側に滑らせ、周到用意していたのだろう羽ペンと顔料を寄越した。

流石に、問答無用という訳にもいくまい。

半紙は書面、何かの契約状と思しい。

「鉦の売りになんぞケチでもついたか」

「いや全然。それは口座の名義人の証書」

「口座……？ ギルドの貸金庫か」

ギルドは金の預かり所も兼ねている。冒険者稼業は命を質種にする分儲けも相応。個人で所有するには紙幣にせよ貨幣にせよどうしても重い。なにより盗みに遭っては泣くにも泣けぬとあって、ギルドが規定の手数料を徴収しそれぞれの財貨を保管してくれる。

この書面はどうやらその口座の名義人を決める契約状であった。

そうして金庫に収まる額が――

「……どういこうった」

「だから、売れたんだってば」

「聞いておった額と桁が違うぜ」

「ウイズの鑑定だと五千万だっけ？」

その十倍の値が、そこには記されていた。

額の大きさに驚いたのは言わずもがなであるが。

「……あの娘の目は、まあ、なんだ」

「ガラス玉でもはまってんじゃないすかね」

カズマは忌憚なく言い切った。

生憎と返す言葉は浮かばなかった。

しかし、紙片を指先で叩きながらカズマを見る。

「こいつはお前さんにやったもんだ。だってえのに己が上がりをしめるってなあ筋が合わないな」

額が額である。一財産に釣りが来る金を己の裁量下に置かせようとするのは何故か。

少年は、そうしたこちらの疑問も予想の上だったらしい。首を横に振る。

「それ、もう折半した後だから」

「はっ」

「俺は俺でもう口座作って受付済ませたからさ、ジंकクロウもちやちやっつとやっちやっつて」

「……」

紙面に記載された金額を見て、またカズマを見る。

カズマは、またぞろ苦笑とも失笑とも喜びを堪えるニヤケ面とも見て取れる顔になり。

「異世界お気楽生活の始まり始まり……って感じ？」

「泡銭ではちとケツの据わりが悪いが、まあ……そんな感じだな」

書くもの書いて、とつとと受付へと届け出る。

「大事なものは愛情と相性大事なのは愛情と相性よルナ。お金は幸福の必須条件ではなく不幸を凌ぐ手段なのよルナ。お金目当てなんかじゃないお金目当てなんかじゃないの私はいい子私はいい子ああ新婚旅行は南国とかいいかしら!!」

その際、ルナ嬢がなにやら目を白黒させ百面相を繰り広げていたが、触れぬが祟りなし、もとい華という。そつとしておいた。

席に帰りがてら女給を手招き、注文を言付けた。

「うん?・これ」

「祝いに一献、付き合え」

程なく届いた猪口二つに徳利。陶器の表面から湯気が立つ。漂う酒精の香が実にかぐわしい。

それもこれもやはり、懐が温かい故か。

「ぶっ、はは。はいはい」

噴き出すように笑いながら、カズマは徳利をこちらに向ける。

酒を注され、代わりにこちらも少年の猪口に注し入れる。

「乾杯」

一気に流し込んだ熱い清水がまた、喉から胃の腑までを一挙に暖めた。

実に、甘露。

「ああー!? なに飲んでるんですか!? 討伐前だっというのに!」

「おつと見付かっちゃった」

鈴を鳴らすよりも響く娘子の声が後ろ頭を叩く。早々とめぐみんがすっ飛んできた。

「いやいやめぐ坊、これは祝いの酒というやつでな」

「お酒はお酒でしょうが! 真昼間というかまだ朝ですよ!」

「まあまあそう言うな」

「ジंकロウ、オレも欲しい」

「ダメえでえすう！」

物欲しそうに指を咥えるフユノを、全身でめぐみんが押し留める。

それを見て、カズマはさっと手を挙げ。

「あ、女給さーん！ 器もう一つください」

「くださーいじゃないです！ 女給さんいららないですよー!？」

「めぐ坊はオレンジジュースでいいか」

「よくないです！」

何はともあれ善哉善哉。

注しつ注されつ器を手手に、不満げなめぐ坊は訳も分らず杯を掲げた。

「フリーター家を買った記念に、かんぱーい！」

「いよ！ 御大尽！」

「おだいじーん」

「だからなんなんですかこれ!？」

51話 幽霊屋敷にて

あれから数日。相も変わらず、元気な盛りの娘子二人に引つ張り回される日々を過ごした。

野山の雪化粧が遊女の抜衣紋の如くに厚くなり、ギルドの仕事には早速溝さらいに並び雪下ろしが加わった。

斯様な冬本番とはいえ、アクセルの街並の活気は衰えていない。これは意外というか意表を突かれた思いだが、越冬とは備えをし蓄えを少しずつ潰しながら凌ぐものと勝手に思い込んでいた。しかし、この街、この世界は今少し豊かだ。

飯屋はこぞつて店先から暖かな香気を漂わせ、寒さに背を丸めた客を呼び込む。

行商人は専ら都で流行しているという冬衣を声高に宣伝する。服飾を売り出すには些かのんびりだ、などと所詮は鈍く疎い粗忽者の浅慮。女人方は実に目敏くそして貪欲にそれらを求めた。

どうやら冬に戦々恐々としているのは、根無し草の我々冒険者だけらしい。

アクセルは今日も平穏である。

「荷運びはもう終わつとるのか」

「運ぶほどの荷物がそもそもないんだよなあ」

中央通りを外れ、西進すること暫し。

民家の密集する区画からさらに奥へ行くと、とりわけ広大に敷地を持つ邸が目立つようになった。

「家具は備え付け、薪の備蓄もある。水道は通ってるし、照明用の魔石も交換済み。風呂は魔力を通すと自動で暖め出来るし、故障した時用に焚きつけも出来る。トイレは水洗式で一階二階にそれぞれ一つずつ。厨房には古い型だけど冷蔵庫まであった」

「ほっ、至れり尽くせりだな」

「な」

煉瓦造りの塀に沿って歩くと、すぐに鉄製の門扉が見えてくる。二頭立ての馬車でも楽々通ることが出来る大きなその前で、先頭を行

く少年は足を止めた。

「ここか」

「ああ」

「おお、大きいですね……」

「うむ、なかなかの屋敷構えだ」

「ふふん、遂に一城の主になるのねこの私が！」

「名義は俺だし金出したのも俺だけだな」

めぐみん、ダクネス、アクア、そしてカズマ。それぞれ小荷物を抱えた面々と共に子らの新居である屋敷を見上げる。

ダクネスの言の通り、大層立派な佇まいであった。二階建ての石造りで部屋数も相当、前庭には馬小屋と蔵が一棟ずつある。

「奮発したなあカズ」

「実はそうでもない」

「？」

「まあとりあえず、早いところ掃除と荷解きやつちまおうぜ」

「あ！ 主より先に家の敷居を跨ごうなんて凶々しいわよカズマ！」

なにやら含みを持たせて、カズマはさっさと屋敷の入り口へ向かう。

アクアは意気揚々とそれに続く。

その後ろに続きながらふと、甲冑に外套を重ね着したダクネスに振り返る。

「そういえば、お前さんもここに住まうのだな」

「ん？ ああ、もともと実家からは一度出ようと思っていたからな。いい機会だった。聖騎士とはいえ冒険者。パーティメンバーと同じ屋根の下に寝起きし、同じ食事をする。実に冒険者らしい生活だ！」

「まさに巢立ちか。御父上はさぞ寂しかろうに」

「ああ最後までしつこくごねていた。まったく、もうよい歳なのだから子離れしてもらわなくては困る」

「それもまた親心よ」

「あんまりしつこいので玄関先で締め落として出て来た」

「おいおい」

ダクネスの父、ダステイネス・フォード・イグニスとはアクセルの外壁と門の建て直しの件で面識があった。王族に次ぐ公爵の地位に在りながら平民との会談の席を手ずから設け、まして一冒険者に過ぎぬこの身に相對して、なお彼の姿勢は実に公明正大であった。街門の修繕がこれほど早く完了したのもかの公爵殿の手腕と果斷さあればこそ。

「あ、シノギ殿に宜しくと、父から託ことづかっている」

「それを先に言わねえか」

「別段重要な事柄でもないからまあいつかと思つて」

この娘の父親に対する素っ気無さは時に凄まじい。これで父娘仲睦まじいというのだから、他人様の御家事情とはまっこと不可思議である。

不意に、腰の辺りに軽く何かがぶつかる。別段確かめるまでもなく、それはめぐみんの頭であった。

「ごーんごーんと寺の鐘撞のように後ろ腰に頭突きを呉れる娘子。

「ジंकロウはーこつちに移らないんですかー」

「ま、気が向いたらな」

「むー」

「ふふふ」

むくれるめぐみんにダクネスが微笑んだ。

「裏門もここからなら随分近い。いつでも会いに行けるし、ジंकロウからも訪ねて来れる。だろう?」

「そうだな。フユノも連れて?」しげく遊びに来るさ」

「……ホントですか」

「ああ本当だとも」

「お土産もありますか」

「かかか! おうとも、心得たぞ」

「じゃーいいです。今回は見逃してあげます」

「これはこれは、いや御寛恕かたじけの 忝かたじけのうござる」

「ぬー」

慇懃にそう言うと、娘は了承とも不承とも分からぬ声を上げて余計

に頭を擦り付けてきた。

広々としたこの邸、部屋数も十に及ぶとあつて掃除はなかなか骨であつた。

廊下を磨き、窓を吹き上げ、埃や蜘蛛の巣を払う。子らは各自、己の居室を定めそちらを重点的に清掃している。ならば住人でない己はそれ以外に手を付けよう。

そう息巻いたはいいが、朝に始まった大掃除も、今や日暮れ近い。「ふう、流石に堪えたな」

最後の一室を粗方掃き清め、窓を開け放つて一心地つく。

時刻も相まつて外気は実に冷涼。さりとして、忙しく動き火照つた体にそれが大層心地よい。埃の名残も風にさらわれた。

夕焼けが薄れ、夜闇が立ち昇り始めた。外に比べれば、室内はより一層に仄暗い。

開いたままの扉の向こう。廊下の闇はさらに色濃い。

二階の片隅。ここは他に比べても小じんまりと、悪く言えば手狭な部屋だった。八帖ほどの板間に天蓋付きの寝台が一つ。飾り机と棚が一つ。

使用人の部屋とも見えるが、にしては寝床の造りは凝っている。支柱に精緻な花や木々を彫り込まれ、天蓋の裏は月と太陽を象つた穴が抜かれている。

「……ん？」

ふと、寝台と壁の隙間に何かが見えた。

先刻床を磨いた際、当然寝台の下を覗いた。そうして無論のことそこには何もなかった。なかった、筈だ

「……」

手を差し入れ、持ち上げる。絹の手触り、そしてはらりと毛先が手の甲を撫でる。

石膏製の人形だった。

所々に黒い編み飾りをあしらった紅く華美な衣装、一本一本植えられていたのだろう金色の毛髪、そしてこちらを見上げる硝子玉の瞳。「なるほど、子供部屋か」

それも十は数えぬ童女の為の。

前の住人の忘れ物か……それにしては、状態が良い。まるでつい最近まで、誰かがきちんと手入れをしていたかのように。

その時、背後で足音が立った。

音の軽さからみて、カズマやアクア、ダクネスではない。ならばおそらくめぐみんであろう。

それは振り返る間もなく、後ろ腰にぶつかる。

「どうしためぐ坊。自分の部屋は片付いたか——」

腰元に目をやり、頭の位置に右手を乗せ……乗せようとした手が空を切る。

「……」

すぐに振り返り、背後を見やる。

そこには誰も居なかった。

『……』

ただ、開け放った扉の端、廊下の暗がりの中に、二つ。光が浮かんでいる。

それは目だった。

硝子玉の目が、こちらを見詰めていた——。

「ジंकクロウ？」

ひよっこりと扉の陰から頭を出して、めぐみんがこちらを覗き込んでいた。

「……おう、めぐ坊」

「こっちの部屋も終わりましたか？ カズマがそろそろ夕飯の準備をすると言ってますよ」

「そうかい。ここはもう済んだ。カズの方を手伝おう。ああお前さんら、先に風呂に入っちゃまえ。埃まみれでは気持ちが悪かろうや」

「は——」

素直に頷いて、めぐみんは廊下の向こうにぱたぱたと走って行く

た。

その後を追う。

手にしていた人形は、

「……」

もういなかった。

「幽霊屋敷なんだってさ」

「ほー」

くつくつと煮え始めた土鍋から昆布を箸で摘まみ出し、酒、みりん、砂糖、醤油を合わせ、出汁に混ぜる。

小皿に掬い、味をみる。悪くない。

傍らで白菜を切る少年にも小皿を渡し、味見させた。

少年は頷き、指で丸を作る。

「昆布出汁めっちゃ出てる……まあ、訳アリ物件ってことだったから屋敷と土地合わせても値段はゴニョゴニョ……つとこんなもん」

「ああ？　ははは！　思い切った叩き売りだなおい」

同じ条件の屋敷を同じような立地で購入する場合の四半値以下。どう考えてもまともな物件ではない。

「しかし懐はこれ以上なく暖まったろうに、また何故だい」

「立地とか内装とか、ここより良い条件の物件がないってこと前提だけど、理由は二つ。一つは当然だけど値段。なるべく安く買いたかった。幾ら貯蓄が出来たって言っても、シンクロウも言ってたろ。所詮泡銭だって」

「まあな」

「俺にこれ以上稼ぐ目途が今んとこまったくないからさ。使わずに済む内は使わないようにしたかったわけ」

安物買いの銭失い、という金言はとんだ水差しか。

鱈の頭を落とし、内臓わたを抜いた身からこびり付いた血合を水で洗い

流す。布巾で水気を取ると、薄桃色の白身がひどく鮮やかであった。
「……あんたの言いたいことは分かるけど、仕方ないんだよ。已むに
已まれぬ事情があんの」

「近頃は察しがいいな、カズ。またなんぞやらかしたか」

「俺じゃねえし。アクアだし」

少年はむくれっ面で、手短に事の顛末を語った。

共同墓地に彷徨う大量の幽霊共。それを成仏させる為、ウイズが
度々手助けをしていたこと。

その横槍というか余計な親切というか、アクアが浄化を買って出た
——までは褒められた話であったが、いつも通りかの女神殿は不精を
働き、墓地全体を聖なる結界によつて覆い尽くすことで幽霊共を追い
散らしてしまった。

行き場を失くした霊体は、近場の手頃な建物や土地に住み着く。

その筆頭が、この屋敷だった。

そして屋敷の管理人からギルドに幽霊退治の依頼が出されるまで、
然程の時間も必要とはしなかった。

「墓場の結界を消してギルドに事情説明して平謝りして不動産屋の人
に事情説明して平謝りして近隣住民の人達に事情説明して平謝りし
ながら除霊しまくって、最後にこの屋敷の除霊を請け負ってついでに
屋敷の買取契約したのがつい七日前だよ」

「苦労したな」

「ホントにな!?!」

人參に包丁を叩き落としてカズマは吠えた。

「そんな訳で、この屋敷に俺らが住むのは最初はなっから決定事項です。
安物買いも幽霊退治どうこうも単なる責任問題と成り行きです。お
解り?」

「わかったわかった。わかったから、包丁はもつと丁寧ていねいに扱いな。そ
のうち指を落とすぜ」

「はい」

ぶすつとした顔をしながらも、少年は小器用な包丁捌きで野菜を
切っていた。

「あれで水と癒しの女神（爆笑）だろ、あいつ。幽霊とか屍とか含めてアンデッドには特効性能だからさ。この屋敷の幽霊もちよよいと成仏させるから、まあ心配ないよ」

「ならよいが」

「ああでも……」

椎茸に飾り切りなど施し始めた少年が、不意にぽつりと漏らす。

「この屋敷、今回の幽霊騒動の前からずっと幽霊屋敷で通ってたらしいんだよな。ウイズも何か知ってる風だったけど……」

「ほう、そいつあ一筋縄では行かぬかもしれない……と、これめぐ坊「ギクツ」

いつの間にやら風呂から上がっていたらしい。そそと厨房に入ってきためぐみんを呼び止める。

調理台の上から砂肝の醤油炒めを一つ摘まんでいた。

ぎくりと固まっていたのも束の間、娘はそのままぱくりと砂肝を口に放り込んだ。

「盗み食いに失敗しておいて堂々と摘み食うんじゃないや」

「えへへへっ」

「あつ、こらロリっ子おー」

未だ湯気も立つ濡れ髪を揺らし、そそくさとめぐみんは厨房から逃げて行った。

カズマは呆れてそれを見送ったが、己はむしろその逃げ足の速さに笑う。

「かかつ、坊はもう待てねえとよ。鍋は向こうで煮るか。カズ、皿と焔炉を頼む」

「はいはいっ」と

鱈の身を熱熱と頬張り、人肌の酒をくつと飲み干す。

冬の醍醐味を存分に味わって、無事な引越しを盛大に祝った。

随分食べ、そして飲み、そろりと夜も更けた頃。

「今晚くらい泊まっていけば？」

「！　そうですよ。もう遅いです」

カズマが気のない素振りで言い、めぐみんがさつと便乗する。

ぬぬぬとこちらを見詰めるめぐみんを、ダクネスは笑い、アクアは話など知らぬと空になった杯に酒を注ぐ。自分とカズマとダクネス、そして己のそれにも。

「どうでもいいわ！　引越し祝いはまだまだこれからなんだから皆もつとじゃんじゃん飲みなさい！　女神アクア様の命令よ！　ほおら一気！　一気！　一気！　一気！　一気！」

「やめんか駄女神」

「あたっ」

アクアの後ろ頭をカズマが叩く。軽快な音色だった。

……深酒での夜歩きは、少々億劫である。

「そうするか」

途端に見えた娘の、それはそれは満面の笑顔に、思わず一吹き笑顔を溢す。

そして注がれた酒を口にすると、それは水になっていた。

今度は無言で、アクアの後ろ頭をカズマが叩いた。

宴席を片付け、なおも飲みたがるアクアを部屋に押し込み、夜更かしを強請^{ねだ}るめぐみんを寝かし付けた。

カズマとダクネスも部屋に戻り、己は居間の長椅子を寝床に代える。

鼻の吐息が聞こえた。

窓には薄い掛け幕を張ってあるが、月光はそれを容易く射貫き、石床を、壁を、天井を青白く染める。

火の色すら斬り破る鮮烈さ。

この世界とて夜は暗い。しかし夜空は実に鮮明だった。横たわって天井を仰ぐ。その内に、微睡が瞼を重くし始めた。もう後僅かで、意識は眠りの淵に沈むだろう。

「……」

瞼が開く。身体は突如、覚醒状態に立ち上がった。

端緒は聴覚。

音だ。何かを聴いた。

そしてまた一度。

硬質な音色。これは、何か硬く、小さなものが床を打ったのだ。

断続的にそれは響く。

その規則性が、足音であると気付くまでに然程の時間は要さなかった。そして、それがカズマでも、アクアでも、ダクネスでも、めぐみんのそれでもないということまで。

「……」

小さすぎる。どう聞き及んでも、人の足音ですらない。

だが、それは足音なのだ。

では、それを立て得るものとはなんだ。

なんだ。

長椅子を立ち上がる。裸足である為、逆にこちらは一切足音を立てぬまま居間の戸口に取り付く。

音は廊下の向こうからしている。

細く戸を開き、まず左を見る。暗い廊下が延々と続く。月の煌々は

影の暗がりを深めていた。

扉から滑るように身を出し、右を見る。

暗い廊下を視線が走り、その先に、

人形が立っていた。

「……」

白い装束を身に纏った金髪の石膏人形が、ぽつりと一つ立って、その硝子玉の蒼い目でこちらを見詰めている。

かちやり。

そんな音を立てて、人形が一步こちらに近付いた。無論のこと操り

先頭の一体を裏拳で打ち落とし、その場を跳び退く。追いついてきた一体を捕まえ、後塵の集団に擲なげつた。さらに左右から襲い掛かってくる二体を、同じく左右と拳を突き入れ打ち落とす。

これまでに打ち落としした五、六体が起き上がってくる様子がないことから、ある程度の衝撃を加えれば無力化できるようだ、が。

廊下の床から天井まで、所狭しと浮遊する色とりどりの人形達。

「景気のいいこった」

一つ一つ丁寧に打ち落としていては切りがない。

「手」がないではないが。人形相手では血も吸えぬ。だのにこの量を相手取らされればあれも流石に駄々を捏ねそうだ。

小刀の刃が月光に煌めく。そろそろ刺突の雨が降ろうという。

その時。

『!』

背後に、何かをきいた。

聴覚に依らぬ何か、だった。

遂にそれは、音ですらなくなった。

しかし、正常な思考能力や五感ではない、勘働きを感じ取る。

こつちに来い、と。

刃の二波が降り注ぐ。それを後目に廊下を駆けた。

走り抜け、辿り着いたのは二階の片隅。

どうしてか開かれたままの扉に、一も二もなく跳び込む。扉を閉めんと振り返った時、それは勢いよく、独りでに閉ざされた。

「ふい〜……かかかつ、いや命拾いしたぜ。何処の何方か存ぜぬが、忝い」

室内には、やはり誰もいない。少なくとも姿あるモノは何も……。

「……ん」

窓辺に、何か。月光を背にする、何かが――

『!!』

「!」

今度は確かにきいた。それは言葉。

絶叫にも近い激しきで、耳ではなく脳でもなく、魂を貫いた。

——逃げて!!

そして同時に臭い立つ、それ。

今度こそは馴染み深い血生臭さ。血と脂に粘つく、殺意。

上か。

果たして、振り仰いだその天井にソレは張り付いていた。

「クキキカカカカカカカカカカカカカカカカカカカカカカアアア!!!」

窓辺に跳ぶ。

一瞬前、己が身の存在した床にそれは突き刺さった。

華美な紅い衣装、金糸の髪、硝子玉の瞳。その石膏の体から、八本の爪が……いや、脚が生えている。まるで中身が溢れ出るようだ。

抑えが利かぬとばかり、顔は次々にひび割れ、硝子の眼球が一つ床にこぼれて落ちる。その下から複数の眼光がこちらを覗いていた。

丸々とした虎柄の腹がスカートの下から這い出た。

もはや正体を隠す気もないらしい。

人間大の巨大な蜘蛛。そんな形をした化物がそこにある。

「悪霊と呼ぶにはちよいと生臭えな。風情もねえ」

「キキキキ、シャアツ」

一鳴き、耳障りな声を上げるや扉が破れ、外から無数の人形が這入ってくる。

その奇態を月光が照らし出した。

青白い光の中、室内に無数に漂うそれは——糸。蜘蛛の糸に人形が吊られている。

なるほど、暗闇の中、遠間に肉眼で捉えるにはあまりに細い。不可視にも近いそれで人形を操っていたか。

「存外に洒落た趣向だ。それだけは褒めてやる。だが……」

そつと、後ろ手に窓を開く。

「シャアアアアアアアアツツ!!!」

その行為を逃走と見て取ったか、化蜘蛛は人形を嗾け、それ自身もこちらへ躍り掛かった。

流星は蜘蛛の脚よ。その速度は射られた矢にも勝ろう。

しかして所詮は蜘蛛。

はがね
兇刃で断てぬ道理なし。

夜空の果てより降り来る一振り、その速度は放たれた弾丸を超越する。

窓から飛来したソレの黒漆の鞘を掴み取り、柄を握る。

上段、抜き打ちの唐竹割り。

「キイツ——?!?!」

顔面を割り、腹までも断ち斬る。

一刀にて両断。

虫は、虫らしい断末魔を響かせ、二つに割れながら窓の外へ落ちていった。

化蜘蛛の支配から解放された人形達がばたばたと床に転がり落ちる。

血振るい……は思い留め、刀身をそのまま鞘に仕舞う。そもそもこの刀に血を落とすなどという行為が必要ないことは自明だが。

ここは子供らの家の中である。

なによりも。

「ああああ扉をこんなにしちまいやがつて」

無理矢理打ち破られ、倒れた扉に歩み寄る。蝶番が吹き飛んでいった。

「すまねえな。随分部屋を荒らしちゃった」

窓辺、ではないな。

目を凝らしたところで意味もない。五感によらぬ勘を働かせ、寝台の傍らに向き直る。

『』

どうやらそこで間違いない。

気配も虚ろで霞よりも朧な、しかし確かにそこに居る。小さな気配。

この部屋、いやこの屋敷の、本来の主が。

「日暮れ刻以来だな。あの時も、お前さんあの化物のことを己に報せ

「ターンアンデッド！ ターンアンデッド！ ターンアンデッド！！
ターンアンデッド！！ 花鳥風月♪ ターンアンデッドオ！！」

「どうした悪霊共群がってくるがいい！！ 生前の無念と後悔と獣欲を
聖騎士であるこの身に存分にぶつけてくるがいい！！ 特に最後の
奴う！！」

屋敷中に響き渡る四者四様の声。絶叫。悲鳴。怒声に嬌声。特に
最後のそれは是非無視を決め込みたいものだが。

「そももいくまいな」

どっこいと立ち上がり、淡い気配を見下ろす。

背恰好はめぐみんと同じか、あるいはもう少し小さい。

その辺りに目掛け、左手で撫でる。幸いそこには予想通り、柔い髪
と小さな頭の感触ならぬ存在が感じられた。

「安心しな。部屋はきちんと片付けて扉も直す。これから騒々しくな
ると思うが、どうか宜しくしてやってくれ」

『……………』

「そうかい。ありがとうよ」

部屋を後にする。

最後に垣間見た蒼い陽炎のような気配、月明りに煌めくそれは……
幼い娘の形をしていた。

一悶着二悶着と起きては片付け、子供らの引っ越しが真の意味で完
了した日。

裏門を抜け、雑木林を潜って、なにやら懐かしさすら覚える我が庵

に帰り着く。

「今帰ったぜ」

「あ、おかえりなさいジंकロウさ——え!?」
「あん?」

玄関戸で己を出迎えたウイズが目丸くする。

「な、なんでその子がここに!? あっ、ついて来ちゃったんですか!」

「んん? ……おお、ああ、そうか」

周りを見渡し、ふと腰元に左手をやれば。

「かかかつ! なんだ、遊びに来たのか?」

52話 悪意は頓に臭い立つ

正午を回り、朝方に比べれば寒さも幾分和らいだらうか。けれど空模様は薄く張った灰色の雲り。

陽の光の暖かみは空の彼方に遠く、為す術といえど牛皮のジャケットの襟を立て背を丸め、身震いするような寒気を誤魔化すことが精々。

早くも冬の厳しさに参っているこの軟弱者に比べ、アクセルの人々はどうか。

客引きの威勢は道々に響き、なんとなれば店先に大鍋を出してシチューを振舞う飯屋がある。

冷たい路上の雪を払い、寒空に露店を開く気合の入った行商もいる。

以前カズマとツルの字（ミツルギ）らを伴った路地の店は、今時分ならば定食屋を商っているだろう。腹具合も丁度いい。天麩羅でも突きながら。

「熱いのを一本きゆうっと……いきてえとこなんだがねえ」

人々の行き交う雑踏の向こう、道の端を人波を嫌うように一人見慣れた背中が歩いている。深緑の外套は若葉の如くに鮮やかで、悪く言えば矢鱈と目につく。

目につく筈の派手な姿が、不意に消え去る。

冒険者盗賊御得意のスキルとやらを使ったのだろう。眼球はしっかりとその後姿を捉えていたというのに、瞬き一つする間でそれは陽炎のように滲み、揺らぎ、捉え所を失くした。

だが未だ。まだ観えている。その存在、気配はこの手中にある。歩調や進路が一定して変わらぬことから、こちらの追尾が気取られた様子もない。

先達てクリスに同じ手法で尾行された経験が大いに役立った。少なくとも街中であれを見失う心配はなからう。

「はあ」

堪え切れず溢れ出た溜息は、白く漂いすぐに消沈する。

左腰にある差前の柄頭に手を置くと、暇だのつまらぬだの腹が空いたの言葉にも声にもならぬ思念が厭に雄弁で喧しい。しかしそうした声でも、思考を鈍らせる助けとせねば、やっておれんわ。

我に返るべきではない。ないが、やはり覚えずにおられぬこの、徒労感。

休日の昼間から、己は一体何をしているのやら。

遡ること一日半。

ギルドで受託した雪下ろしの依頼を終え、ついでに子らの顔でも見ようと、新居の屋敷を訪れた朝のことだった。

「朝帰りい？ カズがか？」

「です」

「うむ」

「そおーなの。あのカズマにありえないでしょ？」

居間のソファに腰を据え、暖炉の火を借りて悴かじんだ手を揉む。

気を利かせて淹れてくれたのだろう。めぐみんはコーヒーをこちらに手渡すなり、そのようなことを言い出した。

そしてめぐみん始め、ダクネス、アクアも口を挿んで密告会が開かれた。この家の家主筆頭、カズマの異変について。

「このところ外泊することが多いんです」

「せっかくこんな豪勢な屋敷を手に入れておいて寝泊りは他所で済ませるなど妙だと思わないか」

怪訝そうに言うダクネスに、しかし曖昧に首を捻る。

自腹を切って買い求めた我が家。衣食を差し置いて最も値の張る買い物だ。相応に愛着を持つのが当然であろうが。

「しかしまあ、カズにも外に付き合いの一つ二つあろう。酒盛りが過

ぎて時を忘れっちまうってんならそれこそ、結構なことじゃねえか」
「飲んでないんですよ」

「ん？」

「昼間に出て行って、朝に帰って来た時一度鉢合わせしましたが、お酒の臭いなんてしてませんでした。なにより……」

記憶を思い返すようにめぐみんは小首を傾げる。同時にひどく、不可解といった顔で。

「やたらにスツキリした顔をしてたのです。なにかこう、鬱憤というか毒気というか、そういうものを全部引っこ抜いたみたい……」

『おはようめぐみん。いやあ冬の朝の空気って、なんて清々しいんだろうな（キラッ）』

「儂げ？ いえ、むしろちよつとやつれてるくらいなんですけど、元気がない訳ではなく妙に晴れ晴れとしていて、明らかにいつものカズマじゃなかったのです。だからその、理由を尋ねようにもなんだか聞き辛くて」

「……………」

真剣な悩み顔をするめぐみんに、返す言葉を失くす。そうしてむむむと娘が腕組みして考え込んだ隙を突き、ダクネスとアクアの方に向き直る。

掌に隠し、そつと小指を立てた。

「いや、それはないだろう」

「ないないないないあのカズマに限ってそんな色っぽい話あるわけないってば」

「男児一瞬目を離れた隙に刮目させられると」

「言わない言わない」

迷いも逡巡も無く娘子二人、ぶんぶんと首を左右した。それはきつとかの少年に対する信頼の表れなのだと、思っただけがいい気がした。

一息、ダクネスが苦笑する。

「ない、と断言しておいてなんだが、心配しているのはまさにそのことなんだ」

「へタレのカズマが女の子を口説いてイイ仲になってる可能性は限りなくゼロだけど、悪い女がカズマを騙して誑かしてる可能性はかなり高いわ。今はまだ手加減されてるみたいだけど、もし今後骨抜きのお腹にされたカズマが、そのどこの馬の骨かも分からない女に高価なアクセサリーとか貢ぎ始めてあ・げ・く！ 私の貯金に手を出さないと限らないじゃない！」

蓄財の分配だの使途だのという話は、先の商いの上りを折半した己が口を挿めたことではないが。

金銭のみを憂慮するのではない。銭で支えられている生活というやつが現に今、ここにあるのだから。なればアクア嬢の言動を守銭奴の一語で笑い飛ばすのは早計か、あるいは浅慮なのやもしれぬ。

「当の小僧っ子は足？く何処に通っておるんだ」

「昨日三人でこっそり後をつけてみたのですが、途中で見失ってしまつて……」

「あれは明らかに盗賊スキルを使っていた。見付かったとは考え難いが、ああも全力で逃げに徹されては、騎士や魔法使いのスキルでは文字通り追い掛ける術がない」

「あの念の入れよう。それこそ他人様には言えないようなヤラツシーーお店に出入りしてるに違いないわ！」

それこそ盗人の足取りを追う捕り物めいた言動のダクネス、忌々しげに歯軋りするアクア嬢の威勢に思わず笑声を吹いた。

しかし片や。

「……カズマのことですから、変な女を上手くかわすのはお茶の子さいさいだとは思いますが。だから、べ、別にそこまで心配してる訳じゃないですよ？ あんなのでも私達の中で一番狡賢くて、変態的に目敏くて、器用で……お人好しな、リーダーなんですから」

紅い瞳が、冬空めいて翳る。不安の色に紅が流れ、揺れる。

直向きに少年の身を案じるその姿が、どうにも勞しい。

「……しょうのねえこつた、あの野郎」

「！ ジンクロウ」

大きな溜息を吐き下ろし、さも大袈裟に肩を竦めて見せる。

「世話の焼ける小僧だ。なあ？ めぐ坊」

娘はぱちくりと瞬きしてから、安堵するように柔く笑った。

娘子の一人くらい安心させてやるのに、労を惜しむなどさもない話だ。

とはいえ、少年とても男児おのこなれば色事に我を忘れるのも無理からぬこと。同じ男児としては、物知りぶって説教を垂れるようなみつもない真似はしたくない。

なにより、少年の下事情をこうして腐心して調べ回っている己を自覚してしまうと、それはもう阿呆臭いやら情けないやら。

「……安請け合いいちまったかねえ」

踏み均された雪を、自身もまた踏み、均して歩く。

人混みと呼ぶほどの数もないがそれなりの繁盛を見せる横路の商店通り。

危なげなく人波を躲す少年の背中を目端に捉え、街とその営みに素朴な風雅など覚えていた頃。

ふと傍に寄ってくる気配があつた。

「やつぱり！ 掃除屋のおじちゃんだ」

「うん？」

やや低い位置から声が掛かる。小さなお下げ髪の頭がまず目に入った。

いつかの青果店の看板娘であつた。手には一抱えもある編み籠を提げており、上から白い布を被せてある。

「よう、こんにちは」

「こんにちは！」

「御遣いかい？ 随分重そうだのう」

「うん！ お昼の分と夜の分」

娘は赤い肩掛けを羽織り、首元には特に嚴重に襟巻が巻かれている。きつと送り出される時、凍えぬようにと母か父にそうされたのだ

ろう……そんな光景が、ありありと浮かぶ。

「最近おじちゃんぜんぜん掃除にこないね。つまんない」

「おお、それがな。近頃は掃除屋より雪掻き屋が繁盛でなあ」

不満げに唇を尖らせる娘子に向き直り、その真ん前に屈み込む。

けれどこちらのそんな言い訳を聞くや否や、娘はぱつと表情を明るくしてその大きな目をさらに丸くする。

「あつ、じゃあじゃあウチにも雪かきしに来る？」

「ああ行くとも行くとも」

「やった！　じゃあねその時ね、雪だるま作って。うーんとおつきいの！」

「ははっ、うんわかった。お前さんの背よりもでつけえのを拵こぎえてやるぞ」

「やったやった！　約束だよ！」

仕舞いには飛び跳ねそうな勢いで喜び笑うその様が、なんとも微笑ましい。たかが「掃除屋のおいちゃん」に随分と懐いてくれたものだ。

その時、不意に。

「――」

「？　どうしたの」

問いかけに笑みだけ返し、立ち上がる。

通りの果てへ目を眇める。それは人々のどよめきと共に向かってきた。

蹄が轍を打ち、金属の車輪が石造りの路面を削る。

二頭立ての馬車であった。二列の馬体に曳かれた豪奢で巨大な箱は装飾の金細工がその身の置き所に困るほど夥しい。そこから生えた金属の四輪が雪を散水車の如くにそこら中へ蹴散らしていく。

「避ける避ける！」

「馬車が通るぞー！」

商人が、通行人が口々に叫ぶ。

目抜き通りならいざ知らず、この商店通りの道幅を走るにはあの馬車は明らかに過大である。

案の定、露店の軒に吊るされた果物や雑貨の幾つかを、馬車の飾り金具が掻き砕いていた。それら全てを無視して馬車は疾走した。僅かな減速もなく、その意思すら微塵とて無く。

「さ、おいで」

「わわ」

娘の背を抱えるようにして近くの路地へと退く。なんとなれば籠ごと持って運ぶかのように。

そうして、一拍前まで談笑に耽っていた道を馬車は容赦なく踏み荒らし、過ぎ去った。よしんば子供一人が道端に立っていたとして、あの御者、いや客席に座る主が気に留めるかどうか。

轢殺したとて止まるまい。アレにとつて道行く人々と路傍の石塊は等価値だ——そしてそれは偏見や誤解ではない。

悪意とは実に、臭い立つゆえ。

「おお怖え怖え。大丈夫だったか？」

「う、うん……あ、おじちゃん、服」

「ん？」

娘は己のズボンやジャケットを指差した。馬車に跳ね飛ばされた雪を幾らか被ったようだ。

娘子と御遣いの品は無事であることから盾としての役目はきちんと全うできた。ならば良しとしておこう。

「ごめんね……」

「ははは、謝ることなんざなーんにもねえよう」

健気に消沈する娘に微笑む。

視線は今しがた去って行った馬車の後塵を差して。

冬空の薄曇りの下でさえ目障りなほどの金色が、停まっていた。

「？」

除雪はされておろすが、融けかけの残雪に、なによりあれほどの速度で走っていた馬車。おそらくは丁度、己と娘子の立っていた位置で停止を試みたのだろう。制動に要した距離は相応で、商店三軒をやや過ぎるほどに進出していた。

しかし、なんだ。

客台から何者かが居りてくる気配も、御者が店に遣わされていると
いった様子もない。馬車は不動で、ただそこにある。

何の為に。

疑問を呈したその時、台車の後方の窓が揺らいだ。正しく言えば、
窓に掛けられた日除けの暗幕が退けられ、そこから。

こちらを窺う両目。姿容は暗幕に隠れ、こちらからでは見えない。

見えるのは一つ。ただ一つ、その目が物語る——怨念。

「！」

左腰でかたかたと刀が震えた。常と同じ、思念を伝える振動。いや
もつと単純な。

けたけたと刀が笑っていた。その恨みと憎しみを、心鉄こころから愉しげ
に嗤っていた。

程なく馬車は、現れた時と同様の無遠慮さで走り去っていく。針の
如くだった怨念の視線も既に遠い。

「……ありやあなんだ」

「領主のアルダープだよ」

応えなど期待せず発した己の独白に、しかし近場にいた露店の主人
が答える。

「普段は自分の屋敷からめったに出てこない癖に、珍しく出てきたか
と思えばこれだ……！」

轍の中に薄汚れた麻袋が埋まっていた。おそらくは焼き菓子用の
小麦粉だったものが、蹴散らされ踏み荒らされもはや見る影もない。

商品、材料、看板、調理器具、あるいは店そのものさえ。商売道具
を荒らされた嘆きが其処彼処で噴出している。

「郷くにの治め役と言うには随分と無体だな」

「とんだ悪徳領主さ」

悪態を吐いて店主は顔を顰めた。

周囲では早速、その悪い噂とやらが囁かれている。

「今年の納税額が厳しいのは、あの領主が税金を使い込んだ所為だっ
つよ」

「貢納品の麦を他領に横流ししたらしい。実際に行商の何人かはそれ

を運び込んでるところを見たって言うんだぜ」

「アクセルじや女は買えないだろ？ だから他領から女を買い付けて屋敷に幽閉してるとか」

「いやあ、どうも近頃は街から若い娘を攫って用立ててるんだってよ」
「中には十歳にもならない子供まで……」

ジャケットの懐を開き、そつと娘を引き寄せた。己の襯衣セーターの腹に耳を付けさせ、片側の方も掌で覆う。

少々、聞くに堪えぬ。

きよと不思議そうにこちらを見上げる娘に、ただ笑みだけを返した。

「悪事の噂は数え切れないほどあるが、どういう訳か捕まらない」

「捕まらない？」

「ああ、昔から何度も検察官様のお調べはあったのに、証拠だけがどうしても見付からないんだとさ」

「どうせ貴族相手だ。まともな捜査なんてしないんだよ」

「いや、でも俺が前聞いた話じゃ——」

なおも繰られ広がる噂話を見限り、娘の手を引いて歩き出す。

「さて、他に買うものはあんのかい？」

「うーんと、あとはね。あ、バター！」

「おおそうか。なら三丁目のパン屋だな。おいちゃんも一緒に行つていいかい？ 小腹が空いちまってよ」

「うん！ いいい！」

何が嬉しいのか、えらく楽しそうに娘はぐいぐいと腕を引いて、ずんずんと雪道を歩いた。

幸いに、この娘の両親とは顔見知りだ。冒険者の男が我が子の帰り路を送り届けても許してくれよう。

勝手知つたるアクセルの街、パン屋にはすぐに到着した。目当てのバターを買い、娘はそれを大事そうに籠に仕舞う。

「そら、御遣いをちゃあんとこなした子にはご褒美だ」

「えっ、いいの!?!」

焼き立てのスコーンを差し出すと、娘は瞳を輝かせた。

包み紙越しに暖かな生地が、冷えた指にひどく心地よい。

香ばしいバター風味、嫌味のない甘さと滑らかな舌触り。己はともかく、娘の綻んだ顔を見るに口には合ったようで何よりだ。

「おっとそういうえば昼飯前だったなあ。いいかい、おっ母さんには内緒だぜ？」

「あっ」

指を唇の前に立てて片目を瞑る。

娘もこちらを真似て頻りに頷き返す。

「うん！ 内緒だよ……んふふふっ！」

「くくくっ」

そしてどうやら盛大に、カズマを見失ったのだった。

53話 化けの皮の厚化粧

幼子を青果店に送り届け、元居た商店通りに取って返す。荒らされた店先は既に掃き清められ、ついでの残雪も掻いたのだから。先刻より幾分歩き易くなった道を進む。

「さて」

どうしたものか。

当初の目的である少年の尾行および目当ての場所、人物の特定……密偵のような仕事を、紅い娘っ子から仰せつかった訳だが。

流石に、隠形を用いて密かに行動する一人の人間を手掛かりなく探し出すには、アクセルの街は広すぎる。

朝帰りをするのだから、何処かに宿でも取っているやもしれぬ。捜索範囲を宿場に定めればあるいは。

いつそ今日は諦める、というのも一手ではある。

連日通い詰めるほどの入れ込み具合なら、後を尾ける機会は今後幾らでも巡ってくるのだから。

「――帰るか」

めぐみんには悪いが、もう少し辛抱して待っていただこう。それに、カズマの悪賢さは騒動を引き起こすが、どういう訳か災いとは縁遠いのだ。

己がこうして暢気に構えているのも、かの少年に対する甘えのようなもの。信頼、と言い張れぬあたり、己も大概ひねている。

雲の薄皮一枚向こうで、陽光の傾きを感じた。夕刻と呼ぶにはまだ早い。しかし確実に寒さの深まりを感じる。

道々では、書き入れ時を過ぎたといえ未だ飯屋が客引きに精を出している。

口にしたのは先程のスコーン一つ。その辺りの飲み屋で遅まきの昼飯にありつくのでしょうか。

そのような腹積もりで店を物色する。

商店通りを幾らか進み、適当な路地に中りをつけ入り込む。表よりも静かな、己好みの古い店構えが軒を連ねていた。

そう。格別意図したことではなかったが、その路地は丁度カズマの後姿を見失った場所だった。

「……」

静かだ。益々に。

人間二人が肩を並べられる程度の小路。奥へと進むほどに、そこは仄暗く、空気すら止まって見える。煉瓦造りの建物に両側を覆われ、見上げた細長い曇り空でさえ、ただの白い天井が張り付いているかのようだ。

人氣が遠退き、精々が壁の向こうに微かな気配を感じられるかどうか。

誰一人、消え失せた路、その先で。

「お兄さん」

何時からか、何処いずこからか、まるでその刹那に現れたかのように。

その人物は、己の行く手四、五歩先の壁に背を預けてこちらを見ていた。

一見して背恰好は判然としない。踝まである外套で全身を包み、起伏や肩幅が量れず、一体となった頭巾で顔容すら覗けない。

唯一聴き取った声は高く、絹を撫でるような質感をしていた。声音だけを手掛かりとするなら、相手はおそらく女であった。

「よかつたら遊んでくださいな」

「ほう、日も高え内から立ち仕事かい？」

「ふふ、そつ。持て余しちゃつてサ」

こちらの問いにあちらは「是」と答えた。

どうやら本当に相手は夜鷹……いや街娼である。

なんの、春を商うことそれ自体は特段珍しくはない。己が身一つ、それを活計たつきに生きること、奪わず害さぬその生き様、見上げこそすれ何をか訝いぶかる。

しかし一点、不審があるとすれば。

寡聞にして知らなんだ。この街に娼婦が、娼屋があるなどと。

以前、ギルドの受付嬢ルナを食事に誘った際、あれは確か言っていた。

『ふぐう、こ、こんな風に、ち、ちゃんと、普通に、男の人に食事に誘われたの、は、初めてで……ふぐう』

どうしてか座敷に上がるなりしゃくり上げて嗚咽し始めた時など、流石に返す言葉を失くしたものだ。

さにあらず
閑話休題。

連日の激務に次ぐ多忙。人手不足も祟り、他の職員が帰宅した後ギルドで一人夜なべするのも常であるとか。

聞くだに不憫であった。そしてその最たるものが。

『またー、また一人ー、友達が結婚したんですよお!! その子、王都の冒険者ギルドに勤めてて相手もその辺りを活動拠点にしてる冒険者パーテイの人とかで、ギルドで受付担当してる内に仲良くなってるのまま、つて……そのままによ!! なんなのよその定番パターン!』

なんで私の所には「パターン 寿」ブライダルです」が来ないの!?! アクセルの受付って呪われてるんですか!?! この受付台は呪われています座つたら二度と彼氏出来ません、とかそういうアンチパワースポットにでもなってるんですか!?! 私だってね、地元ではそこそこもてたんですよ? でもやっぱり見た目だけ目当てのナンパ男とか、胸しか見てないようなスケベ野郎とかそんなのばつつつかりで無視してたんです。働き始めれば周りは大人の男性しかいないしきつといい出会いがある筈よね……なんて言ってた過去の自分を張り倒したい! 外見だけでも褒めてくれるだけいいじゃない! なんて妥協しなかったのよルナあ! ふ、ふふふ、ふふ、たまのセクハラ以外で、女つてことを実感できる機会がないんですよ? あは、はははははは、笑ってください。笑って……ふぐう』

重ね重ね聞くだに、不憫であった。

口八丁尽くして宥めまし、遂には店の女将を呼んで四半刻掛けてどうにか慰め、落ち着いた頃。

『おかしいんですよ、この街の男の人……特に冒険者の男性。普通はもつとガツガツしてるもんなんじゃないんですか? そりゃあセク

ハラ下ネタは定番ですけど、実際に女性職員や女性冒険者に手を出した、なんて話、一切聞かないですもん。この街には風俗店の類は一つも届出されてないのに、どうやって発散してるのかしら……ち、ちち、ちなみに、ジジジジ、ジंकロウさんは、その、どうやって、し、鎮めるんですか？ なにって、そのナニを———』

酔いが回り切ったか、直後茹蟄のように赤熱してルナ嬢は昏倒した。女を背負って歩いた帰路。そこで望んだ東の空の、あの眩さが思い出される。

余計な記憶が大いに氾濫したが、要点は一つ。

アクセルに娼屋はない。より厳密に言えば、御公儀の許しを得た遊女あそびめは一人として居らぬ。あつてはならぬと定まっている筈だ。

ならば今、目の前に佇む女は私娼、あるいはモグリ花屋の客引きと
いうことだ。

承知の上での密売なのか、はたまた裏で賄賂まいないが利いているのか。

何れにせよ、相手は真つ当な娼婦ではない。

ならば相手になどせず、この場はただ立ち去ればよいだけのこと。善良なアクセル市民の一人として、遵法の心得を置いて何をか先んずることあらん。

「……」

懸念はほんの一つ。

少年の背中へ、さてどの辺りで消え失せたのだったか。

騒動の予感が起ち上がる。仄かに、厄介事の匂いを添えて。

ほとほと厄介な繋がり方だ。

「はあ、寒い……すっかり凍えちゃった」

「この寒空の下突っ立っておれば然もあろう」

「今日はずうつとお茶挽いてたからネ。だからちよつと自信喪失中なの。ねえ……」

女は徐に頭巾に手を掛け、捲り上げる。

その下の顔を露わにした。

まず溢れ出したのは、髪。緩く巻かれ、滝か急流の小川めいて流れ落ちる豊かな、薄桃色の長髪。薄暗がりの路地で、天辺から毛先まで

よくよく手入れされたそれは僅かな陽光を吸い上げてぼんやりと光を放っている。

浅黒い肌色をしていた。日に焼けたのではなく、それは生来の褐色なのだろう。不思議な話だが、ただそうした色をしているというだけでこの者からは何か、ひどく生物的な活力のようなものが想起されるのだ。

顔立ちの評は僅か二字で事足りる。美麗。

はつきりとした目鼻立ち。派手というより華美という表現がより適しているだろう。細く流麗な稜線を描く眉、大きな二重の目、形の良い鼻、厚く瑞々しい唇は髪色と同系色の紅が塗られている。それぞれの部位が華やかで、ともすると主張が喧嘩を始めそうなものを、それらはある一つの均整に完璧に従属した。

「どう、かな？」

愛嬌のある困り顔で、首を傾げて問うてくる。頬には微かに羞恥の朱が差していた。

しかし、薄く開かれた瞼の奥。瞳から発散されるのは——淫靡。

「……ああ、一気に目が醒めっちゃったよ。その器量で客が付かんとは到底信じられんな」

「ふふ、御上手。でも嬉しい」

「幾らだい」

こちらの一種不躰な物言いに、しかし女はゆるく首を振る。

そのまますると傍まで歩み寄り、突然外套の前合わせを開いた。

当然ながらその下には女の体があった。初対面とは打って変わって、一目でその形を見て取れるほどに分かり易く。あられもなく。

黒い絹の布地を縦長四角に裁断し、身体の前後に一枚ずつ貼り合わせ脇腹を紐で結んだ。服と呼ぶのも憚られる、そんな布切れで女は肉体を隠していた。

形の良い乳房の谷間は花柄の編み込みが施され、それが丁度Vの形に下へ下へ、臍を覗かせ、下腹の際にまでその先端が及ぶ。

匂いが鼻腔を満たす。

もう触れる。あと僅かに、三寸ほどで。

細い顎にそつと手を添える。導くように。誘われるように。

「ふふ」

「お前さん……」

顎を——掴み止めた。

「人ではないな?」

「ツツツ!」

眼前、鼻先が触れ合うほどの距離で、驚愕に見開かれる女の目。

その目が今一度、鬼火めいて光るのだ。

「な、なんのこと。どうしてそんなこと……」

「なるほど、瞳術の類か。そうやって目を合わせた者を惑わし、意思を奪うのだな」

「ちっ!」

舌打ちと共に手を払い除けるや、女は獣のような俊敏さで跳び退がった。

美しかった顔は今や苦虫を噛んだように歪み切っている。

「糞がチャムつ魅了が効かねえ!? てめえただの剣士だろ!? プリーストでもねえ癖になんで!」

「かっかっか、おうおう化けの皮の下は随分口が悪いな」

「うるせえ!」

悪態を吐き捨て、女はついでとばかり外套をこちらに放り投げる。

目眩めくらましにもならぬ。半歩でそれを躲す。

しかし、既に、女は頭上にあつた。

「バレちまったなら仕方ねえ! ホントは和姦がよかつたけど……で、でもまあ逆レ○プはサキュバスの専売特許だしなあ!!」

飛翔していた。

背中から黒い皮膜を、蝙蝠のそれにそっくりの羽を広げ。

見れば左右側頭部からも二本、歪曲した角が突き出ている。

実に分かり易いそれら身体構造物は、対手が人ならぬモノであるという紛れもない証左。

「ごちとらようやく、生」にありつけるチャンスなんだよ！ 黙ってびゅうびゅう搾られやがれー!!」

「かつ」

威勢の良いこと。

両手の爪が小刀の如くに伸び、尖る。皮膜が大気を叩くと同時に矢のような速さで女が降ってくる。

先程の動きといい、なるほど相手は間違いなく人外。人以上の膂力、人以上の敏捷性、極め付けは飛翔能力とききた。

しかし、それだけだ。

過去相対してきた異形モンスター共に、目の前のそれが大きく優るものはない。

その爪が到達する刹那を見切り、真下へ駆け抜けた。

「はれ?」

視界から突如消え失せたかのように見せ掛ける程度は造作もない。

立ち上がるうとするその背後、女の右肩へ納刀したままの剣を振り落とした。

「いひゃっ!! へ!! んあつ、はんん!!」

本身ならば魂ごと命を絶っていたろう。

しかし、鞘に封じられ、また打ち込みも警策を入れるような加減である。筋も骨も傷めるようなこととはあるまい。

問題は、この刀が呪わしい妖刀であり、触れた者からある種の“力”を吸い取ることだ。

「ひにゃああ!!? なにこれえ! ちから、抜けてえ!」

「お」

身悶えし、悲鳴とも嬌声ともつかぬ声を上げる女。

その女の身体が、縮む。頭が、手足が、胸が、尻が、全身が縮尺そのものを減じていくような。

「はははっ、化けの皮の下にもう一枚着込んでやがったか」

「ななななっ……!!」

そこにもはや女の姿はなかった。匂い立つ色香、滴るような艶麗の、妙齡の女は消えて失せ。

同じ薄桃の髪、同じ褐色の肌、そうして背恰好はリーンと同じか、やや小さい。

幼い娘子が、愕然とへたり込んでいる。

自身の体をあちこちと見回し、最後に両頬を手で押し込む。何をしたところで元通りにはなるまいが。

「ウソだろ!? アタシの幻術が……て、てめえ! さては解呪系デイスベルのスキルかアイテム持ってやがるな!」

「ま、そんなところだ。それよりも、だ」

「うひっ」

屈み込んで、相手の目を正面に見据える。

喉奥に悲鳴を飲み、娘は尻餅を突いて仰け反った。

『さきゆばす』とかいったか? 妙に手際の悪いところ見るにお前さん、一人商売ではあるまい。元締めは何処にいる? 根城は何処にある?」

「ううすみませんでしたすみませんでした! アタシ、出来心で、ついこんなことお!」

娘は尻餅から起き上がったかと思えば、今度はその場で土下座に伏せた。如何にも惨めったらしく、憐れを誘う声で陳謝を繰り返す。

溜息を吐き、立ち上がる。

「わかったわかった。とにかく答えな」

「は、はい。この道の奥にお店があつて……あ、ここからでも見えますよ、ほら」

「ん?」

言われるまま、道の奥へ振り返り——鯉口を切る。

「かかったなアホg——」

路地の奥は変わらず暗がりが続くばかりで、店の入り口らしきものすら見て取れない。

抜き放った刀身、その切先で眉間を差された娘に視線を戻す。

爪を引き出した両手を構え、それこそあたかも、こちらに襲い掛かろうとしたかのような恰好であった。

「見当たらねえな」

「ひっ、ひやいつ。ま、まちがっちゃいまひた」

「そうかい。なら改めて案内あないを頼む。次は間違えぬよう気を付けて、な？」

刀を引き、鞘に納める。

すると途端、娘は糸が切れた傀儡のように再びその場にへたり込んだ。

涙が滂沱し、鼻水がみよーんとうどん麺のように垂れ下がる。

「あゝ」

「あ？ あああ……」

そして娘を中心に、雨も降らぬに水溜まりができていた。

股座の間から湯気が立つ。

泣きべそとバツの悪い笑みが混ざり合って、娘の顔はなんとも、おかしい形になっていった。

54話 人の情事、サキユバスの事情

娘の言は、あながち口から出まかせという訳でもなかった。

路地の奥へと踏み入り進むこと暫し。商店通りからは遠退き、むしろ表通りの活気さえ間近にした裏路地に、その店は構えていた。

両開きの黒檀の扉。もぐり娼屋なのだから当然に看板など出てはいない……などと考えた己を嘲笑うかのような派手派手しきで桃色の立て看板が我らを出迎えた。

「……なんとか猛々しいというか、随分と日当たりのいい立地だな」

「あ、夜仕事がない日は昼間に喫茶店やってるっス」

「そらまた、仕事熱心なことって」

いや灯台の下、木を隠すならの習いもある。一概にそのやり口を迂闊と判ずるはそれこそ短慮か。

ふと傍らに目をやる。先の威勢は何処へやら。娘はすっかりとおらしくなった。

あの衣服とも呼べぬ薄布は小水に浸ってしまい、着たまま動くには少々障りがあった。それを何の躊躇もなく脱ぎ捨てる思い切りの良さはともすると感心すら湧こうものだが、全裸の子供を伴って外を歩くような趣味は生憎持ち合わせがない。

仕様がないうえ、己の羽織っていたジャケットを御仕着せている。ぶかぶかで寸法の合わぬそれを、しかし娘は存外に嫌がりはしなかった。

どうしてか時折、その褐色の頬を襟の内に埋めたり、袖口に鼻を近づけてひくつかせる。

「……」

「なんだ臭えか？ 中に入ったらすぐ着替えてきな。話はその後で構わん」

「え？ いや、うん……まだ、もうちよつとだけ」

「？」

是とも非ともつかぬ返事に首を傾げた。

「さても、扉に手を掛ける。

ちりんちりんと、涼やかな調べ。扉には来客を報せる為の鈴が設置であった。

『いらつしやいませ、ようこそ『夢の入口』へ』

華やいだ声に迎えられ、店に足を踏み入れた。

窓は全て暗幕を下ろされ、加えて灯が絞られただけでさえ仄暗い室内を、紫桃色の間接照明が染め上げる。それはもう、頗る眼に毒すくぶであった。

長椅子にずらりと行儀よく座る男共。皆、ここを訪れた客達である。

それを相手するのは勿論、店の者ら。つまりは遊女達。年、髪型、背恰好、体躯、肌、実に様々な容姿をした女達だった——見渡す限りの美姫、美姫、美姫だった。

道を歩けば振り返らずにおられぬような美しき女が、またぞろあられもない姿で。服と呼ばわるのも烏漕がましい儂い衣装に身を包み、そこら中を歩き回っている。

色、いや色香。この場を満たす匂いこそ、雄という生き物にとつては何よりの毒となろう。

「お待ちせいたしました。さあ、どうぞ——」

来客に気付いた一人がこちらに寄ってくる。艶然と笑みを湛えていた黒髪の娘は、己の傍らの娘を見るや「あっ」と口を開けた。

「し、少々お待ちくださいね。あははは……店長——！ 店長——！ メイアが帰ってきました——！」

愛想笑いもそこそこに、店員は小走りで店の奥へ引つ込んでいった。

「メイア、というのか。そういえば名乗っておらんんだな。俺あシノギ・ジnkクロウと……どうした、顔色が悪いぞ」

「ウツス、ダイジョブツス」

それだけ言つて、メイアは下を向いた。それだけ言うのがやっと、といった風情でもある。

桃色の照明で実際の血色など見て取れまいが、脂汗を浮かせて表情

を凝り付かせる様はどうも只事ではない。

暫くすると、奥からまた一人女が現れた。やはり他の女店員同様、肉感に富む身体——辛うじて乳頭と局部を、薄い布を細い革帯で留めた装束で覆っている。

メイアよりも淡い桃色の長髪。顔立ちは、先程この娘が化けていた妙齡の女に面影が見える。さては彼女が模倣相手か。

「て、店長」

「……」

店長と呼ばれた女は、しかし呼んだ娘に見向きもせず、真つ直ぐこちらに歩み寄ってきた。

「お客様、奥のお部屋にご案内いたします。ご足労ですが、どうぞこちらへ」

「ああ」

「誰か、奥にお茶をお持ちして。メイア来なさい」

「はい」

先導に従い、店の奥へ踏み入る。

同じく追従する娘の様はさながら叱られるのを予感してしおしおと耳を垂れる犬だった。

「……」

出入り口から奥への道中、店内中に視線を走らせる。そうして……見付けた。

壁際の長椅子、一席一席を目隠して仕切るのは商売柄の客への配慮であろう。その一番端の席で、必死に肩身を縮めているその。

「くふっ」

「ど、どしたんスカ……っ？」

「いや？」

奥の間は応接と執務室を兼ねているのだろう。壁際にしつかりとした設えの机、部屋の中央には対面に据えたソファと硝子卓が配され

ている。

敷居を跨ぎ、扉を閉めた瞬間、店長の女はその場に跪いた。

「この度は当店の従業員がとんだ御無礼を働きまことに、まことに申し訳ありません」

「て、てんちよ……」

額を石床に擦り付けんばかり。土下座という文化がこの地にも根付いていたのかと、場違いな感慨が過る。

両手を付いたまま女は動かない。おそらくは一言、許しを得るまでは。

片膝を突いて今少し近付く。

「おもて面を上げな。何はともあれ、まずは話をせぬか。お互い事情を通じねば、其方の誠意もただの自儘な託言になろうや。ん？」

「……はい」

「あと、この娘にも多少言い訳をさせてやっちゃどうだい？ 今にも死にそんな面つらだぜ」

「それはどうかお構いなく。ああ、なんならこの場で私が殺しますよ♪」

「てんちよお!？」

気品さえ覚えるほどに美しい笑みでなかなか辛辣なことを女は宣のたまった。

かと思えば、泣きつ面で悲鳴を上げた娘を、打って変わった氷のような目で座の姿勢から睨み上げる。

隣から、続けて発しようとした声を喉の奥に蹴り戻される音がした。

「貴女、自分が何をしたのか解っています？」

「………はい」

「貴女の軽はずみな行い一つが、我々と先人達がこの街に死に物狂いで築き上げた共生関係を、全て台無しにするところだったことを解っています？」

「………」

ゆつたりと、優雅に女は立ち上がる。しかし動きの緩慢さとは裏腹に、娘へと詰め寄る足捌きは居合の間合奪とりの如し。

娘の小さな顎を摘み、視線でその瞳を射貫く。

「貴女が今、こうして生き永らえていられるのは、一体誰のお蔭か解つていて?」

「つ、て……」

「店長のお蔭、なんて口にしたらアンタ本当に縊り殺すわよ?」

「ひいつ!? お、お兄さんです!! こここの人の、おか、おかおかげでっ、です!」

「そうよ、きちんと理解しなさい」

店長は娘から今再びこちらへと向き直り、深々と腰を折った。

「重ねてお詫び申し上げます。さ、おかけください。貴女は隣に來なさい」

革帯から刀を抜き取り、勧められたソファに腰を下ろす。

対面に店長、そして怖々とメイアがその隣に浅く座った。

「共生関係、と申されたか」

「ええ……そうですね。ではまず、そのことから」

この街、アクセルでは数多くのサキユバスが生活しているという。サキユバスとは淫魔、即ち悪魔の一分類。

アクア、エリスのような神と呼ばれる存在の対極に位置するのが悪魔であり、概してそれらは人間に禍を招く。

悪魔が糧とするのは、人間が身の内より発する感情や衝動、強い想念。それも怒りや憎しみ、悲しみ、怖れ、嫉妬、単純な物欲、飢えや渴き、果ては絶望と……とりわけ負極へと墮する魂を何より好むらしい。

故に、悪魔は見つけ次第払うのが習わし。国教たるエリス教にしてからが徹底的な悪魔廃滅主義を掲げている。

その、人間にとって不倶戴天の敵と断じられる悪魔が、なんと人里に住まい、あまつさえ商いをして暮らしている。

しかし、淫魔という種の生態を知った今、その疑問は容易く氷解した。

「私どもサキユバスが糧とするのは、男性の性衝動、色欲、淫猥な願望、その過程と結果に生じる精気です。それを発散したいと望む男性方

は、殊の外たくさんいらつしやいます。とても喜ばしいことですわ」「なるほど、持ちつ持たれつってえ訳だ」

「はい、人間社会の風俗産業なら私どもと男性冒険者達との間に確實な需要供給が見込めると、先代の店長が開業に漕ぎ着けました」

「慧眼恐れ入る。やあ出物腫れ物所嫌わずな身としちやあ確かに、切実だ。しかしよくぞ今の今まで隠し果せたものよ」

「お客様皆様のご協力の賜物ですわ」

銜てらいや含みもなく、女店主は微笑した。

「ですが、そう。強いて遠因を一つ上げるなら、サキュバスの吸精は必ずしも肉体の接触を必要としません。お客様が望まれる通りの淫靡な夢を見せて、その昂ぶりを精気として頂戴しています」

「はははっ、そいつあ道理だ。夢の中ならばそらあ手前の勝手も勝手。法も経も届きはしまいな」

「ええ、咎める者など居りません。お好きなだけ、望まれるまま、何をシても、誰とシても……」

女の笑み、それを形作る唇の隙間から赤い赤い舌がちろりと波打つ。まるで空気を伝い、この身を舐ぶられるかのような心地がした。

「此度は本当にご迷惑をお掛けしました。満足にお詫びのしようもありません……」

「いんや、既に頂戴した。娘つ子の仕出かした悪戯をきっちり叱り飛ばして反省させたろう？ 見な、この悄気返り様。くくく、心底懲りたつてえ面してらあ」

「……(・ω・)」

肩を落とすメイアの、なんとも曰く言い難い顔付きに思わず笑声が漏れる。

「責めの取りっぷりとしちや、十分なものを見せてもらったぜ？」

「いいえ、足りません」

こちらの言に、けれど女は承服しない。

穏やかに首を左右し、そうして閉じられていた瞼がゆるゆると開く。

「足りぬ、とは。どういふことだい」

「言葉や態度だけで全て賄うなんて、とんでもない。きちんと、誠心誠意の行動でお詫びを致します」

「さて、なんぞ働いてくれると言うのか。くふふふ、ならば庭の手入れでも手伝ってもらおうかい」

「ふふふ、御用命でしたらいつでもお伺いしますわ。でも、その前に……」

す、と女が席を立つ。淀みのない足取りで硝子卓を回り込み、己の側へ。

「お隣、よろしいですか？」

「ああいいとも」

ふわりと、静謐な身の熟こなしで揺れも少なく女が座る。

確かに隣を許しはしたが。隣も真隣、女はこちらの肩身にぴたりと体を寄せ、その掌は己の内腿を這った。

吐息が耳孔を擦くすくする。女体特有の甘味が鼻の奥底まで香った。

もの問いに笑みを送れば、妖しげな笑みが返ってくる。しかし、応えのようなものは一向なかった。

「はしたない女はお嫌い？」

「はて、今この目ん玉にや息を呑むような婀娜あだっぽい女しか映っちゃいねえがなあ……？」

「ふふつ、もお……達者な人。そんな風にいろんな子を夢中にさせてるんでしよう？」

「おいおい擲揄からかってくれるな。夢を見せてくれるのは其方らであろうに」

「ええ、お見せします。天にも昇るような、素敵な夢を……」

開かれた瞼の下で輝く、宝珠の如き煌めき。紫水晶にも優る光輝を発する瞳が己を捉えた。捕えた。

顎に、しなやかな女の手が添えられる。

ゆっくりと迫る。その美貌が、今や燃え盛るような魔性を放つ微笑が。

「この身をお好きに、どのようにでも、舐って、翳って、貪って……」
「また今度な」

「はいまた今度——はい？」

「かかかかっ」

美しい笑みのまま、女の時が止まる。笑みの形で凝固する。

それがなんとも、驚愕に揺らぐ内心とは裏腹に美術品めいてあまりに見事で、不躰なものも構わず大笑した。

「どうして……」

「あ、店長そいつ魅了効かないツスよ。なんでかわかんないツスけど」
「……」

すつくと店主は席を立つ。そのまますたすた元の椅子、娘の隣まで戻って行き、実に淀みなくその頬を抓り上げた。

「いひやひやひや！ いひやいつふ!! いひやいつ!!」

「そ・れ・を・先に・言い・なさい」

「はひっ！ すんまつひえんひた!!」

ぐにぐにと抓りに抓り、引っ張り上げ、最後にぱちんとゴム風船のように頬が元に戻る。

なんともはや痛そうだ。涙目に頬を擦る娘に憐憫を覚える。

「オホホホホ。まったくもうこの子ったら慌てん坊で」

打って変わって女主人は朗らかな笑顔を作った。まるで何事もなかったかのように。

「さきゆばすつて奴あ、その瞳術をどうも好んで使いたがるらしいな」

「あは、はは、私どもにとって、その、アイデンティティのようなものでして……すみませんお許してくださいお慈悲を」

「今になって掌返そうなんて気はねえから安心しな」

取り繕った笑みも失せ、女は観念した様子だ。

娘と二人、似たようなバツの悪い顔が並ぶ。さながら仲の良い姉妹が親子である。

「けれど高位のプリーストでもないのに……どうして効かないのかしら……」

不貞腐れたように呟く女に苦笑する。

「呪いで穢れた血に呪いの入り込む余地がねえというだけの話だ。自慢にもなりやあしねえ」

「……」

微かに震える柄頭を押さえ付ける。また、なんぞ嗤っているのか。

「とこころでだ」

「あ、はい、なんででしょうか。淫夢のご入用ですか？ ああそれともこの身を直接お求めですか？ どうぞご遠慮など無きように。今なら一晩、いえいえ三日三晩でもどうぞご存分にお使いいただいて結構ですけれどもええ本当に」

「あつ、店長ズリイ！」

「アンタは黙ってなさい」

「それよ」

きよとんと二対の瞳が己を見返す。

「お前さん達や夢の中で事を行い精気を喰らうのだろう。だといいにお前さん、何故素肌で仕掛けて来た？」

「あー」

「――」

サキユバスの能力を聞き及ぶに当たり、ふと擡げた疑問がそれだった。

空腹であったから？ いやいや、先程ちらと見渡した店の客入りは上の上。むしろ店側の人手不足を心配する程度には繁盛極まっている。

ではメイアという名のこの娘に何かしらの問題があるのか？ 外見は確かに幼い。しかし器量は十二分なものを備えている。血気の激しい性も仕事となれば抑えが利くらしい。加えてあの変化の術、客の好みに合わせて千変万化できるとなれば引く手は数多あろうに。

昼日中の街中で通りすがりの男を捕まえ事に及ぼうなどは無茶無謀の極み。そんな危険を冒してまで、こんな娘っ子が大の男を犯さんと画策したのは……何故だ。

「この子、処女なんです」

「ちよっ!?!」

「はっ..」

あつさりど、店主の女は言った。言い切った。

当人にとつては一大告白であつたらうそれを、逡巡する間もありしなかつた。

「今時珍しくもないんですよ？ サキュバスの処女」

「っ!? っ!? っ!?!」

「寡聞にして知らなんだが。そういうものかい」

手をひらひらと振つて店主はからからと笑う。

かんかんに顔を赤く染め上げ、娘は店主と己を何度も何度も見返す。

「昔はそれこそ、男性の寢所に直接忍び込んで、淫夢や魅了、そしてこの体全部を使って心も体も骨抜きに搾り取るのがサキュバスの作法でしたわ。でも時代は移り変わるもので、今や人間社会全体の悪魔への警戒意識はかなり醸成されています。対悪魔用アイテムやスキルの開発が進んだというのも一因ですが……夜這いに失敗するだけならまだしも、もし通報などされたら、エクソシストが近隣全域の浄化を始めるでしょう」

「なるほど、危ねえ橋は渡れんな」

思いの外切実な内情であつた。

「男性に触れるのも触れられるのも夢の中だけ……なんてことも、今の、特に若い世代のサキュバスには結構多いんです。で、この子がまさにそれで」

「ううううううううううう!!」

「行きずりの男性を捕まえて、あわよくばロストヴァージンを……なんて夢見ちやつたんでしよう？ まったくサキュバスが夢中にさせられてどうするんだか」

「ふんぐううううううう!!」

女店主は実際にこやかに娘子の羞恥心を抉る。その嫌味もまた剃刀めいた切れ味を揮っている。

思うに先程の言葉足らずを根に持つてのことではなからうか。

「さっさっ、こおんな未通娘は放っておいて、シノギ様？ また今度なんてつれないこと仰らないで。今晚にでも、こちらで宿は御用意いたしますからあ」

「おや、人と悪魔が通じるなあ、障りがあるのではなかったか？」

「大丈夫です和姦なら！」

「左様で」

めげず折れず元気良く店主は瞳を一層妖しく輝かせ身を乗り出した。

はち切れんばかりの乳房の揺れは眼福に相違ないが、端々に滲む必死な氣勢がなにやら面白可笑しい。

「ちえっ、自分だつて御無沙汰のくせに……」

「なんか言つたかしら？」

「いえいえいえいえいえいえ」

このまま姉妹漫才を鑑賞するのも一興か。

一向に運ばれて来る様子のない茶を待ち侘びながら下らぬことを夢想した——その時。

「て、店長!?! 大変大変大変!!」

「こおら、お客様の前よ」

突如開け放たれた扉から、従業員と思しき娘が飛び込んできた。

慌てふためき息せき切らせ、娘は店主の諫めにもろくろく応じず。

「ガサ入れだよ！」

55話 命懸けの気組

「私のお得意様の、ほら警察官の人、その人がさつき報せに来てくれたの！」

ばたばたと店内が騒めいている。

照明の色彩は薄桃から、自然光に近い淡い暖色の白へ。長椅子、仕切り板は残らず裏手に運び出され、円卓や飾り椅子が其処彼処に配される。

「ああこっちは俺達が運ぶから！」

「店員さん！ この観葉植物どうしますか!？」

「バインダーとペンは残らず集めろ！ 一つでも見付かったらアウトだぞ！」

店の娘らは無論だが、むしろ客の男共こそ率先して内装の細工を買って出ている。その統率力たるや厳しく調練された軍兵にも優ろう。

あ、という間とはまさにこのこと。店の様相は一変し、誰がどう見たとてここは何の変哲もない茶屋となった。

作業を終えた男達の前に店主が歩み出る。そうしてその場で深く一礼した。

「本日は御来店いただきまことにありがとうございます。そして、本当に申し訳ありません。先程のご説明通り、もうすぐ当店に緊急査察が入ります。皆様の、折角のご足労をいただきましたにもかかわらず、本日の夜営業は断念せざるを得ません。重ねて、お詫び申し上げます」

「いいんだよ店長さん」

「そうだそうだ。悪いのは頭の固い官憲共さ」

「今日のところは大人しく帰るよ」

「また今度、いい夢見させてくださいよ！」

突然の店仕舞い。ここを訪れるに当たり、期待に胸も下の方も膨らませていたのだろう野郎共は、しかし実に従順に、頗る行儀すべ良くそれ

に応じた。いつそ気味が悪いほどの聞き分けの良さである。

「ああつ、皆さん、お心遣い感謝いたします……！」

『ありがとうございます！』

店主を筆頭に、店中の娘衆が頭を下げ、それに見送られながらぞろぞろと男達は店を出て行つた。

「……でもホント突然だね。情報提供は密にした筈なのに……」

「ついさつき決まった査察なんだってー。昼過ぎくらいに警察署に直接命令が下りてきたーとか」

「それにしたつて突然過ぎますよ！ それも抜き打ちでなんて初めてじゃないですか」

「なあんて言つてたかな？ なんか偉い人の焼印が入つた封書を見たらーつて」

「はいはい！ 無駄話してないで！ 喫茶店シフトの子以外は今日は全員帰宅！ 帰り道はなるべく分散すること！」

『はーい！』

店主が手を叩いて下知を飛ばすや、遊女らはすぐに店の裏へ下がる。

「ああそだそだ思い出した。査察の命令を受け取つたのが、なんてつたつけ？ なんとかかの会の会長の人だったんだってー」

「なんとかつて、それ『女性の婚期を守る会』の!?!」

「ううわヤバイじゃん。たしかその人、王国検察官だつけ」

「そりゃ話進むのも早いわ……」

会話の姦しさだけは扉を向こうにしてなお止む兆しもない。流石うら若い娘子よ。

暗幕を開いた窓から茜の陽が射し込んだ。

そうしてなんのかのと店の為に忙しなく動き回るそんな彼ら彼女らを、暢気を気取つて眺める阿呆が一人。

止り木卓を背にして脚長椅子に座る。他の客達共々に、己もまたここを引き上げるのが順当であつたらうが。

すると店開きに一段落つけた店主が、その暢気者の方に歩み寄ってくる。

がらりと変わったその装いに思わず両の目を瞬いた。白い開襟シャツに袖のない黒の中衣チョッキを重ね、その美しい脚の形を見せ付けるように細身のズボンを穿いている。いや、細袴とでも呼ばれる方が風情は合おうか。

後ろ頭に髪を結び上げたことで項うなじが露わになる。給仕としては申し分のない居姿であるのに、端々に香る色と艶は流石、魔の女生か。

「お騒がせしております」

「構わねえよ。しかし、難儀なことになったな」

「ええ、青天の霹靂と言いますか、従業員一同驚いています……」

「女性の……あー、なんと言った」

『『女性の婚期を守る会』ですわ』

「ああ、そうよそれよ。かかつ、またぞろ大仰な名めえだな」

さて気安く笑ってよいものかも判らぬその組名。聞く限り御公に属する団体とも思えぬが。

「私どもの天敵……いえ、私どもが天敵、の方々です」

「名の通りの体裁と思つてよいのかな」

「はい、正しく」

アクセルには独り身が多い。男女の別なく、若年から中年にかけての年代層、所謂現役世代の未婚率が他の街と比較しても突出しているとか。

ここが駆け出し冒険者の集う街であり、立身出世と一攫千金を狙う貪欲な冒険者にとって旨味の少ない土地であること。より収益の見込める都市近郊に河岸を移す者が少なくないこと等も、独り者の数が目立つ一因に違いあるまい。

あるまいが、最たる理由はやはり一つ。淫魔の営むこの店の存在であらう。

「かかかつ！ なるほど。夢見が好過ぎちまつたか」

「はい、それはもう、皆さん大変ご満足いただきました……」

男共が日々募らせる熱情を、余さず残らず搾り取ってくれる魔性なる美姫達。しかし、そうした情欲を発散しまた満たした男が、いざ日常生活に立ち戻った時、同輩の女冒険者に、あるいはギルドの受付嬢

に、酒場の女給に、商人の娘に、果たして見向きなどしようものか？

答えは、どうやら否であった。

「そうかそうか。客が望む女に化けるのもお手の物よな」

「現実ではどうしても手が届かない相手だから、と……やっぱり、ここで妥協できてしまうのでしょうね」

「くくく、妥協で済めば可愛いもんだが」

この街の男共、とりわけ男冒険者達は、文字通り淫魔に夢中という訳だ。

その煽りをもろに食らったのが、誰であろうアクセルの女達である。無論、男など要らぬ一本立ち上等と、生涯独立独歩に邁進する女傑とて在ろう。

問題はそうでない者。出逢いと恋路、ゆくゆく果てに愛した誰かと結ばれたい……そういう至極真つ当な願望を持った女達。

そんな彼女らの切なる夢が、この街ではやんぬるかな事程左様に気の毒極まって惨たらしいまでに——叶い難いのだった。

止まぬ嘆きと悲しみの喘鳴。晴らして見せよう女の辛み。満たしてくれよう女の幸せ。ぶ厚い有志が積もり募り、遂に立ち上がった救いの志士。それこそが『女性の婚期を守る会』であった。

「その会長殿に目を付けられたのか」

「というより、以前からマークされていたようです。ですがご存知の通り、現実では性行為を致しませんから。疑いはあっても証拠は出ず、あちらも動くに動けないまま膠着が続いていました」

「今になって痺れを切らしたってえのかい。そいつあなんとも」

まるで、期を見計らったかのようなだ。

メイアの悪戯を見咎めた己が、のこのことこの店を訪れる機会を。

では、それは誰にとつての好機だ。

わからぬ。当て推量を練るにも材料が少ない。

「本当なら、今にもお詫びをしなければいけないのに……」
「ん？」

声音と肩を落として店主が呟く。

律儀というか、いつそ執拗なまでの女に苦笑した。

そしてふと一つ、思い付いたことを口にした。

「さて、果たしてこの身に詫びを受ける筋合いがあるかどうか分からんぞ？ 此度の其方らに対する報せ無き御調の儀、あるいは誰ぞの謀によるものやもしれぬ」

意味ありげな笑みも添えれば、胡散臭さもより引き立とう。

なにせ流れを追えば、首謀は順当に言つて――

「ふふ、ぐ冗談を」

「冗談なものか。貧乏剣士は世を忍ぶ仮の姿、真なる実態は御公儀御雇いの密偵なり……などと、大見得切らぬとも限らん」

「いいえ」

「ふむ、どうしてだい？」

「私どもが未だに生きておりますから」

微笑が女の貌を彩った。それがなにやらひどく、超然としている。

「不死殺しのシノギ・ジंकロウ。貴方がその気になって、殺せぬモノなどありませんようか。たとえ魔界の理で存在する悪魔達^{わたし}であっても、貴方は屹度^{きつと}、斬つてしまわれる」

「……」

「けれど、私は今生きています。メイアも、お店の子達も皆、生きています。シノギ様がその刃を納めてくださっているからです」

今更に、理解する。化外なる女の、その覚悟。

悪魔の身で、人里に降り商いをする。これを蛮行と呼ばず何と言う。いつ何時見付け出され、滅される恐怖と隣り合わせの活計など。

何故。

何故だと？

それこそ営み、生きる為。悪魔とても命懸けで生きているのだ。

この女店主は、己がこの店に立ち現れたその瞬間に、斬り殺されるという一つの未来を甘受した。あるいは娘子の責めを、その身で代わってでも……これ以上は無粋であろう。

「見事な気組よ」

「……」

女は無言で首を左右する。否や、というよりそれは謙遜か、あるいは

は平坦な諦めのような。それが至極当然で、今更誇ることも、嘆くことですらないと、その胸の内定まっている。

ならばこれ以上言い募るもまた愚劣であろう。

一吹き、笑う。

「ところでなんだいその、不死殺しってえのは」

「あら、ご存知ありませんでしたか？ 魔王軍幹部、アンデッドたるデュラハン・ベルディアを、あろうことか剣で斬り破った異端の剣士シノギ・ジंकロウ様……お噂はかねがね轟いていますのに」

「幸いそんな御大層な通り名は近場では聞こえんな。随分とまあ、耳障りのお宜しい詩吟だこって……」

こちらの軽口に、女は愛想良く笑ってくれる。なんとということはない客商売なりの心得が。

なんとということはないと、泰然と肝の据わった様が。それがどうも、いかぬ。

なにやら、節介の虫が疼いてくる。

「酒はあるかい」

「はっ？」

出し抜けのこちらの問いに、女は即座に返答しかねた。

無理もない。店主の目の前にいるこの阿呆めは、何条以てかこの期に及んで店に居座ろうとしているのだ。

「酒精の類は置かんか。まあ喫茶と謳うのだからしようがねえやな」

「い、いえ、ございます。でも……」

「では一杯貰えるか。生で構わん」

「……よろしいのですか」

これからこの店には女性の何某とかいう組合を擁する検察による調べが入る。そんな現場に居合わせるつもりかと、女店主は言外に問うている。

痛くもないならいざ知らず、己の腹は痛く患っている上に矢鱈と真っ黒いときた。捌いて探られて、無事で済む筈もない。

だが。

「客が一人も居らぬでは些か見映えも悪かろう。乗りかかった舟だ。

この老骨を權の代わりに、とまで驕りやあしねえさ。ま、柄杓程度の役には立つかも知れんぜ？」

「……酔狂な人ね」

「まっこと然り然り、酔っ払いにやあ違えねえや。なればさあさあ、この酔漢めに早う一杯注いでくんな」

「もお……」

処置無しの男に呆れ、返す言葉すらもはや失せた。そうして女は観念したように微笑を浮かべる。滴るような色艶は抜けて落ち、えらく素朴で柔らかな顔だった。

注文の品を取りに店主は奥へと下がった。

「ん」

「おっ！」

その時、鼻面に薄い板切れが差し出された。黒革の装丁に紙を貼り付けたそれは、どうやら店の品書きである。

隣の席に腰掛ける者があった。メイアである。

しかし。

「おいおい随分と様子が変わったな」

「うっせ」

徳利襟のセーターにズボン。思えば着せっぱなしの牛革ジャケットを肩にかけて。

実に落ち着いた装いであった。何一つ不自然なものも身に帯びていない。それこそ先の布切れに比べればこの上なくまともな姿だ。

まともであるが、正常ではなかった。

様子が変わった——それは服装だけを差しての評ではない。姿が、容が、明らかに変質している。

まず、肉付きが落ちた。幼いながらもあつた女らしい体の丸みが失せ、代わりに筋と骨が目立つ。肩幅や腰回りはより顕著であろう。

顔立ちに大きな変化はない。しかし髪は耳が覗くほどに短く、睫毛や唇に施されていた化粧気も落とされている。

美しい造形はそのままに、性の有り様だけが向きを変えた。

そこには華麗な“少年”が座っていた。

「お前さん男児おのこにも化けるのかい」

「悪いかよ」

「いや悪かねえが」

「……こつちの需要もあんだよ」

ぶつきら棒に少年が言い捨てる。

己はといえば、奇妙な得心を抱えて苦笑する。

どんな世界だのどれほどの時代だの跨こごうと……衆道とは何処であれ拓かれ、そして啓かれた文化であるようだ。

こちらの視線に好奇の色でも見えたか、メイアは帽子を目深に被った。赤い鳥打帽は、無論のこと狩衣の用ではなく、この姿におけるこの子なりの盛装であろう。

「……そんなに変かよ」

「いやや？ その容姿なまりもなかなか愛らしいぜ」

「………あんだ、そつちの趣味もあんの？」

「戯け。褒め言葉くれえ素直に受け取りやがれ」

少年は鼻を鳴らして、如何にも愛想悪く卓に頬杖を突く。

ところが帽子の鏢の下に見えた口元は、薄っすら笑みの形をしていた気がする。

「客があんだ一人だけじゃ寂しいだろうから、アタシ……じゃねえ、ボクも同席してやるよ」

「ほーん、そいつあ心遣い痛み入るね」

ならば格別、男に化ける必要はないように思うが。不用意に嘘を数重ねれば、何かと瑕疵ほろも出易い。

……しかし、これも、この娘なりの思慮なのだろう。

品書きを開いて「少年」にも項を見せる。

「何か頼みな」

「別に要らねえけど」

「客が注文も付けずに居座ってちゃそれこそ不審であろうが」

「あ、そっか。うーん……じゃあミルクケーキ」

「おお、この『ぱんけーきせつ』ってのにしな。飲みもんと一緒くだとよ」

「いやそんな要らねえし……」

「なんでだい。うんめえぞお、ぱんけーき」

「知ってるわ。ていうか、ボクらが人間の食べ物食っても意味ないつてあんた知ってんだろ……」

「おうい、娘さんよう。ぱんけーきせつと三つだ」

「聞けよ!？」

女給の返事を聞きながら、傍らでぶんぶんと怒る少年をあやす。

暫時、朗らかな時間の流れを感じていた。

「来ました」

「!」

「いっ」

卓に硝子杯を置きながら、店主の女が囁く。

それとほぼ同じくして、扉の鈴がけたたましく鳴り響いた。

「検察だ！ 全員その場を動かないで！」

56話 抜き打ちの

開け放った扉から、開襟姿がぞろぞろと店の中に入ってくる。一樣に青い制服、青い制帽、そして一人残らず現れたのは女であった。

その先頭、いや筆頭に立つ人物こそ、その名にし負う『会』の長。「私は王国検察官セナ。本日これより、店舗に対して内部捜索を行います。容疑は『無許可での風俗営業』」

応対に進み出た店主に、検察官の女は書面を提示した。

所謂、令状であろう。

「先にバックヤードへ入って。裏口は開かないで！ 店長、店の帳簿を見せてください。店頭も隅々まで調べなさい！」

号令ははきはきと、指示は無駄なく端的で手際も良い。そして実に、無遠慮であった。客商売、飲食を饗する見世、だからとて何をか配慮などあろう。

捜査員らは一切の手心なく店中を調べ尽くした。棚という棚を開け放ち、食器や酒瓶、調味料に至るまで辺りに広げ、棚の裏、絵画の裏などは序の口、床下の収納庫に潜り込み、なんとなれば天井板を外して顔まで突っ込んだ。

それで正しい。

公権力の行使に際して、迷いや躊躇などというものは不要、否、もはや不実なのだ。正義ここにありと傲岸を宣う者は、安易な倫理観で行動の精細を欠いてはならない。それは真実究明行為における不正義、悪業と呼んで差し支えない。

そこまでの傍若無人が赦されてこそ初めて、明かされた真は揺るぎないものとなる。

(つまりだ。これだけつぶさに御調いただいたならこの上は疑いの御尊眼今少しお和らげくだされること疑い無くまつこと有り難き幸せとな)

(くっど。回りくどっ)

(くくくっ、ま、あれよ。向うさんにも面子があらあ。抜き打ちの家捜しなんて横車あ、そう何度も押せるもんじゃねえのさ)

(今回さえ乗り切れれば疑いは晴れるって意味?)

(その通り)

(……ホントかよ)

それこそ疑わしげな目で少年は己と、店を駆けずり回る捜査員らを睨んだ。

「悪いようにはせん。おお、なんなら己が請け負って進ぜよう……だからよ、お前さんが気に病むことなんざ無えんだぜ?」

「なっ、別に、アタシは……そんなこと……」

少年は再び、その表情を鍰の下に隠す。

自身の働いた悪戯と此度の御調、奇妙な重なりで起きたに過ぎぬ二つの出来事。そこに責めの所在を問うことこそ愚かしからう。

だのに自責を負うてしまうこの少年が、なんとも劳しいのだ。

帽子の上からその小さな頭を軽く撫でると、三白眼の不満顔がこちらを見上げた。

「ぐぬぬ……や、やさしく撫でんなっ。せめてヤラしく撫でろ!」

「どんな文句の付け方だそりゃ」

ちりん、と。鈴が鳴った。

「ん?」

「うげっ、あの魔道具……!?!」

音の出所を見ると、それは検察官の女の手にあった。

掌に収まるほどの金属の半球。それが黒と白で色分けされた台座に乗っている。

半球の頭頂に釘が打ってある。手押し鈴のようだが、少年の浴面を見るにそう安直な代物ではないらしい。

(なんだいありゃ)

(相手の嘘を看破するベルだよ)

(ほう! そんな便利なもんがあるのか。いやつくづく魔法様様よな、この浮世は)

(感心してんじゃねえ! やべえやべえやべえどうしよう……)

メリアは青い顔で頭を抱え、卓に俯く。

己の方は一つ、素朴な疑問が浮かんでいた。

(しかし、嘘を見破るといふなら、わざわざこんな家捜しをするのは何故だ。店の者を問い質せば事は早かろうに)

(一応スキルとか魔法とか、誤魔化す方法はいくつかあるんだよ。実際悪魔^{アタシ}達は精神作用系の魔法には耐性あるし)

(なるほど、何れにせよ証拠の現物があるに越したこたあねえ訳か……ん？ ならばお前さん、何をそんなに慌てふためく)

「あんたがいるからだよー!」

声を潜めるのも忘れて少年が昂する。当然に視線の集まりを感じ、すぐに身を縮こませた。

(まあ、その辺りもどうにかなるだろう。いや、むしろどうにもならぬ、といったところか)

(はあ?)

不意に。

「ん?」

己自身に刺さる気配。所謂、視線の針を感じた。

とはいえ敵意、害意ほどに険を孕まぬそれ。出所を追って周囲を見渡し、見付けた。

捜査員の女の一人である。青い制帽を目深に被り、顔容は窺い知れぬ。が。

「っ!」

彼方に此方が目を向けたと見るや慌ててそっぽを向いた。その挙動だけでも十二分に不審である。

「ん?」

疑りを以て観察してみれば、その背恰好、歩幅、細かな挙措、なにより制帽の中に纏めて結い上げてあるのだろう金髪。実に見覚えがあった。

「……なんだよ、知り合い?」

「そのようだ。声を掛けて来んあたり何か訳ありらしい」

「ふーん」

「し、失礼します。パンケーキセットです!」

前から声が掛かる。振り返ると、そこには両手に盆を持った女給の

娘が立っていた。年頃はメイアと同じほどに幼い。メイアよりも淡い桃色の髪、透き通るように白い肌をしていた。

止り木カウンタの向かいから盆が卓に置かれる。焼けた丸い生地、甘い湯気を立てたパンケーキに、バターがとろりと溶け広がっている。

「おお、ありがとよ。うくん良い匂いだ。早速頂こうかね」

「はい、こっちはメイアちゃんの分。それとミルクケーキね」

「サンキュー」

「それと……あの〜」

遠慮がちな声がおも降ってくる。

それもその筈、娘の手にはもう一人前、パンケーキの皿があった。なにせ己はしっかりと三人前を注文したのだから。

どうすればよいのか、娘は困った顔でそのように問うてくる。

「おととと、すまんすまん。そいつあ窓際の席に置いてきてくんな。

右端のあそこだ」

「はあ……?」

「?」

女給の娘も、メイアも意味が分からぬといった顔で首を傾げている。

なにやらそれが面白い。さながら悪戯の細工を密かに施しているかの心地であった。

「証拠品はまだ見付からないの!? 使途の分からない物品、名目不明

の領収書、メモの切れ端でも構わないわ! どんな小さなことでも報

告しなさい!」

「だ、駄目です会長」

「バックヤードや食糧庫、金庫まで開けさせましたが、何も……」

会長と呼ばわる検察官の苛立ちとは裏腹に、店中を漁る捜査員からの報告は芳しくない。

彼女らの尽力が実らぬのも無理からぬことだ。どうしたとて、ない袖は振れぬ。

実際の行為はおろか、客との金銭の授受もごく少額。おそらくは帳簿上にそれらしい項目を設えてあるのだろうが、まさかそんな木っ端

な小銭が娼屋商いの上りなどとは思うまい。

会長、検察官セナはその黒髪を掻き上げ、落ち着きなく頻りに眼鏡に触れた。取り澄ました顔をしてはいるが、内心の焦燥は一目瞭然。

このまま事が運ばば、それで目出度く仕舞いと相成るが。

「……」

「おっ？」

「げっ」

今再び視線が己に刺さる。しかし此度、こちらを見たのは眼鏡の奥の切れ長のそれ。検察官殿がじつとこちらを見据えていた。

それに気付いたメイア少年が呻く。

そして、検察官殿の足は真つ直ぐこちらに向かつてきた。

「お待ちください。あの方は」

「退きなさい。彼に二、三質問をするだけです」

さっと店長がその行く手を遮るが、女の方は明らかに訊く耳など持っておらぬ。

先程からの様子を見るに、今回の査察はどうかや相当の確信を以て臨まれたものであるらしい。いやさ抜き打ちの家捜しとは得てしてそのようなものだが。

しかしいざ捜査が始まって早小一時間、手掛かりの“て”の字も出て来ぬとあつて遂に手段を選び出したらしい。

「店主、俺あ構わねえよ」

「けれど……」

「ご協力を感謝します」

なおも言い募ろうとする店主を横切り、検察官が進み出る。そしてずいと、手にしたそれをこちらに見せ付けた。

「それともう一つ、質疑応答にはこの看破のベルを使用します。万一、虚偽の証言を口にした場合は、念の為に署に同行いただき改めてお話を伺うこともあります。その辺りを理解した上で、発言は慎重に願います」

「くくっ、そいつあおつかねえや。努力ゆめを付けるとしよう」
「では」

眼鏡の硝子が灯りを照り返す。検察官の女から、気迫のようなものが発した。この問答で仕留めてくれる、という。

それもまた、役人の気組。

「名前は」

「シノギ・ジンクロウ」

「シノギ……？」

「セナさん、この人は……」

「ここそと歩み寄っていたルナ……もとい捜査員の一人がセナに耳打ちをする。」

「……そう、貴方があの」

「どのシノギのことかは存せぬが、このシノギは名をジンクロウと申す。見てくれ通り、ただの貧相な剣士よ」

「身元は確認できました。敵軍の幹部一角を屠ったとか。その武勇が今後も王国の為に尽くされることを期待します」

「微力なれば」

「結構。続いて尋ねます。この店はよく利用しますか」

「いや。今日が初めてだ」

「来店の目的は」

「見ての通り、腹ごしらえだ。ああ、ついでにこの坊にもな」
「ん……」

隣の烏打帽頭にぽんぽんと触れる。少年の微かな緊張が肌身に伝わってくる。

その様に、眼前の女は反応を示した。

「貴方と、彼とのご関係は」

「店のすぐそこで知り合った。腹を空かせておるようだったのでなんぞ食わせてやろうとな」

「初対面の子供に施し……？ 貴方は普段からそのようなことをしているのですか」

「んな大仰なもんじゃあねえさ。救貧坊主じゃあるめえし、常日頃そんな真似するほど……」

ふと、思い出す。店先で伸びた娘、河原で彷徨い歩いていた幼子、化

外の獣や山の神霊、人の幽霊、揃いも揃ったり色物奇人妖怪変化。まさか施しなどとは驕るまい。しかしよくまあ色とりどりの連中と同じ釜やら酒杯やら交わしてきたものだ。

妙な、今更に感じ入る。というより己が節操の無さにまず呆れが先立つ訳だが。

「……気が向いたなら、またやるかもしれん。かかかつ！」

「？ はあ、そう、ですか」

けらけらと笑う己に、女は不可解そうに目を瞬いた。

対して、隣からまたしても不満気な三白眼がこちらを覗いていた。ミルクセーキを口に含み、至極つまらなそうにして。やはりまだ、己を捕らえられなかったことが不服なようだ。それを笑い飛ばされるのも、あるいは淫魔にとつては何より業腹なのやもしれぬ。

「んぐっ」

「くふふっ」

なおも仔猫のように睨んでくる少年。

布巾を手にして、その白く汚れた口を拭った。

「ッ」

一瞬、呼吸の乱れを聴き取った。

その出元と思しき検察官の女は、こちらの視線に気付くや露骨に咳払いする。

「んんっ……随分と、仲がよろしいようですね」

「そうかい？ ははっ、己が世人より余計に馴れ馴れしいのさ。見なよ、坊のこの嫌っそうな面あ。うりうりい」

「べ、別にイヤってわけじゃ……んひやつ、あ、あんま撫でんなっ。くすぐったいって！」

「ッッ」

また一息、先程よりも深く吸気音が響く。そしてやはり、それはセナという女の喉奥から聞こえたようだ。

「くっ……これ見よがしに、イチヤイチヤして……」

「あ？」

「いちやつ、そんなんじやねえよ！」

「ところで先程から気になっていたのですが」

「聞けよ!」

「この子が羽織っているジャケット、かなりのオーバーサイズのようにですが……もしや」

「ああ、こいつあ己の持ちもんよ。こやつがあんまり寒々しい恰好だったんでほッ被せてやった。なあ?」

「ぬぐ……うるせっ」

顔を赤くして少年はそっぽを向く。

その頬を悪戯に軽く摘まんでやる。

「ブッフツツ……!! 彼ジャケ……だと……!」

「セ、セナさん? 大丈夫ですか? 趣旨ずれてませんか? ご趣味が漏れ出てませんか?」

「だ、大丈夫、大丈夫デス。私は淑女私は淑女これは仕事これは仕事これは仕事」

助手よろしく捜査員から諫言を呈されると、女は念仏のように何やら唱え始めた。眼鏡の奥の瞳があまり見たことのない色合いに混交し渦を巻いている。

「……そういう世界もあんだよ。僕は興味ないけど。あんたは知らなくともいいから」

「そういうものか」

「お、んん、っ、失礼。少し取り乱しました。では、今度はそちらの彼に質問します………シノギさんのどんどころに惹かれたのかしら?」

「セナさんんっ!」

「やっぱり匂い? 匂いでしょう? さっきから貴方、度々そのジャケットの匂い嗅いでたでしょ? クンカーなの? 一嗅ぎ惚れ?」

「セナさ、ちよ、お腐れが出てる! どこもかしこもから出てる!」

「放しなさい。上質なおにシヨタよ? リアルおにシヨタよ? 現実でこんなの滅多にお目にかかれないの。次の本は王道おにシヨタに決まりよ。私はその取材を今からしなくちゃいけないの。だから放しなさい。放して、はな……はなせー!」

他の捜査員らも手伝って、暴れ出そうとした会長が取り押さえられる。

四、五人と一人、押し問答が繰り返されること暫し。パンケーキを一枚平らげる程度の時間を要して、彼女らは鎮まった。もとい検察官セナがこの世に帰還した。

「失礼。また少し、取り乱しました」

「本当にな」

「んん、っ……はい！ ではこれで最後の質問です！」

碌々満足な尋問も出来なんだというにこれを最後にしてよいのかと要らぬ懸念を抱いたが、口にはすまい。

『この店では無許可の風俗営業が行われている』。『はい』か『いいえ』で答えなさい」

「！」

流石御公儀御役人。戯れに乱心しても、核心を忘れることだけはなかった。

傍らで少年の身が僅かに強張る。

眼前に突き出される金の鈴。その調べ一つで、我が身は即刻召し捕られるのだ。

「『いいえ』。この見世は、真つ当に商いをしているよ」

「――」

「……………」

逡巡もなく発した応えに。

鈴は――鳴らず。微かな身動きすら見せず、完璧な無音を貫いた。

「…………よく分かりました。ご協力感謝します」

セナは言うやその場で一礼する。

女は務めを果たしたに過ぎぬ。それでも上手に在るその頭を垂れたのは紛れもない女なりの誠意であろう。

「撤収だ！」

号令一喝、店の裏に回っていた者も含め、捜査員達が立ち退き始める。

張り詰めていた店側の人間達も、気を緩めて帰って行こうとする背中を見送った。

セナとルナ嬢が表扉へ向かう。

その、しんがり殿に。

「……なに」

いつからだ。

そこに立つ女。青い制帽に青い開襟の制服。

いつからそこに立っていた。

捜査員の装いをした女が一人、店の只中に居残り佇んでいる。

もとより揃いの制服、同じような姿が店中を行き交っていたのだ。

その存在を見落としたところで何が不思議であろうか。

しかし、その女はまるで、今この時現れた———そのように感じた。そのように、観えた。

傍らの少年、店主、女給、誰一人驚いた様子はない。その女の存在に疑問を持っていない。その女は検察官が引き連れてきた部下の一人だ。集団に紛れ、見落としていた一人。それだけなのだろう。

この違和感こそ、錯覚なのか。

「……」

「? どうしたの? 早く撤収作業に入りなさい」

立ち止まったままの捜査員にセナが指図する。

しかし、その捜査員は首を左右した。

「この店舗にはまだ一件、容疑が掛かっています。私はその調査を命じられました」

「なっ、そんな報告は受けていないぞ! 密告文には、確かに」

「これは領主様直々の密命です。この店には……悪魔共が棲み付いていると」

「!?!」

気配が震撼する。その驚愕は誰であろう、この場に居合わせた悪魔達
のそれ。

セナがなおも問いを重ねようとするのを無視して、女はこちらに一歩進み出た。そうして、その手にあるものを掲げる。

それは硝子の蓋をさされた蠟燭であった。

「領主様より下賜されたこの魔道具は、悪魔の気を帯びた時だけ緑い火が灯る」

「そんなものまで……」

「逃げられると思うな。疑わしき店舗に対する浄化、アクセルのエリア教会へは既にそのように下命が走っている。私の号令一つで付近一帯の聖浄が始まる。この蠟燭が、灯り次第」

硝子蓋に女が手を掛けた。まるで確信が、いや全てを知った上で、最後通牒の如くに。

半瞬で、結果は露わとなる。あの蠟燭が女の言葉通りの性能であるなら、この空間に芯が触れた途端、緑が火を噴く。どうする。

薄紙一枚分の時間の中、高速化した思考という針が繊維質を貫き徹るまで。

なにができる。

——蓋が離れた刹那、斬る

それしかない。もとよりそれ以外に能がない。

それを振るうことだけが、我が一芸。

幸いにして相手は間合の内。刃先は確実に蠟燭の芯を捉える。その先端、寸毫を刈り取ることも然して難しくはない。

そしてこの、兇き刃金ならば、道具に込められた魔なる「ちから」そのものを喰い殺せる。

問題は、それを見られてはならぬということ。

抜刀、斬撃、そして納刀。それらを、少なくとも人間の知覚可能域を超越した速度によってやり遂げねばならない。俗に、神速と呼ばれるその領域。

そんな至芸が己に能うのか。

——是、也

できる。神速、その真に迫ることならば、できる。

そして、なにも己は速力のみでそれを為す必要はないのだ。間を外し、虚を衝き、より早くに仕掛ける。これらの工夫を以てすれば人力

にて神業の真似事が叶う。

これは武芸ではない。居合抜きの大道具だ。敵を斬り伏せる技術ではなく、観客を騙し果せる奇術の類。

だが。

抜き身を見せず、衆人から最後まで刃を鞘の内に隠し通すことはできよう。

だが、この身が動いたという事実だけはどうしたとて隠せまい。それだけは、如何ともし難い。

この場、この時を切り抜ける為の必須条件は“何も起こらぬ”ことだ。

如何に神速によって斬撃を欺瞞しようとも、己が何かしらの小細工を働いたと見られれば全て意味がない。

——ほんの、一刹那でいい

瞬き一つの間も要らぬ。雷光の如き光陰で構わぬ。

眼前の、こちらに注がれた女の意識を、ほんの微かに揺るがせてくれたなら。

その一刹那を、与えてくれたなら。

——それを

甲高い音色が、空間を刺した。

閃

石床に落ちた陶器が割れ、砕けたのだ。

「あ、すみません！」

「どうしたの」

「わ、わからないです。突然お皿がテーブルから落ちて……」

「あんダメよ、手で触らないで。箸と塵取を持ってきて」

「は〜い」

そんなやりとりを横目に見ながら、琥珀色の酒精を呷った。穀類独特の香りが醸され、嫌味のない甘みと苦みが舌の奥に残る。炒った豆など合いそうだ。

「……………」

「……蠟燭は点かないようね。まったく……アレクセイ卿の独断には、後日抗議しなければ。話を通してくれれば協力できるものを……」

火はおろか煙すら上げぬ蠟燭。

軽い嫌味を口にして、検察官セナは店を後にした。

それに続く捜査員の女。その顔に色はない。落胆も、驚きもなく、無感情な目で足早に去っていく。

その目は、それこそまるで、人のものではないような。

扉が閉まり、馬車の蹄が遠ざかる。それを聴き取った途端、席から少年が翼を広げて飛び上がった。

「いよっしやああー！ 切り抜けたー!!」

「やったやった！ やったねメイアちゃん!!」

「あつぶなかつたね〜!」

「ああああ最後ほんつつとに緊張したあ……」

奥の間から他の従業員も顔を出す。安堵の息も深く長く、どれほどに気を張り詰めていたかよく分かる。

席を立ち、腰を拳で打つ。奇妙な凝り方をしている。着座の姿勢からの抜き打ち、あまり体に良くはないらしい。

「シノギ様」

「おう、店主」

声に振り向くや、ふわりと女が両手を広げて飛び込んできた。

首に腕を絡められ、ぴたりと全身にその肢体を擦り付けられる。甘い女体の香、肉の熱と柔ら。

ふと、首筋が吸われた。強く吸ったと思えば、啄ばむように幾度も幾度も。それが首筋から顎、耳に登り、頬に至る。

「なんだなんだ。えらく気前がいいな、ええ?」

「当然ですわ。そしてこんなもの序の口です。んふふ、ああ、どんな風にお礼をすればいいかしら。抱いていただこうかしら……それとも抱いて差し上げようかしら……?」

「あっ!? ブリイよ店長!!」

「私一人なんて申しません。この子も一緒にいかがですか？ それとも、ここに居る全員で……」

やいのやいのと騒ぎ始めたメイアも、店長の言に静まる。

妖しげな微笑が我が身を囲む。今の今まで抑えていた色香が、むんむんと店内を噎せ返った。

「ほほう、そいつあ贅沢だなあ。思わず涎が出ちまいそうだ」

「たつくさん、かけてくださいいな。涎でも、小水でも、精液でも……たつくさん汚してくださいいな」

「そうさな。だが、己だけで美姫を独り占めにしたとあつちや罰が当たらあ。何より一番の功労者を蔑ろにはできまい」

「？」

好色な瞳に微笑みを返し、そつとその前髪を指の裏で撫でる。

そのまま女の腕を離れた。

真つ直ぐに足を向けたるは、窓辺、右端の席。その虚空を掴む。

「なあ、カズよ」

「うおお?! びつくりした！ いきなり触んな!!」

『?!』

触れた途端、その存在が露わになる。

緑の外套を纏った少年の姿。カズマが椅子に座っていた。

おそらく彼女らには、この少年が今まさにこの場に現れたかのように見えているだろう。盗賊のスキル、潜伏とかいったか。

「目端が利くというか用意がいいというか。まったく、流石よ。こんの小僧は」

「……褒めてんの、それ」

「無論だとも。お前さんが居らねば、仕損じていた」

絶好の機に、皿を床に落として叩き割ったのは誰であろうこの少年である。

あの「逸らし」が無ければ、己の大道芸は意味を為さなかつたらう。

「店主、見ての通り、この小僧っ子の働きこそ勲章もんだ。大いに労つてやってくれ」

「ふふふ、勿論ですわ」

少年が有無を言う間もなく、瞬く間に三人の淫魔がカズマに群がった。

「カツコよかったわよ」

「あなたは命の恩人です」

「い、いいくつぱいご奉仕しますね！」

「い、いいいやいやそんな！ お、俺は当然のことをしたままですはい」

「緊張してる？」

「かあわいい〜」

「あ、でももうここは固く……」

「あひん」

鳥に啄ばまれる獲物のような様相だが、本人は夢心地であるらしいのでまあ良かろう。

踵を返そうとして、ふと思い出す。小言を一つ置いていくことにした。

「カズよ。血気盛ん大いに結構だが、あまり家の子らを心配させるな」

「……………はあい」

「かかかっ！」

萎んだ声を背に受けて扉に手を掛ける。

店主の女は、溜息交じりの笑みでこちらに手を振った。引き留めても無駄と覚ったのだろう。引き際の心得。やはり、よく出来た女だった。

「ちよ、おいー！」

「ん？」

表に出たところで追い継る声に振り返る。

メイアであった。腕には牛革のジャケツトを抱えている。

「おお！ いけねいけね、すっかり着せっぱなしだったな。はははっ、ありがとよ」

「う、うん、いいけど……………いいけど……………」

「うん？ どうした」

ジャケツトを羽織りながら少女を見下ろす。いつの間にやら姿容

は元の娘子に戻っていた。

指先を突き合わしながら、なにやらもごもごと口の中で言を弄んでいる。

「……アタシじゃダメ、か……?」

怖々と、潤んだ瞳が己を見上げる。精一杯の勇気を振り絞って発したそれ。

実に男心を擦ってくる。

「なるほど、それがお前さんの必勝手か」

「——ちつ、糞！ これでもダメか！ ああああ、渋ってる奴ほどこれで落ちただけどなあー」

「くふっ、いやぁいい線いってたぜ。しかしやんぬるかな」

少女の頭を撫でながら、その場に屈む。

愛らしい少女の渋面に微笑む。

「俺あ素面のお前さんの方が好きなのさ」

「……………へ?」

「じゃあな」

呆けた顔に見送られ、路地の暗がりに行く。

茜が薄れ、群青の闇が滲み出す。

明日は、晴れそうだ。

暗がりに女が佇んでいる。

青い制帽、青い制服。王国檢察捜査員の姿。

その手には、火も灯らぬ蠟燭が乗っている。

『『どうして……どうして……?』』

「ほほう、肉の傀儡か」

57話 間の悪い娘よな

星が綺麗な夜だった。

冬の澄んだ空気のお蔭で、満天にきらきらと散らばる宝石のような光。

こういう夜は……実はあまり上手くない。仕事をする日は、空が翳り、月もないのが一番だ。

たとえば新月の曇天。人間の家に忍び込むなら、そんな暗い暗い夜の方が都合がいい。

サキュバスの仕事は秘密厳守。人目に触れるのはご法度だ。隠れて潜んで常にコソコソしていないといけない。それが掟だし、それが低級悪魔の生き方。

——でも、今夜は違った。

煌々と半月に照らされながら冬空を翔ぶ。

寒いけど、悪くない。白銀に染まった街並は砂糖をまぶした焼き菓子みたいだ。

実際、手に提げた紙袋の中には、この景色みたいに粉砂糖をふんだんに使ったブラウンシフォンケーキが入ってる。

「……すげえ辺鄙なところに住んでんな、あいつ」

外壁を越えて街の外へ。

その家は、雑木林に隠れるようにして建っていた。

遠目にも変わった造りをしてる。木造なのはいいとして、やたら窓が、いや引き戸が多い。風通しは良さそうだけどこんなんで寒くないのだろうか。馴染みがあるのは瓦屋根くらい。

異国風、ってやつかな。

でも、郊外どころか街から出てしまっているこの立地は悪くない。むしろいい。

「声出し放題じゃん」

奔放なセックスは得てして近隣に煙たがられるもの。隣近所の住民に気を遣わずに済むならそれに越したことはない。

「うんうん、てか女連れ込み放題だし。うおおよく考えたらここヤリ部屋に最高じゃん！」

聞く者もない、人によつては聞くに堪えないことを口にして。

「……………はあ」

それでも溜め息は零れ出ていた。

「糞つ……………なんで緊張してんだよアタシはっ！」

こんなに堂々と、誰かの家を訪ねるなんて初めてだった。

お客と淫魔の仮初の逢瀬は客にとつてはただの性欲の捌け口で、淫魔にとつては食事である。それに肌を合わせるのだから夢の中だ。交わす言葉さえ全て幻。残るのは精気を射た倦怠感と食後の満腹感だけ。

「……………げ、現実の逢引つてこんな感じなのかな……………？」

口にしてから頭を抱えた。

「だあああああなに言つてんだアタシはよおおお！ 生娘でもあるまいにいい！」（↑※処女）

叫んでから、はつと口を覆う。いくら街の外とはいえ、誰かに出くわしてしまわぬとも限らない。壁外を巡回する番兵だっているだろう。なによりあいつの家がもう目と鼻の先だ。

「……………ふう」

周囲に気配は感じない。

安堵の息を吐いてから、ふと自分の身なりを見下ろしてみる。

黒いタートルネックのセーターにダークブラウンのショートパンツ、黒ストッキングとムートンブーツ、そして一撃ウサギの毛皮のコート。

「地味だよな……………」

あんまりな気がする。そりゃあ普段の仕事着のドレスは派手派手の派手だし、それと比べてしまえば普段着が地味なのは当然だ。

でもやっぱり、あんまりな気がしてならない。

『素面のお前さんの方が……………』

「ツツ!? 関っ係ねえし！ 仕事じゃないからラフに決めてるだけだっつの！」

余計なことまで思い出しかけた頭を振り回し、両頬を叩く。

「はんっ、そうだよなに馬鹿正直に玄関からお宅訪問しようなんて考えてんだ。こちららエロエロサキュバス様だつての。若い野郎が寝こけてんのに襲わないなんて手があるかよ」

現在深夜、もとい早朝三時。人の眠りが最も深い時間だろう。

叢をそそくさと進む。抜き足差し足の必要だつてない。

布団に潜り込んでまず啜え込んでやろうか。いやそれとも全裸で顔にでも跨ってやろうか。もういつそ挿して上下運動で叩き起こすというのも面白いかも。

「いひひひ……おっと涎が」

口の端から漏れた唾液を啜り、手の甲で拭う。

ぐしぐしと、リップが落ちないように、なんて注意深くやってたもんだから――

「ク、ク、ク」

「へ」

すぐ傍、真隣から、そんな声ができるまで気付かなかつた。

首を巡らせた時にはもう遅い。

暗闇の中で広がる巨大な翼、月光に輝く鉤爪、なによりもその猛禽の眼。

「クカアアアアアアアアアアアア?!」

「ひゃああああああああ?!?!?!」

グリフォンだった。劈くような咆哮を上げた。なんでこんなところに。でかい。やばいこわいやばいやばいやばいやばいやばいやばい。

「ひいひいー」

咄嗟に飛ぶのも忘れて走り出す。とにかく逃げる。叢の中へ。ぬ、と。

その巨体は、草木を押し退けながら現れた。

『なんだなんだ突然大声を上げて。どうしたのだグリちゃん』

「――」

『うん? 誰だお前は』

「ギイイイアアアアアアアアアア馬が喋ったあああああああああ?!?!?!?!」

『――！』
「ひゃいつ……!?」

耳元で声が響いた。いや、声のような念波が、鼓膜ではなく魂を直接揺らしたんだ。

「なんツ……!?」

上げかけた絶叫を力一杯なんとか飲み下して、周囲を見回す。何も見えない。何もいない……いや。

「……いるな」

視覚の「領域」チャンネルを変える。現世と幽世、アタシ達悪魔にとってはむしろ故郷に近い感覚。

やっぱり、そこに居た。

すぐ傍に立っている。自分より頭一つ分小さい影。影のように朧な存在感。

「んだよ、ただの浮遊霊かよ。びっくりさせやがって」

子供の霊。女の子だ。別段幽霊がその辺をうろついてたところで何の不思議もないけど。

普通は存在も自意識も薄れて、空気みたいに漂うだけなのが浮遊霊だ。しかしこいつは違った。意識ははっきりしてるし、自己主張もやけに激しい。

『――！』

「あーもうっせえな！ アタシはあいつの……あいつのお、そう！ いい人ってやつ。色だよ、イ・ロ！ ああ、お子ちゃまにはわからないか？ 今から向こうの褥でアタシとあいつがしけ込むんだよ。子供には関係ねえの。わかったらほらあっちいけ、シツシツ」

『……………』

「な、なんだよ。や、やろうってのかよ」

子供幽霊が無言でこちらを見詰めてくる。大した力を持つてる訳でもない筈なのに威圧感だけが妙に強い。

「ふ、ふんっ、たかが人間霊が低級とはいえ悪魔に敵う訳ねえだろ！

いいぜ？ 小生意気なガキには「わからせ」が必要なんだよな!?」

『――』

「ああ？ 後ろ見る？ そんな子供騙しに引っ掛かる訳ねえだろ——」
ぐ、と。

肩を掴まれた。毛皮のコートを羽織った肩を。だのに、その手は、冷たかった。衣が消えてなくなってしまったみたいに、素肌に氷を当てられてるみたいだ。

いや、いや、そんな生易しいものじゃない。骨の髄まで凍て付いてくる。氷柱が骨に代わったみたいだ。

常軌を逸した冷気。

それを発するこの手の主は。

背筋も凍るような美貌をしていた。蒼い髪が滝のように垂れ下がって、その下から赤い瞳がこちらを覗く。

「アイエエエ!? 精霊!? 精霊ナンデ!」

「ふう……」

「ひ——」

そつと吐息を吹き掛けられた。アタシの意識はそこで落ちた。

いくらなんでも騒がし過ぎる。寝巻の帯を結び直し、寝間の引き戸を開く。

「ふああ………ああああ、こんな夜中になにをしてんだい」

「シンクロウ、曲者捕まえた。褒めて」

フユノはそう言っ、居間の真ただ中に屹立する氷像を指差した。

近く、見覚えのある姿容をした像である。

というかメイアであるが。

へにやりと泣きじやくる寸前のような顔で娘は見事なまでに、かつちかちに、固められていた。

「……こいつあ生きとるのか」

「悪魔は死ににくい。これじゃあ死なない。殺した方がよかったか？」

「いやあよせよせ。この娘は曲者だが、まあ悪いもんじゃあねえ」

「アンナに酷いことしようとしたの？」

「いや根は悪かねえんだが、間の悪い娘でなあ……」

フユノを撫でつ労りつ、なんと言えばよいかと思索して。

ふと、娘の足元に紙袋を見付けた。

印字には見覚えがある。

「ほれ見ろ。三丁目の菓子屋の、ああ前に食いに行つたろう。そこの手土産だぞ」

「こいつはいいヤツだ」

ひし、と紙袋を抱いてフユノは頷いた。

己は苦笑を堪えられなかった。

「……菓子折り持参の夜這いつてなあ、なかなか新しいな」

「よびよっ」

58話 穏やかな晴れの日

雲一つない冬晴れの朝は、半面冷え込みもなお一入ひとしおである。

霜は降り、朝露が凍るそんな庭先には今、鷲獅子の雛が降り立っていた。

皮を剥いだ野兔を一羽放つてやると、雛は器用に嘴で受け取った。前脚、もとい鉤爪も使い、旨そうに骨まで平らげていく。

雛には、日に四羽ほどを二度に分けて与えている。成長と共にこんな端はしたな量では到底足りぬようになるだろうが、そこは半野生のグリフォン、此奴はなんとなれば己の食い扶持は己で捕らえてくるのだ。

「旨いか？」

「ク、ククツ」

「そうかい。たんと食え」

盛んな食いつ振りというものは人も獣も変わりない。それが娘子でも、それがたとい恐るべき怪鳥であっても、変わらず快いものだ。「ん？」

不意に、左手に触れるものがあつた。熱気冷気はおろか痛みすら失くした不感症の左手に、有り得ぬ筈の手触りを覚える。

この世のものでなくなったこの手に、それはこの世ならざるところから伸ばされている。

「雛鳥に挨拶に来たのか？」

『――』

「ふふ、そうかい」

幽霊少女は、カズマらの屋敷から度々ここを訪ねてくる。身軽というか、あるいは浮遊霊の面目躍如か。

快い平穩。波の無い日々。それは得難く、尊ぶべきものだろう。

それが果たして、この身が享受するに相応しいかどうかはわからぬが。

鷲の首筋を一撫でしてやり、バケツ片手に庵にとって返した。

「おかえりなさい」

「ううい、ただいま」

相も変わらず今朝早くに訪れていたウイズが、一々細やかな挨拶を呉れる。

白味噌と鰹出汁が土間に香った。せっせと葱を刻むその背中に声を投げる。

「今朝も冷えるな」

「そうですねえ。春目の筈なのに」

「お蔭で雪ん子は元気だが、温いのをきゆうつとやりたくなくなっちゃまっていけねえ」

「ええ？　もー、ダメですよ。朝からお酒なんて」

「かかかっ」

至極真つ当なお小言を頂戴したもので、居間に逃げ込む。

囲炉裏の暖気に心身で安堵して、塵に腰を落ち着けた。

炭火の上で揉み手を暖める。隣ではフユノがその白い頬を丸々と膨らませて、チョココレイトの焼き菓子を早くも平らげている。

そして己の正面には、その手土産を持参した当人が座っている。

「ひひひひいつ、さ、さささむ、寒い！　寒い！　ほほほほ骨つねね、ままだ骨がこここお凍ってるうううう……!?!」

頭から毛布を二枚ばかりほっ被り、火鉢を抱え込む少女。つい先刻、解凍されたばかりのメイヤは全身を小刻みに震わせながら悲鳴を上げた。

娘が我が家へ忍び込み、常駐の『警邏』に右往左往した後この雪娘の吐息に凍らされ、そうして明けた今朝。

隣れ凍え切る姿に笑みを堪えつ、熱い煎茶の湯呑を差し出した。縫るように受け取った湯呑を娘は両手に包んだ。途端、茶の水面が手の震えで荒れに荒れ飛沫を上げる。

「おいおい熱いぞ。気を付けな」

「こ、こ、ここんなここ凍えてるびしよびしよ美少女がいるるんだか

らはは肌で直にあたたためてやがれくだささいおなしやすすす」

「それはダメだ」

「ひよええ!?! すすすすみませせんん!!」

娘の背後にぴたりと張り付き、真実凍った吐息をこぼす。

フユノの冷気で再びメイヤが震え上がった。

「ジंकクロウのつがいはオレ」

「つ、つつがいい? な、な、なんで雪の精霊……様が、こここんな痩せ剣士のお、女になってんだよ……」

「かかつ、痩せ剣士で悪かったな」

番うんぬんはさて置き、不埒な闖入者を掴まえたフユノがこの場の正当。

不埒者たるメイヤは文句こそ少ないが不満たらたらといった様子。

「て、つていうか、べつに私は番とか、ふ、夫婦とか興味ねえよ! そんな、そんな人間みたいな結婚なんて……結婚……結婚かあ……うへへ」

「ダメだ」

「ひいひいすんまつせん!! だからしよれやめへえ! さむつ、寒いい!!」

溶けては凍らされる娘子がそろそろ不憫であった。

フユノにもう一つチョコレイト菓子を与え、宥める。

「我が家もすっかり女所帯になったもんだ。いやあ? カズのところも大概か」

「ふふ、賑やかになって楽しいですね。さ、朝ご飯ですよお」

「斯く言うお前さんもなかなか、上手いこと居着いたもんだなあ」

膳と四人分の器を持ってウイズが居間に上がる。御櫃の飯をお椀に盛りながら、きよとんとした顔で己を見る。

これが惚けているのではなく本当に不可思議がっているところが、この娘の面白い気質だ。

「食うに困った時ふいと顔を見せに来ていた者が、今じゃ自前で飯炊きまでしていくようになっちゃった」

「はうあつ、す、すみません。その、凶々しくて……」

「ああいやいや俺あ構わねえんだぜ？　押し掛け女房ありがたやありがたやつてなもんで。カツカツカツ」

「む、ウイズ、ジंकクロウの女房だったのか？」

「へっ!?　ち、ちがつ、た、確かに押し掛けてるのはホントですけど……もお！　もお！　ジंकクロウさん！　フユノさんがまた勘違いしちゃうでしょう!」

飯を盛った茶碗を己に押し付けて、ウイズはぶんぶん怒った。

いただきます、と四人声を揃え、朝餉に箸をつけた。

生姜を添えた里芋の煮ころろがし、川魚の焼き物、フキの青煮、葱と麩の味噌汁、胡瓜の糠漬。特にこの里芋の煮ころろがしが美味しい。良く味が沁みて、噛み締めると柔すぎず固すぎず絶妙な粘りの歯応え。

ウイズにその気があるか知らぬが、こうして好みの味と胃袋を掴まれ始めている。さて掌で転がされているのはどちらやら。

「ふん、そうやって会う女会う女に粉かけてる訳かよ、このヤリオン野郎め。かけるのは粉じゃなく精——痛だッ」

「朝飯時から戯けたことを言うんじゃねえ」

良からぬことを口走ろうとする娘の額を小突く。

「ま、まあまあジंकクロウさん。メイヤさんはサキユバスですし、その、性的なことに奔放というか、えっと、オープンなのは種族的に仕方ないんですよ」

「そーだそーだ。流星はリッチー様っす。生物の根源である淫欲のなんたるかをよくわかってる。そのエツロイ体は伊達じゃないっすね！」

「……」

「怒ってもいいんだぜ？」

「はい……いえ、まだ、大丈夫ですから……」

なんとも言えぬ面持ちで、ウイズは自身に対する忌憚無き外見的評価に、落ち込んでいた。

その腹いせが、どうしてかこちらに飛び火した。

味噌汁の器に口をつけながら、ウイズのジトとした視線が己を刺

す。

「……実際ジंकロウさんは口が達者ですね。女の子を見たら必ずつてくらい褒めてあげて、細かいところで親切にしてくれて……ほーんと隙がないです。リーンさんに、フユノさんに、ゆんゆんさんに」
「お、おいおい、ウイズ？」

「めぐみんさんがヤキモチ焼いちやうのも当然です」

「まあめぐ坊は、ほれ。その辺り身持ち堅くしつかりとした子だ。己のような輩はどうしても余計に目に付いちまうもんなのさ」

「だからこそそういう子を心配させちやダメだと言ってるんです」
「へい、そら御尤もで」

「そりやあジंकロウさんは世慣れしてるからいいですよ？ でももし、まだまだ若いカズマさんが貴方のそういうところを真似しないと限らないんですから」

「カズはあれで損得から良し悪しまで勘定のできる強かな野郎で」
「なんですか？」

「いやいやいや、御意のままに」
「もお……」

漬物を噛む瑞々しい音色さえ、どこか怒りっぽい。

まさに諫言耳に痛しである。

「やーい怒られてやんの。にししし」

「ジंकロウ怒られてる」

「ウイズ、ウイズさんよ。そうぶりぶりしなさんな。どら、見なよこのイワナ。焼き加減といい塩加減といい抜群だぜ。なんたって料理人の腕が良いからよ。ほれ、俺のを一匹やろう。そらそらやりなやりな」

「食べ物で釣ったって許しません！ でもお魚はいただきます」

言い様とは裏腹にウイズはもしやもしやと満悦面で魚を頬張る。
しかしこの場はどうやら孤立無援。多勢に無勢で立つ瀬がない。

急ぎ飯を平らげ、熱い茶を啜って合掌する。

「ああ馳走であった！ では、己は一足先に出る」

「え？ もうですか。たぶんそろそろカズマさん達が訪ねてくると思

いますけど」

「ジंकロウ、オレも」

「いやいつもの溝さらい、付いて来ても暇をするだけだろうよ。カズらが訪ねて来た時や適当に朝飯でも振舞ってやってくれ。あやつらのこと、半分はそれ目当てだ」

上着を羽織って縁側から表に出る。

その時、林の奥間で。

「あーお腹空いた！ 今日のメニューはなにかしら！ お味噌汁の匂いは既に嗅ぎ取っているわ。ならメインは……焼き魚がいいわね！ しょっぱめで白米が進むやつ！」

「お前たかるにしたってもうちよつとなんとかなんない？ こっちが恥ずかしいんですけど」

「アクアにそれはもう今更じゃないですか」

「アクア、食べ物はともかく、頼むから金銭の無心だけはしないでくれ。蔑まれることを好む私でも、人としてそこまで落ちたアクアを見たくはない」

「みんな酷くない？ そろいもそろって酷くない？」

噂をすれば、子供らの賑やかな声が木霊してくる。

アクア、カズマ、めぐみん、ダクネス。後の三人はともかく、アクアがメイヤを見止めた場合、またひと騒ぎ起きるだろう。

居間へと振り返り、未だ囲炉裏の前で丸くなっている娘に声を張った。

「メイ、メイ子よ。悪いことあ言わねえから今暫くそのさがない口を慎んでおけ」

「はあ？ なんだようるっせえな」

「ほんの忠告だ。大水の神さんに目を付けられると諸共押し流されっちまうぞ」

「？」

「ではな」

庵から離れ、子供らとは逆方向の林道を歩く。

行き掛けに今一度グリフォンの雛を見に寄ると、黒々としたでかい

凶体がその隣にあつた。

黒毛の大馬。頭蓋骨しやれこうべを彷彿とさせる兜で馬面を覆つた不気味なそやつは、死にぞこないの元デユラハン、ベルディアである。

なんのつもりかこの家の周囲の林を根城に、時折こうして庵近くに彷徨い出てくる。

近頃はグリフォンの雛と連れ立って散歩をしたり、今のように面突き合わせて何をするでもなく日向ぼっこしていたり。

なんにせよすこぶ頗る暇なのだろう。

『む、なんだ。街へ行くのか』

『まあな。お前さん達はなにをやつてんだい』

『世間話に花を咲かせていた』

『あ？ 雛の言葉がわかるのか』

『うむ、何故かは知らんが。グリちゃんはこの辺りを縄張りに決めたらしくてな。その見回りついでに空から見えた地上の様子を聞かせてくれる。これがいい暇潰しになる』

「そらまた」

随分と仲良くなつたものだ。

馬の躯体に魂を取り込まれたとかいう話だが、鳥獣の言語を解することといい、もしやすればそれは魂が獣の側に引き寄せられたゆえの変質では……。

『？ なんだ』

「いや」

知らぬが仏と言う。平和ならば、それもまた一興であろう。うん。「暇だつてんなら雛を遣わせていねえで手前の脚で見てくださいいいじゃねえか」

『一度あまりにも暇過ぎて俺が拠点としていた廃城を見に行ったが、魔蟲共めの巣窟になっていた。糞つ、カーペットとカーテンを新調したばかりだったのに……それがショックで暫く林に引き籠もつていたのだ』

「左様か」

聞くだに下らぬ理由であつた。訊ねた己こそが愚かだったのだ。

雛鳥の後ろ首を搔いてやり、改めて歩を進める。するとどうしてか、蹄の音が追従した。

見上げれば黒馬が隣に並んでいる。

「荷馬を頼んだ覚えはねえぞ」

『誰が荷馬か。ふんっ、暇潰しに街へ行くだけだ。べつにお前に付いて行くつもりはない』

「手前の風体の怪しさをわかってねえようだな。門前払いされるが落ちよ」

『ぬう……そこはお前、さも連れの馬みたいな顔をしてだな』

「図々しいこと抜かすんじゃないやねえや」

『いいだろうそれくらい！ ちよっとカーペット見に行くだけだから！』

いったい何処に敷くというのか。

馬鹿話をしながら林を抜けて街道に出る。

程なく見えてくる煉瓦造りの外壁。結局は一人馬一頭で、街の裏門を潜った。

59話 悪魔の囁き

街へ入って早々にベルディアと別れ、己はギルドへ、馬の方は商店通りへと向かっていった。宣言通り本当に敷物屋を物色するつもりらしい。

白んだ朝焼けと靄さえ煙る石畳の道。商店が軒を連ねる中心街とは違い、ここは擦れ違う者として少ない。民家の窓や煙突から立ち昇るのは朝餉の支度か、あるいは暖炉の火。

静かだ。朝、人の営みが盛る寸前の、束の間の静謐。

己の靴音ばかりが甲高く、街並に反響する。

「ジंकクロウー」

そこへ、期せず。

背後から掛かる声に振り返る。石造りの路面を蹴る鉄靴の重い音色。

見馴れた黄色の上衣と草摺に白い甲冑、手甲脚甲。間違はなく重装備に相違ない全身鎧をもともせず、ダクネスが急ぎ駆け寄って来る。

「おうどうしたどうした。お前さん、庵に向かった筈だろう」

「お前が先に街へ発つたと聞いてな。急いで追って来たんだ」

道を顧みても他の子供らの姿はなかった。

「ジंकクロウ、お前に話がある」

「話？」

「何分にも人目を憚る内容だ。場所を変えよう。付いて来てくれ」

言うや、ダクネスは己の腕を取って路地へ入った。なんとすればその胸に抱きかかえるように。

この娘の強引さは常の事だ。今更力尽くの拳に出たとて驚きは少ないが。

後頭で結われた馬の尾のような金髪が目前で揺れている。

「男の手を引いて裏路地に連れ込むんざ、ちよいと見ねえ内に随分破廉恥な子になつちまつたなダー公よう」

「止してくれ。確かに不躰だとは思ったが、火急の要件で致し方なく

似ても似つかぬ筈の彼女らと、根源的な質を同じくする眼前の怪物。

この世ならざるモノ。白紙に落ちた墨の一滴の如く、現うつしに雑かじる幽かり。

「よくぞ見破つたりと言ったところ。流石は今をときめく冒険者剣士シノギ・ジंकロウ殿だ。ちなみにどうやって見抜かれたのかな。参考までにお教えいただきたく存ずるが……あなああるほどいやいや皆まで言うな。まさか外見だけは立派なあゝの聖騎士にそんな変態趣味があるうなどとどうしてわかる。これは完全に我輩のリサーチ不足である。お詫びしよう」

「……」

「正解の返答はこんなところか？ 『んっ、破廉恥などと……こんな早い時間から屋外の、しかもこんな住宅街で言葉責めとはっ。ジंकロウ、こんな裏路地の暗がりに入れ込んで私をよがらせてどうしようつていうんだ!』と！ ……再現しておいてなんなのだが、なんと度し難い性癖か。我輩もちよつとドン引きである」

躁病のように矢継ぎ早で捲し立てるダクネスの皮を被ったその男は、無言を貫くこちらを気に留める様子もない。

いや、それこそ、こちらが口を開くことなど頓着せぬとばかり。

見透かすような、頭の内を見通すかの如き口ぶり……そうか。

「そう！ 大正解だ。それが我輩の権能。思考を、記憶を、心を見通す。よければ見知り置いてくれたまえよ」

「物の怪風情が何用だ」

腰に差した鞘を握り鑿くわに指を掛ける。間合は一足一刀。抜打ちに首を刎ねることすら容易い。

今、そうしてやらぬだけの理由がおのれにあるか。有るならば疾くその無駄に回るばかりの舌を働かせよ。無かりせば、如何にする。

この、我が前で、知己の子供の姿を掠め取り滴るような悪意をひけらかす貴様に、酌量を計らう意義を問うているのだ。

無かりせば、斬るのみ。

斬って捨てる。

「ふむ、風聞よりも存外に短気だなシノギ・ジंकロウ。子供、子供か。なるほど、貴様の逆鱗はその騒がしい子供達という訳だ」

「辞世の句はそれで構わんか」

「おおいおい待て待て。ここで我輩を殺してしまうとその大事な大事な逆鱗を剥がされることになる。子供達が死ぬぞ?」

「……………これはこれは」

続く言葉を待っている。姿勢は変わらず、相對して不動。

ただ、鯉口を切っただけだ。

行為としてそれ以上の変化はない。思考を経ず、言葉を要さず、ただ一事実を体现する。

死

お前が今、土足で踏み入ろうとする領域、その意味を知れ。

「フッフ……………よいな。よい殺意だ。実に芳醇。熟れ切った果実のように甘い。酒精すら匂い立つほどに……………」

人を小馬鹿にしたような態度は変わらない。しかし先程から微塵と感じられなかった警戒感の発露を気取る。

同時に、滲む。それは……………喜悦であった。

「しかし残念ながら、この種の悪感情は我輩の好みではないのだ。マクスならば涎を垂らして狂喜するだろうが」

「……………」
「だが気に入った。巷で広まる英雄像などより余程に我々好みの男のようだな。ククク」

人型が歪む。ダクネスという少女の形が崩れ、膨らみ沈み、折れ曲がり伸縮する。肉か、骨に見えたものは全て土塊だった。

粘土細工を捏ね上げるように、甲冑が消え、衣装は黄色から黒へ、練り上げられたのは燕尾服。それを纏う一人の男。

ただ一つ仮面だけをそのままに瘦身の怪人物が出現する。白手袋の両手を広げ、鼻につく芝居調子で彼奴は言った。

「我輩の要件はシンプルだ。兇器を振るう兇気なる男シノギ・ジंकロウよ。貴殿にはこれより、機動要塞デストロイヤーの討伐に向かい

てもらおう！」

暗がりに男の怒声が木霊している。

石造りの地下室で声は内側を反響し続け、やがて一つ所に集約し混ざり、沈む。

それは汚泥のようだが、泥など比べ物にならぬくらいに滑らかな液体で、所々にまだ形を

残す固体で、流動する塊の、複合物の、集合だった。

魔石灯の朧な光をてらてらと照り返す。

芳しい腐臭。

死というものの抽象物。

大量の髪が、赤から黒に変色した血溜まりの中で揺蕩い、まるで川のように流れを作っている。色の薄い、茶色や緑色、黄色が特に多い。

男はそういう色を好んだ。いや、望む色は別にあつた。けれどそれは手に入らないから近いもので代用した。

代用品、代替物。ここにあるのはその残骸。それとも残飯だろうか。貪られた後の塵滓ごみかすであり、彼にとってはもはや無価値どころか臭い臭い有害物質に他ならない。

害なる汚穢を踏み付けて、男はまた悪態を吐いた。

「クソツ!! クソクソクソ!! なんでだ! どうしてだ!? ああの、あの、あんな下賤な、冒険者風情が、冒険者の剣士風情があ!! ワシのお! ワシのララティーナをおおお!!」

丸い器に満たされているものもまた、彼が壊した少女から搾り取ったものだ。

処女の血は魔術の媒介物としてとても優れている。『遠見』の魔術に使うには大杯をなみなみ満たすほどの量を必要とするが、それを用立てることは彼にとって然して難事ではなかった。

大杯の水面には街の風景が映し出されている。つい先刻に映した

面を、繰り返し繰り返し再生している。

白い甲冑を纏った金髪の少女に腕を抱かれ、路地へと消えていく青年の姿。

それを血走った目で睨め下ろし、彼は咆哮した。嫉妬。憤怒。憎悪。嫉妬。嫉妬。僅かに淫欲。他の男に恋した女が凌辱されること（という妄想）に、彼は興奮を覚えたようだ。

それも湧き出る憎悪によってすぐに掻き消えてしまったが。

「かひゅっ、ひゅう、ひゅっ、き、今日のキミは、ひゅ、と、と、とても素敵だアルダープ」

杯を力任せに打ち払う。子供の痲癩より幼稚な精神性、利己と自己愛の塊のような彼。

素敵な人間だった。

キミは昔から魅力的な人間だったよ、アルダープ。

「?」

はて、昔とはいつのことだろう。

僕はいつキミと出会い、いつからここにいて、どうしてここにいたのだったろう。

僕は誰だろう。水面に映る誰か、*“何か”*を僕は知っていた気がする。懐かしい感じが。

「? 懐かしい。ひゅうっ、かひゅっ、なつかしいって、なんだろう」
「マクス!! マアアアクス! 奴の記憶を消せ! あの男の、シノギ・ジシクロウの記憶を! 一切合切全てだ! 野の獣以下の廃人にしてしまえ!」

「ひゅっひゅっ、無理だよ、アルダープ。前にも言った。前にも、ひゅっ、ひゅっ、言っただけ? あいつの呪は強過ぎる。肉ではなく骨でもなく、魂に根付いた呪。今の、ひゅう、僕では、無理だ。届かない」

「ツツ!! この役立たずがあ!!」

彼は僕の顔を蹴り、倒れた僕の腹を爪先で蹴り続けた。

彼の顔は醜く歪み、口から粘った泡を吹く。憎悪に狂っている。

ああ。

なんて綺麗なんだ、キミは。

「殺してやる！ あの男は、どんな手を使ってでもお！ 殺してやるう!!」

60話 鋼の蜘蛛

羽衣のように薄く幽かな雲が青空を覆っている。隴雲の浮かぶ春の空であった。

早くも天頂から傾き始めた日輪を仰ぎ、荒野を駆ける。

黒毛が靡き、黒き馬体がうねる。しかし四脚の蹄が奏でる蹠あしおとは驚くほどに静かだ。

屍の馬は地を蹴らず、蹄は地表に触れることなく虚空を蹴っている。

あたかも早駆るこの様は擬態であり、実態は飛行、飛翔に近い。ゆえにその速度は尋常の生き馬を凌いだ。鳥を後塵に蹴りやり、平地を直進する限りにおいてグリフォンの成鳥を超える。

異形。紛れもなくそれは怪魔の仕儀。

死霊が音もなく生者に忍び寄り、その魂を連れ去る為の悍おぞましき所業。

それを使う。さも事も無げに。傲岸不遜に、速度というただ一つの性能を利せんが為に。

“ソレ”に追随し、果ては凌駕するだけの速度を欲した。

「あれか」

その時、遙か遠方、地平線の縁に湧き立つ土煙に気付く。まるで飄つむじかぜが列なり大地を荒らしているかのような様。

しかしてそれを為したるのは一つ。ただ一機。一城の動く砦である。

黒い威容、鋼の蜘蛛を彼方に認む。

「魔術合金製の巨大な蜘蛛が、約半日を待たずしてこの街へ到達する」
機動要塞との名にし負う通り、それは自律稼働し走行する巨大な要

塞であるという。

多脚ゆえの走破性は悪路どころか山を跨ぎ越え、その脚力は王国一の駿馬すら凌ぐ。なによりも脅威なのはその質量。圧倒的、暴虐なる質量があらゆるものを轢殺する。圧殺し、壊滅し、塵埃に播り潰す。集落はおろか都市を、果ては地形すら変える天象の如き機械仕掛けの怪物。

「アクセルの街は蹂躪されるだろう。都市機能を失い経済は止まり人の居住地として用を為さなくなる。残るのはただの瓦礫と土塊の山だ」

機動要塞の踏み荒らした地には何も残らない。

人はただその存在に怯え、その襲来に際しては取るものも取らず逃げ出すのが唯一助かる術。

「しかあしここに一人の英雄がいた！ その男はこの駆け出しの街アクセルに突如として現れた流浪の剣士。数々の勇名を轟かせ、遂には魔王軍幹部が一角、首無し騎士すらその剣の一振りですべて倒してみせた。民衆は希望を以て縋り期待を胸に抱くだろう。英雄が再び剣を取り、この天災のような危難さえ退けてくれるのではないか、と！」

「見込み違いも甚だしい話だ。も一つ言やあ、この身が貴様の口車に乗ってやる道理もねえな」

「見捨てるかね？ アクセルを」

「故郷を守るのは領主の務めだ。だが、それが当てに出来ぬというなら民衆が発起せねばなるまい。そして街の防衛戦力として冒険者を雇い、駆り出すのもな。その御大層な要塞が街へ侵攻するのが事実だとして、早晚ギルドを通じて冒険者共に下知が回る。貴様がわざわざ己のような素浪人一匹を唆さずとも、万端準備を整え民と冒険者の総力で迎え撃つだろう」

己一人とアクセルの全戦力を比較する。迎撃ないし邀撃戦、防衛戦に際しての勝算の多寡は考慮にも値しない。

「その通りだ。勝算うんぬんに関しては貴殿の謙遜としておくが、確かに街の戦力を糾合して事に当たれば対処は不可能ではない。特にその、頭のおかしい紅魔のアークウィザードや我輩にも見通せないた

ただ不快で忌々しいそのアークプリースト……ついでにそのリツチー。大出力の解^{アンチスベル}呪と爆裂魔法の大火力が合わされば、さしもの機動要塞とて一溜りもあるまい。進行阻止だけならば、ううむなるほど十分に可能と言えるな。実際のところ、我輩が見通す中でもその道は最も確実な勝ち筋だ」

「勝ち筋だと」
「ククク、そうだ。幾つか存在する未だ形を定めぬ『ミチ』の一つだよ」

今のところ眼前の男の提案は妄言か、狂人の戯言を下回る。それほどに馬鹿げていた。事実その所作と言動は気狂いのそれ。真に受ける方がどうかしている。

それでも、しかし。

己はそれを一笑にふし、この場を去ることができた。あるいは更なる短慮にて、腰の刃金を抜きこの悪辣な邂逅を終わらせることさえできた。

それでもなお、しかし。己はこの場に留まり、対する怪人物の弁舌を待っている。次なるその妄言を、聞き逃す訳にはいかなかった。

「住民と冒険者達による必死の迎撃によってデストロイヤーは止まる。幾人かの尊い犠牲を払って……そう、お察しの通り。未来ある尊い命を、子供達を代償に」
「……」

それは見え透いた挑発。こちらの憤怒を煽る意図は明白にして瞭然である。

だが、それを口から出任せと断ずるには、この怪物は知り過ぎていた。

「死因は様々だ。防御力だけしか能がない被虐性癖の聖騎士に小狡いだけの器用貧乏冒険者の少年、この二人は圧死と焼死が主だ。細部の流れは異なるが結果に然したる違いはない。そして特に死亡率が抜きん出ているのはそう、その紅魔の少女！ 魔力枯渇によって虚脱し無防備なところを潰され焼かれ斬られ刺され射られ千切られ、クフフフ、なんとも憐れな」

戦場に在って身体の自由を失うなどは、確かに論外の仕儀だ。死亡率、というよりそれは生存能力を著しく減じることになる。

その危険は常のモンスター狩りであっても変わらぬ。

だからこそカズマが、ダクネスが、時にアクアさえ、そして己とても、魔力を使い果たした後の娘子を背にして守って来た。

仮に、機動要塞何某に抗する戦力へ娘子が加わると言い出すなら、魔法の行使と付随する諸々の危機からこれを守護するよう我ら一同が図るのは当然の成り行き。

しかし彼奴は言い切った。

「少女は死ぬ」

「……」

「何が見えている」か？」

こちらが口を開く隙はなかった。煮え滾る腸から言葉なき呪詛が漏れ出、怪人はそれをまるで莫逆の友の如くに出迎える。

「概ね全てだ。街の近郊でデストロイヤーを迎撃した場合、貴殿の大事な子供達、その内の一人二人が必ず死ぬ。デストロイヤーの攻勢が苛烈を極めるというのも一因だが、なによりその動力源たるコロナタイト爆発のタイミングが加速度的に早まるのが最大の原因だろう。無限に等しく熱量を生産し続ける魔力鉱石は慢性的暴走状態でエネルギー消費が追い付かず、我輩の見立てでは既にその溶融が始まっている」

くつくつと楽しげに仮面の下の口端を歪めて男は笑う。取って置きの笑い話。そんな気色で。

「ふむふむなになに、レポートでコロナタイトを何処か遠く放逐する？ 良いアイデアだ。時間さえあるなら。しかし残念無念どうしてかどうしようともコロナタイトが臨界を迎えるのは冒険者達が要塞に乗り込む直前だ。とんだバッドタイミングもあつたものだなあ！ フハハハハハ！」

なにやら虚空の先に居ない筈の誰かを認めて話し掛けるような様だった。

「ああ、蘇生魔法をあまり過信しない方がいい。あれは損壊の激しい

る感触を皮膚に覚えた。

「憐れ少年はデュラハン・ベルディアの凶刃に斃れた。だが、それは本来起こり得ぬことなのだ」

「どういう意味だ」

「そのままの意味だ。シノギ・ジnkクロウ、貴殿が介在しなければあの少年があの日あの時あの場で殺されることはなかった。ベルディアは爆裂魔法の焦熱と大量の聖水に焼かれ爛れ、その剣技を發揮する間もなく浄め祓われ消え去る、筈だった」

仮面に穿たれたその薄ら笑みの穴が、己の目玉を覗き込む。額が突き合わされるほどに近く。

虚のように底知れぬ。奈落の闇の如く濃密な黒。仮面の下で魔が蠢動する。

「貴殿の存在が少年の、少年達の運命を変えた。歪めたと言ってもいい。そしてその歪みはまた現れ出ようとしている」

「……運命とききたか」

ふ、と丹田から氣息を吐く。

柄頭を押さえ、刃を鞘に仕舞う。

怪人は小首を傾げた。

「どうした。斬らんのか。そちらの兇刃は我輩を斬りたくて斬りたくて震え上がっているようだが」

「貴様に」

斬るだけの価値を認めぬ。

「——ほほう。この我輩に、地獄の公爵に価値無しと、そうのたま言うのか。人間」

「ああ」

背を向ける。それを相手にする時間をこそ惜しんだ。

やらねばならぬことは決した。業腹だが、是非も無し。

己の内に定めた価値あるものを、護りに行く。征く。

「口車に乗ってやる。化け蜘蛛を一匹、仕留めてやる」

あの折も、そしてこの事態も、己の業が歪めた仕儀だという。ならばそれを断ち切るのは己の役割。己の責めだ。

「フ、フフフ、ハハハハハ、ご武運を」

「……」

「ああそれと、グリフォンは使わん方がよいぞ。あの要塞には対空兵装が山と積まれている。地上を行くがいい。人間らしく、地を這って、な」

—— 悪魔からの純粋なアドバイスだ

悪魔は悪魔らしい悍ましさで、高らかに哄笑した。

61話 裏切り

「くっさー！ くっさー！ なに!? ジンクロウの家めつつちやくっさいんですけど!? アンデッド臭なんてメじやないくささなんですけど!!?」

「あ、あれれ〜おかしいですねえ〜、け、今朝空気を入れ換えればかりなんです。少し冷えますけど障子戸開けちゃいますね！ すみませんアクア様お掃除が行き届いてなくてえ〜えへへへ〜!」

馬鹿に騒がしいアクアと白い顔を青くして右往左往するウイズ。そんな二人の奇行を横目に見ながら、焼き魚で白米を掻き込む。

めぐみんは膨れっ面で里芋の煮っ転がしをもにゆもにゆ頬張る。

「んぐ、まったく。ちよつとくらい待っててくれないのに。すぐ一人でどこか行っちゃうんですからジンクロウは」

「単独行動スキルA+くらい持ってそうだな、あの爺ちゃん」

「まあどうせギルドで落ち合うんだ。ありがたく朝食はゆっくりと頂いて、精々あいつを待ちぼうけさせてやろう」

街の外の林の奥にひっそりと佇む庵。迎えに来たというか、しっかりと朝飯をたかりに来た俺達は、結局その朝に家の主と会うことはなかった。

「ふい〜、煎茶はええのう。ここにはこれ目当てで来ると言っても過言じゃないな。日本人はこれに限る」

「前から思ってたんですが、カズマとジンクロウってもしかして同じところの出身なのですか? ……時々私やダクネスにはわからないことを、なにやらひそひそと耳打ちしあってるようですし」

「え? いやー、まー、近いことは近い、のか? ……というか、それは一体なんの言い掛かりだよ」

「ふふ、めぐみんは除け者にされるのが寂しいんだろう」

「な、なにを言うのですかダクネスは……私はただ単に、隠し事が多いこの宿六達を咎めて言ってるんですっ」

「誰が宿六か」

「まあまあ。私としてもお前達の郷里の話は気になるぞ? ……是非とも

聞かせて欲しいものだ。とりわけ特殊な拷問せめどいの文化ブレイなどあれば何と
しても伺いたい」

「人の故郷を何だと思ってるの？」

馬鹿話、もとい心の底からバカな話を一区切りつけて、両手を合わせ
せて一同。

「「ごちそうさまでした」」

「はい、お粗末様です」

ウイズに見送られながら俺達は庵を後にする。

「それで？ 結局カズマ達はどこの生まれなのですか？」

「その話まだすんのか。俺は日本っていう国だけど、ジंकロウの方
は俺も知らない」

「……本当ですか？」

「こんなことで嘘なんて吐くかよ」

「カズマなら平気な顔で無駄にクオリティの高い虚言を操りそう
です」

「そこに直れいロリっ子」

無礼千万な爆裂娘と死闘を演じる。しゃくしゃくと踏み心地の良
い枯れ葉を蹴散らして、ぎゃあぎゃあとそこら中を追い駆けつこす
る。

実際、ジंकロウが何者かなんて俺にもわからない。あの癖の強い
べらんめえ調の言葉遣いも、刀を使った素肌剣術も、端々の知識や細
かな作法の妙な古臭さも、江戸時代や、あるいはもっと古い時代の日
本人……のように見える。でも、本当にそうなのだろうか。俺の生き
ていた時代よりも遠い過去の人間。そんな単純で解り易い存在なの
だろうか。

遠いのは、果たして時間だけなのか。もっと根本的な部分でそれを
感じてる。海溝みたいに深い、隔たりが、そこにあるような気がする
のだ。どうしようない。不安を。

それを覚えたのは、あの時。あのデュラハンと斬り結ぶ、その背中
を見た時。

「……………」

ジンクロウも取り立てて自分自身のことを語らなかつた。当人曰く忘れたらしい……生前のことも、その過去も。

めぐみんと両手で掴み合う。相変わらずその見た目に似合わない握力で、ちよつと油断すると負けそう。

「ぬぐぐぐ、そんなに知りたきや本人に聞けつてえのお！」

「うぎぎぎ、ええええそうですも！ カズマ共々、過去の恥ずかしい話とか聞き出して脅迫材料に使ってやります！」

「なんか怖ろしいこと言い出しやがった！」

「ふふふ、この紅魔族随一の才媛から逃げられるなどとは思わないことです！」

「才媛（笑）」

「笑つたなあああああ!?!」

「カズマー、めぐみーん。遊んでないで早く行きましょー」

入れ違いに街へ行ったというジンクロウを追って、アクア、めぐみん、ダクネスと共に冒険者ギルドを目指す。集団行動つてやつをとことん軽んじるあの男には、コーヒーの一杯も奢らせてやろう。そんな皮算用を弾いていた時だ。

街の至るところに設置された水仙の花弁のような拡声器から、そのけたたましいアナウンスは響いた。

『緊急事態発生！ 緊急事態発生！ アクセル近在の冒険者は至急ギルドへ集合してください！ 繰り返します——』

ギルドの大広間は騒然としていた。

室内中央の長テーブルに地図が広げられ、それを囲んでギルド職員や冒険者達が深刻そうな顔を突き合せている。

ひどく、切迫した空気だった。誰も彼も余裕がない。ギルド職員が忙しなく其処彼処を行き交い、奥の部屋では通信装置と思しいマイクに向かって通信士が声を張り上げている。地図に向き合つて魔法使いが数人で何かの測量をしていた。窓の外では手綱を引かれて何頭

もの馬が居並んだ。

いかにも物々しい。剣呑な雰囲気。まるで、それこそまるで、これから戦争でも始まりそうなの。

気分が悪い。手足が冷たくなる。これは不安だろうか。いや、違う。以前にも一度、感じたことがある。あの時だ。デュラハン・ベルディアと相対したあの時。

どろりと煮え立つように嫌な予感がした。

顔見知りを探して、ふと視線が合う。

ギルドの上役とベテラン冒険者達が声音を低くして話し合う集団。その中から抜け出したルナが、こちらに駆け寄って来た。

「カズマさん！ いらしてたんですね、よかったです……」

「あの、これどういう状況なんですか。緊急事態がどうか……」

「デストロイヤーです」

反応は劇的だった。俺を除いて。

めぐみん、ダクネス、アクアの三人が一斉に声を上げる。

「向かってきてるんですか!? この街に!?!」

「現在、北西に約三百里ほどの地点にその姿を確認しています。アクセルへの到達は……ほぼ確実です。正確な到達時刻は技術者の測量結果が出るまでわかりませんが……少なくとも日没までは掛からない、と……」

「くっ、なんてことだ……」

「に、逃げなきゃ。屋敷に帰って荷物まとめるわよ！ ほらみんな！

ダツシユ！ 急ぐの！」

「お、おいおいなんなんだよ三人とも。デストロイヤーってなんだよ」
一人置いてけぼりを喰らう俺に、ルナが説明してくれた。

魔道技術大国ノイズで開発された超大型機動要塞。下手な建造物よりも巨大な蜘蛛の化物が、進路上のあらゆるものを破壊し尽くしながら大陸中を延々と暴走し続けているそうさ。

その進行ルートにこのアクセルがあり、現在進行形で俺達は危急存亡の秋、もとい破滅目前逃げ場無しなのだ。

「はあああああ!? マジかよ嘘だろ!? てかまたか!? なんつでこの

街はそうぽんぽんぽんぽんやばいのが押し迫ってくるんだよ!」

「自分の不運を呪ってる暇はないですよ、カズマ」

「俺じゃねえわ! ハードラック 不運と常に踊ダンスってんのはこっちの水芸の神様だよ!」

「水芸だけじゃないもん! 水画とかマジックとかものまねとかコンテンポラリーダンスとかできるもん!」

芸の幅はどうでもいいんだよ。いよいよ何の神様なのだこいつは。「デストロイヤーは強力な対魔力結界を展開していて、我が爆裂を以てしても……その、分が悪いのです」

魔法の効かない敵が相手とあつては流石の爆裂狂めぐみんも弱気だ。

「戦うか、逃げるか。カズマ達は好きに選ぶといい。私は、残って戦う」

そしていつになく真剣な面持ちのダクネスは、いやに決然として言った。

「ダクネス……」

「私の方の事情はカズマも知つての通りだ。領民と領地を守るのは貴種を称する者の務めでな」

「本音は?」

「大きくて黒々とした金属の塊に押し潰されたくて……って何を言わせるんだ!」

いつもの変態発言は、おそらく半分は本音だ。

でも、もう半分は。

ダクネスのニヤケ面の裏側に見え隠れする頑なさ。責任とか、義務とか、そういう重いもの。

これを放つて逃げるのは、寝覚めが悪そうだ。仕方ない。

「はっ……ったくしょうがねえな。せつかく手に入れた屋敷を潰されるのも癪だし」

「ふふ、パーティーの名ばかりリーダーがそう言うなら、私も付き合つてあげましょう」

「誰が名ばかりか」

「デカ物上等。我が魔法で消し飛ばしてやります！」

「つい今さつき結界がどうのこうの言ってたろうが」

「じゃ、じゃあ私はみんなの荷物を避難させておくわね、無理しないで頑張つて！ それじゃぐへっ」

「逃さんぞ名ばかりアークプリースト」

ハツチャケびつくり芸パーティーにいつもの調子が出て来たところ、そろそろもう一人の遅刻野郎を呼び付けなければ。

「んで、あのハツチャケ爺さんはどこ行ったんだ」

「こんな大騒ぎに遅れるなんて……はっ、そうか。皆がピンチになったところへ遅れて出てくる方がカツコイイのです！ ジンクロウめ、リアル真打登場を極める気ですね！ ちょっと私もスタンバつときます」

「やあめろめんどくさいから」

「とはいえ作戦を立てるならジンクロウは同席させた方がいい。ここで一番戦馴れしているのは間違いなくあいつだろうからな」

「うー、もー、しょーがないわねー。ジンクロウ、この私が残つてあげるんだから早く来なさいよ」

先程から姿が見えないが、こんなとんでもない事態を静観しているような奴じゃない。

それに、多分。

毎度毎度無茶なことをするし、さり気なく人に難題をぶん投げてくるけど。

あいつがいればなんとかなる。きつと、どうにかなる。我ながらまあ楽観的で無責任な物言いだけど。

あいつと俺達で出来ないことなんて、無い。そんな気がするのだ。そういう恥ずかしいことを思った。思ってしまったくらいあいつは、

矢鱈滅多に頼りになるから。

ジンクロウは。

「……ジンクロウさんはここにはいません」

「えっ？」

ルナは言った。固い声で。瞳は沈痛で、その表情はどんどんと昏ん

でいく。

「あの人は既にアクセルを発ちました」

「ど、どういうことですか？」

「街の周辺の穀倉地帯や治水施設、特に生活用水を賄う河川上流域を踏み壊されると困る。その為の脚止めを……するからって」

「――」
傍らでめぐみんが息を止めた。ルナの訥々とした説明に絶句したのは俺も同じだった。

じゃあそれは、なんだ。つまり。あいつは。

「一人で……？」

「……」

「一人で向かったっていうんですか」

ルナは何も言わずにただ頷いた。

喧々囂々だった室内が、いつしか静かになっていた。

「また……」

しんと静まり返った会議室に、その囁きが響く。愕然として。

継るように杖を握り締めて、めぐみんは俯く。

「また……またっ、私達を置いて……！」

めぐみんの声は弱々しくて消え入りそうなほど微かなのに、それは強かに俺の何かを揺さぶった。

62話 引き摺ってでも

「たった一人でデストロイヤーに？ 機動要塞ですよ？ はっ、はは、あんなのただの動く大きな城ですよ？ 人間一人で、どうこうできるわけ、ないじゃないですか。ねえ？」

俺を見上げてめぐみんは言った。言いながら、途切れ途切れに笑うのだ。感情に不具合を来たような、歪な笑い方だった。

驚愕が空回ってる。前触れもなくいきなり高所から突き落とされたような気分だった。

その意味で、めぐみんは俺達の誰よりも早く正常な感情表現を取り戻した。

「麦畑？ 川？ そんな……そんなくだらない理由で、ジंकロウを一人で行かせたっていうんですか!!」

理不尽な怒り、そして理不尽への怒りでもあった。

聞くだになんだかよくわからない、とにかくやばい兵器に、たった一人で、そしておそらくはたった一振の刀で立ち向かおうとする男。

正気の沙汰ではなかった。

それを実行しようとする人間も、それを実行させる人間も、同じくらいイカれてる。

「なに、それ」

「！ リーン……」

入口でリーンが呆然と立ち尽くしていた。その後ろからダスト、キース、テイラーと見知った面々が現れる。

「ちよつと意味、わかんないんだけど……ジंकロウ、どこ行っちゃって……？」

「べつ、英雄気取りが……」

ダストは唾と一緒にそう吐き捨てた。柄の悪さが極まっているが、実際許されるのなら俺も同じことをしたかった。

リーンは真っ直ぐルナに歩み寄り、その肩を掴んで揺する。

「なんで!?! なんで止めてくれなかったの!?! ねえ、ルナさん!」

「やめろ、リーン。みつともねえ」

ダストはつまらなそうに言つて、キースとテイラーがリーンを引き戻す。

返す返す、人が言いたいことを言つてくれる奴らだった。小賢しい理性とかいう器官が働いて喉を塞ぐ自分なんかより余程に真つ当だ。善良だ。

冒険者ギルドは官民から広く仕事を募つて、それを日雇い労働者、つまり冒険者に斡旋する仲立ち業者に過ぎない。業務として一定のサポートはしても、労働者の行動に一々心を配つたりしない。まして危ないから、なんて理由でその仕事を断念させるなんて真似、許されない。もしそれを許せば、それは越権で職権濫用で公私の混同になる。

そういう理屈。ああ、めぐみんの言う通り。くだらない理屈。

「……後を追いましよう」

「！ ああ、なら馬は私が」

「待て、二人とも」

即断即決、踵を返して出て行こうとするめぐみんと、合点承知と威勢よくそれに追隨するダクネスを制止する。

意外そうに少女の目が見開かれた。この期に及んで何を、とでも言いたげだ。俺自身そう思わないではないが。

俺の小賢しきは、ルナの言葉を待っていた。その続きを。

固い無表情を繕つて、ギルド職員の女性は冒険者共に現実つてやつを突き付けた。

「アクセルに迫る脅威は、デストロイヤーだけではないんです」

長テーブルに広げられた地図を見た。複数枚の褪せたパピルス紙。いずれもアクセル近郊の地形図ではあるのだが、それぞれは縮尺と、なにより位置関係が異なっている。

一枚はデストロイヤーが接近しているという北西部の地図。

もう一枚は、街の北方に位置する丘陵地の地図だ。図面の一カ所に赤く印が描かれていた。注釈には一節『廃城』とある。

「北の外れの丘に古い城があります。元は領主の居住地でしたが随分

前に打ち捨てられてそのままでした。その廃城に、魔蟲が巢を張ったんです。それも異常な速さ、異常な規模で……冬季からまだ明けないこの時期にこれほどの活性化は前代未聞です。そして現在、魔蟲は群を成してアクセルに向かってきています」

「……は？」

「確認されているのは突撃蟻、キラabee。そしてどうしてか群体行動をしない筈のジャイアント・アースワーム、アダマンマイマイまで集まっています」

悪いことは重なると言うが、それにしたって限度がある——何者かの作為を疑うほどだ。

前門には鋼の虫、後門にもまた蟲の群。同時侵攻。どちらかを相手取るか、あるいは全部放り捨てて逃げるしか。

……ああ、そうか。そうかよ。だからかよ。

「……魔蟲の討伐難度は皆さんご存知の通りでしょう。問題は数です。徒党単位で対応できるレベルを超えています。アクセルに在留している冒険者の総動員が必要と、当ギルドは判断しました」

「蟲の群が街に到達するまでの時間は？」

自分の声の冷たさに自分自身驚いた。

質問に答えたのはルナではなく、奥の部屋の通信士だった。

「およそ二時間弱！」

「なら今すぐに布陣しないと間に合わないな。あー、北向きの物見台ってあったか？ 無いなら外壁の上に無理矢理登るけどさ」

「は、はい。番兵用の見晴台が」

「うーい、じゃあとつとと全員北門前に移動！ 荷物纏めろー。ああ馬も連れてこよう」

「カ、カズマ!? でも、ジंकクロウは」

「はいはい会議終了！ 白兵戦要員は特に急げよー。そうだ、弓使いと魔法使いで隊列組まなきゃな」

「カズマー！」

腕を掴まれ振り返る。

めぐみんのひどく戸惑った顔を見下ろした。

「ジंकクロウのことはどうするんですか!？」

「そんなもん後回しだ」

「なっ、本気ですか!？」

俺の指示を受けて、というより現に逼迫した時間に追い立てられる形で、そろそろと冒険者達が腰を上げて動き出す。

ダクネスは一瞬だけ顔を歪めて、吐息一つでそれを引き締めた。

「カズマの言う通り、今は目前の脅威に対処すべきだ」

「ダクネスまで!？」

「蟲が大規模な群勢である以上、こちらの戦力を遠方に割く余裕はない。おそらくはジंकクロウもそれを見越して単独行動を選んだのだろう」

「でも……そ、それなら、私一人くらい後を追ったって」

「大群相手にするって時に火力持ちが抜けてどうすんだ」

この状況、爆裂魔法の運用次第では容易に蹴りがつく。わらわら寄り集まる蟲を一掃するのにこれほど有用なものはない。

加えて、その射程距離を考えれば、めぐみんは後方に待機して然るべきタイミングで決定打を叩き込めばいい。

魔法の効かない怪物兵器を相手取るよりずっと安全だ。そして、それはダクネスやアクア、俺にしたって同じことだろう。

……あの爺の考えそんなことだ。

「どうせ今から行ったって追い付けないんだ。それに、もしかしたら追い付いた頃にはもう仕留めた後でした、なーんてこともあるかも――」

「それじゃ遅いんですッ!!」

びりびりと石造りの床や壁が震撼する。めぐみんは絶叫した。それはまるで、悲鳴のようだった。

「ジंकクロウはまた、またあの剣を使う気です! デュラハンの時と同じように……もし、同じように、なったら……今度は……今度はこそ……っ!」

「……………」

腕に纏る小さな手が震えている。不安と、怯えに。喪失の予感に。

消えてしまう。あっさりとは、呆気なく、きつと幻みたいにな。

初めから居なかつたものみたいに、あいつは。

「なら、私が行きます」

「！」

「蟲の駆除程度なら私が出しやばるまでもないでしょうし」

いつの間にか、部屋の隅にウイズが佇んでいた。声を掛けられるまで存在にまったく気付かなかつた。何か隠密系のスキルでも使っていたのかと思うほど。

めぐみんの傍に屈み、ウイズは柔らかに笑う。

「私も一応、冒険者の端くれですから。魔法の心得も多少はあります。デストロイヤーに直接打撃を与えられなくとも、ジंकクロウさんを援護することくらいはできる筈です」

「オレが連れてく」

突然、室内に風が吹き抜けた。雪原の寒風めいて凍てついた空気。ウイズ以上の神出鬼没さで純白の振り袖を纏ったフユノがそこにいた。

ウイズが頷く。

そうして、そっと、めぐみんの頬に手を添えた。

「だから、めぐみんさん達にはこの街を守ってほしいんです。あの人が帰る家を、帰る場所を、守ってください」

そう言つてウイズは俺を見た。

—— わかつてますよね？ なんて念を押されてる。

あいつの帰る場所が何処なのか。何を守りたいのか。

そんなもの、わかつてる。勝手に消えられてたまるか。あいつの独り善がりに付き合わされてたまるか。引き摺つてでも、帰つて来させてやる。

ここに。

「ウイズ……」

「では、お先に」

「ん」

ウイズとフユノは部屋を出て行つた。

足音は静かで、纏う空気は落ち着き払っていた。こんな状況であっても変わらない振る舞い。場馴れの差、冒険者……いや、戦闘従事者として格の違いを垣間見たような気がした。

「俺達も行くぞ」

「……」

「デストロイヤーに対する迎撃態勢も同時に整えなければならない。迅速に蟲共を焼き払うには、めぐみんの魔法が必要不可欠だ。頼む」
「め、めぐみーん。怒らないでよお。あ！ そう、そうよ！ ジンクロウがもし死んじやっても私が蘇生してあげるから！ ね！ だから機嫌治してよう」

「馬っ鹿！ 縁起でもないこと言うんじやねえよ駄女神！」

「だ、だってだってその方がめぐみんも安心でしょ!?!」

またぞろ余計なことを口走るアクアの両頬をつねる。心配を助長してどうする。

不意に、めぐみんが鼻を啜った。

ぐしぐしと手の甲で乱暴に顔を拭い、前を向いた。赤く腫らした目元と、紅く輝く瞳で。

「蟲の群勢を焼き払う、フッフ良い響きです！ 我が爆裂の前には魔蟲の百や千や万など、まさに火に入る羽虫の如し！」

「……」

「とつとつ片を付けて、あの唐変木にも一発お見舞いしてやりましょう。カズマ」

無理矢理に頬を引き上げて、歯を見せて笑う娘っ子に思い切り笑い返す。上手くできた自信はなかった。

目的は定まった。戦場である北門へ全員で向かう。

「カズマさん！」

「はいはいカズマですよー。どうしたんだ、ルナ」

ギルドの看板受付嬢が俺を呼び止めた。

普段なら色っぽい妄想の一つ二つ浮かんでくる場面だが、状況が状況だけにそんな気分も湧きやしない。

ルナは、言葉を選ぶのに苦労していた。立場を弁えてる分、その気

苦勞は軽くないだろう。

痛ましさを堪えた顔で彼女は言った。

「ジंकクロウさんからの言伝です。『雛鳥は預ける』」

「ヒナ……ああ」

グリフオンを使い、ということか。

豊富な対空兵器を備えたデストロイヤー相手では無理でも、モンスタ―が相手ならば、確かに有用だ。飛翔する砲台。めぐみんを乗せれば即席の爆撃機が出来上がる。

善は急げ、街の外の庵に。そう踏み出しかけた背中に。

『後のことはお前に任せる』

「……………」

「そう、伝えて欲しいって……………」

ルナに頷いて、俺はギルドを出た。

庵に向かってがむしやらに走る。走り出さずにいられなかった。

「あの野郎……………」

無理難題気安く投げて寄越しやがって。

「帰ったらぶん殴ってやるー！」

63話 怪物退治、一騎

砂塵の舞い上がる空を背景に、黒の巨影を望む。造形は足高蜘蛛のそれに近い。

『あああああどうしてこうなった!? どうしてこうなった!? 何故この俺がこんな、人間共に与するような真似を……来るんじやなかった! 来るんじやなかったよお!』

「うるせえな。街を出た頃の勢いはどうした。しやきつとしろしやきつと」

一步、また一步ごとに地を踏み鳴らす長大な八脚。それらが戴く黒鉄の頭胸と、連なる腹。

空を覆うようだ。城塞との呼び声に些かの過大無し。走る建造物。高速で前進する金属質量。

『はっ! 卑劣な脅迫の拳に出ておいて凶々しい。ここで振り落としやっても構わんのだぞ』

「そんな時は、お前さんがウイズの衣装箱つづらを漁っていたことを当人に詳らかにしてやらねばならんが……」

『ハイヨー! 俺え!』

正面、荒野の只中、距離は既にして半里(2km弱)。刻一刻視界を拡大し占拠する威容。

脅威であった。尋常な生き物にとり、なるほどあれは天災に等しい。

ゆえに、止めねばならぬ。

『……正気まともだとは欠片も思っていないなかったが、まさかここまで救い様がないとは。この俺をしても呆れ返る』

「今更なんだ。怖気づいたか?」

『抜かせ。あの怪物に剣で挑もうとするのは真性の気狂いか英雄か。さもなくば……人ならぬ魔モノだけだろうよ』

「カカツ、何を言いやがるかと思えば」

今、己が跨る黒毛の巨体。屍の怪馬が、骸骨しやれこつべを模した毒々しい兜の下からそう神妙のたまに宣うのがなんとも可笑しい。それにまんまと言

われていれば世話もない。

そんな筈がなかるうに。そんなものである筈がないのだ。

「己が正常まっとうなわきやねえだろうがあ！」

くだらぬ事実を、我が身に巢食う滑稽なる本性を嘲弄する。

腰から刀を抜き放つ。陽光を嫌うかのように鈍く昏む刃。

二尺と少し。打刀の拵え。その切れ味は凶悪の二字を冠して憚らぬ。

しかし、如何にその刃が鋭くとも刃圈に敵を捉えられないならば、その価値は鈍ら同等に墮す。

携行武装としての趣が強い打刀は、戦場、それもこうした馬上戦闘に際して有効な打撃力足るには小さ過ぎる。なにより、討ち取らんと欲する首級くびがああ巨体では、もはや矮小と言つてもいい。本来なら槍や長柄を用いるべき場面であろうが、この刀に匹敵する業物を調達する時間は生憎となかった。

工夫が要る。

己が手札を参照し、有効な術策を選定する。

筆頭上がるのはやはり——異形剣。我が身の血と魂を贄に、破滅と絶死の概念を込めた斬撃を空間そのものに刻む悪鬼の御業。この世の理に対するその反則行為はしかし、現在の課題である射程と、ああ巨体を完全停止させ得るだけの破壊力を一挙に叶える。

考慮に値する。

だが、己は即座の使用を戒めた。

異形剣の切断力あらばどれほど巨大な金属塊であろうと、それを裁ち割るに何程の難もあらぬ。豆腐に包丁を落とすようなものだ。だがその中にもし、雷管と爆薬を仕込まれていたなら、料理人は厨房諸共消し飛ぶことになる。

かの機動要塞内部には、コロナタイトなる動力炉が存在する。そしてそれは今この瞬間にも暴走状態にあると——あの悪魔は笑声交じりにそう言っていた。動力機関を停止、あるいは無力化しない限りあの化け蜘蛛は超弩級の爆弾に等しい。

脚を止めるだけでは駄目だ。

加えて、異形剣を使いあれの脚を止められたとして、その後己の肉体が満足に機能する保証はない。妖刀が次に求める血と魂の代償、それは残った右腕か、足か、それとも内臓諸器官、はたまた五感のいずれかであるともわからぬ。

触覚と痛覚を失った左腕が最低限、棒振りの体裁を繕えるようになるまでに二週間を要した。そうしていざ、斬り合いの運びとなった際には……この腕は持ち主の思惑を無視して対手を破壊しようとするから動きおつた。

地上で花火に見舞われたくないなら、軽々な破壊力追求は禁物。

ゆえに取るべき手段は一つ。間合を超越した異能の斬撃に依らず、肉薄しての直接斬撃によってその行動力を剥奪する。

その為の長物を、今、この場で、用意する。

鍰元で刃を握る。刃先を左掌に包み込む。そうして、す、と。

刀身を握り込んだ掌中で滑らせ、抜き取った。当然に刃先は皮膚を裂き肉を切った。赤々と鈍く昏い刃金が、黒々とした赤で染まる。血の紅が刀身を彩る。流れ出た血潮がぬたりとへばり付く。

血の粘りと脂が刃を曇らせた。それはみすみす切れ味を損なわせるが如き暴拳に他ならない。それが尋常な、正常な刀剣であるならば。

先刻承知の邪妖剣は生血を啜り魂を喰らい狂喜の聲でその身を震わせた。

突如、発光する。刃そのものが赤く、紅く。

そうして伸びる。刃先がより長く生えていく。増殖する。

『なんとという悍ましきか……』

「ああ、まったくよ」

刃渡り六尺余り。妖刀は、大刀から野太刀へと肥大化を果たした。目にも呪わしい紅色の刀身がざわざわと波立つ。蠢動する。

非常識な長さの刀身は、その長大きに比して異常なほどに軽量であった。片手で振り回すことも容易だ。同様の長さの刃金なればこゝうは行くまい。

血液を素材とする為なのか、あるいはこれは刃の形かたちをしているだけ

の、得体の知れないこの世ならざる物質であるからか。

正体は知れぬ。が、今この危急にあつては、使えるものは何でも使う。死馬すら鞭打って走らせるのだ。

巨体が近付く。より大きく、さらに大きく、どこまでも大きく。地響きが馬体を伝い骨身を震わせた。圧倒的質量差を骨の髄へと知らしめる。

『機動要塞に一騎駆けなど、馬鹿げている……くっ、くふ、くふふふ、ああつくづく馬鹿げている』

『されどこれぞ、戦場の華』

『然り！』

嘶き一喝。馬脚が初めて襲歩を刻む。最大加速。

瞬間、人馬は共に颯と成る。

巨影は目前。その長大な蜘蛛の左前脚が、我らの頭上に迫る。

踏まれれば死。掠ったとて、原型を留めるかどうか。

死間。この世で最もあの世に近い場所。

跳ぶ。馬体を蹴り、馬脚が地を蹴る。空を翔る。刹那の飛翔。

「二太刀馳走」

馬体と共に化け蜘蛛の横合いを擦り抜ける。擦れ違う。

絶えず動き続ける長い長い脚。その節足が屈曲した頂点に。

紅色の刀身を薙ぎ払う。

刃先、物打ち所が、この要塞においておそらくは最も強靱な部位である歩脚を捉え、喰い入り。

斬り、断った。

前脚一本。

「謹んで頂戴いたす」

空中から地上へ舞い戻る。屍の馬は重力を嘲笑うかの静謐さで着地を果たし、何事もなかったかのように抜け抜けとその場を離脱した。

後方を振り仰ぐ。落ちた前脚が跳ね、転がる。そして高速走行の最中に突如として支柱の一本を失った蜘蛛の頭が傾ぐ。均衡を崩して揺らぎ、その顎が勢い地面を抉る。

一気に速度が減じ、すわ止まるかとも思われた巨体が踏鞴を踏んだ。無事な三本の左歩脚、欠損のない四本の右歩脚が迅速に動き姿勢制御を為した。

先刻よりも歪ながらそれでも脚は止まらぬ。多脚機動の優位性を如何なく発揮して要塞は進行を再開した。

「二つ腕^もいだ程度では止まらんか」

やはり片側全てか、ないし両側から。最低限度の姿勢制御を保障する歩脚を斬り落とさねば。

後塵を拝しながら巨体を追隨する。追撃する。

「ならば幾度でも」

『ん？ おい見ろ。どうも様子が変だぞ』

「あ？」

『腹の下に……あれは、なんだ。跳ね橋のような』

馬の言の通り、蜘蛛の丸い腹の後下部に変化があった。

四角く区切られ、それがばかりと口を開ける。両側を二本の鎖で吊られた床板が、それこそ跳ね橋の様相で下りてきた。

蜘蛛の腹の中へ続く坂道。奥は暗く、砂煙もあつて見通すことは難しい。

見えぬ暗闇、その奥から。

それは躍り出た。

それらは次々に坂を駆け下りて来た。

『なにい!?!』

ベルディアが驚愕に声を上げる。

心情だけならば己とても同様であった。

馬、馬のようなもの。それは人間の上半身と、馬の軀体を合わせたような姿をしていた。

流線形の全身甲冑。人と馬、いずれの体表も全て鈍い金属光沢に覆われ、それが生き物でないこと一目瞭然であった。絡繰仕掛け。この動く化け蜘蛛と同じ。

『ケンタウロス!? いや、それを模したゴーレムか!』

「機械人形の兵隊つてえ寸法だ。なるほど、こいつあ……」

随伴騎兵。

地上へ投下された鉄色の人馬共は、走行しながらに隊列を組んでいく。

手に手に様々な武器を携えている。親玉を守護し、それを害さんとする敵を先んじて撃滅し、進路を制圧する為に。

『あんなものまで積んでいやがるとは！ あの要塞を作った奴はとんだ臆病者か稀代の戦術家だ！』

悪態だか感心だかもわからぬ怒声で馬が嘶く。

魔法という大火力に対して盤石の防御機構を内蔵させながら、なおも近接戦闘に対する備えを怠らない。物理的損壊を与え得る敵を想定し、防衛と先制攻撃の為に機動力と戦力。騎兵隊を搭載させる。

小回りの利かぬ大型機動兵器を運用するに当たって、随伴兵はある種当然の措置ではあるのだろうか。

『余計なことをして！』

「余計なことをして」

突撃槍を構え、人馬数体がこちらへ進突する。

得物の有利はあちらにある。まず以て先手は槍の刺突。

半馬身以上の長さで鋭鋒が迫った。それを——屍の馬は苦も無く避ける。

既にして内懐^{ふところ}。槍の最低射程の内側に在る。もはや無力な機械人形の首を刎ねる。内部の細かな機構を血肉のように吹き出して一体の人馬が転げ去った。

さらに一薙ぎ。刃圈の長大さは今や槍の専売ではない。

右へ。左へ。両側面より接近した人馬共を順々と斬り払う。

同じく後方へ、金属の亜人は砂塵の中に消えた。

群成す人馬は、未だ蜘蛛の周りを無数に駆けている。この防衛網を突破せねば本丸の怪物は討ち取れぬ。

なるほど、実に。

「戦らしくなってきたじゃあねえか」

『駄馬共め！ 我が愛馬の轟脚で蹴散らしてくれ！』

「征くぞ」

『応！』

64話 牙城を落とせ

鼓膜を直接引つ搔くかのような重低音だった。ひたすらに不快不快不快、耳におぞましい蟲の羽音。

蠅や蚊でも耐え難いそれが、数百、数千倍のスケールで空から降り注いでくる悪夢。蜂の群だ。

悪夢は、地上とて変わらない。

地を埋め尽くす黒い背中。整然とした行列が幾重にも並走している。子供の頃、公園で観察した小虫の行進を懐かしむ。そうして眼下の、重戦車のような怒涛の侵攻風景に恐れ戦く。形だけは同じ様。特大の蟻の川だ。

蟻に追従して長い長い巨体が擡もたげた。肉肉しく血管の浮き上がった体躯の砂蟲。蠕虫ワームである。それは激しく蠕動しながら土中を這い回り、地上を這いずる。掘り返した腐葉土の中で蠢く大量のミミズを想起した。

大蟻の背や腹には、無数のカタツムリが纏わり付いていた。背中に岩を背負った人間大の軟体。曰くアダマントイト並の硬度を誇るといふ殻は、その持ち主だけでなく、それを体に付着させた蟻すらも守る堅固な盾になる。

一個の完成された軍団のように、蟲が、蟲の群が自らを連体して自らを編成し、敵地へ侵攻している。獲物の巣を襲撃しようとしている。

人間の巣を、蹂躪しようとしている。

アクセルはもう目前だった。平原を雲霞のように包む群体の大攻勢が、北門から数キロに迫る。

昔見たSF映画に、こんな場面があったな。

空の高み、雲に手が届きそうな天界の入り口で翔ける。グリフォン
の背中からそんな怖ろしい光景を見下ろした。

「アクア！」

「まっかせなさい！」

ここは羽虫では届かない空域だ。よしんば届いたとしても昇らせやしない。

第一手は、水攻めだ。

『セイクリッドオオオオオ!! クリエイト・ウオータアアアアアアアアッ!!』

女神らしからぬ気合と威勢で、女神の名に恥じない超巨大超弩級の水の塊を生成する。雲は間近にあり、高高度の気には大量の水が含まれている。ゆえにその集積率は地上の比ではなかった。

即席大瀑布だ。

逃げる隙間なんてない。そんな手心、この女神様の脳味噌には端っからありはしない。

まずその天災を被ったのは飛行していた蜂共。羽は折れ、巨軀は押し潰され、流れ落ちる。

水と共に地上の蟲すら巻き込んで、そこにあるものは全て洪水の流れの一部になっていく。

群体の進行が、完全に止まった。そして足を止めた軍団などただの的だ。

「今だ、めぐみんー!」

「万雷の鉄槌よ、獄炎の断罪よ、赦さずの誓いにおいて異形の群を撃ち払え——『エクスプロージョン』!!」

幾何学の陣、それは赤熱する円環の檻だった。

濡れ鼠になった蟲のほぼ全てを包囲して、少女は叫んだ。ゆるさな

い、と。
爆炎が、それこそ稲妻のように落ちて地表を、地盤を貫く。吹き飛び、千切れ、解けて消える。

その一撃によって目算でも群体の八割が消し飛んだ。いや九割に届くかもしれない。延焼に晒される分を数に入れれば、もっと増える。

イカレだの頭がおかしいだのと日頃散々からかってきたが、今日のめぐみんの爆裂の威力は過去一番かもしれない。

赦さずの……誰に対して言ってるんだか。

グリフォンの背中に少女はぐったりとしな垂れる。紐を結わえてあるので落ちることはないだろうが、念の為に後ろからその腰のベルトを掴んだ。

「カズマー！」

「なんだよ。セクハラとか言うなよな。ここから落ちたら流石に洒落にならんわ」

「そんなことより！ ジンクロウの様子はどうなってますか!?!」

切羽詰まった声で少女は叫ぶ。風鳴りの轟音を吹き飛ばす勢いだ。

こんな軽口に悪態を返す余裕もないのだろう。

そりやそうか。こいつはそうやって逸る気持ちを押し殺して、ここに来てるんだから。

肩掛けのバッグから掌大の水晶を取り出す。ギルドでルナから預かった遠見の石だ。

ギルドはモンスターの生態やその生息域の観測用に飛行ゴーレムを保有している。鳥型の、現代風に言えばドローンだ。

北西のデストロイヤーの予想進路近辺に配備されたものが、今はジンクロウを追跡している。

魔力を通す。すると水晶が淡く光って内部に映像が投写された。

「くっ……」

「お、おい危ないって!」

「あー！ 私も！ 私も見たい!」

「ああ危っ、ひよええっ、だからあつぶねえつつつてんだろっが!!」

無理矢理に体を引き起こしたためぐみんが、俺の腕を支えに水晶を覗き込む。俺の後ろにいるアクアまで身を乗り出してくるもんだから、本来は広いグリフォンの背中が狭苦しいったらない。

小さな丸い石の中。流れる荒野の景色が続く。

その只中に、蜘蛛。

「！……いつが」

「デストロイヤーです」

先刻吹き飛ばされた蟲共など比喩物にならない巨体。それこそ城

が八本脚を生やして歩いているようなものだ。

こんな怪物をたった一人でどうにかしようっていうのか、あの爺は。

そこに突然、紅色が閃いた。

「！」

赤黒く、目玉を抉られるみたいに凶々しい光。

あの刀だ。それも明らかに様子がおかしい。刀身の長さや身幅が異常に増してる。

それを握り、黒い屍馬に跨がって真っ直ぐに、デストロイヤーへ駆ける後ろ姿。

ジンクロウ。

男は一切躊躇せず、馬を手繰り跳んだ。そうして横薙ぎに一閃。事も無げに、蜘蛛の脚を一本斬り飛ばした。

「……」

水晶を覗き込みながら三者三様に絶句する。

ふと、あの男とまだ出会って間もない頃を思い出した。ジャイアント・トード討伐の時も、あいつは確かこんな風に使っていたっけなー。

「頭おかしいんかああああ!!」

「ええはい知ってましたよ！　こういうことする人でしたねえあなたは!!」

「で、でもでも、頭おかしいけど、おかしいっていかもうめっちゃ頭悪いけど、これ勝てそうじゃない？　ジンクロウ、勝てそうよね!!」

あと七回おんなじことすればいいだけだもん！　やった、やったわ!!
デストロイヤー討伐よ！　賞金がつっぱりよ!!　うひよー!!」

「あつバカ！　そういうこと言う……」

特級フラグ建築士アクア様の勝利（予定）の雄叫びが轟いたと同時に、デストロイヤーの腹の下から次々と何かが飛び出してきた。

高速の足高蜘蛛に追隨して、ケンタウロスが、ケンタウロス型のゴーレムが大軍で布陣した。

「おバカア!!」

「私のせいじゃないもん！　私のせいじゃないもん！」

「カズマ！ 私達も現地に向かいますよ！ 爆裂を逃れた蟲は大した数じゃありません。きつとダクネスや他の冒険者達が狩ってくれる筈です。このグリフォンの速さなら今からでも……間に合うかも知れない！ だから……！」

また、少女の小さな手が握り締められている。

俺を見上げる必死な目。それを見返して、齒を剥いて笑う。

「しょうがねえな」

「カズマ……」

「行くの!? じ、じゃあ私は下でダクネス達を手伝いに……」

「いっけえ！ グリちゃんんんん!!」

「いいいやああああ!! 降ろしてよおー!!」

断頭刃^{ギロチン}めいて振り落とされた戦斧を、真下から弾き上げる。

馬の突進速度と相まってその反動は激烈。しかし、手を断ち割るという企図と、相手の得物を逸らすという企図。この一合、より先んじて成就を見たのは我が企図である。

人馬は身を仰け反り、その肉厚な得物ごと体勢を崩した。

それはもはや据え置かれた畳表も同じ。

胴を斬り断つ。人体の部位が地を転がり、馬体だけが走り去っていった。

「二十八」

己が後背を突かんと迫る長槍の矛先を気取る。上体を前面に傾け、やり過ぐす。

同時に手綱を引き付け、馬体のうねりに合わせる。

『小賢しいわー!』

その躯体、黒く太く強靱なり。屍馬の後ろ蹴りが人馬を吹き飛ばした。

「二十九。残りは」

『十と一。くつはははは！ この程度かデストロイヤー！ 存外に手緩いではないか』

「調子に乗るんじやあねえよ。本丸は今もぴんぴんしてやがるんだ。とつとと片付けるぞ！」

『言われるまでもない！』

弩いしゆみを携えた人馬が数体、此方を狙う。矢弾が空を引き裂きながらに飛来するが、互いは並走する馬と馬。そんなものは早々当たりたくとも当たらぬ。

二射目を番えるその隙を逃さず、弓騎兵の殿から前方に向かって撫で斬る。

「三十六」

最後の四騎は変わり種だった。

人馬が一頭ずつ対になり並び駆け、その間に鎖が渡わたされている。両者がそれぞれ鎖の両端を握り、両端から膨らんで迫る。

まるでそれは。

「縄跳びがしてえとよ！」

『舐めるなあー！』

跳び越える。障害飛越の馬術競技会にでも出れば一等賞も夢ではないか。

愚昧な思考を笑い、笑いながら片割れを黒馬が蹴り飛ばす。機動要塞の足元へ。その足踏みの下へ。

敢え無くぐしやりと人馬は潰れた。そして蜘蛛の脚先に絡んだ鎖に引かれて、もう一頭の方も引き摺り回される。

さらに、二騎。

頭上で鎖鎌を振り回す者。そして巨大な片刃剣、斬馬刀を振り翳す者。

擲たれた鎌が弧を描いて飛来する。その先端は騎手たる我が頸を狙い打っていた。正確無比の投擲術。正確過ぎる。あまりにも、容易に防ぐことができるほど。

大太刀で鎌を弾く。同期して接近していた斬馬刀の主へと、弾き飛

ばす。それは過たず人馬の喉笛を貫いた。

鎖鎌の主に戻礼を。急速接近し、その忙しく動く馬体の脚を斬り飛ばす。

喉を繋がれた方諸共、雁字搦めに鎖に巻かれ、彼らはさながら地面を転がる藁玉となった。

障害は刈り取ったが、時を奪われた。このまま行けば直に穀倉地帯に出る。

「蜘蛛の腹の下へ潜り込め！」

『ああ!? 正気か貴様!? 下手をすれば押し潰されるぞ!』

「猶予はない。次で斬り切る」

『……よくよくの兇人め! 精々振り落とされるなよ!』

異形の黒馬による再びの襲歩。生身の馬を亀と嘲罵したとて何を咎めよう。

常軌を逸した速度。速度。幽鬼の如く、重みを忘れ疲れを忘れ一陣の魔風と化して。

地を踏み砕きながら上下する脚の隙間を縫い、這い入る。

内懐。巨大な蜘蛛の、その腹の下。

「ギッ」

刀身を握り込む。もつと深く、もつと広く、切り裂き滴る血の代償を湯水の如く貪らせ、異形なる剣はさらに増長する。その兇刃を擡げて、大太刀を超え、長槍を超え、武具の条理を超越し逸脱して、ひたすらの刃長^{むくろ}を得た。

その刃圈——実に一町(109m)。

握り、保持できるとして何秒だ。一秒か? 二秒か?

刹那でいい。

この一刹那で。

「おおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおッ!!」

馬の躯体が回転する。踏み締めた地面を削り、蹴散らして。

刃が廻^{めぐ}る。全方位、余さず逃さず。

残る七本の脚、全てを斬り飛ばした。

同時に刀身が崩壊する。そうして即刻離脱。

蜘蛛が脚を、支えを失い落ちてくる。沈みゆく鋼の虫けらから、辛くも脱出する。

巨体の墜落による衝撃と暴風に後押しされ、圧殺の憂き目を逃れた。

振り返れば、脚の残りをばたつかせ、地面の上を藻掻く巨大な無様がそこにある。

『終わったか』

「否」

未だそれは動いている。当然だ。動力は健在なのだ。

その金属の体内に宿る心臓は今なお鼓動を刻みながらに燃え盛っている。

ならば。

「息の根を止める」

『ふんっ、念の入ったことだ』

「応さ。戦ってなあそというもんだろう」

馬が嘶く。息荒く昂って笑声を上げる。

地を蹴り駆けて、牙城へと進撃する。

「殴り込みだぜ」

65話 落城

牙城を目指し、その一路を駆ける。

身動きを封じられた鋼の蜘蛛。彼奴は接近する騎影に対して今までにないほどの劇的な反応を見せた。これまで働いた我らの数々の無体が、遂にその堪忍袋の緒を引き千切ったのか。それとも、この騎馬武者の蛮行がいい加減怖ろしくなったか。

機械仕掛けの怪物に意思などあろう筈もない。あるいは内部でそれを司る何者かが存在するやもしれぬ。いずれにせよ、喰い破つてから確かめてやる。

彼奴は脚を失ったことで正しい要塞の有り様を取り戻し、その場に居を構えて城攻めを企てる愚か者を迎え撃つ。

光条が射した。

蜘蛛の背からこちらを狙う無数の「穴」。砲門だ。

「大筒か……!」

『魔力を加速して撃ち出している! 触れば焼き切られるぞ!』

本来は飛翔体に対する防備なのだろう。それが脚を扼もがれて地に伏した為に、その射程範囲が狭まり地上こちらを捕捉可能になった。

吐き出される実体なき砲弾。閃光。

一筋の光線が虚空を走り、それが大挙して流星の如くに降り注いでくる。

馬体を手繰り、不規則に、小刻みに転身と跳躍を繰り返すことでその照準を振り切る。それは次々と撃発し、三尺にも満たぬ間合の地面を抉る。着弾箇所から煙が舞い、土の焦げ付いた臭いがした。

「カツ、火炙りは御免だぜ」

『あ! 言つとくがゾンビ馬だつて熱いものは熱いんだからな!』
「なら尻を焦がされねえ内に乗り込むぞ」

光の雨より逃れ、躲し、脱す。

己を、あるいは馬体を射線に収める熱波を刀で受ける。弾け飛ぶかと思われた光の塊は、触れたと同時に霧散した。

……いや、吸い取った。啜り喰らったのだ。この飢えた刃が。
「悪食め」

また一矢、光の矢弾を喰い千切り、前へ。
半ばから切断された脚の名残に跳び乗る。駆け登る。

甲板は広々とした平地。中央に巨大な継ぎ目のない物見櫓が屹立し、要塞外部へ向けては各所に砲座が設けられている。

座席があるということはつまりそこには座る者がいる。

全身甲冑、いやさそれに似た意匠の人型。機械人形の兵士。

其奴らは要塞の衛兵でもあるらしい。一騎の侵入者を制圧せんと、甲板上にぞろぞろ群がって来る。

その時、物見櫓の根元が滑るように開いた。扉であった。

奥の暗闇から金属の足音を踏み鳴らしてさらなる機械人形が姿を見せる。

「豪勢なこった」

『ふ、ゴレム風情で愛馬と一体と成った俺を止められるものか』

「ほお、そいつあ意気軒昂。頼もしいねえ」

『ドヤア』

「つつうわけで、この場はひとつお馬さんに恃たのむとしよう」

『なぬ!?!』

馬の背から跳躍し、直近の絡繰兵士の頭を蹴り付け、さらに跳ぶ。

都合三回ほどそれを繰り返し、櫓の入り口に到達した。

扉から外へ出ようとする兵士を一体、出会い頭、袈裟懸けに斬り捨てる。崩れ落ちたその背後に続くもう一体を、同じ軌跡を逆様に斬り上げた。

「暫く暴れたら、適当なところでずらかりな」

『お、おい！ どうするつもりだ?』

「始末をつけるのよ」

さらに背を叩く声を置いて、扉の奥へ踏み入る。蜘蛛の軀の奥底へ。

真実、廊下の先には地下へ向けて坂が伸びていた。続々と湧いて出る兵士を行き掛けに斬り、あるいは打ち、蹴り退けて進む。

城砦の通念として、侵入者阻止の為に複雑な構造を成しているのはと危惧したが……存外に通路は拓けて見通しも良く、部屋の配置も素直だった。これを作った人間は、あるいは正規の軍属ではなかったのかもしれない。

勘働きでは、巨大な蜘蛛の腹のほぼ中央に差し掛かった頃。

その大扉に突き当たった。

「！」

扉に近付いた途端、握った柄から刃金の震えを感じ取る。そうして卑しいその「思念」をも。

曰く、この奥に好物がある、と。

取手や門の類は見当たらない。何かしらの操作を要するようだ。

カズマあたりならば要領よく開錠するのだろうか、生憎だ。

「シツ」

一息に三度、刃で扉に三角形を描く。三角形の破片と化した扉を蹴り、一人分の抜け穴を穿って中へ入る。

照明は点されていなかった。なのに、室内はひどく明るい。煌々と、目を焼くほどの暖光。赤と橙、それが極まって白を発し始めている。

巨大な円筒形の硝子瓶。その中ほどに。

砦である。人の頭ほどもある。それが赤熱し、燃え盛り、発光していた。

「こいつか」

素人目にも見てわかるほどの危険物。距離を隔てたここからさえ肌身を炙られるようだ。

途方もないまでの熱を生産している。

見れば硝子瓶には無数の器械が張り付き、そこから無数の管が伸び、部屋の床や壁や天井から外へ繋がっている。

間違いなく、これが動力。要塞の核にして、蜘蛛の心臓。

如何にしてこれを止める。如何にして。

手の中で刃金が震えた。寄越せ、と唸り声を上げていた。

「ま、これしかあるまいな」

しかして、応えるモノはあった。

掌の中で、ちから熱を、ちから魔力を喰らうモノ。暴食の限りを尽くして、狂喜に絶叫する兇器まがきものが。

光が消えていく。貪られていく。

紅蓮に染まる刀身。それはケタケタと妖しく笑った。

気付けば周囲が暗い。灯りを落としたように、昏い。いや、あるいは、俺の目玉が盲めしいただけか。

石塊から刃が抜ける。もはや用済みとばかり。

そのまま身体が後ろへ流れ、背中から床面に墜落した。

衝撃が骨を軋ませる。痛みは、なかった。尋常に感じられる痛みがなかった。

全身を覆うものが痛みなのかすら、もうわからなかった。

意識が遠ざかる——

「……………ぎ」

——戻り、途切れ、また戻る。

目を開こうとするのだが、右の瞼は上下に癒着して？がれない。

どうにか左目を開いて、昏い天井を認める。視覚が生きていることに驚いた。

そして己がまだ生きていることが、なよりの不可思議であった。

「ク、クク……………ぐ、がつ」

身体を起こす。左腕は辛うじて動く。五指も開閉だけは能う。

とりあえず、焼けて焦げ付き襪褌布と化した皮革のジャケットを破り捨てた。

刀を杖に立ち上がる。逆手に持ち替えたのは正解だった。炭化した右手と一体化した柄は、もはや握りを変えられない。

覚束ない足腰を叱咤し、扉の外へ出る。あれほど無際限に道々を賑わせていた機械人形達が、床の其処彼処に転がったまま動かず、静かになっている。

苦勞してそれらを踏み越えながら、進む。

目指すところは出口、ではなく。

「ん……………」

蜘蛛の心臓部からも程近い位置にその部屋はあった。

広間。最奥には玉座が据えられ、仕立ての良い白衣を纏った骸骨が腰掛けている。この要塞の主であろう。

厄介な代物を暴走させ、造物主は暢気にくだばっていた訳か。

くだらねえ。とんだ笑い話だ。この焼け爛れた喉では悪態の一つも吐けやしない。

石床に刃を突き立てる。

宣言通り、とつとと始末をつけるとしよう。

晴れて右手の延長に成り下がった刃金に念ずる。命ずる。

存分に喰らったのであろうが。ならば火の一吹き、どうということもあるまい。

そら、やれ。

「や、え……！」

濁った奇声に刃は応じた。

刀身が紅蓮となり、焦熱の地獄を顕現する。

熱と火焰が石床を侵食していく。床を伝い壁を蝕み、天井に滲む。

先の砦が発していた純粹な熱量とは遙か遠く異なるモノ。燃烧する

るのは悪意であり、殺意。炎の如き形をした異形の邪炎。

石が、鉄が、火に？み込まれていく。否、火に成り変わっていく。形を、存在を喰われている。

時を置かず、鋼の蜘蛛は灰となろう。あるいは灰すら残さず消え去るだろう。

残したところでこんなものは戦の火種にしかならぬ。燻らせて小火を出すくらいなら、燃やし尽くした方がいい。

俺は綺麗好きなのだ。

「ク……」

溶けた頬で笑み刻んで、玉座の間を後にする。

一步、一步、歪に歩みを踏んで、出口を目指す。

さらに一步踏み出した時、膝から力が抜けた。そのまま崩れ落ち、前のめりに床面にへばり付く。

立ち上がるのは、どうやら難しそうだ。

壁際に這い寄り、それを頼りにしてどうにかこうにか上体を引き起こす。

壁を背にして足を投げ出す。これで幾らか楽になった。

邪炎は淀みなく広間から浸蝕を拡大している。煙も上げず、ひたすらに物質を取り込み、解き、無きものとしていく。

いずれは、ここも崩れ去るだろう。

この身を喰らい、消し去るだろう。

まあ、それもよからう。

元よりこの身は異物。他の世界から呼ばれ、魔王なる存在に抗する為に新たな命を与えられ……といった方便とは関わりない。

それはあの、不可思議な部屋で女神と名乗る少女と顔を合わせた時から知れたこと。己が、招かれざる客であった事実。

『運命を変えた。歪めたと言ってもいい』

然り。まったく然り。正しい有様を歪曲させた。死すべからざる子を死なせた。

ひきかえどうだ。この身は随分長く、永く、生きて来たように思う。生き汚さは極まった。醜悪なまでに。もう十分だ。

思うに、己が居らずともこの機動要塞は葬られていた筈だ。カズマ、アクア、めぐみん、ダクネス、あの子らの活躍によって。己などよりも余程穩当に……いやそれだけはないか。

あの喧しい者共のこと。それはそれは大騒ぎを巻き起こしたに違いない。

一悶着、二悶着と湧いては弾け、そうして屹度、全ては終息される。少なくともこれよりは良い方へ。

最後には、子供らが笑える方へ。

悪くない。

この喧しく騒がしく、可笑しなふざけた世界も。なかなかどうして素晴らしいではないか。

良い子らに出会えた。

良い子らと、ほんの一時を過ごせた。

悪くない。

悪く、ない——

「ダメ。貴方は生きるんです。ジンクロウ」

「……ん」

「私が貴方を招いたのは、死なせる為じゃありません。この世界で……」

気付けば、銀髪の少女が傍らにあった。その細い肩を借りて、ゆつくりと坂を登っている。

エリス嬢。

「生きて欲しい。この世界で、貴方として生きて欲しかった。他の誰でもない、前世の因縁など関係ない、シノギ・ジンクロウとして。あの出会いが奇縁で、神すら知らぬ偶然であったとしても。それは間違いないく運命なんですから」

「……」

「とても、素敵な運命でした。私にとって……貴方にとっても、そうであってくださるなら、嬉しいです」

女神のように眩い微笑で女神は言った。随分と乱暴で稚気いたいけな論法だ。

これでは逝きたくとも逝き辛い。

手厳しいねえ、エリス嬢は。

「私はク・リ・ス。もお、いい加減ちゃんと呼んでよね」

「ク、ク……」

頭上に光を仰ぐ。茜光差す出口の向こうに、ふと、声を聞いた気がする。

——ジンクロウ！

喧しく、騒がしい声がある。かの悪賢い少年だろうか。それともあの元気な紅い少女だろうか。

それとも。

薄れゆく意識の闇の淵で、なにやらひどく、暖かな夢を見たような

気がした。

66話 子の心知らぬ愚か者

荒野を越えた先に果たして、その黒い城はあった。

赤い八つの目、頭胸部と腹部に分かれた魔術合金製の巨体。けれどその黒い蜘蛛には、それを支えていた八つの脚だけがない。それらは一本残らず半ばから切断されていた。

機動力の柱を奪われたデストロイヤーが力なく大地に伏せつていく。

その背中。船で言うところの甲板で、うごうごと大量に何かが轟めいている。板金鎧を装着した人型ゴーレムだ。

剣や槍を手にしたゴーレム達が大笑してその只中に立つものに襲い掛かる。大量のゴーレムが相手取っているのは僅かに三つ。

一つは黒い巨馬。髑髏の兜を被ったゾンビ馬のベルディア。向かってくるゴーレムを蹴り飛ばし、あるいは蹄で踏み潰し、全身を重装甲で固めたそれらを木の葉でも払うように片っ端から片付けていく。

一つは白い風。風か吹雪か、そんな目にも止まらぬ速度で甲板上を舞い踊る振り袖姿の冬将軍、もといフユノ。フィギュアスケート選手みたいな動きで、両手に握った小太刀を振るいに振るい、鎧を着込んだゴーレムを防護の薄い関節ごとに丁寧に次々と斬り断ってしまう。

そして最後の一つ、その一人。

『カーズド・クリスタル・プリズン』

詠唱は、まるで囁くように静かだった。

そうしてそれが詠われた瞬間、蜘蛛の背に氷原が広がった。冷気が白く吹き荒ぶ。一瞬にして一体残らず凍結されたゴーレムの氷像、その合間を凍て付いた風は吹き抜けていく。

静謐した空間に佇む黒い法衣。ウイズは裾にこびり付いた霜を無造作に払った。

乱戦ごと文字通り凝結した盤面にグリフォンで乗り付ける。

「ウイズ！ フユノ！」

「ジंकクロウは!? うわっと……!」

その場に跳び降りた俺やアクアに続いて、めぐみんがグリフオンの背から身を乗り出そうとする。魔力切れでまだ碌に足腰も立たない癖に。

それでも居ても立っても居られないといっためぐみんの様子を憐れんのか、ウイズが魔力を分けてくれた。ドレインタッチとかいうリッチー固有のスキルだそうだ。

五人と二頭、凍結した路面に気を払いながら入り口を目指す。

「ベルディアさん、ジंकクロウさんは？」

『あの男ならば勝手に一人で乗り込んでいった』

事も無げに言う馬に、しかし返す言葉はなかった。文句も浮かばないほど予想できたことだからだ。

あの男はやはり、この事態を一人で解決するつもりなのだ。

隣を歩くめぐみんの表情がまた固く翳る。

知らず知らず、自分の足は早まっていた。

開け放たれたままの扉が見える。おそらくジंकクロウはそこから内部へ侵入、いや殴り込んだのだろう。

すると、扉の奥からがしやがしやと足音が響いて来る。そして間もなく日の下に、人型ゴーレムの兵隊が数十機、整然と隊列を組んで現れた。

「増援!?!」

「ひいつ、ウイズ! ウィイズウウ! なんとかしなさいよ! うそごめんなんとかしてくださいお願いしますう!」

「ア、アクア様そんなに引つ張らないで! ちゃんとお守りしま……涙と鼻水を私の袖で拭かないで!? 痛っ! 痛たたたた! ひりひりします!?! 肘の辺り消えていますう!?!」

「お、おい! コントやつてる場合じゃないぞ!」

ウイズに縫り付こうとするアクアを引き剥がそうとする俺と薄くなっていくウイズの馬鹿騒ぎを、無視してゆらりとフユノが前に出る。

「ジंकクロウのところへ行く。邪魔立てする奴は全部殺す」

『怖いんですけどこの精霊』

「それで問題ありません。所詮魔術式と魔力供給で動くただの木偶人形です。皆殺しにして早くジंकロウのもとへ行きましょう」

『怖いんですけどこの少女』

紅い目を爛々と光らせ、めぐみんが冷たく呟いた。

一触即発、一步でも踏み込めばそれが開戦の合図だ。きりきりと限りを知らず張り詰めていく空気に固唾を飲んだ。その時——

地面が揺れた。正確には、現在足蹴にしている機動要塞そのものが激しく震動した。

「なんだ!？」

「ひいひいひいひい!? なに!? なんなの!？」

「これは……内部から?」

蜘蛛がその巨体を痙攣させる。まるで苦しみ藻掻くように。

震えは、ほんの数秒で止んだ。

それと同時に、整然と列を為していたゴーレム達が一斉に倒れていく。それこそ糸の切れた人形の様相で。

「! 魔力の供給が途絶えた……?」

屑鉄と化したゴーレムを見下ろしてウイズが独り言ちる。

どんな仕組みか知らないが、つまり遠隔送信されていたエネルギーラインを断たれたということらしい。その大元は当然、要塞内部にある筈だ。

「あいつがやったのか……」

「急ぎましょう!」

めぐみんが走り出す。俺達もそれに随したがった。

出入り口で山となって積み上がった邪魔なゴーレムを蹴散らしたり退かしたり。

やたらと重い粗大ゴミに大いに梃子摺って、地下へと降る坂道をようやく掘り起こせた頃、暗がりの向こうで足音が立った。

二人分の、やや歪な調子の足音だった。

ゆつくりとした足取りで坂を上ってくる。最初に、陽光を照り返すその銀の髪が見えた。

「やあ、早かったね」

「クリス!？」

ギルドで見掛けないと思つたら、こつちに先回りしていたのか。そして少女の肩を借りて歩くもう一人。もう一人は。

「ジン——」

呼び掛けて突如、喉が塞がった。声を、蹴り戻された。

最初に気付いたのは臭いだ。苦く焦げ付いた肉の臭い。

そしてその姿が露になる。白日の下に。

衣服は褐せて黒く変色し、そうして全身を赤く、赤黒く焼け爛れさせた男がいた。右半身は特に酷い。右腕など、肘から先が真っ黒で、それが腕なのかもよくわからない。

「ジ……ジンクロウ……?」

呆然とめぐみんが名を呼ぶ。呼び掛けたそれが、本当に自分達の探し求めた人物なのか、半信半疑で。

なんで、そんなズタボロなんだよ。

ひどく朦朧とした無表情。水膨れと火傷塗れの顔に、いつもの笑みはなかった。飄々と軽やかで、強かで、暖かな、大きな笑み。いつだって、どんなやばい状況だって、どうとでもしてやる、そんな風に俺達を安心させてくれたあの笑みは、どこにもない。どこにも。

よたよたと足取りを淀ませてクリスと男が甲板へ上がった。その途端、男はその場に崩れ落ちた。

「ジンクロウツ!!」

絶叫して、めぐみんが男に取り縋る。杖が床面を転がった。

「ジンクロウ！ ねえ、目を、目を開けてください!! ジンクロウ……ジンっ……ッ!」

「アクア、アクア！ 回復してくれ！ 早く!」

「はいはい！ まったくもー、なにしたらこんなひどいことになるのよ……んー、ヒールじゃ無理っばいわね」

狼狽しっぱなしのめぐみんや俺に比べて、アクアはいつも通りの暢気な調子だ。いや、落ち着いてると言ってもいい。女神だから、人の死生に慣れているから……そんな陰険な考えが一瞬過る。

違う。自分は今、頗る動転ずいぶんしているからだ。だからこんな風に思考が乱れる。

今のアクアはとても頼もしい。間違いなく、そう思う。

『リジエネレーション』

手を翳して詠唱。アクアの掌から光が迸った。それはジンクロウの全身を包み込み、そうして見る見るうちに火傷を、火傷によって爛れ裂けた体を再生していった。あれほどの重傷が、まるで初めからそんなものなかつたかのように。

魔法様様。女神様様ってやつだ。

安堵に息を吐く。

光が止み、すっかり元通りになった男の顔を見下ろす。暢気な寝顔しやがって、落書きでもしてやろうか。なんて。

男の右手が目に入る。

黒く黒く黒く、墨で塗り固めたように黒く染まった手。石膏人形のように滑らかな黒。

「アクア……これ、なんだ」

「な」

「な?」

「治らない」

「は?」

「な、治らないの。右手だけ。なんでかわかんないけど」

右手には逆手持ちにあの刀が握られていた。固く、まるで固着してしまったように。

その柄から、薄く、細く、そして紅い何かが。

「剣……その剣、早く外さないと……!」

刀にめぐみんが手を伸ばす。

伸ばそうとした手を、ウイズが掴んだ。

「いけない! それに触らないで!」

めぐみんを押し退けてウイズがジンクロウの傍に屈み込んだ。普段のウイズなら考えられない乱暴さだった。

驚いて踏鞴を踏むめぐみんを一瞬顧みて、ウイズは顔を歪めた。悲

痛、そんな表情をしていた。

「柄から茎^{タンゲ}が溶け出して……違う。刃金自体が成長してる……？　こんなこと……」

「ウイズ、ど、どうしたんだよ。まさかまたこの刀が」

「……融合しています。ジंकクロウさんの手と、刃が」

意味がわからなかった。

ウイズが何を言ってるのか、わからなかった。

さつと、白い手が伸びてくる。フユノだ。フユノがジंकクロウの右手に触れる。柄を引き剥がそうと、掌の間に無理矢理指をこじ入れて

――辺り一面に蒸気が舞った。

「!？」

「フユノさんダメー！」

フユノがその場に尻餅を突く。見れば振袖から覗く両腕、その手首から先が、なかった。火に晒した氷のように溶けていた。

氷雪が傷口を取り巻いたかと思うと、手首は一瞬で復元したが。

氷を昇華させるような高熱を発してるのか。いや、それが本当に熱なのかどうかすら怪しい。

なんだかよくわからない意味不明な力を垂れ流して、それは当の持ち主を脅かしている。

「ああああああ!! 妖刀ロールとかもういいんだよ！ 糞ツ！ 中

二かよ！ 馬鹿が！ 糞ツ!!」

「ど、どうなるんです……ジंकクロウは、どうなっちゃうんですか!？」

「今、刃金から血管状に「^{しよくし}蝕肢」が伸びてジंकクロウさんの右腕に根付いています。この蝕肢がもし心臓や頭にまで達してしまつたら……おそらく、肉体を乗っ取られる」

大真面目な顔でウイズは何を言ってるんだらう。

そうだ。そもそもがこの男だ。この男は、ジंकクロウはこんな危険物を振り回して、一体なにがしたかったんだ。わかってる。この機動要塞とかいう馬鹿げた代物を止めようとした。そうして現実に止めてしまった。

何の為に。

こんな、訳のわからない刀に体を蝕ませてまで。何故。
……………俺達を。

わかってる。

わかってるんだ。でも、納得なんてできるか。

そんな勝手、許せる訳がない。

「どうすればいいんですか」

決然と、めぐみんがウイズに問う。

涙を流す両目は、紅く強い決意を滲ませていた。もし方法があるなら、これを覆す術があるなら、何だつてやる。そういう覚悟の据わった目。

ウイズは言葉を濁らせた。ひどく言い辛そうに唇を震わせる。

「……………生き血が必要です。生きた人間の血が」

「わかりました。カズマ、ナイフを貸してください」

あっさり、めぐみんは言った。

「おい」

こちらを振り仰いだ少女の顔に迷いはない。というか、止めたところで聞く耳を持ちそうもない。

そして多分、それは自分も同じらしい。

「……………しようがねえなあ」

懐から折り畳みナイフを出し、めぐみんに手渡す。

そしてもう一振り、後ろ腰に提げた小刀を抜いた。

「カズマ……………」

「二人分なら切るのもちよつとで済むだろ。あーやだやだ！ 悪魔の召喚儀式かつての。アクア、終わったら即行ヒールよろしく」

「ウソ、え？ ほ、ホントにやるの？ めぐみんまで？」

その場に膝をついて、男の寝顔を見下ろした。目を覚ましたら恨み言を百個くらい浴びせ掛けてやる。それから酒をたかつて、飯をたかつて、そうだサキユバス店も暫くはこいつの奢りで通い詰めよう。だから。

「死なせませんよ。絶対死なせませんから。責任、取ってくれるんでしよう……………」 ジンククロウ

少女がナイフで掌を撫でる。白い肌に赤く、一筋の線が走る。なんかやけに重たいこと言ってるめぐみんに苦笑しながら、俺も小刀を握り込んで引き抜いた。めっちゃ痛い。あー痛い。痛いっつうマジで。

傍らでウイズが両手に魔法陣を展開する。

めぐみんと二人、頷き合って、その悍ましい刃おそに血を垂らす。

なにはともあれ。

———うちの爺からとつとと離れろ、ボケ刀

67話 戦を終えて、それが蠢動する

夢現に垣間見ゆるその顔は、いつ何時も涙に濡れていた。

幼子の、泣く声とする。どうしたどうした。悲しいのか怖いのか、それともどこか痛いのか。どうすればいい？ どうしてやれる？

我ながら情けなし。強かに周章狼狽して、そつと頭を撫でて指で柔く髪を梳かす。それ以外に遣り様を知らなかった。それ以外に伝え方がわからなかった。

お前が愛しいのだと、子に表してやることが。

俺という男にはひどく難しい。

だから、そう笑わんでくれ。『お前さん』ほどに巧くはあやせぬ。不器用で、とても及ばぬ男なのだ。

刃金を振り回す以外に何の取り柄もない男なのだ。

価値のない男だ。お前達以外には、何の価値も。

これは、いつの記憶だ。

俺とは誰だ。

子。子供。愛しい我が子。我が子を抱くその女。愛した女。あれは。

お前達は、俺の――

一欠片、鼻から息を吞んで目覚め。

白い天井を仰ぐ。六畳間ほどの小部屋だ。その窓辺の寝台に寝かされている。窓の外には白んだ薄明かりに煙る街並。肌を冷涼な空気が撫でた。夜明けの頃と時刻に当たりを付ける。

粗い複合石材コンクリートの壁面を左目でなぞり、最後に寢床の傍らで眠るその娘を見付けた。

「……………」

黒栗毛の髪、華奢な身体に紅い衣装、肩に掛け布代わりの外套を羽織っている。紅い娘子、めぐみんは椅子に座ったまま己の腹の上に

突つ伏していた。

ふと、左腕が動かぬことを認める。触覚を失った左手は、娘子の小さな手にひしと握られていた。

その左腕を無意識に動かした所為だろう。眠れる少女の瞼が震えた。

そうして静かに、紅い瞳が覗かれる。暫し、霞がかつた目を瞬しばたいて、漸ようようと娘が己を捉えた。

目に映る者を、その男が自身を見下ろしていることを。

僅かに目を見張り、息遣いと共に唇が開きまた閉じる。言葉を探しあぐねて、あるいは文句の一つや二つや三つや四つ。一息に吐き切るには難しかろう。

「そんなところで寝ちまうと風邪を引くぞ、めぐ坊」

「……」

「なんだか不思議な心持ちだ。いや、お前さんの顔を見るのが随分久方振りのことのようなあ。カカツ、おかしなもんだ」

「っ……っ……い！」

お惚ける己の様に、途端娘は怒気を発した。しかし、それは結局燃え上がることはなく。

娘は泣いた。ぽろぽろと止め処なく雨粒のような涙を流した。

「く、う、っつ……い！」

首に取り縋り、胸板に顔を埋めた娘子がぐぐもった嗚咽を落とす。

それは熱く皮膚に溶け、熱く胸骨に響き、深く心の臓を打った。

「どうして……い！」

「……」

「どうして、一人で行ったんですか！　こんな、大怪我してまで、ひとりで……私達が、アクアがいなかったら怪我じゃ済まなかったんですよ!?!　あのまま、死んで……死んでたかも、しれないんですよっ!?!」

「……そうだな」

首に絡む腕にまた一層力が籠った。無責任に肯く男に対する、それは正当な憤怒であった。

歯を食い縛るほどに娘の泣きじやくる声は濁っていく。嗚咽は

しやくるように全身を震わせた。

「イヤ、です……もう……もうっ！ つ、ふ、ぐう……カズマ、カズマ
だって一回、死んじやって……死んじやった。死ん、じやった……血
が、あんなに赤くて、たくさん、たくさん流れて……もうイヤ。あ
んなのは。仲間が死ぬのは、イヤ！ イヤです!! 死なないでっ……死
なないで、ください！ お願いだからっ、死んじやダメです……死
んじや、イヤです……ジン、クロウ……ジングロ、ヴ……！」
「ああ……すまなかった。すまなんだなあ。随分、心配かけた。怖
かったんだな……辛かったんだな」

「……ジンクロウ……」

「己が悪かった。お前さんが優しい子だと知っておったのにな。そし
て優しい子らのお蔭でこうして生き永らえたのだ。だからまた……
こうして、お前さんの顔を見られたんだ」

「……………」

「ありがとうよ」

「っ！」

そつと左手で、娘の後ろ髪を梳いてやる。

娘は遂に声を上げて泣き始めた。涙やら鼻水やら流せるもの全部
を滂沱させて。

耳孔に泣き声が響く。それは今と、彼方に霞む過去へ。

頭蓋の内へ、脳髓の深奥へ。あるいはもつと深く、遠い底へ。

痛むほどに響き、沁みる。

こりやあ、なかなか堪えるな。

「すんっ……はふう……」

白んだ朝焼けが閃き、伸び上がり、街並を照らし出す頃に娘は泣き
止んだ。泣き疲れたと言った方が正しかろう。

目を赤く腫らし、鼻水を啜って、しゃがれてしまった声で娘が呻
く。

「すみません、包帯……酷いことになってます」

「ん？ カカツ、こんなもんはどうせ取り換えるんだ。気にすること
ちやねえよ」

「はい……」

陽が昇り出したとはいえ明け方近く。季節柄まだまだ冷え込みは
厳しい。

娘子は椅子の上で肩身を縮め、羽織った外套の前を引き寄せた。
掛け布団を払って、床の上を叩く。

「まだ眠かろう。ほれ、入りな」

「へっ？ えっと、えっと……お邪魔します」

娘は靴を脱いでから、おずおずと床の中に身を滑り込ませた。

布団に半分顔を隠して、気恥ずかしいのか紅目が右往左往する。

「寒くねえか」

「……あつたかいです」

「そうかい」

「あ……すぐ教会の人を呼んだ方がよかったですでしょうか」

「教会？ ここがか」

「はい、エリス教会の治療院ですよ」

「ほお、そいつあ奇遇だ。思わぬ形で約定を果たせた」

「約定？」

「まあまあ、一眠りした後でよかろうさ。お前さんも疲れだろう」

「……そうですね」

「苦労かけたな」

「ホントです。この礼は高く付きますからね」

「おお怖え怖え。どうかお手柔らかに頼みますさあ」

「ふふん、それはジंकクロウの態度次第です」

「ならご機嫌窺いからだなあ。そうさな手始めに、皆で何か食いに行
くとするか。何が食いたい？」

「えへへっ、そうですねー。前に市場の近くで食べたパスタ。それか
らー、ケバブもいいですね……突撃牛のステーキに……春キャベツと
カエルの炒め物。鍋もいいですね……それから、デザートも。ワツフ

ル、パンケーキ、チョコブラウニー、フルーツタルト、アイス……それから……それから……」

指折り数える内に、いつしか娘は静かな寝息を立て始め。

「みんな……いっしょに……」

そう囁いて子は眠りについた。

先刻見下ろしたものより幾分か、安寧な寝顔がそこにある。

それに卑しく安堵を噛んでいる。己が身命を手遊びの賽子の如くに軽んじる男が、血と臓物に塗れたこんな男が。

「……」

娘が寝返りを打ってこちらを向く。ずれた布団を掛け直そうと右手を上げ、その「黒」を見止めた。

厚く巻かれた包帯の合間から覗く指、掌、皮膚という皮膚尽く黒く墨を入れたように染まった手掌。石膏のように滑らかな漆黒色の手首。

いつそ炭化して崩れ落ちてしまえばよかったのだ。そうすればもはや剣など握れまい。そうすればもう、子らを泣かせずに済む。

単一能がようやくただの役立たずになる。そうならばいい。そうならば。

幼子の寝顔を見ながら、無責任に、無恥蒙昧に、俺はそんな夢想を抱いた。

もそもぞと右腕で何かが蠢いている。次なる目覚めは、そんな感触から始まった。

めぐみんは相変わらず己の左隣で穏やかな寝息を立てている。

では、これは如何なる事態か。

「……」

右隣、布団の中に何かがある。何か、何者か。

まずその白銀系の髪が、布団の隙間から覗いていた。

「なにをしとる、フユノ」

「んっ」

すぽんと頭を出したのは、白い細面。赤い瞳の雪女。美しい女生に化けし冬將軍その御霊であった。

「おはよう」

「ああ、おはよう。それで」

「めぐみん、ジंकクロウと一緒に寝てた。ずるい」

ぐぐぐと、右腕が総身に抱き寄せられる。

上目遣いに己を見て、フユノは頬を膨らませた。

日に日に人がましくなっているとは思っていたが、こんな甘え方まで覚えたか。末恐ろしいというか、勉強熱心だと感心してやろうか。

「添い寝くれえいつでも構わねえよ」

「……やたっ」

「だがな」

無邪気に顔を綻ばせ、仔猫のように額を擦り付けてくる。実に健気で愛らしい、そう素直に感じ入る仕草だった。

しかし。

「お前さん、なにゆえ裸なんだ」

「？」

娘は心底不可思議そうな面で首を傾げる。

心底不可思議なのは当方であるのだが。

右腕を両の乳房と股座に挟み込んで、娘はさらに擦り付いて来る。きめ細かで滑らかな柔肌の触り心地は間違いなく極上のそれであるが、時刻と場所がそぐわねばただ毒になるばかりだ。

「火傷は冷やした方がいい……オレの体は冷たいから、少しでもジंकクロウが楽になるなら、って……」

「そうか……そいつあ」

「あと、こうすれば男はみんな喜ぶからってウイズが」

「……」

拙宅にあの未通娘おぼこの出入りを許したことは早計であったやもしれぬ。

子の教育的に悪影響ならば蹴り出すことも考慮の内か……一人、密

やかにそう念頭に置いた。

溜息交じりに起き上がる。同じくフユノも起き上がる。しかし頑として娘は腕から離れたがらない。

「ともあれ、きつさと服を着な」

「ジंकロウは、オレがこうするの、嫌か……？」

「嫌か好いかと訊かれりや極楽と白状するつきやねえんだがな」

「じゃあシよう、ジंकロウ」

「ナニをとほ訊かんど。子供の前だ。それに、いつカズメ等が訪ねてくるとも限らん……」

扉が叩かれた。

樽をすればなんとやら。謂われ有りしは故事成語なれど、諧謔と洒落が利き過ぎている。

誰何もそこそこに扉が開かれ、カズマが、アクアが、ダクネスが、リーンにダスト、ゆんゆん、クリス、最後にウイズが。

六畳間にぞろぞろとよくもまあ集まったもの。

「ジंकロウ！ もう起きてたん、ぶふおっ」

「あららく、ジंकロウったらいろんな意味で元気そうねくでゆふふ」
「ななななな、なんと不埒な!? ふ、不潔な!? 一同集った病室で、こんな……なんと直球の羞恥プレイ!?!」

「――」

「無言で杖振り被るんじゃねえよリーン!?!」

「わっ、わっ、わっ、私、おみ、お見舞いについて思って、あの、し、しし失礼しましたー!?!」

「キミねえ……教会に遊びにおいでとは言ったよ？ でもね……教会で遊べとは一言も言っていないよー!」

「ふ、フユノさん!? ほ、ホントに実行しちやったんですか!?!」

騒々しいことこの上ない者共の驚きやら囃し立てやら憤怒やらを浴びる。なんとも賑々しい。ほとほと、病み上がりには喰いでが有り過ぎる。

「んっ、んく……なんですかもー、病室では静かにしないとダメなんです……よ」

そうして、俄かに喧しさを極めた病室の寝台で、ようやくお目覚めの娘子は目を擦りながら己を見、己に抱き着く裸身の女を見。

瞳と顔を紅く発火させて、叫んだ。

「なにを、ナニをしてるんですかジンクローラー!!!?」

遠く、朝の空に小鳥が鳴いた。

斯くも平穏な日常が騒々しくも始まった。

朝日を背に、王国検察官セナは黙してその書面に目を通す。内容を読み取る内に、縁なしの眼鏡の奥で眼差しは刻一刻険しさを増していった。

机上に置かれた封蝋には、確と印璽による焼き付けが施されている。正当な血統の証拠、貴族の紋章が。

——魔王軍の尖兵、シノギ・ジンクローウを処断せよ

正真正銘、それは現領主からの下命であった。